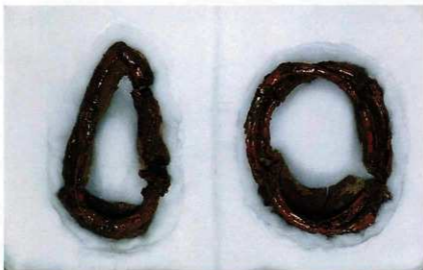


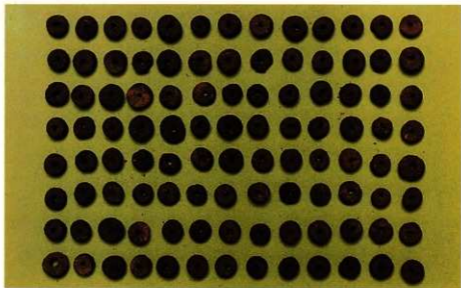


GP-421

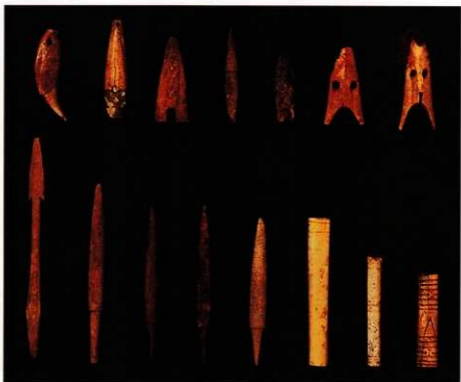


GP-460

写真1 GP-421出土の耳栓(上)とGP-460出土の腕輪(下)



GP-102



遺構外出土の骨角器

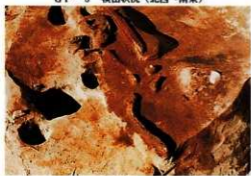
写真2 GP-102出土の土製玉(上)と遺構外出土の骨角器(下)



GP-3 検出状況(北西→南東)



GP-3 検出状況(北東→南西)



GP-9 検出状況(南東→北西)



GP-20 検出状況(北西→南東)



GP-22 検出状況(北東→南西)



GP-22 遺物出土状況(南→北)



GP-29 検出状況(南東→北西)



GP-29 遺物出土状況(北→南)

写真3 墓塚検出状況(GP-3・9・20・22・29)



G P - 32 検出状況 (北東→南西)



G P - 37 遺物出土状況 (北東→南西)



G P - 34 検出状況 (北西→南東)



G P - 34 遺物出土状況 (西→東)



G P - 42 遺物出土状況 (確認面, 南東→北西)



G P - 42 検出状況 (北西→南東)



G P - 46 検出状況 (北西→南東)



G P - 46 遺物出土状況 (北→南)

写真 4 墓塚検出状況 (G P - 32・34・37・42・46)



GP-62 検出状況(南西→北東)



GP-62 検出状況(南→北)



GP-78 遺物出土状況(南西→北東)



GP-78 遺物出土状況(南西→北東)



GP-79 検出状況(北西→南東)



GP-87 検出状況(北西→南東)



GP-89 検出状況(北東→南西)



GP-89 遺物出土状況(南西→北東)

写真5 墓域検出状況(GP-62・78・79・87・89)



GP-91 検出状況(北東→南西)



GP-91 遺物出土状況(東→西)



GP-92 検出状況(南東→北西)



GP-102 検出状況(左はGP-101, 南→北)



GP-105 検出状況(北西→南東)



GP-108 検出状況(西→東)



GP-114 検出状況(北西→南東)



GP-114 遺物出土状況(骨角製針人丸, 北西→南東)

写真6 墓塚検出状況(GP-91・92・102・105・108・114)



GP-117 検出状況（北東→南西）



GP-126 検出状況（西→東）



GP-118 遺物出土状況（確認面、西→東）



GP-118 検出状況（西→東）



GP-118 遺物出土状況（南→北）



GP-118 遺物出土状況（西→東）



GP-129 検出状況（西→東）



GP-129 遺物出土状況（北→南）

写真7 墓塚検出状況（GP-117・118・126・129）



GP-131 検出状況(東→西)



GP-131 遺物出土状況(西→東)



GP-133 検出状況(南→北)



GP-133 遺物出土状況(北西→南東)



GP-208 検出状況(南→北)



GP-208 遺物出土状況(南東→北西)



GP-348A 遺物出土状況(西→東)



GP-352 検出状況(南東→北西)

写真 8 墓城検出状況 (GP-131・133・208・348A・352)



GP-363 検出状況(北→南)



GP-363 遺物出土状況(南→北)



GP-399 検出状況(南西→北東)



GP-399 遺体検出状況(南西→北東)



GP-372 遺物出土状況(南西→北東)



GP-421 検出状況(南西→北東)



GP-421 遺物出土状況(南西→北東)



GP-421 遺物出土状況(東→西)

写真9 墓塚検出状況(GP-363・372・399・421)



GP-430 検出状況(北西→南東)



GP-430 遺物出土状況(北東→南西)



GP-432 検出状況(北東→南西)



GP-432 遺物出土状況(北西→南東)



GP-445 検出状況(確認面, 北→南)



GP-445 遺物出土状況(北東→南西)



GP-445 検出状況(南西→北東)



GP-445 遺体検出状況(南東→北西)

写真10 墓域検出状況 (GP-430・432・445)



GP-448 遺物出土状況(南東→北西)



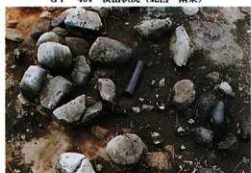
GP-449 検出状況(南西→北東)



GP-454 検出状況(北西→南東)



GP-505 検出状況(南東→北西)



GP-460 遺物出土状況(確認面, 北→南)



GP-460 検出状況(北東→南西)



GP-593 検出状況(北西→南東)



GP-593 遺物出土状況(西→東)

写真11 墓坑検出状況(GP-448・449・454・460・505・593)



MO-10セクション観察状況 (g-h, 北東→南西)



MO-10セクション観察状況 (k-l, 北東→南西)



MO-10セクション観察状況 (m-n, 北東→南西)



MO-10セクション観察状況 (q-r, 北東→南西)



MO-10セクション観察状況 (s-t, 北東→南西)



MO-10セクション観察状況 (u-v, 南西→北東)



MO-10瓦屑検出状況 (覆土, M46グリッド, 北西→南東)



MO-10人骨検出状況 (覆土貝類, N46グリッド, 南→北)

写真12 塚状遺構検出状況 (MO-10)



MO-1・2 検出状況 (左MO-1・右MO-2, 北西→南東)



MO-1・2 検出状況 (手前MO-1・奥MO-2, 北東→南西)



MO-1 セクション観察状況 (a-b, 南→北)



MO-3 検出状況 (北東→南西)



MO-3 検出状況 (南東→北西)



MO-3 遺物出土状況 (覆土, 魚形石器)



MO-4 検出状況 (北東→南西)



MO-4 セクション観察状況 (a-b, 北東→南西)

写真13 壕状遺構検出状況 (MO-1・2・3・4)



MO-6 検出状況 (北西→南東)



MO-6 検出状況 (南東→北西)



MO-10 検出状況 (1991年度調査分, 南西→北東)



MO-10 検出状況 (1991年度調査分, 北東→南西)



MO-10 検出状況 (1991年度調査分, 南西→北東)



MO-10 検出状況 (1992年度調査分, 南西→北東)



MO-10 検出状況 (1994年度調査分, 北東→南西)

写真14 壕状遺構検出状況 (MO-6・10)



MO-10 遺物出土状況(覆土貝層下, Q41グリッド, 北→南)



MO-10 遺物出土状況(覆土貝層, Q41グリッド, 西→東)



MO-11 検出状況(北西→南東)



MO-11 検出状況(北西→南東)



MO-11 検出状況(南東→北西)



MO-11 セクション観察状況(c-d, 北西→南東)

写真15 塚状遺構検出状況(MO-10・11)



MO-13 検出状況 (南東→北西)



MO-13 検出状況 (南→北)



MO-14 検出状況 (南東→北西)



MO-14 セクション観察状況 (南東→北西)



MO-14 遺物出土状況 (覆土、ブタ)



MO-15 セクション観察状況 (c-d, 北東→南西)

写真16 塚状遺構検出状況 (MO-13・14・15)



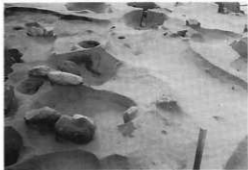
SX-1 検出状況 (1992年度調査分, 手前はMO-10, 北→南)



SX-1 検出状況 (1992年度調査分, 左はMO-10, 北東→南西)



SX-1 検出状況 (1992年度調査分, 中央はMO-10・SH-24, 西→東)



SX-2 検出状況 (北東→南西)



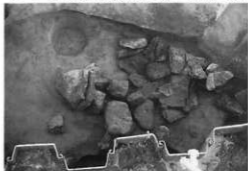
SX-2 検出状況 (北→南)



SY-1 検出状況 (1993年度調査分, 左はSH-50, 南東→北西)

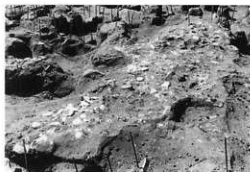


SY-1 曝出土状況 (1993年度調査分, 北東→南西)



SY-1 曝出土状況 (1994年度調査分, 南→北)

写真17 区画墓?検出状況 (SX-1・2, SY-1)



SM-2 検出状況 (R20グリッド, 南西→北東)



SM-2 検出状況 (北東→南西)



SM-2 検出状況 (東→西)



SM-3 検出状況 (南東→北西)



SM-3 検出状況 (西→東)



SM-3 獣骨出土状況 (西→東)



SM-3 遺物出土状況 (北→南)



SM-4 検出状況 (北→南)

写真18 貝塚検出状況 (SM-2・3・4)



SM-10 検出状況(西→東)



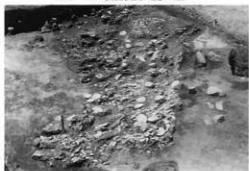
SM-10 遺物出土状況(北東→南西)



SM-11 検出状況(南→北)



SM-11 検出状況(東→西)



SM-17 検出状況(北東→南西)



SM-17 遺物出土状況(北東→南西)



SM-17 検出状況(東→西)



SM-17 獣骨出土状況(南東→北西)

写真19 貝塚検出状況(SM-10・11・17)



礎石群1 検出状況(右12・13号石組炉, 南東→北西)



礎石群1 検出状況(南東→北西)



礎石群2 検出状況(東→西)



礎石群2 検出状況(西→東)



礎石群3 検出状況(東→西)



礎石群3 検出状況(南東→北西)



礎石群3 検出状況(西→東)



礎石群3 検出状況(北→南)

写真20 礎石群検出状況(礎石群1・2・3)



礎石群4 検出状況（北東→南西）



礎石群4 検出状況（北東→南西）



礎石群4 検出状況（南西→北東）



礎石群4 検出状況（南西→北東）



礎石群4 検出状況（北東→南西）



礎石群5 検出状況（南東→北西）



礎石群6 検出状況（南東→北西）



礎石群6 検出状況（北東→南西）

写真21 礎石群検出状況（礎石群4・5・6）



矢来1 検出状況(東→西)



矢来4 検出状況(南→北)



矢来4 検出状況(北→南)



矢来5 検出状況(N28グリッド、西→東)



矢来3 検出状況(南西→北東)



矢来5 検出状況(南西→北東)



矢来5 検出状況(N28グリッド、北西→南東)

写真22 矢来検出状況(矢来1・3・4・5)



矢来6 検出状況（北東→南西）



矢来6 検出状況（北東→南西）



矢来6 検出状況（中央部，北東→南西）



矢来6 検出状況（中央部，南西→北東）



矢来7 検出状況（南東部分とMO-10，南東→北西）



矢来7 検出状況（北→南）



矢来7 検出状況（北西部分，南西→北東）

写真23 矢来検出状況（矢来6・7）



2号石粗炉 検出状況(北東→南西)



3号石粗炉 検出状況(西→東)



4号石粗炉 検出状況(南→北)



3号(左奥)・5号(右奥)・6号(右)・7号(左)石粗炉 検出状況(北西→南東)



8号石粗炉 検出状況(南西→北東)



9号(奥)・10号(手前)石粗炉 検出状況(北東→南西)



11号石粗炉 検出状況(西→東)



12号(手前)・13号(奥)石粗炉 検出状況(南東→北西)

写真24 石粗炉検出状況(2~13号石粗炉)



14号(手前)・15号(奥)石組炉 検出状況(南→北)



16号(手前)・17号(奥)石組炉 検出状況(北東→南西)



18号(左)・19号(右)石組炉 検出状況(南東→北西)



20号石組炉 検出状況(東→西)



21号石組炉 検出状況(北東→南西)



21号石組炉 検出状況(北→南)



22~27号石組炉 検出状況(手前22・23号, 北→南)



22~27号石組炉 検出状況(手前26・27号, 南→北)

写真25 石組炉検出状況(14~27号石組炉)



28~35号石组炉 检出状况(手前35号, 北東→南西)



28号(奥)・32号(手前)石组炉 检出状况(北東→南西)



30号(手前)・31号(奥)石组炉检出状况(北東→南西)



34号石组炉 检出状况(南西→北東)



35号(右)・36号(左)石组炉检出状况(南→北)



43号石组炉 检出状况(南西→北東)



45号石组炉检出状况(東→西)



49号(奥)・50号(手前)石组炉检出状况(北東→南西)

写真26 石组炉检出状况(28・30~32・34~36・43・45・49・50号石组炉)



写真27 SX-1(上5点)・SX-2(下1点)出土の土器



写真28 SY-1出土の土器

序

本報告書は平成元年から平成6年度に余市川改修事業に伴って発掘調査が行われた大川遺跡に関するものです

今回刊行する『大川遺跡における考古学的調査』Ⅳは本遺跡全体の総括篇で、理化学的分析も併せて掲載しております。

ここに漸く完結したわけですが、発掘調査では予期しなかった多くの住居址や墓塚群、また縄文時代から近世・近代に至る多量の遺物の出土によって、報告書の刊行までは多くの時間が費やされた次第です。

大川遺跡の主体となる遺構は縄文から続縄文時代にかけての墓塚群であり、現在発掘調査しているものも含めると1000基におよび、北海道内でも数少ない墓塚の密集した遺跡と言えます。

中世においても多くの遺物が出土していることから、文献資料との対比とともに、余市に和人がいつ頃から居住していたのか今後様々な視点から議論されることと思われまます。

近世では多量の肥前陶磁器が使用されていたことが判明し、当時の交易や食生活の様子的一端を知る上で重要と言えるでしょう。

これらの発掘成果が多くの方々に活用され、北海道史の解明や文化財活動の一助となれば幸いと存じます。

最後に報告書の刊行にあたりまして、北海道教育委員会をはじめ関係各位から寄せられましたご協力、ご支援に対し深く感謝申し上げます。

平成13年3月

余市町教育委員会
教育長 利 輝 夫

例 言

1. 本書は、1989～1994年度に実施された北海道小樽土木現業所による余市川改修事業に伴う記録保存を目的とした大川遺跡の発掘調査報告書である。なお、この報告書は、すでに刊行の『大川遺跡における考古学的調査』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの続編第4分冊であり、主要な遺構と遺物の報告に分析を加えた総括編である。
2. 本書は主に乾 芳宏が執筆、編集をし、Ⅰ-1.(4)～(7)は岡崎次郎が執筆を担当した。また、遺構についての執筆にあたり、熊崎農夫博（厚岸町教育委員会勤務）と青木 誠（小樽市教育委員会勤務）の協力を得て作成したものである。付編の分析・考察については、1～10は『大川遺跡発掘調査概報』（1989～1994）の再録、13～15は概報を骨子として補足・加筆をして頂き、11・12・16は新たに寄稿して頂いたものである。
3. 整理体制（平成12年度）

- ・整理体制 教 育 長 利 輝夫
教 育 次 長 江戸 栄男
兼文化財課長
文化財課業務係長 盛 昭史
博 物 館 学 芸 員 浅野 敏昭
- ・整理担当者 文化財課文化財係長 乾 芳宏
調 査 補 助 員 小川康和、岡崎次郎
- ・整理作業 遺物の実測
齊藤麻紀、前田貞子、榎引葉子、扇谷陽子、横山由紀子、米谷登志子、
中野 秋、内田豊子
遺物の拓本
米谷登志子、水田るり子
遺構・遺物のトレース
齊藤麻紀、中野 秋、小川康和
遺構図面の作成（第2原図）
小川康和、岡崎次郎、中野 秋
図版の作成
小川康和、岡崎次郎、中野 秋、内田豊子、水田るり子
遺物の撮影
市川写真館、今 和明、渡部昭哉（撮影補助）

4. 遺物の保管

発掘調査によって出土した遺物は余市町教育委員会が保管管理する。

5. 発掘調査および整理作業には次の方々の指導、助言、協力を得た。

文化庁 岡村道雄、北海道教育委員会 畑 宏明・大沼忠春・田才雅彦、北海道埋蔵文化財センター 木村尚俊・植市幸生・佐藤 剛・田口 尚、札幌市教育委員会 加藤邦雄、石狩市教育委員会 石橋孝夫、小樽市教育委員会 石川直章・青木 誠、仁木町教育委員会 嶋井康夫、伊達市教育委員会 大島直行・青野友哉、函館市教育委員会 佐藤智雄、常呂町教育委員会 武田 修、黒松内町教育委員会 高橋興世、瀬戸市埋蔵文化財センター 藤澤良祐、国立歴史民俗博物館 西本豊弘・阿部義平、東京大学 丑野 毅、名古屋大学 新美倫子、青森県埋蔵文化財センター 福田友之、田部 淳、小柳太一、小柳リラコ、近藤芳二、青木延広、佐藤利雄、仲鉢 浩 (敬称略)

凡 例

1. 遺構の平面図及び本文中で使用した略称は下記のとおりである。

縄文時代の竪穴状建物跡	JH (Jomon House)
弥生時代の竪穴状建物跡	SH (Satumon House)
後出の竪穴状建物跡	HP (House Pit)
墓 塚	GP (Grave Pit)
壕状遺構	MO (Moat)
貝 塚	SM (Shell Mound)
焼 土	FP (Fire Place)
区画墓?	SX・SY

2. 挿図の縮尺については基本的に下記のとおりであるが、場合によってはスケールで示した。

詳細な計測は遺物一覧で確認して頂きたい。

墓塚平面図	1/20
壕状遺構断面図	1/40
遺物 土器	1/3
石器	1/2
金属製品・骨角器・玉	1/2
陶磁器・鉄鍋	1/3

3. 写真図版の縮尺は任意である。

本文目次

例言

I	遺構と遺物	2
II	遺構外出土の遺物	197
III	総括	291
IV	付録	
1	大川遺跡周辺地域の地質(松田義章)	300
2	大川遺跡における縄文晩期火葬墓の覆土について (松田義章)	304
3	縄文晩期墓墳伴出の糸の鑑別結果報告 (菊地美知子・小原奈津子)	309
4	恵山式期墓墳からの糸状出土物の鑑別結果報告 (菊地美知子・小原奈津子)	311
5	大川遺跡における発掘物糸の鑑別結果報告 (小原奈津子・菊地美知子)	314
6	大川遺跡出土土器の蛍光X線分析(三辻利一)	321
7	大川遺跡出土の首飾り(Okawa1990, GP-102)の材質について (小笠原正明)	327
8	大川遺跡第50号墓墳出土の青銅製鈴の分析について (小笠原正明)	330
9	大川遺跡出土の硬玉製勾玉の産地分析 (藤科哲男・東村武信)	332
10	大川遺跡出土の管玉の産地分析(藤科哲男・東村武信)	342
11	大川遺跡の炭化米粒特性と稲作起原 (和佐野喜久生・大塚豊揚)	354
12	大川遺跡出土土師器の胎土分析(松本建速)	367
13	黒色土器の再検討(小嶋芳孝)	377
14	文房・刃物・飲食の石製品(垣内光次郎)	392
15	北方中世史と大川遺跡(吉岡康輔)	401
16	大川遺跡出土漆器資料の材質と製作技法(北野信彦)	449

目 次

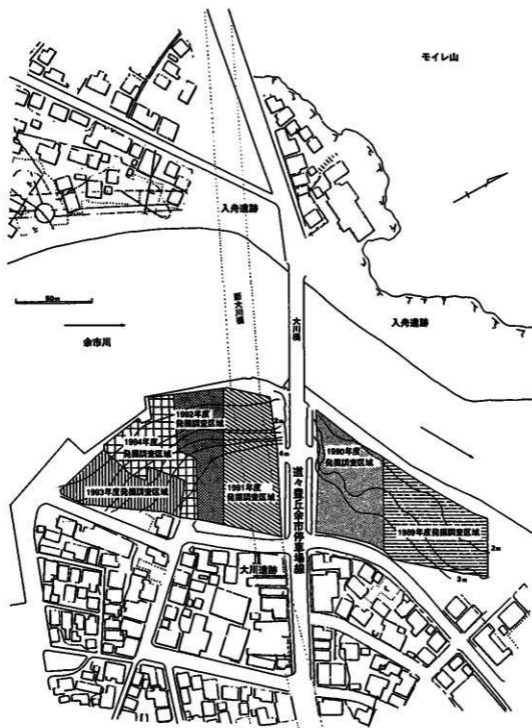
第1図	大川遺跡(1989~1994年度)の発掘調査区域	1	第67図	G P-348 B 平面図と出土遺物	86
第2図	遺構分布図(1989~1990年度)	5	第68図	G P-352平面図と出土遺物	87
第3図	遺構分布図(1991~1992年度)	6	第69図	G P-363平面図と出土遺物	88
第4図	遺構分布図(1991~1992年度)	7	第70図	G P-363出土遺物	89
第5図	遺構分布図(1991~1992年度)	8	第71図	G P-363出土遺物	90
第6図	遺構分布図(1991~1992年度)	9	第72図	G P-372平面図と出土遺物	91
第7図	遺構分布図(1991~1992年度)	10	第73図	G P-372出土遺物	92
第8図	遺構分布図(1993年度)	11	第74図	G P-372出土遺物	93
第9図	遺構分布図(1993年度)	12	第75図	G P-399平面図	94
第10図	遺構分布図(1994年度)	13	第76図	G P-399断面図と出土遺物	95
第11図	遺構分布図(1994年度)	14	第77図	G P-399出土遺物	96
第12図	縄文時代晩期の墓塚分布図(1989~1994年度)	15	第78図	G P-421平面図	97
第13図	縄文時代の墓塚分布図(1989~1994年度)	17	第79図	G P-421出土遺物	98
第14図	中世(G P-400)~近世の墓塚分布図(1989~1994年度)	19	第80図	G P-421出土遺物	99
第15図	竊穴遺構・竊穴遺構分布図	21	第81図	G P-430平面図と出土遺物	100
第16図	近世・近代の遺構分布図	23	第82図	G P-430出土遺物	101
第17図	G P-3 平面図と出土遺物	36	第83図	G P-430出土遺物	102
第18図	G P-9 平面図と出土遺物	37	第84図	G P-430出土遺物	103
第19図	G P-20 平面図と出土遺物	38	第85図	G P-432平面図と出土遺物	104
第20図	G P-20 出土遺物	39	第86図	G P-445平面図	105
第21図	G P-22 平面図と出土遺物	40	第87図	G P-445断面図と出土遺物	106
第22図	G P-22 出土遺物	41	第88図	G P-445出土遺物	107
第23図	G P-29 平面図と出土遺物	42	第89図	G P-445出土遺物	108
第24図	G P-32 平面図と出土遺物	43	第90図	G P-448平面図	109
第25図	G P-32 出土遺物	44	第91図	G P-448出土遺物	110
第26図	G P-34 平面図と出土遺物	45	第92図	G P-448出土遺物	111
第27図	G P-37 平面図と出土遺物	46	第93図	G P-448出土遺物	112
第28図	G P-37 出土遺物	47	第94図	G P-449平面図	113
第29図	G P-42 平面図	48	第95図	G P-449断面図と出土遺物	114
第30図	G P-42 出土遺物	49	第96図	G P-454平面図と出土遺物	115
第31図	G P-46 平面図と出土遺物	50	第97図	G P-454出土遺物	116
第32図	G P-46 出土遺物	51	第98図	G P-454出土遺物	117
第33図	G P-62 平面図と出土遺物	52	第99図	G P-460平面図	118
第34図	G P-78 平面図と出土遺物	53	第100図	G P-460出土遺物	119
第35図	G P-78 出土遺物	54	第101図	G P-474平面図	120
第36図	G P-79 平面図と出土遺物	55	第102図	G P-474出土遺物	121
第37図	G P-87 平面図と出土遺物	56	第103図	G P-505平面図と出土遺物	122
第38図	G P-89 平面図と出土遺物	57	第104図	G P-505出土遺物	123
第39図	G P-91 平面図と出土遺物	58	第105図	G P-593平面図	124
第40図	G P-92 平面図と出土遺物	59	第106図	G P-593断面図	125
第41図	G P-92 出土遺物	60	第107図	G P-593出土遺物	126
第42図	G P-99 平面図と出土遺物	61	第108図	G P-593出土遺物	127
第43図	G P-99 出土遺物	62	第109図	G P-593出土遺物	128
第44図	G P-102 平面図	63	第110図	G P-593出土遺物	129
第45図	G P-102 出土遺物	64	第111図	S X-1 平面図	131
第46図	G P-105 平面図と出土遺物	65	第112図	S X-1 出土遺物	132
第47図	G P-106 平面図と出土遺物	66	第113図	S X-1 出土遺物	133
第48図	G P-114 平面図と出土遺物	67	第114図	S X-1 出土遺物	134
第49図	G P-114 出土遺物	68	第115図	S X-1 出土遺物	135
第50図	G P-117 平面図と出土遺物	69	第116図	S X-1 出土遺物	136
第51図	G P-117 出土遺物	70	第117図	S X-1 出土遺物	137
第52図	G P-117 出土遺物	71	第118図	S X-1 出土遺物	138
第53図	G P-117 出土遺物	72	第119図	S X-1 出土遺物	139
第54図	G P-118 平面図と出土遺物	73	第120図	S X-2 平面図と出土遺物	140
第55図	G P-118 出土遺物	74	第121図	S X-2 出土遺物	141
第56図	G P-118 出土遺物	75	第122図	S Y-1 平面図	142
第57図	G P-129 平面図と出土遺物	76	第123図	S Y-1 出土遺物	143
第58図	G P-129 出土遺物	77	第124図	S Y-1 出土遺物	144
第59図	G P-131 平面図	78	第125図	S Y-1 出土遺物	145
第60図	G P-126・131 平面図と出土遺物	79	第126図	S Y-1 出土遺物	146
第61図	G P-133 平面図と出土遺物	80	第127図	S Y-1 出土遺物	147
第62図	G P-208 平面図と出土遺物	81	第128図	S Y-1 出土遺物	148
第63図	G P-208 出土遺物	82	第129図	S Y-1 出土遺物	149
第64図	G P-348 A 平面図と出土遺物	83	第130図	S Y-1 出土遺物	150
第65図	G P-348 A 出土遺物	84	第131図	S Y-1 出土遺物	151
第66図	G P-348 A 出土遺物	85	第132図	S Y-1 出土遺物	152

第133回	SY-1出土遺物	153
第134回	SY-1出土遺物	154
第135回	MO-1・2断面図と出土遺物	159
第136回	MO-3・4断面図と出土遺物	160
第137回	MO-5・6・7断面図と出土遺物	161
第138回	MO-8・9断面図と出土遺物	162
第139回	MO-10断面図	163
第140回	MO-10断面図	164
第141回	MO-10断面図	165
第142回	MO-10出土遺物	166
第143回	MO-10出土遺物	167
第144回	MO-11・12断面図と出土遺物	168
第145回	MO-13・14断面図と出土遺物	169
第146回	MO-15・16断面図	170
第147回	SM-1・2出土遺物	174
第148回	SM-2出土遺物	175
第149回	SM-2出土遺物	176
第150回	SM-3出土遺物	177
第151回	SM-3出土遺物	178
第152回	SM-3出土遺物	179
第153回	SM-3・4出土遺物	180
第154回	SM-4出土遺物	181
第155回	SM-6・10出土遺物	182
第156回	SM-11・12出土遺物	183
第157回	SM-13・14・15出土遺物	184
第158回	SM-17出土遺物	185
第159回	SM-17出土遺物	186
第160回	SM-17出土遺物	187
第161回	礎石群1・2平面図	191
第162回	礎石群3・4平面図	192
第163回	礎石群5・7平面図	193
第164回	礎石群6平面図(1)	194
第165回	遺構外出土の土器(1)	202
第166回	遺構外出土の土器(2)	203
第167回	遺構外出土の土器(3)	204
第168回	遺構外出土の土器(4)	205
第169回	遺構外出土の土器(5)	206
第170回	遺構外出土の土器(6)	207
第171回	遺構外出土の土器(7)	208
第172回	遺構外出土の土器(8)	209
第173回	遺構外出土の土器(9)	210
第174回	遺構外出土の土器(10)	211
第175回	遺構外出土の土器(11)	212
第176回	遺構外出土の土器(12)	213
第177回	遺構外出土の土器(13)	214
第178回	遺構外出土の土器(14)	215
第179回	遺構外出土の土器(15)	216
第180回	遺構外出土の土器(16)	217
第181回	遺構外出土の土器(17)	218
第182回	遺構外出土の土器(18)	219
第183回	遺構外出土の土器(19)	220
第184回	遺構外出土の土器(20)	221
第185回	遺構外出土の土器(21)	222
第186回	遺構外出土の土器(22)	223
第187回	遺構外出土の土器(23)	224
第188回	遺構外出土の土器(24)	225
第189回	遺構外出土の土器(25)	226
第190回	遺構外出土の土器(26)	227
第191回	遺構外出土の土器(27)	228
第192回	遺構外出土の土器(28)	229
第193回	遺構外出土の土器(29)	230
第194回	遺構外出土の土器と須恵器	231
第195回	遺構外出土の土器	232
第196回	遺構外出土の土器と石製品	233
第197回	遺構外出土の磁器	234
第198回	遺構外出土の磁器と七輪	235
第199回	遺構外出土の骨角器(1)	236
第200回	遺構外出土の骨角器(2)	237
第201回	遺構外出土の骨角器(3)	238

第202回	遺構外出土の骨角器(4)	239
第203回	遺構外出土の骨角器(5)	240
第204回	遺構外出土の骨角器(6)	241
第205回	遺構外出土の骨角器(7)	242
第206回	遺構外出土の骨角器(8)	243
第207回	遺構外出土の骨角器(9)	244
第208回	遺構外出土の骨角器と石製品	245
第209回	遺構外出土の刀類(1)	246
第210回	遺構外出土の刀類(2)	247
第211回	遺構外出土の刀類(3)	248
第212回	遺構外出土の鉄製品	249
第213回	遺構外出土の古銭(1)	250
第214回	遺構外出土の古銭(2)	251
第215回	遺構外出土の古銭(3)	252
第216回	遺構外出土の古銭(4)	253

写真目次

写真1	GP-421出土の耳栓とGP-460出土の腕輪
写真2	GP-102出土の土製玉と遺構外出土の骨角器
写真3	墓坑後出状況(GP-3・9・20・22・29)
写真4	墓坑後出状況(GP-32・34・37・42・46)
写真5	墓坑後出状況(GP-62・78・79・87・89)
写真6	墓坑後出状況(GP-91・92・102・105・108・114)
写真7	墓坑後出状況(GP-117・118・126・129)
写真8	墓坑後出状況(GP-131・133・208・348A・352)
写真9	墓坑後出状況(GP-353・372・399・421)
写真10	墓坑後出状況(GP-430・432・445)
写真11	墓坑後出状況(GP-446・449・454・480・505・593)
写真12	塚状遺構後出状況(MO-10)
写真13	塚状遺構後出状況(MO-1・2・3・4)
写真14	塚状遺構後出状況(MO-6・10)
写真15	塚状遺構後出状況(MO-10・11)
写真16	塚状遺構後出状況(MO-13・14・15)
写真17	区画墓?後出状況(SX-1・2・SY-1)
写真18	貝塚後出状況(SM-2・3・4)
写真19	貝塚後出状況(SM-10・11・17)
写真20	礎石群後出状況(礎石群1・2・3)
写真21	礎石群後出状況(礎石群4・5・6)
写真22	矢来後出状況(矢来1・3・4・5)
写真23	矢来後出状況(矢来6・7)
写真24	石籠炉後出状況(2~13号石籠炉)
写真25	石籠炉後出状況(14~27号石籠炉)
写真26	石籠炉後出状況(28~30・31・33・34・35・36・37・38・39・40・41・42)
写真27	SX-1・SX-2出土の土器
写真28	SY-1出土の土器



第1図 大川道跡（1989年度～1994年度）の発掘調査区域

I. 遺構と遺物

1. 遺構について

発掘調査によって下記の遺構が確認されており、1989～1994年度の主要な墓塚、塚状遺構、貝塚、矢来（石垣）、礎石、石組炉について報告する。

個々の説明は後述することとし、ここでは報告書掲載の遺構の概要について記述する。

- ・壑穴状建物跡 90軒 ・区画墓？ 3ヶ所 ・墓塚 971ヶ所
- ・土墳 68ヶ所 ・塚状遺構 16ヶ所 ・溝状遺構 4ヶ所
- ・焼土 70ヶ所 ・貝塚 17ヶ所 ・立石・列石？ 5ヶ所
- ・矢来（石垣） 11ヶ所 ・礎石群 7ヶ所（290点） ・石組炉 51ヶ所

(1) 墓 塚（GP）

ここでは報告書Ⅱ・Ⅲ分冊において、すでに報告した墓塚以外のもので、整理が終了し、時期がある程度推定可能であるものについて主に報告する。個々の墓塚の説明は後述することとし、ここでは各時代の特徴についての概略にとどめる。

墓塚全般に言えることは、砂丘上にあるため、遺物や遺体の保存状態が良好であり、特に懸案である頭位と性別・年齢について確認の確率が高いことである。このことは縄文時代から弥生時代にかけての葬制を知る上で非常に貴重な資料を提供してくれるものである。

年代については鍵となる火山灰がないため、主たる決め手は遺物と埋土であり、副葬品がない多数の墓塚では年代の推定が困難なものも多い。

各時代の墓塚の分布を見ると、余市川河口の上流側には縄文時代晩期の墓塚が、やや下流側には続縄文時代の墓塚が密集し、弥生時代と推測される墓塚が散在する傾向が看取される。このように推移する墓塚群は人為的な意図のもとに形成されたものであるが、砂丘の形成や発達とも関係しているものと考えている。つまり縄文時代晩期以降に砂丘が発達し、現在の海岸線が形成されていった過程が推定され、砂丘の広がった空間を利用して墓塚を設定したものと思われるのである。

縄文時代晩期前半のものは楕円形を呈し、墓塚上部に腰を伴う特徴がある。塚底にはベンガラが散布され、土器、石器、玉などが副葬され、傘大の半球状の腰を遺体の周辺に置くこともある。炭化物が見られるものもあり、火葬が行われていたことが予想される。この時代の墓塚としては、GP-421の漆塗の耳栓、GP-460では漆塗の腕輪が出土していることは重要である。

続縄文時代では恵山期と後北期が主体である。前者の形態はほぼ円形を呈し、塚底にベンガラが散布され、土器、石器、剥片などが副葬される。頭位は東側を向き、埋葬方法は屈葬が多い。GP-372は恵山式と後北式の折衷様式の土器が出土しているが、葬制につ

いては恵山文化の伝統が見られる。

後者の形態は楕円形が多く、ベンガラは薄く散布される程度である。土器、玉、剥片などが副葬されるが、量的には恵山期に比較すると非常に少ない。GP-34は須恵器の完形蓋を伴い、出土状況から坏として使用されている可能性がある。

北大期と推定されるものにGP-102がある。形態は円形を呈し、合葬墓と考えられるもので、泥炭で作られたと思われる玉が多量に出土している。

GP-108は縄文時代前半と推定されるもので、形態は楕円形を呈し、頭部付近に深鉢を副葬している。

近世についてはその殆どがアイヌ墓と思われるものである。形態は隅丸長方形で、伸履葬となり、副葬品として漆器、キセル、太刀、刀子、ガラス玉などが見られる。

(2) 区画墓? (SX・SY)

SXは環状周溝、SYは壑穴状に掘り込んでいるもので、周辺の擾乱や矢板に切られるなど形態については確認されていない部分が多い。墓域との関係については規則性はあまり見られず、不明瞭である。縄文時代晩期前後のものと思われるが判然としない。

(3) 塚状遺構(MO)・溝状遺構

塚状遺構は長短あわせて16ヶ所が発見されている。これら全てが同一時期である確証はなく、重複や切合いが見られる。最も大規模なものはMO-10で、1999年度の調査での検出分を含めると、総延長は約120mにも及ぶもので、大川砂丘を横断しており、断面は逆台形または、U字形を呈している。またそれに直交するように10~40mのものと、断続しながら並行するものが見られる。

これらの年代については、縄文住居を切っていることや近世の貝塚が覆土上面に見られることから、縄文時代以降で18世紀以前と言える。

遺構の性格については判然としないが、崩れやすい砂丘を掘り込んでいることから、区画や防風柵としての意図が考えられる。

溝状遺構はMO-1・9周辺に見られる長さ6~10cm、幅約10cm、深さ約30cmほどのもので4ヶ所が確認されている。Ⅱ層から掘り込まれ、溝中に柱穴と思われるピットが見られるものもある。これらの年代については伴出遺物がなく判然としない。

(4) 貝塚(SM)

17ヶ所が確認されており、自然遺物は貝類を主体に魚骨、獣骨で構成されている。人工遺物は陶磁器、キセル、耳飾り、鉄鍋、骨角器、古銭などが出土している。

貝塚の場所は壑穴住居や塚状遺構などが埋没した後の窪みを利用する場合も見られるが、

殆どの場合、砂丘の縁辺部の周辺に位置し、その段差を利用している。厚さは10～70cm程度のもので広範囲に散布されているようなものもある。

SM-2では石製ランプと思われるものや鳥骨で作られた針入れ、SM-3・17では蛸頭(キテ)や中柄等がの骨角器などが見られ、これらの現地製作品はアイヌ民族によるものと思われる。

年代については、寛永通宝が見られ、キセルの形態や肥前陶磁器などの本州移入品との組み合わせなどから18～19世紀後半の所産と考えられる。

(5) 礎石群

径30～80cmほどの円礫を規則的に配しているもので、まとまりとして7カ所が確認された。余市川河岸に並行もしくは直交する長軸を持つ建物を構成していたと思われる。また、これらに付随するものとして細い溝の見られるものもある。

その他にも部分的に礎石の散在が認められるが、群として把握するのは困難と思われる。年代については伴出遺物の特定が難しいが、近世・近代にかけてのものと思われる。

(6) 矢来(石垣)

本来の矢来は竹や木を縦横に粗く組んだ囲いをさすようであるが、ここでは土留めのための石列や石垣と思われるものも含めており、11ヶ所が検出されたが、整っているものは7カ所が確認されている。基本的には角礫を段状に積み上げているものであり、部分的に円礫を並べているものもある。

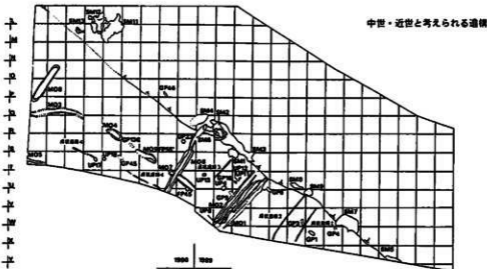
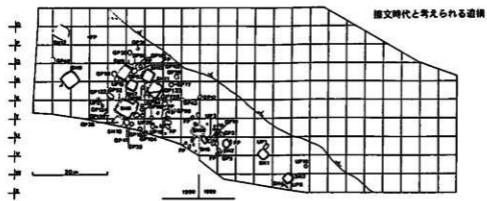
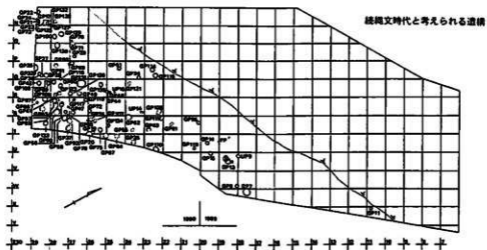
年代については、伴出遺物が殆どないため特定するのは難しいが、近世・近代にかけてのものと思われる。

(7) 石組炉

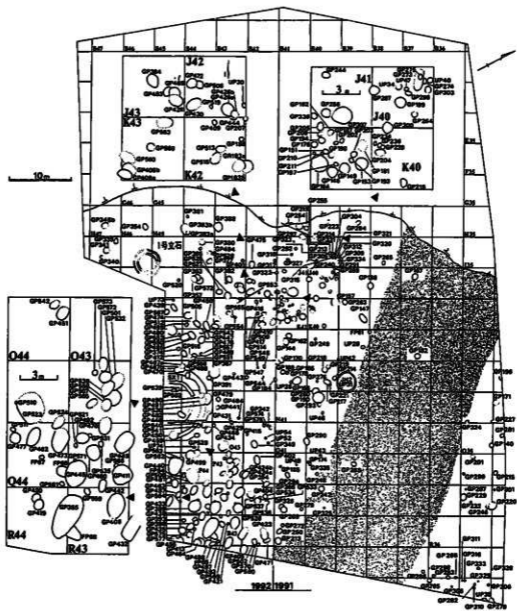
縄文時代? 1基、近世・近代の石組炉50基が確認され、後者は円形を呈し大きさは概ね直径1.5mほどのものである。構築方法については様々であるが、地面を掘り込み、角礫や円礫を積み重ねて粘土等で固めているもので、2基1対となるものが数例見られた。炊口は南東方向を中心に南側を向くものが多く、風向きに関係したものと考えられる。21号石組炉は軟石製切石を方形に組んでおり他に比べて新しい可能性がある。

当地は近世以降ニシン漁を中心にして栄えており、近代の記録によれば一般にニシン釜は2基1対の竈を基本として使用されていたようである。これらの記録と検出状況からニシン漁に関係したものを見出すことができようである。

年代については、伴出遺物が殆どないため特定するのは難しいが、近世・近代の所産と思われる。

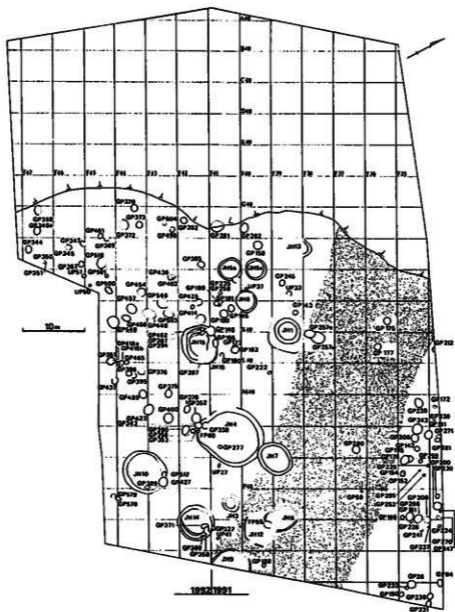


第2図 遺構分布図(1989~1990年度)



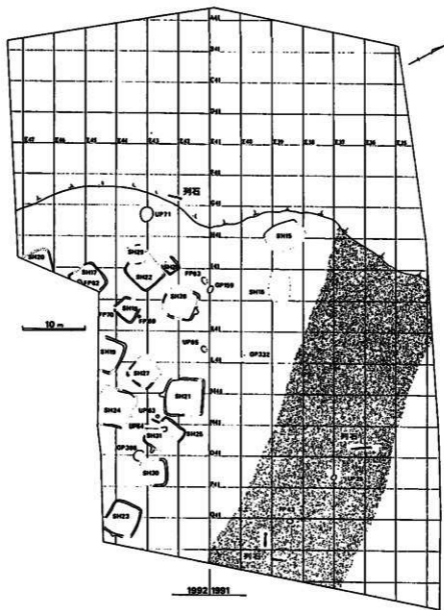
縄文時代晩期と考えられる遺構

第3図 遺構分布図(1991~1992年度)



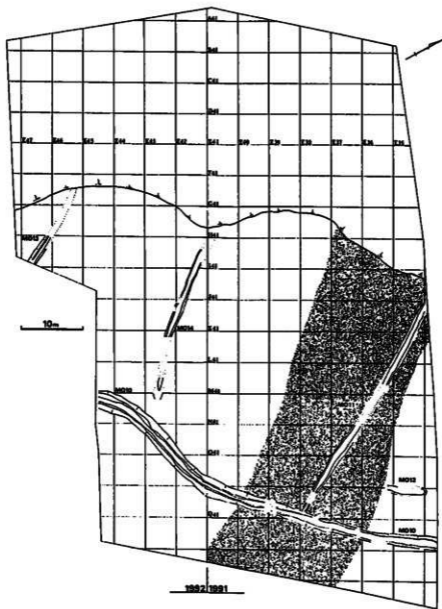
縄文時代と考えられる遺構

第4図 遺構分布図(1991~1992年度)



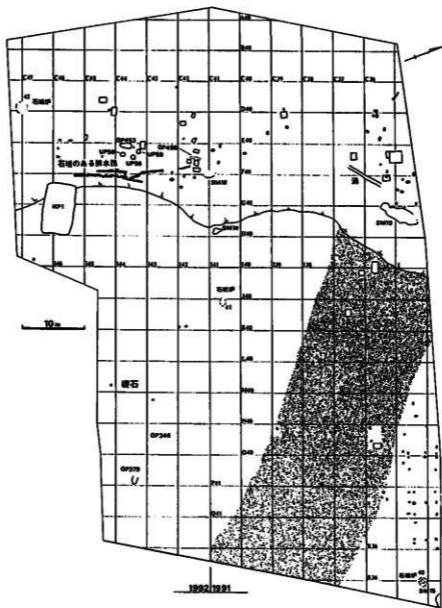
縄文時代と考えられる遺構

第5図 遺構分布図（1991～1992年度）

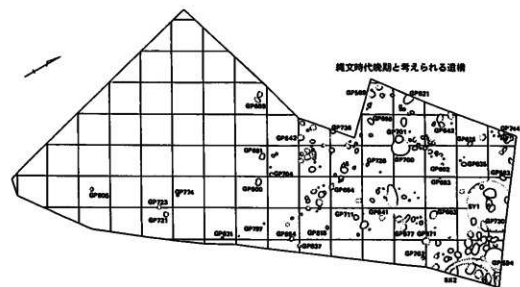


中世・近世と考えられる遺構

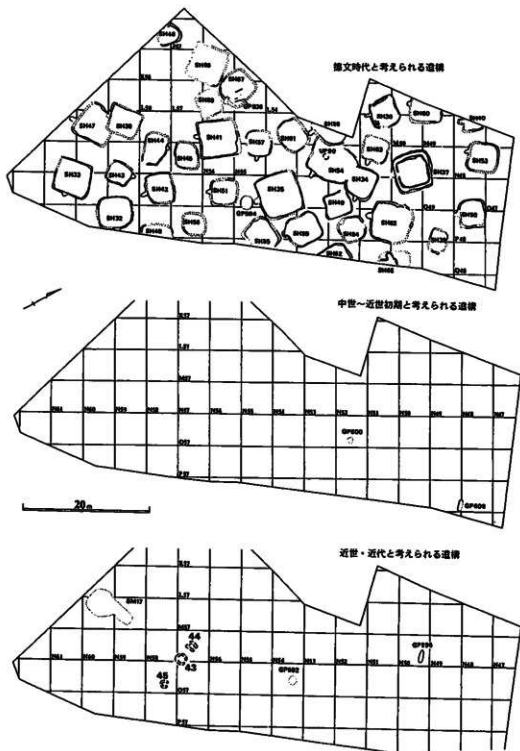
第6図 遺構分布図(1991~1992年度)



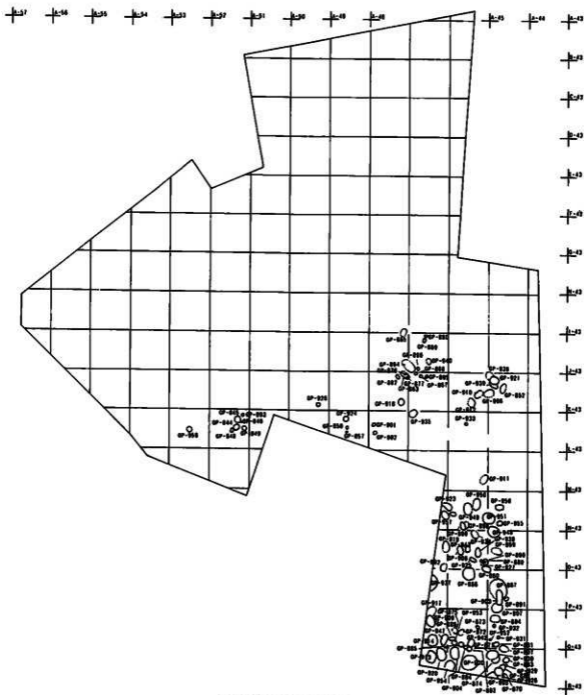
第7図 遺構分布図(1991~1992年度)



第 8 図 遺構分布図 (1993年度)



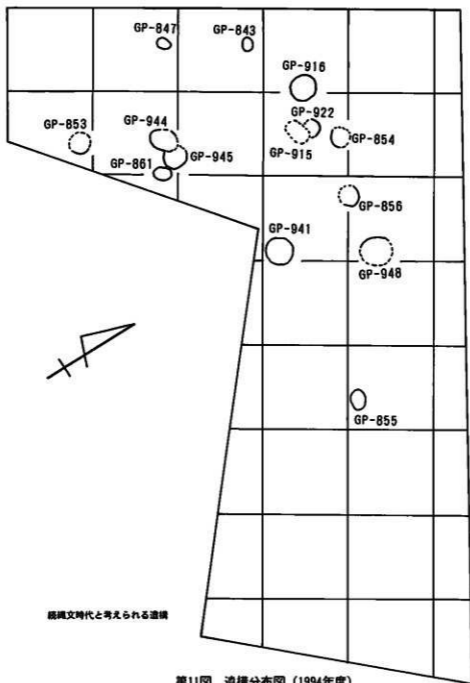
第9図 遺構分布図(1993年度)



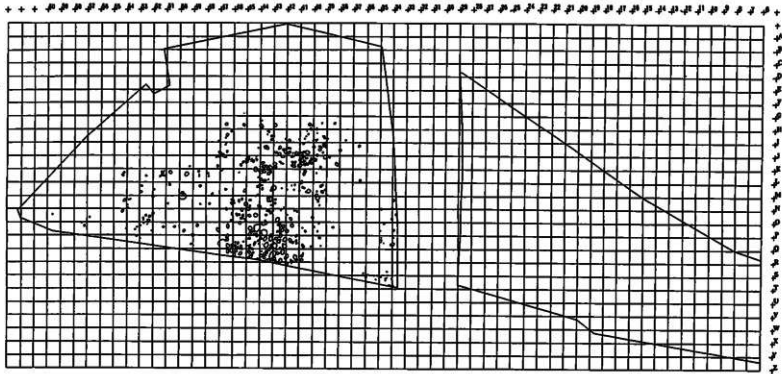
縄文時代晩期と考えられる遺構

第10図 遺構分布図 (1994年度)

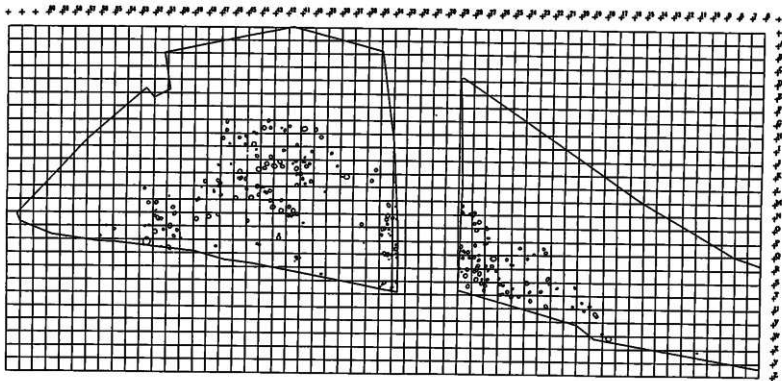
A-49 A-48 A-47 A-46 A-45 A-44 A-43



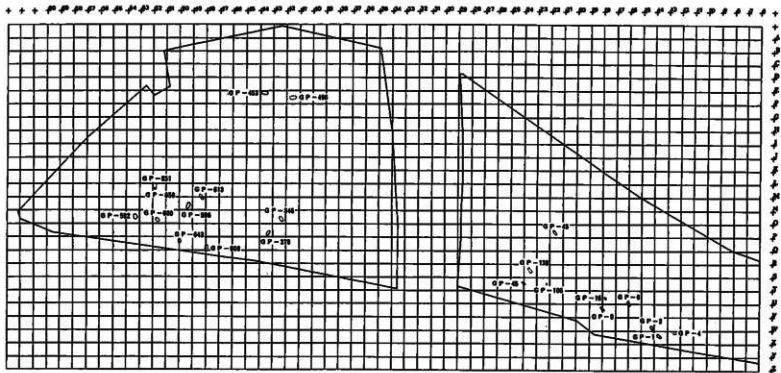
第11図 遺構分布図 (1994年度)



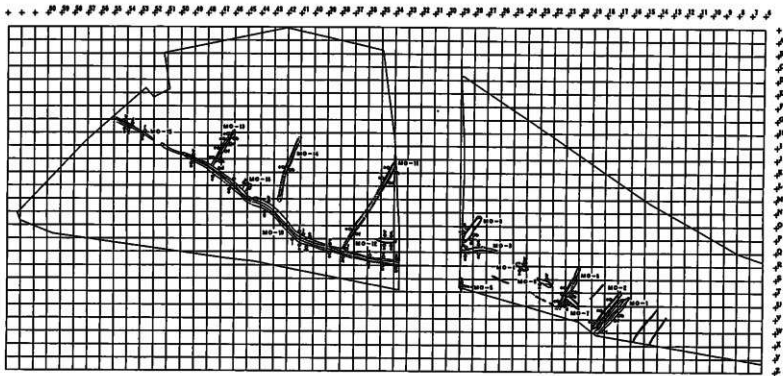
第12図 縄文時代晩期の墓域分布図（1989～1994年度）



第13回 続縄文時代の墓跡分布図（1989～1994年度）

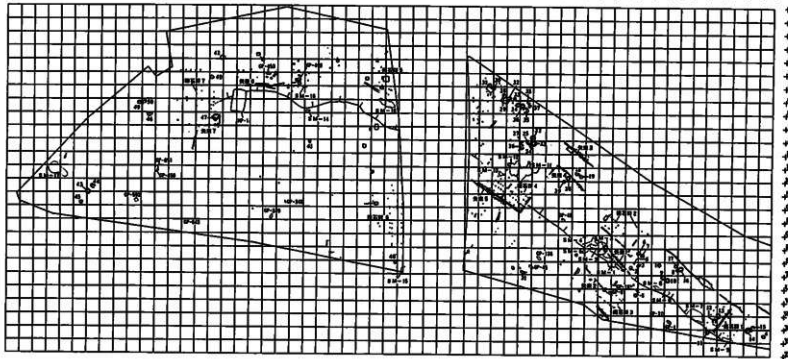


第14圖 中世 (GP-606) ~近世の基盤分布圖 (1989~1994年度)



第15圖 樓狀結構・梁狀結構分布圖

++++ 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



- 貝塚
- 石室跡
- 石室の遺構

第16図 近世・近代の遺構分布図

2. 遺構の説明

(1) 墓 塚

ここでは副葬品等から年代の推定がある程度可能と思われる主要な墓塚46基について以下に説明をする。

GP-3 (第17図)

W15グリッドに位置する。砂丘の縁辺部にあたり、北西側の脚部は後世の削平を受けて消失しているが、現状で長軸1.30×短軸0.54m、深さ約15cmを測り、北西～南東に長い隅丸長方形を呈すると思われる。遺体の残存状態はあまり良くないが、顔面は北を向き、頭位は南東方向・伸展葬と思われる。左肩部と左腰部に漆器椀が置かれ、左胸部に刀子、頭部周辺と左胸部にキセル、右腕部に木製品が出土した。南東側に墓標穴と思われる小ビット2基が確認された。

年代は副葬品のキセル等から近世～近代にかけてのものと思われる。

GP-9 (第18図)

V18・19グリッドに位置する。墳底部直上での検出で、明確なプランは確認されなかった。推定で長軸1.70×短軸0.68m、深さ約8cmの東西に長い隅丸長方形を呈すると思われる。東側はM O-2と重複しているが、新旧関係は明確ではない。遺体の残存状態は悪く、頭部・右腕部・その他一部のみの検出である。顔面は東を向き、西頭位の伸展葬と思われる。頭部北側に太刀、頭部南側に漆器が出土した。西側に小ビット1基が確認され、墓標穴の可能性はある。

年代は副葬品等から近世～近代にかけてのものと思われる。

GP-20 (第19・20図)

T26・27、U26・27グリッドに位置する。南東側を発掘区の矢板、北東側は攪乱、北側はGP-19に切られている。現存する部分の径は1.45×1.00m、プランは円形を呈するものと思われ、確認面からの深さ約101cmを測る。ベンガラに厚く覆われており、遺体の状態は悪く細部は不明であるが、検出状況から南西頭位・屈葬と推定される。埋土中位にもベンガラの層が見られた。南西側から北側の壁際中位から下位に礫が配されており、遺体北側のベンガラ中より石斧・石鏃が数点出土している。

年代は副葬品等から縄文時代の恵山期のものと思われる。

GP-22 (第21・22図)

N29グリッドに位置する。西側の一部を発掘区の矢板で切られており、東側壁の一部はハンクしている。北西～南東に長い楕円形を呈し、径1.20×0.71m、深さ約46cmを測る。遺体はベンガ

ラと一体化し、状態は良くないが、検出状況から南東頭位の屈葬と思われる。頸部に土製玉と石製玉計31点が連なって出土、腰部周辺には軽石製垂飾1点が出土している。

年代は副葬品等から統繩文時代と思われるが判然としない。

GP-29 (第23図)

P27グリッドに位置する。確認面が低く、墳底部直上の人骨を検出した。墳底部の径は現状で1.04×0.53m、深さ約11cmを測る。遺体の残存状態はわりと良く、北東頭位の仰臥屈葬である。頭部下南側より頸部にかけて蛇紋岩製の玉38点が連なって出土しているが、検出状況から推測すると、首にかけたものではなく、横に置いたものと思われる。また、墳底部直上での検出のため、玉の一部は周辺に散在している。

年代は副葬品等から統繩文時代と思われるが判然としない。

GP-32 (第24・25図)

Q29グリッドに位置し、南西側の約半分を発掘区の矢板で切られている。現存する径は0.90×0.47m、深さ約41cmを測り、北西～南東を長軸とする楕円形ピットと思われる。遺体の状態は悪くベンガラと一体化しているが、検出状況から南東頭位と推定される。ピット上面北西側に石炭の集中が見られ、墳底部北側ベンガラ中より石斧2点・スクレイパー等の剥片石器などが出土している。

年代は副葬品等から統繩文時代と思われるが判然としない。

GP-34 (第26図)

Q24グリッドに位置し、径1.10×0.71m、深さ約33cmの北西～南東に長い楕円形を呈している。中央に小範囲であるがベンガラが見られ、墳底部南東壁際からほぼ完形の須恵器杯の蓋が出土している。

年代は副葬品等から統繩文時代末～埴文時代初頭と思われる。

GP-37 (第27・28図)

T28グリッドに位置し、北東側半分を後世の攪乱で切られており現状で径は1.40×0.65m、深さ約44cmを測り、北西～南東にやや長い円形を呈すると思われる。遺体はベンガラで厚く覆われ、状態は悪く頭位等不明である。墳底部西側に30cm程の礎2点が配され、南側から恵山式土器の底部・石斧・石炭・スクレイパー等が集中して出土している。

年代は副葬品等から統繩文時代の恵山期のものと思われる。

GP-42 (第29・30図)

R29グリッドに位置し、径1.08×0.94m、深さ約34cmの東西にやや長い円形を呈している。埋土上面にメノウの原石および剥片の集中が確認された。遺体はベンガラで厚く覆われ、状態は悪いが、南東頭位・側臥屈葬と思われる。遺体の南側ベンガラ中より恵山式の壺と先端を南東方向に向けた石鏃8点が出土している。

年代は副葬品等から統縄文時代の恵山期のもと思われる。

GP-46 (第31・32図)

P22グリッドに位置する。Ⅱ層までの掘込みでプランは不明瞭であるが、推定で長軸1.65×短軸0.65m、深さ約20cmの東西に長い隅丸長方形を呈すると思われる。東側を後世の攪乱で切られ、頭蓋部を欠損しているが、遺体の状態はわりと良く東頭位・伸展葬である。検出状況から白樟様の樹皮で包まれていた可能性がある。左脇に太刀、右腕側に刀子、右脚北側に漆器碗およびガラス玉2点、また、装着されていたかは不明であるが、太刀の南東側約10cmに刀の鐔が出土している。

年代は副葬品等から近世～近代にかけてのもと思われる。

GP-62 (第33図)

S24・T24グリッドに位置する。南側をSH-6によって切られているが、推定で径1.65×1.45m、深さ約38cmのほぼ円形を呈すると思われる。2遺体の合葬が確認され、北側に位置する遺体1はベンガラで厚く覆われているがほぼ全身が確認され、ビットほぼ中央の遺体2はSH-6構築時に頭蓋部を欠損したものである。ともに東頭位・仰臥屈葬である。また、南西側に遺体の一部と思われる骨片の範囲(遺体3)が確認され、3体合葬の可能性もあるが現状では不明である。埋土中より土器片・剥片等が出土している。

年代は検出状況より統縄文時代の後北C₁-D式期かと思われるが判然としない。

GP-78 (第34・35図)

S28グリッドに位置し、径1.02×0.81m、深さ約86cmの北東～南西に長い楕円形のビットである。墳底部はベンガラで厚く覆われており、遺体の状態も悪く細部は確認できず、頭位等は不明である。北東壁際に恵山式の完形浅鉢、その南西側に先端を北東方向に向けた石鏃7点が出土している。また西側ベンガラ中よりスクレイパー等の剥片石器および剥片が多数出土し、埋土の土壌水洗からはサメの歯1点を確認された。

年代は副葬品等から統縄文時代の恵山期のもと思われる。

GP-79 (第36図)

S28グリッドに位置し、径0.41×0.32m、深さ約16cmの北東～南西に長い楕円形を呈している。小形の土器が4個体まとまって出土しており、墳底部全面にベンガラが散布されている。遺体は確認されなかったが、ピットの規模が小さいことから、墓墳と考えた場合、乳幼児が埋葬されていた可能性がある。

年代は副葬品等から統繩文時代の恵山期のものと思われる。

GP-87 (第37図)

R29・S29グリッドに位置し、径0.84×0.80m、深さ約29cmの北東～南西にやや長い不整形円形を呈する。墳底部北東側に頭部と思われる骨片混じりのベンガラの塊が検出され、ピット中央部に東西方向に伸びる人骨の一部が確認され、検出状況より北東頭位の屈葬と推定される。頭部南側に完形の深鉢、さらにその南側につぶれた状態の深鉢とベンガラの散布が認められた。また、ベンガラ中よりスクレイパー1点が出土している。

年代は副葬品等から統繩文時代の恵山期のものと思われる。

GP-89 (第38図)

R29グリッドに位置し、径0.86×0.80m、深さ約41cmの北西～南東にやや長い楕円形を呈する。墳底部ほぼ中央にベンガラの範囲が検出されたが、遺体は確認されなかった。墳底部南東側に完形の小形深鉢が2個体、中央に有孔石製品？1点が出土している。

年代は副葬品等から統繩文時代の恵山期のものと思われる。

GP-91 (第39図)

Q28グリッドに位置する。東～南西側を後世の攪乱で墳底部直上まで削平されているが、推定で径1.35×1.02m、深さ約39cmの北西～南東に長い楕円形を呈すると思われる。遺体はベンガラに覆われ状態は悪いが、南東頭位と思われる。頭部南西側に完形の小形深鉢、遺体の北側に石斧1点が出土している。

年代は副葬品等から統繩文時代の恵山期のものと思われる。

GP-92 (第40・41図)

S23・24グリッドに位置し、径1.41×0.79m、深さ約24cmの南北に長い不整形円形を呈する。遺体は頭蓋部を除き状態はあまり良くない。顔面は東を向き、南頭位の側臥屈葬である。遺体の胸部周辺に鉄製品1点・土器片等が出土し、両脇に20cm前後の礎を2点ずつ配している。

年代は検出状況より統繩文時代後半から縄文時代前半と思われるが判然としない。

GP-99 (第42・43図)

T22グリッドに位置し、径1.23×0.88m、深さ約21cmの南北に長い楕円形を呈する。遺体の状態は悪く頭部は確認できなかったが、遺体腰部および脚部の出土状況から、南頭位・側臥屈葬と思われる。また、墓墳の約20cm南東側に埋設土器が出土しており、GP-30に類例を見ることができる。埋土中より蛇紋岩や石英製の玉86点が出土している。

年代は副葬品から統縄文時代終末の北大期～縄文時代初頭に相当すると思われる。

GP-102 (第44・45図)

R24グリッドに位置し、径1.80×1.60m、深さ約47cmの北西～南東にやや長い円形を呈する。北西側上面はGP-101に切られている。遺体の状態は悪く3体以上は埋葬されていると思われるが、あまり規則性は見られない。草炭或いは泥炭を加工して作られたと思われる玉約140点がビット中央に位置する遺体付近から出土している。

年代については検出状況等から統縄文時代後半の北大期と思われるが判然としない。

GP-105 (第46図)

R29・S29グリッドに位置し、径1.26×1.14m、深さ約99cmのほぼ円形を呈する。墳底部はやや袋状で、ほぼ全面にベンガラが厚く散布されている。遺体は頭部を除き、ベンガラと一体化して不明瞭であるが、検出状況から南東頭位・側臥屈葬と推定される。頭部北東側に完形の深鉢、北東側壁際のベンガラ中より剥片が多数出土している。また、埋土中からヒスイ製勾玉1点が出土しているが、本墓墳に伴出するとは考えにくい。

年代については副葬品等から統縄文時代の恵山期のもと思われる。

GP-108 (第47図)

S23グリッドに位置し、南側をGP-128、西側をSH-11に切られているが、推定で径1.25×0.86mの南北に長い楕円形を呈すると推定される。墳底部直上での検出のため、深さ約19cmと浅い。遺体の状態は悪いが、南頭位・側臥屈葬であると思われる。頭部の東側に口縁部を意図的に欠損した深鉢が出土している。

年代については副葬品等から統縄文時代の北大期～縄文時代初頭のものである。

GP-114 (第48・49図)

Q23グリッドに位置する。墳底部直上での検出であるが、径1.22×1.01m、深さ約29cmの東西にやや長い不整楕円形を呈する。人骨は散乱しているが2遺体分程はあると思われ、体を折り曲げた状態で埋葬されたと見られる。中央～南東側にコハクの原石、西側より鉄製品と針入れと思われる骨角器が出土しているが、骨角器取り上げ時に崩壊した。また、墓墳より10cm程南側にほ

ば完形の注口土器が出土している。

年代は遺物等より統縄文時代の後半C₁-D式期のものと思われる。

GP-117 (第50~53図)

S27グリッドに位置し、上部をSH-9により削平されている。墳底部直上での検出で、径0.65×0.55m、深さ12cmの北西~南東に長い楕円形を呈する。東側に10~20cm程の礎3点とほぼ完形の浅鉢、北側に石鏃・スクレイパー・剥片・黒曜石原石等多数出土しており、そのうち剥片数点は接合可能である。遺体はベンガラと一体化しており範囲として確認されたが、細部の確認は困難であった。

年代は遺物等より統縄文時代の恵山期のものと思われる。

GP-118 (第54~56図)

S27グリッドに位置し、径0.92×0.85m、深さ約80cmのほぼ円形を呈している。埋土上面西側に石斧、東側に完形の浅鉢・深鉢等が出土している。墳底部ほぼ中央に遺体範囲が確認されたが、ベンガラと一体化しており、細部は不明である。墳底部東側に完形の深鉢・ミニチュア土器、北側にスクレイパー2点が出土しており、中央よりやや東側のベンガラ中より蛇文岩製の平玉20数点と緑色片岩及び黒曜石製の垂飾が連なって出土している。検出状況等から東頭位と考えられる。なお、ミニチュア土器中には、黒曜石の剥片が半分程入った状態で検出された。

年代は遺物等より統縄文時代の恵山期のものと思われる。

GP-126 (第60図)

N28グリッドに位置する。西側のほぼ半分は後世の攪乱が墳底部にまで及んでいる。現状で径0.96×0.60m、深さ約29cmを測り、ほぼ円形を呈すると推定される。遺体はベンガラにより厚く覆われており状態は悪いため、細部は不明である。遺体の中央に土製勾玉、南東側にコハク玉が出土している。コハク玉は垂飾と思われるもので非常に脆く殆ど原形をとどめていない。

年代は遺物等より縄文時代晩期後半と思われるが判然としない。

GP-129 (第57・58図)

O28グリッドに位置し、上面をMO-8によって削平されているが、径1.35×1.30m、深さ約110cmのほぼ円形を呈している。遺体はベンガラで厚く覆われており状態は悪く、細部は不明である。遺体の東~南側に先端を北に向けた石鏃5点と剥片石器、北西側遺体上面に石鏃・剥片石器等が、南西側には25cm程の礎が出土している。また、遺体層中より魚骨が多数に検出されている。

年代は遺物等より統縄文時代の恵山期のものと思われる。

GP-131 (第59・60図)

R27グリッドに位置し、径2.25×2.00m、深さ91cmの北東～南西に長い楕円形を呈している。北側上面の一部はM0-3により切られている。墳底部には厚くベンガラが散布されており、遺体はベンガラと一体化し、確認されたのは中央よりやや東側の頭部のみである。北東側ベンガラ中より深鉢2個体がつぶれた状態で出土している。ピットの規模が大きい事から合葬の可能性も考えられる。

年代は副葬品等から縄文時代の恵山期のものと思われる。

GP-133 (第61図)

T29グリッドに位置し、径1.20×1.10m、深さ約31cmのほぼ円形を呈している。遺体はベンガラと一体化しており不明瞭であるが、北西側に僅かながら骨の一部が確認された。墳底部南東側に完形深鉢が正立した状態で、北西側に石織などの割片石器・割片等が数点出土している。

年代は副葬品等から縄文時代の恵山期のものと思われる。

GP-208 (第62・63図)

Q34・35、R34・35グリッドに位置する。南側を後世の掘乱により切られているが、推定で径1.20×1.15m、深さ約57cmのほぼ円形を呈すると思われる。埋土上面より中位にかけて粘土塊が点在しており、上面と墳底部にベンガラの散布が認められた。遺体の状態は悪いが、東頭位・側臥屈葬と推定される。北側のベンガラ周辺より石斧2点・石錐1点等の石器類とともに径1～2cm前後の扁平な小石75点、東側遺体上面より先端南向きの石織3点が出土した。

年代は副葬品等から縄文時代のものと思われるが判然としない。

GP-348A (第64～66図)

H47グリッドに位置し、GP-348Bを切っている。径1.21×1.06m、深さ約54cmの北西～南東に長い楕円形を呈する。遺体は腐食が著しく、骨が南東側と北西側に散在しており、細部は不明である。遺体南側に完形壺、西側に石斧・石織・スクレイパー等の石器類や多数の割片、北東側にも石斧・石織が数点出土した。ベンガラの散布は確認されなかった。

年代は副葬品等から縄文時代の恵山期のものと思われる。

GP-348B (第67図)

H47グリッドに位置し、北側をHP-1に、南側をGP-348Aによって切られているが、推定で径1.10×1.05m、深さ約55cmの南北にやや長い円形ピットと思われる。上面より完形深鉢が出土し、墳底部の広い範囲に粘土が検出されたが、遺体は確認されなかった。

GP-348Aとの重複関係などから縄文時代晩期のものと思われるが判然としない。

GP-352 (第68図)

N42グリッドに位置する。墳底部直上での検出であり、東側をGP-343に切られている。径1.59×1.35m、深さ約19cmの東西に長い楕円形を呈している。中央やや南西側に薄くベンガラが散布された0.50×0.32mの遺体の範囲が確認された。中央やや北側に石楯数十点および剥片石器等が出土している。

年代は副葬品等から縄文時代晩期後半のものと思われるが判然としない。

GP-363 (第69～71図)

J44グリッドに位置する。南側上面をGP-357により切られており、径1.09×0.94m、深さ約54cmの東西に長い楕円形を呈する。遺体は腐植が著しく、中央やや北側に0.45×0.35m程の範囲と南西側の小範囲が確認された。墳底部よりやや高い位置ではあるが、南側に完形浅鉢・石斧・石楯・スクレイパー等、北側に石製垂飾等が出土している。

年代は副葬品等から縄文時代晩期後半のものと思われる。

GP-372 (第72～74図)

H44グリッドに位置する。南西側の約半分を後世の擾乱により切られている。現状で径1.65×0.75m、深さ約56cmを測り、円形を呈すると思われる。中央やや東側にベンガラの散布が認められ、その周辺に遺体の一部が検出された。東側に完形の深鉢、東側から北東側に石斧・スクレイパー等、中央から北西側にかけて先端を北西方向に向けた石楯数十点が出土している。

年代は副葬品等から縄文時代の恵山期のものと思われるが、土器の口辺部には耳がつけられており、後北式土器の影響を受けていると考えられる。

GP-399 (第75～77図)

Q44グリッドに位置し、南側上面をSH-23により削平されている。径2.23×1.85m、深さ約119cmの北西～南東に長い楕円形を呈している。上面は同心円状に外側から炭化物を主体とする黒色砂が8cm程の幅で確認され、その内側にベンガラ混じりの砂質凝灰岩粗粒が30cm程の幅で巡っており、さらにその内側に径75×60cmの褐色砂が認められた。30cm程の厚さの砂質凝灰岩粗粒層を除去後の厚さ50cm程の砂層下にベンガラの範囲が確認された。ベンガラの直下より遺体が検出され、5体の合葬と判明し北側から順に遺体1・2・3・4・5とした。いずれの遺体も東頭位である。遺体1は側臥屈葬と思われ、遺体2は仰臥屈葬で胸部に蛇紋岩製の玉1点と丸みのある方を下にした礫石器1点が左肩の辺りに出土し、2体はお互いに向き合っていると見られる。遺体3と遺体4も仰臥屈葬と見られ、向き合っているように思われる。遺体3の手と思われる部分より丸みのある方を上にした礫石器1点が出土した。遺体4のさらに南側に頭部と歯片のみの遺体5を確認した。5遺体の上面は全体に黒色を呈しており、火葬墓と推定される。

年代は副葬品等から縄文時代晩期前半に相当するものと思われる。

GP-421 (第78~80図)

R43・S43グリッドに位置する。上面に配石を伴い、径1.87×1.30m、深さ約92cmの北西～南東に長い楕円形を呈している。墳底部にベンガラで厚く覆われた遺体が確認された。腐蝕が著しいが、検出状況から北西頭位と思われる。遺体の上面南側に土器がつぶれた状態で出土している。ベンガラを除去後に、北側から漆塗りを施した耳栓（魚頭の椎骨製？）2点と中央部にヒスイ勾玉1点と石燼1点が出土した。

年代は副葬品等から縄文時代晩期前半に相当するものと思われる。

GP-430 (第81~84図)

J42グリッドに位置する。東側はMO-14に切られているが、径1.34×1.05m、深さ約35cmの南北に長い楕円形を呈すると思われる。中央やや南側に遺体の一部と歯が検出され、その北側ほぼ中央部に蛇紋岩製の平玉が多数、東側に石斧が7点出土しており、検出状況から南頭位と考えられる。

年代は副葬品等から縄文時代晩期後半と思われるが判然としない。

GP-432 (第85図)

R42・43グリッドに位置する。北側はJH-14により切られており、現状で径1.70×1.15m、深さ約77cmを測る。北西～南東に長軸を持つ隅丸形状を呈すると思われ、南東側上面に配石を伴う。埋土の南東～中央に50cm程の厚さで砂質凝灰岩細粒層が検出された。墳底部中央にベンガラの範囲が確認され、そのほぼ中央にヒスイ製勾玉1点が出土した。ベンガラ除去後東側を中心に炭化材が検出され、火葬墓と判明し、その下部より遺体を確認した。腐蝕が著しいが、検出状況より北西頭位と推定される。

年代は副葬品等から縄文時代晩期前半に相当するものと思われる。

GP-445 (第86~89図)

Q43・44グリッドに位置する。径2.03×1.65m、深さ約73cmの北西～南東に長い楕円形を呈する。ピットの上面に配石を伴い、墓墳の北東50cm程の所に25×15cm、高さ49cmを測る立石が確認された。配石の中央には異形土製品が出土し、埋土中央の1.00×0.70m程の範囲で砂質凝灰岩細粒が遺体の上面まで密に詰まっていた。遺体はベンガラで厚く覆われており腐蝕が著しいが、2体の合葬が確認され、ともに北西頭位・仰臥屈葬と思われる。東側の遺体の頭部にサメの歯8点が出土し、腰部周辺からは左右に礫石器が1点ずつ出土（2点とも丸みのある方が上）しているが、西側の遺体には副葬品は検出されなかった。また、両方の遺体の上面および両脇に炭化物が

検出され、火葬墓と思われる。

年代は副葬品等から縄文時代晩期前半に相当するものと思われる。

GP-448 (第90～93図)

K43・44グリッドに位置する。上面に配石を伴い、南北を後世の擾乱によって切られているが、径1.28×1.10m、深さ約63cmの東西に長い楕円形を呈すると思われる。東西の外側に20～40cmの幅で15～20cmの深さの窪みが検出され、砂質凝灰岩粗粒が詰まっていた。恐らく縄文時代晩期の基壇を切って構築されたものと思われる。遺体は厚さ2～3cmのベンガラで覆われており、腐食が著しく頭位等不明である。西側に石斧等の石器類・土器、南東側に剣片と共に緑色片岩製勾玉1点が出土している。

年代は副葬品等から統縄文時代の恵山期のものと思われる。

GP-449 (第94・95図)

Q42・43グリッドに位置する。径1.93×1.30m、深さ約105cmの北西～南東に長い楕円形ピットである。ピット上面はやや大形の礫が配され、その南側に壘形土器が出土した。礫の直下より30～40cm程の厚さで砂質凝灰岩細粒層が検出され、間に厚さ60cm程の砂層を挟み、厚さ15cm程の砂質凝灰岩細粒層がベンガラ層直上に確認された。墳底部にベンガラで厚く覆われた遺体が検出されたが、腐食が著しく頭位等不明である。ベンガラの上面南側と遺体の両脇に炭化物が検出され、火葬墓と考えられる。

年代は縄文時代晩期前半と思われるが判然としない。

GP-454 (第96～98図)

J44グリッドに位置する。南側は後世の擾乱によって切られているが、径1.39×1.30m、深さ約34cmのほぼ円形を呈すると思われる。墳底部全面にはうっすらとベンガラが散布されており、南東側に頭部と思われる遺体の一部が、中央やや北西側にも遺体の一部が確認され、検出状況から南東頭位と思われる。墳底部東側に完形深鉢2個体、北側に石斧・石鎌・スクレイパー等、中央にコハクの垂飾と石織等が出土している。

年代は副葬品等から統縄文時代の恵山期のものと思われる。

GP-460 (第99・100図)

Q43グリッドに位置する。径1.26×1.12m、深さ約90cmの東西に長い楕円形を呈する。ピット上面に配石が確認され、そのやや南寄りに石枕、ほぼ中央に土器底部が出土した。配石の下面中央に30cm程の厚さで砂質凝灰岩細粒層が堆積し、その下20cm程の砂層を除去後ベンガラで厚く覆われた遺体を確認、腐蝕が著しく細部は不明であるが、歯が検出されており南東頭位と思われる。

遺体の両腕と下面より炭化材が出土しており、火葬墓と推定される。遺体上面北西側より漆塗りの腕輪4点が出土しており、状況より左腕につけていたものと思われる。

年代については副葬品等から縄文時代晩期前半のものと思われる。

GP-474 (第101・102図)

K44グリッドに位置する。北側上面をGP-456によって削平されているが、径1.35×1.07m、深さ約32cmの北東～南西に長い楕円形を呈している。埋土上面に礫が置かれ、南西側に大形の深鉢が出土している。埋土は10cm程の厚さの砂質凝灰岩細粒層と砂層の互層となっている。遺体はベンガラ混じりで腐植が著しいが、検出状況から北東頭位の屈葬と推定される。

年代については縄文時代晩期前半のものと思われる。

GP-505 (第103・104図)

K44グリッドに位置する。径1.26×0.84m、深さ約45cmの南西～北東に長い楕円形を呈する。埋土上面に注口土器・皿形土器が出土し、埋土中に礫が確認された。礫を含む砂層下から10cm程の厚さの砂質凝灰岩細粒層が堆積しており、その下の砂層除去後、ベンガラ混じりの遺体が検出された。腐植が著しく、頭位等細部については不明である。中央やや西寄りに、丸みのある方を下にした礫石器1点が出土している。遺体の上面は黒色を呈しており、火葬墓の可能性はある。

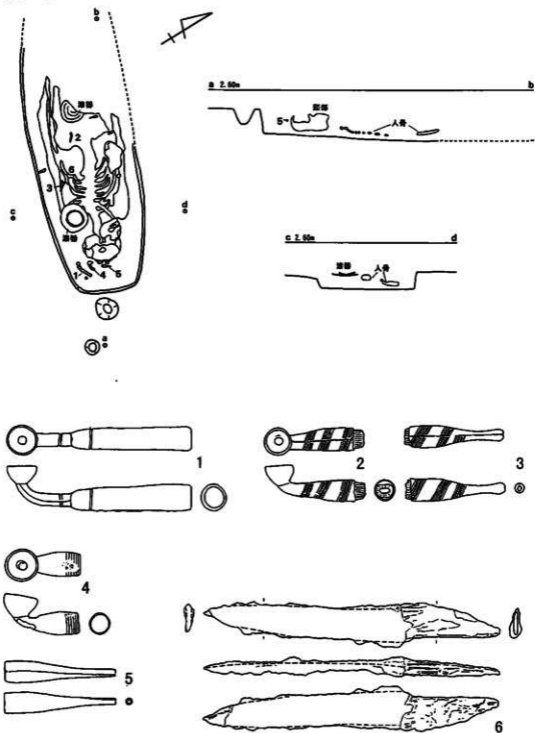
年代については副葬品等から縄文時代晩期前半のものと思われる。

GP-593 (第105～110図)

O48グリッドに位置する。径1.60×1.45m、深さ約117cmの北西～南東に長い楕円形を呈している。上面に自然堆積が見られ、その下が埋土と思われ、坏1点が埋土中より出土した。遺体は墳底部ほぼ中央に範囲として確認されたが、腐植が著しく細部は不明、南東側に歯が検出された事から南東頭位と思われる。墳底部南東側に完形深鉢が出土し、北東側には石鏃68点・石斧1点等が集中しており、石鏃は大半は先端東向きの状態である。

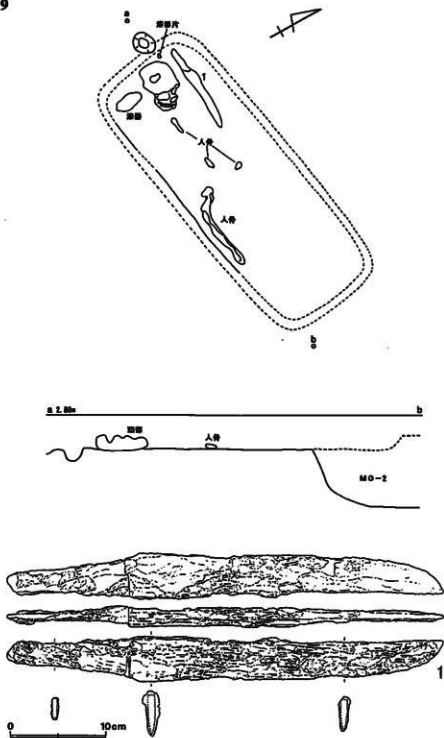
年代は副葬品等から統縄文時代の恵山期のものと思われる。

GP-3



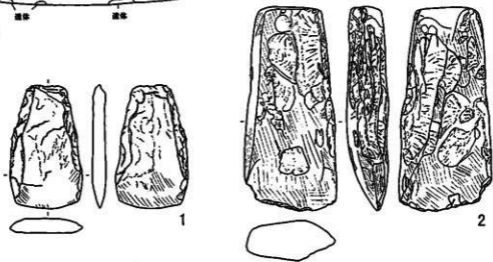
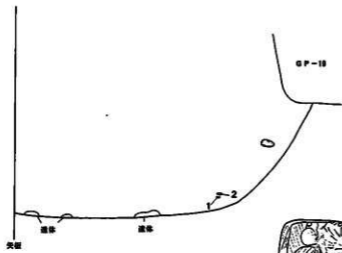
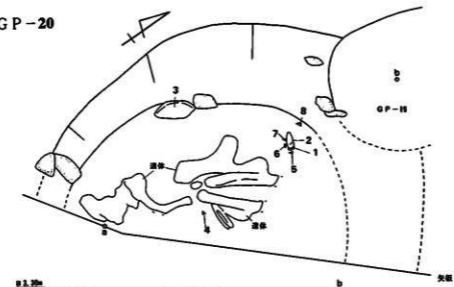
第17圖 GP-3 平面圖と出土遺物

GP-9



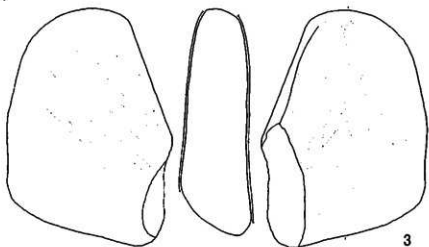
第18圖 GP-9 平面圖と出土遺物

GP-20

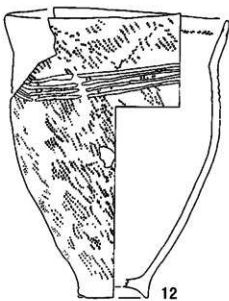
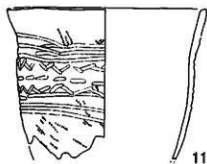
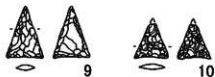


第19圖 GP-20 平面圖と出土遺物

GP-20

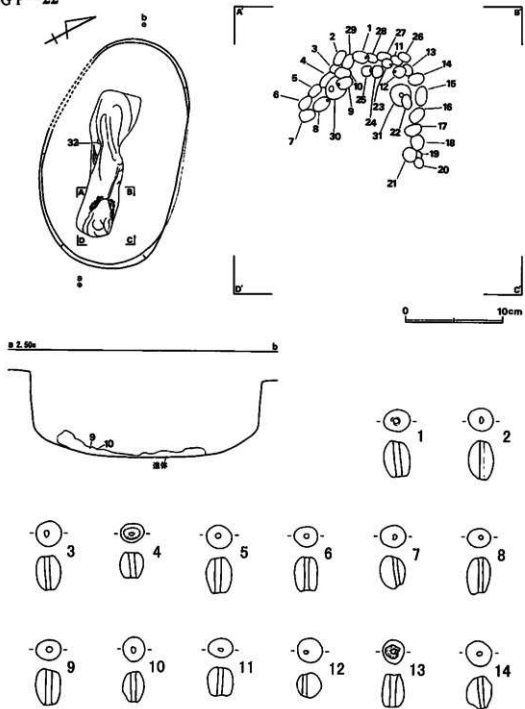


0 10cm



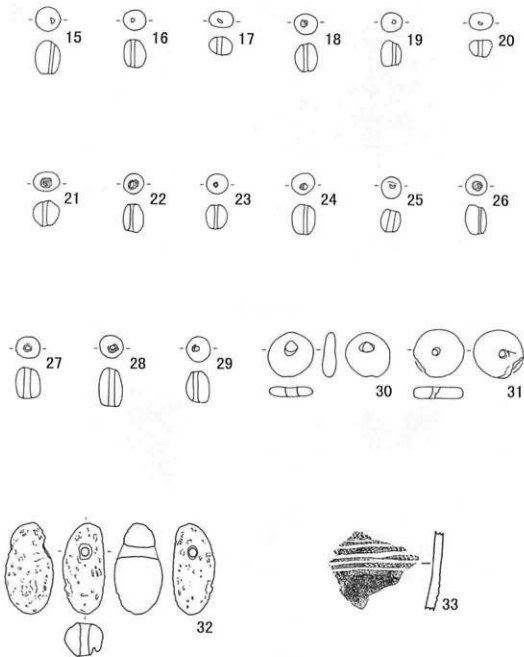
第20圖 GP-20 出土遺物

GP-22



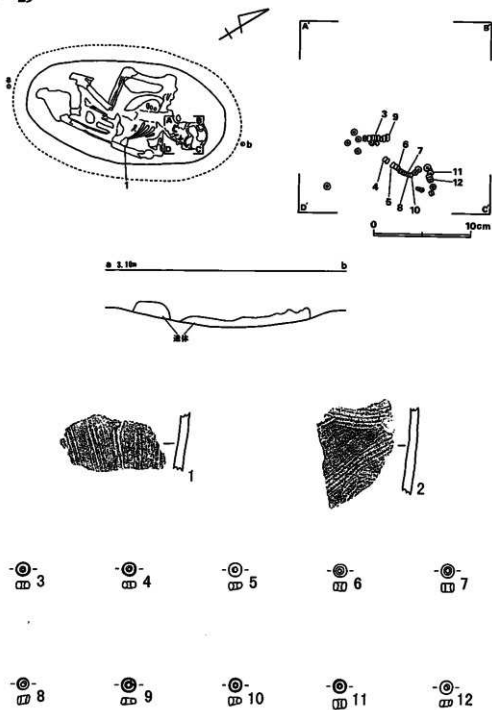
第21図 GP-22 平面図と出土遺物

GP-22



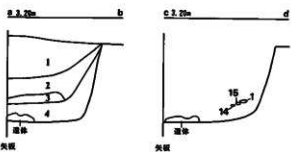
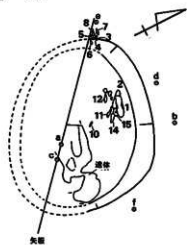
第22图 GP-22 出土遺物

GP-29

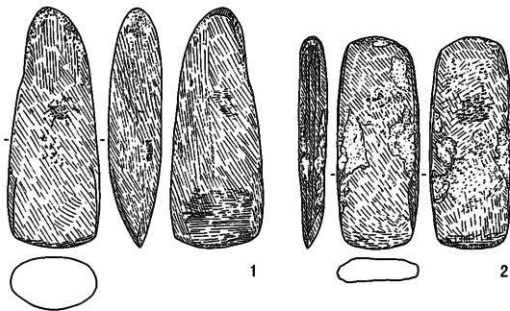
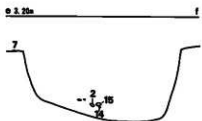


第23圖 GP-29 平面圖と出土遺物

GP-32

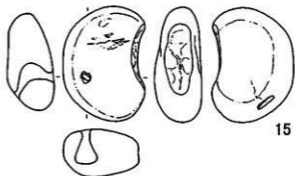
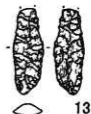
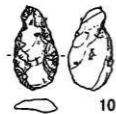


- 1 極暗褐色砂
- 2 黒褐色砂
- 3 極暗褐色砂 (ベンガラ混じり)
- 4 黒褐色砂 (ベンガラ混じり)



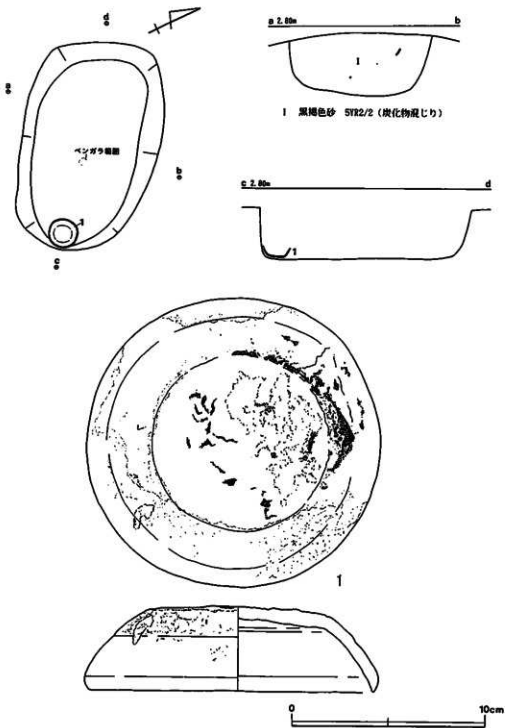
第24図 GP-32 平面図と出土遺物

GP-32



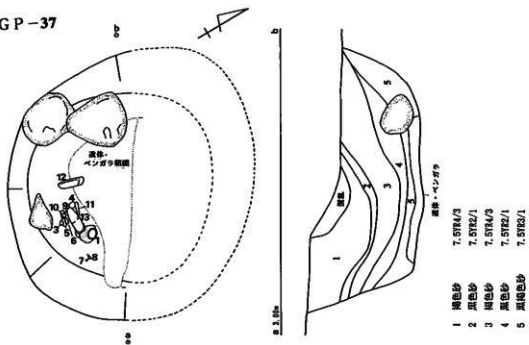
第25圖 GP-32 出土遺物

GP-34

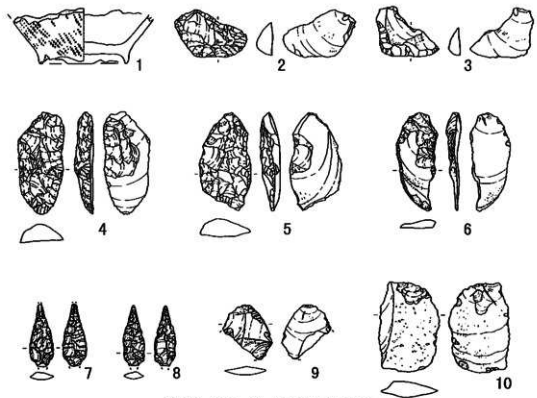


第26図 GP-34 平面図と出土遺物

GP-37

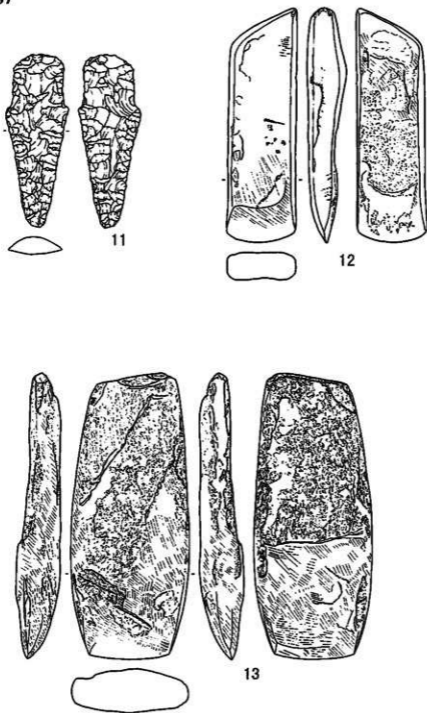


- | | | |
|---|------|----------|
| 1 | 褐色砂 | 7.5YR4/3 |
| 2 | 黒色砂 | 7.5YR2/1 |
| 3 | 褐色砂 | 7.5YR4/3 |
| 4 | 黒色砂 | 7.5YR2/1 |
| 5 | 黒褐色砂 | 7.5YR3/1 |



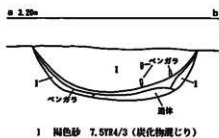
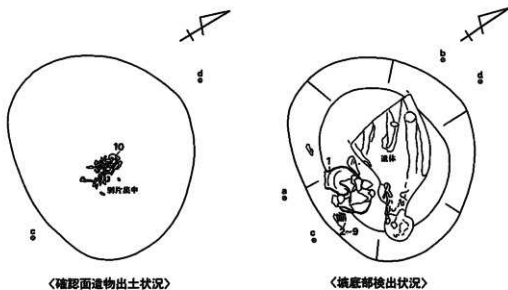
第27図 GP-37 平面図と出土遺物

GP-37



第28圖 GP-37 出土遺物

GP-42

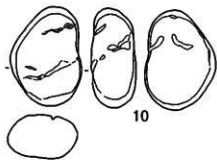
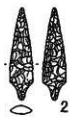
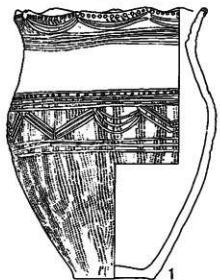
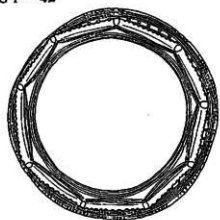


1 褐色砂 7.5TR4/3 (炭化物混じり)



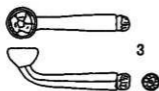
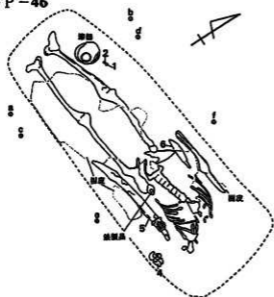
第29図 GP-42 平面図

GP-42



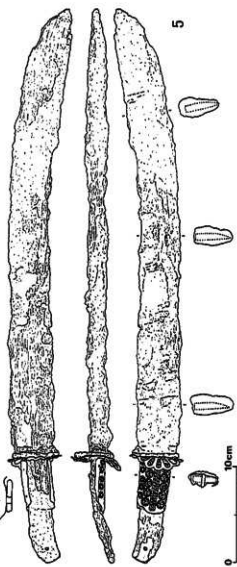
第30圖 GP-42 出土遺物

GP-46

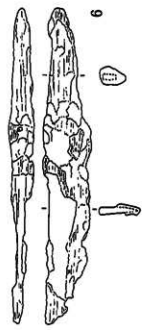


第31圖 GP-46 平面圖と出土遺物

GP-46



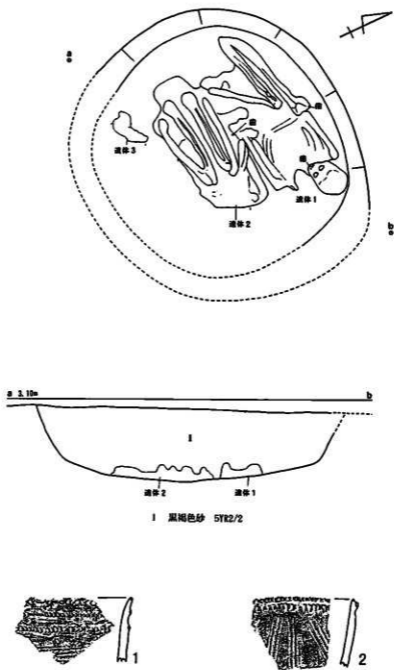
5



6

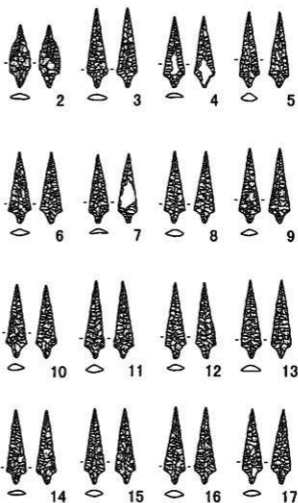
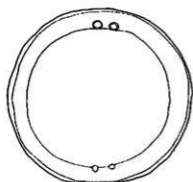
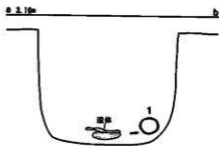
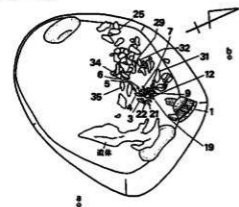
第32圖 GP-46 出土遺物

GP-62



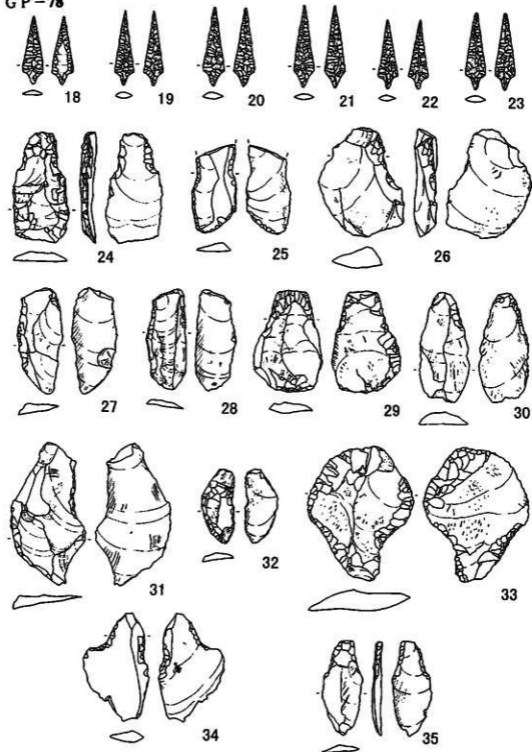
第33圖 GP-62 平面圖と出土遺物

GP-78



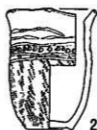
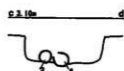
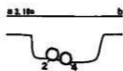
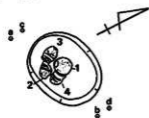
第34図 GP-78 平面図と出土遺物

GP-78



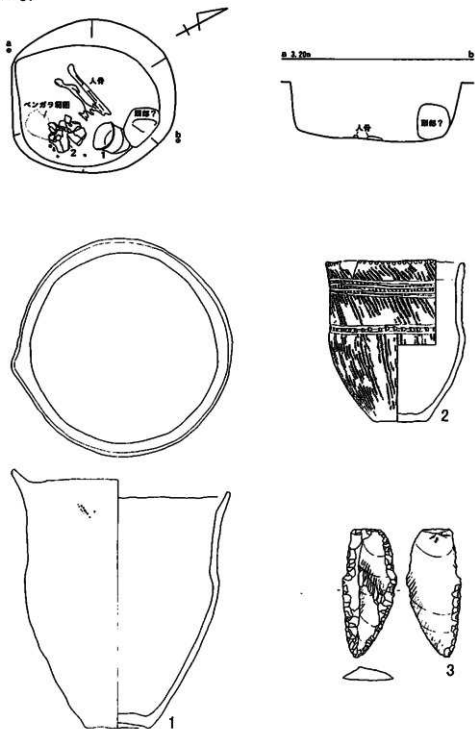
第35图 GP-78 出土遗物

GP-79



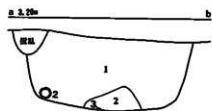
第36図 GP-79 平面図と出土遺物

GP-87

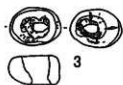
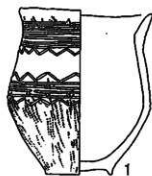


第37図 GP-87 平面図と出土遺物

GP-89

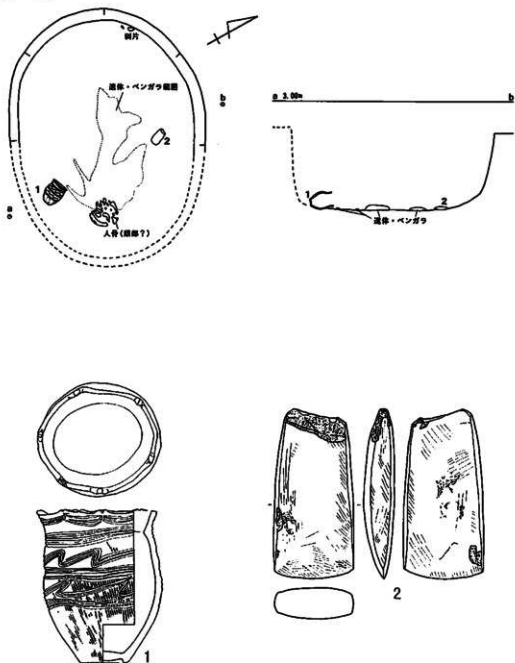


- 1 暗褐色砂 10YR3/3
2 極暗赤褐色砂 2.5YR2/2 (ベンガラ層)

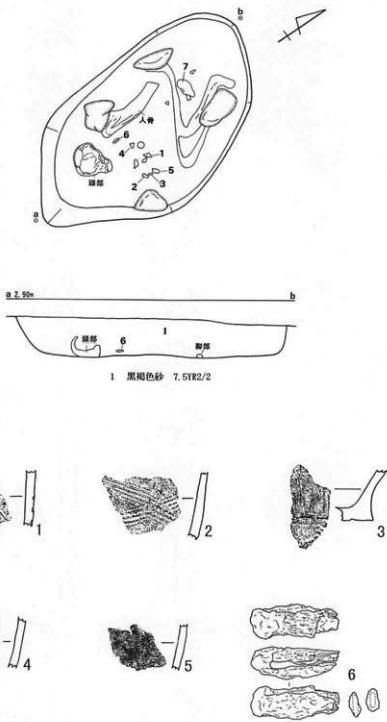


第38圖 GP-89 平面圖と出土遺物

GP-91

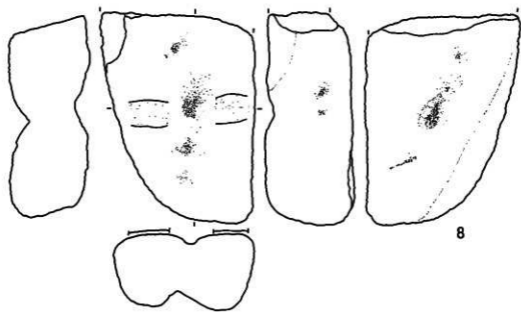
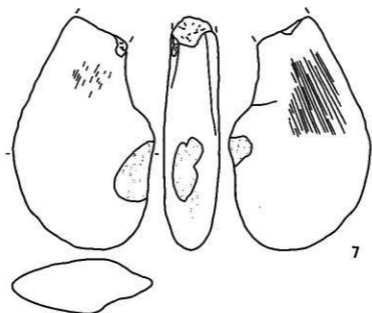


第39図 GP-91 平面図と出土遺物



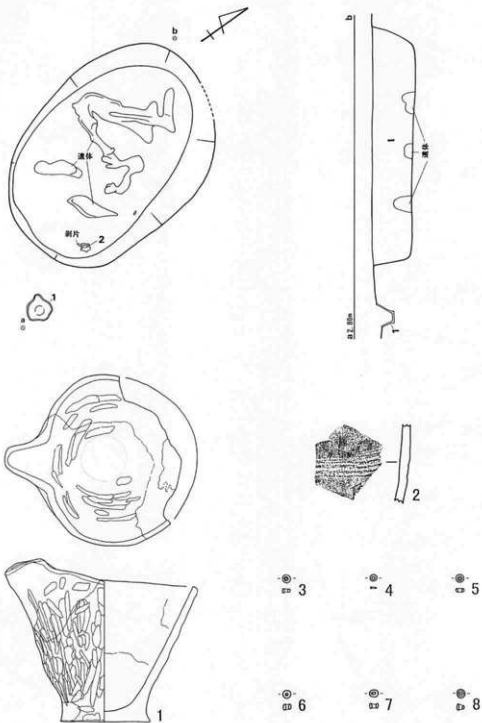
第40圖 GP-92 平面圖と出土遺物

GP-92



第41圖 GP-92 出土遺物

GP-99



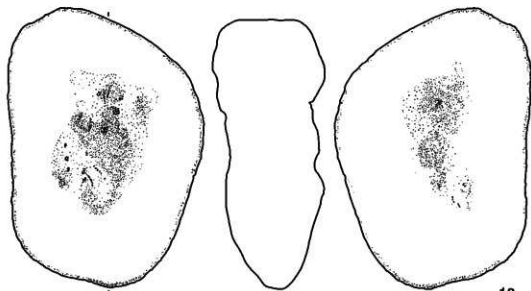
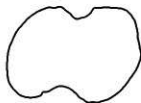
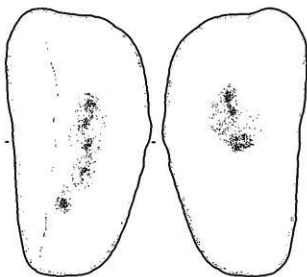
第42図 GP-99 平面図と出土遺物

GP-99

9 10 11

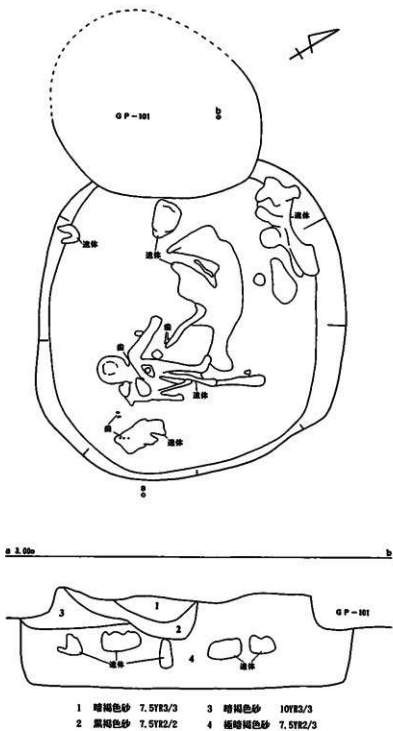
12 13 14

15 16 17

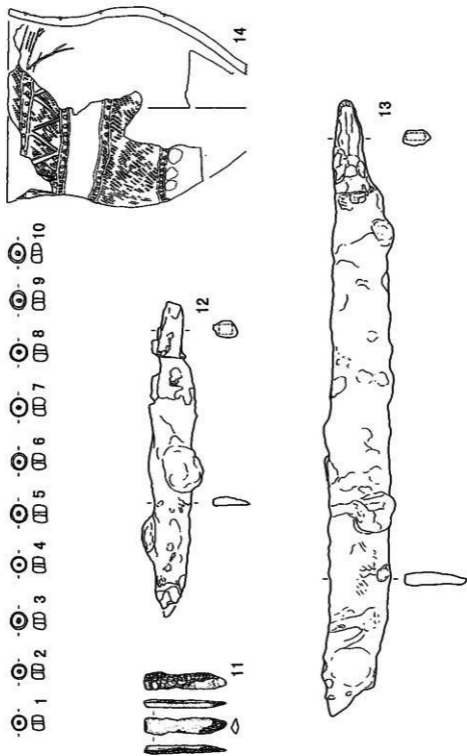


第43圖 GP-99 出土遺物

GP-102

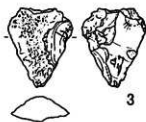
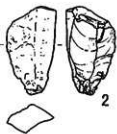
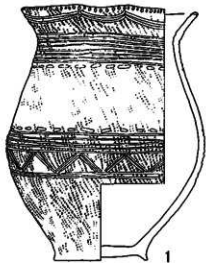
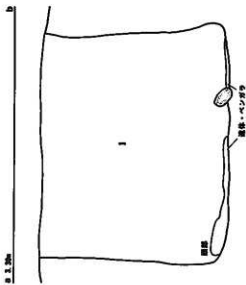
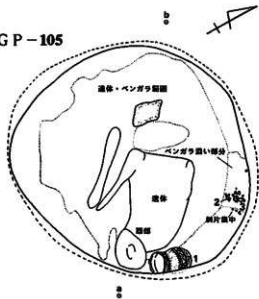


第44圖 GP-102 平面圖



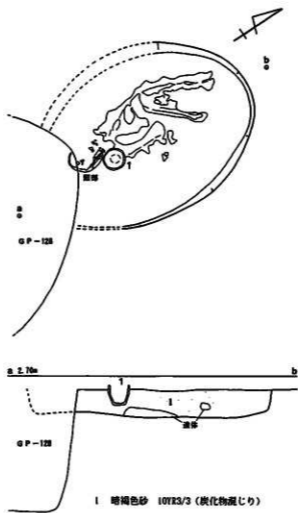
第45圖 GP-102 出土遺物

GP-105



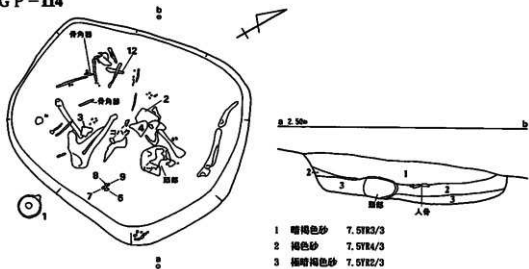
第46図 GP-105 平面図と出土遺物

GP-108

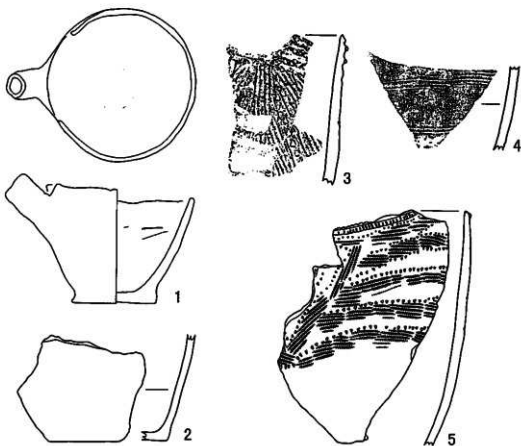


第47図 GP-108 平面図と出土遺物

GP-114

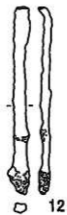
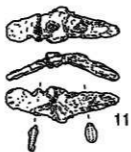
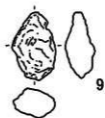


- 1 暗褐色砂 7.5YE3/3
 2 褐色砂 7.5YE4/3
 3 極暗褐色砂 7.5YE2/3



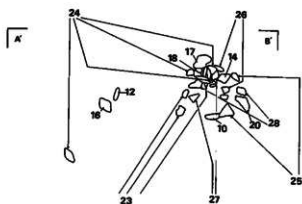
第48圖 GP-114 平面圖と出土遺物

GP-114

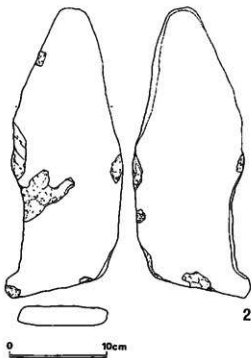


第49圖 GP-114 出土遺物

GP-117

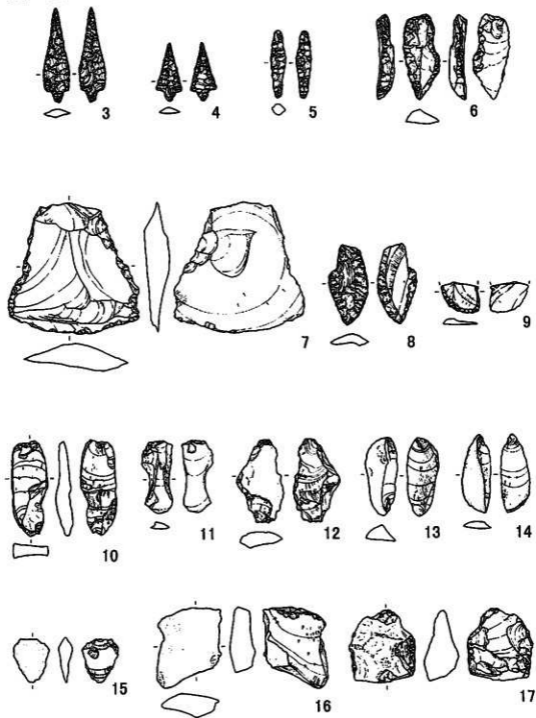


1 褐色砂 7.5YR4/3



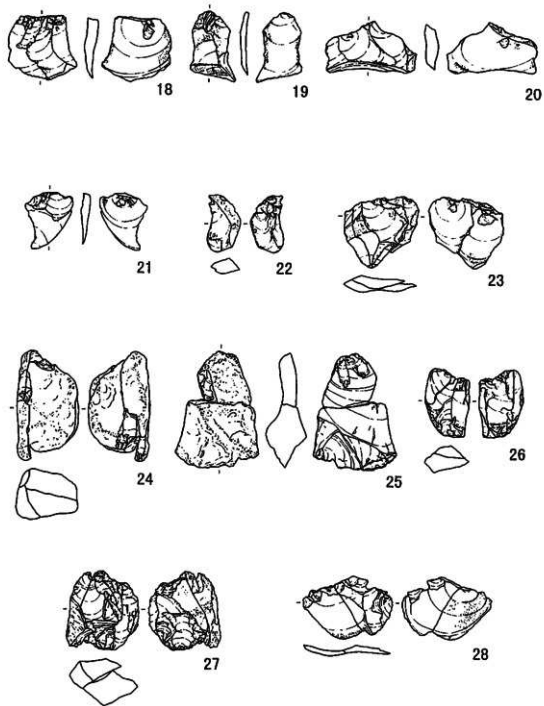
第50図 GP-117 平面図と出土遺物

GP-117



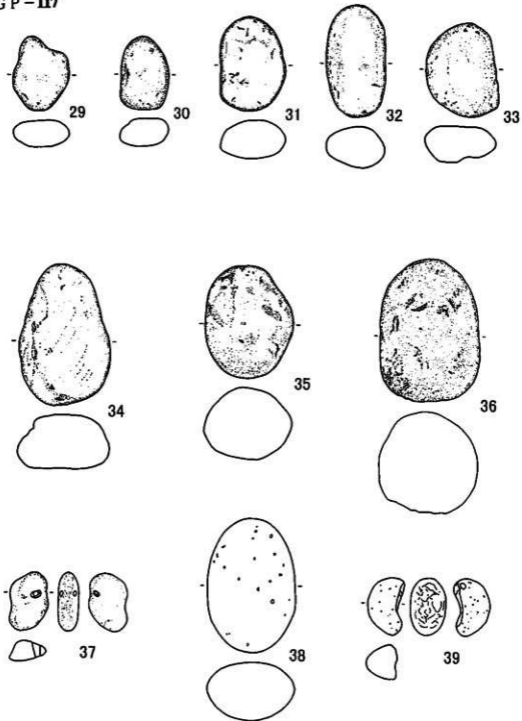
第51圖 GP-117 出土遺物

GP-117



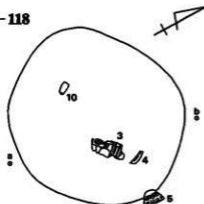
第52圖 GP-117 出土遺物

GP-117

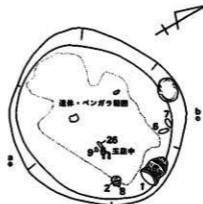


第53圖 GP-117 出土遺物

GP-118



〈確認面遺物出土状況〉

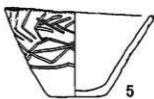
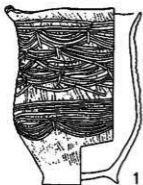
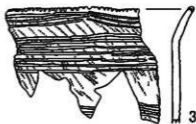
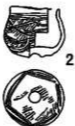
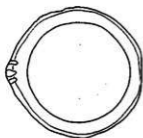


〈掘底部検出状況〉

φ 1.10m b

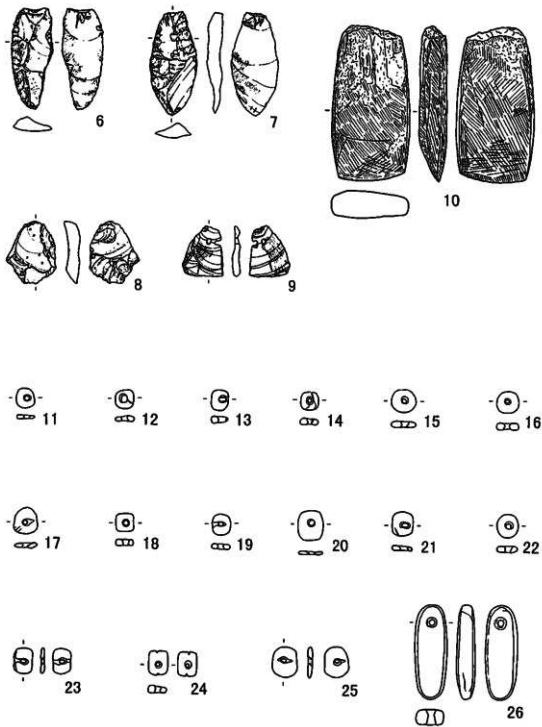


- 1 暗赤褐色砂 2. 5YR2/3
- 2 褐色砂 7. 5YR4/3
- 3 暗褐色砂 7. 5YR3/3



第54図 GP-118 平面図と出土遺物

GP-118



第55图 GP-118 出土遗物

GP-118



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



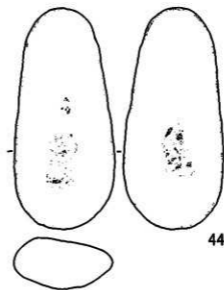
41



42



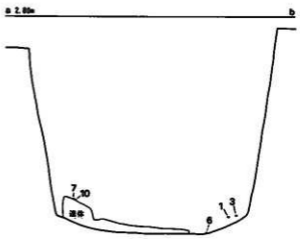
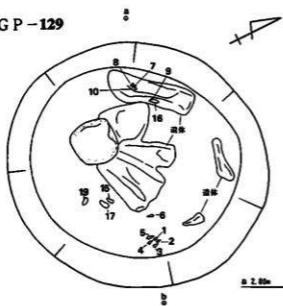
43



44

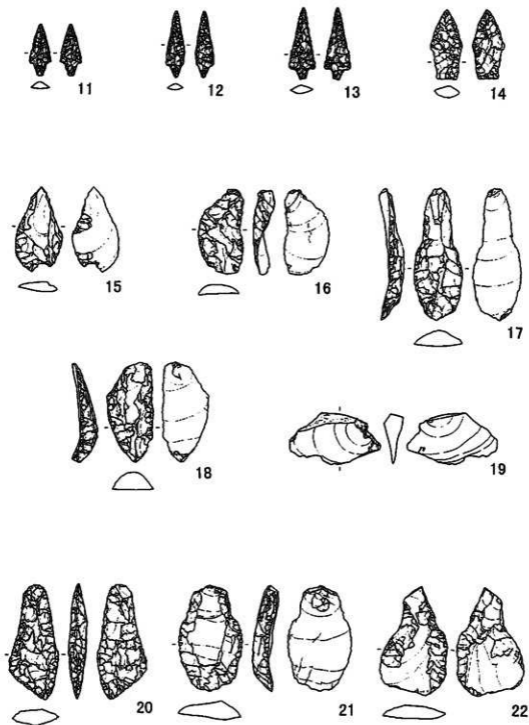
第56图 GP-118 出土遗物

GP-129



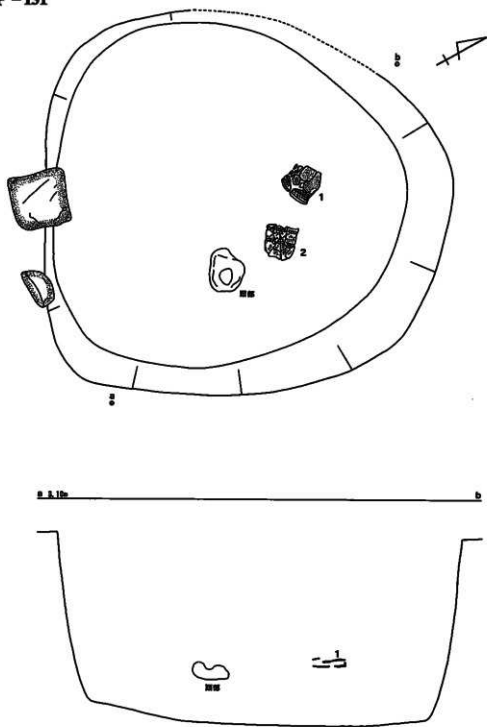
第57図 GP-129 平面図と出土遺物

GP-129



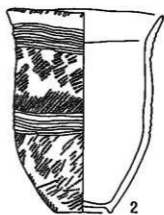
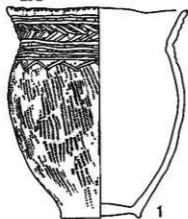
第58圖 GP-129 出土遺物

GP-131

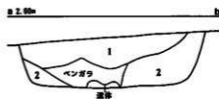
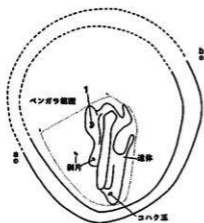


第59圖 GP-131 平面圖

GP-131



GP-126

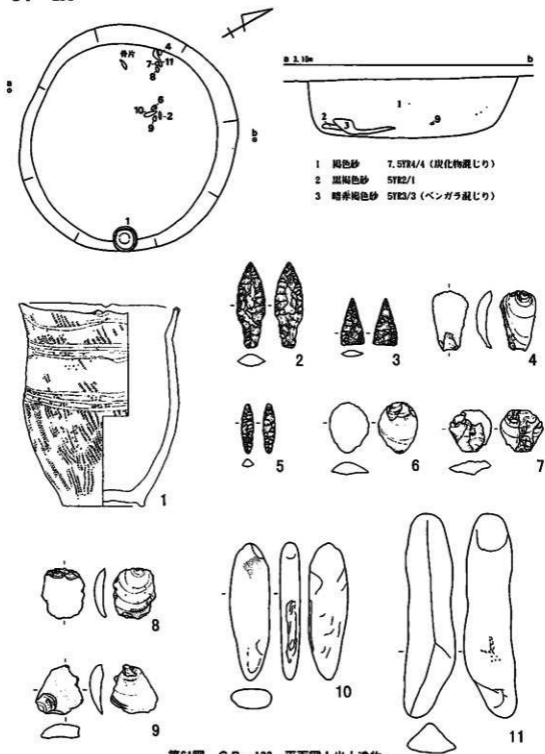


- 1 暗褐色砂 7.5YR3/3
2 極暗褐色砂 7.5YR2/3



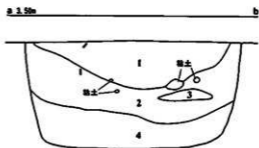
第60図 GP-126・131 平面図と出土遺物

GP-133

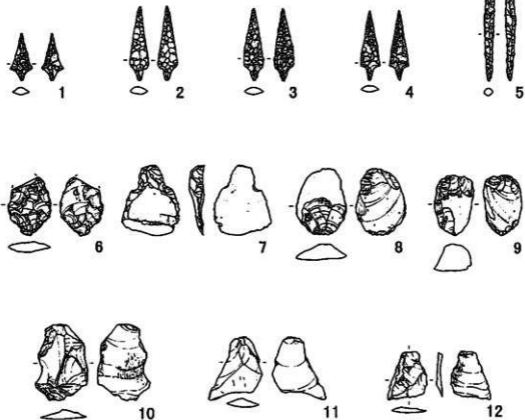


第61図 GP-133 平面図と出土遺物

GP-208

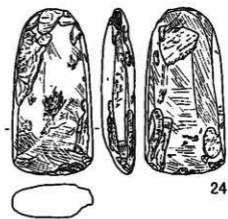
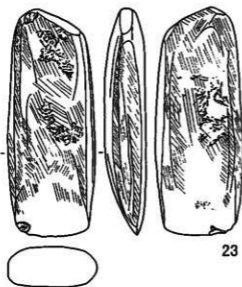


- 1 極暗褐色砂 5YR2/4 (ベンガラ・粘土少量混じり)
- 2 暗赤褐色砂 5YR3/3 (粘土・炭化物少量混じり)
- 3 暗褐色砂 7.5YR3/3
- 4 極暗褐色砂 7.5YR2/3 (ベンガラ混じり)



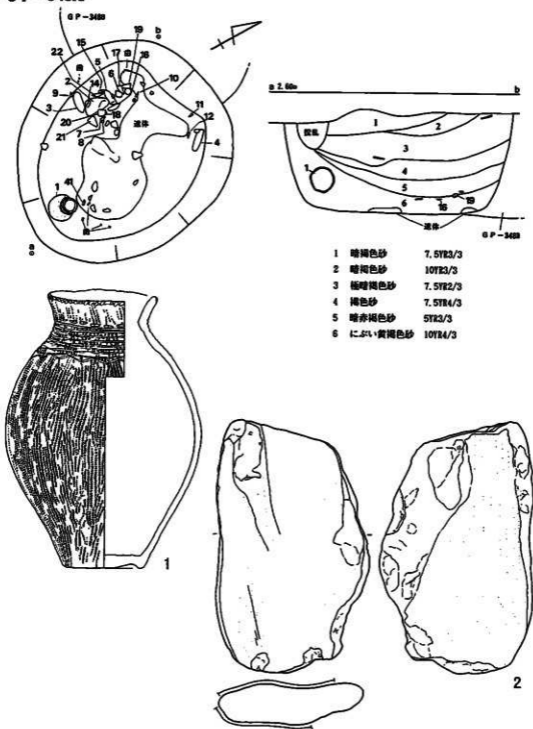
第62図 GP-208 平面図と出土遺物

GP-208



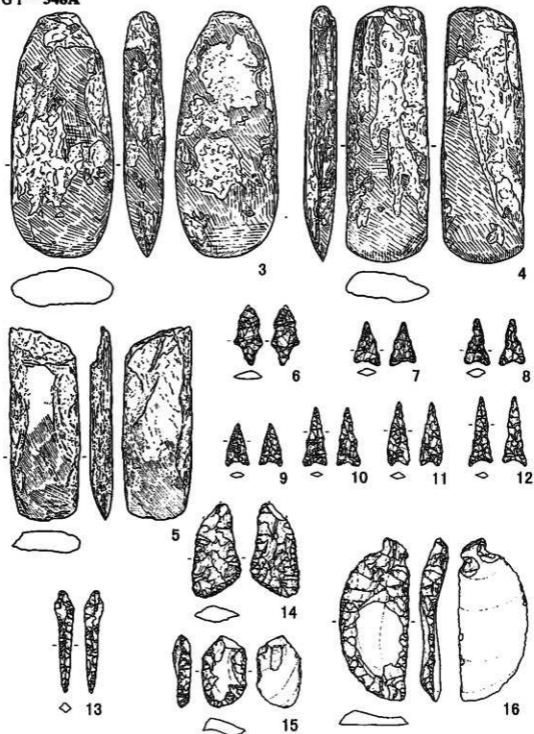
第63圖 GP-208 出土遺物

GP-348A



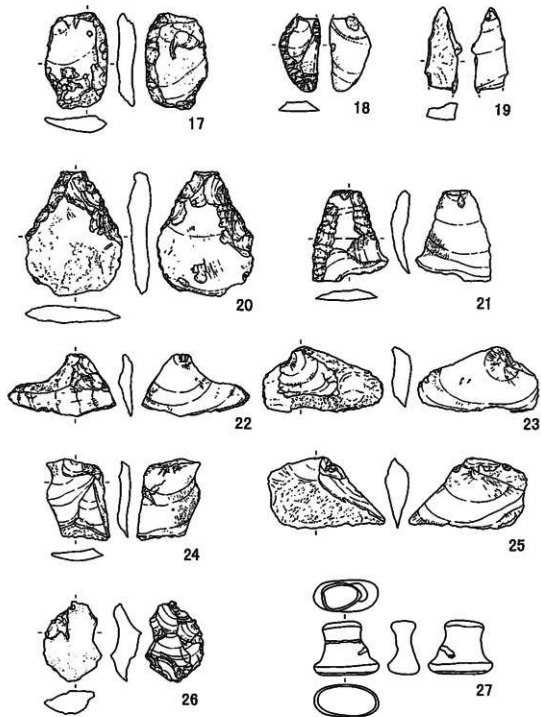
第64図 GP-348A 平面図と出土遺物

GP-348A



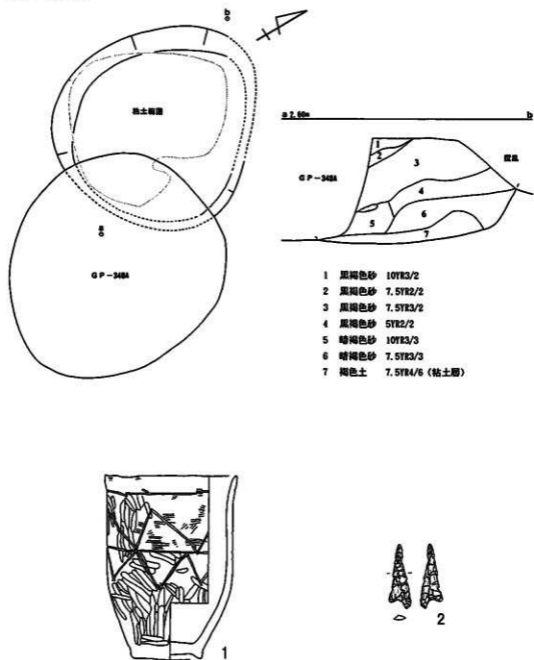
第65图 GP-348A 出土遗物

GP-348A



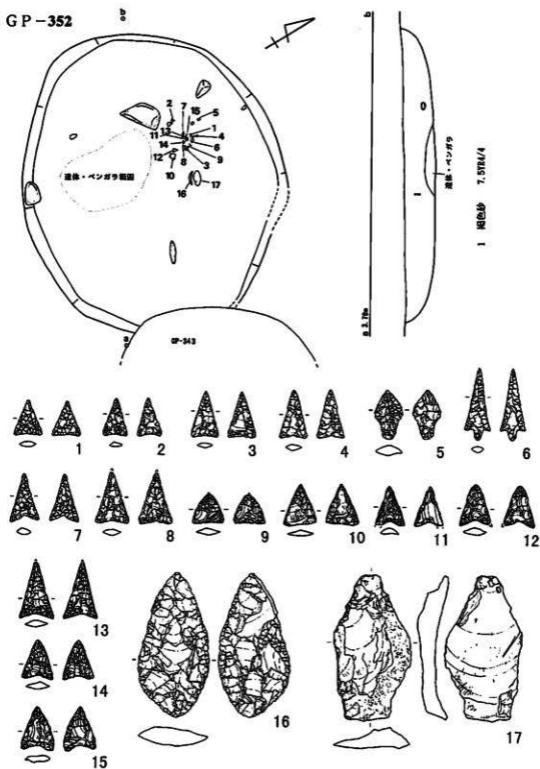
第66圖 GP-348A 出土遺物

GP-348B



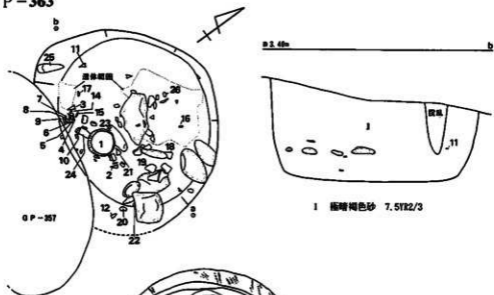
第67圖 GP-348B 平面圖と出土遺物

GP-352



第68図 GP-352 平面図と出土遺物

GP-363

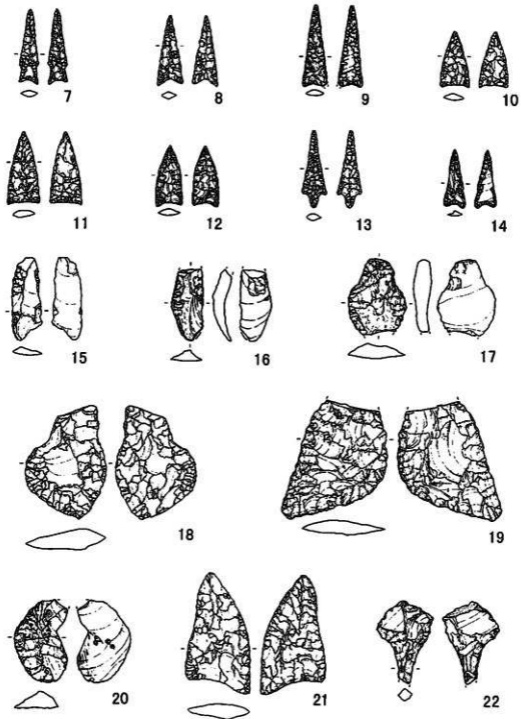


1 極暗褐色砂 7.5YR2/3



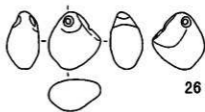
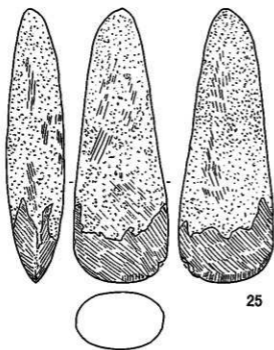
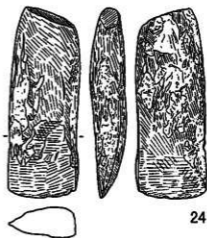
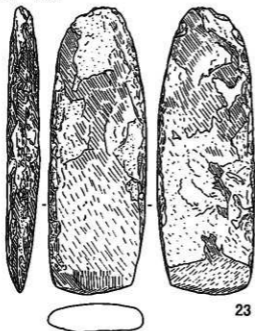
第69圖 GP-363 平面圖と出土遺物

GP-363



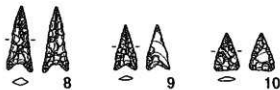
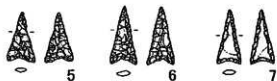
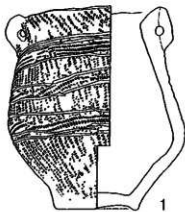
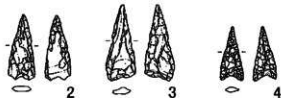
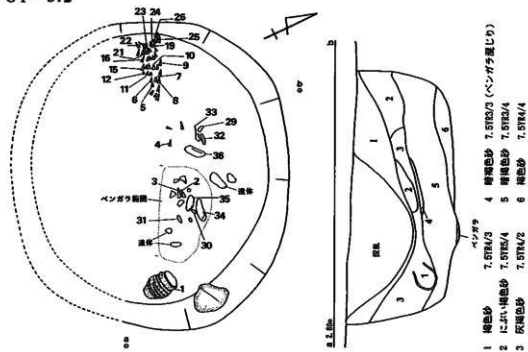
第70圖 GP-363 出土遺物

GP-363



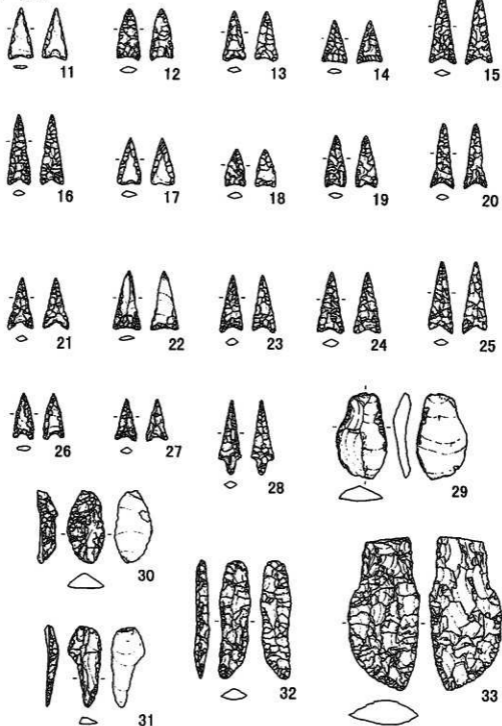
第71圖 GP-363 出土遺物

GP-372



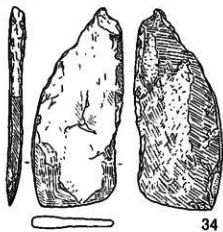
第72図 GP-372 平面図と出土遺物

GP-372

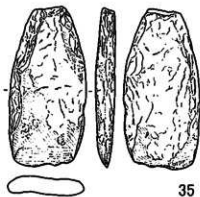


第73圖 GP-372 出土遺物

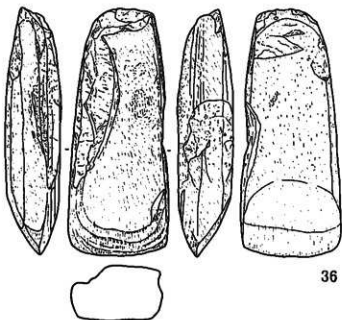
GP-372



34

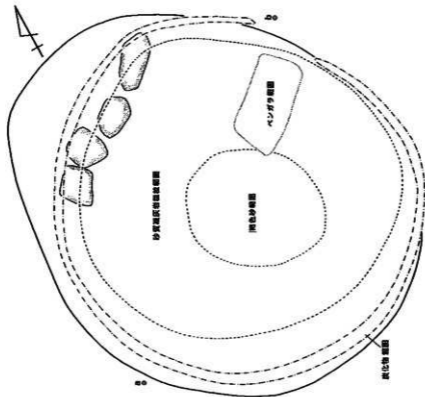


35

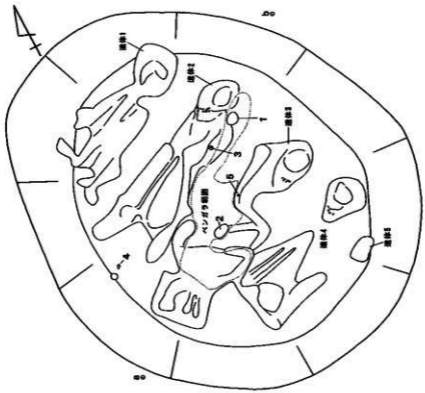


36

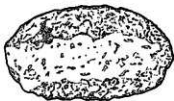
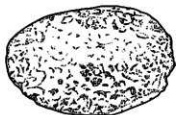
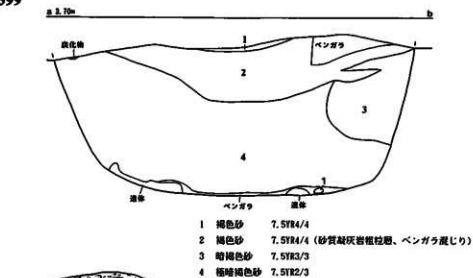
第74圖 GP-372 出土遺物



〈埋設面～埋土出土状況〉



〈埋設部出土状況〉



1



2



3



4



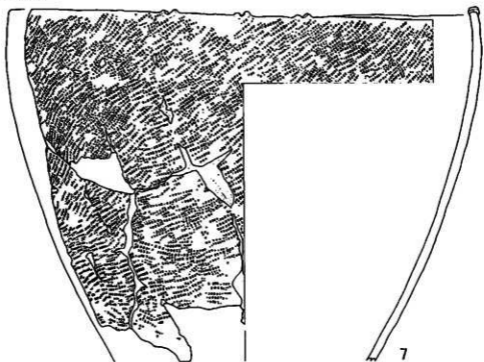
5



6

第76図 GP-399 断面図と出土遺物

GP-399



7



9



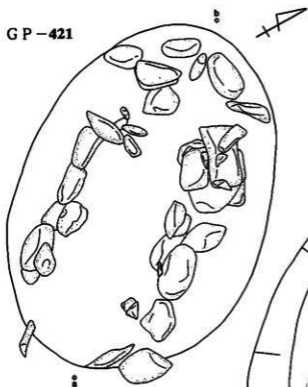
8



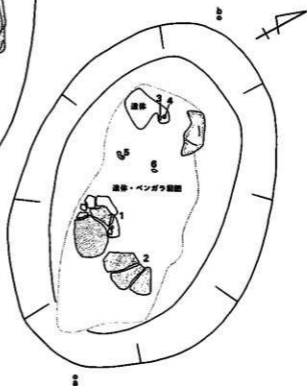
10

第77圖 GP-399 出土遺物

GP-421



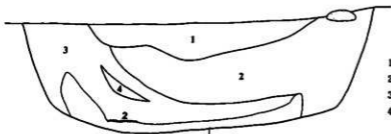
〈確認面～埋土掘出土状況〉



〈城底部掘出状況〉

0 1.00m

b

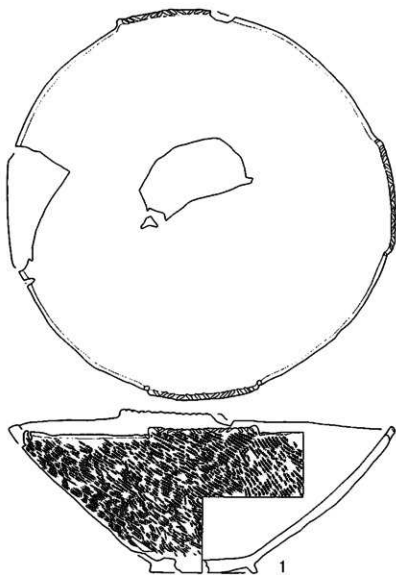


遺構・ベンガラ

- 1 暗褐色砂 7.5YR3/3
- 2 黒褐色砂 7.5YR3/2
- 3 褐色砂 7.5YR4/4
- 4 暗褐色砂 7.5YR3/4

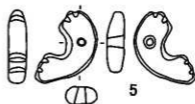
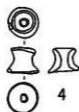
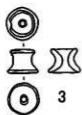
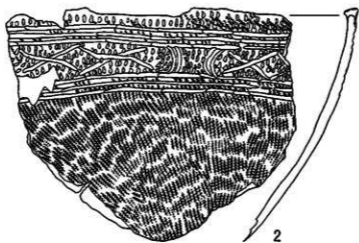
第78図 GP-421 平面図

GP-421



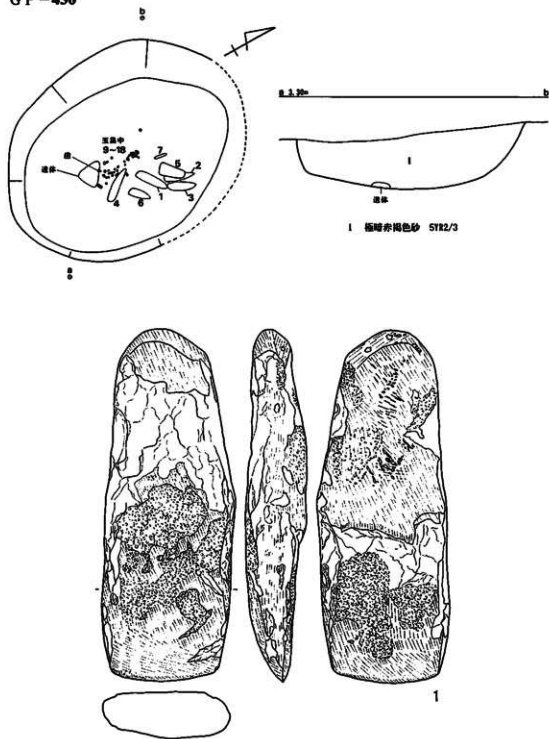
第79圖 GP-421 出土遺物

GP-421



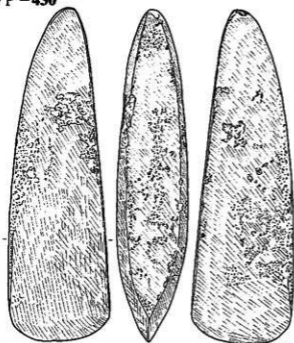
第80圖 GP-421 出土遺物

GP-430

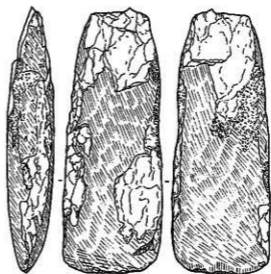


第81圖 GP-430 平面圖と出土遺物

GP-430



2

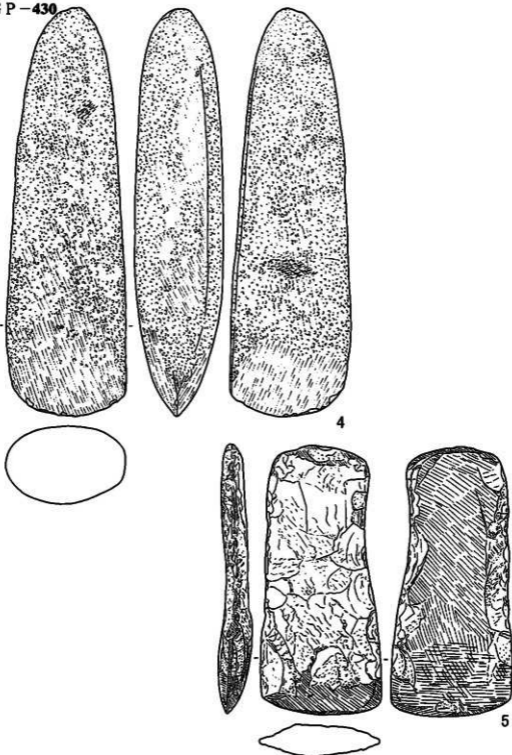


3



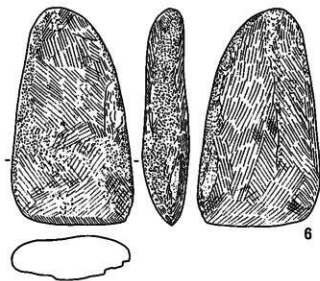
第82図 GP-430 出土遺物

GP-430



第83圖 GP-430 出土遺物

GP-430



9

10

11

12

13

14

15

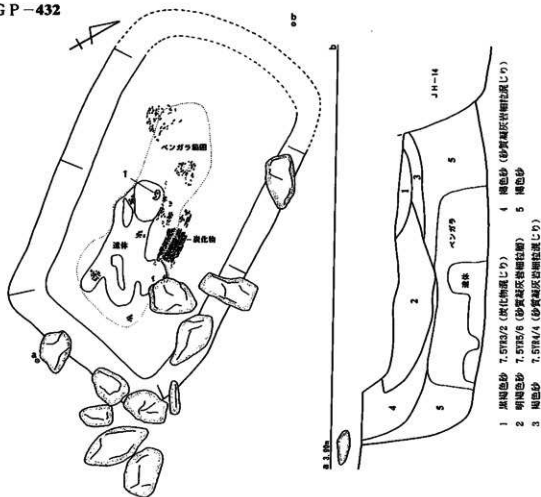
16

17

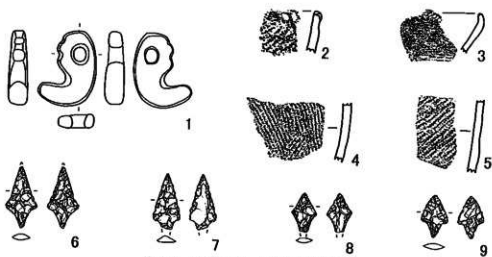
18

第84圖 GP-430 出土遺物

GP-432

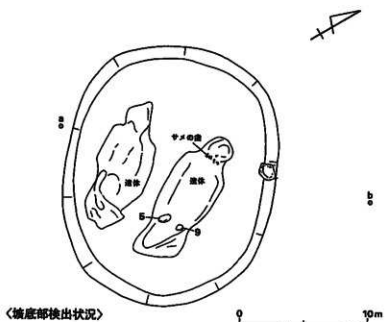
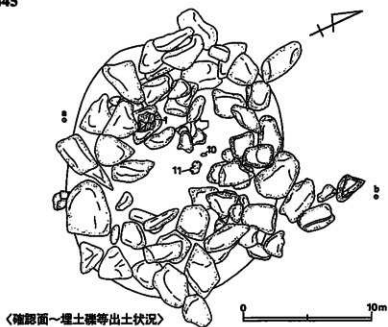


- 1 黒褐色砂 7.5TB3/2 (炭化物混じり)
- 2 明褐色砂 7.5TB5/6 (砂質凝灰岩層拉じり)
- 3 褐色砂 7.5TB4/4 (砂質凝灰岩層拉じり)
- 4 褐色砂 (砂質凝灰岩層拉じり)
- 5 褐色砂



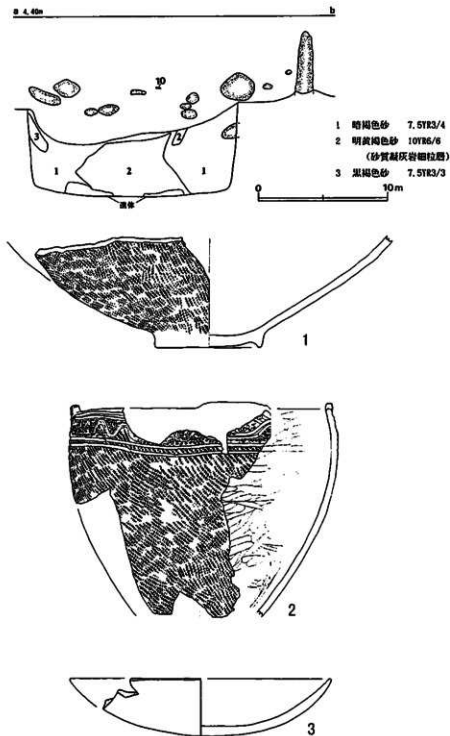
第85図 GP-432 平面図と出土遺物

GP-445



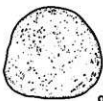
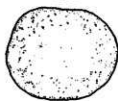
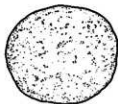
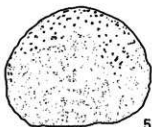
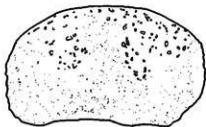
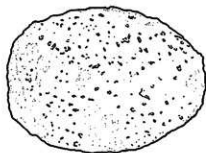
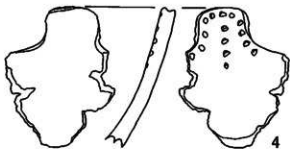
第86図 GP-445 平面図

GP-445



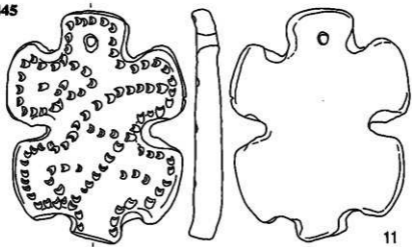
第67図 GP-445 断面図と出土遺物

GP-445

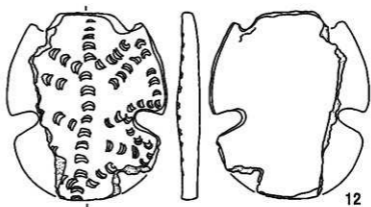


第88图 GP-445 出土遗物

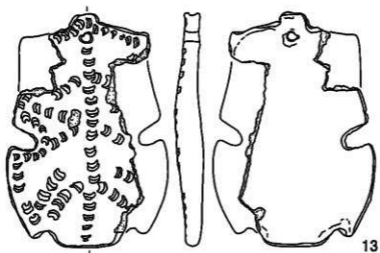
GP-445



11

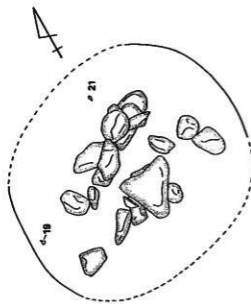


12

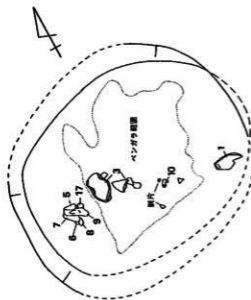


13

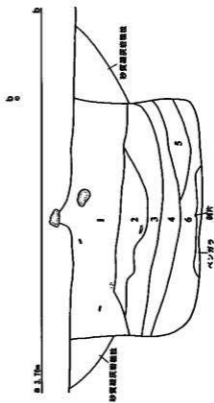
第89圖 GP-445 出土遺物



〈横断面～埋土層等出土状況〉



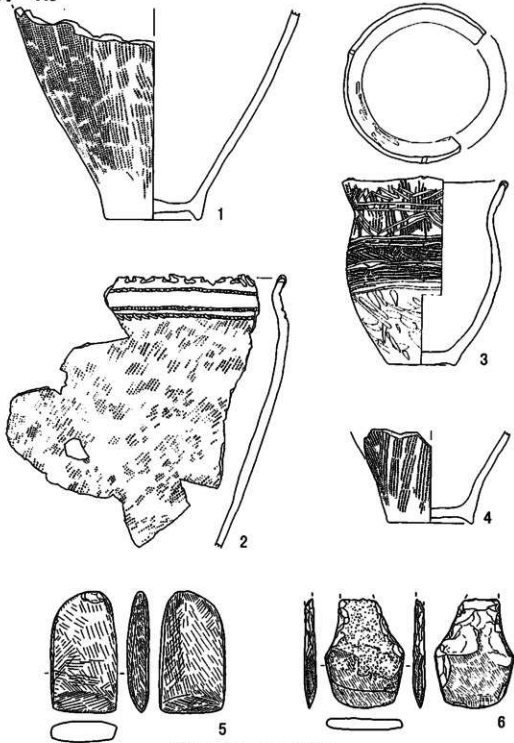
〈横断面出土状況〉



- 1 暗褐色砂 7.5YE3/4 (炭化物混じり)
- 2 褐色砂 7.5YR4/4
- 3 極暗褐色砂 (ベングラ風じり) 7.5YE2/3
- 4 暗褐色砂 7.5YE3/3
- 5 褐色砂 7.5YR4/3
- 6 極暗褐色砂 (ベングラ風じり) 5YE2/3

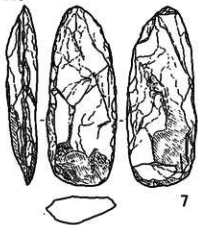
第90図 GP-448 平面図

GP-448

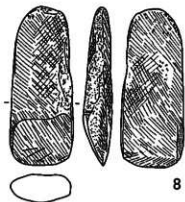


第91图 GP-448 出土遗物

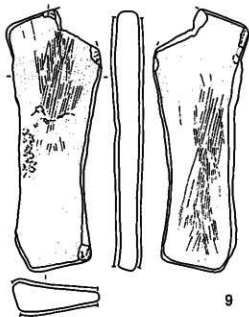
GP-448



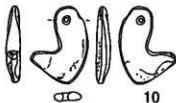
7



8



9



10



11

12

13

14

15

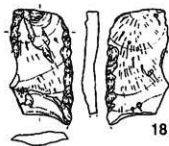
16

第92圖 GP-448 出土遺物

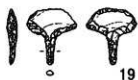
GP-448



17



18



19



20



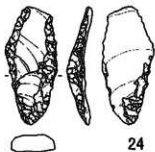
21



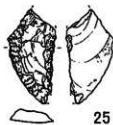
22



23



24

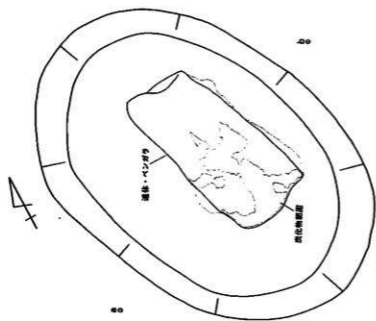


25

第93图 GP-448 出土遗物

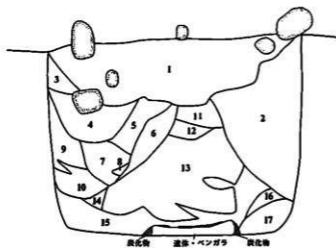


〈雑器面～埋土層等出土状況〉



〈雑器面堆出状況〉

第94図 GP-449 平面図

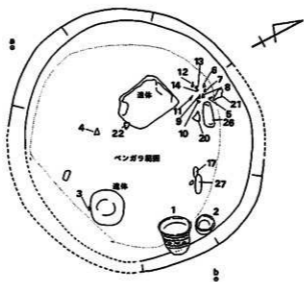


- | | | |
|----|--------|---------------------|
| 1 | 橙色土 | 7.5YR6/6 (砂質凝灰岩細粒層) |
| 2 | 褐色砂 | 7.5YR4/4 |
| 3 | 黒褐色砂 | 7.5YR3/3 |
| 4 | 明褐色砂 | 7.5YR5/6 |
| 5 | 褐色砂 | 7.5YR4/3 |
| 6 | 黒褐色砂 | 7.5YR3/2 |
| 7 | 黒褐色砂 | 7.5YR3/1 |
| 8 | にぶい褐色砂 | 7.5YR5/4 |
| 9 | 褐色砂 | 7.5YR4/4 |
| 10 | にぶい褐色砂 | 7.5YR5/4 |
| 11 | 褐色砂 | 7.5YR4/3 |
| 12 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |
| 13 | にぶい褐色砂 | 7.5YR5/4 |
| 14 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |
| 15 | 橙色土 | 7.5YR6/6 (砂質凝灰岩細粒層) |
| 16 | 黒褐色砂 | 7.5YR2/1 |
| 17 | にぶい褐色砂 | 7.5YR5/4 |

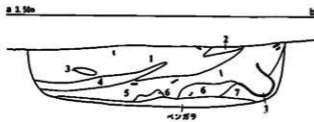


第95図 GP-449 断面図と出土遺物

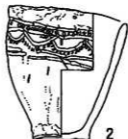
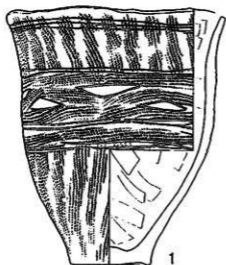
GP-454



0 2.5m

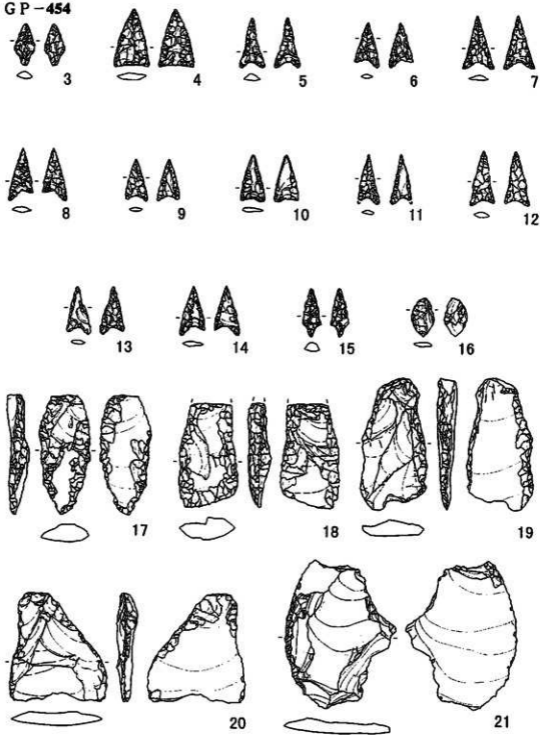


- | | | |
|---|-------|-------------------|
| 1 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 (炭化物混じり) |
| 2 | 褐色砂 | 7.5YR4/3 |
| 3 | 褐色砂 | 7.5YR4/4 |
| 4 | 褐色砂 | 7.5YR4/4 |
| 5 | 極暗褐色砂 | 7.5YR2/3 (炭化物混じり) |
| 6 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/4 |
| 7 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |



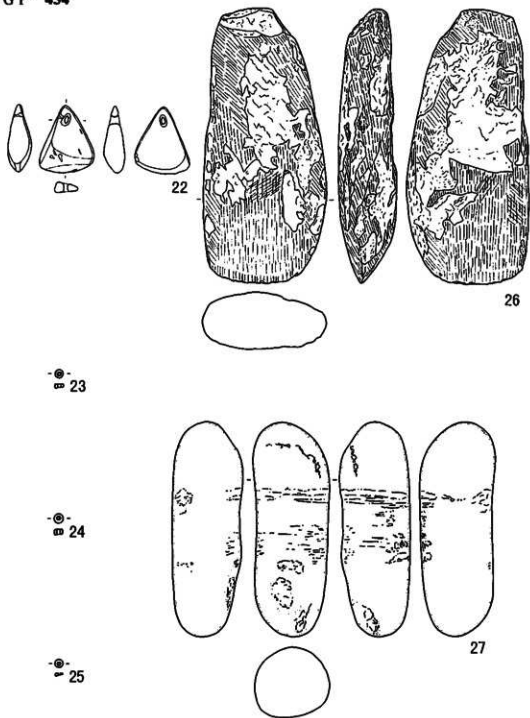
第96図 GP-454 平面図と出土遺物

GP-454

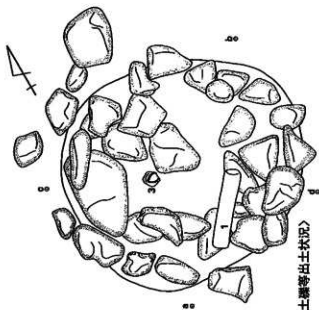


第97圖 GP-454 出土遺物

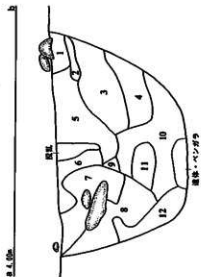
GP-454



第98图 GP-454 出土遗物

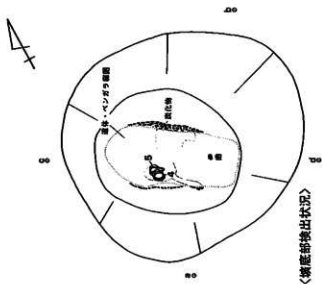


〈確認面～埋土層等出土状況〉

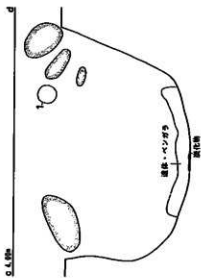


- 1 赤褐色砂 7.5181/3 (ベンガラ層じり)
- 2 褐色砂 7.5181/3
- 3 黒褐色砂 7.5181/2
- 4 明褐色砂 7.5185/3
- 5 褐色土 7.5185/3 (砂質粘土層部位)
- 6 褐色砂 7.5181/3
- 7 褐色土 7.5185/3 (砂質粘土層部位)
- 8 褐色砂 7.5181/4
- 9 褐色砂 7.5181/3
- 10 褐色砂 7.5181/3
- 11 褐色土 7.5185/3 (砂質粘土層部位)
- 12 明褐色砂 7.5185/3

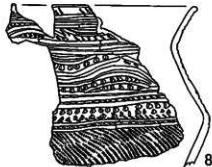
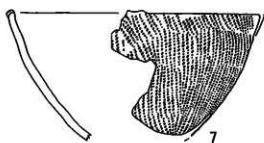
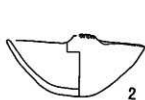
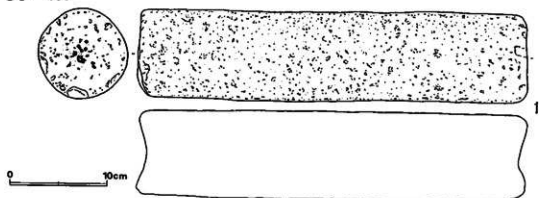
第99図 GP-460 平面図



〈埋土層出土状況〉

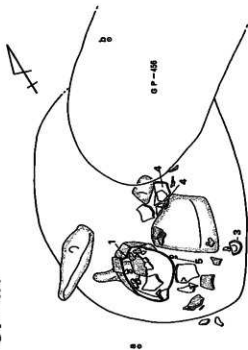


GP-460

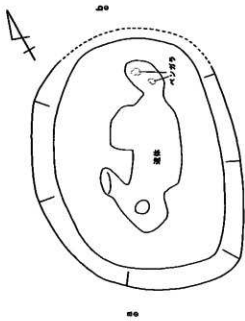


第100圖 GP-460 出土遺物

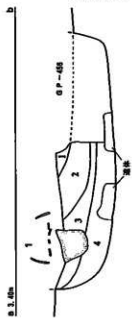
GP-474



〈確認面～埋土遺物等出土状況〉



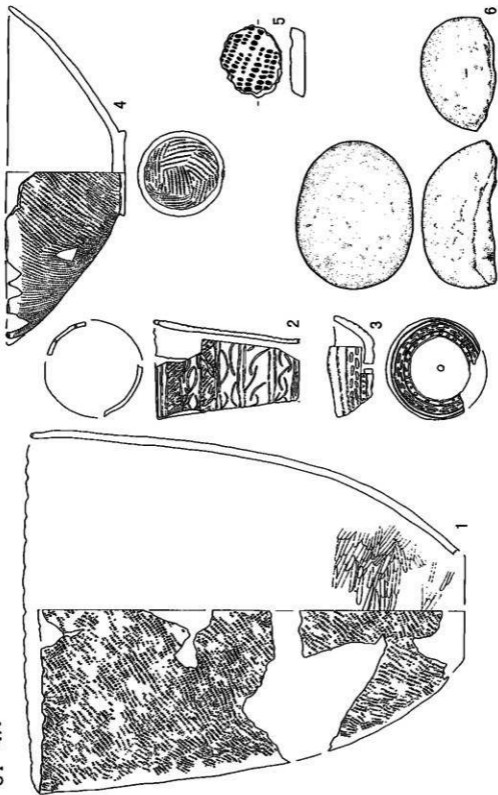
〈竊底部抜出状況〉



- 1 褐色砂 7.5TR4/4
- 2 褐色土 7.5TR7/6 (砂質凝灰岩層拉掘)
- 3 暗褐色砂 7.5TR5/3
- 4 褐色砂 7.5TR4/3 (砂質凝灰岩層拉掘じり)

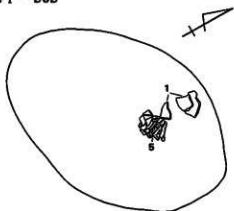
第101図 GP-474 平面図

GP-474

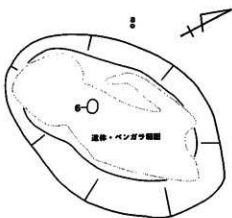


第102圖 GP-474 出土遺物

GP-505

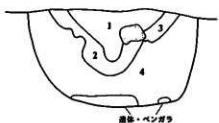


〈確認面遺物出土状況〉

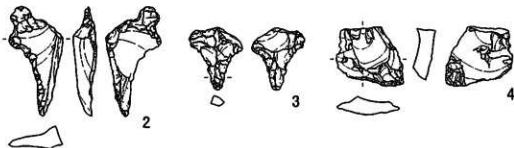


〈坑底部検出状況〉

0 1 50m b



- 1 黒褐色砂 7.5YR3/2 (炭化物混じり)
- 2 褐色砂 7.5YR4/4 (砂質凝灰岩細粒層)
- 3 暗褐色砂 7.5YR3/4
- 4 褐色砂 7.5YR4/3



第103図 GP-505 平面図と出土遺物

GP-505

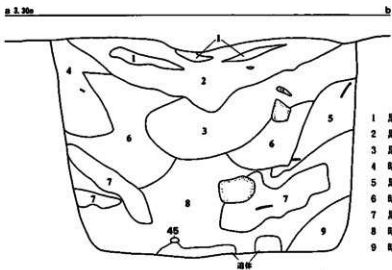
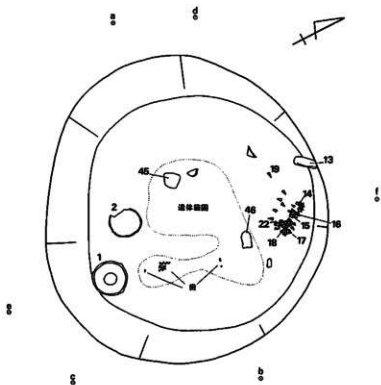


5



6

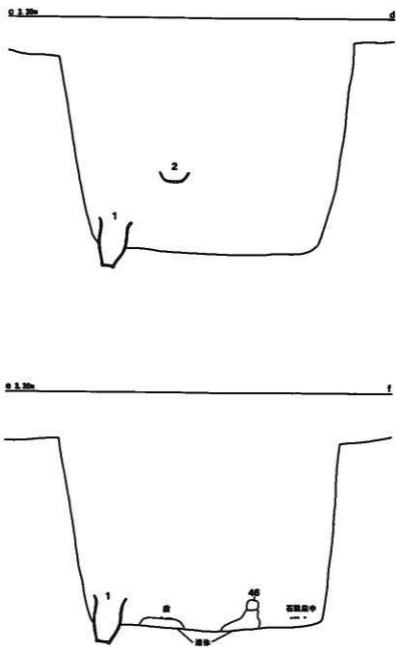
第104圖 GP-505 出土遺物



- | | | |
|---|------|----------|
| 1 | 黑褐色砂 | 7.5YR3/2 |
| 2 | 黑色砂 | 7.5YR2/1 |
| 3 | 黑褐色砂 | 10YR2/3 |
| 4 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/4 |
| 5 | 黑褐色砂 | 7.5YR2/2 |
| 6 | 暗褐色砂 | 10YR4/3 |
| 7 | 黑褐色砂 | 10YR2/3 |
| 8 | 暗褐色砂 | 10YR3/4 |
| 9 | 暗褐色砂 | 10YR3/3 |

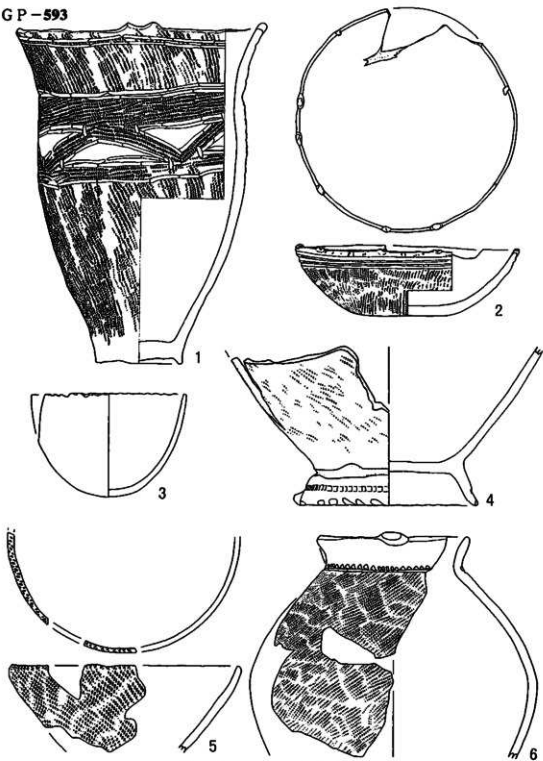
第105图 GP-593 平面图

GP-593



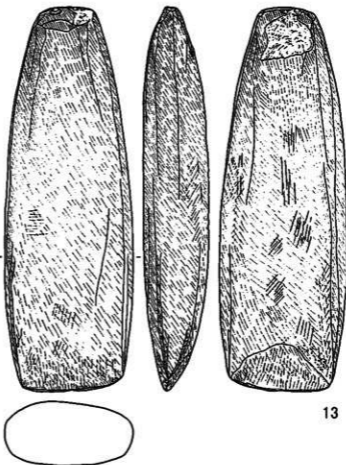
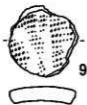
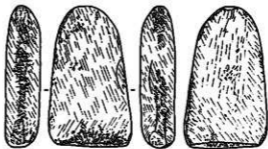
第106图 GP-593 断面图

GP-593



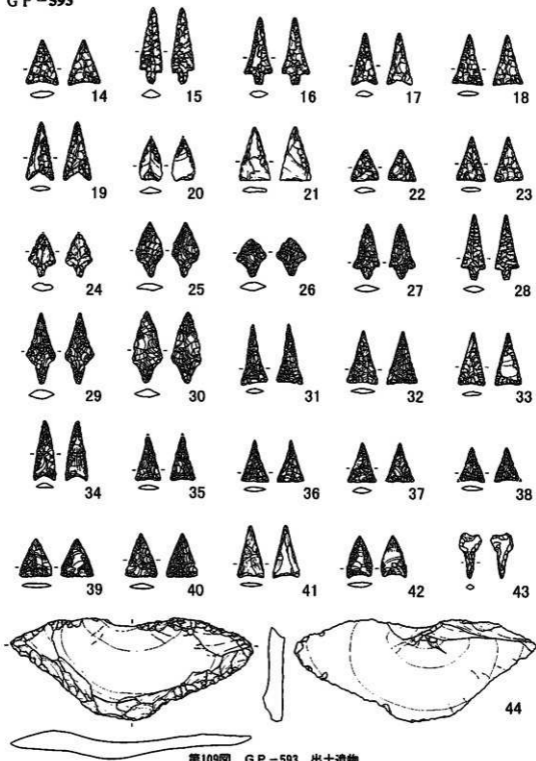
第107图 GP-593 出土遗物

GP-593

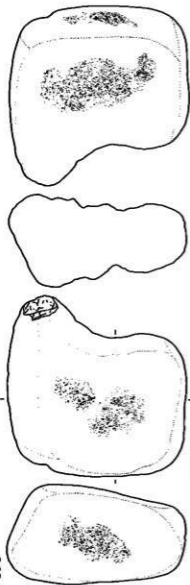


第108圖 GP-593 出土遺物

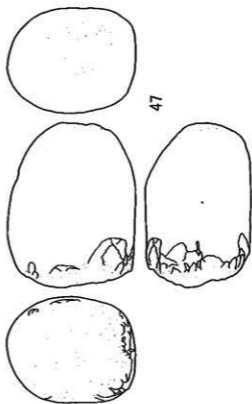
GP-593



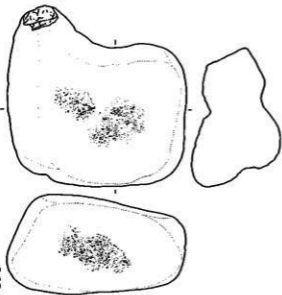
G P - 593



45



47



46

第110圖 G P - 593 出土遺物

(2) 区画墓?

本遺跡では特異な遺構であり、SX-1・2は環状周溝、SY-1は竪穴状を呈している。それぞれ数多くの墓壙と重複しているが、規則性はあまり見られず、区画墓かどうかは判然としない。

SX-1 (第111~119図)

1992・1994両年度にわたり検出された。M44~46、N44~46、O44~46グリッドにまたがり位置する。中央部上面をSH-24により削平されており、東西方向にMO-10によって切られている。計20基の縄文晩期と思われる墓壙と重複している。全体径11.6×11.0m程で、幅1.30~3.20mの溝が巡る環状周溝であり、最深部の深さは約91cmを測る。覆土中には部分的に焼土や炭化物、粘土が確認された。攪乱により部分的に切られているが、ほぼ円状に巡るようである。溝中より縄文晩期の土器、剣片等が大量に出土しており、内部および周辺の墓壙と関連している可能性があるが、区画墓かどうかは不明である。

年代については縄文時代晩期前半から後半のものと思われるが判然としない。

SX-2 (第120・121図)

Q47~49、R47~49グリッドにまたがり位置する。南東側を矢板で切られているために全体の1/2~1/3程度しか調査されていないと推定される。確認面が低く、墳底部直上での検出であり、一部を攪乱により切られている。現状で全体径9.0m程で、幅0.74~1.20mの溝が巡る環状周溝であり、最深部の深さは約44cmを測る。計6基の縄文晩期と思われる墓壙と重複している。覆土中には部分的に焼土や炭化物、砂質凝灰岩細粒が混在している。また、覆土中より縄文晩期の土器片・土製品等が出土している。性格等の詳細は不明である。

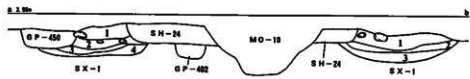
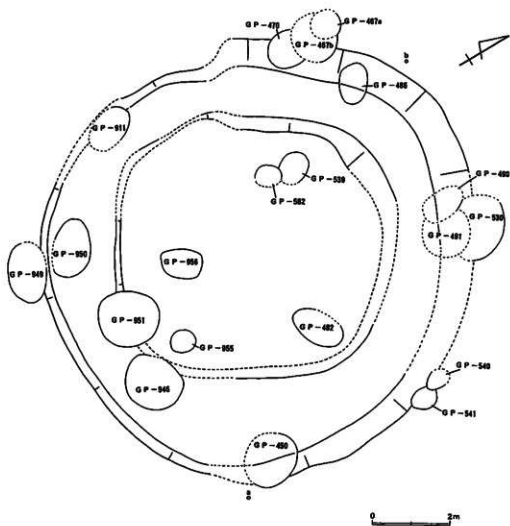
年代については縄文時代前期半と思われるが判然としない。

SY-1 (第122~134図)

O47・48、P47・48グリッドに位置する。南西側をSH-50に切られている。覆土をほぼ掘り下げた後の墳底部付近での確認ではあるが、壁と思われるものはゆるやかな立ち上がりであり、現状で全体径8.30×7.80mほどで最深部の深さは約40cmのほぼ円形を呈している。覆土中の一部に炭化物、粘土、砂質凝灰岩細粒が混在している。この竪穴と墓壙との関係については明確ではないが、墳底部より7基の墓壙が検出されている。覆土中より縄文時代晩期の土器片、剣片が大量に出土しており、浅鉢、壺、皿など完形品も多い。北東側墳底部付近より完形の壺1点が出土しており、土器の集中範囲も確認された。

年代については縄文時代晩期前半と思われるが判然とせず、区画墓かどうか疑わしい遺構である。

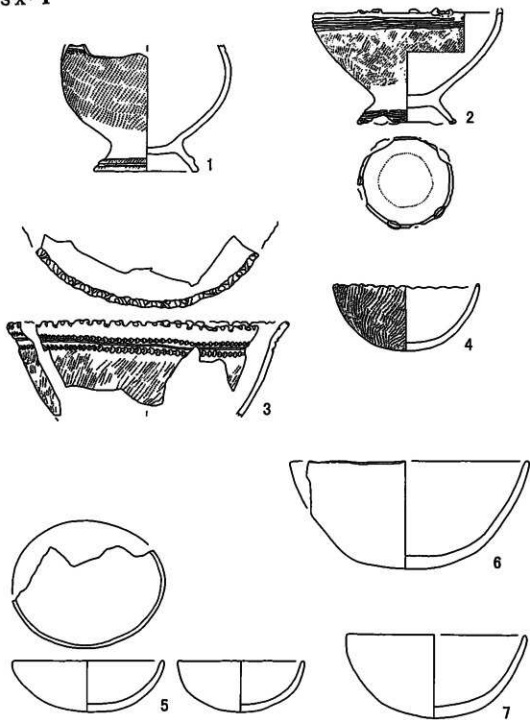
SX-1



- | | |
|---------|----------------------|
| 1 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 (炭化物・粘土混じり) |
| 2 暗褐色砂 | 7.5YR3/4 |
| 3 極暗褐色砂 | 7.5YR2/3 (炭化物少量混じり) |
| 4 黒褐色砂 | 10YR2/3 |

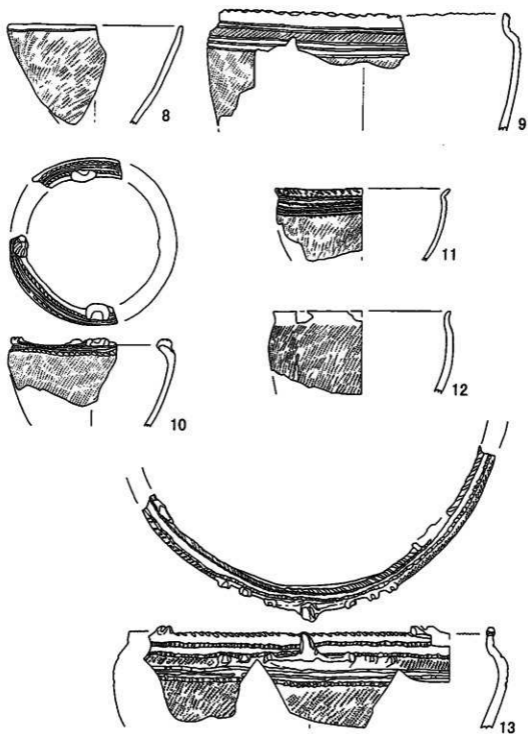
第111図 SX-1 平面図

SX-1



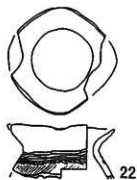
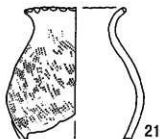
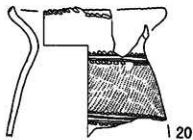
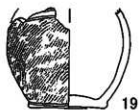
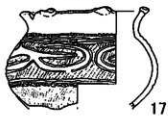
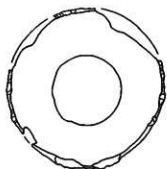
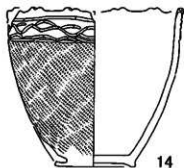
第112圖 SX-1 出土遺物

SX-1



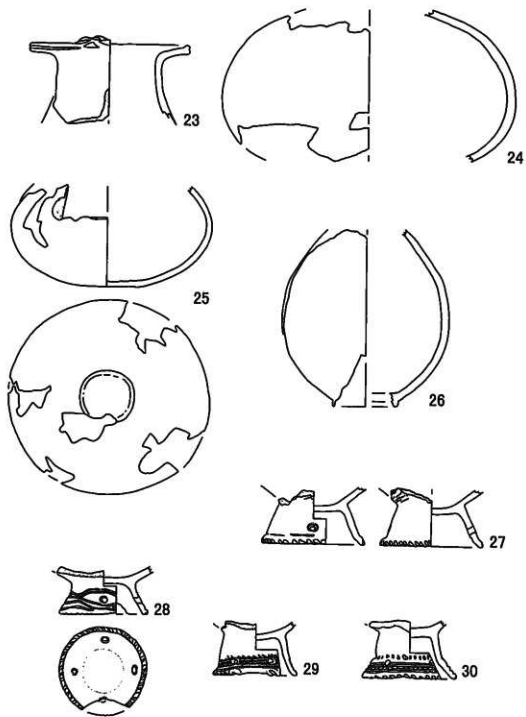
第113圖 SX-1 出土遺物

SX-1



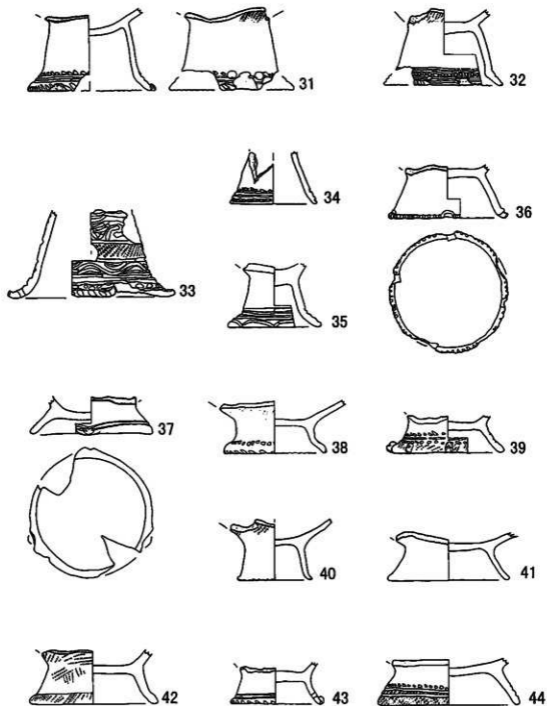
第114圖 SX-1 出土遺物

SX-1



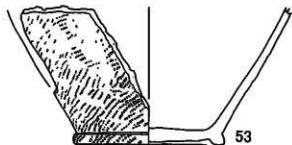
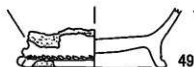
第115圖 SX-1 出土遺物

SX-1



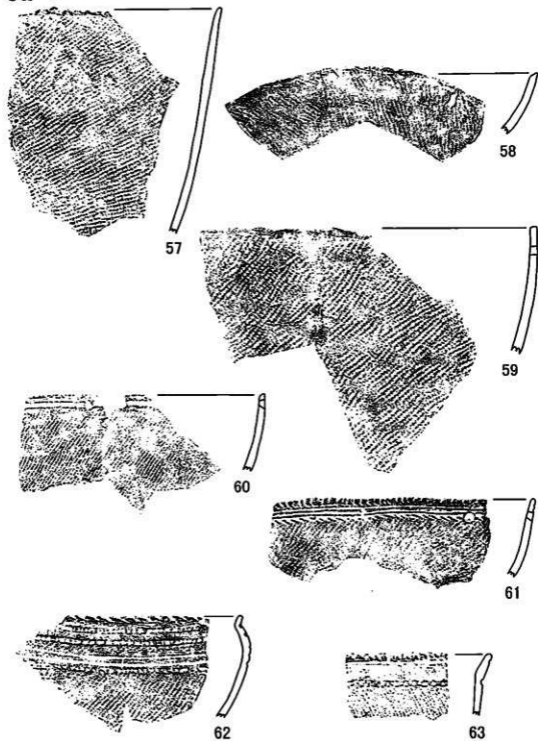
第116圖 SX-1 出土遺物

SX-1



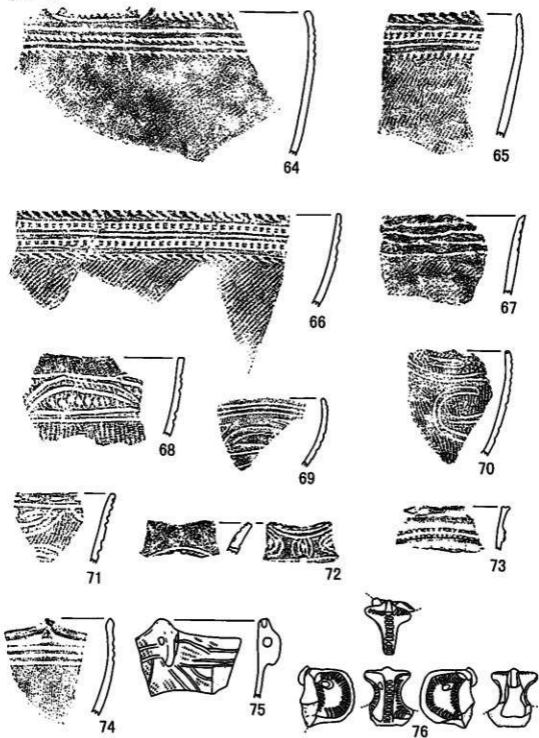
第117圖 SX-1 出土遺物

SX-1



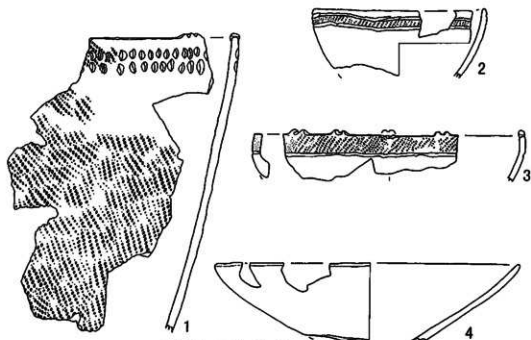
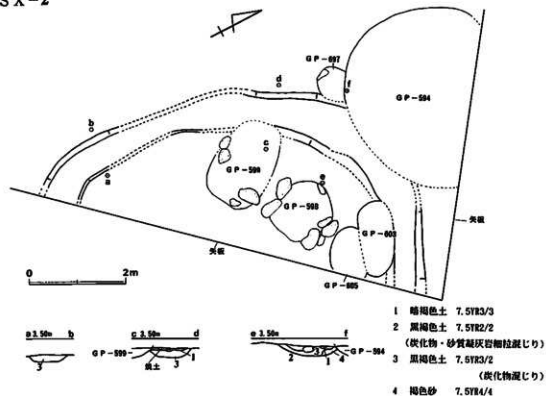
第118圖 SX-1 出土遺物

SX-1



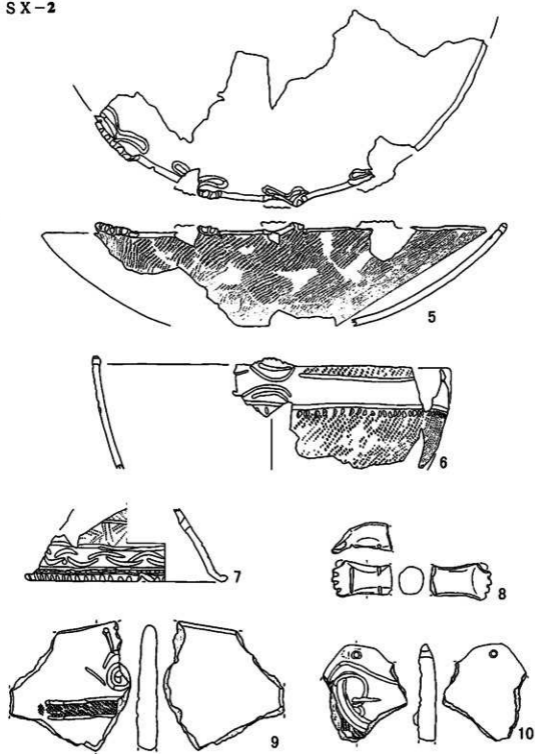
第119圖 SX-1 出土遺物

SX-2



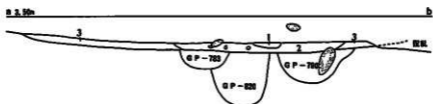
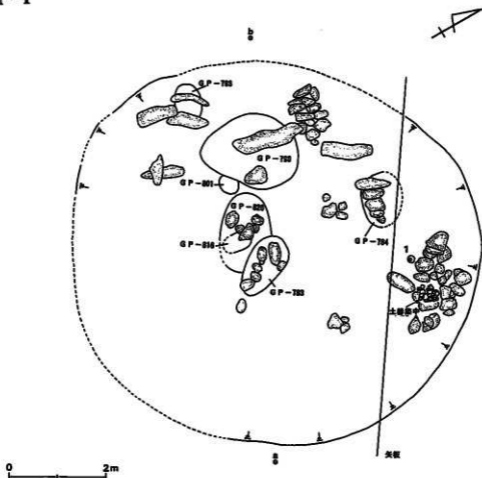
第120図 SX-2 平面図と出土遺物

SX-2



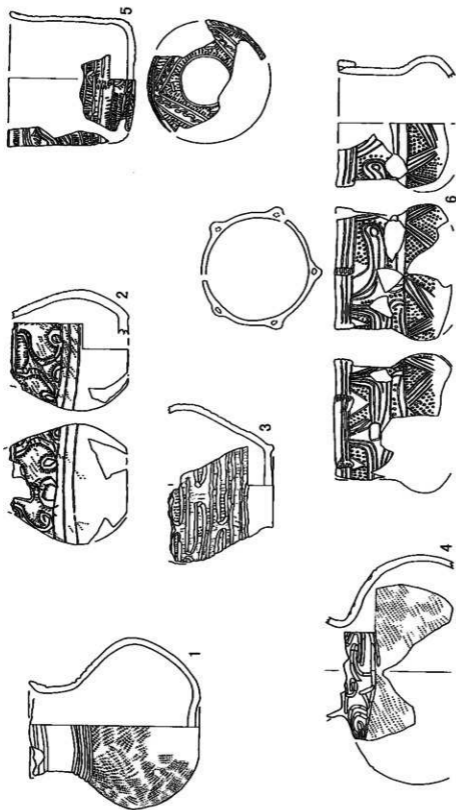
第121圖 SX-2 出土遺物

SY-1



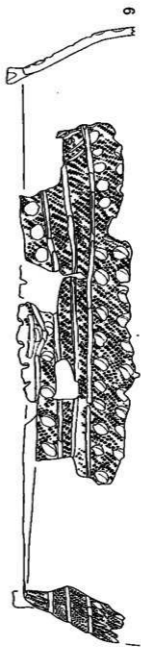
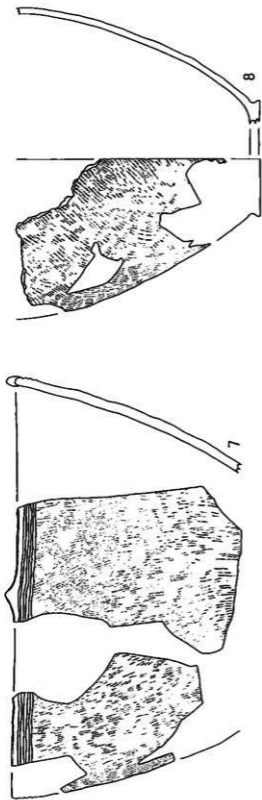
- 1 黒色土 7.5YR2/1 (粘土混じり)
- 2 黒褐色土 7.5YR2/2 (炭化物混じり)
- 3 黒褐色土 7.5YR3/2 (砂質凝灰岩粒混じり)

第122図 SY-1 平面図



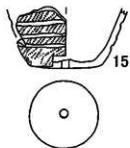
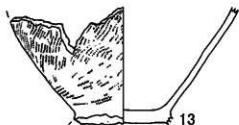
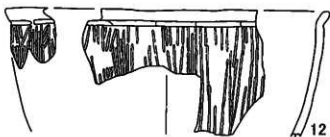
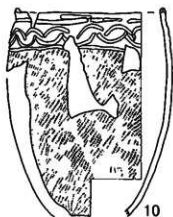
第123圖 SY-1 出土遺物

SY-1



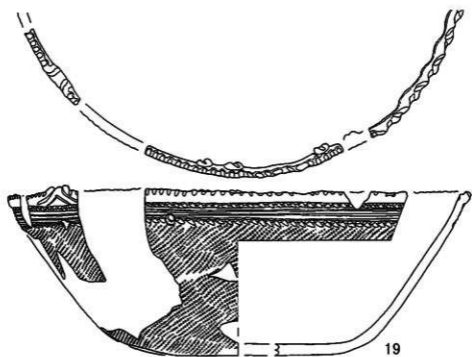
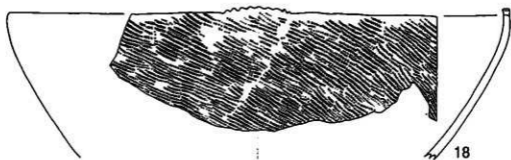
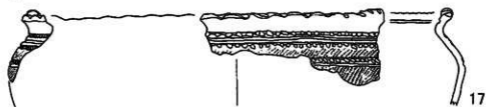
第124圖 SY-1 出土遺物

SY-1



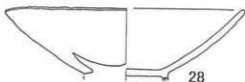
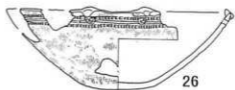
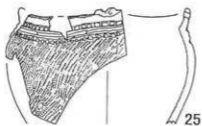
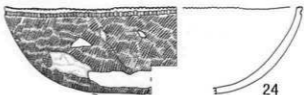
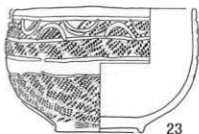
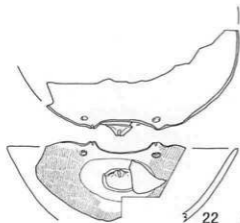
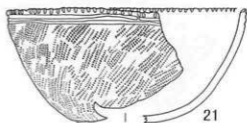
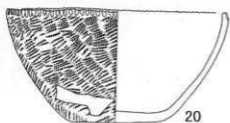
第125圖 SY-1 出土遺物

SY-1



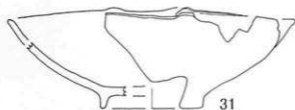
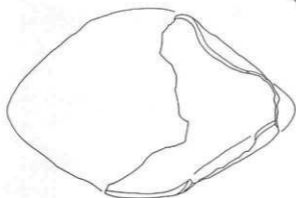
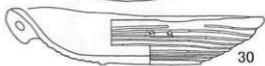
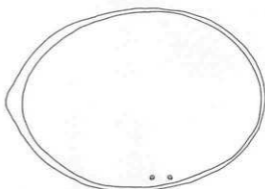
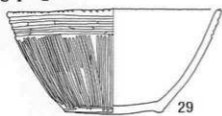
第126圖 SY-1 出土遺物

SY-1



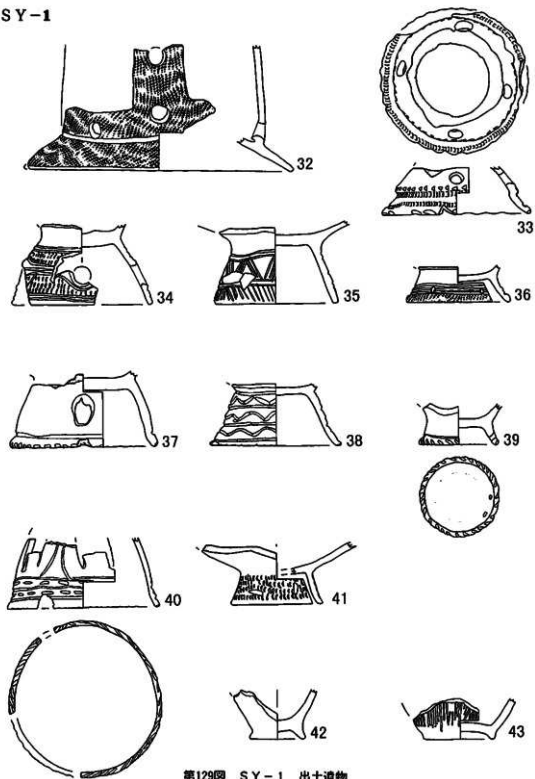
第127图 SY-1 出土遗物

SY-1



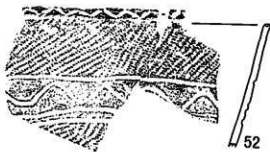
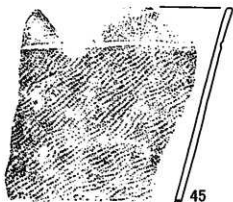
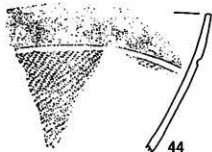
第128圖 SY-1 出土遺物

SY-1



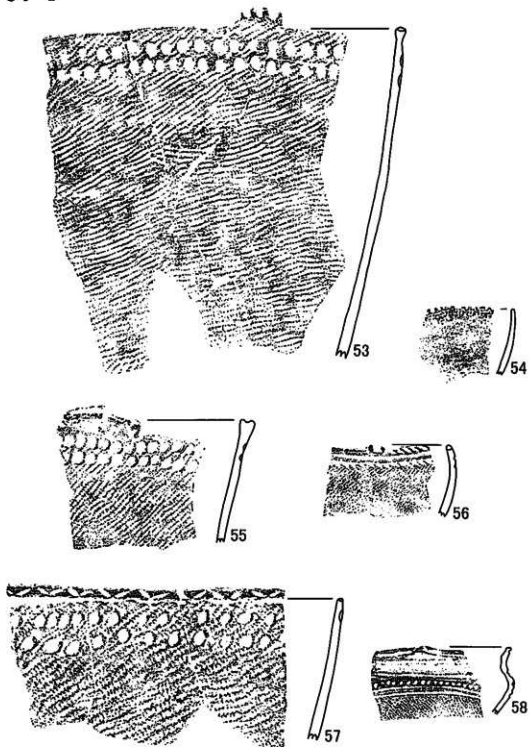
第129圖 SY-1 出土遺物

SY-1



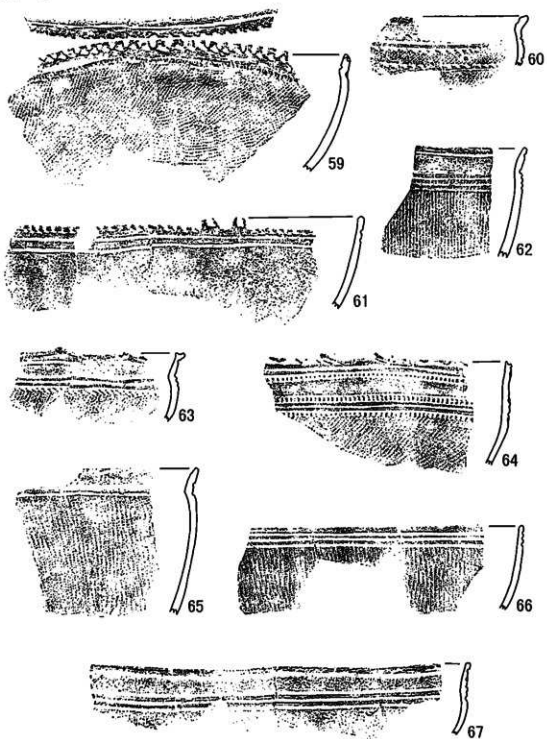
第130圖 SY-1 出土遺物

SY-1



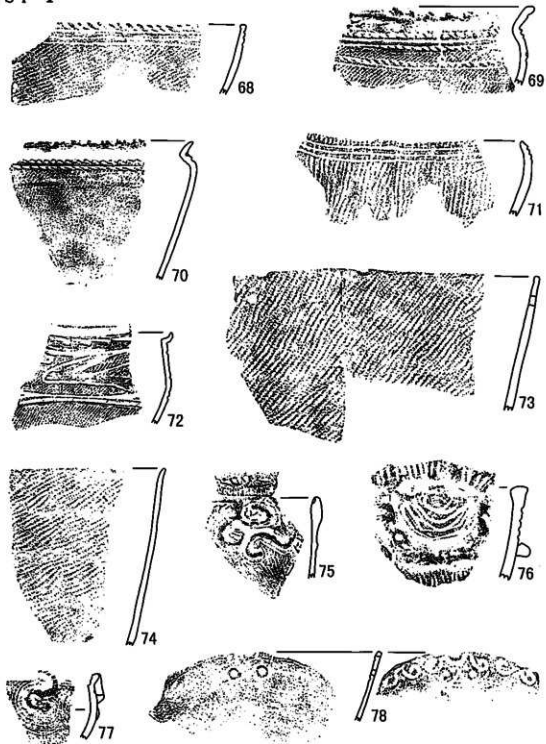
第131圖 SY-1 出土遺物

SY-1



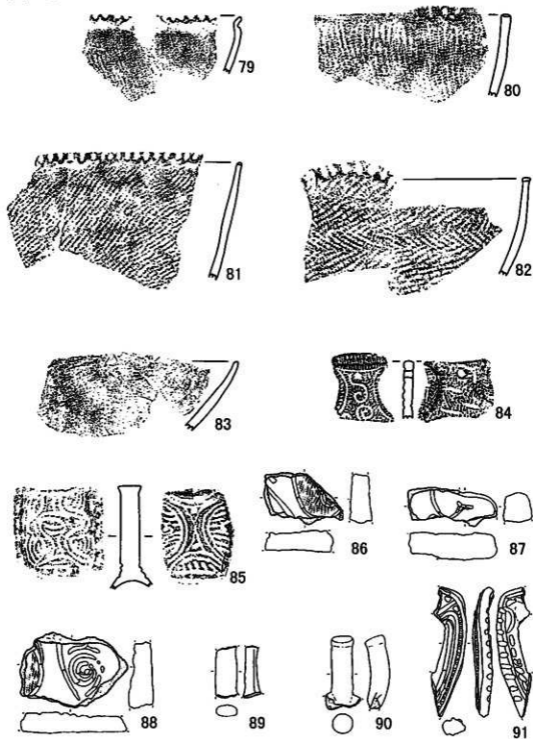
第132图 SY-1 出土遗物

SY-1



第133图 SY-1 出土遗物

SY-1



第134图 SY-1 出土遗物

(3) 塚状遺構・溝状遺構 (第15図)

塚状遺構 (MO) は幅約1m以上のもので、規模に長短の差はあるが16ヶ所、河岸に並行するものと、それに直交するものとが確認された。覆土中より縄文時代から近世に至る遺物が出土しており、主要なものを一部掲載するにとどめた。したがってその遺物が遺構の年代を示しているものではない。幅50cm以下の細いものについては溝状遺構とし、若干の説明を加えた。

MO-1 (第135図)

U17・18、V17・18、W18・19、X19グリッドにかけて位置し、西側に並行してMO-2が検出された。長さ約18.0m×幅2.00~3.10m、深さ約90cmで砂丘列を貫くように北西~南東方向に伸びており、北側はすばまりながら立ち上がる。西側壁に50~80cmのテラス状の張り出しが見られ、覆土からは礫が多数出土している。東側約10mに並行して、V15、W15・16、X16にかけて長さ約10.5m×幅18~24cm、深さ20~30cmを測るものと、その東側約5mにV14、W14・15、X15グリッドにかけて長さ10.7m×幅12~28cm、深さ40~50cmを測るものの2ヶ所の溝状遺構が検出された。両遺構とも断面はU字状を呈し、溝中には柱穴と思われる小ピットが数基検出された。覆土中より縄文・擦土土器片多数と石礫、石斧、剥片、珠洲系陶器、陶磁器、鉄製品等が出土している。

MO-2 (第135図)

T17、U17・18、V18・19、W18・19グリッドにかけて位置する。長さ約17.4m×幅1.50~1.80m、深さ50~60cmでMO-1の西側に1~10cmを隔てて並行しており、北西~南東に伸びる。南側はややすばまって立ち上がっており、北側は当方のトレンチによって切られており不明瞭。壁は斜めに立ち上がり、断面はU字状を呈する。覆土中より珠洲系陶器等が出土した。また、MO-2の西側約6~7mに並行して、T19・U19・20グリッドにかけて長さ約6.9m×幅20~14cm、深さ7~10cmを測る溝状遺構が見られた。

MO-3 (第136図)

Q27・28・29、R27・29グリッドにかけて位置する。砂丘列に並行し、北東~南西に伸びており、西側に張り出し、若干カーブを描いて構築されている。西側を発掘区の矢板で、東端を後世の攪乱で切られており、現状で長さ約13.0m×幅0.55~1.26m、深さ41~46cmを測る。断面はU字状を呈し、東端はゆるやかに立ち上がると推測され、MO-4・9・7と断続すると思われる。覆土中より縄文・擦土土器片多数と魚形石器、石礫、剥片、須恵器、土師器、珠洲系陶器、鉄製釣針等が出土している。

MO-4 (第136図)

R25、S24・25グリッドにかけて位置し、SH-7・8を切る。MO-3の東側に約7mを隔てて断続すると思われる、長さ約4.7m×幅1.98m、深さ約40cmを測り、砂丘列に並行して構築されている。両端はゆるやかに立ち上がり、断面はU字状を呈している。底部中央に炭化物の塊が検出され、覆土より統縄文・椽文土器片、須恵器、石鏃、石斧等が出土している。

MO-5 (第137図)

T29・30グリッドにかけて位置し、東側及び南側は発掘区の矢板で、北東側は攪乱で切られており、北西壁の一部分のみの検出である。現状で長さ4.3m×幅0.46~1.20m、深さ約51cmを測る。MO-3の約12m南に位置し、並列するように構築されている。上面より魚骨等が出土し、覆土中より統縄文・椽文土器片、珠洲系播磨片、剥片等が出土している。

MO-6 (第137図)

R21、S21、T21・22、U21・22、V22グリッドにかけて位置し、砂丘列に直交し、MO-1・2・8と並行する。また、U22グリッドでMO-7と直交しており、MO-7を切るものと思われる。東側は発掘区の矢板で切られており、現状で長さ約17.4m×幅1.50~1.90m、深さ約50~68cmを測り、断面はU字状を呈し、北側は攪乱によりやや不明瞭であるが、すばまりながら立ち上がるものと思われる。上面より礫が多数出土していることや、土層断面がMO-1・2に類似している。覆土より統縄文・椽文土器片、珠洲系陶器片等が出土している。

MO-7 (第137図)

T22、U21・22、V21グリッドにかけて位置し、SH-14を切って構築されている。砂丘列に並行しており、MO-6と直交する。西側はゆるやかに立ち上がり、東側は発掘区の矢板によって切れ確認できなかったが、MO-3・4・9と断続すると思われる。現状で長さ約8.5m×幅1.70~1.85m、深さ約42cmを測り、断面はU字状を呈している。覆土からは、統縄文・椽文土器片、剥片石器、鉄製品等が出土している。また、S27、T24・26・27、U22・23・24グリッドにかけて溝状遺構が見られる。砂丘列に並行する形で掘られており、MO-4・7・9の南側4~5mでこれらと並行している。確認面が低い上に攪乱等で分断されているが同一のものと思われ、全長25.8m×幅20~30cm、深さ10~25cmを測る。断面はU字状で、底面に約半間の間隔で柱穴様のピットが数基確認された。

MO-8 (第138図)

O28・29、P28・29グリッドに位置し、SH-12を切って構築されている。MO-6の北西約42cmに位置し、砂丘列に直交し、MO-1・2・6と並行する。上面は攪乱が著しかったが、

長さ約12.0m×幅1.80~2.00m、深さ38~64cmで、北端および南端はゆるやかに立ち上がり、断面はややいびつである。覆土中より統縄文・椽文土器片、珠洲系陶器片、陶磁器、石斧、剥片石器、獣骨等が出土している。

MO-9 (第138図)

S23・24、T23・24グリッドにかけて位置する。砂丘列に並行し、MO-3・4・7と断続すると思われる。長さ6.2m×幅1.30~1.75m、深さ約24cmを測り、東端及び西端はゆるやかに立ち上がる。確認面が低いが断面はU字状に近い。覆土中より統縄文・椽文土器片、剥片石器、剥片等が出土している。

MO-10 (第139~143図)

1991・1992・1994年にわたって検出されており、I52からR34グリッドにかけて若干蛇行しながら、砂丘列に並行して構築されている。SX-1、JH-3・6、SH-24・71等縄文晩期・統縄文・椽文などの各時代の遺構を切っている。北東端は発掘区の矢板によって切られている。現状で全長約101.7m×幅0.60~3.15m、深さ45~150cmを測る。Q38グリッドでMO-11と、M46グリッドでMO-16と、K48グリッドで、MO-13とそれぞれT字状に交差している。断面は西側がU字状に近く、中央付近は栗研状に掘られており(断面図g-h~m-n)、東側はU字状を呈している。土層断面を見るとc-d・g-hにおいて塚の重複があり、塚の埋没に対して修復をしている様子が窺える。また全体を通して、炭化物を多く含む層が見られる。覆土上面よりコタマガイ・ウバガイ・イガイ等を主体とする貝層が確認され、場所によっては砂層をはさみ、2つの貝層が見られる。特に上の第1貝層からはキセル・鉄鍋・陶磁器や銚先・中柄等の骨角器などが出土しており、これらは近世・近代に窺みに捨てられたものと思われる。N46グリッドの貝層中とO43グリッドの第2貝層中からはそれぞれ近世と思われる人骨が、また部分的ではあるが覆土中位より多量の礫が出土している。そのほかにも覆土中からは、縄文・統縄文・椽文等各時期の土器片と剥片石器・剥片などが大量に出土している。

MO-11 (第144図)

K34・35、L35・36、M35・36、N36・37、O36・37、P37・38、Q38グリッドにかけて位置し、砂丘列に直交して構築されている。北側を発掘区の矢板に、一部を攪乱により切られ、現状で長さ39.0m×幅1.70m、最深部76cmを測り、断面はU字状を呈している。南側はMO-10とT字状に交差しており、同時併存していた可能性もある。覆土中位より礫が大量に検出されている。覆土中より縄文・統縄文・椽文等各時期の土器片、石鏃等の剥片石器・剥片、陶磁器、キセルなどが出土している。また、小片であるが、「大」の字の一部と推定される墨書が施された土師器坏片が出土した。

MO-12 (第144図)

P35・36、Q34～36グリッドにかけて位置し、MO-10の6m北側で砂丘列とMO-10に並行して構築されている。西側と南側は後世の攪乱により切られているが、現状で長さ約6.5m×幅1.70m、深さ約52cmを測る。東側はゆるやかに立ち上がり、断面はU字状を呈している。覆土中より縄文・統縄文・擦文等各時期の土器片、剥片石器・剥片などが出土している。

MO-13 (第145図)

I47、J47・48、K48グリッドに位置する。北西側をHP-1に切られており、現状で長さ約14.6m×幅1.30～1.51m、最深部の深さ約58cmを測り、砂丘列に直交しSH-20を切って構築されている。西側の壁は薬研状に掘られていたが、東側はゆるやかに立ち上がる。K48グリッドにてMO-10とT字状に重複している。覆土上面にコタマガイ・ウバガイ・イガイを主体とする貝層が検出されたが、近世に窶みに捨てられたものと思われる。覆土中より縄文・統縄文・擦文等各時期の土器片、剥片等が出土している。

MO-14 (第145図)

I42、J42、K42・43、L43、M43、N43グリッドにかけて位置し、砂丘列に直交して構築されている。南東側はM43グリッドの北側でゆるやかに立ち上がるものと思われるが、判断としない。現状で長さ約25.2m×幅1.14～1.30m、最深部の深さは約65cmを測る。南東側底部に径10～30cm、深さ3～38cmの小ピットが8基検出された。覆土上面にコタマガイ・ウバガイ・イガイを主体とする貝層が検出されたが、近世～近代に窶みに捨てられたものと思われる。他に縄文・統縄文・擦文等各時期の土器片、土製品、剥片等が出土している。

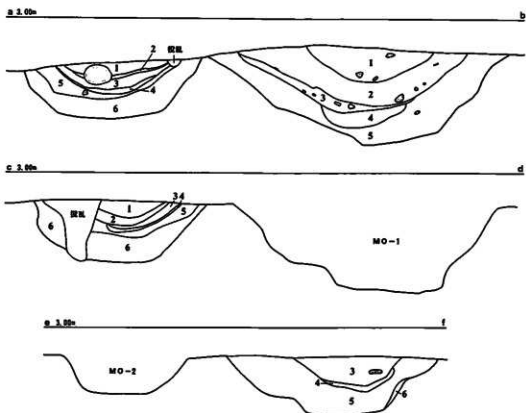
MO-15 (第146図)

G55、H53～55、I52・53グリッドにかけて位置する。南西端は発掘区の矢板で切られるが、現状で長さ約16.5m×幅0.50～1.60m、深さ約78cmを測る。方向・位置関係からMO-10の延長部分とも考えられる。MO-10に近い東側は確認面が低く幅0.50～0.80m程度であるが、西側は幅が広がり、最大幅約1.60mとなっている。断面は東側が浅いU字状、西側は確認面が高いせいか薬研状になっている。遺物は他のMOより少ないが、I53グリッドの覆土中より人骨が検出されている。

MO-16 (第146図)

L45・46、M45・46グリッドにかけて位置する。長さ3.6m×幅1.30～1.68m、深さ約52cmを測る。M46グリッドにてMO-10とT字状に重複し、SH-19・7I、GP-856を切っている。断面は浅いU字状を呈し、他のMOに共通して見られる黒色炭化物層が見られない。

MO-1・2

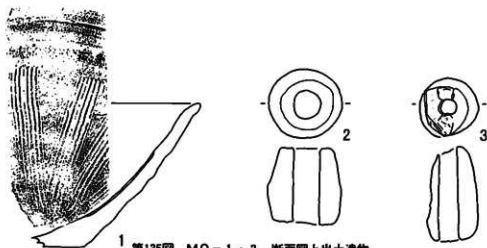


MO-2

- | | | | |
|---------|-----------------|--------|----------|
| 1 黑色砂 | 7.5YR2/1 | 4 褐色砂 | 7.5YR4/3 |
| 2 黑色砂 | 5YR1.7/1(炭化物混?) | 5 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |
| 3 極暗褐色砂 | 7.5YR2/3(炭化物混?) | 6 褐色砂 | 7.5YR4/4 |

MO-1

- | | | | |
|---------|-----------------|--------|----------|
| 1 黑色砂 | 7.5YR2/1 | 4 褐色砂 | 10YR4/6 |
| 2 極暗褐色砂 | 7.5YR2/3(炭化物混?) | 5 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |
| 3 黑色砂 | 5YR1.7/1(炭化物混?) | | |



1 第135圖 MO-1・2 断面圖と出土遺物

MO-3

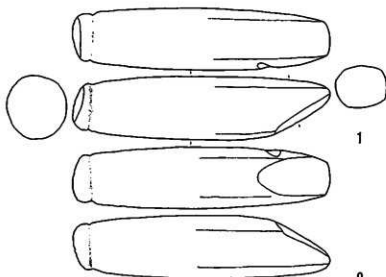
a 3.50m b



c 3.50m d



- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色砂 5YR2/1 (炭化物混じり) | 4 暗褐色砂 7.5YR3/3 |
| 2 暗褐色砂 7.5YR3/3 (炭化物混じり) | 5 黒褐色砂 7.5YR2/2 (炭化物混じり) |
| 3 黒褐色砂 7.5YR3/2 (炭化物混じり) | 6 極暗褐色砂 7.5YR2/3 |



0 10cm

MO-4

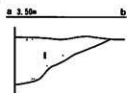
a 3.50m b



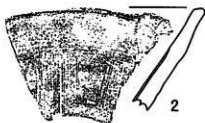
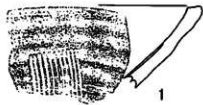
- | |
|------------------|
| 1 黒褐色砂 7.5YR2/2 |
| 2 極暗褐色砂 7.5YR2/3 |
| 3 黒褐色砂 5YR2/1 |

第136図 MO-3・4 断面図と出土遺物

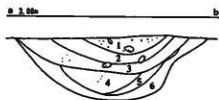
MO-5



1 黒褐色砂 7.5YR2/2 (炭化物混じり)



MO-6



- | | | | |
|-----------|-------------------|-----------|------------------|
| 1 黒褐色砂 | 7.5YR3/2 (炭化物混じり) | 4 にぶい黄褐色砂 | 10YR4/3 (炭化物混じり) |
| 2 にぶい黄褐色砂 | 10YR5/3 (暗褐色砂混じり) | 5 黒褐色砂 | 10YR3/2 |
| 3 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 (炭化物混じり) | 6 にぶい黄褐色砂 | 10YR6/4 |

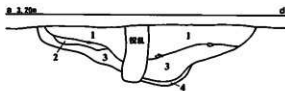
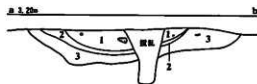
MO-7



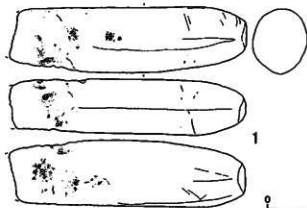
- | | |
|-----------|---------------------|
| 1 にぶい黄褐色砂 | 10YR5/4 (炭化物微量混じり) |
| 2 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 (炭化物微量混じり) |
| 3 明黄褐色砂 | 10YR6/6 |

第137図 MO-5・6・7 断面図と出土遺物

MO-8



- 1 暗褐色砂 7.5YR3/3 (炭化物混じり)
- 2 明褐色砂 7.5YR5/6
- 3 黄褐色砂 7.5YR6/6
- 4 黒褐色砂 7.5YR3/2



MO-9



- 1 暗褐色砂 7.5YR3/3 (炭化物混じり)
- 2 濃い褐色砂 7.5YR5/4

第136図 MO-8・9 断面図と出土遺物

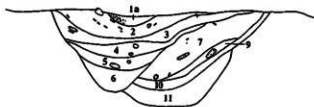
MO-10

a 1.10m b

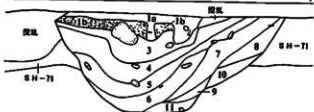


- a - b
- | | | |
|----|--------|---------------------|
| 2a | 黒褐色砂 | 10YR2/3 |
| 2b | 黒褐色シルト | 10YR2/3 (炭化物混じり) |
| 3 | 黒色砂 | 7.5YR1.7/1 (炭化物混じり) |
| 4a | 黒褐色砂 | 10YR2/3 (炭化物混じり) |
| 4b | 黒褐色砂 | 7.5YR3/2 (炭化物混じり) |
| 6 | 褐色砂 | 10YR4/4 |
| 7 | 暗褐色砂 | 10YR3/3 |
| 11 | 黒褐色砂 | 10YR2/3 |

c 1.00m d



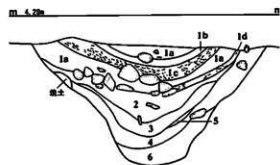
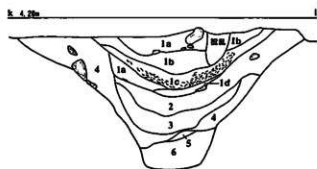
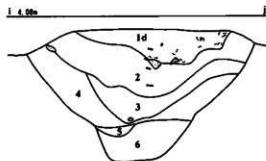
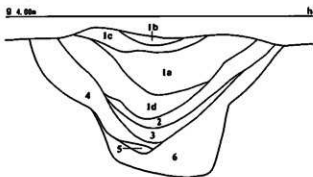
e 3.20m f



- c - d - e - f
- | | | | | | |
|----|------|--------------------------|----|------|---------------------------|
| 1a | 黒褐色砂 | 7.5YR2/2 (頁・炭化物混じり) | 6 | 褐色砂 | 7.5YR4/4 |
| 1b | 黒色砂 | 7.5YR1.7/1 (頁類・炭化物混じり) | 7 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |
| 2 | 黒褐色砂 | 7.5YR3/2 (炭化物混じり) | 8 | 黒褐色砂 | 7.5YR3/2 |
| 3 | 黒色砂 | 5YR1.7/1 (植物種子多量・炭化物混じり) | 9 | 褐色砂 | 7.5YR4/3 |
| 4 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 (炭化物混じり) | 10 | 褐色砂 | 7.5YR4/4 |
| 5 | 黒色砂 | 7.5YR1.7/1 (炭化物混じり) | 11 | 黒褐色砂 | 7.5YR3/2と褐色砂 7.5YR4/3の混合砂 |

第139図 MO-10 断面図

MO-10



- g-h · i-j · k-l · m-n
- 1a 黒褐色砂 7.5YR2/2
 - 1b 暗褐色砂 7.5YR4/3
 - 1c 褐色砂 7.5YR4/4 (第1頁層)
 - 1d 黒褐色砂 7.5YR2/2 (第2頁層)
 - 2 黒褐色砂 7.5YR2/2
 - 3 黒色砂 7.5YR1.7/1 (炭化物混じり)
 - 4 極暗褐色砂 7.5YR2/3
 - 5 褐色砂 7.5YR4/3
 - 6 暗褐色砂 7.5YR3/3

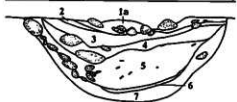
第140図 MO-10 断面図

MO-10

o - p



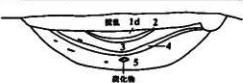
q - r



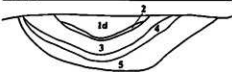
s - t



u - v



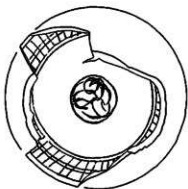
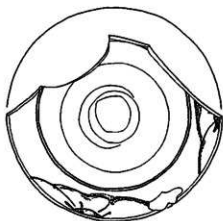
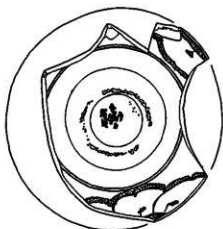
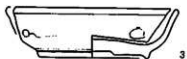
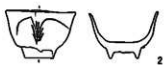
w - x



- o - p - q - r - s - t - u - v - w - x
- 1a 黒褐色砂 7.5YR2/2
 - 1b 黒褐色砂 7.5YR2/2 (第2頁層)
 - 2 にごい、褐色砂 7.5YR4/5
 - 3 黒褐色砂 7.5YR2/1 (炭化物混じり)
 - 4 褐色砂 7.5YR4/4
 - 5 暗褐色砂 7.5YR3/4 (炭化物混じり)
 - 6 褐色砂 7.5YR4/3
 - 7 暗褐色砂 7.5YR3/3

第141圖 MO-10 断面圖

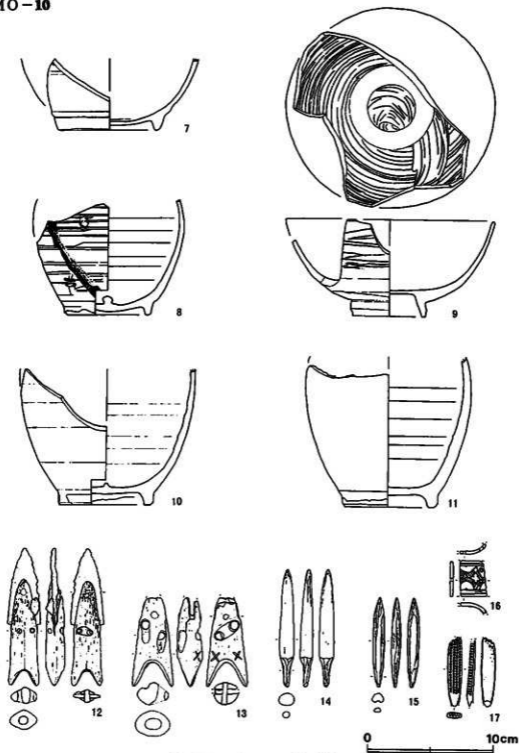
MO-10



0 10cm

第142圖 MO-10 出土遺物

MO-10



第143图 MO-10 出土遗物

MO-11

a 3.60m b



c 3.80m d



e 3.80m f



- | | | |
|----|--------|------------------------|
| 1 | 黒褐色砂 | 7.5YR2/2 (貝・魚骨・炭化物混じり) |
| 1a | 黒褐色砂 | 7.5YR2/2 (炭化物混じり) |
| 1b | 褐色砂 | 7.5YR4/3 |
| 2 | 黒色砂 | 7.5YR1.7/1 (炭化物混じり) |
| 3 | にぶい褐色砂 | 7.5YR5/3 |
| 4 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 (炭化物混じり) |
| 5 | 黒褐色砂 | 7.5YR3/2 (炭化物混じり) |
| 6 | 褐色砂 | 7.5YR4/3 (炭化物混じり) |
| 7 | 黒褐色砂 | 5YR2/2 (一部貝混じり) |



MO-12

a 3.70m b



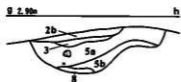
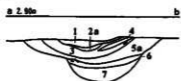
c 3.70m d



- | | | |
|---|------|--------------------|
| 1 | 黒褐色砂 | 7.5YR2/1 |
| 2 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |
| 3 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/4 |
| 4 | 灰褐色砂 | 7.5YR4/2 |
| 5 | 黒褐色砂 | 7.5YR3/2 (一部粘土混じり) |
| 6 | 褐色砂 | 7.5YR4/3 |

第144図 MO-11・12 断面図と出土遺物

MO-13

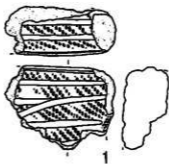


- | | | |
|----|----------------|---------------------|
| 1 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |
| 2a | 混砂貝屑 (1層を少量含む) | |
| 2b | 黒褐色砂 | 7.5YR2/2 (炭化物混じり) |
| 3 | 黒色砂 | 7.5YR1.7/1 (炭化物混じり) |
| 4 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |
| 5a | 黒褐色砂 | 7.5YR3/2 (炭化物混じり) |
| 5b | 褐色砂 | 7.5YR4/4 (炭化物混じり) |
| 6 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |
| 7 | 暗赤褐色砂 | 5YR3/2 |
| 8 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |

MO-14

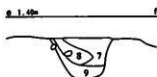
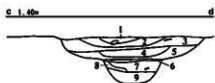
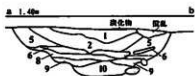


- | | | |
|---|--------|----------|
| 1 | 黒褐色混貝砂 | 7.5YR3/2 |
| 2 | 黒褐色砂 | 7.5YR2/2 |
| 3 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |
| 4 | 暗赤褐色砂 | 5YR3/3 |
| 5 | 極暗赤褐色砂 | 5YR2/3 |
| 6 | 褐色砂 | 7.5YR4/4 |



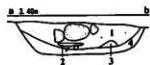
第145図 MO-13・14 断面図と出土遺物

MO-15



- | | | |
|---|-------|--------------------|
| 1 | 黒褐色土 | 7.5YR3/1 (炭化物混じり) |
| 2 | 黒色土 | 7.5YR1.7/1 |
| 3 | 黒褐色土 | 7.5YR2/2 (一部粘土混じり) |
| 4 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/4 |
| 5 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |
| 6 | 褐色砂 | 7.5YR4/3 |
| 7 | 極暗褐色砂 | 7.5YR2/3 (炭化物混じり) |
| 8 | 褐色砂 | 7.5YR4/4 |
| 9 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 (炭化物混じり) |

MO-16



- | | | |
|---|------|----------------------------|
| 1 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/3 |
| 2 | 褐色砂 | 7.5YR4/3 |
| 3 | 暗褐色砂 | 7.5YR3/4 |
| 4 | 褐色砂 | 7.5YR4/6と暗褐色砂 7.5YR3/3の混合砂 |

第146図 MO-15・16 断面図

(4) 貝塚(第16図)

大川遺跡の1989～1994年度の発掘調査によって貝塚は17ヶ所検出した。貝類のほか魚骨・獣骨の集が見られる。人工遺物にはキセル・耳飾り・鉤・鉄鍋等の金属製品、中柄等の骨角器、古銭、近代に属すると思われる陶磁器などが見られる。遺物等から近世・近代に属する遺構と推定するものである。

SM-1 (第147図)

S18・19、T18・19グリッドにかけて位置する3.4×2.4m程の不定形の範囲である。厚さは約30cmを測る。貝類はコタマガイを主体にイガイ・タマキビ・クロタマキビなどが見られる他、魚骨も多く、ニシン・ホッケ・カレイ・カサゴ・マダラなどが確認された。人工遺物ではキセル・古銭等が出土している。

SM-2 (第147～149図)

R19・20、S19・20グリッドにかけて位置する6.5×4.8m程の不定形の範囲で、厚さは約70cmを測る。貝類はコタマガイ・イガイ・タマキビ・ウバガイ等が確認された。その他魚骨ではニシン・ホッケ・カレイ類が多く、獣骨ではイヌの骨が比較的まとまって出土した。人工遺物にはキセル・鎌・斧等の金属製品、石製火皿?、垂飾・針入れ等の骨角器、古銭、陶磁器などがある。

SM-3 (第150～153図)

R19・20、S17～19、T17・18グリッドにかけて位置する15.6×3.4m程の範囲である。他の貝塚に比べ、より濃密な貝の集が見られる。砂丘の縁辺部に沿う様に東西に細長く広がる形で、厚さは約38cmを測る。貝類はコタマガイを主体にイガイ・タマキビ・クボガイなどが出土している。その他中央やや西側に50×30cmの範囲でイヌの頭蓋骨などの獣骨の集が検出され、骨角製中柄や鉄鍋などがこれに共伴した。全体としては、鉄鍋片の他、キセル・鉤・刀子などの金属製品の出土が多く、その他に陶磁器、古銭、玉類などが出土した。

SM-4 (第153・154図)

Q20・R20グリッドに位置し、現状で3.3×2.3m程の範囲である。南側を矢板に切られているため正確な全長は不明である。厚さは約20cmを測り、貝類はイガイが主体である。人工遺物にはキセル・鉄鍋片・刀子・鉤等の金属製品、陶磁器、古銭、垂飾等の骨角器などが見られる。

SM-5

Y9・10グリッドにかけて位置し、現状で4.2×0.8m程の不定形の範囲である。南側を矢板で切られているため、正確な全長は不明である。厚さは約40cmを測り、貝類はイガイが主体である。

人工遺物は陶磁器片などが見られたが、数は僅かである。

SM-6 (第155図)

R20・S20グリッドにかけて位置する。4.0×1.5m程の不定形の範囲である。南側を矢板で切られているため、正確な全長は不明。厚さは約15cmを測り、貝類はイガイが主体である。人工遺物は骨角器、金属製品数点が見られた程度で、数は僅かである。

SM-7

W12・I3、X12グリッドにかけて位置する6.4×3.5m程の不定形の範囲である。厚さは約10cmで、貝類はイガイが主体である。人工遺物は漆器片等が見られたが、僅かである。

SM-8

U15グリッドに位置する3.8×1.2m程の不定形の範囲である。厚さは概ね12～13cmで、貝類はイガイが主体である。

SM-9

U14、V14・15グリッドにかけて位置する2.3×2.2m程の不定形の範囲である。厚さは約10cmを測り、貝類はイガイが主体である。人工遺物は陶磁器片等が数点出土と僅かである。

SM-10 (第155図)

G36、H35・36グリッドにかけて位置する6.6×2.5m程の不定形の範囲である。厚さは約30cmを測る。西側はコタマガイが殆どを占めており、他にイガイ・エソヒバリガイ・ツメタガイ、魚骨ではサケの椎骨などが見られた。東側にはニシン・ホッケ・カレイ等の魚骨や陶磁器が多く、貝類ではウバガイ・チヂミボラ・ヒメエソボラなどが、獣骨ではイヌ・ネズミ類や切痕のある鹿角などが確認され、ケセルや古銭なども出土した。

SM-11 (第156図)

L25・26、M24～26、N25グリッドにかけて位置する8.6×5.4m程の不定形を呈する大型の範囲である。厚さは約14cmを測る。範囲中央にイガイの集見られ、コタマガイの集見も若干確認された。貝類では他にチヂミボラ・アワビなどがあり、獣骨ではイヌ・アホウドリや切痕・加工痕の見られる海獣骨などが確認された。人工遺物では漆器や金属製品などが出土した。

SM-12 (第156図)

L25・26、M25・26グリッドにかけて位置し、全体で6.2×6.1m程の不定形を呈する大型の範

囲で、厚さは約30cmを測る。中央東側に90×80cm程のイガイの集中が確認された。貝類では他にコタマガイ・チヂミボラなどが見られ、その他魚骨ではニシン・ホッケなど、獣骨ではイヌ・アホウドリ、加工痕の見られるクジラ類などが確認された。人工遺物では漆器・陶磁器・金属製品などが出土した。

SM-13 (第157図)

M27グリッドに位置し、全体で2.5×1.7m程の小規模の範囲で、厚さは約30cmを測る。貝類はイガイを主体にアワビ・チヂミボラなど、魚骨ではニシン・ホッケ・カレイ・カサゴ・マダラなどが見られる。その他ではイヌ・アホウドリ等の獣骨などが確認された。人工遺物については、骨角製銚先や古銭等が出土している。

SM-14 (第157図)

H41グリッドに位置する。現状で1.4×0.9m程の不定形の狭い範囲で、厚さは約10cmを測る。南西側が攪乱を受けており、正確な範囲は不明である。イガイ・コタマガイが主体であるが、破砕が著しい。人工遺物は金属製品などが僅かに見られた。

SM-15 (第157図)

T34グリッドに位置する。現状で2.0×0.6m程の狭い範囲で、厚さは約10cmを測る。北側を矢板に切られているため、正確な範囲は不明である。ニシンなどの魚骨とウバガイ・コタマガイ・イガイなどの貝類が主体となっている。人工遺物は金属製品や陶磁器などが僅かに見られた。

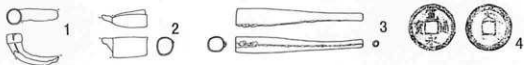
SM-16

G41・42グリッドにかけて位置する1.6×0.5m程の狭い範囲で、厚さは約18cmを測る。西側を矢板に切られているため、正確な範囲は不明である。イガイ・ウバガイなどを主体としており、魚骨はニシン・ホッケなどが少量見られた。

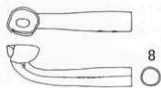
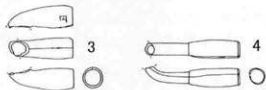
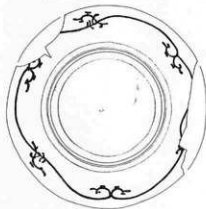
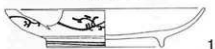
SM-17 (第158～160図)

L60、M59・60グリッドにかけて位置する。全体で7.7×4.4m程の壘壇形を呈する大型の範囲で、厚さは約53cmを測る。SH-38・47上面より検出した。東側にはイガイの集中が、西側にはイヌ1体分などの獣骨の集中が見られた。貝類は他にコタマガイ・ホタテガイ・ウバガイ・カキなどが見られ、魚骨はニシン・ホッケ・ヒラメ・カレイ・フグなどが確認された。人工遺物では陶磁器、眼鏡・キセル・耳飾り・鉄鍋等の金属製品、中柄等の骨角器、漆器、玉類などが出土した。

SM-1

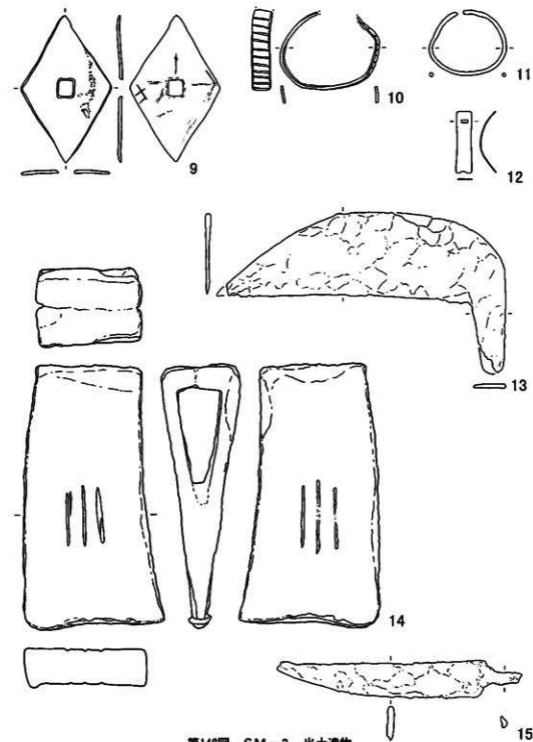


SM-2



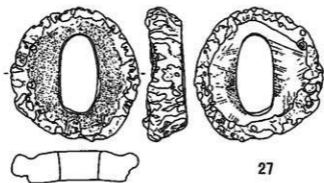
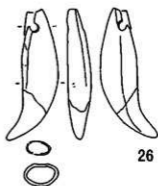
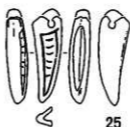
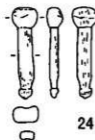
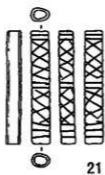
第147图 SM-1·2 出土遗物

SM-2



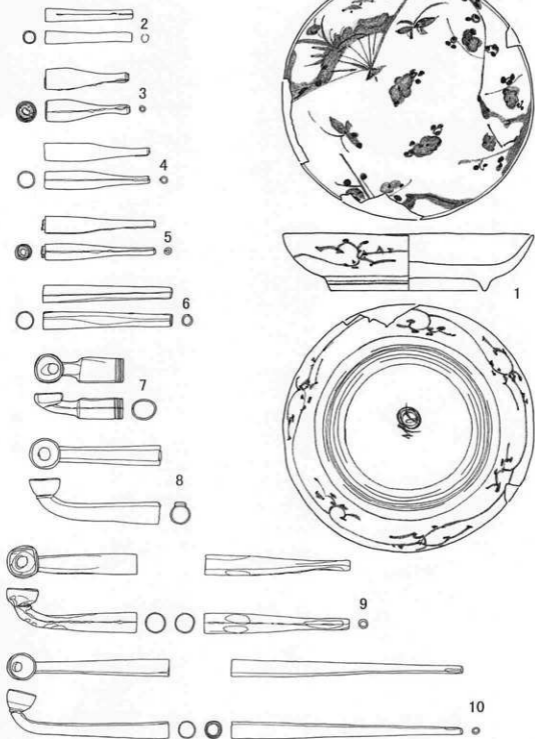
第148圖 SM-2 出土遺物

SM-2

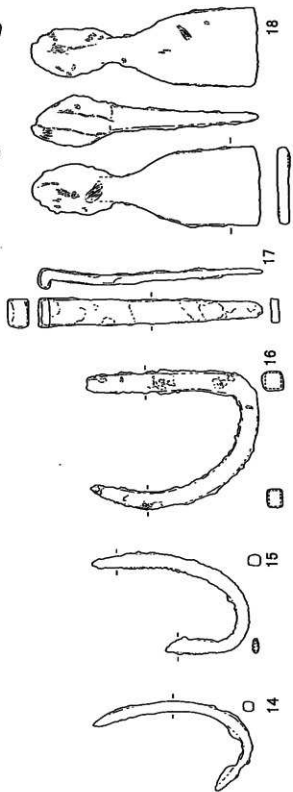
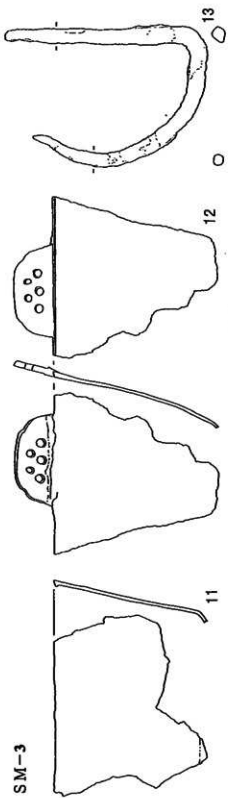


第149圖 SM-2 出土遺物

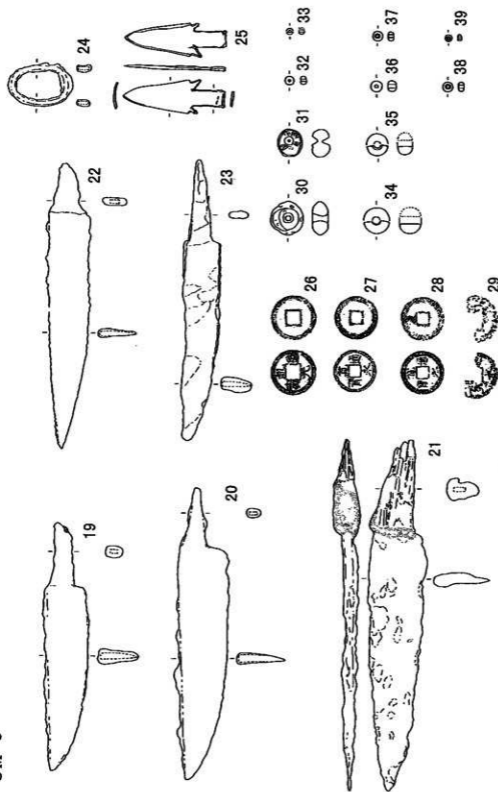
SM-3



第150圖 SM-3 出土遺物

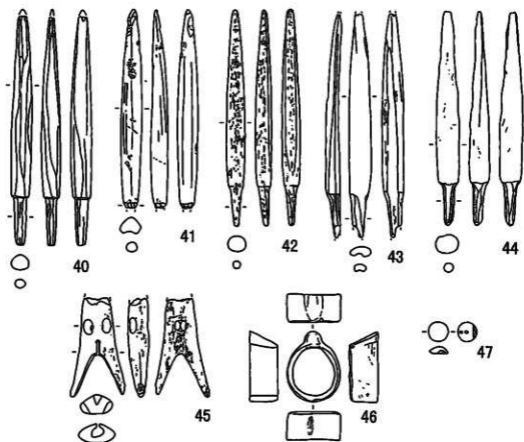


第151圖 SM-3 出土遺物

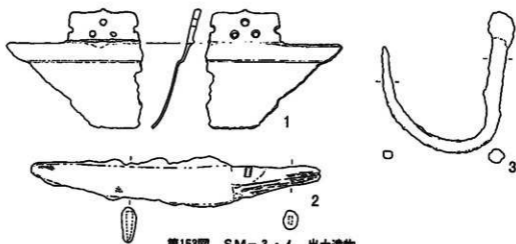


第152圖 SM-3 出土遺物

SM-3

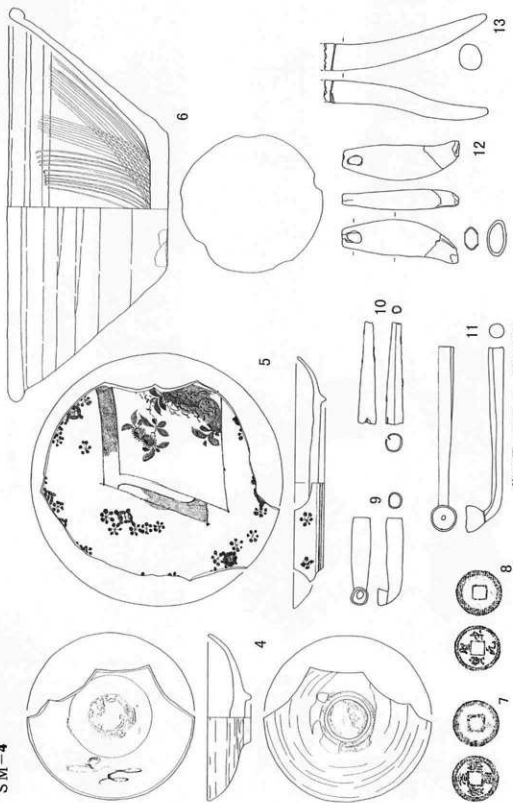


SM-4



第153图 SM-3·4 出土遗物

SM-4

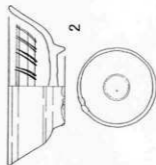
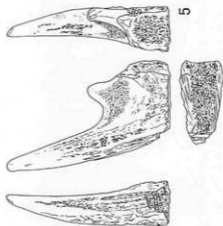
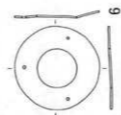
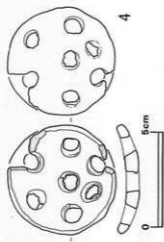


第154图 SM-4 出土遗物

SM-6

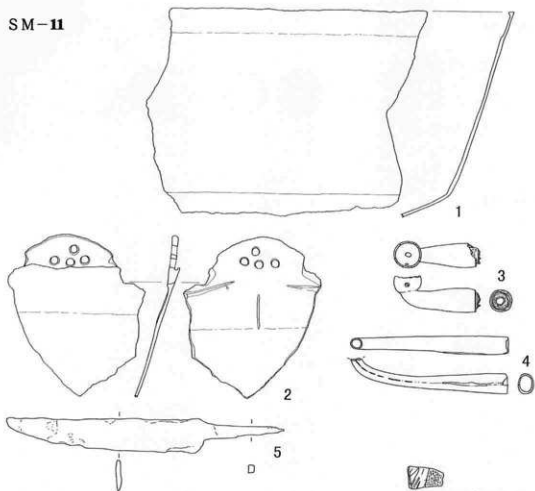


SM-10

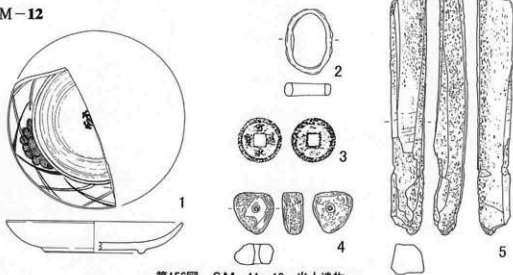


第155图 SM-6・10 出土遺物

SM-11



SM-12

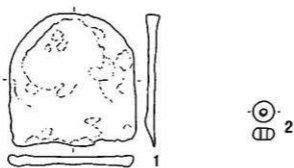


第156圖 SM-11・12 出土遺物

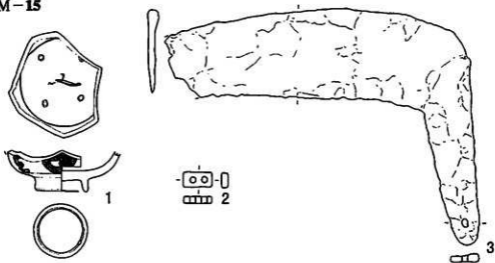
SM-13



SM-14

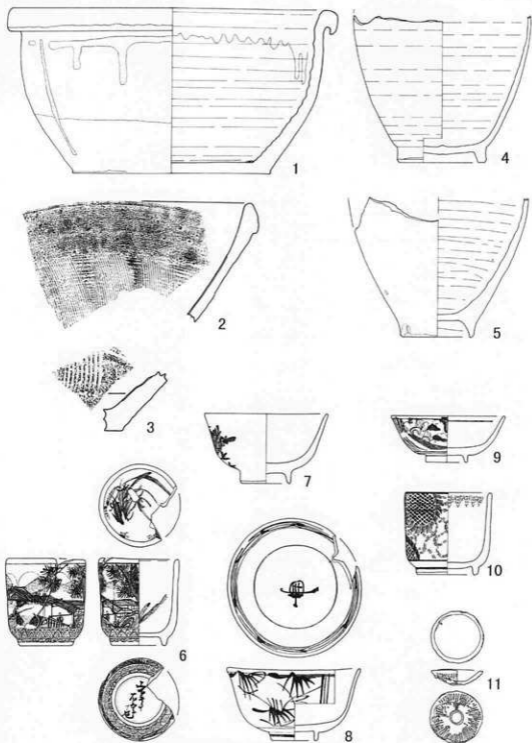


SM-15



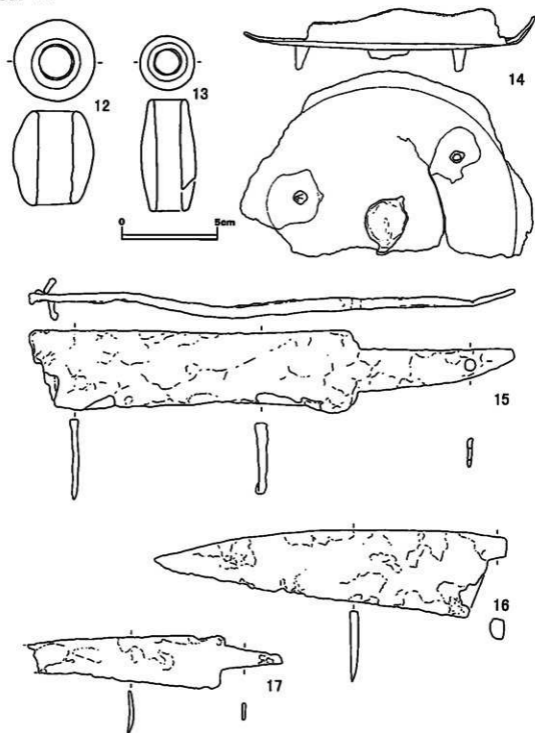
第157圖 SM-13·14·15 出土遺物

SM-17



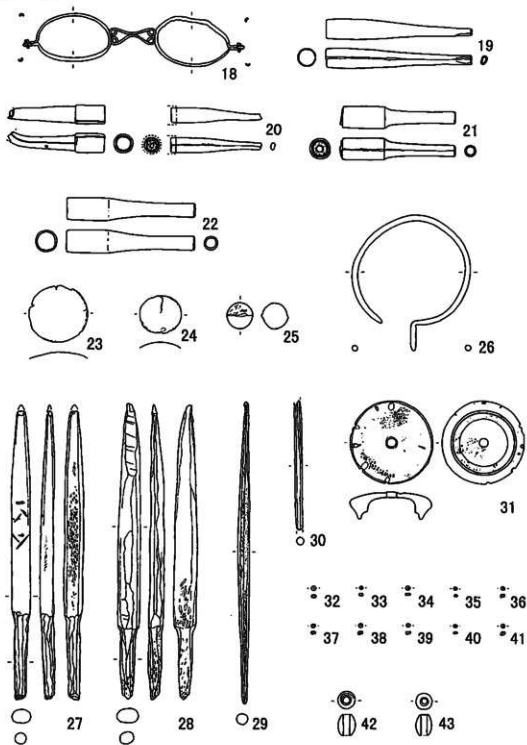
第158圖 SM-17 出土遺物

SM-17



第159图 SM-17 出土遗物

SM-17



第160圖 SM-17 出土遺物

(5) 礎石群

近世～近代に属するものと思われる。時代を特定する遺物の出土は乏しいが、検出標高が高く、近世・近代の遺物の出土を見る貝塚と標高が近いことなどが推定の材料となった。長軸方向に規則性が見られ、それぞれが集落を構成する建物であったものと思われる。また余市においては、近世・近代にニシン漁が盛んであったことは広く知られるところであるが、これらがニシン漁に関連する建物の可能性も考えられる(第161図)。1989～1994年度の調査で計290点の礎石が確認されているが、その中には後世に本来の位置から動いてしまったものがあると思われる。ここでは、その可能性が少なく、ある程度まとまって検出されたものを群として捉え、以下に説明する。また、礎石の間隔の計測については、各礎石のほぼ中心を結んだ距離とする。

礎石群1(第161図)

V10、W8～11、X8～10、Y9・10グリッドにかけて位置する。河岸線に直交する形で整然と並んでおり、全体として検出範囲は約12×11mである。長軸方向を北北西～南南東とした建物跡の一部と思われる。40cm前後の円礫が約1.8mのほぼ等間隔で配されている。うち2つは礎石上に木柱が一部残存していた。

礎石群2(第161図)

P18・19、Q16～19、R17・18グリッドにかけて位置し、周囲を囲むように溝と木杵土壇2基を伴っている。30～50cm大の礫が使用されており、西端に位置する木杵土壇の東側に隣接して約4.5×4mのコの字形を呈する礫石列を検出した。石の間隔は1.8m前後であるが、北側側はやや狭まる。河岸線に並行し、長軸方向を東北東～西南西とする建物跡の一部と思われる。ここからさらに東北東に約13m礎石列は延びるが、建物を思わせる形を成してはいない。木杵土壇は南側が1.9×1.0mで深さ52cm、北側が0.7×0.4m深さ16cmを測る。溝は概ね幅0.2m深さ10cmで、雨落ち溝に相当する付帯施設跡と思われる。

礎石群3(第162図)

V18～20、W18～20グリッドにかけて位置する。河岸線に直交する形で並び、長軸方向を北北西～南南東とする建物跡の一部と思われる。検出範囲は概ね9×7mである。40～50cm大の礫が約1.8mのほぼ等間隔で配されている。20～30cm大の小形の礫の列が見られるが、方向が若干異なり、礫石より低い状況などから、建築以前に存在した施設跡の可能性もある。南側の溝は幅0.4～0.5m深さ6cmで痕跡を残す程度であり、雨落ち溝に相当する付帯施設跡の一部と思われる。

礎石群4(第162図)

L26・28、M26～28、N25～28、O25～27、P25・26グリッドにかけて位置する。河岸線に並行しており、長軸方向を東北東～西南西とする建物跡と思われる。全体としての検出範囲は約20×12mで、規模の大きな建物であったことを窺わせている。40～60cm大の礫が使用され、長軸方向へ1.8m前後の間隔で5列延びており、各列の礎石の間隔はやや乱れるが概ね1.8m前後である。

東側と南側を囲う溝は概ね幅0.5～0.6m深さ10cmで、一部に板を使った痕跡が見られる。雨落ち溝に相当する付帯施設と思われる。また、溝のさらに南側に並行して矢来5が位置しており、同一の建物を構成していたものと思われる。

礎石群5（第163図）

D35・36、E36、F35・36、G35グリッドにかけて位置する。北西から南東にクランク状に延びており、建物を思わせる形は成していないが、全体の規模としては約15×14mである。長軸方向は河岸線に直交する北北西～南南東とする建物跡の一部と思われる。50～80cm大の礎を使用している。南東側は約1.8mのほぼ等間隔に配されているが、北西側はやや乱れる。

礎石群6（第164図）

N35、O34～36、P34～36、Q34～36、R34・35グリッドにかけて位置する。海岸線に並行するように延びており、河岸線に直交あるいは並行している前述の5例とは向きが異なる。長軸方向を西北西～東南東とする建物跡と思われる。全体としては概ね20×5mの長方形を呈する範囲とそれに付帯する数点から成っており、規模の大きな建物であったことを窺わせている。40～50cm大の礎が使用され、概ね1.8m前後の間隔で配されている。

礎石群7（第163図）

G・H48～50グリッドにかけて位置する。長軸方向は海岸線に並行する西北西～東南東とする建物跡と思われ、40～50cm大の礎が0.7～2.0mとやや疎らな間隔で配されており、全体としての検出範囲は約11×8mである。河岸に向かって標高がやや下がる。

（6）矢 来

近世～近代に属すると思われる。時代を特定する遺物の出土は乏しいが、礎石群と同様に検出状況および周囲の遺構との比較などが推定の材料となった。特徴として、全体的に検出範囲の規模が小さいこと、石列が直角に曲がり、建物を囲ったような状況も見られることなどから、波除けとしては機能しておらず、石垣や雨落ち石等の建物に付帯する施設跡であろうと思われる（第16図）。計11ヶ所が検出されたが、ここではそのうち7ヶ所について以下に説明する。なお、ここでの矢来とは便宜上の呼称である。

矢来1

R19、S18・19、T17・18グリッドにかけて位置する石列。長軸方向は東北東～南西で、2列が約1mを隔て延びており、長さは北側列が約14.5m、南側列が約11.8m、河岸線に並行している。60cm大と20～30cm大の礎が2段ないし3段に組まれている。西端は石列が直角に曲がり、南方向に約3.5m延びる。南側へ概ね9mを隔てて矢来2が並行する。

矢来2

T20、U19・20、V19グリッドにかけて位置する石列。長軸方向は東北東～南西で1列に延

び、河岸線と並行する。一部攪乱で切られているが、全体が約13mを測る。長軸方向が矢来1とほぼ同一であり、互いの位置関係などから、両矢来が同一の施設を構成していた可能性も考えられる。

矢来3

K21・22、L20・21グリッドにかけて位置し、長軸方向は東北東～西南西で河岸線と並行する。西端は2.9×0.4m深さ約20cmを測り、板材が一部残る溝状の掘り込みが認められ、その東側に2.8×1.1m深さ70cm以上を測る木枠土壇を伴う。また、そこから東へ約11.2mにわたり、木杭により板材を固定しその南側に角礫を組んでいる。北側には円礫が数点並び、全長は約14mに達する。

矢来4

L22・23、M21～23、N21グリッドにかけて位置する石列。長軸方向は東北東～西南西で河岸線と並行し、約13mを測る。西端は石列が直角に曲がり、南方向に約5.7m延びる。角礫を中心に40cm前後の石が平組みされている。

矢来5

M29、N27～29、O26・27グリッドにかけて位置する石列。長軸方向は東北東～西南西で河岸線や礎石群と並行している。約40cm大の礫の2段ないし3段積みで、全長は約17mである。礎石群4に伴う形で検出している（第162図）。河岸と矢来5の間に建物跡と考えられる礎石群4が位置することから、矢来5は波除けとして機能したのではなく、礎石群4に付帯する施設跡と思われる。礎石群や溝と比べて若干レベルが高いことから、石垣あるいは堀の基礎部分などの可能性が考えられる。

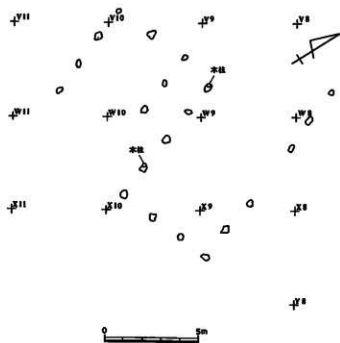
矢来6

F42～45、G44～46グリッドにかけて位置する石列。一部を攪乱により切られるが、全体としては長さ約20mに達する。長軸方向は北北東～南南西で河岸線と並行している。北側半分と南側半分では若干違いが見られ、北側は30～100cm大の礫をほぼ1列に組んでやや蛇行する。それに対し、南側は30～50cm大の礫を約0.5mを隔てて2列並行に直線的に組み北側をふさいで、その中に10cm前後の小礫を敷いている。何らかの排水施設跡の一部かと思われる。

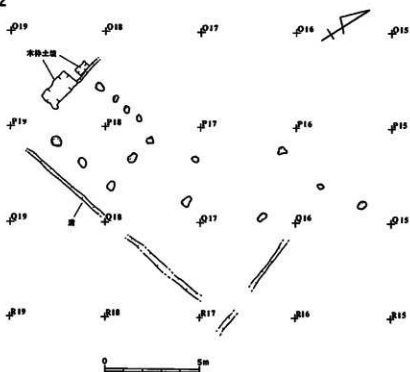
矢来7

I48・49、J49・50、K50グリッドにかけて位置する石列。北西端は10～50cm大の礫を2段～5段に組み、2.1×1.8m深さ60cmを測る方形状の石組が見られる。その直下から47号石組炉が検出された。全体としてはクランク状に連なっており、石組部分の北東側から東南東に向かって約3m延びる。そこから疎らではあるが約7.8m南西に向かい、そして約8.2m南東に延びる。20～90cm大の礫の平組みで、全長は約20mに達し、長軸方向はほぼ北西～南東で河岸線に直交する。I48グリッドの石組周辺では大小の石が2段以上に組まれている。その他は50～60cm大の礫の平組みである。

礎石群 1

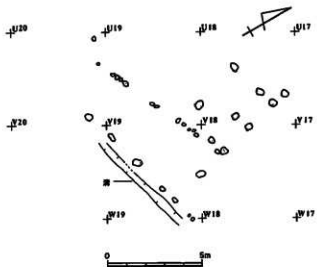


礎石群 2

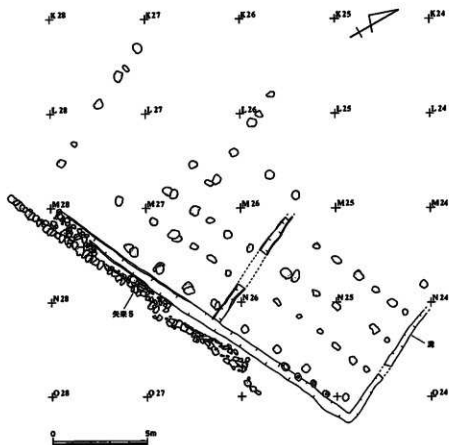


第161圖 礎石群1・2 平面圖

礮石群 3

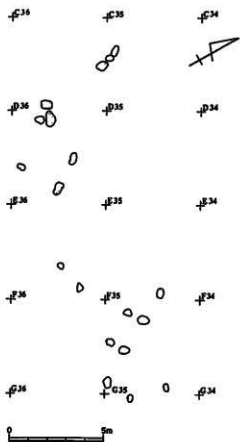


礮石群 4

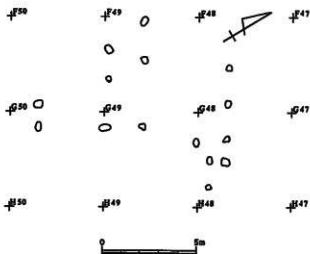


第162圖 礮石群 3・4 平面圖

礎石群 5

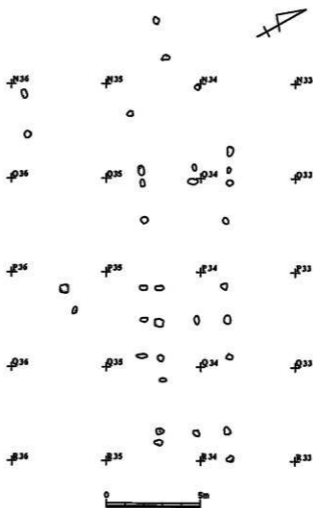


礎石群 7



第163圖 礎石群 5・7 平面圖

礮石群 6



第164圖 礮石群 6 平面圖

(7) 石組炉 (第16図)

近世・近代に属すると思われる、計50基が検出された。いずれもニシン釜等に使用された漁業関連のものと思われる。規模は概ね径1.4~1.8m程で、形態については円形あるいは楕円形をしたものが多いが、方形のものも見られる。構築方法については様々で、角礫主体と円礫主体、重ね積みされた礫の間に粘土が入るものと入らないもの、平置きと段重ね、地面を掘り込んで作られたものと掘り込みが浅い又は見られないもの、2基一對のものと単独のものなどが確認された。焚口の向きも一定ではないが、これについては、検出状態が悪いため、単に欠損した部分か本来の焚口か、判断しかねる場合が多いことも理由の一つである。なお、焚口方向が不明瞭なものには?マークをつけて表記した。

総じて統一性が薄い印象である。

遺構No.	Grid	大きさ(m)	焚口方向	備 考
1号石組炉	T15	1.6 × 1.4	不明	
2号石組炉	T17	1.4 × 1.2	南東?	
3号石組炉	T16・17	(1.7) × (0.8)	南?	
4号石組炉	Y7	1.4 × 1.4	南	南側に円形の掘り込み
5号石組炉	T17	(1.1) × (0.5)	不明	
6号石組炉	S16・17	1.4 × 1.2	南?	
7号石組炉	S16	1.4 × 1.4	南?	
8号石組炉	T14	1.1 × 1.0	南西	石の間に粘土
9号石組炉	U15	1.7 × 1.6	北?	10号と2基一對
10号石組炉	U14	1.7 × 1.5	北?	9号と2基一對
11号石組炉	Y11	1.7 × 1.4	南東	石の間に粘土
12号石組炉	X11	1.8 × 1.5	南東	
13号石組炉	W10・11, X10・11	1.8 × 1.8	南西?	
14号石組炉	X8, Y8	2.0 × 2.0	東	15号と2基一對、石の間に粘土
15号石組炉	X8	1.6 × 1.6	東	14号と2基一對、石の間に粘土
16号石組炉	T13	1.8 × 1.6	北?	石の間に粘土
17号石組炉	T14	1.2 × 1.2	東?	
18号石組炉	M21	1.4 × 1.4	北西	19号と2基一對
19号石組炉	M21	1.6 × 1.6	北西	18号と2基一對
20号石組炉	M22	1.6 × 1.6	不明	
21号石組炉	T25	1.6 × 0.8	北東	軟石製切石により方形を呈する
22号石組炉	J24・25	1.8 × 1.8	不明	
23号石組炉	K24・25	2.2 × 2.2	不明	

遺構№	Grid	大きさ(m)	焚口方向	備 考
24号石組炉	K25	(1.8)×(0.8)	北?	25号と一対か?
25号石組炉	K25	1.8×(1.4)	北?	24号と一対か?
26号石組炉	K25	1.8×1.8	北	
27号石組炉	K25	1.4×1.0	北東?	方形を呈する
28号石組炉	G27	1.6×1.2	南東	32号と2基一対、南側に方形の掘り込み
29号石組炉	G27	1.2×(0.6)	北西?	28・32号付帯の方形の掘り込み内に構築
30号石組炉	F27・28, G27・28	1.6×1.4	南	31号と2基一対、南側に方形の掘り込み
31号石組炉	F28	1.5×1.5	南東	30号と2基一対、南側に方形の掘り込み
32号石組炉	G26	1.8×1.4	南	29号と2基一対、南側に方形の掘り込み
33号石組炉	G26	1.1×1.1	不明	
34号石組炉	H26	1.4×1.3	北	
35号石組炉	H25	2.3×2.0	南	
36号石組炉	H25	1.7×1.5	北東?	
37号石組炉	H25	1.2×1.0	北東?	
38号石組炉	H25	1.2×(0.8)	北?	
39号石組炉	M22, N22	1.2×1.2	南南西か?	
40号石組炉	T35	1.4×1.4	不明	
41号石組炉	K41	(1.2)×1.0	不明	
42号石組炉	D47・48, E47・48	1.8×(0.6)	不明	
43号石組炉	N57・58, O57・58	2.0×2.0	北東	
44号石組炉	N57	1.6×1.4	東?	方形を呈する
45号石組炉	O58	1.4×1.2	北東	
46号石組炉	I53	2.0×(1.6)	北西?	
47号石組炉	I48	2.2×(2.2)	北?	方形を呈する
48号石組炉	F48	1.6×1.3	北?	
49号石組炉	H54	1.4×1.4	南東	50号と2基一対、南側に方形の掘り込み
50号石組炉	H53	1.8×1.6	南東	49号と2基一対、南側に方形の掘り込み

II. 遺構外出土の遺物

本遺跡から出土した遺物は全体で約1,600,000点となり、縄文時代前期（I層から出土）から近世・近代までの膨大な遺物が出土している。

時期としては縄文時代晩期、統縄文時代が主体であり、他にも縄文時代、中世、近世・近代の遺構がそれぞれ確認されている。

遺構については縄文時代晩期中葉（大洞C1～C2式期）から統縄文時代前半（恵山期）の墓墳群が大半を占めており、遺構外の遺物も同様の傾向にある。

ここでは、現在までに実測および整理が完了した縄文時代から近代にかけての土器・石器の補足をするとともに、骨角器・古銭などを主に報告するものである。

なお、個々の説明については遺物一覧を参照していただきたい。

1. 縄文時代の遺物

(1) 土器

・晩期（第165～173図）

前葉のものは沈線文を有する亀ヶ岡式土器の影響を受けており、爪形文も時折併用している。器形として浅鉢が多く、筒形も見られる。第165図№1は磨消を縦位に行い、綾くり状沈線文を施しているもので、晩期初頭に位置づけられるかもしれない。

異色のものとして底部穿孔土器がある（第165図№3・第173図）。底部中央に1ヶ所穿孔しているもので、焼成前のもので焼成後のものがある。用途については不明である。

中葉～後葉のものは、条線文を有する土器を多く取り上げた（第167～171図）。幅約1cmの鬚状工具を口縁部または胴部上半から縦位に施すもので、浅鉢や深鉢に見受けられる。しかし、出土例は少ないために独立した型式（椀内式）として把握することは難しいと思われる。大洞C1～A式に相当すると思われる。

後葉のものは口縁部に無文帯をもち矢羽根状沈線や流線状沈線を施すもので、浅鉢や深鉢などがある（第172図№2～9）。

(2) 石器

・打製石斧（第195図№1～6）・スクレイパー（第196図№1～3）

統縄文時代の可能性もあるが、遺構伴出例がないために縄文時代とした。本遺跡出土の石斧の殆どは泥岩、片岩等を加工して製作されているが、これらは玄武岩の大形割片を加工しているものである。硬いものなどの衝撃には弱く、側縁は鈍角であることから切ることも土掘り具として使用されたと思われる。

・垂飾具（第196図№4～5）

勾玉（№4）と楕円形を呈する垂飾（№5）で、縄文時代晩期のもと思われる。

2. 続縄文時代の遺物

(1) 土器（第174～187図）

前葉のものは口縁がわずかに外反する深鉢を呈し、口縁部に無文帯をもち刺突や突瘤文を施す傾向がある。胴部はRLの縦位縄文が大半であり、口辺部に条線や沈線文が見られる場合もある（第174・175図）。

前半から後半にかけては恵山式と後北式が相当する。恵山文化期は本遺跡で主体を成す墓墳群を形成しており、型的に段階的な変化をしながら後北C2-D式に統一されるようである。

恵山式は初期の段階では頸部に無文帯をもち口縁が外反する深鉢を基本形態としているが、次第に無文帯は消失し縄文が施文される深鉢となり、帯縄文が施文されるようになる（第176図№1～5、第177～180図）。

後北式はA・B・C1式は少なく、C2-D式が多く出土している。後北A式は恵山式の末期形態といえるものであり（第176図№6・7、第182図№1）、B式から独自性の表現がされている。後北C2-D式は帯縄文の多様性から無文へと変遷していくが、縄文の代わりに櫛状工具で描くものもある（第184図№2～10・14・15）。

東北地方の弥生土器の影響を受けている赤穴式に併行する土器群がある（第185図№1～20）。口縁部に交互刺突文をもち、斜行縄文、燃糸文等をもつもので長頸深鉢を呈すると思われる。

北方の鈴谷式の影響を受けている土器の小片がある。口辺破片であるが燃りの異なる縄を押圧しているものである（第185図№21～24）。

北大式は口縁部に突瘤をもつもので、胴部は後北式の帯縄文を施すものが古く、斜行縄文、無文へと変化している。後北式の帯縄文は原体RLであるが、北大式の斜行縄文は原体LRとなることは注意すべき点と思われる。（第186～187図）。

(2) 石器

・魚形石器（第196図№6）

恵山文化に伴うもので、頭部に平坦部があり、尾部はややすばまっている。粘板岩を原料としており、研磨して薄身に作っている。

3. 擦文時代の遺物

(1) 土器（第188～194図）

無文に突瘤を有するものを初頭とし、平行沈線・格子状沈線・X字状沈線を配する土器群である。器形は深鉢、台付坏等があり、土師器坏や須恵器壺が組み合わさり一式となる。深鉢は口縁部が朝顔形に開くものが古く、次第に口縁部が屈曲するようになり、横線は平行沈線が次第に消失する。

土師器坏は底部の糸切り痕がみられるものではへら書きで×印が付けられているものもある（第194図№4）。

須恵器壺は胴部上半部のみで、「大」と言う漢字をへら書きしているように思えるが判然としない（第194図№7）。

(2) 骨角器（第199図№1・2）

鋳頭であり、擦文時代以降のものと思われるものである。№1は柳葉形を呈し、茎溝は索溝の腹面部より僅かに先端部より頂点を削り出している。茎溝の平面形は先端部につれて狭くなり、断面形は索溝の先端部付近から緩やかに浅くなっている。

№2は先端部が欠損しており、僅かに索溝の一部が見られる。茎溝の平面形は先端部につれて狭くなり、断面形は索溝が緩やかに浅くなると思われる。

4. 近世・近代の遺物

(1) 陶磁器類（第197～198図）

明治時代から昭和時代戦前と思われるものである。本道跡ではこの時代の陶磁器が大量に出土しているが、ここでは紙面の都合上一部の報告のみとした。

九谷、瀬戸美濃が主体となっている。染付が多く、横線の繊細な図柄は銅版転写と思われる。徳利には墨で林家の屋号「ヤマジョウ」が書かれたもの（第198図№1）もある。

(2) 七輪（第198図№9・10）

瓦質陶器であり、本来は立方体となるものと思われる。角の周囲には穿孔と菊印の型押しが見られ、「長右エ門」の銘が見られる。

(3) 骨角器（第199図№3～208図№6）

多種多様の骨角器や未成品が出土しており、用途が不明のものも多い。ここでは主要なものについて説明をする。

・キテ（第199図№3～8・第208図№1～5）

アイヌ民族が使用する閉高式の離頭結で、索穴が2ヶ並立し、金属製の釦を着装するもので、中には印の刻まれたものもある（第199図№6）。

製作途中の未成品が見られ（第199図No.7・8、第208図No.1～5）、当地で製作されていたものと考えられる。

- ・中柄（第199図No.9～11、第200図、第201図No.1～5）

基部に段をもつもので、断面は先端部で楕円形、基部は円形を呈している。先端部には括先や竹箴などの着装が考えられる。加工による面取りの見られるものもある。

- ・骨 鎌（第201図No.6）

1点のみの出土で、先端部は平坦で僅かな反りが見られ、基部はやや膨らみをもつものである。

- ・ 錘（第201図No.7～9）

骨角製品と鉛？を組み合わせたもので、紐を通す小さな穴が上部にあげられている。魚具に使用する錘と思われる。

- ・エイの尾（第201図No.10）

特に何らかの加工が施されているものではないが、猛毒があることから狩猟などに使用されていた可能性がある。

- ・垂 飾（第202図No.1～4）

歯牙や角を素材とし、穿孔を施すものである。穿孔される面を研磨し、平滑に仕上げ、緒締や根付として使用されたと考えられるもの（No.1）や穿孔がまだ施されていないものもある（No.4）。

- ・有孔円形骨角製品（第202図No.6～8）

径約3cmの円形を呈するもので、中央に孔を開けている。用途については、緒締等が考えられるが判然としない。

- ・ 鯉 口（第203図No.1～3）

刀子（マキリ）などの鞘口に使用されたもので、彫刻による文様が施されているもの（No.3）もある。

- ・ 針（第203図No.9）・針入れ（第203図No.4～8）

針入れは円筒状を呈しており、外面には彫刻による文様が施される。

- ・ 刺突具（第205図No.1～3）

先端部は尖り、断面が四角形を呈するものである。箸として使用された可能性があるが判然としない。

- ・ 篋（第206図No.1～6）

和鼓の時に使用するもので、現在のプラスチック製のものとほぼ同じ形状で、基部に穿孔を施す。

- ・ ボタン（第207図No.1・2）

貝製のものは大形で2孔が表裏貫通するもの（No.1）で、骨角製のものは小形で2孔

が表裏貫通せず表面のみで繋がるもの（№2）である。

・環状骨角製品（第204図№4）

径約5cmの大形のもので側部にも1ヶ所穿孔が見られる。用途は不明である。

・歯ブラシ（第205図№4～11）

骨角製の歯ブラシの柄部分である。ブラシ部分についてはMO-10等にて出土している。

・サイコロ（第208図№7）

象牙質で作られ、目の一部に青銅を流し込んでいるようである。相対する目の和は7となるものである。サイコロの重心が偏っており、1の目が出やすいようになっており、いかさま用のものと思われる。

（4）石器（第208図№8）

凝灰質砂岩を加工した石皿で外面には加工痕が残り、内面は緩やかな窪み状にくりぬいている。火皿（アベオプ）の可能性もあるが煤などの付着は無く、内面がよく揃っているため、すり鉢としての使用も考えられる。

（5）金属器

・太刀（第209図№1・2）

№1は刃部は人為的に曲げている可能性がある。鐔の透かしは規則性はなく、螺旋状の銀色を呈する金具で加飾している。№2は表面に鞘の木質部分が残っている。

・打ち刀（第210図№1）

細身で刃部が長いものである。近代の軍刀などに類似している。

・山刀（第210図№2・3、第211図）

刀子よりも大形で厚みがあり、山刀（タシロ）に類似する。山野を歩く時などに伐採などでもできる使用頻度の高いものである。

・特殊な刀子（第212図№1）

柄部と刃部が屈曲しており、中・近世の職人が弓の製作時に使用するいわゆる弓削刀子に類似するものである。

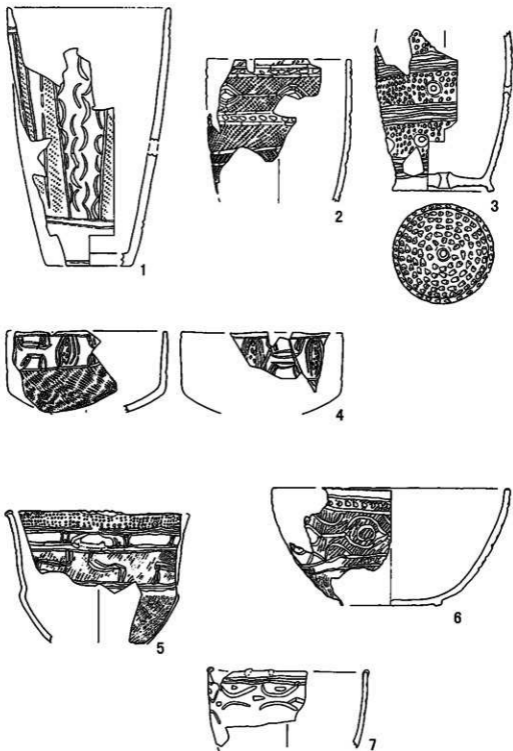
・鎌（第212図№2）

鉄製の鎌先でU字形を呈する。木製の柄を差し入れて使用するものである。

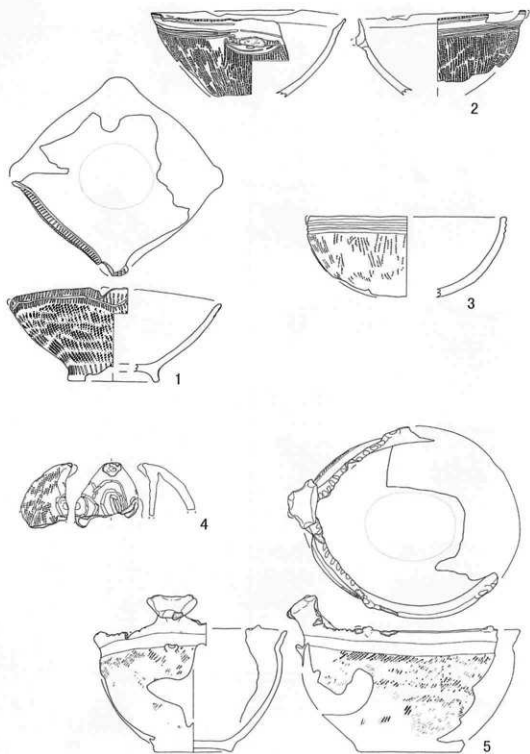
・古銭（第213図～第216図）

開元通宝（835年）から函館通宝（1856年）までの長期間に亘る古銭が出土している。12世紀代の北宋銭と18世紀代の寛永通宝が多く見られ、中世から近世初頭にかけてどの程度貨幣の流通があったのか興味深い。

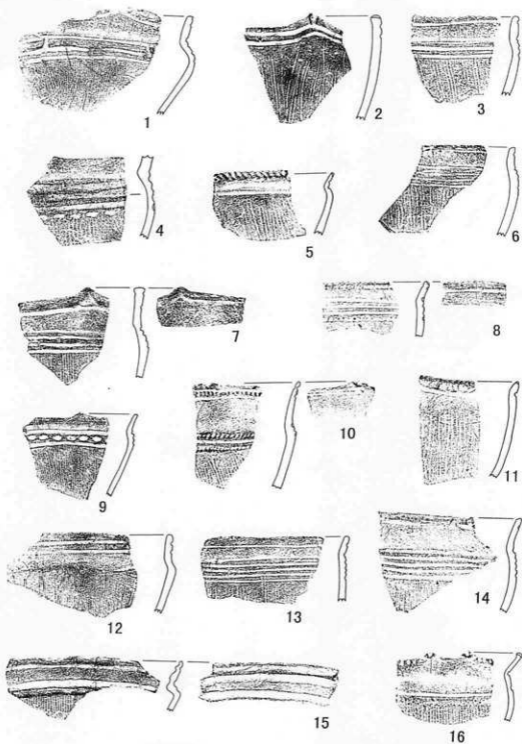
「ヤマジョウ」と屋号の入った棟上銭（第216図№6）は文政8年（1825）以降、明治2年（1869）までの場所請負人の林家と関係するものと思われる。



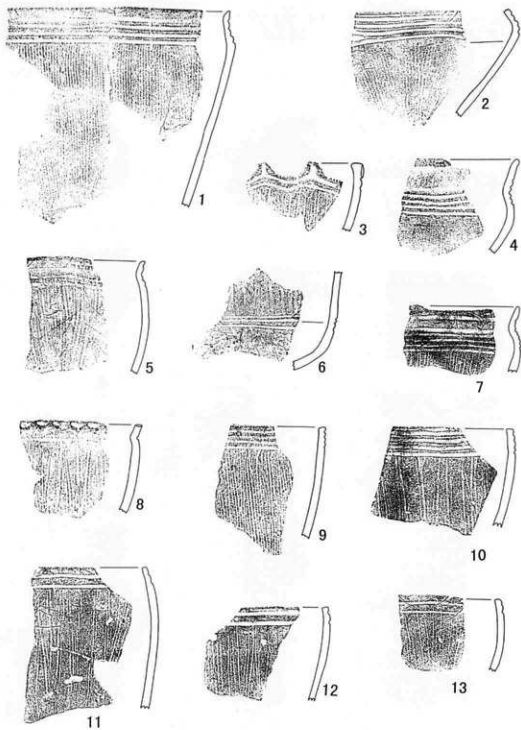
第165図 遺構外出土の土器(1)



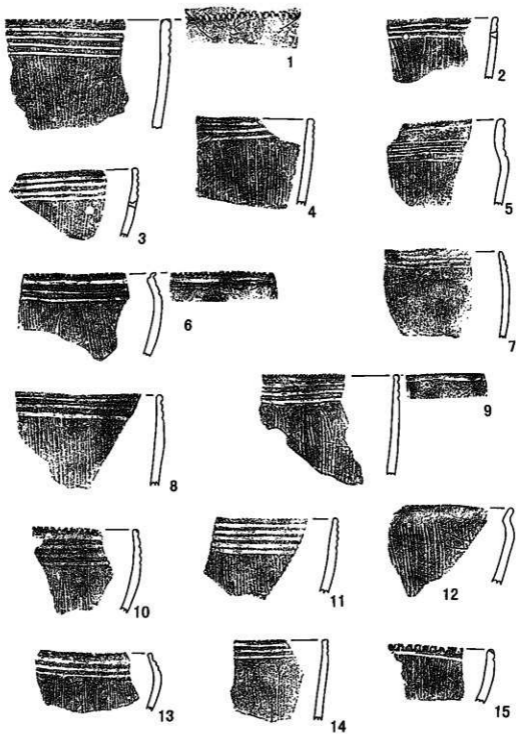
第166図 遺構外出土の土器（2）



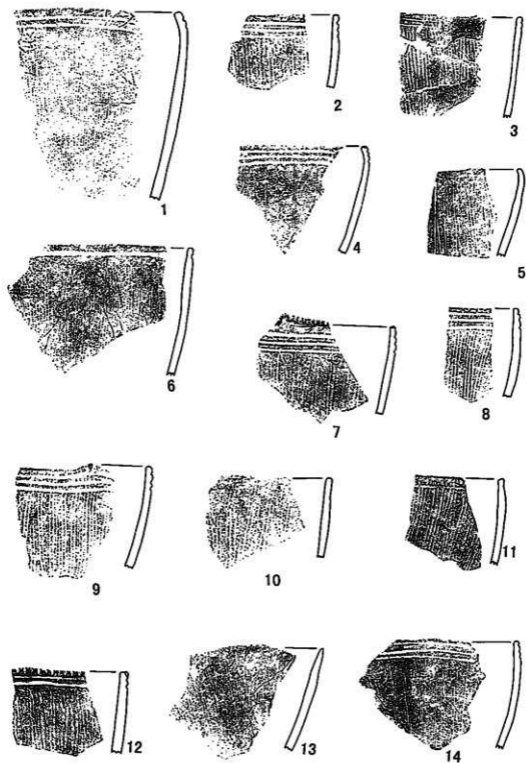
第167図 遺構外出土の土器（3）



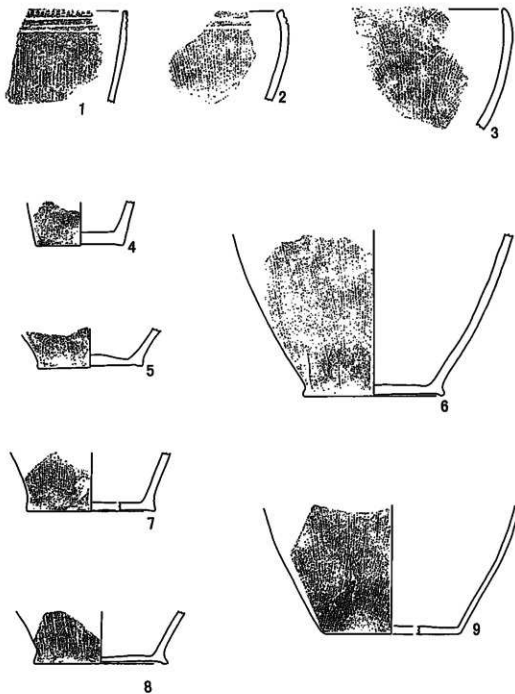
第168図 遺構外出土の土器（4）



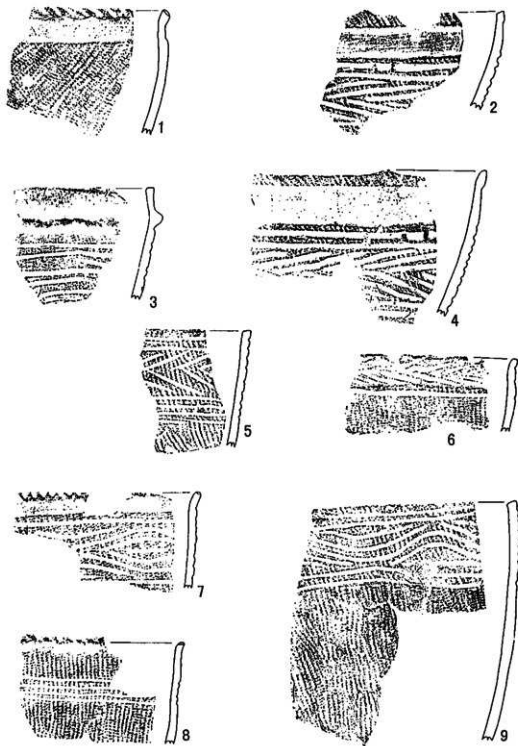
第169図 遺構外出土の土器(5)



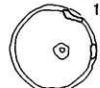
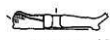
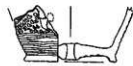
第170図 遺構外出土の土器(6)



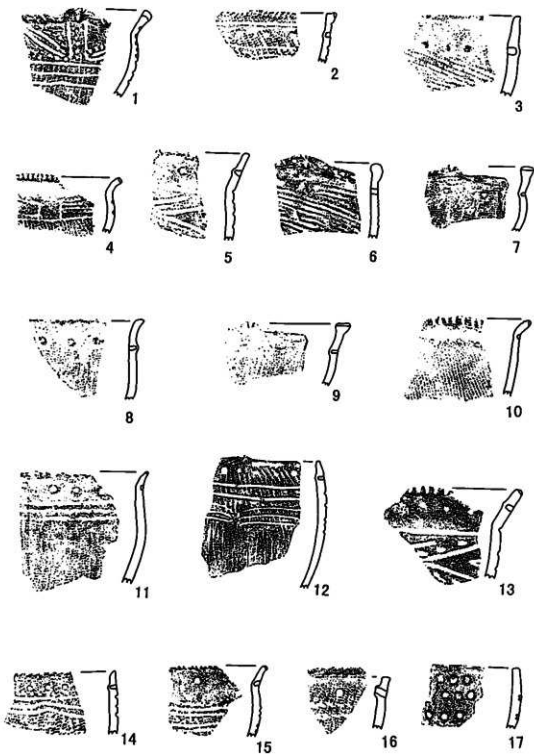
第171圖 遺構外出土の土器（7）



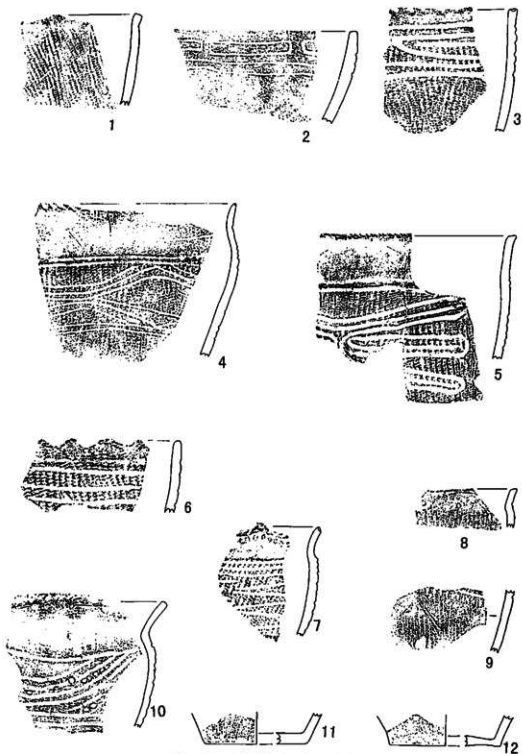
第172図 遺構外出土の土器(8)



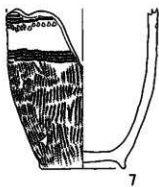
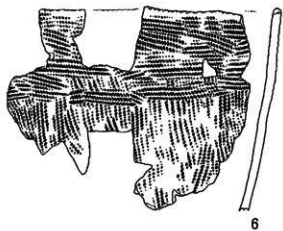
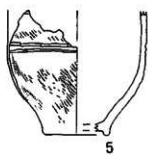
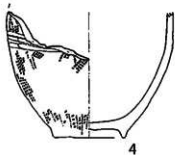
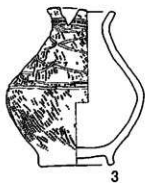
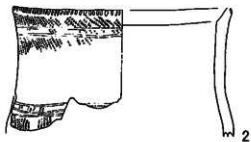
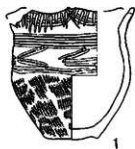
第173図 遺構外出土の土器 (9)



第174図 遺構外出土の土器 (10)



第175図 遺構外出土の土器 (11)



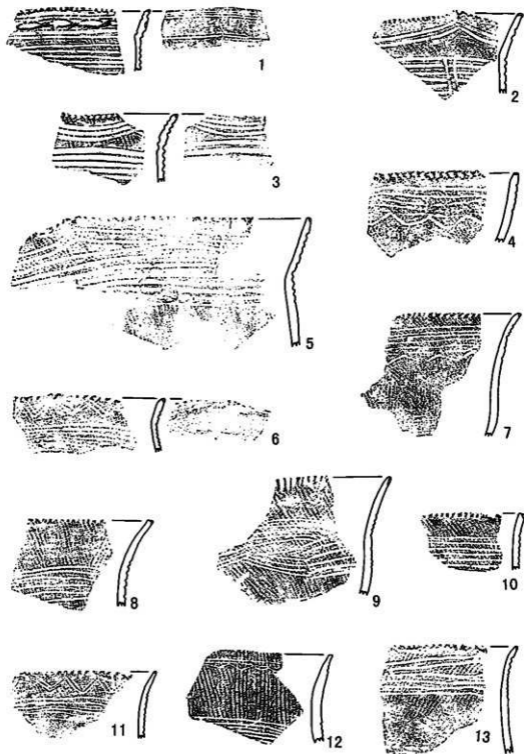
第176図 遺構外出土の土器 (12)



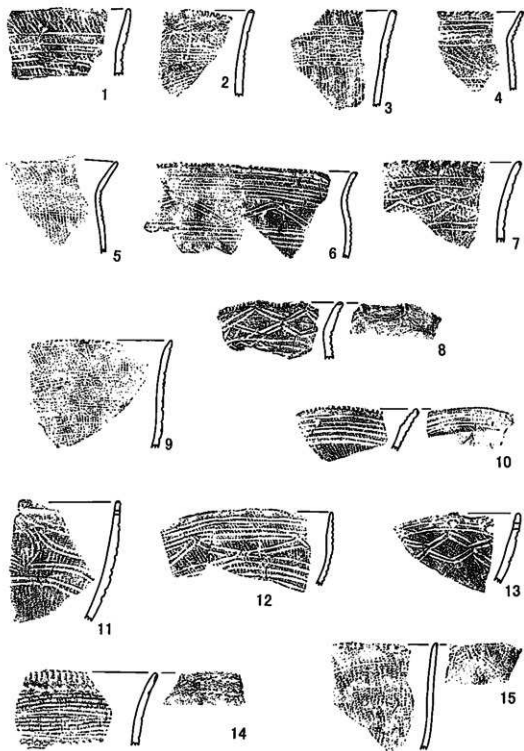
第177図 遺構外出土の土器 (13)



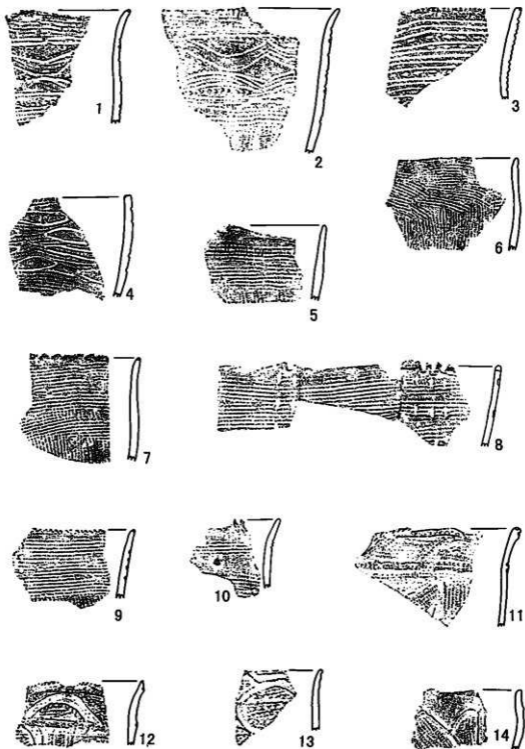
第178図 遺構外出土の土器 (14)



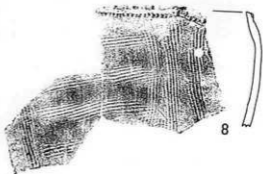
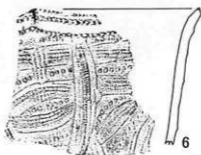
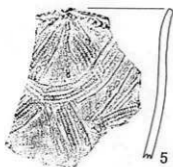
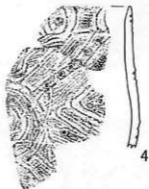
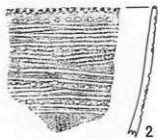
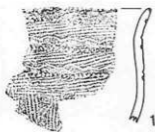
第179図 遺構外出土の土器 (15)



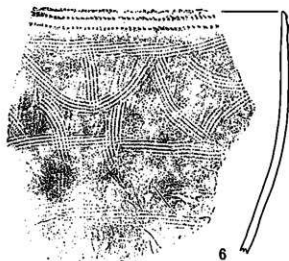
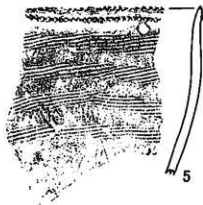
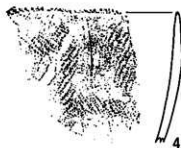
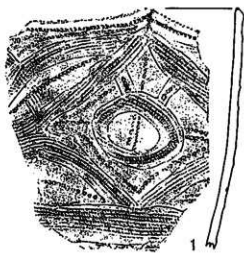
第180図 遺構外出土の土器 (16)



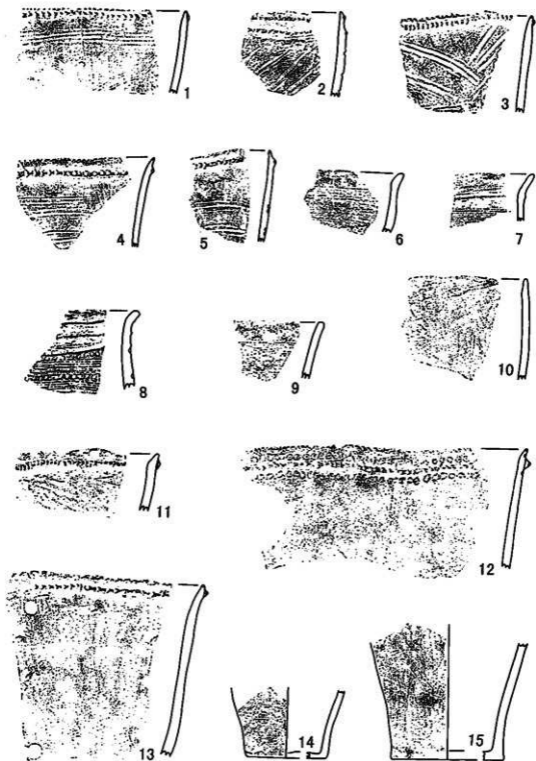
第181図 追横外出土の土器 (17)



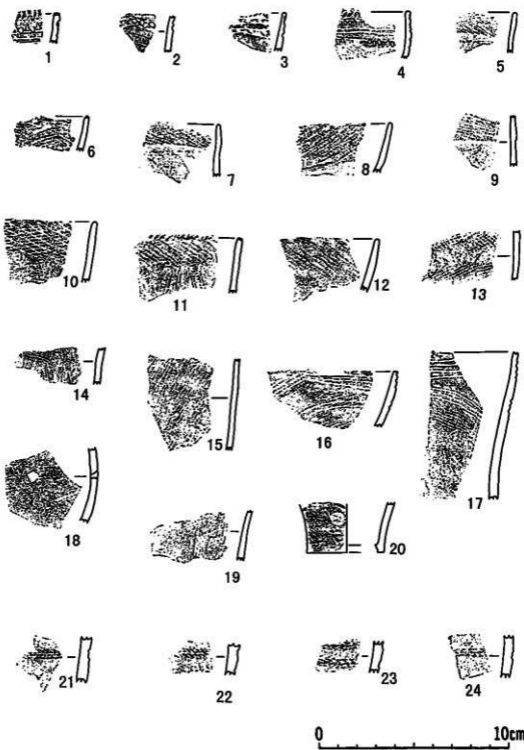
第182図 遺構外出土の土器(18)



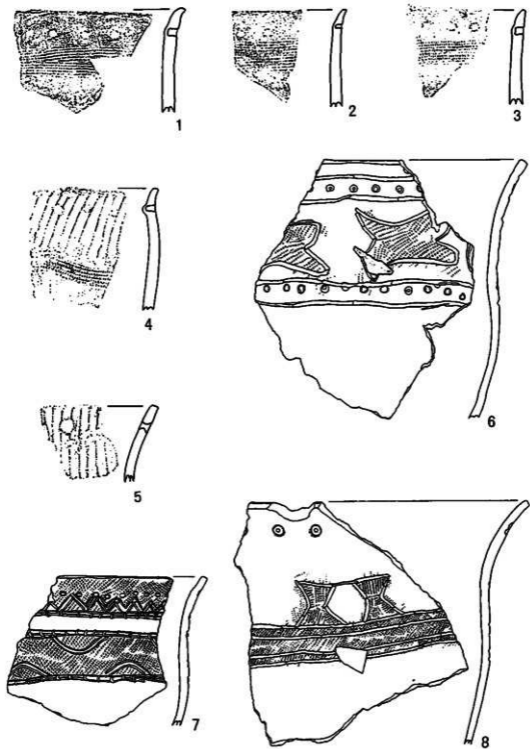
第183図 遺構外出土の土器 (19)



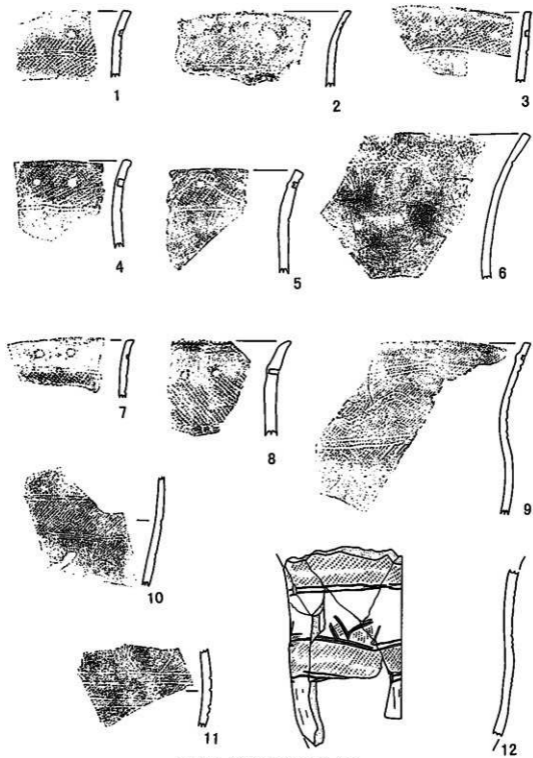
第184図 道構外出土の土器 (20)



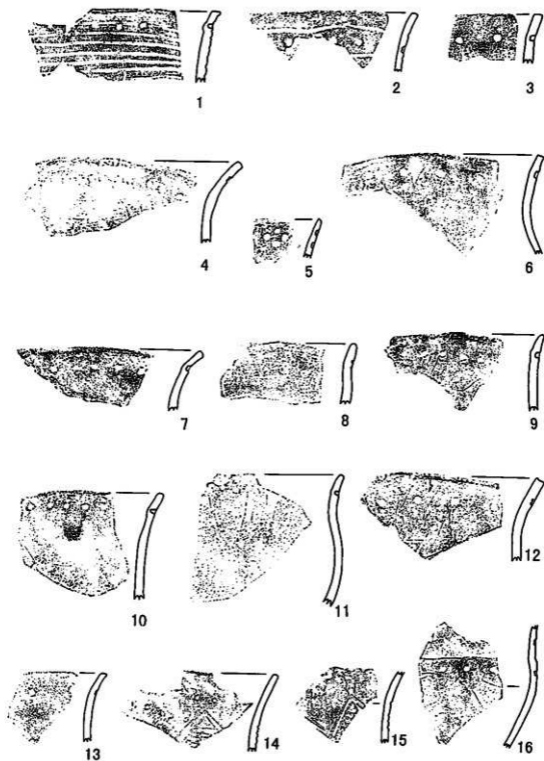
第185図 遼東外出土の土器 (21)



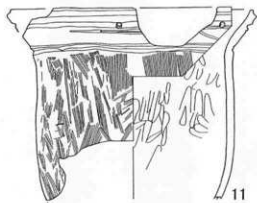
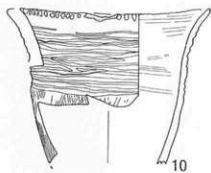
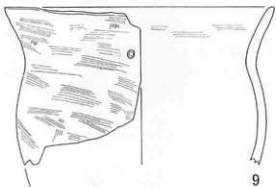
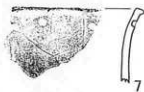
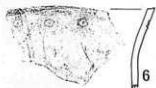
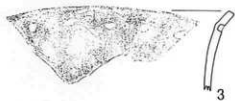
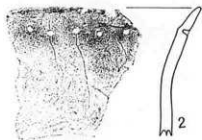
第186圖 遺構外出土の土器 (22)



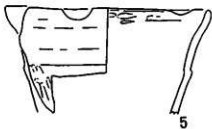
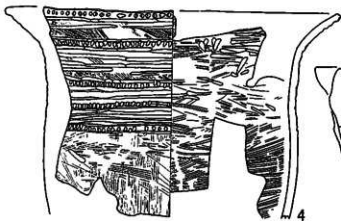
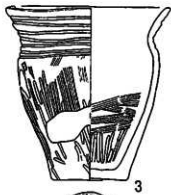
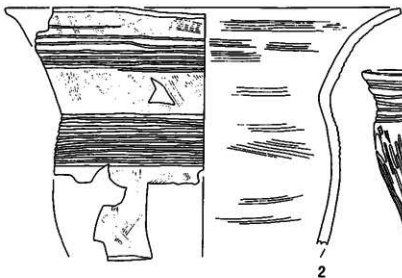
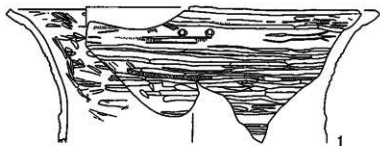
第187図 遺構外出土の土器 (23)



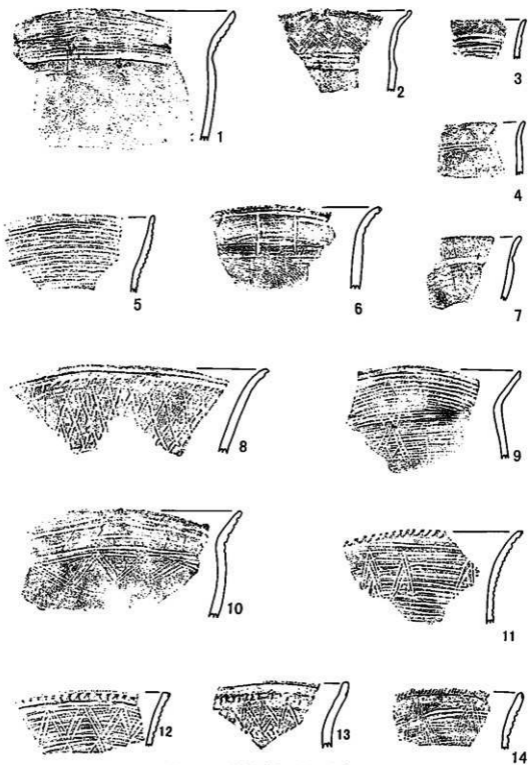
第188図 遺構外出土の土器 (24)



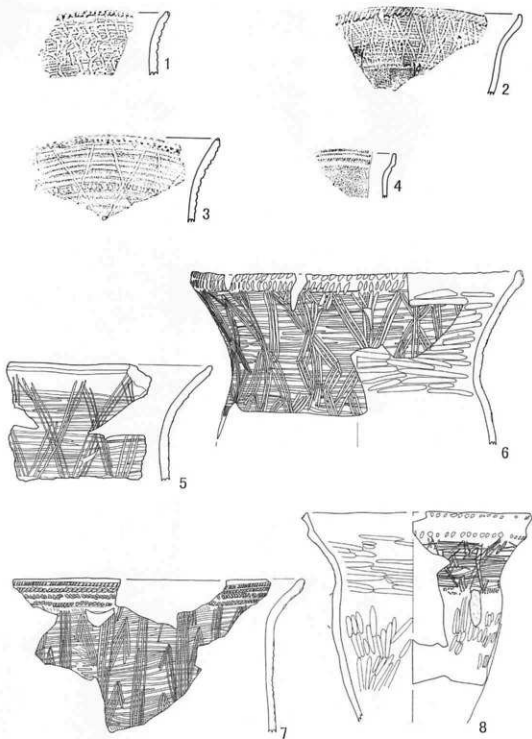
第189図 遺構外出土の土器 (25)



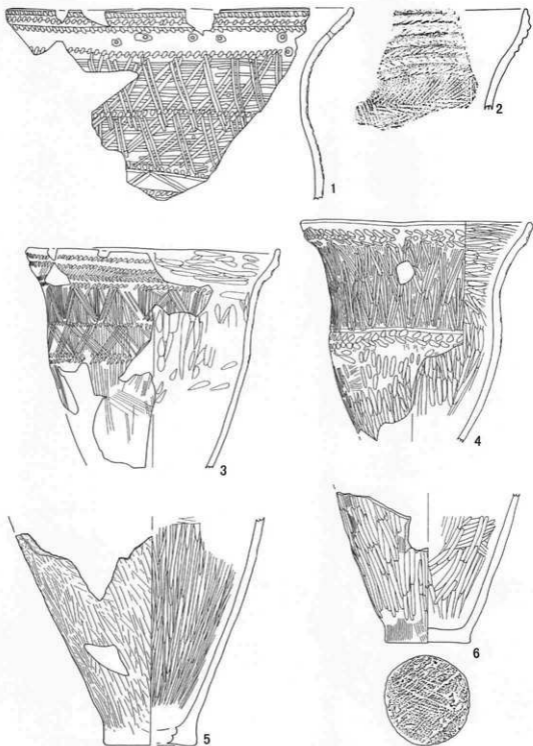
第190図 追構外出土の土器 (26)



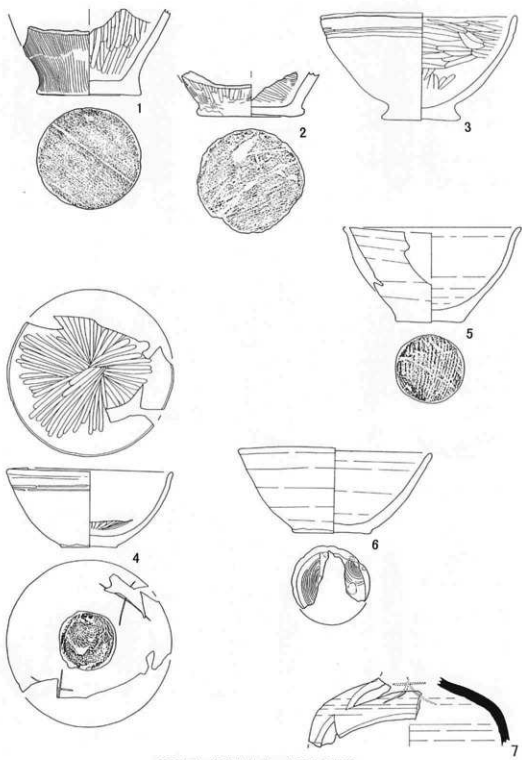
第191図 遠構外出土の土器 (27)



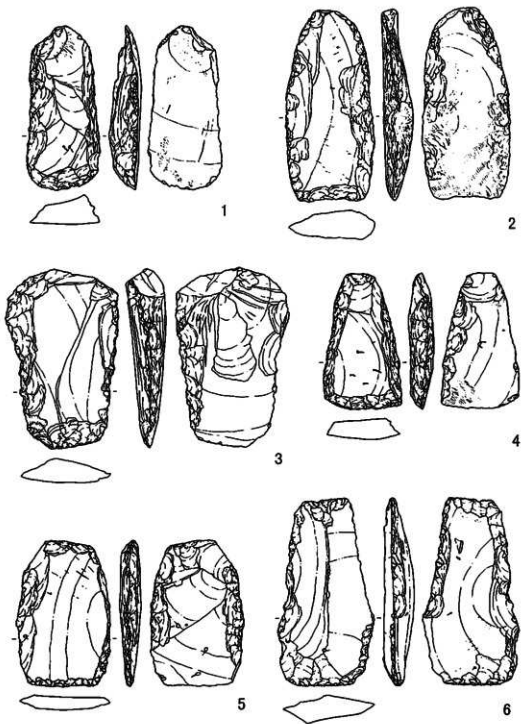
第192図 遺構外出土の土器 (28)



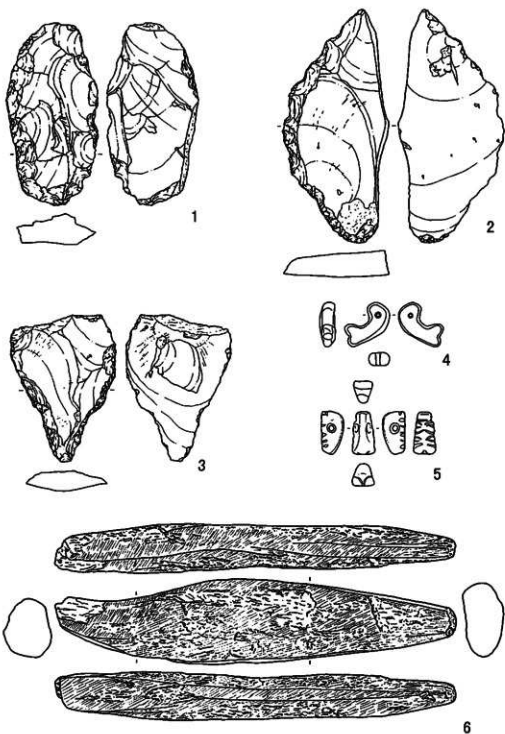
第193図 遺構外出土の土器 (29)



第194図 遠構外出土の土器と須恵器



第195図 遺構外出土の石器



第196図 遺構外出土の石器と石製品



1



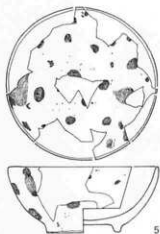
2



3



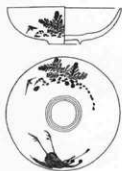
4



5



6

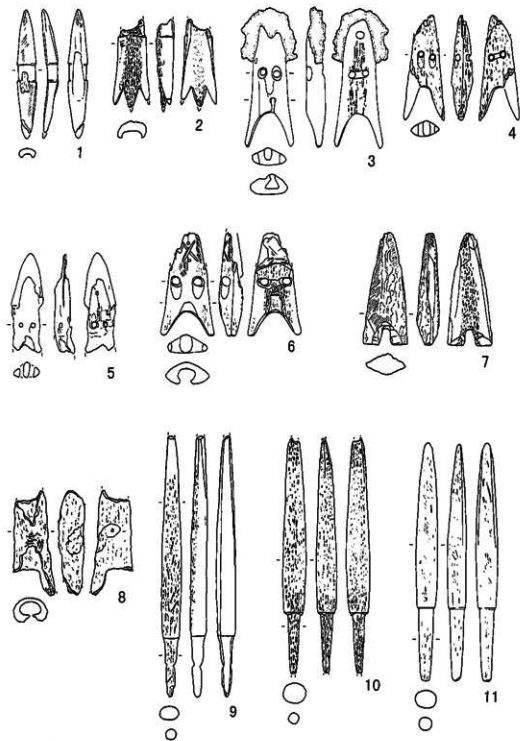


7

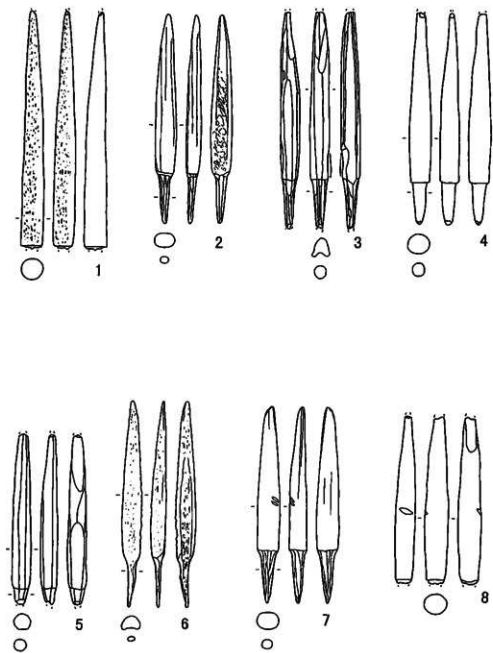
第197図 遺構外出土の磁器



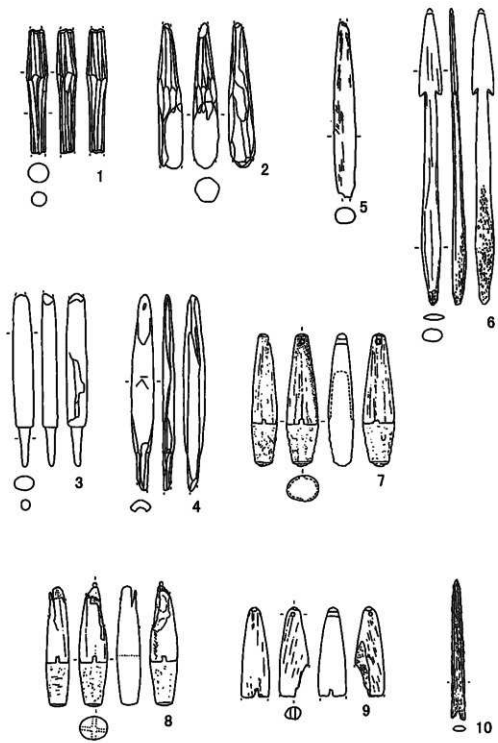
第198図 遺構外出土の磁器と七輪



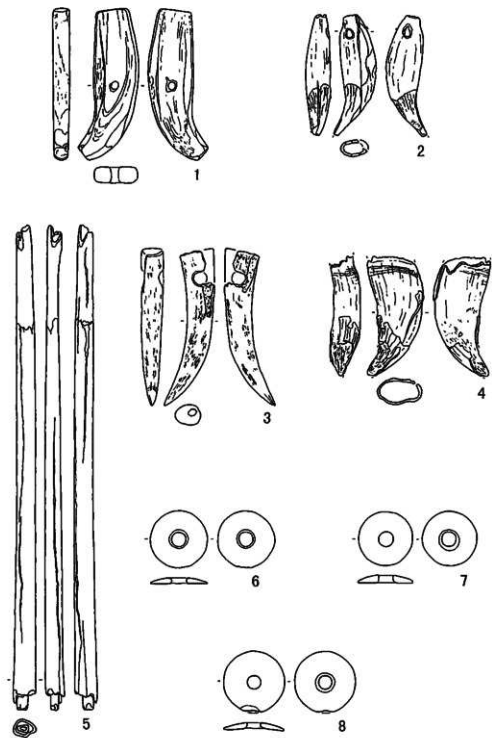
第199図 遠構外出土の骨角器(1)



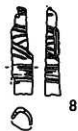
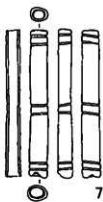
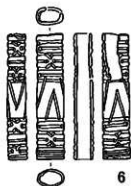
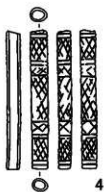
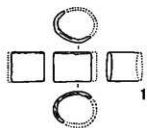
第200図 追構外出土の骨角器（2）



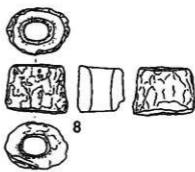
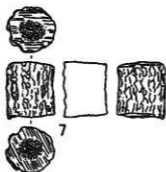
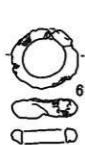
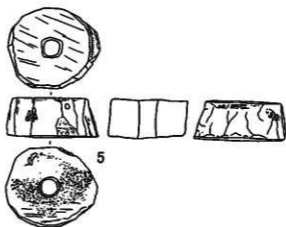
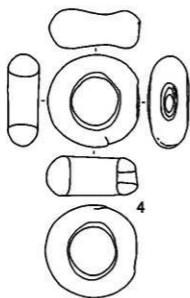
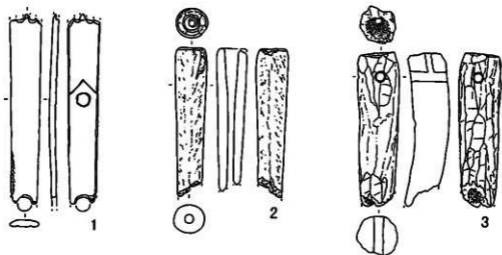
第201図 遺構外出土の骨角器(3)



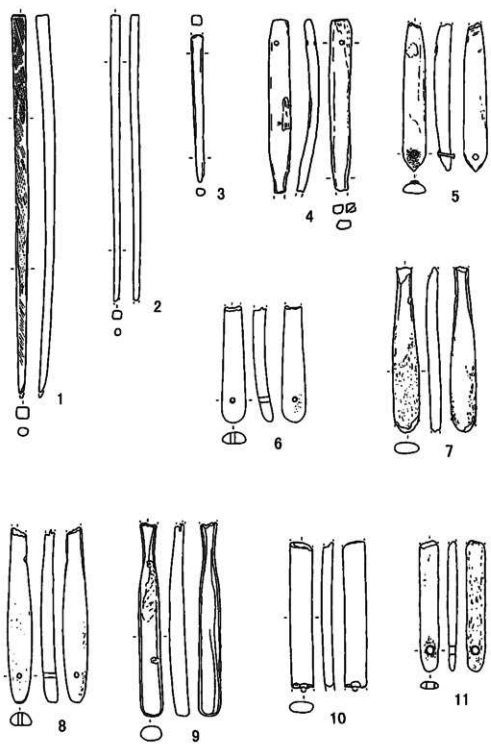
第202図 追構外出土の骨角器（4）



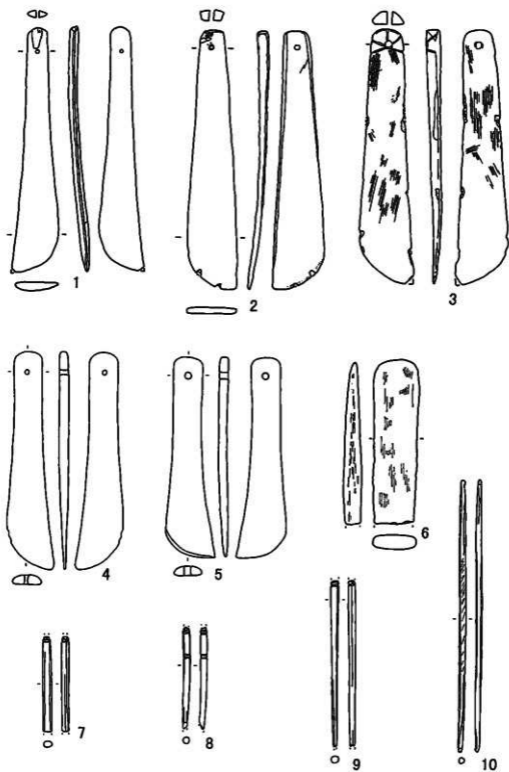
第203圖 遺構外出土の骨角器（5）



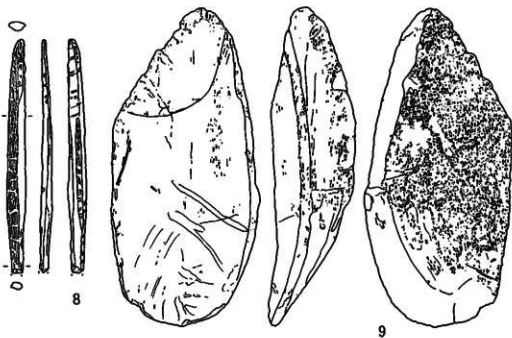
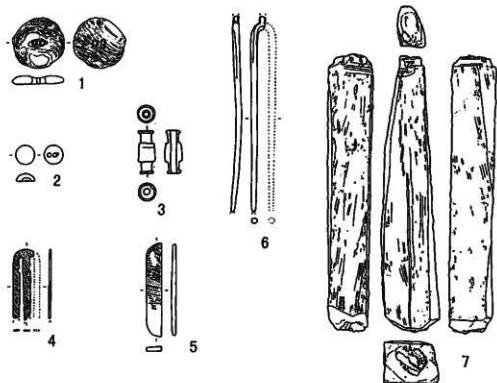
第204図 追橋外出土の骨角器(6)



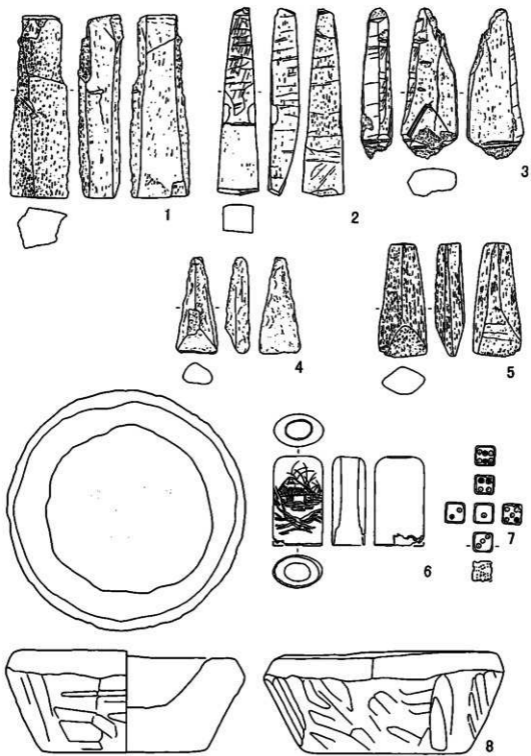
第205図 遺構外出土の骨角器 (7)



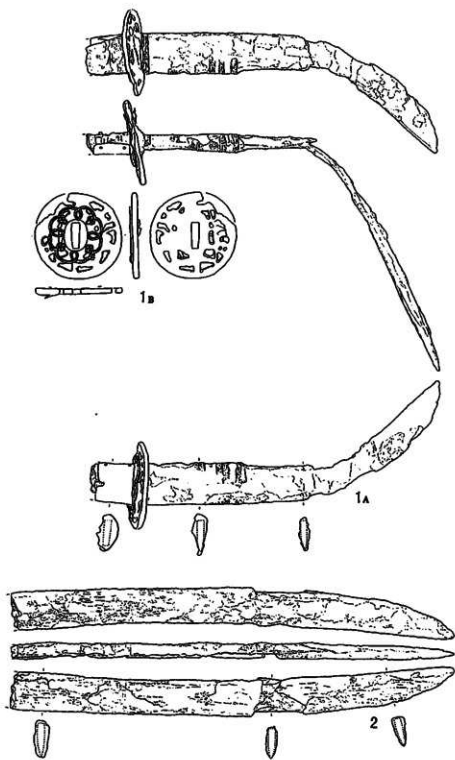
第206図 遺構外出土の骨角器 (8)



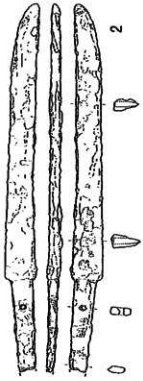
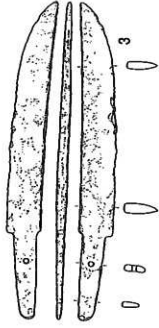
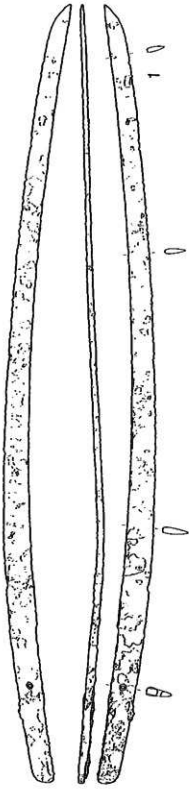
第207図 遺構外出土の骨角器(9)



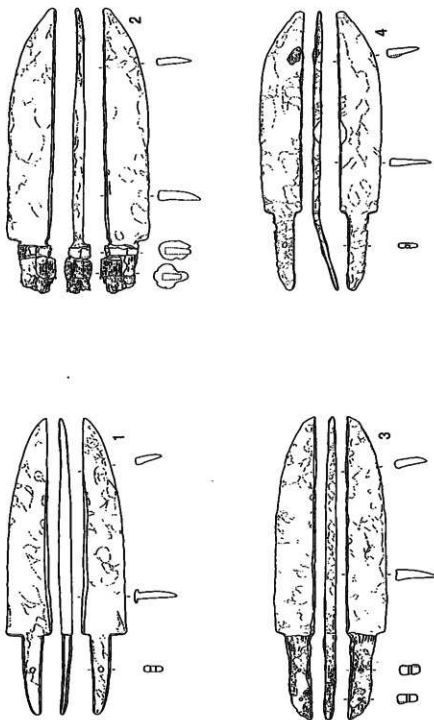
第208図 遺構外出土の骨角器と石製品



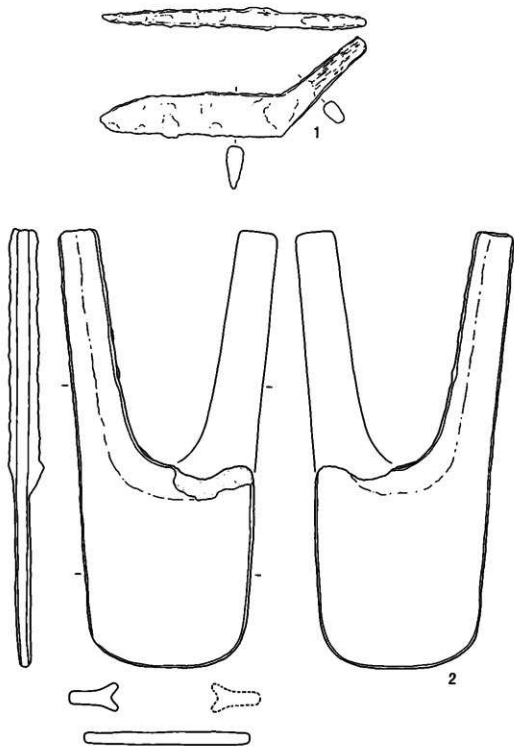
第209図 遺構外出土の刀類(1)



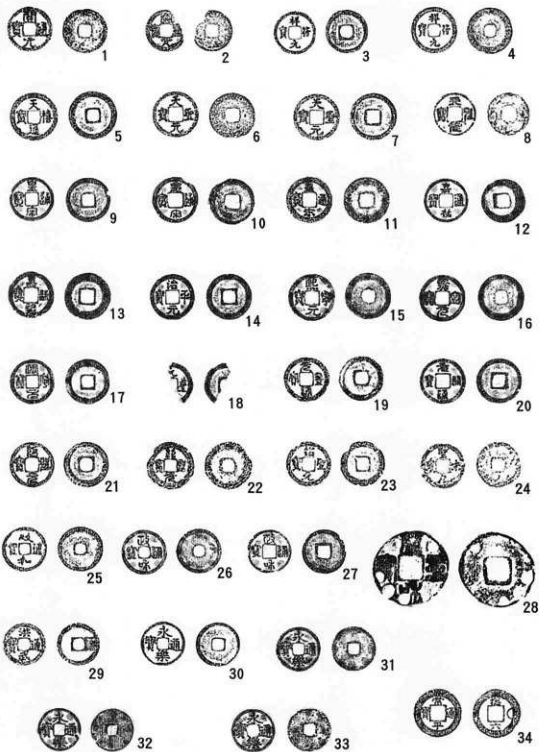
第210圖 遠構外出士の刀類（2）



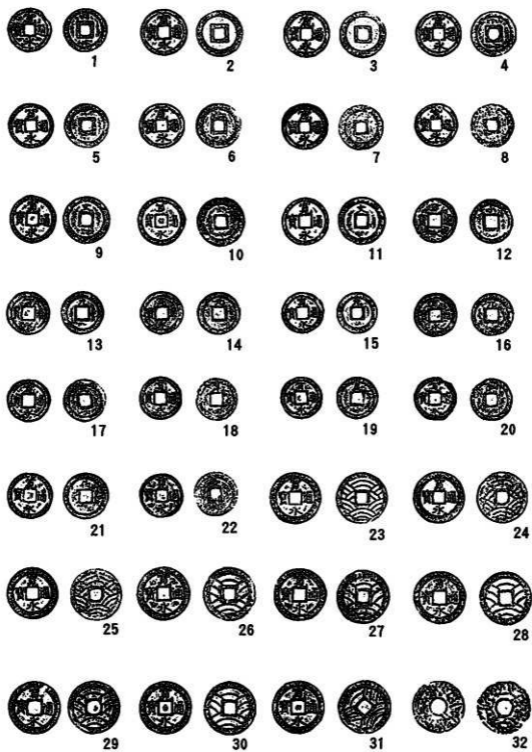
第211図 遠藤外出土の刀類(3)



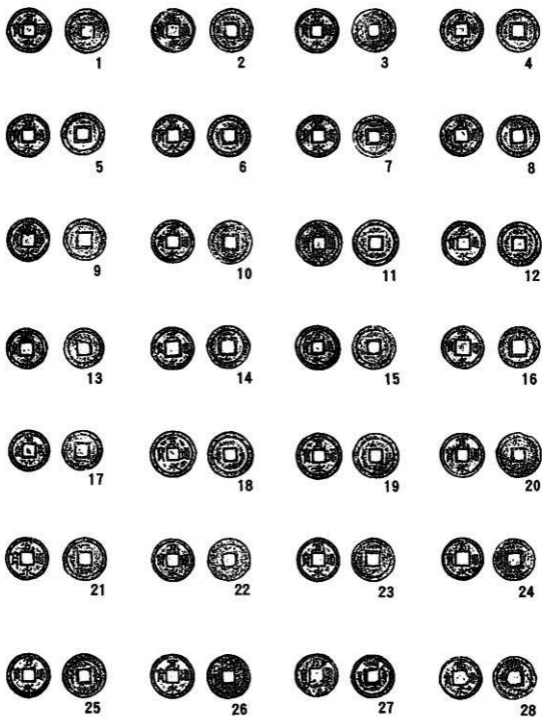
第212図 遺構外出土の鉄製品



第213回 遺構外出土の古銭(1)



第214図 遺構外出土の古銭（2）



第215図 遺構外出土の古銭（3）



1



2



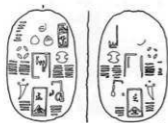
3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16

第216図 遺構外出土の古銭(4)

掲載遺物一覧(遺構)

図版番号	遺構番号	遺物番号	層位	名称	計測値	備考
17-1	GP-3	2	城底	キセル罐首	長さ 9.6cm 口径 1.4cm 火皿径 1.5cm	銅製
17-2	GP-3	11	城底	キセル罐首	長さ 4.7cm 口径 1.1cm 火皿径 1.45cm	銅製
17-3	GP-3	10	城底	キセル吸口	長さ 4.95cm 口径 1.1cm 吸口径 0.5cm	銅製
17-4	GP-3	5	城底	キセル罐首	長さ 3.9cm 口径 1.1cm 火皿径 1.7cm	銅製
17-5	GP-3	6	城底	キセル吸口	長さ 5.8cm 口径 1.0cm 吸口径 0.35cm	銅製
17-6	GP-3	17	城底	刀子	全長 15.4cm 刃長 10.4cm 刃幅 1.6cm 刃厚 0.3cm	鉄製
18-1	GP-9	1	城底	刀	全長 45.1cm 刃長 32.6cm 刃幅 4.7cm 刃厚 2.2cm	縮尺1/4 鉄製
19-1	GP-20	16	城底	石弁	長さ 6.4cm 幅 3.75cm 厚さ 0.75cm 重さ 35.8g	粘板岩
19-2	GP-20	7	城底	石弁	長さ 10.6cm 幅 4.85cm 厚さ 2.2cm 重さ 176g	緑色片岩
20-3	GP-20	9	城底	石釧	長さ 25.3cm 幅 17.6cm 厚さ 7.1cm 重さ 4128g	縮尺1/4 砂岩
20-4	GP-20	3	城底	石釧	長さ 2.15cm 幅 1.7cm 厚さ 0.25cm 重さ 0.9g	黒曜石
20-5	GP-20	4	城底	石釧	長さ 2.0cm 幅 1.35cm 厚さ 0.3cm 重さ 0.7g	黒曜石
20-6	GP-20	5	城底	石釧	長さ 2.5cm 幅 1.5cm 厚さ 0.25cm 重さ 0.7g	黒曜石
20-7	GP-20	6	城底	石釧	長さ 2.15cm 幅 1.55cm 厚さ 0.25cm 重さ 0.6g	黒曜石
20-8	GP-20	17	城底	石釧	長さ 3.1cm 幅 1.8cm 厚さ 0.25cm 重さ 0.8g	黒曜石
20-9	GP-20		埋土	石釧	長さ 2.7cm 幅 1.9cm 厚さ 0.3cm 重さ 1.2g	粘板岩
20-10	GP-20		埋土	石釧	長さ (1.8cm) 幅 1.75cm 厚さ 0.25cm 重さ (0.7g)	黒曜石
20-11	GP-20		埋土	土器	口径 (15.8cm) 胴径 (14.05cm) 器高 (11.0cm)	埴野 d (恵山)
20-12	GP-20		埋土	土器	口径 (17.7cm) 胴径 (16.5cm) 器高 22.75cm 底径 (5.55cm)	埴野 d (恵山)
21-1	GP-22	5	城底	碧玉	直径 1.4×1.1cm 長さ 1.85cm 穴径 0.3cm 重さ 3.1g	土製
21-2	GP-22	6	城底	碧玉	直径 1.3×1.15cm 長さ 2.0cm 穴径 0.2cm 重さ 3.0g	土製
21-3	GP-22	7	城底	碧玉	直径 1.3cm 長さ 1.8cm 穴径 0.25cm 重さ 3.1g	土製
21-4	GP-22	8	城底	碧玉	直径 1.2×1.0cm 長さ 1.35cm 穴径 0.25cm 重さ 1.9g	土製
21-5	GP-22	9	城底	碧玉	直径 1.3×1.2cm 長さ 1.8cm 穴径 0.3cm 重さ 3.0g	土製
21-6	GP-22	10	城底	碧玉	直径 1.2×1.05cm 長さ 1.8cm 穴径 0.25cm 重さ 2.5g	土製
21-7	GP-22	11	城底	碧玉	直径 1.3×1.15cm 長さ 1.7cm 穴径 0.2cm 重さ 2.9g	土製
21-8	GP-22	12	城底	碧玉	直径 1.2×1.0cm 長さ 1.9cm 穴径 0.2cm 重さ 2.2g	土製
21-9	GP-22	13	城底	碧玉	直径 1.3×1.1cm 長さ 1.9cm 穴径 0.3cm 重さ 2.9g	土製
21-10	GP-22	15	城底	碧玉	直径 1.3×1.1cm 長さ 1.6cm 穴径 0.25cm 重さ 2.4g	土製
21-11	GP-22	16	城底	碧玉	直径 1.3×1.0cm 長さ 1.5cm 穴径 0.25cm 重さ 2.3g	土製
21-12	GP-22	17	城底	丸玉	直径 1.3cm 長さ 1.3cm 穴径 0.25cm 重さ 2.4g	土製
21-13	GP-22	18	城底	碧玉	直径 1.25×1.15cm 長さ 1.7cm 穴径 0.3cm 重さ 2.7g	土製
21-14	GP-22	19	城底	碧玉	直径 1.35cm 長さ 1.7cm 穴径 0.2cm 重さ 2.9g	土製
22-15	GP-22	20	城底	碧玉	直径 1.3cm 長さ 1.75cm 穴径 0.15cm 重さ 2.8g	土製
22-16	GP-22	21	城底	碧玉	直径 1.2×1.05cm 長さ 1.45cm 穴径 0.2cm 重さ 1.7g	土製

図版番号	遺物番号	遺物番号	部位	名称	計測値	備考
22-17	GP-22	22	壺底	丸玉	直径1.25×0.85cm長さ0.45cm 穴径0.25cm重さ1.1g	土製
22-18	GP-22	23	壺底	丸玉	直径1.2×1.1cm長さ1.45cm 穴径0.2cm重さ2.0g	土製
22-19	GP-22	24	壺底	丸玉	直径1.1長さ1.1cm穴径0.2cm重さ1.5g	土製
22-20	GP-22	25	壺底	丸玉	直径1.25×0.95cm長さ0.9cm 穴径0.2cm重さ1.0g	土製
22-21	GP-22	26	壺底	丸玉	直径1.4×1.0cm長さ1.3cm 穴径0.2cm重さ2.0g	土製
22-22	GP-22	27	壺底	丸玉	直径1.05長さ1.45cm穴径0.15cm重さ1.0g	土製
22-23	GP-22	29	壺底	丸玉	直径1.1長さ1.3cm穴径0.15cm重さ1.6g	土製
22-24	GP-22	30	壺底	丸玉	直径1.2×1.1cm長さ1.6cm 穴径0.2cm重さ2.2g	土製
22-25	GP-22	31	壺底	丸玉	直径1.15×1.05cm長さ1.2cm 穴径0.3cm重さ1.3g	土製
22-26	GP-22	32	壺底	丸玉	直径1.1長さ1.65cm穴径0.1cm重さ1.9g	土製
22-27	GP-22	33	壺底	丸玉	直径1.25×1.15cm長さ1.65cm 穴径0.35cm重さ2.7g	土製
22-28	GP-22	34	壺底	丸玉	直径1.2長さ2.0cm穴径0.3cm重さ3.5g	土製
22-29	GP-22	35	壺底	丸玉	直径1.3長さ1.6cm穴径0.25cm重さ2.7g	土製
22-30	GP-22	14	壺底	平玉	直径2.3長さ0.5cm穴径0.65cm重さ3.8g	輝石安山岩
22-31	GP-22	28	壺底	平玉	直径2.6×2.5cm厚さ0.5cm 穴径大0.4cm穴径小0.3cm重さ4.1g 長さ4.7cm幅2.2cm厚さ2.5cm重さ3.8g	凝灰岩
22-32	GP-22	36	壺底	片断		磁石
22-33	GP-22	2	埋土	土器片	拓本-胴部	冨野d(恵山)?
23-1	GP-29	5	壺底	土器片	拓本-胴部	冨野e(後北)?
23-2	GP-29	29	埋土	土器片	拓本-胴部	冨野e(後北C-D)
23-3	GP-29	12	壺底	丸玉	直径0.7cm厚さ0.4cm穴径0.15cm重さ0.3g	蛇紋岩
23-4	GP-29	18	壺底	丸玉	直径0.7cm厚さ0.35cm穴径0.15cm重さ0.3g	蛇紋岩
23-5	GP-29	20	壺底	丸玉	直径0.7cm厚さ0.4cm穴径0.2cm重さ0.3g	蛇紋岩
23-6	GP-29	22	壺底	丸玉	直径0.65cm厚さ0.45cm穴径0.2cm重さ0.3g	蛇紋岩
23-7	GP-29	26	壺底	丸玉	直径0.7cm厚さ0.45cm穴径0.25cm重さ0.3g	蛇紋岩
23-8	GP-29	27	壺底	丸玉	直径0.6cm厚さ0.45cm穴径0.25cm重さ0.3g	蛇紋岩
23-9	GP-29	35	壺底	丸玉	直径0.75cm厚さ0.35cm穴径0.25cm重さ0.2g	蛇紋岩
23-10	GP-29	36	壺底	丸玉	直径0.7cm厚さ0.45cm穴径0.2cm重さ0.3g	蛇紋岩
23-11	GP-29	41	壺底	丸玉	直径0.7cm厚さ0.15cm穴径0.15cm重さ0.4g	蛇紋岩
23-12	GP-29	43	壺底	丸玉	直径0.7cm厚さ0.35cm穴径0.2cm重さ0.3g	蛇紋岩
24-1	GP-32	6	壺底	石片	長さ12.4cm幅4.75cm厚さ2.7cm重さ246g	緑色片岩
24-2	GP-32	7	壺底	石片	長さ10.95cm幅4.25cm厚さ1.2cm重さ124g	緑色片岩
25-3	GP-32	9	埋土	石釧	長さ(2.25cm)幅1.3cm厚さ0.35cm重さ(0.7g)	黒曜石
25-4	GP-32	10	埋土	石釧	長さ3.05cm幅1.2cm厚さ0.45cm重さ1.2g	黒曜石
25-5	GP-32	11	埋土	石釧	長さ3.15cm幅1.2cm厚さ0.45cm重さ1.2g	黒曜石
25-6	GP-32	12	埋土	石釧	長さ3.5cm幅1.2cm厚さ0.5cm重さ1.3g	黒曜石
25-7	GP-32	15	埋土	石釧	長さ2.85cm幅1.2cm厚さ0.4cm重さ1.0g	黒曜石
25-8	GP-32	16	埋土	石釧	長さ3.55cm幅1.05cm厚さ0.45cm重さ1.1g	黒曜石
25-9	GP-32	9	埋土	石釧	長さ2.4cm幅1.15cm厚さ0.4cm重さ0.7g	黒曜石
25-10	GP-32	1	壺底	スクレイパー	長さ(4.3cm)幅2.3cm厚さ0.7cm重さ(6.4g)	チャート
25-11	GP-32	4	壺底	スクレイパー	長さ5.0cm幅2.1cm厚さ0.8cm重さ8.3g	チャート

図版番号	追積番号	遺物番号	層位	名称	計測値	備考
25-12	GP-32	13	城底	スクレイパー	長さ3.95cm幅1.7cm厚さ1.0cm重さ5.4g	チャート
25-13	GP-32		埋土	ナイフ	長さ(4.4cm)幅1.55cm厚さ0.85cm重さ(4.7g)	チャート
25-14	GP-32	5	城底	スクレイパー	長さ1.95cm幅4.7cm厚さ0.6cm重さ4.8g	頁岩
25-15	GP-32	8	城底	原石	長さ6.0cm幅3.85cm厚さ2.5cm重さ93.5g	玉髄
26-1	GP-34	5	城底	須磨器	口径14.3cm器高4.4cm底径9.2cm	坏蓋 穂尺1/2
27-1	GP-37	5	城底	土器	器高(4.4cm)底径7.6cm	甕群d(恵山)
27-2	GP-37	8	城底	スクレイパー	長さ2.5cm幅3.75cm厚さ0.85cm重さ7.8g	チャート
27-3	GP-37	10	城底	スクレイパー	長さ2.6cm幅3.3cm厚さ0.6cm重さ4.9g	チャート
27-4	GP-37	7	城底	スクレイパー	長さ5.35cm幅2.35cm厚さ0.9cm重さ12.0g	チャート
27-5	GP-37	11	城底	スクレイパー	長さ5.1cm幅2.7cm厚さ1.05cm重さ13.0g	チャート
27-6	GP-37	12	城底	スクレイパー	長さ5.15cm幅2.1cm厚さ0.75cm重さ5.6g	チャート
27-7	GP-37	1	城底	石鏝	長さ(3.25cm)幅1.25cm厚さ0.45cm重さ(1.2g)	黒曜石
27-8	GP-37	2	城底	石鏝	長さ(3.15cm)幅1.1cm厚さ0.4cm重さ(1.0g)	黒曜石
27-9	GP-37	13	城底	U、F	長さ(2.85cm)幅(2.55cm)厚さ0.45cm重さ(2.7g)	チャート
27-10	GP-37	15	城底	刺片	長さ4.65cm幅3.15cm厚さ0.85cm重さ13.2g	チャート
28-11	GP-37	6	城底	ナイフ	長さ9.0cm幅3.25cm厚さ0.9cm重さ28.2g	チャート
28-12	GP-37	9	城底	石弁	長さ12.25cm幅3.6cm厚さ2.05cm重さ160g	緑色片岩
28-13	GP-37	3	城底	石弁	長さ14.9cm幅6.2cm厚さ2.3cm重さ320g	粘板岩
30-1	GP-42	3	城底	土器	口径15.25cm器高21.2cm 底径6.4cm	甕群d(恵山)
30-2	GP-42	4	城底	石鏝	長さ4.85cm幅1.2cm厚さ0.45cm重さ2.0g	黒曜石
30-3	GP-42	5	城底	石鏝	長さ3.4cm幅1.1cm厚さ0.4cm重さ1.0g	黒曜石
30-4	GP-42	6	城底	石鏝	長さ3.5cm幅1.2cm厚さ0.4cm重さ1.1g	チャート
30-5	GP-42	7	城底	石鏝	長さ4.2cm幅1.15cm厚さ0.45cm重さ1.7g	黒曜石
30-6	GP-42	8	城底	石鏝	長さ3.1cm幅1.05cm厚さ0.3cm重さ0.9g	黒曜石
30-7	GP-42	9	城底	石鏝	長さ4.1cm幅1.1cm厚さ0.35cm重さ1.1g	黒曜石
30-8	GP-42	10	城底	石鏝	長さ3.3cm幅1.05cm厚さ0.35cm重さ1.0g	黒曜石
30-9	GP-42	11	城底	石鏝	長さ3.25cm幅1.0cm厚さ0.35cm重さ0.9g	黒曜石
30-10	GP-42	2	埋土	原石	長さ5.1cm幅3.7cm厚さ2.3cm重さ60.0g	玉髄
30-11	GP-42		埋土	丸玉	直径1.1cm厚さ0.75cm穴径0.35cm重さ1.3g	蛇紋岩
31-1	GP-46	5	城底	丸玉	直径1.15cm厚さ0.85cm穴径0.35cm重さ1.2g	ガラス
31-2	GP-46	6	城底	丸玉	直径1.15cm厚さ0.6cm穴径0.4cm重さ1.1g	ガラス
31-3	GP-46		埋土	キセル覆首	長さ5.7cm口径0.9cm火皿径1.6cm	銅製
31-4	GP-46	2	城底	鈎	長さ(7.1cm)幅(6.75cm)厚さ(1.15cm)	鉄製
32-5	GP-46	1	城底	大刀	全長57.5cm刃長45.8cm刃幅8.85cm刃厚1.1cm	鍔刃/ハ 鉄製、身刃は銅製?
32-8	GP-46	4	城底	刀子	全長16.5cm刃幅2.5cm刃厚1.3cm	鉄製
33-1	GP-62		埋土	土器片	拓本-口縁部	甕群e(後北C ₁ -D)
33-2	GP-62		埋土	土器片	拓本-口縁部	甕群e(後北C ₂ -D)
34-1	GP-78	1	城底	土器	口径14.6×13.8cm器高7.8cm	甕群d(恵山)
34-2	GP-78	18	城底	石鏝	長さ3.3cm幅1.05cm厚さ0.3cm重さ0.85g	黒曜石
34-3	GP-78	24	城底	石鏝	長さ4.15cm幅1.05cm厚さ0.3cm重さ1.0g	チャート
34-4	GP-78	25	城底	石鏝	長さ3.75cm幅1.05cm厚さ0.2cm重さ0.6g	チャート
34-5	GP-78	26	城底	石鏝	長さ4.0cm幅1.0cm厚さ0.4cm重さ1.0g	チャート
34-6	GP-78	27	城底	石鏝	長さ3.7cm幅1.15cm厚さ0.35cm重さ0.9g	チャート
34-7	GP-78	28	城底	石鏝	長さ3.6cm幅0.95cm厚さ0.2cm重さ0.7g	チャート
34-8	GP-78	29	城底	石鏝	長さ3.8cm幅1.05cm厚さ0.4cm重さ0.9g	チャート
34-9	GP-78	30	城底	石鏝	長さ3.9cm幅1.1cm厚さ0.3cm重さ0.9g	チャート
34-10	GP-78	31	城底	石鏝	長さ3.8cm幅1.05cm厚さ0.35cm重さ1.0g	チャート

図版番号	遺物番号	遺物番号	層位	名称	計測値	備考
34-11	GP-78	32	壊底	石環	長さ4.05cm幅1.0cm厚さ0.4cm重さ1.1g	チャート
34-12	GP-78	33	壊底	石環	長さ3.95cm幅1.05cm厚さ0.3cm重さ0.9g	チャート
34-13	GP-78	34	壊底	石環	長さ4.05cm幅1.05cm厚さ0.3cm重さ0.9g	チャート
34-14	GP-78	35 ①	壊底	石環	長さ3.9cm幅1.0cm厚さ0.3cm重さ0.9g	チャート
34-15	GP-78	35 ②	壊底	石環	長さ3.85cm幅1.0cm厚さ0.25cm重さ0.9g	チャート
34-16	GP-78	48	壊底	石環	長さ4.0cm幅1.05cm厚さ0.35cm重さ1.0g	チャート
34-17	GP-78	49	壊底	石環	長さ3.9cm幅1.0cm厚さ0.3cm重さ0.9g	チャート
35-18	GP-78	50	壊底	石環	長さ3.6cm幅1.05cm厚さ0.25cm重さ0.7g	チャート
35-19	GP-78	51	壊底	石環	長さ3.9cm幅1.0cm厚さ0.3cm重さ0.9g	チャート
35-20	GP-78	52	壊底	石環	長さ4.15cm幅1.1cm厚さ0.35cm重さ1.1g	チャート
35-21	GP-78	53	壊底	石環	長さ4.3cm幅1.1cm厚さ0.3cm重さ1.1g	チャート
35-22	GP-78	54	壊底	石環	長さ3.6cm幅1.05cm厚さ0.3cm重さ0.7g	チャート
35-23	GP-78		埋土	石環	長さ4.05cm幅1.05cm厚さ0.35cm重さ1.1g	チャート
35-24	GP-78	72	壊底	スクレイパー	長さ5.7cm幅2.9cm厚さ0.5cm重さ12.8g	頁岩
35-25	GP-78	68	壊底	スクレイパー	長さ(4.6cm)幅2.3cm厚さ0.5cm重さ(4.7g)	チャート
35-26	GP-78	59	壊底	スクレイパー	長さ5.7cm幅4.45cm厚さ1.1cm重さ21.5g	チャート
35-27	GP-78	13	壊底	スクレイパー	長さ5.55cm幅2.4cm厚さ0.5cm重さ8.1g	チャート
35-28	GP-78	17	壊底	スクレイパー	長さ5.25cm幅2.1cm厚さ0.2cm重さ4.2g	チャート
35-29	GP-78	68	壊底	スクレイパー	長さ5.3cm幅3.55cm厚さ0.55cm重さ14.2g	チャート
35-30	GP-78	53	壊底	スクレイパー	長さ5.7cm幅2.6cm厚さ0.6cm重さ10.4g	チャート
35-31	GP-78	12	壊底	スクレイパー	長さ7.35cm幅3.9cm厚さ0.6cm重さ13.6g	チャート
35-32	GP-78	16	壊底	スクレイパー	長さ3.85cm幅1.7cm厚さ0.3cm重さ3.6g	チャート
35-33	GP-78	20	壊底	スクレイパー	長さ7.0cm幅5.5cm厚さ1.1cm重さ36.6g	チャート
35-34	GP-78	73	壊底	スクレイパー	長さ5.6cm幅3.4cm厚さ0.6cm重さ9.4g	チャート
35-35	GP-78	64	壊底	スクレイパー	長さ4.9cm幅2.1cm厚さ0.35cm重さ4.7g	流紋岩
36-1	GP-79	1	壊底	土器	胴径9.0cm器高(7.7cm)底径4.8cm	Ⅷ群d(恵山)
36-2	GP-79	3	壊底	土器	口径7.2cm胴径6.5cm器高9.5cm底径3.5cm	Ⅷ群d(恵山)
36-3	GP-79	2	壊底	土器	口径5.7cm胴径6.95cm器高8.0cm底径3.6cm	Ⅷ群d(恵山)
36-4	GP-79	4	壊底	土器	口径6.2cm胴径6.8cm器高8.3cm底径2.5cm	Ⅷ群d(恵山)
37-1	GP-87	1	壊底	土器	口径17.5×17.1cm器高20.3cm底径5.0cm	Ⅷ群d(恵山)
37-2	GP-87	5	壊底	土器	口径10.9cm器高12.7cm底径4.1cm	Ⅷ群d(恵山)
37-3	GP-87	4	壊底	ナイフ	長さ6.7cm幅2.8cm厚さ0.7cm重さ16.2g	頁岩
38-1	GP-89	1	壊底	土器	口径10.5cm胴径11.2cm器高13.1cm底径5.2cm	Ⅷ群d(恵山)
38-2	GP-89	2	壊底	土器	口径5.9cm胴径6.3cm器高8.3cm底径3.6cm	Ⅷ群d(恵山)
38-3	GP-89	3	壊底	有孔石製品?	底径2.7×2.0cm厚さ1.55cm 穴径大1.4cm穴径小0.8cm重さ9.55g	頁岩?
39-1	GP-91	1	壊底	土器	口径9.45×8.4cm胴径9.3cm器高12.0cm 底径3.7cm	Ⅷ群d(恵山)
39-2	GP-91	5	壊底	石片	長さ8.8cm幅4.2cm厚さ1.6cm重さ103g	緑色片岩
40-1	GP-92	6	壊底	土器片	拓本-胴部	Ⅷ群e(後北C.-D)
40-2	GP-92	6	壊底	土器片	拓本-胴部	Ⅷ群e(後北C.-D)
40-3	GP-92	6	壊底	土器片	拓本-底部	Ⅷ群(横文)
40-4	GP-92	6	壊底	土器片	拓本-胴部	Ⅷ群(横文)?
40-5	GP-92	6	壊底	土器片	拓本-胴部	Ⅷ群(横文)?
40-6	GP-92	7	壊底	刀子?	全長4.6cm刃幅1.8cm刃厚1.6cm	鉄製
41-7	GP-92	2	壊底	砕石	長さ(12.2cm)幅7.4cm厚さ2.8cm重さ(309g)	安山岩
41-8	GP-92		埋土	砥石・凹石	長さ(11.0cm)幅8.0cm厚さ4.65cm重さ(375g)	凝灰岩
42-1	GP-99	5		土器	口径(15.2)×13.5cm器高12.7cm底径7.0cm	Ⅷ群(横文)

図版番号	遺構番号	遺物番号	層位	名称	計測値	備考
42-2	GP-99	1	墳底	土器片	拓本-銅部	埴野e (後北C, -D)
42-3	GP-99		埋土	平玉	直径 0.4cm厚さ 0.2cm 穴径大 0.2cm穴径小 0.15cm重さ 0.03g	蛇紋岩
42-4	GP-99		埋土	平玉	直径 0.35cm厚さ 0.1cm穴径 0.15cm重さ 0.02g	蛇紋岩
42-5	GP-99		埋土	平玉	直径 0.4cm厚さ 0.2cm 穴径大 0.25cm穴径小 0.15cm重さ 0.03g	蛇紋岩
42-6	GP-99		埋土	平玉	直径 0.4cm厚さ 0.35cm 穴径大 0.15cm穴径小 0.1cm重さ 0.07g	石英
42-7	GP-99		埋土	平玉	直径 0.45cm × 0.4cm厚さ 0.3cm 穴径大 0.25cm穴径小 0.2cm重さ 0.06g	蛇紋岩
42-8	GP-99		埋土	平玉	直径 0.45cm厚さ 0.35cm穴径 0.15cm重さ 0.06g	蛇紋岩
43-9	GP-99		埋土	平玉	直径 0.5 × 0.45cm厚さ 0.25cm 穴径大 0.2cm穴径小 0.15cm重さ 0.06g	蛇紋岩
43-10	GP-99		埋土	平玉	直径 0.55 × 0.45cm厚さ 0.3cm 穴径大 0.2cm穴径小 0.15cm重さ 0.13g	蛇紋岩
43-11	GP-99		埋土	平玉	直径 0.45cm厚さ 0.25cm穴径 0.15cm重さ 0.06g	蛇紋岩
43-12	GP-99		埋土	平玉	直径 0.4cm厚さ 0.1cm穴径 0.2cm重さ 0.02g	蛇紋岩
43-13	GP-99		埋土	平玉	直径 0.4cm厚さ 0.1cm穴径 0.15cm重さ 0.02g	蛇紋岩
43-14	GP-99		埋土	平玉	直径 0.4cm厚さ 0.2cm 穴径大 0.2cm穴径小 0.15cm重さ 0.03g	蛇紋岩
43-15	GP-99		埋土	平玉	直径 0.35cm厚さ 0.15cm穴径 0.2cm重さ 0.02g	蛇紋岩
43-16	GP-99		埋土	平玉	直径 0.4cm厚さ 0.15cm 穴径大 0.25cm穴径小 0.2cm重さ 0.02g	蛇紋岩
43-17	GP-99		埋土	平玉	直径 0.45cm厚さ 0.15cm穴径 0.2cm重さ 0.05g	蛇紋岩
43-18	GP-99		埋土	凹石	長さ 14.0cm幅 7.5cm厚さ 5.0cm重さ 468g	凝灰岩
43-19	GP-99		埋土	凹石	長さ 14.0cm幅 10.15cm厚さ 5.8cm重さ 712g	凝灰岩
45-1	GP-102	1	墳底	丸玉	直径 0.75cm厚さ 0.05cm穴径 0.15cm重さ 0.2g	土製
45-2	GP-102	1	墳底	丸玉	直径 0.75cm厚さ 0.05cm穴径 0.15cm重さ 0.2g	土製
45-3	GP-102	1	墳底	丸玉	直径 0.85cm厚さ 0.05cm 穴径 0.15 × 0.2cm重さ 0.2g	土製
45-4	GP-102	1	墳底	丸玉	直径 0.8cm厚さ 0.05cm穴径 0.15cm重さ 0.2g	土製
45-5	GP-102	1	墳底	丸玉	直径 0.9cm厚さ 0.7cm穴径 0.15cm重さ 0.25g	土製
45-6	GP-102	1	墳底	丸玉	直径 0.95cm厚さ 0.7cm穴径 0.15cm重さ 0.2g	土製
45-7	GP-102	1	墳底	丸玉	直径 0.95cm厚さ 0.6cm穴径 0.15cm重さ 0.3g	土製
45-8	GP-102	1	墳底	丸玉	直径 0.9cm厚さ 0.9cm穴径 0.15cm重さ 0.2g	土製
45-9	GP-102	1	墳底	丸玉	直径 1.0cm厚さ 0.6cm穴径 0.2cm重さ 0.2g	土製
45-10	GP-102	1	墳底	丸玉	直径 1.0cm厚さ 0.5cm穴径 0.25cm重さ 0.2g	土製
45-11	GP-102		埋土	スクレイパー	長さ 4.25cm幅 0.8cm厚さ 0.45cm重さ 1.3g	燧石
45-12	GP-102		埋土	刀子	全長(16.0cm) 刃長(13.0cm) 刃幅 2.4cm刃厚 0.45cm	鉄製
45-13	GP-102		埋土	刀	全長 32.2cm刃長 27.3cm刃幅 3.2cm刃厚 0.65cm	鉄製
45-14	GP-102		埋土	土器	口径(15.4cm) 胴径(15.9cm) 器高(15.3cm)	埴野f (北大Ⅱ)
46-1	GP-105	1	墳底	土器	口径 13.9 × 13.25cm 胴径 15.6cm 器高 20.0cm 底径(7.4cm)	埴野d (恵山)
46-2	GP-105	3	墳底	割片	長さ 4.6cm幅 2.55cm厚さ 1.5cm重さ 10.8g	チャート
46-3	GP-105	14	墳底	割片	長さ 4.1cm幅 3.35cm厚さ 1.35cm重さ 16.8g	チャート
46-4	GP-105		埋土	勾玉	長さ 2.65cm幅 1.6cm厚さ 1.1cm 穴径大 0.5cm穴径小 0.15cm重さ 9.8g	ヒスイ

図版番号	遺構番号	遺物番号	層位	名称	計測値	備考
47-1	GP-108	1	墳底	土器	胴径11.4cm器高(10.6cm) 底径 7.2cm	図群(横文)
47-2	GP-108		墳土	スクレイパー	長さ 2.9cm幅 1.9cm厚さ 0.45cm重さ 2.5g	黒曜石
48-1	GP-114	14		土器	口径(11.7cm) 器高10.0cm 底径6.65cm注口径 2.4cm	図群e (後北C ₁ -D)
48-2	GP-114	3	墳底	土器片	器高(8.3cm)	図群e (後北C ₁ -D)
48-3	GP-114	12	墳底	土器片	拓本-口縁部	図群e (後北C ₁ -D)
48-4	GP-114	1	墳底	土器片	拓本-胴部	図群e (後北C ₁ -D)
48-5	GP-114		墳土	土器片	器高(18.4cm)	図群e (後北C ₁ -D)
49-6	GP-114	7	墳底	原石	長さ2.55cm幅 2.3cm厚さ 1.5cm重さ 4.1g	コハク
49-7	GP-114	8	墳底	原石	長さ 3.6cm幅2.95cm厚さ 2.2cm重さ 7.5g	コハク
49-8	GP-114	9	墳底	原石	長さ 2.1cm幅 2.5cm厚さ 1.6cm重さ 3.6g	コハク
49-9	GP-114	10	墳底	原石	長さ 3.5cm幅 2.3cm厚さ 1.55cm重さ 5.0g	コハク
49-10	GP-114		墳土	U・F	長さ(3.2cm)幅 1.7cm厚さ0.25cm重さ(1.6g)	黒曜石
49-11	GP-114		墳土	刀子?	全長5.85cm刃幅 1.8cm刃厚0.55cm	鉄製、織物貫付着
49-12	GP-114	5	墳底	鉄製品	長さ 9.7cm幅 1.1cm厚さ 0.45cm	
50-1	GP-117	20	墳底	土器	口径(9.8cm)胴径 8.3cm器高 7.9cm底径 5.0cm	図群d (唐山)
50-2	GP-117	24	墳底	板状織	長さ30.0cm幅12.1cm厚さ 2.0cm重さ1060g	頁岩 幅尺1/4
51-3	GP-117	15	墳底	石鏃	長さ4.95cm幅1.35cm厚さ0.45cm重さ 1.8g	黒曜石
51-4	GP-117	25	墳底	石鏃	長さ3.05cm幅 1.3cm厚さ 0.3cm重さ 0.7g	黒曜石
51-5	GP-117	1	墳底	石鏃	長さ 3.5cm幅 0.8cm厚さ 0.6cm重さ 1.5g	チャート
51-6	GP-117	3	墳底	スクレイパー	長さ 4.5cm幅 1.9cm厚さ 0.75cm重さ 6.2g	チャート
51-7	GP-117	7	墳底	スクレイパー	長さ6.85cm幅 6.8cm厚さ 1.2cm重さ54.5g	頁岩
51-8	GP-117		墳土	スクレイパー	長さ4.15cm幅2.05cm厚さ 5.0cm重さ 4.3g	チャート
51-9	GP-117		墳土	スクレイパー	長さ(1.6m) 幅(2.5cm) 厚さ(0.3m) 重さ(1.1g)	チャート
51-10	GP-117	46	墳底	剥片	長さ 5.0cm幅1.85cm厚さ 0.7cm重さ 8.3g	黒曜石
51-11	GP-117	32	墳底	剥片	長さ 3.8cm幅 1.8cm厚さ 0.4cm重さ 1.8g	頁岩
51-12	GP-117	6	墳底	剥片	長さ 4.3cm幅2.45cm厚さ 0.8cm重さ 8.1g	黒曜石
51-13	GP-117	10	墳底	剥片	長さ4.05cm幅 1.7cm厚さ 0.75cm重さ 4.9g	黒曜石
51-14	GP-117	35	墳底	剥片	長さ 4.1cm幅 1.5cm厚さ 0.35cm重さ 3.1g	黒曜石
51-15	GP-117	21	墳底	剥片	長さ 2.3cm幅 1.9cm厚さ 0.7cm重さ 2.4g	黒曜石
51-16	GP-117	4	墳底	剥片	長さ4.25cm幅 3.3cm厚さ 1.3cm重さ19.8g	黒曜石
51-17	GP-117	11	墳底	剥片	長さ 3.8cm幅3.45cm厚さ 1.9cm重さ23.4g	チャート
52-18	GP-117	30	墳底	剥片	長さ 3.4cm幅 3.6cm厚さ 0.55cm重さ 5.9g	頁岩
52-19	GP-117	41	墳底	剥片	長さ3.65cm幅2.35cm厚さ 0.35cm重さ 2.3g	頁岩
52-20	GP-117	38	墳底	剥片	長さ 2.7cm幅 4.7cm厚さ 0.75cm重さ 7.6g	頁岩
52-21	GP-117	31	墳底	剥片	長さ 2.9cm幅2.45cm厚さ 0.45cm重さ 2.1g	頁岩
52-22	GP-117	40	墳底	剥片	長さ2.95cm幅1.75cm厚さ 0.8cm重さ 3.7g	チャート
52-23	GP-117	26-27-42		剥片	長さ 3.7cm幅 3.9cm厚さ 0.9cm重さ 8.8g	頁岩、3点接合
52-24	GP-117	2-8 12-43	墳底	剥片	長さ5.75cm幅 3.2cm厚さ2.65cm重さ54.5g	チャート、4点接合
52-25	GP-117	19-36	墳底	剥片	長さ 6.1cm幅 4.3cm厚さ 2.1cm重さ35.2g	チャート、2点接合
52-26	GP-117	13-30	墳底	剥片	長さ3.55cm幅 2.3cm厚さ 1.4cm重さ10.8g	チャート、2点接合
52-27	GP-117	28-30-34	墳底	剥片	長さ 4.1cm幅3.75cm厚さ 2.4cm重さ30.8g	チャート、3点接合
52-28	GP-117	29-37	墳底	剥片	長さ3.25cm幅4.65cm厚さ 0.35cm重さ 4.7g	頁岩、2点接合
53-29	GP-117	45	墳底	礫石	長さ 3.9cm幅 2.9cm厚さ 1.4cm重さ19.8g	黒曜石
53-30	GP-117	49	墳底	礫石	長さ3.85cm幅 2.5cm厚さ 1.45cm重さ20.8g	黒曜石
53-31	GP-117	14	墳底	礫石	長さ 4.9cm幅 3.4cm厚さ 2.0cm重さ42.6g	黒曜石
53-32	GP-117	16	墳底	礫石	長さ 5.9cm幅3.05cm厚さ 2.15cm重さ53.0g	黒曜石

図版番号	遺物番号	遺物番号	層位	名称	計測値	備考
53-33	GP-117	17	壊底	原石	長さ4.9cm幅3.8cm厚さ1.9cm重さ45.6g	黒曜石
53-34	GP-117	44	壊底	原石	長さ7.35cm幅4.8cm厚さ2.8cm重さ126g	黒曜石
53-35	GP-117	9	壊底	原石	長さ5.85cm幅4.6cm厚さ3.75cm重さ115g	黒曜石
53-36	GP-117	5	壊底	原石	長さ7.4cm幅5.2cm厚さ5.2cm重さ126g	黒曜石
53-37	GP-117	47	壊底	原石	長さ3.05cm幅2.0cm厚さ1.05cm重さ8.4g	黒曜石
53-38	GP-117	18	壊底	原石	長さ7.0cm幅4.6cm厚さ3.0cm重さ146g	硬質砂岩
53-39	GP-117	48	壊底	原石	長さ2.95cm幅1.9cm厚さ1.8cm重さ13.6g	硬質砂岩
54-1	GP-118	4	壊底	土器	口径10.7×10.4cm胴径10.0cm 器高14.0cm底径6.0cm	Ⅷ群d(恵山)
54-2	GP-118	5	壊底	土器	口径3.9cm胴径4.75×4.5cm 器高3.9cm凹径0.9cm	Ⅷ群d(恵山)
54-3	GP-118	2	埋土	土器	器高(9.2cm)	Ⅷ群d(恵山)
54-4	GP-118	3	埋土	土器	器高(12.6cm)	Ⅷ群d(恵山)
54-5	GP-118	29	埋土	土器	口径11.75cm器高7.1cm底径4.0cm	Ⅷ群d(恵山)
55-6	GP-118	7	壊底	スクレイパー	長さ5.3cm幅2.15cm厚さ0.7cm重さ6.7g	頁岩
55-7	GP-118	8	壊底	スクレイパー	長さ5.5cm幅2.45cm厚さ0.8cm重さ8.5g	チャート
55-8	GP-118	6	壊底	剥片	長さ3.25cm幅2.6cm厚さ0.7cm重さ6.5g	黒曜石
55-9	GP-118	28	壊底	剥片	長さ2.6cm幅2.1cm厚さ0.4cm重さ2.2g	黒曜石 磨飾?
55-10	GP-118	1	埋土	石弁	長さ8.1cm幅4.0cm厚さ0.9cm重さ90.0g	緑色片岩
55-11	GP-118	12	壊底	平玉	直径1.05×0.95cm厚さ0.2cm 穴径0.3cm重さ0.4g	蛇紋岩
55-12	GP-118	13	壊底	平玉	直径1.0×0.95cm厚さ0.3cm 穴径0.25cm重さ0.4g	蛇紋岩
55-13	GP-118	14	壊底	平玉	直径1.05×0.95cm厚さ0.35cm 穴径0.35cm重さ0.5g	蛇紋岩
55-14	GP-118	15	壊底	平玉	直径0.95厚さ0.35cm 穴径大0.3cm穴径小0.25cm重さ0.4g	蛇紋岩
55-15	GP-118	16	壊底	平玉	直径1.3×1.2cm厚さ0.35cm 穴径大0.4cm穴径小0.3cm重さ0.9g	蛇紋岩
55-16	GP-118	17	壊底	平玉	直径1.1cm厚さ0.35cm穴径0.3cm重さ0.9g	蛇紋岩
55-17	GP-118	18	壊底	平玉	直径1.4×1.25cm厚さ0.3cm 穴径0.25cm重さ0.6g	蛇紋岩
55-18	GP-118	20	壊底	平玉	直径0.95cm厚さ0.35cm穴径0.3cm重さ0.65g	蛇紋岩
55-19	GP-118	21	壊底	平玉	直径1.15×0.95cm厚さ0.25cm 穴径0.25cm重さ0.6g	蛇紋岩
55-20	GP-118	23	壊底	平玉	直径1.55×1.3cm厚さ0.2cm 穴径0.25cm重さ0.85g	蛇紋岩
55-21	GP-118	25	壊底	平玉	直径1.2×1.1cm厚さ0.25cm 穴径0.3cm重さ0.8g	蛇紋岩
55-22	GP-118	27	壊底	平玉	直径1.2×1.1cm厚さ0.35cm 穴径大0.35cm穴径小0.25cm重さ0.8g	蛇紋岩
55-23	GP-118	19	壊底	平玉	直径1.35×0.9cm厚さ0.2cm 穴径0.2cm重さ0.5g	蛇紋岩
55-24	GP-118	22	壊底	平玉	直径1.25×1.0cm厚さ0.4cm 穴径0.25cm重さ0.9g	蛇紋岩
55-25	GP-118	24	壊底	平玉	直径1.6×1.3cm厚さ0.25cm 穴径0.2cm重さ1.0g	蛇紋岩

図版番号	遺物番号	遺物番号	層位	名称	計測値	備考
55-26	GP-118	26	填底	糸紡	長さ 4.9cm幅 1.7cm厚さ0.95cm 穴径大 0.5cm穴径小 0.3cm重さ13.2g	緑色片岩
56-27	GP-118		埋土	平玉	直径1.05×0.85cm厚さ0.35cm 穴径 0.2cm重さ 0.6g	蛇紋岩
56-28	GP-118		埋土	平玉	直径1.15×0.95cm厚さ0.2cm 穴径 0.4cm重さ 0.4g	蛇紋岩
56-29	GP-118		埋土	平玉	直径1.15厚さ 0.3cm穴径0.25cm重さ 0.6g	蛇紋岩
56-30	GP-118		埋土	平玉	直径1.15×0.95cm厚さ0.35cm 穴径0.25cm重さ 0.6g	蛇紋岩
56-31	GP-118		埋土	平玉	直径 1.2×0.95cm厚さ0.25cm 穴径 0.3cm重さ 0.5g	蛇紋岩
56-32	GP-118		埋土	平玉	直径 1.1×0.95cm厚さ 0.3cm 穴径大0.45cm穴径小0.25cm重さ 0.6g	蛇紋岩
56-33	GP-118		埋土	石珠	長さ2.55cm幅 1.1cm厚さ 0.3cm重さ 0.7g	黒曜石
56-34	GP-118		埋土	石珠	長さ2.35cm幅 1.0cm厚さ0.25cm重さ 0.5g	黒曜石
56-35	GP-118		埋土	石珠	長さ2.85cm幅 1.2cm厚さ 0.3cm重さ 0.8g	チャート
56-36	GP-118		埋土	石珠	長さ 3.0cm幅 1.2cm厚さ0.35cm重さ 0.8g	チャート
56-37	GP-118		埋土	石珠	長さ2.55cm幅 1.3cm厚さ0.45cm重さ 0.8g	黒曜石
56-38	GP-118		埋土	石珠	長さ 2.3cm幅 1.2cm厚さ 0.4cm重さ 0.7g	黒曜石
56-39	GP-118		埋土	石珠	長さ 2.3cm幅 1.15cm厚さ 0.3cm重さ 0.6g	黒曜石
56-40	GP-118		埋土	石珠	長さ 3.0cm幅 1.2cm厚さ 0.4cm重さ 1.0g	黒曜石
56-41	GP-118		埋土	石珠	長さ 2.5cm幅(1.15cm) 厚さ 0.3cm重さ(0.6g)	黒曜石
56-42	GP-118		埋土	石珠	長さ 2.8cm幅0.95cm厚さ 0.4cm重さ 0.6g	黒曜石
56-43	GP-118		埋土	石珠	長さ2.45cm幅 0.9cm厚さ 0.3cm重さ 0.5g	黒曜石
56-44	GP-118		埋土	凹石	長さ11.5cm幅5.25cm厚さ 2.7cm重さ 240g	安山岩
60-1	GP-126	1	填底	勾玉	長さ 3.2cm幅3.05cm厚さ 1.0cm 穴径0.35cm重さ 9.2g	土製
60-2	GP-126		埋土	土器片	拓木-口縁部	VI群(晩期)
60-3	GP-126		埋土	土器片	拓木-口縁部	VI群(晩期)
57-1	GP-129	1	填底	石珠	長さ(2.85cm) 幅 1.05cm厚さ0.35cm重さ(0.9g)	黒曜石
57-2	GP-129	2	填底	石珠	長さ 2.8cm幅 1.15cm厚さ 0.3cm重さ 0.8g	黒曜石
57-3	GP-129	3	填底	石珠	長さ 3.9cm幅 1.05cm厚さ 0.3cm重さ 1.0g	黒曜石
57-4	GP-129	4	填底	石珠	長さ3.95cm幅 1.1cm厚さ0.45cm重さ 1.3g	黒曜石
57-5	GP-129	5	填底	石珠	長さ 4.3cm幅 1.15cm厚さ 0.3cm重さ 1.2g	黒曜石
57-6	GP-129	6	填底	石珠	長さ3.25cm幅 1.05cm厚さ 0.3cm重さ 1.1g	黒曜石
57-7	GP-129	12	填底	石珠	長さ(3.3cm)幅 1.2cm厚さ 0.5cm重さ(1.4g)	黒曜石
57-8	GP-129	13	填底	石珠	長さ(3.7cm)幅 1.3cm厚さ 0.4cm重さ(1.7g)	黒曜石
57-9	GP-129	14	填底	石珠	長さ(3.4cm)幅 1.3cm厚さ0.35cm重さ(1.1g)	黒曜石
57-10	GP-129	15	填底	石珠	長さ(4.95cm)幅 1.3cm厚さ 0.4cm重さ(1.8g)	黒曜石
58-11	GP-129		埋土	石珠	長さ 2.7cm幅 1.1cm厚さ 0.4cm重さ 0.7g	黒曜石
58-12	GP-129		埋土	石珠	長さ 3.5cm幅 1.0cm厚さ0.35cm重さ 0.8g	黒曜石
58-13	GP-129		埋土	石珠	長さ 3.8cm幅 1.35cm厚さ 0.45cm重さ 1.5g	黒曜石
58-14	GP-129		埋土	石珠	長さ3.95cm幅 1.65cm厚さ 0.6cm重さ3.45g	黒曜石
58-15	GP-129	9	填底	スクレイパー	長さ 4.4cm幅2.45cm厚さ 0.5cm重さ 4.8g	チャート
58-16	GP-129	11	填底	スクレイパー	長さ 4.4cm幅2.35cm厚さ 0.5cm重さ 7.5g	チャート
58-17	GP-129	8	填底	スクレイパー	長さ6.95cm幅 2.5cm厚さ0.85cm重さ12.4g	チャート
58-18	GP-129		埋土	スクレイパー	長さ5.15cm幅2.45cm厚さ 0.9cm重さ12.0g	チャート
58-19	GP-129	7	填底	剥片	長さ 2.7cm幅 4.7cm厚さ 1.0cm重さ 6.4g	珪質片麻岩

図版番号	道 橋 番 号	道物番号	階 位	名 称	計 測 値	備 考	
58-20	GP-129			埋土	ナイフ	長さ 6.0cm幅 2.55cm厚さ 0.9cm重さ 12.4 g	チャート
58-21	GP-129			埋土	スクレイパー	長さ 5.5cm幅 3.3cm厚さ 1.0cm重さ 20.8 g	チャート
58-22	GP-129			埋土	スクレイパー	長さ 5.7cm幅 3.5cm厚さ 0.7cm重さ 12.6 g	チャート
60-1	GP-131	1	墳底	土器		口径14.2cm胴径13.75cm器高16.8cm底径 6.2cm	埴群d (恵山)
60-2	GP-131	2	墳底	土器		口径12.7cm胴径12.25cm器高15.9cm底径 6.5cm	埴群d (恵山)
61-1	GP-133	1	墳底	土器		口径12.7cm胴径12.25cm器高15.9cm底径 6.5cm	埴群d (恵山)
61-2	GP-133	12	墳底	石鏝		長さ 4.4cm幅 1.45cm厚さ 0.65cm重さ 3.6 g	頁岩
61-3	GP-133		埋土	石鏝		長さ 2.45cm幅 1.2cm厚さ 0.35cm重さ 0.7 g	黒曜石
61-4	GP-133	5	墳底	剥片		長さ 3.15cm幅 1.85cm厚さ 0.5cm重さ 3.2 g	黒曜石
61-5	GP-133		埋土	石鏝		長さ 2.55cm幅 0.6cm厚さ 0.4cm重さ 0.6 g	チャート
61-6	GP-133	9	墳底	剥片		長さ 2.6cm幅 2.0cm厚さ 0.6cm重さ 3.4 g	黒曜石
61-7	GP-133	6	墳底	剥片		長さ 2.15cm幅 2.2cm厚さ 0.7cm重さ 3.0 g	黒曜石
61-8	GP-133	7	墳底	剥片		長さ 2.65cm幅 2.2cm厚さ 0.45cm重さ 3.1 g	黒曜石
61-9	GP-133	11	墳底	剥片		長さ 2.6cm幅 2.45cm厚さ 0.65cm重さ 4.4 g	黒曜石
61-10	GP-133	10	墳底	鏝		長さ 7.1cm幅 2.0cm厚さ 1.0cm重さ 23.2 g	粘板岩
61-11	GP-133	4	墳底	鏝		長さ 10.55cm幅 2.55cm厚さ 1.5cm重さ 50.0 g	安山岩
62-1	GP-208	9	墳底	石鏝		長さ 2.45cm幅 1.15cm厚さ 0.4cm重さ 0.6 g	黒曜石
62-2	GP-208	10	墳底	石鏝		長さ 3.85cm幅 1.0cm厚さ 0.4cm重さ 1.0 g	頁岩
62-3	GP-208	11	墳底	石鏝		長さ 3.25cm幅 1.05cm厚さ 0.35cm重さ 1.1 g	黒曜石
62-4	GP-208	12	墳底	石鏝		長さ 3.65cm幅 1.0cm厚さ 0.3cm重さ 0.9 g	黒曜石
62-5	GP-208	5	墳底	石鏝		長さ 5.25cm幅 0.8cm厚さ 0.4cm重さ 1.3 g	チャート
62-6	GP-208	6	墳底	スクレイパー		長さ(3.0cm)幅 2.2cm厚さ 0.55cm重さ(3.2g)	黒曜石
62-7	GP-208	4	墳底	スクレイパー		長さ 3.65cm幅 3.0cm厚さ 0.8cm重さ 6.2 g	チャート
62-8	GP-208	7	墳底	剥片		長さ 3.4cm幅 2.6cm厚さ 0.8cm重さ 6.8 g	黒曜石
62-9	GP-208	8	墳底	剥片		長さ 3.1cm幅 2.0cm厚さ 1.4cm重さ 9.2 g	黒曜石
62-10	GP-208	15	墳底	剥片		長さ 3.9cm幅 2.75cm厚さ 0.5cm重さ 5.3 g	チャート
62-11	GP-208	14	墳底	剥片		長さ 3.25cm幅 2.8cm厚さ 0.45cm重さ 2.7 g	チャート
62-12	GP-208	16	墳底	剥片		長さ 2.5cm幅 2.0cm厚さ 0.3cm重さ 1.3 g	チャート
63-13	GP-208	2	墳底	小鏝		長さ 1.6cm幅 1.6cm厚さ 0.3cm重さ 0.9 g	泥岩
63-14	GP-208	2	墳底	小鏝		長さ 1.65cm幅 1.15cm厚さ 0.25cm重さ 0.7 g	泥岩
63-15	GP-208	2	墳底	小鏝		長さ 1.75cm幅 0.65cm厚さ 0.15cm重さ 0.2 g	泥岩
63-16	GP-208	2	墳底	小鏝		長さ 1.65cm幅 1.2cm厚さ 0.2cm重さ 0.5 g	泥岩
63-17	GP-208	2	墳底	小鏝		長さ 1.5cm幅 1.25cm厚さ 0.25cm重さ 0.6 g	泥岩
63-18	GP-208	2	墳底	小鏝		長さ 1.4cm幅 1.05cm厚さ 0.3cm重さ 0.7 g	泥岩
63-19	GP-208	2	墳底	小鏝		長さ 1.15cm幅 1.05cm厚さ 0.2cm重さ 0.3 g	泥岩
63-20	GP-208	2	墳底	小鏝		長さ 1.25cm幅 0.6cm厚さ 0.15cm重さ 0.2 g	泥岩
63-21	GP-208	2	墳底	小鏝		長さ 1.1cm幅 0.9cm厚さ 0.15cm重さ 0.2 g	泥岩
63-22	GP-208	2	墳底	小鏝		長さ 0.85cm幅 0.75cm厚さ 0.2cm重さ 0.2 g	泥岩
63-23	GP-208	1	墳底	石片		長さ 11.85cm幅 1.55cm厚さ 2.1cm重さ 227 g	緑色片岩
63-24	GP-208	3	墳底	石片		長さ 8.6cm幅 4.15cm厚さ 1.7cm重さ 116 g	緑色片岩
64-1	GP-348A	5	墳底	土器		口径8.65cm胴径 15.45cm器高 21.85cm 底径 6.2cm	埴群d (恵山)
64-2	GP-348A	31	墳底	磁石		長さ 13.2cm幅 8.0cm厚さ 2.0cm重さ 283 g	凝灰岩
65-3	GP-348A	6	墳底	石片		長さ 12.8cm幅 5.2cm厚さ 2.1cm重さ 224 g	粘板岩
65-4	GP-348A	46	墳底	石片		長さ 13.3cm幅 4.3cm厚さ 1.6cm重さ 155 g	粘板岩
65-5	GP-348A	7	墳底	石片		長さ 10.1cm幅 3.65cm厚さ 1.15cm重さ 67.5 g	緑色片岩
65-6	GP-348A	17	墳底	石鏝		長さ(2.95cm)幅 1.45cm厚さ 0.45cm重さ(1.2g)	黒曜石
65-7	GP-348A	25	墳底	石鏝		長さ 2.3cm幅 1.3cm厚さ 0.4cm重さ 0.8 g	黒曜石

図版番号	遺構番号	遺物番号	部位	名称	計測値	備考
65-8	GP-348A	26	竈底	石障	長さ2.4cm幅1.3cm厚さ0.45cm重さ0.8g	黒曜石
65-9	GP-348A	10	竈底	石障	長さ2.25cm幅1.2cm厚さ0.25cm重さ0.7g	黒曜石
65-10	GP-348A	22	竈底	石障	長さ3.05cm幅1.25cm厚さ0.25cm重さ0.85g	黒曜石
65-11	GP-348A	47	竈底	石障	長さ3.35cm幅1.15cm厚さ0.35cm重さ1.0g	黒曜石
65-12	GP-348A	48	竈底	石障	長さ3.6cm幅1.25cm厚さ0.3cm重さ1.1g	黒曜石
65-13	GP-348A	4	埋土	石障	長さ5.35cm幅1.0cm厚さ0.5cm重さ2.1g	チャート
65-14	GP-348A	32	竈底	ナイフ	長さ(4.85cm)幅2.55cm厚さ0.85cm重さ(9.1g)	チャート
65-15	GP-348A	12	竈底	スクレイパー	長さ3.75cm幅2.3cm厚さ0.9cm重さ7.8g	チャート
65-16	GP-348A	8	竈底	スクレイパー	長さ8.45cm幅3.65cm厚さ1.1cm重さ32.2g	頁岩
66-17	GP-348A	16	竈底	スクレイパー	長さ5.1cm幅3.25cm厚さ0.85cm重さ17.4g	メノウ
66-18	GP-348A	33	竈底	スクレイパー	長さ(3.95cm)幅2.15cm厚さ0.55cm重さ(5.3g)	チャート
66-19	GP-348A	18	竈底	削片	長さ(4.5cm)幅1.9cm厚さ0.9cm重さ(6.2g)	チャート
66-20	GP-348A	27	竈底	スクレイパー	長さ6.5cm幅5.0cm厚さ1.2cm重さ36.4g	チャート
66-21	GP-348A	28	竈底	スクレイパー	長さ4.8cm幅3.9cm厚さ0.85cm重さ10.2g	頁岩
66-22	GP-348A	11	竈底	U. F	長さ3.25cm幅5.6cm厚さ0.65cm重さ8.9g	メノウ
66-23	GP-348A	13	竈底	U. F	長さ3.4cm幅6.2cm厚さ0.9cm重さ21.4g	泥岩
66-24	GP-348A	14	竈底	削片	長さ4.2cm幅3.25cm厚さ0.55cm重さ7.8g	泥岩
66-25	GP-348A	15	竈底	削片	長さ3.7cm幅6.05cm厚さ1.2cm重さ19.2g	泥岩
66-26	GP-348A	39	竈底	削片	長さ4.15cm幅3.0cm厚さ1.2cm重さ14.4g	黒曜石
66-27	GP-348A	41	竈底	石製品?	長さ2.75cm幅3.35cm厚さ1.65cm重さ15.6g	珪藻岩
67-1	GP-348B	1	埋土	土器	口径10.4cm胴径9.8cm器高14.5cm底径5.7cm	V群(線文)
67-2	GP-348B		埋土	石障	長さ3.3cm幅1.15cm厚さ0.25cm重さ0.8g	黒曜石
68-1	GP-352	3	竈底	石障	長さ1.8cm幅1.45cm厚さ0.3cm重さ0.5g	黒曜石
68-2	GP-352	15	竈底	石障	長さ2.0cm幅1.25cm厚さ0.25cm重さ0.5g	黒曜石
68-3	GP-352	26	竈底	石障	長さ2.4cm幅1.4cm厚さ0.25cm重さ0.6g	黒曜石
68-4	GP-352	2	竈底	石障	長さ2.5cm幅1.45cm厚さ0.35cm重さ0.7g	チャート
68-5	GP-352	1	竈底	石障	長さ2.55cm幅1.5cm厚さ0.55cm重さ1.4g	黒曜石
68-6	GP-352	4	竈底	石障	長さ3.75cm幅1.35cm厚さ0.3cm重さ1.1g	チャート
68-7	GP-352	7	竈底	石障	長さ2.5cm幅1.5cm厚さ0.3cm重さ0.7g	黒曜石
68-8	GP-352	10	竈底	石障	長さ(2.85cm)幅1.75cm厚さ0.3cm重さ(1.0g)	黒曜石
68-9	GP-352	27	竈底	石障	長さ(1.55cm)幅1.6cm厚さ0.35cm重さ(0.6g)	黒曜石
68-10	GP-352	28	竈底	石障	長さ2.2cm幅1.7cm厚さ0.3cm重さ0.6g	黒曜石
68-11	GP-352	8	竈底	石障	長さ(2.1cm)幅(1.5cm)厚さ0.35cm重さ(0.6g)	黒曜石
68-12	GP-352	11	竈底	石障	長さ2.15cm幅(1.6cm)厚さ0.4cm重さ(0.8g)	黒曜石
68-13	GP-352	6	竈底	石障	長さ(2.9cm)幅1.8cm厚さ0.35cm重さ(1.0g)	黒曜石
68-14	GP-352	9	竈底	石障	長さ2.1cm幅1.6cm厚さ0.4cm重さ0.8g	黒曜石
68-15	GP-352	5	竈底	石障	長さ2.25cm幅1.7cm厚さ0.3cm重さ1.2g	黒曜石
68-16	GP-352	18	竈底	スクレイパー	長さ7.5cm幅3.7cm厚さ1.0cm重さ23.4g	チャート
68-17	GP-352	19	竈底	削片	長さ7.6cm幅4.0cm厚さ1.1cm重さ32.6g	頁岩
69-1	GP-363	1	埋土	土器	口径14.2cm胴径15.7cm器高8.35cm	V群(晩期)
69-2	GP-363	5	埋土	石障	長さ(4.45cm)幅(1.5cm)厚さ0.4cm重さ(1.9g)	黒曜石
69-3	GP-363	6	埋土	石障	長さ4.05cm幅1.55cm厚さ0.3cm重さ2.0g	黒曜石
69-4	GP-363	7	埋土	石障	長さ3.5cm幅1.15cm厚さ0.2cm重さ0.6g	黒曜石
69-5	GP-363	8	埋土	石障	長さ4.85cm幅1.25cm厚さ0.25cm重さ1.2g	黒曜石
69-6	GP-363	9	埋土	石障	長さ4.45cm幅1.4cm厚さ0.4cm重さ1.5g	黒曜石
70-7	GP-363	10	埋土	石障	長さ4.0cm幅1.0cm厚さ0.35cm重さ0.9g	黒曜石
70-8	GP-363	11	埋土	石障	長さ3.75cm幅1.35cm厚さ0.4cm重さ1.3g	黒曜石
70-9	GP-363	12	埋土	石障	長さ(4.3cm)幅(1.3cm)厚さ0.3cm重さ(1.4g)	チャート

図版番号	遺物番号	遺物番号	部位	名称	計測値	備考
70-10	GP-363	13	埋土	石線	長さ2.95cm幅1.5cm厚さ0.35cm重さ1.2g	黒曜石
70-11	GP-363	14	埋土	石線	長さ3.8cm幅1.7cm厚さ0.35cm重さ1.9g	黒曜石
70-12	GP-363	35	埋土	石線	長さ(3.1cm)幅1.4cm厚さ0.35cm重さ(1.4g)	黒曜石
70-13	GP-363	64	埋土	石線	長さ4.05cm幅1.3cm厚さ0.35cm重さ1.1g	黒曜石
70-14	GP-363	77	埋土	石線	長さ3.05cm幅1.1cm厚さ0.3cm重さ0.6g	黒曜石
70-15	GP-363	78	埋土	剥片	長さ4.3cm幅1.55cm厚さ0.45cm重さ3.1g	チャート
70-16	GP-363	79	壊底	スクレイパー	長さ(3.7cm)幅1.65cm厚さ0.7cm重さ(3.1g)	チャート
70-17	GP-363	46	壊底	スクレイパー	長さ(3.95cm)幅1.65cm厚さ0.9cm重さ(10.4g)	チャート
70-18	GP-363	20	埋土	ナイフ	長さ5.9cm幅4.2cm厚さ1.1cm重さ24.4g	チャート
70-19	GP-363	19	埋土	ナイフ	長さ(6.15cm)幅5.45cm厚さ(6.8cm)重さ(22.0g)	チャート
70-20	GP-363	34	埋土	スクレイパー	長さ(4.25cm)幅(2.75cm)厚さ0.9cm重さ(8.2g)	チャート
70-21	GP-363	37	壊底	ナイフ	長さ6.3cm幅3.4cm厚さ0.8cm重さ15.2g	チャート
70-22	GP-363	32	埋土	石堆	長さ(4.3cm)幅(2.95cm)厚さ0.65cm重さ(9.5g)	チャート
71-23	GP-363	2	埋土	石片	長さ14.95cm幅5.05cm厚さ1.65cm重さ206g	粘板岩
71-24	GP-363	3	埋土	石片	長さ9.95cm幅3.65cm厚さ1.8cm重さ111g	粘板岩
71-25	GP-363	48	埋土	石片	長さ14.2cm幅4.9cm厚さ3.0cm重さ315g	輝石安山岩
71-26	GP-363	83	壊底	垂飾	長さ3.0cm幅2.7cm厚さ1.6cm 穴径大0.95cm穴径小0.3cm重さ12.6g	泥岩
72-1	GP-372	1	壊底	土器	口径13.2×10.0cm胴径13.95cm 器高16.0cm底径6.7cm	W群d(恵山)
72-2	GP-372	10	壊底	石線	長さ3.45cm幅1.35cm厚さ0.3cm重さ1.6g	粘板岩
72-3	GP-372	11	壊底	石線	長さ4.0cm幅1.55cm厚さ0.35cm重さ3.3g	粘板岩
72-4	GP-372	21	壊底	石線	長さ2.85cm幅1.2cm厚さ0.3cm重さ0.7g	黒曜石
72-5	GP-372	27	壊底	石線	長さ2.6cm幅1.45cm厚さ0.2cm重さ0.7g	黒曜石
72-6	GP-372	28	壊底	石線	長さ3.05cm幅1.4cm厚さ0.3cm重さ0.9g	黒曜石
72-7	GP-372	29	壊底	石線	長さ2.85cm幅1.25cm厚さ0.25cm重さ0.7g	粘板岩
72-8	GP-372	30	壊底	石線	長さ3.4cm幅1.35cm厚さ0.4cm重さ1.2g	黒曜石
72-9	GP-372	32	壊底	石線	長さ2.35cm幅1.2cm厚さ0.2cm重さ0.4g	黒曜石
72-10	GP-372	34	壊底	石線	長さ2.0cm幅1.3cm厚さ0.2cm重さ0.5g	黒曜石
73-11	GP-372	36	壊底	石線	長さ2.7cm幅1.3cm厚さ0.15cm重さ0.5g	粘板岩
73-12	GP-372	37	壊底	石線	長さ2.7cm幅1.2cm厚さ0.35cm重さ1.0g	黒曜石
73-13	GP-372	38	壊底	石線	長さ2.6cm幅1.2cm厚さ0.25cm重さ0.85g	泥岩
73-14	GP-372	39	壊底	石線	長さ2.25cm幅1.3cm厚さ0.25cm重さ0.5g	黒曜石
73-15	GP-372	40	壊底	石線	長さ3.65cm幅1.4cm厚さ0.3cm重さ1.1g	黒曜石
73-16	GP-372	41	壊底	石線	長さ3.65cm幅1.2cm厚さ0.25cm重さ1.0g	黒曜石
73-17	GP-372	42	壊底	石線	長さ2.45cm幅1.25cm厚さ0.3cm重さ0.7g	粘板岩
73-18	GP-372	43	壊底	石線	長さ1.95cm幅1.05cm厚さ0.3cm重さ0.5g	黒曜石
73-19	GP-372	47	壊底	石線	長さ2.65cm幅1.1cm厚さ0.25cm重さ0.7g	黒曜石
73-20	GP-372	49	壊底	石線	長さ3.4cm幅1.2cm厚さ0.3cm重さ0.8g	黒曜石
73-21	GP-372	51	壊底	石線	長さ2.7cm幅1.35cm厚さ0.3cm重さ0.6g	黒曜石
73-22	GP-372	53	壊底	石線	長さ3.05cm幅1.4cm厚さ0.2cm重さ0.9g	黒曜石
73-23	GP-372	57	壊底	石線	長さ2.95cm幅1.2cm厚さ0.35cm重さ0.75g	黒曜石
73-24	GP-372	59	壊底	石線	長さ3.15cm幅1.4cm厚さ0.4cm重さ1.2g	黒曜石
73-25	GP-372	61	壊底	石線	長さ3.75cm幅1.25cm厚さ0.3cm重さ1.0g	黒曜石
73-26	GP-372	63	壊底	石線	長さ2.4cm幅1.05cm厚さ0.25cm重さ0.5g	黒曜石
73-27	GP-372	65	壊底	石線	長さ2.2cm幅1.1cm厚さ0.3cm重さ0.5g	黒曜石
73-28	GP-372	66	壊底	石線	長さ3.85cm幅1.15cm厚さ0.35cm重さ1.0g	黒曜石
73-29	GP-372	8	壊底	スクレイパー	長さ4.5cm幅2.6cm厚さ0.8cm重さ7.6g	チャート

図版番号	遺構番号	遺物番号	層位	名称	計測値	備考
73-30	GP-372	6	壊底	スクレイパー	長さ 3.8cm幅 1.95cm厚さ 0.8cm重さ 6.5g	チャート
73-31	GP-372	19	壊底	スクレイパー	長さ 4.2cm幅 1.75cm厚さ 0.55cm重さ 3.4g	チャート
73-32	GP-372	17	壊底	ナイフ	長さ 6.1cm幅 1.65cm厚さ 0.65cm重さ 6.9g	チャート
73-33	GP-372	18	壊底	ナイフ	長さ 7.9cm幅 3.7cm厚さ 1.25cm重さ 37.0g	黒曜石
74-34	GP-372	5	壊底	石斧	長さ 10.5cm幅 4.7cm厚さ 0.7cm重さ 53.5g	粘板岩
74-35	GP-372	7	壊底	石斧	長さ 8.45cm幅 4.0cm厚さ 1.0cm重さ 52.5g	粘板岩
74-36	GP-372	16	壊底	石斧	長さ 12.85cm幅 5.25cm厚さ 2.85cm重さ 331g	緑色片岩
76-1	GP-399	10	壊底	礫石器	長さ 8.8cm幅 5.65cm厚さ 4.9cm重さ 273g	安山岩
76-2	GP-399	3	壊底	礫石器	長さ 7.9cm幅 5.5cm厚さ 5.2cm重さ 204g	凝灰岩
76-3	GP-399	1	壊底	平玉	直径 2.0×1.9cm厚さ 1.0cm 穴径大 0.85cm穴径小 0.65cm重さ 5.4g	蛇紋岩
76-4	GP-399	2	壊底	石鏃	長さ 2.7cm幅 1.35cm厚さ 0.3cm重さ 0.9g	黒曜石
76-5	GP-399	11	壊底	石鏃	長さ(2.05cm)幅(1.15cm) 厚さ(0.35cm)重さ(0.9g)	黒曜石
76-6	GP-399		埋土	石鏃	長さ(3.0cm)幅 1.3cm厚さ 0.4cm重さ(1.3g)	チャート
77-7	GP-399		埋土	土器	口径(34.25cm)器高(27.9cm)	VI群a(大洞C-C,併行)
77-8	GP-399		埋土	土器	口径(11.5cm)器高(9.85cm)	VI群a(大洞B-BC併行)
77-9	GP-399		埋土	土器	口径(22.55cm)器高 7.0cm底径 6.3cm	VI群a(大洞C-C,併行)
77-10	GP-399		埋土	土器	口径(16.7cm)器高(6.2cm)	VI群a(大洞C-C,併行)
79-1	GP-421	1	壊底	土器	口径(30.8cm)器高12.9cm底径(8.5cm)	VI群a(大洞B-BC併行)
80-2	GP-421	1	壊底	土器片	器高(18.5cm)	VI群a(大洞B-BC併行)
80-3	GP-421	4	壊底	耳栓	上端径 1.4cm下端径 1.7cm厚さ 1.25cm 穴径 0.25cm重さ 1.8g	漆塗り、魚類椎骨製?
80-4	GP-421	4	壊底	耳栓	上端径 1.2cm下端径 1.6cm厚さ 1.35cm 穴径 0.3cm重さ 1.7g	漆塗り、魚類椎骨製?
80-5	GP-421	5	壊底	勾玉	長さ 3.75cm幅 3.2cm厚さ 0.9cm 穴径大 0.6cm穴径小 0.4cm重さ 15.2g	ヒスイ
80-6	GP-421	6	壊底	石鏃	長さ(3.1cm)幅 1.4cm厚さ 0.35cm重さ(1.5g)	頁岩
80-7	GP-421		埋土	石鏃	長さ 2.9cm幅 1.4cm厚さ 0.2cm重さ 1.0g	黒曜石
80-8	GP-421		埋土	漆器	長さ(1.7cm)幅 0.85cm厚さ 1.0cm	脚部?
80-9	GP-421		埋土	漆器	長さ(1.3cm)幅 0.9cm厚さ 0.6cm	脚部?
80-10	GP-421		埋土	漆器	長さ(1.5cm)幅 0.9cm厚さ 0.7cm	脚部?
81-1	GP-430	2	壊底	石斧	長さ 18.3cm幅 6.95cm厚さ 3.2cm重さ 611g	粘板岩
82-2	GP-430	4	壊底	石斧	長さ 17.45cm幅 5.3cm厚さ 3.7cm重さ 540g	輝岩安山岩
82-3	GP-430	5	壊底	石斧	長さ 13.8cm幅 5.15cm厚さ 2.45cm重さ 288g	粘板岩
83-4	GP-430	1	壊底	石斧	長さ 21.2cm幅 6.25cm厚さ 4.55cm重さ 1010g	輝岩安山岩
83-5	GP-430	3	壊底	石斧	長さ 13.9cm幅 6.25cm厚さ 1.65cm重さ 190g	凝灰岩
84-6	GP-430	6	壊底	石斧	長さ 11.35cm幅 6.3cm厚さ 2.4cm重さ 266g	緑色片岩
84-7	GP-430	7	壊底	石斧	長さ 8.75cm幅 1.9cm厚さ 1.2cm重さ 34.2g	粘板岩
84-8	GP-430		埋土	石鏃	長さ(2.2cm)幅 1.35cm厚さ 0.5cm重さ(0.9g)	黒曜石
84-9	GP-430	22	壊底	平玉	直径 0.45cm厚さ 1.5cm穴径 0.15cm重さ 0.05g	蛇紋岩
84-10	GP-430	31	壊底	平玉	直径 0.4cm厚さ 0.25cm穴径 0.15cm重さ 0.1g	蛇紋岩
84-11	GP-430	35	壊底	平玉	直径 0.4cm厚さ 0.3cm穴径 0.15cm重さ 0.1g	蛇紋岩
84-12	GP-430	53	壊底	平玉	直径 0.45cm厚さ 0.25cm穴径 0.15cm重さ 0.1g	蛇紋岩
84-13	GP-430	54	壊底	平玉	直径 0.4cm厚さ 0.2cm穴径 0.15cm重さ 0.05g	蛇紋岩
84-14	GP-430	59	壊底	平玉	直径 0.4cm厚さ 0.2cm穴径 0.15cm重さ 0.05g	蛇紋岩
84-15	GP-430		埋土	平玉	直径 0.45cm厚さ 0.25cm穴径 0.15cm重さ 0.1g	蛇紋岩
84-16	GP-430		埋土	平玉	直径 0.45cm厚さ 0.2cm穴径 0.15cm重さ 0.1g	蛇紋岩

図版番号	遺構番号	遺物番号	層位	名称	計測値	備考
84-17	GP-430		埋土	平玉	直径0.4cm厚さ0.3cm穴径0.15cm重さ0.1g	蛇紋岩
84-18	GP-430		埋土	平玉	直径0.45cm厚さ0.3cm穴径0.15cm重さ0.1g	蛇紋岩
85-1	GP-432	2	墳底	勾玉	長さ3.9cm幅3.9cm厚さ1.0cm穴径0.75cm重さ14.2g	ヒスイ?
85-2	GP-432		埋土	土器片	拓本-口縁部	VI群(晩期)
85-3	GP-432		埋土	土器片	拓本-口縁部	VI群(晩期)
85-4	GP-432		埋土	土器片	拓本-胴部	VI群(晩期)
85-5	GP-432		埋土	土器片	拓本-胴部	VI群(晩期)
85-6	GP-432		埋土	石鏃	長さ(3.2cm)幅1.65cm厚さ0.35cm重さ(1.2g)	黒曜石
85-7	GP-432		埋土	石鏃	長さ(2.9cm)幅1.4cm厚さ0.35cm重さ(1.2g)	頁岩
85-8	GP-432		埋土	石鏃	長さ(2.65cm)幅1.3cm厚さ0.2cm重さ(0.6g)	黒曜石
85-9	GP-432		埋土	石鏃	長さ2.2cm幅1.35cm厚さ0.35cm重さ0.7g	黒曜石
87-1	GP-445	4	埋土	土器	器高(8.6cm) 底径 8.4cm	VI群a(大洞B~C併行)
87-2	GP-445		埋土	土器	口径20.5cm器高(16.95cm)	VI群a(大洞B~C併行)
87-3	GP-445		埋土	土器	口径(20.6cm) 器高 4.5cm	VI群(晩期)
88-4	GP-445		埋土	土器片	器高(7.35cm)	VI群a(大洞B~C併行)
88-5	GP-445	85	墳底	礫石器	長さ10.35cm幅7.6cm厚さ6.2cm重さ733g	安山岩
88-6	GP-445		埋土	石鏃	長さ(2.0cm)幅1.3cm厚さ0.3cm重さ(0.8g)	黒曜石
88-7	GP-445		埋土	石鏃	長さ(1.85cm)幅1.05cm厚さ0.35cm重さ(0.5g)	黒曜石
88-8	GP-445		埋土	石鏃	長さ3.8cm幅1.55cm厚さ0.7cm重さ3.5g	チャート
88-9	GP-445	95	墳底	礫石器	長さ5.8cm幅5.1cm厚さ4.8cm重さ217g	安山岩
88-10	GP-445	2	埋土	土製品	長さ(5.25cm)幅(2.8cm)厚さ(1.1cm)	
89-11	GP-445	1	埋土	土製品	長さ12.2cm幅9.3cm厚さ1.7cm重さ142g	
89-12	GP-445		埋土	土製品	長さ9.75cm幅(7.15cm)厚さ1.2cm	
89-13	GP-445		埋土	土製品	長さ12.1cm幅(7.5cm)厚さ1.45cm	
91-1	GP-448	23	墳底	土器	器高(16.7cm) 底径 7.4cm	VI群d(恵山)
91-2	GP-448		埋土	土器	器高(21.5cm)	VI群a(大洞C、~C、併行)
91-3	GP-448	29	墳底	土器	口径12.6cm胴径12.1cm器高14.8cm底径5.3cm	VI群d(恵山)
91-4	GP-448		埋土	土器	器高(7.3cm) 底径 6.8cm	VI群d(恵山)
91-5	GP-448	27	墳底	石弁	長さ6.3cm幅3.4cm厚さ1.1cm重さ43.0g	泥岩
91-6	GP-448	35	墳底	石鏃	長さ5.7cm幅4.1cm厚さ0.6cm重さ23.0g	緑色片岩
92-7	GP-448	25	墳底	石弁	長さ4.45cm幅3.65cm厚さ1.6cm重さ74.5g	粘板岩
92-8	GP-448	26	墳底	石弁	長さ8.25cm幅3.25cm厚さ1.45cm重さ61.5g	泥岩
92-9	GP-448	24	墳底	砥石	長さ(13.6cm)幅5.0cm厚さ1.5cm重さ(129g)	泥岩
92-10	GP-448	37	墳底	勾玉	長さ3.95cm幅2.95cm厚さ0.7cm重さ8.4g	緑色片岩
92-11	GP-448		埋土	垂飾	長さ(2.55cm)幅(0.7cm)厚さ(1.15cm) 穴径(0.3cm)重さ(2.8g)	流紋岩
92-12	GP-448		埋土	丸玉	直径0.45cm厚さ0.3cm 穴径大0.2cm穴径小0.15cm重さ0.1g	蛇紋岩
92-13	GP-448		埋土	丸玉	直径0.45cm厚さ0.25cm穴径0.2cm重さ0.05g	蛇紋岩
92-14	GP-448		埋土	丸玉	直径0.45cm厚さ0.25cm 穴径大0.25cm穴径小0.15cm重さ0.05g	蛇紋岩
92-15	GP-448		埋土	丸玉	直径0.5cm厚さ0.35cm穴径0.2cm重さ0.1g	蛇紋岩
92-16	GP-448		埋土	丸玉	直径0.5cm厚さ0.35cm穴径0.15cm重さ0.1g	蛇紋岩
93-17	GP-448	28	墳底	スクレイパー	長さ4.0cm幅2.35cm厚さ1.25cm重さ10.1g	チャート
93-18	GP-448	33	墳底	スクレイパー	長さ(6.65cm)幅(3.3cm)厚さ(6.75cm)重さ(18.4g)	横塚玄武岩
93-19	GP-448	9	埋土	石鏃	長さ2.9cm幅2.6cm厚さ5.05cm重さ2.2g	チャート
93-20	GP-448		埋土	石鏃	長さ3.55cm幅1.05cm厚さ0.4cm重さ0.7g	チャート
93-21	GP-448	22	埋土	石鏃	長さ(2.95cm)幅1.4cm厚さ0.45cm重さ(1.5g)	黒曜石

図版番号	遺構番号	遺物番号	層位	名 称	計 測 値	備 考
93-22	GP-448		埋土	石障	長さ(2.05cm)幅 1.2cm厚さ 0.4cm重さ(0.7g)	頁岩
93-23	GP-448		埋土	石障	長さ(2.05cm)幅 1.4cm厚さ0.25cm重さ(0.5g)	黒曜石
93-24	GP-448		埋土	スクレイパー	長さ6.15cm幅 2.7cm厚さ 0.9cm重さ13.8g	頁岩
93-25	GP-448		埋土	スクレイパー	長さ(4.85cm)幅 2.5cm厚さ 0.7cm重さ(9.8g)	チャート
95-1	GP-449	41	埋土	土器	口径(9.3cm) 胴径(18.2cm) 器高(17.3cm)	VI群(晩期)
95-2	GP-449		埋土	土器	拓本-口縁部	VI群(晩期)
95-3	GP-449		埋土	土器	拓本-口縁部	VI群(晩期)
95-4	GP-449		埋土	土器	拓本-口縁部	VI群(晩期)
95-5	GP-449		埋土	土器	拓本-口縁部	VI群(晩期)
95-6	GP-449		埋土	土器	拓本-口縁部	VI群(晩期)
95-7	GP-449		埋土	土器	拓本-口縁部	VI群(晩期)
95-8	GP-449		埋土	垂飾	長さ 2.9cm幅 1.9cm厚さ 1.1cm 穴径大 0.6cm穴径小 0.4cm重さ10.4g	ヒスイ
95-9	GP-449		埋土	丸玉	直径 1.2cm厚さ 0.8cm重さ(0.8g)	蛇紋岩
95-10	GP-449		埋土	石障	長さ(2.6cm)幅(1.15cm)厚さ0.5cm重さ(1.3g)	黒曜石
96-1	GP-454	1	城底	土器	口径17.2cm胴径15.1cm器高20.2cm底径6.35cm	VI群d(恵山)
96-2	GP-454	2	城底	土器	口径9.35cm器高10.5cm底径 4.4cm	VI群d(恵山)
97-3	GP-454	3	城底	石障	長さ 2.2cm幅1.05cm厚さ 0.4cm重さ 0.8g	黒曜石
97-4	GP-454	5	城底	石障	長さ 3.05cm幅 1.85cm厚さ 0.35cm重さ 1.7g	黒曜石
97-5	GP-454	14	城底	石障	長さ 2.65cm幅 1.35cm厚さ 0.35cm重さ 0.7g	黒曜石
97-6	GP-454	15	城底	石障	長さ 2.4cm幅 1.25cm厚さ 0.25cm重さ 0.6g	黒曜石
97-7	GP-454	16	城底	石障	長さ 2.85cm幅 1.65cm厚さ 0.3cm重さ 0.7g	黒曜石
97-8	GP-454	17	城底	石障	長さ 2.75cm幅 1.25cm厚さ 0.3cm重さ 0.6g	黒曜石
97-9	GP-454	18	城底	石障	長さ 2.2cm幅 1.15cm厚さ 0.2cm重さ 0.4g	黒曜石
97-10	GP-454	19	城底	石障	長さ 2.45cm幅 1.3cm厚さ 0.25cm重さ 0.6g	黒曜石
97-11	GP-454	20	城底	石障	長さ 2.6cm幅(1.1cm)厚さ0.25cm重さ(0.4g)	黒曜石
97-12	GP-454	21	城底	石障	長さ 2.85cm幅 1.3cm厚さ 0.3cm重さ 0.7g	黒曜石
97-13	GP-454	22	城底	石障	長さ 2.5cm幅 1.25cm厚さ 0.2cm重さ 0.5g	黒曜石
97-14	GP-454	23	城底	石障	長さ 2.55cm幅 1.3cm厚さ 0.25cm重さ 0.65g	黒曜石
97-15	GP-454		埋土	石障	長さ 2.5cm幅 0.95cm厚さ 0.45cm重さ 0.7g	黒曜石
97-16	GP-454		埋土	スクレイパー	長さ 2.0cm幅 1.2cm厚さ 0.25cm重さ 0.6g	黒曜石
97-17	GP-454	8	城底	スクレイパー	長さ6.25cm幅 2.65cm厚さ 0.95cm重さ16.2g	チャート
97-18	GP-454		埋土	ナイフ	長さ(5.45cm)幅 3.1cm厚さ1.2cm重さ(20.0g)	チャート
97-19	GP-454		埋土	スクレイパー	長さ 6.9cm幅 3.5cm厚さ 1.0cm重さ23.2g	頁岩
97-20	GP-454	10	城底	スクレイパー	長さ 5.7cm幅 5.1cm厚さ 1.1cm重さ23.2g	頁岩
97-21	GP-454	11	城底	スクレイパー	長さ7.75cm幅 5.8cm厚さ 0.7cm重さ33.6g	黒曜石
98-22	GP-454	6	城底	垂飾	長さ 3.55cm幅 2.9cm厚さ 1.1cm 穴径0.35×0.2cm重さ 5.1g	コハク
98-23	GP-454		城底	平玉	直径0.45cm厚さ 0.2cm穴径0.15cm重さ0.05g	コハク
98-24	GP-454		埋土	平玉	直径 0.5cm厚さ 0.3cm穴径0.15cm重さ0.05g	コハク
98-25	GP-454		埋土	平玉	直径 0.4cm厚さ 0.15cm穴径 0.1cm重さ 0.05g	コハク
98-26	GP-454	9	城底	石片	長さ14.3cm幅 6.4cm厚さ 3.0cm重さ 479g	蛇紋岩?
98-27	GP-454	7	城底	石障	長さ11.15cm幅 4.9cm厚さ 3.7cm重さ 273g	泥岩。巻き付け痕あり
100-1	GP-460	1	埋土	石枕	長さ40.5cm幅 9.5cm厚さ 9.3cm重さ6500g	縮尺1/4 凝灰岩
100-2	GP-460	2	埋土	土器	口径10.9cm器高 4.9cm	VI群a(大洞B~C併行)
100-3	GP-460	3	埋土	土器	器高(4.1cm) 器台径 8.4cm	高台部 VI群(晩期)
100-4	GP-460	6・7・8	城底	腕輪	直径(8.25×4.55cm) 厚さ 0.6cm	漆器
100-5	GP-460	4・5	城底	腕輪	直径(7.5×6.6cm) 厚さ 0.7, 0.5cm	漆器

図版番号	遺物番号	遺物番号	部位	名称	計測値	備考
100-6	GP-460		埋土	石版	長さ(2.0cm)幅1.2cm厚さ0.5cm重さ(1.0g)	黒曜石
100-7	GP-460		埋土	土器	器高(10.2cm)	VI群a(大洞B~BC併行)
100-8	GP-460		埋土	土器	器高(12.7cm)	VI群a(大洞B~BC併行)
102-1	GP-474	1	埋土	土器	口径28.4cm器高(34.35cm)	VI群(晩期)
102-2	GP-474	1	埋土	土器	口径(7.55cm)器高(11.5cm)	VI群a(大洞B~BC併行)
102-3	GP-474	17	埋土	土器	口径8.0cm器高3.65cm底径4.2cm穴径0.4cm	VI群a(大洞B~BC併行)
102-4	GP-474	13	埋土	土器	口径(28.85cm)器高9.3cm底径6.8cm	VI群(晩期)
102-5	GP-474	1	埋土	円形土器片	直径3.8×3.15cm厚さ0.75cm重さ10.0g	
102-6	GP-474		埋土	土器	長さ7.75cm幅6.05cm厚さ3.9cm重さ231g	安山岩
103-1	GP-505	1	埋土	土器	器高5.55cm	VI群a(大洞C、~C、併行)
103-2	GP-505		埋土	スクレイパー	長さ5.75cm幅2.85cm厚さ1.2cm重さ9.1g	チャート
103-3	GP-505		埋土	石核	長さ3.25cm幅2.8cm厚さ0.55cm重さ4.6g	チャート
103-4	GP-505		埋土	削片	長さ3.1cm幅3.5cm厚さ1.0cm重さ10.2g	黒曜石
104-5	GP-505	2	埋土	土器	口径11.2cm胴径(14.6cm)器高12.4cm 底径8.5cm注口径1.7cm	VI群a(大洞C、~C、併行)
104-6	GP-505	4	壊底	踏石器	長さ7.3cm幅5.9cm厚さ4.75cm重さ444g	絹鉄鉱
107-1	GP-593	2	壊底	土器	口径19.8cm胴径16.35cm器高27.9cm底径6.9cm	VI群d(原山)
107-2	GP-593	1	埋土	土器	口径17.6cm器高5.5cm	VI群d(原山)
107-3	GP-593		埋土	土器	口径(12.2cm)器高(8.1cm)	VI群(晩期)
107-4	GP-593	9	埋土	土器	口径(12.5cm)器高14.5cm	VI群(晩期)
107-5	GP-593		埋土	土器	器高(6.9cm)	VI群(晩期)
107-6	GP-593		埋土	土器	器高(17.5cm)	VI群(晩期)
108-7	GP-593		埋土	土器	口径(18.8cm)器高(9.6cm)	VI群(晩期)
108-8	GP-593		埋土	土器	口径(7.0cm)胴径(7.75cm)器高6.8cm	VI群(晩期)
108-9	GP-593		埋土	円形土器片	長さ3.7cm幅3.55cm厚さ0.9cm重さ11.6g	
108-10	GP-593		埋土	丸玉	直径0.7cm厚さ0.7cm 穴径大0.45cm穴径小0.35cm重さ0.9g	蛇紋岩
108-11	GP-593		埋土	丸玉	直径0.7cm厚さ0.75cm 穴径大0.7cm穴径小0.45cm重さ1.7g	蛇紋岩
108-12	GP-593		埋土	石片	長さ7.4cm幅4.3cm厚さ1.8cm重さ100g	緑色片岩 未成品
108-13	GP-593	5	壊底	石片	長さ19.9cm幅6.7cm厚さ3.4cm重さ790g	緑色片岩
109-14	GP-593	12	壊底	石版	長さ2.4cm幅1.65cm厚さ0.35cm重さ0.8g	黒曜石
109-15	GP-593	26	壊底	石版	長さ4.05cm幅1.15cm厚さ0.4cm重さ1.2g	チャート
109-16	GP-593	29	壊底	石版	長さ3.55cm幅1.45cm厚さ0.35cm重さ0.9g	黒曜石
109-17	GP-593	36	壊底	石版	長さ2.75cm幅1.35cm厚さ0.3cm重さ0.6g	黒曜石
109-18	GP-593	40	壊底	石版	長さ2.7cm幅1.6cm厚さ0.25cm重さ0.7g	黒曜石
109-19	GP-593	49	壊底	石版	長さ3.05cm幅1.45cm厚さ0.25cm重さ0.7g	黒曜石
109-20	GP-593	68	壊底	石版	長さ(2.2cm)幅1.2cm厚さ0.35cm重さ(0.6g)	黒曜石
109-21	GP-593	70	壊底	石版	長さ2.8cm幅1.6cm厚さ0.3cm重さ1.3g	粘板岩
109-22	GP-593	74	壊底	石版	長さ1.65cm幅1.4cm厚さ0.3cm重さ0.5g	黒曜石
109-23	GP-593	80	壊底	石版	長さ2.35cm幅1.45cm厚さ0.2cm重さ0.6g	黒曜石
109-24	GP-593		埋土	石版	長さ(2.2cm)幅1.4cm厚さ0.4cm重さ(0.8g)	チャート
109-25	GP-593		埋土	石版	長さ2.85cm幅1.4cm厚さ0.35cm重さ1.1g	黒曜石
109-26	GP-593		埋土	石版	長さ1.95cm幅1.55cm厚さ0.45cm重さ0.9g	黒曜石
109-27	GP-593		埋土	石版	長さ2.85cm幅1.35cm厚さ0.35cm重さ0.9g	黒曜石
109-28	GP-593		埋土	石版	長さ3.4cm幅1.25cm厚さ0.3cm重さ0.8g	チャート
109-29	GP-593		埋土	石版	長さ3.7cm幅1.5cm厚さ0.45cm重さ1.4g	黒曜石
109-30	GP-593		埋土	石版	長さ3.7cm幅1.5cm厚さ0.4cm重さ1.8g	黒曜石

図版番号	遺構番号	遺物番号	層位	名称	計測値	備考
109-31	GP-593		埋土	石線	長さ3.15cm幅1.35cm厚さ0.25cm重さ0.7g	黒曜石
109-32	GP-593		埋土	石線	長さ2.75cm幅1.55cm厚さ0.25cm重さ0.7g	黒曜石
109-33	GP-593		埋土	石線	長さ2.75cm幅1.4cm厚さ0.25cm重さ0.6g	黒曜石
109-34	GP-593		埋土	石線	長さ3.05cm幅1.15cm厚さ0.25cm重さ0.7g	黒曜石
109-35	GP-593		埋土	石線	長さ(2.25cm)幅1.3cm厚さ0.25cm重さ(0.5g)	黒曜石
109-36	GP-593		埋土	石線	長さ2.15cm幅1.4cm厚さ0.2cm重さ0.5g	黒曜石
109-37	GP-593		埋土	石線	長さ2.05cm幅1.5cm厚さ0.3cm重さ0.5g	黒曜石
109-38	GP-593		埋土	石線	長さ1.75cm幅(1.3cm)厚さ0.25cm重さ(0.3g)	黒曜石
109-39	GP-593		埋土	石線	長さ2.0cm幅1.05cm厚さ0.25cm重さ0.7g	黒曜石
109-40	GP-593		埋土	石線	長さ2.3cm幅1.6cm厚さ0.3cm重さ0.8g	黒曜石
109-41	GP-593		埋土	石線	長さ2.7cm幅1.35cm厚さ0.2cm重さ0.6g	粘板岩
109-42	GP-593		埋土	石線	長さ2.15cm幅1.3cm厚さ0.25cm重さ0.5g	黒曜石
109-43	GP-593		埋土	石線	長さ2.4cm幅1.15cm厚さ0.25cm重さ0.8g	玄武岩
109-44	GP-593		埋土	スクレイパー	長さ5.35cm幅12.6cm厚さ1.05cm重さ71.0g	玄武岩
110-45	GP-593	50	納庇	凹石	長さ9.3cm幅9.35cm厚さ5.2cm重さ340g	凝灰岩
110-46	GP-593	8	納庇	凹石	長さ9.1cm幅6.8cm厚さ4.6cm重さ333g	凝灰岩
110-47	GP-593		埋土	紋石	長さ8.6cm幅6.65cm厚さ5.5cm重さ457g	柱岩?
図版番号	遺構番号	遺物番号	層位	名称	計測値	備考
112-1	SX-1	3	覆土	土器	胴径11.4cm器高(10.0cm)底径8.25cm	VI群a(大洞C,~C,併行)
112-2	SX-1	14	覆土	土器	口径15.5cm器高9.2cm底径(7.8cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
112-3	SX-1	7	覆土	土器	口径(2.2cm)器高(7.5cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
112-4	SX-1		覆土	土器	口径11.6cm器高5.4cm	VI群a(大洞C,~C,併行)
112-5	SX-1		覆土	土器	口径12.1cm器高4.0cm	VI群a(大洞C,~C,併行)
112-6	SX-1		覆土	土器	口径(19.0cm)器高(8.4cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
112-7	SX-1	8	覆土	土器	口径(13.9cm)器高(6.6cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
113-8	SX-1	4	覆土	土器	口径(13.7cm)器高(7.9cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
113-9	SX-1	2	覆土	土器	口径(24.4cm)器高(9.3cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
113-10	SX-1	4	覆土	土器	口径13.1cm器高(6.9cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
113-11	SX-1		覆土	土器	口径(13.7cm)器高(5.8cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
113-12	SX-1		覆土	土器	口径(13.9cm)器高(6.5cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
113-13	SX-1		覆土	土器	口径(28.6cm)胴径(30.9cm)器高(7.8cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
114-14	SX-1	3	覆土	土器	口径(14.0cm)器高12.5cm底径6.3cm	VI群a(大洞C,~C,併行)
114-15	SX-1	3	覆土	土器	口径(19.4cm)器高(14.2cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
114-16	SX-1	5	覆土	土器	口径12.3cm器高(8.5cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
114-17	SX-1	6	覆土	土器	口径9.7cm器高11.5cm器高(7.9cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
114-18	SX-1		覆土	土器	口径(5.1cm)胴径8.2cm器高9.3cm	VI群a(大洞C,~C,併行)
114-19	SX-1	2	覆土	土器	器高(7.8cm)底径6.3cm	VI群a(大洞C,~C,併行)
114-20	SX-1	5	覆土	土器	口径(12.4cm)器高(10.2cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
114-21	SX-1	3	覆土	土器	胴径(10.85cm)器高(14.0cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
114-22	SX-1		覆土	土器	口径(8.2cm)器高(4.2cm)	VI群a(大洞C,~C,併行)
115-23	SX-1		覆土	土器	口径(12.6cm)器高(6.9cm)	VI群(晩期)
115-24	SX-1	8	覆土	土器	胴径(23.0cm)器高(11.5cm)	VI群(晩期)
115-25	SX-1	11	覆土	土器	胴径15.75cm器高(7.9cm)	VI群(晩期)
115-26	SX-1		覆土	土器	胴径(13.1cm)器高(13.8cm)底径(5.1cm)	VI群(晩期)
115-27	SX-1		覆土	土器	器高(4.5cm)高台径8.1cm	高台部 VI群(晩期)
115-28	SX-1		覆土	土器	器高(3.6cm)高台径6.9cm	高台部 VI群(晩期)
115-29	SX-1		覆土	土器	器高(4.2cm)高台径(6.6cm)	高台部 VI群(晩期)
115-30	SX-1		覆土	土器	器高(4.5cm)高台径7.4cm	高台部 VI群(晩期)

照所番号	遺蹟番号	遺物番号	部位	名称	計測値	備考
116-31	SX-1		覆土	土器	器高(6.5cm) 高台径 10.0cm	高台部 VI群(晩期)
116-32	SX-1		覆土	土器	器高(6.1cm) 高台径 9.4cm	高台部 VI群(晩期)
116-33	SX-1		覆土	土器	器高(6.9cm) 高台径(13.15cm)	高台部 VI群(晩期)
116-34	SX-1		覆土	土器	器高(4.0cm) 高台径(6.8cm)	高台部 VI群(晩期)
116-35	SX-1		覆土	土器	器高(4.2cm) 高台径 7.4cm	高台部 VI群(晩期)
116-36	SX-1		覆土	土器	器高(4.1cm) 高台径 9.4cm	高台部 VI群(晩期)
116-37	SX-1		覆土	土器	器高(3.0cm) 高台径 9.6cm	高台部 VI群(晩期)
116-38	SX-1		覆土	土器	器高(4.1cm) 高台径 8.0cm	高台部 VI群(晩期)
116-39	SX-1		覆土	土器	器高(3.0cm) 高台径 9.7cm	高台部 VI群(晩期)
116-40	SX-1		覆土	土器	器高(4.8cm) 高台径 5.8cm	高台部 VI群(晩期)
116-41	SX-1		覆土	土器	器高(3.8cm) 高台径(9.6cm)	高台部 VI群(晩期)
116-42	SX-1		覆土	土器	器高(4.2cm) 高台径 10.1cm	高台部 VI群(晩期)
116-43	SX-1		覆土	土器	器高(3.3cm) 高台径(7.2cm)	高台部 VI群(晩期)
116-44	SX-1		覆土	土器	器高(3.5cm) 高台径 11.1cm	高台部 VI群(晩期)
117-45	SX-1		覆土	土器	器高(3.0cm) 高台径(9.2cm)	高台部 VI群(晩期)
117-46	SX-1		覆土	土器	器高(2.6cm) 高台径(8.1cm)	高台部 VI群(晩期)
117-47	SX-1		覆土	土器	器高(4.2cm)	高台部 VI群(晩期)
117-48	SX-1		覆土	土器	器高(3.8cm) 高台径 5.1cm	高台部 VI群(晩期)
117-49	SX-1		覆土	土器	器高(4.8cm) 高台径 11.2cm	高台部 VI群(晩期)
117-50	SX-1		覆土	土器	器高(3.0cm) 高台径(3.0cm)	高台部 VI群(晩期)
117-51	SX-1		覆土	土器	器高(2.8cm) 高台径(4.75cm)	高台部 VI群(晩期)
117-52	SX-1		覆土	土器	器高(2.6cm) 底径 4.2cm	底部 VI群(晩期)
117-53	SX-1		覆土	土器	器高(10.8cm) 底径 11.9cm	底部 VI群(晩期)
117-54	SX-1		覆土	土器	器高(6.6cm) 底径(7.0cm)	底部 VI群(晩期)
117-55	SX-1	2	覆土	土器	器高(6.2cm) 底径(6.6cm)	底部 VI群(晩期)
117-56	SX-1	2	覆土	土器	器高(6.7cm) 底径 7.4cm	底部 VI群(晩期)
118-57	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
118-58	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
118-59	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
118-60	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
118-61	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
118-62	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
118-63	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
119-64	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
119-65	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
119-66	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
119-67	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
119-68	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
119-69	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
119-70	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
119-71	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
119-72	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
119-73	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群a(大洞C, ~C, 併行)
119-74	SX-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群b(地内式)
119-75	SX-1		覆土	土器片	器高(5.9cm)	VI群(晩期)
119-76	SX-1		覆土	土器片	長さ(4.6cm) 幅 4.0cm 厚さ(3.9cm)	VI群(晩期)
120-1	SX-2	12	覆土	土器	器径(23.3cm)	VI群b(上ノ皿式併行)
120-2	SX-2		覆土	土器	口径 13.7cm 器高(5.55cm)	VI群(晩期)

図版番号	造構番号	遺物番号	類別	名称	計測値	備考
120-3	SX-2		覆土	土器	口径(21.2cm) 器高(4.1cm)	VI群(晩期)
120-4	SX-2		覆土	土器	口径(24.1cm) 器高(6.2cm)	VI群(晩期)
121-5	SX-2		覆土	土器	口径(35.95cm) 器高(8.25cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
121-6	SX-2		覆土	土器	口径(28.0cm) 器高(8.8cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
121-7	SX-2		覆土	土器	器高(5.7cm) 高台径(15.8cm)	VI群a(大洞B-9C併行)
121-8	SX-2		覆土	土俵	長さ(4.8cm) 幅(2.85cm) 厚さ(1.9cm)	部分(手)
121-9	SX-2		覆土	土製品	長さ(10.15cm) 幅(9.55cm) 厚さ(1.05cm)	
121-10	SX-2		覆土	土製品	長さ(7.65cm) 幅(6.5cm) 厚さ(1.75cm)	
123-1	SY-1	1	覆土	土器	口径7.4cm 胴径13.5cm 器高13.5cm 底径5.7cm	VI群a(大洞B-C,併行)
123-2	SY-1		覆土	土器	胴径(9.5cm) 器高(9.2cm) 底径(5.4cm)	VI群a(大洞B-C,併行)
123-3	SY-1		覆土	土器	胴径(12.5cm) 器高(8.2cm) 底径6.5cm	VI群a(大洞A'-A,併行)
123-4	SY-1	4	覆土	土器	胴径(7.5cm) 胴径(18.1cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
123-5	SY-1		覆土	土器	器高(10.0cm) 底径(9.8cm)	VI群a(大洞B-9C併行)
123-6	SY-1		覆土	土器	口径9.5cm 胴径10.7cm 器高(9.4cm)	VI群a(大洞B-9C併行)
124-7	SY-1		覆土	土器	口径(32.9cm) 器高(18.5cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
124-8	SY-1		覆土	土器	器高(19.1cm) 底径(9.1cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
124-9	SY-1		覆土	土器	口径(42.3cm) 器高(10.1cm)	VI群b(上ノ国式併行)
125-10	SY-1		覆土	土器	口径(11.8cm) 胴径(13.15cm) 器高(16.3cm)	VI群a(大洞B-9C併行)
125-11	SY-1	3	覆土	土器	口径21.7cm 器高(9.2cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
125-12	SY-1		覆土	土器	口径25.35cm 器高(9.9cm)	VI群b(横内式)
125-13	SY-1		覆土	土器	器高(9.2cm) 底径(7.8cm)	VI群(晩期)
125-14	SY-1		覆土	土器	器高(7.0cm) 底径(7.05cm)	VI群(晩期)
125-15	SY-1		覆土	土器	口径(9.6cm) 器高(4.8cm) 底径5.4cm	VI群a(大洞C,-C,併行)
125-16	SY-1		覆土	土器	器高(10.6cm) 底径(11.0cm)	VI群(晩期)
126-17	SY-1		覆土	土器	口径(34.0cm) 器高(7.7cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
126-18	SY-1		覆土	土器	口径(39.3cm) 器高(12.0cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
126-19	SY-1		覆土	土器	口径(35.7cm) 器高13.4cm 底径19.0cm	VI群a(大洞C,-C,併行)
127-20	SY-1		覆土	土器	口径17.4cm 器高9.0cm 底径6.6cm	VI群a(大洞C,-C,併行)
127-21	SY-1		覆土	土器	口径(18.8cm) 器高(9.0cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
127-22	SY-1		覆土	土器	口径(18.2cm) 器高(6.3cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
127-23	SY-1		覆土	土器	口径14.9cm 器高9.8cm 底径6.9cm	VI群a(大洞B-9C併行)
127-24	SY-1		覆土	土器	口径(23.4cm) 器高(6.7cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
127-25	SY-1		覆土	土器	口径(13.5cm) 胴径(14.9cm) 器高(9.1cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
127-26	SY-1		覆土	土器	口径(17.75cm) 器高6.5cm	VI群a(大洞C,-C,併行)
127-27	SY-1		覆土	土器	口径(21.75cm) 器高(6.4cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
127-28	SY-1		覆土	土器	口径(18.7cm) 器高(6.15cm)	VI群a(大洞C,-C,併行)
128-29	SY-1		覆土	土器	口径16.9cm 器高8.3cm 底径7.6cm	VI群b(横内式)
128-30	SY-1		覆土	土器	口径20.3×14.3cm 器高4.5cm 底径8.0×5.5cm	VI群(晩期)
128-31	SY-1		覆土	土器	口径(22.4×15.2cm) 器高(7.9cm) 底径(8.9cm)	VI群(晩期)
129-32	SY-1		覆土	土器	器高(10.0cm) 高台径20.9cm	底部 VI群(晩期)
129-33	SY-1		覆土	土器	器高(3.7cm) 高台径(11.4cm)	底部 VI群(晩期)
129-34	SY-1		覆土	土器	器高(6.3cm) 高台径(11.0cm)	底部 VI群b(上ノ国式併行)
129-35	SY-1		覆土	土器	器高(6.0cm) 高台径6.9cm	底部 VI群(晩期)
129-36	SY-1		覆土	土器	器高(2.8cm) 高台径8.2cm	底部 VI群(晩期)
129-37	SY-1		覆土	土器	器高(4.7cm) 高台径(11.2cm)	底部 VI群(晩期)
129-38	SY-1		覆土	土器	器高(4.9cm) 高台径(10.3cm)	底部 VI群(晩期)
129-39	SY-1		覆土	土器	器高(3.2cm) 高台径6.2cm	底部 VI群(晩期)
129-40	SY-1		覆土	土器	器高(5.4cm) 高台径12.0cm	底部 VI群(晩期)

図版番号	遺構番号	遺物番号	部位	名称	計測値	備考
129-41	SY-1		覆土	土器	器高(4.8cm) 高台径(7.0cm)	底部 VI群 b(上/国式併行)
129-42	SY-1		覆土	土器	器高(3.7cm) 底径 4.4cm	底部 VI群(晚期)
129-43	SY-1		覆土	土器	器高(3.2cm) 底径5.55cm	底部 VI群 b(坑内式)
130-44	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
130-45	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
130-46	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
130-47	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
130-48	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
130-49	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
130-50	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
130-51	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
130-52	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
131-53	SY-1	2	覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 b(上/国式併行)
131-54	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群(晚期)
131-55	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 b(上/国式併行)
131-56	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群(晚期)
131-57	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 b(上/国式併行)
131-58	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
132-59	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
132-60	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
132-61	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
132-62	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 b(坑内式)
132-63	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
132-64	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
132-65	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
132-66	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
132-67	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
133-68	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
133-69	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
133-70	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
133-71	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
133-72	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
133-73	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
133-74	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
133-75	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞B~C併行)
133-76	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞B~C併行)
133-77	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞B~C併行)
133-78	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞B~C併行)
134-79	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
134-80	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
134-81	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
134-82	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
134-83	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
134-84	SY-1		覆土	土器片	拓本-口縁部	VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
134-85	SY-1		覆土	土器片	拓本	器底不明 VI群 a(大洞C, ~C, 併行)
134-86	SY-1		覆土	土製品	長さ(4.1cm) 幅(6.25cm) 厚さ(1.75cm)	
134-87	SY-1		覆土	土製品	長さ(3.05cm) 幅(7.0cm) 厚さ(2.2cm)	
134-88	SY-1		覆土	土製品	長さ(5.9cm) 幅(8.4cm) 厚さ(1.95cm)	

図版番号	遺構番号	遺物番号	部位	名称	計測値	備考
134-89	SY-1		覆土	土製品	長さ(4.1cm) 幅(1.7cm) 厚さ(1.4cm)	
134-90	SY-1		覆土	土製品	長さ(5.75cm) 幅(2.8cm) 厚さ(1.9cm)	
134-91	SY-1		覆土	土製品	長さ(10.05cm) 幅(2.75cm) 厚さ(1.65cm)	
135-1	MO-1	10・43	覆土	珠洲	拓本	摺鉢 御目8条 2.4cm
135-2	MO-1	40	覆土	土埴	直径3.85cm高さ4.9cm口径1.4cm重さ41.6g	
135-3	MO-1	86	覆土	土埴	直径(2.5cm)高さ4.9cm口径0.9cm重さ33.0g	
136-1	MO-3	108	覆土	魚形石器	長さ20.1cm幅4.9cm厚さ4.7cm重さ643g	摺尺1/3, 砂岩
137-1	MO-5	1	覆土	珠洲	拓本-口縁部	摺鉢 御目11条 4.0cm
137-2	MO-5	1	覆土	珠洲	拓本-口縁部	摺鉢 御目24条 3.4cm
138-1	MO-8	112	覆土	魚形石器	長さ(18.6cm)幅5.2cm厚さ5.1cm重さ(476g)	摺尺1/3, 砂岩, 両端欠損
142-1	MO-10	下期	覆土	土器	器高(3.35cm)	口縁部
142-2	MO-10	第1貝層	覆土	磁器	口径5.7cm器高3.7cm底径2.3cm	蓋 外面草文
142-3	MO-10		覆土	磁器	口径(13.9cm) 器高4.0cm底径6.9cm	小皿 見込み花唐草文 内面花唐草文
142-4	MO-10		覆土	磁器	口径(17.5cm) 器高5.2cm底径5.9cm	中皿 内面花唐文 輪先け 見込み八弁花文コンニャク印判
142-5	MO-10		覆土	磁器	口径17.8cm器高5.45cm底径5.9cm	中皿 内面花唐文 輪先け
142-6	MO-10		覆土	磁器	口径(14.6cm) 器高4.7cm底径7.0cm	中皿 見込み松竹梅文 内面格子文
143-7	MO-10		覆土	磁器	器高(5.8cm) 底径8.3cm	徳利底部
143-8	MO-10		覆土	陶器	器高(8.9cm) 底径7.0cm	徳利 外面白釉
143-9	MO-10		覆土	陶器	口径(16.8cm) 器高7.8cm底径5.9cm	鉢 刷毛目蛇の目釉 内面輪先け
143-10	MO-10		覆土	陶器	器高(10.9cm) 底径7.6cm	徳利
143-11	MO-10		覆土	陶器	器高(12.1cm) 底径7.8cm	徳利
143-12	MO-10		覆土	キテ	長さ10.95cm幅2.65cm厚さ1.55cm重さ27.4g	鯨骨製 摺尺1/3
143-13	MO-10	第1貝層下位	覆土	キテ	長さ(7.1cm) 幅3.25cm厚さ2.1cm重さ(18.0g)	鯨骨製 摺尺1/3
143-14	MO-10	第1貝層位	覆土	中柄	長さ9.45cm幅1.2cm厚さ1.0cm重さ5.3g	鯨骨製 摺尺1/3
143-15	MO-10		覆土	刺突具?	長さ7.25cm幅0.95cm厚さ0.75cm重さ3.7g	鹿角製 摺尺1/3
143-16	MO-10		覆土	鏝口?	長さ2.9cm幅(2.2cm) 厚さ(0.8cm) 重さ(2.3g)	鹿角製 摺尺1/3
143-17	MO-10		覆土	刷子	長さ(5.95cm) 幅(1.15cm) 厚さ(0.5cm) 重さ(2.5g)	鯨骨製?摺尺1/3
144-1	MO-11		覆土	土師器	器高(3.45cm)	坏 器首有り「大」?
145-1	MO-14		覆土	土製品	長さ(4.3cm) 幅(5.75cm) 厚さ(2.6cm)	
図版番号	遺構番号	遺物番号	名称	計測値	備考	
147-1	SM-1		キセル覆首	長さ(3.8cm) 火皿径0.8cm	銅製	
147-2	SM-1		キセル覆首	長さ(2.5cm) 口径1.0cm	銅製	
147-3	SM-1		キセル吸口	長さ6.75cm口径0.9cm吸口径0.4cm	銅製	
147-4	SM-1		古鉄	直径2.5cm厚さ0.15cm重さ4.0g	寛永通宝(背文)	
147-1	SM-2		磁器	口径(21.2cm) 器高4.1cm底径12.4cm	大皿 摺尺1/4 内面扇子草花文 外面唐草文 口唇口紅	
147-2	SM-2	3	火皿?	口径11.7cm器高4.8cm底径8.8cm	凝灰岩製 摺尺1/3	
147-3	SM-2		キセル覆首	長さ(3.4cm) 口径1.2cm	銅製	
147-4	SM-2		キセル覆首	長さ(5.05cm) 口径0.85cm	銅製	
147-5	SM-2		キセル覆首	長さ(6.8cm) 口径1.1cm	銅製	
147-6	SM-2		キセル吸口	長さ7.8cm口径1.3cm吸口径0.5cm	銅製	
147-7	SM-2		キセル	(覆首) 長さ4.7cm口径1.1cm火皿径1.3cm (吸口) 長さ5.5cm口径1.05cm吸口径0.5cm	銅製	
147-8	SM-2		キセル覆首	長さ6.7cm口径1.0cm火皿径1.7cm	銅製	

図版番号	遺構番号	遺物番号	名称	計測値	備考
148-9	SM-2	2	飾り金具?	長さ 7.9cm幅 4.8cm厚さ 0.2cm	銅製
148-10	SM-2		駒軸?	直径 5.2×4.15cm幅1.1cm厚さ 0.1cm	銅製
148-11	SM-2		耳飾り?	直径 4.1×3.5cm厚さ 0.2cm	銅製
148-12	SM-2		刀装具?	長さ 3.3cm幅0.85cm厚さ0.05cm	銅製
148-13	SM-2		鏝	長さ(14.75cm) 幅(8.45cm) 厚さ 0.3cm	鉄製
148-14	SM-2		板状鉄斧	長さ14.0cm幅 7.5cm厚さ 4.2cm	鉄製
148-15	SM-2	刀子	全長12.9cm刃長11.0cm刃幅 2.0cm刃厚 0.4cm	鉄製	
149-16	SM-2	古銭	直径 2.3cm厚さ 0.09cm重さ 2.0g	寛永通宝(無背)	
149-17	SM-2	古銭	直径 2.4cm厚さ 0.1cm重さ 3.0g	寛永通宝(無背)	
149-18	SM-2	古銭	直径2.25cm厚さ 0.1cm重さ 2.8g	寛永通宝(無背)	
149-19	SM-2	古銭	直径 2.2cm厚さ 0.11cm重さ 2.3g	寛永通宝(無背)	
149-20	SM-2	針入れ	長さ 7.1cm幅 0.9cm厚さ 0.8cm重さ3.3g	アホウドリ尺骨製	
149-21	SM-2	針入れ	長さ 6.0cm幅 1.0cm厚さ0.85cm重さ3.5g	アホウドリ尺骨製	
149-22	SM-2	針入れ	長さ5.25cm幅 0.8cm厚さ0.75cm重さ2.4g	アホウドリ尺骨製	
149-23	SM-2	針入れ片	長さ(4.8cm) 幅1.15cm厚さ(0.55cm)重さ(1.2g)	アホウドリ尺骨製	
149-24	SM-2	不明骨角製品	長さ 4.8cm幅1.35cm厚さ 0.8cm重さ2.2g	鯨骨製	
149-25	SM-2	垂飾	長さ(4.75cm) 幅 1.6cm厚さ 1.0cm重さ(3.4g)	鹿角製	
149-26	SM-2	垂飾	長さ 6.9cm幅1.95cm厚さ1.25cm重さ(10.4g)	ヒゲマ犬歯製	
149-27	SM-2	鐙?	直径 7.1×6.8cm厚さ2.35cm穴径 4.1×2.0cm重さ28.8g	鹿角角座製	
150-1	SM-3		磁器	口径20.2cm器高 4.5cm底径12.6cm	中国 内面刷面陶器文 外面唐草文 銘「萬福」
150-2	SM-3		キセル吸口	長さ 4.6cm口径 0.7cm吸口径 0.5cm	銅製
150-3	SM-3		キセル吸口	長さ 4.5cm口径 1.1cm吸口径 0.35cm	銅製
150-4	SM-3		キセル吸口	長さ 5.6cm口径 0.9cm吸口径 0.4cm	銅製
150-5	SM-3		キセル吸口	長さ5.85cm口径 0.9cm吸口径0.35cm	銅製
150-6	SM-3		キセル吸口	長さ 6.7cm口径0.95cm吸口径 0.6cm	銅製
150-7	SM-3		キセル覆首	長さ 4.7cm口径 1.1cm火照径 1.5cm	銅製
150-8	SM-3		キセル覆首	長さ 7.0cm口径 1.0cm火照径 1.6cm	銅製
150-9	SM-3		キセル	(覆首)長さ 6.9cm口径1.05cm火照径1.05cm (吸口)長さ 7.7cm口径1.05cm吸口径 0.5cm	銅製
150-10	SM-3	96	キセル	(覆首)長さ8.55cm口径 0.9cm火照径 1.5cm (吸口)長さ12.9cm口径 0.9cm吸口径0.35cm	銅製
151-11	SM-3		鉄鍋	器高(12.3cm)	鉄製
151-12	SM-3	26	鉄鍋	器高(16.4cm)	鉄製 吊耳
151-13	SM-3	17	鉤	長さ10.7cm幅7.65cm厚さ 0.7cm	鉄製
151-14	SM-3		鉤	長さ 8.4cm幅 4.7cm厚さ0.85cm	鉄製
151-15	SM-3	7	鉤	長さ8.3cm幅5.2cm厚さ0.7cm	鉄製
151-16	SM-3	12	鉤	長さ9.15cm幅7.35cm厚さ1.15cm	鉄製
151-17	SM-3		船釘	長さ11.9cm幅1.55cm厚さ 1.1cm	鉄製
151-18	SM-3		手斧	長さ12.1cm幅 4.2cm厚さ 2.8cm	鉄製
152-19	SM-3		刀子	全長13.1cm刃長 9.8cm刃幅 2.5cm刃厚 0.8cm	鉄製
152-20	SM-3		刀子	全長14.4cm刃長12.4cm刃幅 2.9cm刃厚 0.6cm	鉄製
152-21	SM-3		刀子	全長18.7cm刃長13.7cm刃幅 3.1cm刃厚 0.8cm	鉄製
152-22	SM-3	5	刀子	全長15.2cm刃長12.6cm刃幅2.35cm刃厚 0.5cm	鉄製
152-23	SM-3		刀子	全長14.9cm刃長10.6cm刃幅 2.0cm刃厚 0.8cm	鉄製
152-24	SM-3		鉄環	直径3.45×2.35cm厚さ 0.8cm	鉄製
152-25	SM-3		銅釧	長さ 5.4cm幅1.85cm厚さ 0.2cm	銅製
152-26	SM-3		古銭	直径 2.4cm厚さ 0.1cm重さ 3.0g	貞元重宝(逆)

図版番号	遺物番号	遺物番号	名称	計測値	備考
152-27	SM-3	10	古銭	直径 2.3cm厚さ 0.1cm重さ 2.4g	寛永通宝(無背)
152-28	SM-3	2	古銭	直径 2.3cm厚さ 0.1cm重さ 2.3g	寛永通宝(背足)
152-29	SM-3		古銭	直径(2.45cm)厚さ0.17cm重さ(1.8g)	銭名不明 鉄銭 1/2欠損
152-30	SM-3		丸玉	直径 1.8cm厚さ 0.8cm 穴大 0.5cm穴小 0.25cm重さ 1.4g	コハク
152-31	SM-3		丸玉	直径 1.3×1.0cm厚さ 0.9cm重さ 2.1g	軽石 未成品
152-32	SM-3		丸玉	直径0.45cm厚さ 0.3cm穴径 0.1cm重さ 0.1g	土製
152-33	SM-3		丸玉	直径(0.35cm)厚さ0.3cm穴径 0.1cm重さ(0.1g以下)	土製 1/2欠損
152-34	SM-3		丸玉	直径(1.4cm)厚さ1.15cm穴径 0.4cm重さ(1.7g)	ガラス 1/2欠損
152-35	SM-3		丸玉	直径(1.1cm)厚さ0.75cm穴径0.25cm重さ(0.8g)	ガラス 1/2欠損
152-36	SM-3		丸玉	直径 0.6cm厚さ 0.4cm穴径 0.2cm重さ 0.3g	ガラス
152-37	SM-3		丸玉	直径 0.5cm厚さ 0.3cm穴径 0.1cm重さ 0.2g	ガラス
152-38	SM-3		丸玉	直径0.55cm厚さ 0.3cm穴径0.15cm重さ 0.2g	ガラス
152-39	SM-3		丸玉	直径 0.3cm厚さ 0.2cm穴径 0.1cm重さ 0.1g以下	ガラス
153-40	SM-3	3	中柄	長さ(12.2cm)幅 1.1cm厚さ1.0cm重さ(7.0g)	陸奥骨製
153-41	SM-3	4	中柄	長さ(10.6cm)幅 1.1cm厚さ 0.9cm重さ(7.4g)	陸奥骨製
153-42	SM-3	6	中柄	長さ11.55cm幅 1.0cm厚さ 0.9cm重さ4.8g	鯨骨製
153-43	SM-3	8	中柄	長さ(11.9cm)幅 1.5cm厚さ 0.9cm重さ(6.8g)	陸奥骨製
153-44	SM-3	9	中柄	長さ11.4cm幅 1.2cm厚さ 1.1cm重さ9.2g	陸奥骨製
153-45	SM-3		キテ	長さ(5.3cm)幅 2.9cm厚さ 1.1cm重さ(3.9g)	鯨骨製
153-46	SM-3	11	鯨口?	長さ3.75cm幅2.85cm厚さ1.15cm重さ6.2g	鹿角製
153-47	SM-3		ボタン	直径1.05cm厚さ 0.4cm重さ(0.4g)	鹿角製
153-1	SM-4		鉄鍋	器高(9.6cm)	鉄製 吊耳
153-2	SM-4	4	刀子	長さ 15.25cm幅2.75cm厚さ 1.5cm	鉄製
153-3	SM-4	2	鉤	長さ 7.5cm幅 7.1cm厚さ 0.8cm	鉄製
154-4	SM-4		磁器	口径13.4cm器高 3.5cm底径 3.7cm	小皿 内面くずし文字文 輪売げ
154-5	SM-4		磁器	口径20.2cm器高 2.4cm底径13.6cm	中皿 外面七宝と花文 内面色紙草花文と七宝花散らし
154-6	SM-4		陶器	口径31.9cm器高13.0cm底径11.2cm	播鉢 磨洋
154-7	SM-4		古銭	直径2.45cm厚さ 0.12cm重さ 3.6g	元符通宝(北条) 篆書
154-8	SM-4		古銭	直径2.45cm厚さ 0.12cm重さ 3.3g	聖宋元宝(北条) 行書
154-9	SM-4		キセル覆首	長さ 4.6cm口径 0.8cm火皿径 0.9cm	銅製
154-10	SM-4		キセル吸口	長さ5.45cm口径0.95cm吸口径0.45cm	銅製
154-11	SM-4		キセル覆首	長さ9.85cm口径 0.8cm火皿径 1.4cm	銅製
154-12	SM-4		垂飾	長さ 6.2cm幅 2.2cm厚さ1.15cm重さ(9.7g)	ヒグマ犬歯製
154-13	SM-4		不明骨角製品	長さ(8.7cm)幅(3.0cm)厚さ(1.2cm)重さ(10.0g)	鹿角製
155-1	SM-6		不明骨角製品	長さ10.7cm幅 0.8cm厚さ 0.9cm重さ 4.1g	鯨骨製 未成品
155-1	SM-10		陶器	拓本一口椀部	播鉢 翠
155-2	SM-10	19	陶器	口径12.8cm器高 4.5cm底径 6.2cm	小皿 見込み格子文「井」? 内面格子文 輪売げ
155-3	SM-10	11・15・23	磁器	口径9.75cm器高 3.6cm底径8.55cm	投箸 外面花文と梅文
155-4	SM-10	8	目皿	口径 5.8cm器高 1.2cm	土製 楕円1/2
155-5	SM-10	34	鹿角	長さ 8.7cm幅 5.9cm厚さ 2.4cm重さ30.8g	
155-6	SM-10		飾り金具	長さ4.45cm穴径 2.1cm厚さ 0.1cm	銅製
155-7	SM-10		キセル吸口	長さ 4.0cm口径 1.0cm吸口径 0.6cm	銅製
155-8	SM-10	9	古銭	直径2.25cm厚さ0.11cm重さ 2.6g	寛永通宝(無背)
156-1	SM-11		鉄鍋	器高(16.7cm)	鉄製
156-2	SM-11		鉄鍋	器高(13.0cm)	鉄製 吊耳

図版番号	遺物番号	遺物番号	名称	計測値	備考
156-3	SM-11		キセル覆首	長さ4.6cm口径1.1cm火皿径1.45cm	銅製
156-4	SM-11	32	キセル覆首	長さ(8.4cm)口径1.05×0.8cm	銅製
156-5	SM-11	51	刀子	全長14.7cm刃長10.5cm刃幅1.8cm刃厚0.3cm	鉄製
156-1	SM-12	14	磁器	口径(14.2cm)器高2.5cm底径(8.0cm)	中皿 見込み五弁花コンニャク印 内面花文と斜格子文 軸売げ
156-2	SM-12	4	鉄罐	直径3.45×2.5cm厚さ0.7cm	鉄製
156-3	SM-12	54	古鉄	直径2.35cm厚さ0.17cm重さ2.7g	寛永通宝(無背)
156-4	SM-12	47	垂飾	直径2.2×2.1cm厚さ1.1cm 穴径大0.5cm穴径小0.2cm重さ4.0g	石灰製?
156-5	SM-12	64	不明骨角製品	長さ13.0cm幅1.9cm厚さ1.75cm重さ26.6g	鯨骨製 未成品
157-1	SM-13		キテ	長さ(4.9cm)幅1.9cm厚さ1.0cm重さ(7.1g)	骨角器 原材種別不明
157-2	SM-13	12①	古鉄	直径2.35cm厚さ0.11cm重さ2.6g	永楽通宝(明)
157-3	SM-13	12②	古鉄	直径2.35cm厚さ0.12cm重さ2.4g	永楽通宝(明)
157-1	SM-14	10	砲刃	長さ7.0cm幅6.7cm厚さ0.7cm	鉄製
157-2	SM-14		丸玉	直径1.15cm厚さ0.65cm穴径0.35cm重さ1.7g	ガラス
157-1	SM-15	12	磁器	器高(3.3cm)底径4.3cm	陶 見込みくずし文字
157-2	SM-15		骨角材角製品	長さ0.8cm幅1.5cm厚さ0.35cm穴径0.3cm重さ6.6g	鹿角製
157-3	SM-15		鏝	長さ(18.7cm)幅12.4cm厚さ0.5cm穴径0.4cm	鉄製
158-1	SM-17	35	陶器	口径26.5cm器高13.4cm底径15.8cm	こね鉢
158-2	SM-17		陶器	拓本-口縁部	罌鉢 丹波 鉄軸
158-3	SM-17		珠洲	拓本-底部	片口罌鉢 御目9条 3.0cm
158-4	SM-17		陶器	器高(12.0cm)底径7.1cm	徳利
158-5	SM-17	61	陶器	器高(11.2cm)底径5.8cm	徳利
158-6	SM-17		磁器	口径6.4cm器高7.0cm底径4.3cm	湯飲み 焼跡有り 見込み草花文 内面くずし文字 外面山水家屋人物文 地文字
158-7	SM-17		磁器	口径(9.9cm)器高5.6cm底径3.9cm	碗 外面牡丹文
158-8	SM-17		磁器	口径10.8cm器高5.7cm底径3.6cm	碗 見込み「寿」 内面紫文 外面花文
158-9	SM-17		磁器	口径9.1cm器高3.8cm底径3.4cm	湯飲み 色絵 見込み文字 外面草花文
158-10	SM-17		磁器	口径7.0cm器高6.6cm底径4.6cm	湯飲み 刷絵 内面輪宝象文 外面向日葵文
158-11	SM-17	22	磁器	口径4.2cm器高1.25cm底径1.1cm	紅皿 貝文様型押し成形
159-12	SM-17	69	土罐	直径4.25cm高さ5.0cm穴径1.8cm重さ80.0g	土製
159-13	SM-17		土罐	直径2.9cm高さ5.9cm穴径1.4cm重さ44.5g	磁器 縮尺1/2
159-14	SM-17	39	鉄鍋	器高(5.1cm)底径(22.2cm)	鉄製
159-15	SM-17		蛇	長さ25.7cm幅4.4cm厚さ0.7cm	鉄製
159-16	SM-17		包丁	長さ18.65cm幅4.6cm厚さ0.8cm	鉄製
159-17	SM-17	43	刀子	全長(13.5cm)刃長(10.2cm) 刃幅2.8cm刃厚0.3cm	鉄製
160-18	SM-17	6	眼鏡の縁	長さ2.8cm幅11.75cm厚さ0.25cm	銅製
160-19	SM-17	355	キセル吸口	長さ7.8cm口径1.0cm吸口径0.5×0.35cm	銅製
160-20	SM-17		キセル	(眼首)長さ(5.15cm)口径1.0cm (吸口)長さ(4.85cm)口径0.8cm 吸口径0.4×0.25cm	銅製
160-21	SM-17	357	キセル吸口	長さ6.15cm口径1.1cm吸口径0.6cm	銅製
160-22	SM-17	356	キセル吸口	長さ6.8cm口径1.2cm吸口径0.75cm	銅製

図版番号	遺構番号	遺物番号	名称	計測値	備考
160-23	SM-17	20	金属製品	直径 3.1cm厚さ0.03cm	銅製 矢筒の金具
160-24	SM-17	19	金属製品	直径 2.2×2.0cm厚さ0.03cm	銅製 矢筒の金具
160-25	SM-17		金属製玉	直径 1.4cm重さ14.2g	銅製?
160-26	SM-17	3	耳飾り	長さ 7.2cm幅 0.3cm厚さ 0.3cm	銅製
160-27	SM-17	44	中柄	長さ(15.3cm)幅1.05cm厚さ0.7cm重さ(11.6g)	鯨骨製
160-28	SM-17	24	中柄	長さ15.6cm幅 1.1cm厚さ 0.8cm重さ14.6g	鯨骨製
160-29	SM-17	17	編針	長さ 16.05cm幅 0.6cm厚さ0.55cm重さ4.6g	骨角器 原料種別不明
160-30	SM-17		不明骨角製品	長さ(6.9cm)幅 0.4cm重さ(1.0g)	原料種別不明
160-31	SM-17	25	不明骨角製品	直径 4.4cm厚さ1.45cm穴径 0.5cm重さ15.6g	鹿角製
160-32	SM-17		小玉	直径 0.3cm厚さ0.15cm穴径 0.1cm重さ 0.1g以下	ガラス
160-33	SM-17		小玉	直径 0.2cm厚さ0.15cm穴径0.05cm重さ 0.1g以下	ガラス
160-34	SM-17		小玉	直径0.25cm厚さ0.15cm穴径 0.1cm重さ 0.1g以下	ガラス
160-35	SM-17		小玉	直径 0.2cm厚さ 0.1cm穴径0.05cm重さ 0.1g以下	ガラス
160-36	SM-17		小玉	直径 0.2cm厚さ 0.2cm穴径0.05cm重さ 0.1g以下	ガラス
160-37	SM-17		小玉	直径0.25cm厚さ0.15cm穴径0.05cm重さ 0.1g以下	ガラス
160-38	SM-17		小玉	直径0.25cm厚さ 0.2cm穴径 0.1cm重さ 0.1g以下	ガラス
160-39	SM-17		小玉	直径0.25cm厚さ0.15cm穴径 0.1cm重さ 0.1g以下	ガラス
160-40	SM-17		小玉	直径 0.2cm厚さ 0.1cm穴径0.05cm重さ 0.1g以下	ガラス
160-41	SM-17		小玉	直径 0.2cm厚さ 0.2cm穴径0.05cm重さ 0.1g以下	ガラス
160-42	SM-17		碧玉	直径 0.9cm厚さ 1.1cm穴径0.35cm重さ 1.0g	ガラス
160-43	SM-17		碧玉	直径0.85cm厚さ 1.1cm穴径 0.3cm重さ 0.9g	ガラス

掲載遺物一覧(遺構外)

図号 遺物№	出土地点	層	遺物№	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
165-1	Q-47	Ⅱ				(6.8)	20.7	上ノ国式併行
165-2	M-47	Ⅰ, Ⅲ		(11.6)			(11.5)	上ノ国式併行
165-3	Q-45	Ⅱ			(10.9)	8.2	(13.05)	上ノ国式併行 底部乳(後述)
165-4	K-46	Ⅲ		(12.7)			(6.5)	上ノ国式併行
165-5	R-46	Ⅲ		(14.9)	(12.9)		(10.7)	上ノ国式併行
165-6	Q-47	Ⅱ		(18.6)			9.5	上ノ国式併行
165-7	Q-45	Ⅱ		(12.8)			(6.45)	上ノ国式併行
166-1	Q-48	Ⅱ		(17.0)		7.3	7.6	上ノ国式併行
166-2	R-26	Ⅱ		15.5			(6.5)	上ノ国式併行
	Q-46	Ⅱ	395, 443 519	(15.9)			(6.4)	上ノ国式併行
166-3	R-46	Ⅱ						
166-4	M-59	Ⅰ		幅 (5.1)			長さ(5.2)	大洞C ₂ 式併行
166-5	K-40	Ⅰ Ⅱ, Ⅳ	8-12-78-80 9.3-6	(径.0)×(15.4)		8.2×6.2	12.6	大洞C ₂ 式併行
167-1	Q-44	Ⅱ						鏡内式 口縁部
167-2	M-42	Ⅱ	467					鏡内式 口縁部
167-3	Q-45	Ⅱ	998					鏡内式 口縁部
167-4	Q-45	Ⅱ	978					鏡内式 口縁部
167-5								鏡内式 口縁部
167-6	Q-43	Ⅰ	746					鏡内式 口縁部
167-7	O-44	Ⅱ	67					鏡内式 口縁部
167-8	R-45	Ⅱ						鏡内式 口縁部
167-9	J-42	Ⅱ						鏡内式 口縁部
167-10	R-46	Ⅱ	22					鏡内式 口縁部
167-11	Q-45	Ⅱ						鏡内式 口縁部
167-12	J-41	Ⅰ	489					鏡内式 口縁部
167-13	J-42	Ⅱ						鏡内式 口縁部
167-14	N-45	Ⅱ						鏡内式 口縁部
167-15	S-36	Ⅰ						鏡内式 口縁部
167-16	Q-51	Ⅱ	118					鏡内式 口縁部
168-1	Q-43	Ⅱ	339					鏡内式 口縁~胴部
168-2	Q-42	Ⅱ	129					鏡内式 口縁部
168-3	K-45	Ⅱ						鏡内式 口縁部
168-4	O-43	Ⅰ	420					鏡内式 口縁部
168-5	P-44	Ⅱ	151					鏡内式 口縁部
168-6	Q-47	Ⅱ						鏡内式 口縁部
168-7	H-44	Ⅱ						鏡内式 口縁部
168-8		Ⅰ						鏡内式 口縁部
168-9	I-36	Ⅰ	6380					鏡内式 口縁部
168-10	P-41	Ⅰ	605					鏡内式 口縁部
168-11	S-40	Ⅰ	1669					鏡内式 口縁部
168-12	M-42	Ⅱ	457					鏡内式 口縁部
168-13	Q-38	Ⅰ	1209					鏡内式 口縁部
169-1	P-44	Ⅱ	283					鏡内式 口縁部
169-2	O-44	Ⅱ						鏡内式 口縁部
169-3	P-44	Ⅱ						鏡内式 口縁部
169-4	O-44	Ⅱ						鏡内式 口縁部

层位 遗物层	出土地点	层	遗物层	口径 (cm)	肩径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	形制	考
169-5	Q-44	I	1365					瓮内式	口缘部
169-6	L-44	II						瓮内式	口缘部
169-7	P-41	II	3071					瓮内式	口缘部
169-8	O-45	I	251					瓮内式	口缘部
169-9	M-39	II	362					瓮内式	口缘部
169-10	P-45	I	34					瓮内式	口缘部
169-11	P-39	I	14					瓮内式	口缘部
169-12	Q-45	II	410					瓮内式	口缘部
169-13	O-44	II	506					瓮内式	口缘部
169-14	K-28	I	185					瓮内式	口缘部
169-15	R-41	II	540					瓮内式	口缘部
170-1	R-45	I	1342					瓮内式	口缘~肩部
170-2	Q-45	II						瓮内式	口缘部
170-3	P-41	II	102					瓮内式	口缘部
170-4	P-46	I	229					瓮内式	口缘部
170-5	P-41	II	17					瓮内式	口缘部
170-6	H-35	I	118					瓮内式	口缘部
170-7	O-46	II						瓮内式	口缘部
170-8	O-46	I	319					瓮内式	口缘部
170-9	R-41	II	2915					瓮内式	口缘部
170-10	O-43	II	254					瓮内式	口缘部
170-11	H-35	I	114					瓮内式	口缘部
170-12	K-44	II	1120					瓮内式	口缘部
170-13	O-44	II						瓮内式	口缘部
170-14	Q-42	II						瓮内式	口缘部
171-1	P-45	II						瓮内式	口缘部
171-2	O-40	I	671					瓮内式	口缘部
171-3	O-47	II						瓮内式	口缘~肩部
171-4	N-44	II						瓮内式	底部
171-5	R-45	II						瓮内式	底部
171-6		I						瓮内式	肩~底部
171-7	O-44	II	333					瓮内式	底部
171-8	S-41	II	1275					瓮内式	底部
171-9	S-38	I	1705					瓮内式	肩~底部
172-1	P-41	II						瓮内式	口缘部
172-2	I-41	I						瓮内式	口缘部
172-3	I-36	I						瓮内式	口缘部
172-4	T-31	I						瓮内式	口缘部
172-5	P-44	II						瓮内式	口缘部
172-6	I-36	I						瓮内式	口缘部
172-7	J-38	I						瓮内式	口缘部
172-8	JH-1							瓮内式	肩部(原残者土)
172-9	N-42	II						瓮内式	口缘~肩部
173-1	Q-45	II				(7.2)	(3.4)	上/图式型似	烧成前穿孔
173-2	Q-45	II				(7.4)	(4.5)	上/图式型似	烧成前穿孔
173-3	Q-45	II				8.0	(2.7)	上/图式型似	烧成前穿孔
173-4	R-42	I	179			(6.5)	(1.4)	晚期	烧成前穿孔

編號	遺物%	出土地点	形	遺物%	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
173-5	L-44	I	1006				(4.05)	(2.45)	晚期 燒成前穿孔
173-6	K-44	II					(5.7)	(2.2)	晚期 燒成前穿孔
173-7	D-47	I	28				(6.0)	(2.2)	晚期 燒成前穿孔
173-8	K-44	II					(4.8)	(1.0)	晚期 燒成前穿孔
173-9	P-44	II					(5.6)	(1.15)	晚期 燒成前穿孔
173-10	K-44	II	1175				(4.4)	(1.1)	晚期 燒成前穿孔
173-11		I					(4.4)	(1.6)	晚期 燒成前穿孔
173-12	N-43	I					6.7	(1.4)	晚期 燒成前穿孔
173-13	K-45	II					5.15	(1.6)	晚期 燒成前穿孔
173-14	K-45	II					6.9	(1.55)	晚期 燒成前穿孔
174-1	M-46	II							類似式 口緣部
174-2		I							類似式 口緣部
174-3	Q-54	I	25						類似式 口緣部
174-4	I-28	I	1298						類似式 口緣部
174-5	O-46	I	314						類似式 口緣部
174-6	D-49	I	137						類似式 口緣部
174-7	M-55	II							類似式 口緣部
174-8	K-53	I	9						類似式 口緣部
174-9	M-55	II							類似式 口緣部
174-10	D-49	I	131						類似式 口緣部
174-11	N-37	II	4						類似式 口緣部
174-12	N-55	II							類似式 口緣部
174-13	N-45	II							類似式 口緣部
174-14	M-55	II							類似式 口緣部
174-15	C-50	I	26						類似式 口緣部
174-16	P-54	I	232						類似式 口緣部
174-17	L-55	II							類似式 口緣部
175-1	H-43	I	695						港大照寺式 口緣部
175-2	R-39	II	847						港大照寺式 口緣部
175-3	J-38	II	487						港大照寺式 口緣部
175-4	O-36	I	254						港大照寺式 口緣部
175-5	P-39	I	467, 101						港大照寺式 口緣部
175-6	J-45	II							港大照寺式 口緣部
175-7	Q-45	II	106						港大照寺式 口緣部
175-8	M-50	I	360						港大照寺式 口緣部
175-9		I							港大照寺式 胴部
175-10	O-45	II	427						港大照寺式 口緣部
175-11	N-55	II							港大照寺式 口緣部
175-12		II							港大照寺式 底部
176-1	H-24	I		(10.2)			4.2	(10.7)	惠山式
176-2	T-28	I		(17.7)				(10.4)	惠山式
176-3	S-27	II	321, 294						
176-4	N-29	II	364, 492						
176-5	O-29	II	619	5.3	11.0	5.95	12.6	(10.1)	惠山式
176-6	L-56	II	8			5.8		(9.95)	惠山式
176-7	Q-27	II	191		(11.1)	(5.4)		(16.2)	後北A式 口緣部
176-8		II	328		(12.0)	(6.8)		(12.9)	後北A式

图号	出土地点	层	遗物No.	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
177-1	P-29	Ⅱ	130					恵山式 口縁~胴部
177-2	T-28	I	57					恵山式 口縁部
177-3	O-29	I	414					恵山式 口縁~胴部
177-4	S-29	Ⅱ	4					恵山式 口縁~胴部
177-5	O-29	Ⅲ	415					恵山式 口縁部
177-6	T-28	I	55					恵山式 口縁部
177-7	T-35	I	60					恵山式 口縁部
177-8	Q-27	Ⅲ	2					恵山式 口縁~胴部
178-1	O-29	Ⅲ	600					恵山式 口縁~胴部
178-2	N-42	Ⅱ						恵山式 口縁~胴部
178-3	S-34	I	11					恵山式 口縁部
178-4	P-51	Ⅱ						恵山式 口縁~胴部
178-5	R-29	I	1					恵山式 口縁~胴部
178-6	D-50	I	237					恵山式 口縁~胴部
178-7	S-27	Ⅲ	375					恵山式 口縁~胴部
179-1	R-29	Ⅱ	109					恵山式 口縁部
179-2	O-29	I	181					恵山式 口縁部
179-3	K-27	I	220					恵山式 口縁部
179-4	P-28	Ⅲ	540					恵山式 口縁部
179-5	R-28	Ⅱ	648					恵山式 口縁~胴部
179-6	P-27	I	821					恵山式 口縁部
179-7	T-27	I	345					恵山式 口縁~胴部
179-8	Q-25	I	335					恵山式 口縁部
179-9	J-42	Ⅱ	86					恵山式 口縁~胴部
179-10	P-36	I	923					恵山式 口縁部
179-11	P-29	I	542					恵山式 口縁部
179-12	Q-53	I	215					恵山式 口縁部
179-13	Q-28	Ⅲ	3					恵山式 口縁部
180-1	R-40	Ⅱ	604					恵山式 口縁部
180-2	N-28	I	262					恵山式 口縁部
180-3	Q-28	I	565					恵山式 口縁部
180-4	P-28	Ⅲ	691					恵山式 口縁~胴部
180-5	O-29	Ⅲ	653					恵山式 口縁~胴部
180-6	Q-28	Ⅱ	163					恵山式 口縁~胴部
180-7	Q-29	Ⅱ	483					恵山式 口縁部
180-8	O-28	I	917					恵山式 口縁部
180-9	O-28	I	564					恵山式 口縁~胴部
180-10		I						恵山式 口縁部
180-11	R-43	I	664					恵山式 口縁~胴部
180-12	R-28	Ⅱ	709					恵山式 口縁部
180-13	R-28	Ⅱ	629					恵山式 口縁部
180-14	O-51	Ⅱ	275					恵山式 口縁部
180-15	J-42	Ⅱ	439					恵山式 口縁~胴部
181-1	O-37	Ⅱ	243					恵山式 口縁部
181-2	O-37	Ⅱ	243					恵山式 口縁部
181-3	L-47	Ⅱ						恵山式 口縁部
181-4	K-44	I	563					恵山式 口縁部

遺物No.	出土地点	層	遺物No.	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
181-5	O-52	Ⅲ						恵山式 口縁部
181-6	J-39	I	1383					恵山式 口縁部
181-7	O-47	Ⅲ						恵山式 口縁部
181-8	Q-49	I	357, 358					後北A式 口縁部
		Ⅱ	82					後北A式 口縁部
181-9	K-50	Ⅱ						後北A式 口縁部
181-10	Q-49	I	307					後北A式 口縁部
181-11	S-26	I	431					後北C, 式 口縁部
181-12	S-22	Ⅱ	321					後北C, 式 口縁部
181-13	O-54	I	151					後北C, 式 口縁部
181-14	Q-27	I	517					後北C, 式 口縁部
182-1	M-42	I	522					後北A式 口縁~胴部
182-2	I-44	I	166					後北A式 口縁~胴部
182-3	N-51	I	10					後北A式 口縁~胴部
182-4	J-42	I	306					後北C, 0式 口縁~胴部
182-5								後北C, 0式 口縁~胴部
182-6	P-28	Ⅱ	325					後北C, 0式 口縁~胴部
182-7	O-29	I	350					後北C, 0式 口縁~胴部
182-8	V-20	Ⅱ	49					後北C, 0式 口縁~胴部
183-1	Q-23	Ⅱ	429					後北C, 0式 口縁~胴部
183-2	R-28	Ⅱ	107					後北C, 0式 口縁~胴部
183-3	R-39	Ⅱ	176					後北C, 0式 口縁~胴部
	S-22		75					後北C, 0式 口縁~胴部
183-4	O-23	I	216					後北C, 0式 口縁~胴部
183-5	U-21	Ⅱ	474					後北C, 0式 口縁~胴部
183-6	V-19	Ⅱ	247					後北C, 0式 口縁~胴部
184-1	S-22	Ⅱ	2011					後北C, 0式 口縁部
184-2	P-26	I	198					後北C, 0式 口縁部
184-3	R-23	Ⅱ	670					後北C, 0式 口縁部
184-4	U-25	Ⅱ	9					後北C, 0式 口縁部
184-5	O-55	I	167					後北C, 0式 口縁部
184-6	T-17	I						後北C, 0式 口縁部
184-7	K-27	I	301					後北C, 0式 口縁部
184-8	Q-28	I	502					後北C, 0式 口縁部
184-9	T-17	Ⅱ	12					後北C, 0式 口縁部
184-10	S-21	Ⅱ	549					後北C, 0式 口縁部
184-11	S-21	Ⅱ	1089					後北C, 0式 口縁部
184-12	U-20	I	115					後北C, 0式 口縁部
184-13	T-21	Ⅱ	906					後北C, 0式 口縁部
184-14	P-27	I	185					後北C, 0式 底部
184-15	S-22	Ⅱ	1936					後北C, 0式 胴~底部
185-1	T-23	Ⅱ	2648					弥生系 口縁部
185-2	R-26	Ⅱ	88					弥生系 口縁部
185-3	P-29	I	1076					弥生系 口縁部
185-4	S-25	I	405					弥生系 口縁部
185-5	T-23	I	665					弥生系 口縁部
185-6	O-24	I	1372					弥生系 口縁部

图号 器物No.	出土地点	层	器物No.	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	备 考
185-7	U-24	I	153					弥生系 口縁部
185-8	N-25	I	303					弥生系 口縁部
185-9	T-26	II	133					弥生系 口辺部
185-10	U-23	II	1162					弥生系 口縁部
185-11	R-20	I	176					弥生系 口縁部
185-12	S-26	II	39					弥生系 口縁部
185-13	S-26	I	80					弥生系 口縁部
185-14	W-19	III	457					弥生系 口辺部
185-15	U-23	II	1457					弥生系 胴部
185-16	T-23	II	1368					弥生系 口縁部
185-17	O-29	II	569					弥生系 口縁~胴部
185-18	R-24	I	142					弥生系 胴部
185-19	U-22	II	566					弥生系 胴部
185-20	R-26	I	514					弥生系 底部
185-21	R-24	II	1150					铃谷式
185-22	S-24	II	1754					铃谷式
185-23	S-22	II	2508					铃谷式
185-24	T-22	II	1448					铃谷式
186-1	T-20	II	711					北大式 口縁部
186-2	T-20	II	805					北大式 口縁部
186-3	T-20	II	856					北大式 口縁部
186-4	I-28	I	1330					北大式 口縁部
186-5	G-27	I	382					北大式 口縁部
186-6	R-23	I	706				(20.9)	北大式 口縁~胴部
186-7	T-24	II	140, 174				(12.0)	北大式 口縁~胴部
186-8	T-25	I	346				(19.45)	北大式 口縁~胴部
		II	207					
		II	322, 411, 579					
187-1	I-29	I	11				(20.9)	北大式 口縁部
187-2	T-26	II	590					北大式 口縁部
187-3	T-26	II	114 他					北大式 口縁部
187-4	T-26	I	30					北大式 口縁部
187-5	S-26	I	305					北大式 口縁部
187-6	Q-20	I	387					北大式 口縁部
187-7	T-23	I	129					北大式 口縁部
187-8	K-26	I	358					北大式 口縁部
187-9	Q-23	I	841					北大式 口縁~胴部
187-10	Q-23	II	1205					北大式 胴部
187-11	T-26	II	35 他					北大式 胴部
187-12	T-25	II	145, 590		(18.0)		(15.7)	北大式 胴部
188-1	S-22	II	1134					北大式~埴文 口縁部
188-2	R-23	II	1294					北大式~埴文 口縁部
188-3	S-23	II	1540					北大式~埴文 口縁部
188-4	T-23	I	825					北大式~埴文 口縁部
188-5	O-25	I	1172					北大式~埴文 口縁部
188-6	T-26	I	294					北大式~埴文 口縁部

层号 遗物%	出土地点	层	遗物%	口径 (cm)	肩径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
188-7	U-19	Ⅲ	24					北大式~捺文 口縁部
188-8	T-21	Ⅲ	535					北大式~捺文 口縁部
188-9	R-22	Ⅲ	808					北大式~捺文 口縁部
188-10	R-20	I	125					北大式~捺文 口縁部
188-11	U-23	Ⅲ	2520					北大式~捺文 口縁部
188-12	T-24	Ⅲ	938					北大式~捺文 口縁部
188-13	Q-27	I	182					北大式~捺文 口縁部
188-14	R-24	I	215					北大式~捺文 口縁部
188-15		I						北大式~捺文 胴部
188-16	R-24	Ⅱ	1151					北大式~捺文 胴部
189-1	T-22	Ⅱ	670					北大式~捺文 口縁部
189-2	R-22	Ⅱ	810					北大式~捺文 口縁部
189-3	T-26	Ⅲ	508					北大式~捺文 口縁部
189-4	P-23	I	561					北大式~捺文 口縁部
189-5	S-23	I	557					北大式~捺文 口縁部
189-6	S-24	Ⅲ	2313					北大式~捺文 口縁部
189-7	S-23	I	566					北大式~捺文 口縁部
189-8	T-23	Ⅲ	736					北大式~捺文 口縁部
189-9	S-21	I	271	(21.6)			(12.5)	捺文
189-10	K-49	Ⅱ	13	16.5			(12.3)	捺文
189-11	S-20	Ⅲ	469	(19.3)	(15.9)		(15.3)	捺文
190-1	Q-52	I	84	(29.0)			(11.0)	捺文
	O-52		54					
190-2	K-49	Ⅲ	126	(31.6)			(20.3)	捺文
	K-50							
190-3	P-27	I	4. 30. 35. 48 62. 76. 288	13.1	11.3	6.0	13.3	捺文
			106. 121. 157					
190-4	O-46	I	1. 2. 208	(26.2)			(16.5)	捺文
		Ⅲ	191. 1112					
190-5	O-24	I	1160	(16.4)			(8.6)	土師器
191-1	O-43	Ⅲ						捺文 口縁部
191-2	L-42	I	1314					捺文 口縁部
191-3	M-45	I	1869					捺文 口縁部
191-4	J-45	Ⅲ						捺文 口縁部
191-5	J-44	I	1380					捺文 口縁部
191-6	N-41	I	564					捺文 口縁部
191-7	F-43	I	1091					捺文 口縁部
191-8	F-41	I	297					捺文 口縁部
191-9	P-51	I	44					捺文 口縁部
191-10	P-22	Ⅱ	86					捺文 口縁部
191-11	F-41	I	282					捺文 口縁部
191-12	F-41	I	35					捺文 口縁部
191-13	F-49							捺文 口縁部
191-14	F-49							捺文 口縁部

図No. 遺物No.	出土地点	層	遺物No.	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
192-1	E-49	I	508					繪文 口縁部
192-2	P-22	I	662					繪文 口縁部
192-3	P-23	I	479					繪文 口縁部
192-4	H-37	I	849					繪文 口縁部
192-5	N-58 M-58	I III	42, 127				(9.55)	繪文 口縁~胴部
192-6	M-46 N-46	I I	132 171, 727	26.2			(14.0)	繪文
192-7	L-54	I	8, 6, 8, 10	(27.6)			(12.15)	繪文 口縁~胴部
192-8	U-18	III	109, 121 124, 120	(17.7)			(16.9)	繪文
193-1	K-56	I	195	(24.1)			(15.5)	繪文 口縁~胴部
193-2	X-15	I	2					繪文 口縁部
193-3	S-20 S-26	I II	1199 他	(19.6)			(17.1)	繪文
193-4	O-24	I	1103 他	18.6			(17.6)	繪文
193-5	P-23	I	48, 99, 433 830, 831, 841			(7.6)	(18.2)	繪文
193-6	P-23	I	836, 827		(14.6)	6.8	(12.0)	繪文
194-1	P-58	I	3, 7			8.4	(7.0)	繪文
194-2	P-51	I	352, 358			8.55	(3.6)	繪文
194-3	N-26	I	27	15.7		6.4	8.6	繪文
194-4	T-29 T-28	I I	80 415	13.4		4.5	6.2	土師器
194-5	O-24	I	1121, 1107	(14.2)		5.4	7.6	土師器
194-6	K-29	II	47	15.6		(6.3)	6.9	土師器
194-7	D-50	I	12, 538, 1087				(5.5)	須器器 刻有「大」?
図No. 遺物No.	出土地点	層	遺物No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
195-1	I-48	I	332	8.75	3.9	1.75	63.0	打製石片 玄武岩
195-2	S-38	I	2083	10.2	4.7	1.6	86.0	打製石片 玄武岩
195-3	J-39	I	130	9.55	6.0	2.1	117.0	打製石片 玄武岩
195-4	D-50	I	8	7.2	4.1	1.4	45.2	打製石片 玄武岩
195-5	M-34	I	4	7.7	5.0	1.15	50.5	打製石片 玄武岩
195-6	M-45	I	784	9.9	5.1	1.7	80.4	打製石片 玄武岩
196-1	Q-45	I	1036	9.75	5.85	1.65	79.0	打製石片 玄武岩
196-2	I-36	I	56	12.45	5.6	1.6	105.0	打製石片 玄武岩
196-3	M-45	I		7.8	5.5	1.4	52.5	打製石片 玄武岩
196-4	S-24	II	2696	2.81	厚さ 0.78	穴径 2.4×1.7	5.5	勾玉 ヒスイ?
196-5	O-56	III	3346	2.2	厚さ 1.1	穴径 5.1×4.6	5.4	垂飾 ヒスイ
196-6		I		21.3	4.5	2.5	320.0	魚形石器 粘板岩
図No. 遺物No.	出土地点	層	遺物No.	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
197-1	T-27	I	763	14.7		9.05	4.0	III 磁器類 刻有「大」
197-2	Y-11	I	19	12.9		7.2	1.8	III 内開六歌仙

80%	出土地点	層	遺物№	口径 (cm)	胴径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
197-3	T-34	I	110	11.9		6.3	2.9	皿 内側青梅紋と藍
197-4	V-10	I	237	2.7		7.2	2.8	皿 内側山水・人物文
197-5	R-20	I	440	12.15		5.9	5.2	皿 内外斑状文
197-6	P-38	I	159	9.8		5.2	2.3	鉢 斑打區 斑産 見込(青)
197-7	Q-17	I	445	9.1		2.6	2.95	皿 外側松竹梅と鶴
198-1	L-58	I	33			6.0	(16.7)	鉢(細) 明細紋 藍緑(14.4)
198-2	K-53	I	91. 93			5.0	(4.6)	菓子 底黒帯「△」
198-3	M-21	I	66				(9.8)	徳利 外側松竹鶴
198-4	Y-12	I		(6.8)		2.9	3.3	碗 見込トゾ平花文 青黒文
198-5	W-8	I	47. 48. 52	11.1		5.0	5.9	碗 外側風景山水文
198-6	Q-36	I	508	11.3		3.9	6.2	皿 青銅色文 黒内記号 地山
198-7	X-7	I	105	10.9		6.5	1.8	皿 輪上に黒帯紅写型斑形
198-8	F-36	I	43	10.6		3.7	5.8	皿 青銅色文 黒内記号 地山
198-9	V-18	II		長さ(8.15)	幅(3.6)	厚さ(4.4)		七輪 竜「長右エ門」 青文
198-10	G-38	I	352. 353	長さ(10.1)	幅(9.3)	高さ(6.65)		七輪 菊文
80%	出土地点	層	遺物№	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
199-1	F-29	I	4	(6.6)	1.0	0.85	(2.8)	短先 鹿胎骨
199-2	Q-42	I	258	(4.7)	(1.9)	(0.95)	(2.9)	短先 鯨骨
199-3	S-18	I		(7.4)	3.0	1.1	12.2	ナテ 鹿角 獣歯・刺豚
199-4	Q-43	I	759	(5.5)	(1.8)	1.1	(4.3)	ナテ 鯨骨 網紙
199-5	O-22	I	80	(5.2)	(1.7)	(0.8)	(3.4)	ナテ 鹿胎骨 刺豚・刺豚
199-6	I-35	I	661	(5.45)	2.85	1.5	(5.7)	ナテ 鹿角 シロシあり
199-7	F-29	I		5.95	2.3	1.2	6.5	ナテ(未成品) 鹿角
199-8	Q-40	I	1744	(5.55)	(2.2)	(1.4)	(5.5)	ナテ? 鯨骨
199-9	O-23	I	4	(13.8)	1.0	0.7	(6.6)	中折 鹿胎骨
199-10	R-25	I	①	(12.95)	1.25	1.1	(5.2)	中折 鯨骨
199-11	L-43	I	43	12.6	1.15	1.0	10.6	中折 鯨骨
200-1	M-22	I		(12.7)	1.15	1.1	(8.8)	中折 鯨骨
200-2	O-23	I	19	11.2	1.1	0.7	7.4	中折 原料不明
200-3		I		(11.5)	1.0	1.0	(7.8)	中折 鹿胎骨
200-4	E-48	I	9	(11.3)	1.15	1.0	(8.4)	中折 鹿胎骨
200-5	M-26	I	7	(9.0)	0.9	0.85	(6.3)	中折 鹿胎骨
200-6	M-23	I	88	10.9	1.05	0.8	6.5	中折 鹿胎骨
200-7	T-18	II	42	10.3	0.9	1.2	5.9	中折 鹿胎骨
200-8	O-23	I	20	(8.35)	1.2	1.05	(6.9)	中折 鯨骨
201-1	F-29	I		(6.7)	1.1	1.05	(4.8)	中折(未成品) 鹿胎骨
201-2	O-40	I	2016	(7.8)	(1.35)	1.25	(7.7)	中折(未成品) 鯨骨 原料青
201-3	O-22	I		(9.15)	1.05	0.75	(5.8)	中折 鯨骨
201-4	L-43	I	427	(10.4)	1.05	0.6	(5.6)	中折 鹿胎骨
201-5	R-20	I		(9.4)	1.15	0.9	(4.7)	中折 原料不明
201-6	H-28	I	433	(15.6)	1.1	0.75	(7.1)	骨盤 鯨骨
201-7	S-41	I	211	7.0	1.7	1.3	35.2	鉢 鹿角 胎?
201-8	K-46	I	416	(6.3)	1.45	1.25	(30.8)	鉢 原料不明 胎?
201-9	M-42	I	145	(4.8)	(1.55)	1.5	(5.6)	鉢 鹿胎骨 全鼠部分裂高
201-10		I		7.5	0.7	0.3	1.4	刺突具? エイ尾骨
202-1	M-22	I		8.1	3.2	0.85	21.4	給桶? 海獣類犬骨

図No.	遺物No.	出土地点	器	遺物No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考	
	202-2	L-43	I	36	(6.45)	(2.2)	(1.3)	(7.9)	垂飾 ヒグマ犬歯	
	202-3	I-42	I	69	(8.2)	(2.65)	(1.2)	(7.3)	垂飾 鹿角	
	202-4	I-36	I	49	(6.3)	(3.0)	(1.6)	(10.2)	垂飾? ヒグマ犬歯	
	202-5	L-28	I	25.6		1.2	1.0	21.2	不明物 7x4x19mm・磁	
	202-6	T-21	I	径 3.05	孔径0.75		0.3	2.6	有孔円形骨製品 原料不明	
	202-7	N-40	I	4	径 2.9	孔径0.75		0.4	3.1	有孔円形骨製品 原料不明
	202-8	S-37	I	399	径 3.2	孔径0.7		0.4	(3.1)	有孔円形骨製品 原料不明
	203-1	M-23	I	278	(1.55)	(2.3)	(1.75)	(1.9)	罐口 鹿角	
	203-2	N-44	I	278	(1.35)	(2.65)	(0.8)	(2.4)	罐口 鹿角	
	203-3	N-43	I	249	(1.95)	(1.45)	(0.4)	(1.2)	罐口 鹿角	
	203-4	R-18	I		7.4	0.9	0.75	3.1	針入れ アホウドリ尺骨	
	203-5	L-43	I	13	10.5	1.5	1.15	12.4	針入れ アホウドリ尺骨	
	203-6	O-23	I	12	6.65	1.45	1.05	(5.0)	針入れ アホウドリ尺骨	
	203-7	R-19	I		7.8	0.9	0.8	(3.9)	針入れ アホウドリ尺骨	
	203-8	S-16	I		(5.0)	(1.1)	(1.2)	(0.9)	針入れ 原料不明	
	203-9	X-18	I		12.0	0.4	0.25	2.5	針 原料不明	
	204-1	J-52	I	6	(10.15)	(1.7)	0.45	(5.8)	有孔骨製品 原料不明? (L)	
	204-2	H-54	I	5	(7.95)	1.7	1.6	(17.0)	管状骨角製品 原料不明	
	204-3	Q-42	I	247	(8.25)	2.2	(2.3)	(22.0)	有孔骨角製品 鹿角 孔径0.5cm	
	204-4	O-22	I	3	径 4.95	孔径2.5	2.1	38.6	有孔骨角製品 鹿角 孔径1.4cm	
	204-5	L-43	I	234	径 4.85	孔径0.85	1.6	36.6	有孔骨角製品 鹿角	
	204-6	R-18	I		径 3.5		1.0	(4.0)	管状骨角製品 原料不明	
	204-7	L-43	I	235	径 2.55	2.55	3.05	15.4	不明骨角製品 (未完成) 鹿角	
	204-8	M-45	I	339	径 3.3	孔径1.2	2.6	17.2	有孔骨角製品 鹿角 孔径1.1cm	
	205-1	H-28	I	5	(20.1)	0.8	0.95	(9.5)	箸 鹿状角	
	205-2	N-37	I	52	(15.2)	0.5	0.55	(4.3)	箸 鹿状角	
	205-3	Q-11	I		(7.9)	0.6	0.5	(2.3)	箸? 鹿状骨	
	205-4	X-18	I		(9.15)	(1.2)	(0.5)	(0.9)	ブラシ柄 原料不明	
	205-5		I		(7.9)	(1.2)	(1.1)	(7.8)	ブラシ柄 鹿状骨	
	205-6	T-23	I	460	(6.15)	(1.25)	(1.0)	(5.8)	ブラシ柄 鹿状骨	
	205-7	O-43	I		(8.75)	(1.4)	(0.7)	(5.4)	ブラシ柄 鹿状骨	
	205-8	Q-44	I	2	(9.25)	(1.3)	(0.8)	(7.6)	ブラシ柄 鹿状骨	
	205-9	K-43	I	772	(10.2)	(1.2)	(1.0)	(8.2)	ブラシ柄 鹿状骨	
	205-10	Q-25	I	187	(7.75)	(1.25)	(0.65)	(5.6)	ブラシ柄 鹿状骨	
	205-11	O-55	I	38	(6.9)	(1.0)	(0.5)	(3.4)	ブラシ柄 鹿状骨	
	206-1	V-9	I		(13.0)	(2.4)	0.5	(13.4)	匱 原料不明	
	206-2	X-7	I		13.75	2.6	0.3	(17.2)	匱 原料不明	
	206-3	S-9	I		(13.5)	2.8	0.7	(18.6)	匱 原料不明	
	206-4	I-39	I	560	11.5	2.2	0.5	12.2	匱 鹿角	
	206-5	E-40	I	1	10.6	2.4	0.5	11.2	匱 鹿角	
	206-6	S-16	I		(8.7)	2.4	0.8	(14.6)	匱? 原料不明	
	206-7	O-46	I		(5.05)	(0.45)	(0.4)	(1.2)	編針 原料不明	
	206-8	H-43	I	684	(5.35)	(0.4)	(0.4)	(0.8)	編針 鹿状骨	
	206-9	M-44	I	58	(8.75)	(0.4)	(0.4)	(1.0)	編針 鹿状骨	
	206-10	T-38	I	442	14.35	0.4	0.4	1.7	編針(均針) 鳥類骨	
	207-1	Q-44	I	1	径 2.7	孔径0.25,0.2	0.5	5.0	ボタン 貝製	

図号 遺物No.	出土地点	層	遺物No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
207-2	O-23	I		径 1.0	孔径0.2	0.4	0.4	ボタン 鹿角
207-3	T-20	II	46	(2.3)	0.9	0.9	1.0	槍? 原料不明
207-4	L-43	I	35	(3.8)	(1.1)	0.1	(0.3)	不明骨角製品 原料不明
207-5	L-43	I	9	5.0	0.8	0.25	1.2	不明骨角製品 原料不明
207-6	M-24	I	39	(10.45)	(0.75)	(0.55)	(1.3)	骨 原料不明
207-7	S-20	II	168	14.05	3.6	2.2	76.5	不明骨角部(未成品) 原料不明
207-8	S-18	I		(12.3)	1.0	0.5	(4.5)	不明骨角部(未成品) 原料不明
207-9	Q-19	III	4	17.95	7.7	4.5	260.0	骨弁 原料不明
208-1	M-43	I	409	9.8	3.1	2.4	39.8	不明骨角部(未成品) 原料不明
208-2	H-28	I	810	10.05	2.15	1.55	26.4	不明骨角部(未成品) 原料不明
208-3	L-42	I	119	8.05	3.0	1.85	26.0	キチ (未成品) 鯨骨
208-4	K-42	I	220	5.1	2.2	1.3	7.4	キチ (未成品) 原料不明
208-5	Q-44	I	3	6.05	2.5	1.55	11.4	キチ (未成品) 原料不明
208-6	P-26	I	2	4.7	2.6	1.75		不明骨角製品 鹿角 何れあり
208-7	L-43	I	131	1.0	1.05	1.0	2.5	サイコロ 象牙質 内部に青銅
208-8	D-40	I	39	口径12.6	底径8.7	器高5.4	705.0	石製 縄文層砂器 アベオブ?
図号 遺物No.	出土地点	層	遺物No.	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
209-1A	P-22	I	317	(37.0)	4.4	1.55		太刀 鉄製 柄頭欠損
209-1B	P-22	I	317	刃径9.1		1.3		背 鉄製 磨り金目以磨製?
209-2	Q-21	I	154, 155	(47.0)	(5.3)	(1.9)		刀 鉄製 柄頭欠損
210-1	F-39	I	1	82.6	6.2	3.4	穴径0.4	打ち刀 鉄製
210-2	O-41	II	368	(39.0)	3.4	1.55		短刀 鉄製
210-3	N-24	I	①	33.7	4.5	1.1	穴径0.5	短刀 鉄製
211-1	Q-21	I	156	31.2	4.8	1.4		山刀(タシロ) 鉄製
211-2	M-24	I	292	(30.2)	5.15	2.85		山刀(タシロ) 鉄製
211-3	O-23	I	153	32.1	4.45	1.4		山刀(タシロ) 鉄製
211-4	M-35	I	31	29.55	4.35	2.8		山刀(タシロ) 鉄製
212-1	F-29	I	287	14.05	5.55	1.25		弓削刀子 鉄製
212-2	P-22	I	316	23.2	(10.45)	1.85		服先 鉄製
図号 遺物No.	出土地点	層	遺物No.	径 (cm)	穴径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
213-1	Q-49	I	9	2.4	0.7	0.09	2.0	開元通宝 無背 (唐 621年)
213-2	T-22	II	406	2.25	0.7	0.11	(2.4)	開元通宝 無背 (唐 621年)
213-3	S-18	I		2.3	0.7	0.1	2.7	祥符元宝 (北宋 1008年)
213-4	L-21	I	272	2.45	0.6	0.12	3.3	祥符元宝 (北宋 1008年)
213-5	P-22	I	3	2.55	0.7	0.09	3.3	天禧通宝 (北宋 1008年)
213-6	U-17	II	76	2.5	0.75	0.12	3.2	天聖元宝 真背 (北宋 1023年)
213-7	P-22	I	2	2.5	0.7	0.13	1.7	天聖元宝 真背 (北宋 1023年)
213-8	Q-46	I	27	2.3	0.7	0.11	2.0	天聖元宝 篆背 (北宋 1023年)
213-9	T-19	I		2.4	0.7	0.1	2.3	皇宋通宝 篆背 (北宋 1039年)
213-10	S-16	I		2.45	0.7	0.14	(2.9)	皇宋通宝 篆背 (北宋 1039年)
213-11	U-21	I	434	2.5	0.7	0.11	2.4	皇宋通宝 真背 (北宋 1039年)
213-12	X-11	I		2.3	0.7	0.11	2.4	嘉祐通宝 真背 (北宋 1066年~)
213-13	W-19	II	392	2.5	0.7	2.7	0.1	嘉祐通宝 篆背 (北宋 1066年~)
213-14	U-16	I		2.4	0.7	0.12	3.2	治平元宝 真背 (北宋 1064年~)
213-15	P-22	I	1	2.5	0.7	0.14	3.28	熙寧元宝 真背 (北宋 1068年)
213-16	V-20	III	542	2.5	0.7	0.12	3.4	熙寧元宝 篆背 (北宋 1068年)

品名	背十地点	題	造物No.	径 (cm)	穴径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
213-17	L-45	I	615	2.4	0.65	0.15	2.8	熙寧元宝 篆書 (北宋 1068年)
213-18	E-48	I	5	(2.4)	(0.7)	0.13	(1.1)	元豊通宝 行書 (北宋 1078年) 小平銭 欠損
213-19	S-42	I	2	2.4	0.7	0.14	3.1	元豊通宝 篆書 (北宋 1078年) 小平銭
213-20	V-20	II	355	3.0	2.5	0.14	0.7	元祐通宝 篆書 (北宋 1086年) 小平銭
213-21	Q-49	I	5	2.4	0.7	0.11	3.1	紹聖元宝 篆書 (北宋 1094年) 小平銭
213-22	T-24	I	497	2.6	0.6	0.21	(3.4)	紹聖元宝 篆書 (北宋 1094年) 小平銭
213-23	T-22	II	674	2.3	0.7	0.13	(1.7)	紹聖元宝 行書 (北宋 1094年) 小平銭
213-24	R-26	II	803	2.4	0.65	0.14	2.8	聖宋元宝 行書 (北宋 1101年) 小平銭
213-25	W-17	II	143	2.4	0.55	0.14	3.3	政和通宝 分書 (北宋 1111年) 小平銭
213-26	X-11	I		2.4	0.6	0.9	2.4	政和通宝 篆書 (北宋 1111年) 小平銭
213-27	T-24	I	496	2.4	0.7	0.15	3.4	政和通宝 篆書 (北宋 1111年) 小平銭
213-28	M-52	I	86	4.1	1.0	0.21	(14.0)	嘉和重宝 (金 不明) 飾り金具に転用?
213-29	Q-49	I	6	2.3	0.6	0.17	4.0	洪武通宝 背「一銭」(明 1368年) 小平銭
213-30	Q-49	I	6	2.35	0.6	0.11	2.9	永楽通宝 (明 1408年)
213-31	Q-49	I	5	2.4	0.6	0.07	1.4	永楽通宝 (明 1408年)
213-32	N-51	I	5	2.3	0.6	0.06	1.8	永楽通宝 (明 1408年)
213-33	Q-49	I	7	2.3	0.6	0.07	1.4	永楽通宝 (明 1408年)
213-34	N-42	I	210	2.55	0.8	0.14	4.3	宣平通宝 背「拾六」(季朝1678年~)
214-1	P-20	I		2.3	0.55	0.1	3.4	寛永通宝 古寛永 (1626年~)
214-2	P-20	I		2.45	0.6	0.1	4.0	寛永通宝 古寛永 (1626年~)
214-3	S-19	I		2.45	0.6	0.1	3.4	寛永通宝 古寛永 (1626年~)
214-4	Q-18	I		2.4	0.6	0.1	3.6	寛永通宝 古寛永 (1626年~)
214-5	O-36	I	360	2.35	0.55	0.1	3.1	寛永通宝 古寛永 (1626年~)
214-6	Q-29	I	1183	2.4	0.6	0.1	2.8	寛永通宝 古寛永 (1626年~)
214-7	Q-26	I	362	2.4	0.6	0.1	3.0	寛永通宝 古寛永 (1626年~)
214-8	T-27	I	552	2.3	0.55	0.1	2.7	寛永通宝 古寛永 (1626年~)
214-9	J-36	I	47	2.5	0.6	0.1	3.6	寛永通宝 背「文」(1668年~)
214-10	J-41	I	5	2.5	0.6	0.1	2.8	寛永通宝 背「文」(1668年~)
214-11	S-40	I	199	2.5	0.6	0.11	3.1	寛永通宝 背「文」(1668年~)
214-12	V-19	I		2.3	0.7	0.1	2.5	寛永通宝 背「小」(1737年~)
214-13	T-21	I	273	2.3	0.65	0.1	2.2	寛永通宝 背「元」(1741年~)
214-14	H-29	I	400	2.7	0.65	0.1	2.4	寛永通宝 背「元」(1741年~)
214-15	W-17	II	16	2.2	0.6	0.1	2.1	寛永通宝 背「元」(1741年~)
214-16	I			2.3	0.6	0.1	2.3	寛永通宝 背「元」(1741年~)
214-17	J-39	I	164	2.2	0.65	0.1	2.4	寛永通宝 背「元」(1741年~) 背「元」の明銭あり
214-18	P-19	I		2.7	0.6	0.09	1.7	寛永通宝 背「足」(1741年~)
214-19	N-34	I	16	2.2	0.6	0.09	2.2	寛永通宝 背「足」(1741年~)
214-20	X-11	I		2.7	0.6	0.1	1.9	寛永通宝 背「足」(1741年~)
214-21	W-19	I		2.4	0.65	0.1	2.7	寛永通宝 背「佐」(1714年~)
214-22	O-43	I	76	2.8	0.6	0.09	2.4	寛永通宝 背「長」(1767年~)
214-23	J-36	I	133	2.7	0.6	0.12	4.1	寛永通宝 背「21波」(1768年~)
214-24	T-20	II	62	2.7	0.6	0.13	4.8	寛永通宝 背「21波」(1768年~)
214-25	K-58	I	58	2.7	0.6	0.12	4.6	寛永通宝 背「21波」(1768年~)
214-26	M-44	I	56	2.8	0.6	0.13	5.2	寛永通宝 背「11波」(1769年~)
214-27	O-44	I	12	2.8	0.6	0.1	4.5	寛永通宝 背「11波」(1769年~)
214-28	K-36	I	2	2.8	0.65	0.12	5.0	寛永通宝 背「11波」(1769年~)
214-29	Q-36	I	51	2.8	0.7	0.1	3.9	寛永通宝 背「11波」(1769年~)

図号 遺物No.	前土地点	期	遺物No.	径 (cm)	穴径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備 考
214-30	Y-11	I		2.8	0.65	0.13	4.5	寛永通宝 背「11波」(1769年~)
214-31	X-14	I		2.8	0.7	0.13	4.6	寛永通宝 背「11波」(1769年~)
214-32		I		2.7	0.8	0.06	3.7	寛永通宝 背「11波」? 孔が丸い
215-1	Q-29	I	162	2.3	0.6	0.1	2.4	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-2	G-35	I	223	2.3	0.65	0.1	2.7	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-3	W-16	I		2.3	0.6	0.1	2.8	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-4	S-29	I	437	2.3	0.65	0.1	2.7	寛永通宝 無背 輪十辨込 (1736年~)
215-5	I-36	I	74	2.3	0.6	0.1	2.5	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-6	T-14	I		2.25	0.65	0.1	3.3	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-7	V-20	II	28	2.3	0.6	0.1	3.1	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-8	R-19	I		2.2	0.65	0.1	2.3	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-9	J-39	I	165	2.3	0.7	0.1	2.6	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-10	Q-26	I	361	2.3	0.7	0.1	2.9	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-11	J-35	I	7	2.4	0.65	0.1	3.0	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-12	Y-11	II	4	2.3	0.6	0.1	2.5	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-13	K-40	I	236	2.15	0.6	0.1	3.3	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-14	F-28	I	96	2.3	0.6	0.1	2.5	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-15	O-44	I	13	2.3	0.6	0.1	2.5	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-16	Q-29	I	160	2.2	0.75	0.1	2.1	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-17	P-41	I	186	2.2	0.7	0.1	1.9	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-18	V-20	I		2.4	0.6	0.1	3.7	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-19	M-35	I	175	2.4	0.6	0.1	3.3	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-20	T-18	I		2.4	0.6	0.1	3.3	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-21	O-43	I	79	2.3	0.7	0.1	2.4	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-22	F-46	I	12	2.25	0.65	0.1	2.0	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-23	E-42	I	161	2.30	0.7	0.1	2.6	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-24	J-53	I	25	2.25	0.7	0.1	2.6	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-25	O-20	I		2.3	0.6	0.1	2.9	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-26	P-20	I		2.3	0.6	0.09	1.9	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-27	T-20	I		2.3	0.6	0.1	2.8	寛永通宝 無背 (1668年~)
215-28	X-14	I		2.2	0.7	0.07	1.8	寛永通宝 無背 (1668年~)
216-1	I-48	I	328	(3.8)	(1.0)	0.15	(4.6)	宝永通宝 (1706年) 1/2欠損
216-2	O-48	I	3	2.3	0.5	0.11	4.0	箱船通宝 (1856年)
216-3	U-24	I	148	4.9×3.2	2.05×0.7	0.26	(18.2)	天保通宝 (1835年~) 刀の鐔に転用
216-4	E-35	I	25	4.8×3.2	0.7	0.24	19.8	天保通宝 (1835年~)
216-5		I		4.9×3.2	0.6	0.25	21.4	天保通宝 (1835年~)
216-6	S-29	I	151	5.9×3.7		0.02	3.3	上練鉄 全林通上家
216-7	K-38	I	7	2.5	0.7	0.13	4.6	松鉄 吉田中受鉄
216-8	S-29	I	145	2.7	0.6	0.1	3.5	文久永宝 深字 (1863年)
216-9	Q-44	I	97	2.65	0.7	0.1	3.4	文久永宝 真文 (1863年)
216-10	M-43	II	107	2.6	0.6	0.09	3.0	文久永宝 真文 (1863年)
216-11	S-29	I	148	2.65	0.6	0.1	3.6	文久永宝 真文 (1863年)
216-12	S-35	I	249	2.6	0.65	0.1	(3.6)	文久永宝 真文 (1863年)
216-13	C-47	I	8	2.7	0.7	0.1	3.6	文久永宝 草文 (1863年)
216-14	F-43	I	15	2.7	0.8	0.1	3.6	文久永宝 草文 (1863年)
216-15	T-29	II	95	2.6	0.7	0.1	3.8	文久永宝 草文 (1863年)
216-16	W-18	I		2.7	0.7	0.13	4.0	文久永宝 草文 (1863年)

Ⅲ 総括

1989年度から1994年度の6年間に亘る大川遺跡の発掘調査報告を全4分冊にまとめ、順に刊行し、漸く報告を完了することとなった。

このように発掘調査から報告書の作成・刊行までが長期に亘るものとなったのは、本遺跡が縄文時代から近世・近代に至る複合遺跡であり、950基以上を数える墓墳をはじめとする多数の遺構が検出され、各時代の多種多様な遺物が当初の予想を越えて多量に出土し、土器・石器・陶磁器・金属製品等の分類・整理などの作業に多くの時間を費やすこととなったためである。

本遺跡の墓墳群は縄文時代晩期から続縄文時代を主体とし、アイヌ民族のものと思われる近世墓墳も発見され、同一地域の葬制の推移を見ることが出来る貴重な遺跡である。墓墳の分布をみると砂丘の発達とともに墓域が移動しており、上流に縄文時代晩期、下流に向かうに従って続縄文時代、據文時代となり、以降は散在している。

以下に概要について述べることとする。

(1) 墓 墳

縄文・続縄文時代の墓墳は密集した群となり、切り合いがはげしい。據文時代以降は散在しているが、後世の擾乱を受けているものが多く見られる。

1) 縄文時代

大半が縄文時代晩期に帰属する。形態的には楕円形または長楕円形を呈し、ピット上面に配石を伴う場合が多い。埋土の一部には砂質凝灰岩粗粒を封土として使用する場合が数多く見られる。断面図を観察すると、砂層と互層を成し横方向に入るもの、上面から遺体直上まで縦方向に入るもの、上面または中位に薄く横方向に入るもの等幾つかのパターンが確認された。

副葬品については主としてヒスイ製勾玉、蛇紋岩製平玉、サメの歯等が見られ、数珠としては少ない。埋土内に土器が多量に出土する場合が多い。また、遺体の胸部・腰部または手の位置周辺に、一部に平坦な面を有する半球状の腫が1ないし2点出土する例が見られる。これには自然面を生かし加工の痕跡が見られないものと、平坦な面を作るために加工を施すものが見られるが、その殆どは比較的比重の大きい石を使用しており、副葬の方法も丸みをもつ面を上にする場合と下にする場合がある。

埋葬方法は殆どが屈葬と思われ、頭位は南東方向を向くことが多いようである。また、埋土内や遺体周辺に炭化物が検出され、火葬墓と考えられるものも幾つか見受けられる。2～5体の合葬墓も数基確認された。

この時期の墓墳として特記されるのはGP-900である。4体もの合葬であるとともに、そのうち一体は頭部にサメの歯が出土し、石製玉を連ねた首飾りを装着し、石棒を伴っている。同時期の墓墳は本遺跡においても多数検出されているが、石棒を伴う唯一の検出例であり、被

葬者はこの時期の集落において特別な存在であったことが想像される。

2) 統縄文時代

恵山文化期の墓墳形態は楕円形または円形を呈し、副葬品として完形土器、石器（石鎌・スクレイパー・石錐・石斧など）、コハク製平玉・垂飾、剥片などの各種の遺物が多量に見られる。埋葬方法は屈葬で頭位は東もしくは南東方向を向くことが多いようである。

恵山文化期の墓墳として特記されるのはG P-82・G P-179・G P-620などである。G P-82においては土器・各種石器・サメの歯とともに、2,000点以上ものコハク平玉が連なり、幾重にも重なった状態で出土した。またG P-620については径約3mを測る大形の墓墳であり、4体以上の合葬が確認された。土器や約300点の石鎌をはじめとする各種石器・石製管玉などの多量の副葬品が出土し、墳底部には柱穴様の小ピットが見られ、喪がりのためのものかと思われる。G P-179から出土した魚形石器は、先端に樹皮が巻き付けられている状態が明瞭であり、その具体的な使用方法について推測が可能なのである。

後北文化期の墓墳は数例のみで、恵山文化期に比べると極端に副葬品が少なくなる。北大文化期にいたっては、明確に帰属すると言えるものは殆どない。

これらの縄文時代晩期から統縄文時代にかけての墓墳形態・頭位の相違、副葬品の変化から当時の社会意識の変化を読み取ることができるであろう。

3) 弥文時代

弥文時代前半に当たる7～8世紀のものを主体とする。墓墳形態は楕円形を呈し、頭位は南東を向く傾向があり、殆どが屈葬と考えられる。ピット外に土器が埋設されているものが数例確認された。特記すべきものとしてG P-41出土の直刀やG P-50出土の青銅製垂飾具がある。前者は本州からの移入品、後者は北方からの移入品と考えられるものであり、当時の広域的な交易を想起させるものである。

4) 中世～近世初頭

中世を鎌倉、室町時代、安土・桃山時代とした場合に、副葬品で明確に年代を特定することは困難であるために年代の幅をもたせている。G P-600・G P-608などが相当すると思われる。G P-608は南東頭位の隅丸長方形を呈し、足部周辺に古銭27点（北宋銭を主体とする）・ガラス玉420点（トンボ玉を含む）・サメの歯15点・漆器などが出土した。

5) 近世・近代

検出状況・伴出遺物等からアイヌ墓と考えられる。攪乱を受けているものが多いが、プランは隅丸長方形を呈し、墓穴と思われる小ピットが確認されたものもある。東-南東頭位の伸屈葬であり、副葬品として太刀・山刀・刀子・耳飾り・ガラス玉・キセル・漆器などがある。特にキセルは17世紀以降に流行し、時期の特定には有効な遺物の一つである。

(2) 建物跡

縄文時代から近世・近代までのものを対象とする。

1) 縄文時代晩期～統縄文時代

18基が確認されており、覆土上面からは縄文時代から近世までの遺物が混在し、床面からの遺物が僅かな例も見られるが、概ね縄文時代晩期末から統縄文時代にかけてのものと推定される。形態は円形または楕円形を呈し、直径3～6m程で、中央に地床炉を設け住居として使用されたもの、また、検出状況から石器製作の作業場所として使用されたと思われるものがある。

2) 縄文時代

71基が確認されており、大半が住居跡と考えられ、集落を形成していたと思われる。基本形態は隅丸正方形を呈し、竈を設けるものである。余市川河岸に接する調査区内には縄文時代の墓墳は少なく、それに比して住居跡が数多く検出されており、これは余市川に溯上するサケやマスなどの食料資源を確保する事に関連するものと思われる。

3) 近世・近代

Ⅱ層において礎石を伴う建物跡が見られる。時代については判然としないが、近世・近代の遺物が分布していること、かつて上ヨイチ運上家の建物群が配置されていたこと、ニシン漁に関連する施設があったことなどから、それらに関するものと考えられる。また、柱穴状のピットが発掘区内から多数検出されているが、年代推定は困難である。

(3) 塚状遺構

余市川河岸に沿って延びる全長100m以上のMO-10を中心として、それにほぼ直交する10～40m程度のものと、断続しながら並行するものが見られる。一見して区画のように思われるものであるが、それぞれの塚が同時期なのか、また具体的な年代と性格についても明確ではない。年代幅として、縄文時代の住居跡を切っていることや覆土に近世の貝塚が見られることから、中世から近世にかけてのものと思われるが判然としない。これらの塚に伴う確実な遺物はなく、自然の状態で埋没しており、大半に炭化物の堆積層が見られるものである。これらは砂丘を掘り込み構築されているため、崩れて埋没しやすい事は容易に理解できるもので、塚の維持を考えた場合、常に修復する必要があったであろう。

(4) 遺構外出土の遺物

縄文時代から近世・近代にかけての遺物が多量に出土しており、遺構の年代よりも大きな幅を有している。

1) 縄文時代

土器では縄文時代中期の円筒上層式が僅かに見られ、余市式以降のものが多い。特に墓墳との関係から晩期前半から後半にかけてのものが圧倒的に多い。本州の亀ヶ岡式土器の影響を受

けているものであり、在地系のタンネットウシ式などは僅かである。後志地方においてこの時期の土器は浜中大曲式と称されているものであるが、その実態は必ずしも明確になっておらず、再検討すべきと思われる。

土製品では晩期と思われる土偶・垂飾具等が見られる。後志管内において出土例が少ないものであり、いずれも破片である。一般に呪術的性格が強いといわれるものであり、墓墳群と関連する可能性は濃厚と思われる。

石器では剥片石器とともに礫石器も数多く出土している。多種多様の石斧からは木材加工などが行われていたことが想定でき、石棒や石刀からは呪術的性格が窺える。

2) 続縄文時代

土器では初頭の港大照寺式、それ以降として恵山式、後北式、北大式が続いている。最も多いのは墓墳数と同様に恵山式土器である。初頭の土器型式については港大照寺式を含め、実態が不鮮明と言える状況である。後北式、北大式の墓墳が極端に少ないにも関わらず、完形土器・土器片は数多く見られることから、型式的には暫時変化していると言える。

石器では恵山文化に特徴的な有茎石鏃、石製ナイフ（スクレイパー）、魚形石器などがある。

3) 縄文時代

縄文時代は、甕と高環が主体となり、土師器の坏や須恵器の坏、壺、甕が出土している。縄文土器の高環は内黒が多く、内面整形に横なで、放射状磨きなどがあり、土師器坏と共通することが多いことから土師器製作の影響を受けているものと思われる。

この時代と推定されるものとして内外黒色土器がある。外面の磨きは土師器に類似するが器形は縄文土器と異なるものであり、北方及び本州との比較検討を要する資料である。

4) 中世

14～15世紀にかけて珠洲、中国製青磁・白磁、古瀬戸が見られる。最も多いのは珠洲焼の片口播鉢であり、本州では生活用具として普及しているものである。北海道において使用されたものか、交易品なのか議論されるところである。これらの出土分布の傾向として、発掘調査区の北側の河口付近に集中し、ごく限られた一角といえる。金属製品については、和鏡が幾つか見られ、どのような人々が使用していたのか興味のあるところである。

5) 近世

17世紀後半から次第に肥前陶磁器が多くなり、18世紀から幕末にかけて主流を占めるような状況である。

中世から近世にかけての遺物としては陶磁器が主体であるが、近世・近代のアイヌ民族は漆器を珍重し、陶磁器にはほとんど関心を示さないことから、漆器の存在は常に考えなければならない。アイヌ文化を考える場合に、儀礼に伴う用具として漆器は不可欠の存在であり、そのような中で生活における漆器の定着は、今後注意すべき課題と言え。また、骨角器についてはキテや刺突具などが数多く出土しており、その中には模様やシロシ（印）の施されたものもある。

以上のように要点のみを記述してきたが、付編において概報の再録およびその後の加筆を含めた分析などを掲載しているの、本文とあわせて参照していただきたいと思う。

縄文時代晩期前半からこの地は墓域として選定されていたらしく、続縄文時代まで継続している。墓域の形態、副葬品、埋葬方法などに、時期により相違がみられ、変遷を知る上で重要である。また、縄文時代では北方系といえる青銅製垂飾や青銅製袴帯金具、墨書・刻書土器などの本州系文物が出土するなど広範囲で交流していたことが窺える。

中世では、珠洲・古瀬戸・中国製青磁・白磁が多く出土しており、大浜中遺跡の中世遺物とともに貴重な資料となっている。しかし、遺構として確認されたものは無く、概報において塚状遺構を該期としているが、その可能性があるとする程度にとどめておきたい。道南地域では、函館市の志海苔館、上ノ国町の勝山館などの発掘調査が実施され、文献との比較が行われ、大きな成果を上げており、これらの調査結果との比較・検討もしていかなければならない。

さて、余市の名が最初に文献に現れるのは、松前藩の歴史書『新羅之記録』（正保2年・1646）であり、15世紀には、松前以东は鶴川、西は余市まで和人が居住していたように書かれており、これらと関連して大川遺跡出土の中世遺物をどのように解釈するかは、今後議論されることであろう。また近世においては、寛文9年（1669）の日高地方を主体としたシャクシャインの戦いに関連した余市が記録されている。

18世紀前半には余市川右岸に上ヨイチ、左岸に下ヨイチとして場所が設けられ、19世紀には秋田県雄越出身の竹屋長七（初代林長左衛門）が場所請負人となり、以後明治2年（1869）まで続いている。当時の建物として北海道で唯一現存する下ヨイチ運上家が国指定の重要文化財として保存されており、この地がアイヌ民族との交易などにおいて重要な場所であったことが窺える。

近代～現代の遺物も多く出土しているが、それらについては時間が無いこともあり、整理の対象としては割愛している。現在の商店街・住宅街も大川砂丘上に形成されており、遺跡の上に現在も多くの人々が生活している状況である。商店街の形成は大正時代初めの頃と言われ、ニシン漁の繁栄と関係している。余市は近世以降ニシン漁業によって大きく発展し、今日の土台を築いているが、余市周辺では昭和29年頃からニシンが見られなくなり、次第にその面影が失われていった。

現在の余市町は明治時代にリング栽培を始めて以来、サクランボ・ブドウなどのフルーツの産地として知られるようになり、かつてのニシン漁は歴史において語られるようになっている。

その一方で、国指定「フゴッペ洞窟」、「大谷地貝塚」、道指定「西崎山ストーンサークル」、国指定「旧下ヨイチ運上家」、国指定「福原漁場」など縄文時代から明治時代までの遺跡や建築物が見られる文化財の町としても知られている。

大川遺跡をはじめ、町内の各遺跡出土の遺物については余市町歴史民俗博物館において展示しており、今後、調査や研究など、多くの方々に活用していただければ幸いです。

引用・参考文献（年代順）

- 高橋 健自 1911『釧と剣と玉』
- 寺田 貞次 1919「余市附近の土地と古代住民」『北海道人類学会雑誌』1
- 後藤 守一 1937『日本歴史考古学』
- 久保寺逸彦 1956「北海道アイヌの部制」『民族学研究』21-1, 2, 3, 4
- 名取 武光 1960「網と釣の笠書」『北方文化研究報告』15
- 藤本 英夫 1960「北海道日高国新冠村大狩部の墳墓遺跡」『古代学』9-3
- 名取 武光他 1961『大川遺跡』余市町教育委員会
- 大場 利夫他 1961『上ノ国遺跡』上ノ国町教育委員会
- 吉崎 昌一 1965「縄文文化の発展と地域性～北海道」『日本の考古学』Ⅱ
- 竹田 輝雄他 1969「北海道」『新版考古学講座』3
- 中野 政樹 1969「日本の美術10・11～和鏡」
- 名取 武光他 1970『フゴッペ網書』
- 峰山 巖他 1971『天内山』余市町教育委員会
- 大場 利夫他 1973『オンコロマナイ貝塚』
- 海保 巖夫 1974『日本北方史の論理』
- 千代 徹他 1974『西楯榎』
- 野村 崇 1975「いわゆる亀ヶ岡式土器の北方伝播について」『北海道開拓記念館研究年報』4
- 石附高三男 1976「鈴谷式土器の南下と江別式土器」『北海道考古学』12
- 野村 崇 1976「札札～北海道上磯郡本古内町における縄文時代晩期土壌墓の調査」北海道開拓記念館
- 林 謙作 1976「亀ヶ岡文化論」『東北考古学の諸問題』
- 萱野 茂 1978『アイヌの民具』
- 大沼 忠春 1980「縄文文化」『北海道考古学講座』
- 宇田川 洋 1980『アイヌ考古学』
- 加藤 邦雄 1980「縄文文化後期・晩期」『北海道考古学講座』
- 高橋 正勝 1980『アヨロ』
- 輪崎 彰一 1980『日本のやきもの集成Ⅲ～瀬戸・美濃・飛騨』
- 峰山 巖他 1980『瀬田内チャン跡遺跡発掘調査報告書』北檜山町教育委員会
- 尻八館調査委員会 1981『尻八館調査報告書』
- 高橋 和樹 1981『瀬瀬南川』瀬瀬町教育委員会
- 高橋 正勝 1981『元江別遺跡群』江別市教育委員会
- 小泉 弘 1983『江戸を掘る』
- 田村 俊之 1983「北海道における近世の墓制」『北海道考古学』19
- 出川 直樹 1983『やきもの鑑定入門』
- 野村 崇 1983「石剣・石刀」『縄文文化の研究』9
- 村越 潔 1983『亀ヶ岡文化』考古学ライブラリー18
- 石橋 孝夫他 1984『紅葉山33号遺跡発掘調査報告書』石狩町教育委員会
- 玉口 時雄他 1984『考古学シリーズ17～土師器・須恵器の知識』
- 千代 徹 1984『縄文文化』考古学ライブラリー25
- 1984『縄文時代の生活様式』考古学ライブラリー29

- 西本 豊弘 1984「北海道の縄文・縄縄文文化の狩猟と漁労」『国立歴史民俗博物館研究報告』4
- 野村 崇 1984「北海道の亀ヶ岡文化」『北海道の研究』1
- 平川 善祥 1984「近世アイヌ墳墓の考古学的研究」『北海道の研究』2
- 松下 夏 1984「北海道出土の中国磁器」『北海道の研究』2
- 吉岡 康暢 1984「北海道の中世陶器」『北海道の研究』2
- 水野 和雄 1985「日本石硯考」『考古学雑誌』70-4
- 矢吹 俊男 1985「縄文時代の墓制」『続北海道5万年史』
- 石附喜三男 1986『アイヌ文化の源流』
- 今田 光夫 1986『ニシン文化史』
- 高橋 和樹他 1986『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ・二風谷遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 海保 嶺夫 1987『中世の蝦夷地』
- 松崎 水穂他 1987『上ノ国漁港遺跡』上ノ国町教育委員会
- 宇田川 洋 1988『アイヌ民族成立史』
- 江坂 輝弥他 1988『装身具と骨角製漁具の知識』考古学シリーズ13
- 大橋 康二 1988『別冊太陽〜古伊万里』
- 大竹 憲治 1989『骨角器』考古学ライブラリー53
- 菊池 徹夫他 1989『よみがえる中世〜北の中世』
- 佐藤 利雄 1989「余市町登川流域丘陵より出土の石棒について」『北海道考古学』13
- 種市 幸生他 1989『忍路土場遺跡・忍路5遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 藤田富士夫 1989『玉』考古学ライブラリー52
- 吉岡 康暢他 1989『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館
- 吉岡 康暢 1989『日本海城の土器・陶磁』
- 長沼 孝他 1990『余市町栄町5遺跡』北海道埋蔵文化財センター
- 野村 崇他 1990「北海道余市町フゴベ洞窟前庭部出土の鉄製武器」『古代文化』42
- 福田 友之 1990「津軽海峡の先史文化交流」『考古学古代史論考』
- 宮 宏明他 1990『1989年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会
- 藤澤 良祐 1991「瀬戸古窯址群Ⅱ」『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要』X
- 松崎 水穂 1991「北海道の城跡」『中世の城と考古学』
- 宮 宏明他 1991『1990年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会
- 宇田川 洋 1992「アイヌ墓の成立過程」『北の人類学』
- 大橋 康二 1992「大川遺跡出土の近世磁器」『1991年度大川遺跡発掘調査概報』
- 堤 信久 1992『江戸時代の新説とその鑑賞』
- 野村 崇 1992「横丹半島における考古学研究の進展と遺跡の概況」『北海道開拓記念館研究報告』12
- 野村 崇他 1992「北海道余市町フゴベ洞窟出土の土器」『北海道開拓記念館調査報告』31
- 矢部 良明 1992『日本やきもの史入門』
- 岡田 淳子他 1992『1991年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会
- 井汲 陸夫 1993『江戸のやきものと暮らし』新宿区内藤町遺跡調査会
- 大橋 康二 1993『肥前陶磁』考古学ライブラリー55
- 小林 真人 1993「場所請負制下の余市アイヌの生活と社会〜文政から幕末を中心として」『北海道開拓記念館研究報告』13
- 田才 雅彦 1993「縄縄文時代後北期から縄文時代初期の土壌墓について」『二十一世紀の考古学』

- 森 秀之 1993 「北海道の道跡から出土した金属煙管の実年代」『北海道考古学』29
- 山本 哲也 1993 「大川道跡出土の須恵器」『1992年度大川道跡発掘調査概報』余市町教育委員会
- 岡田 淳子他 1993 「1992年度大川道跡発掘調査概報」余市町教育委員会
- 大橋 康二 1994 「古伊万里の文様」
1994 「大川道跡出土の近世陶器について」『1993年度大川道跡発掘調査概報』
- 宮 宏明・青木 誠 1994 「サメの歯とサバンパー余市町大川道跡墓域伴出例をめぐって」『動物考古学』2
- 吉岡 康暢 1994 「中世須恵器の研究」
- 岡田 淳子他 1994 「1993年度大川道跡発掘調査概報」余市町教育委員会
- 秋元 精風 1995 「香道～用具と使い方」
- 岩手県立博物館 1995 「縄文発信～岩手県立博物館調査研究報告」11
- 岡田 淳子他 1995 「1994年度大川道跡発掘調査概報」余市町教育委員会
- 菊池 徹夫 1995 「道跡に見る中世蝦夷地の風景」『中世の風景を読む～蝦夷の世界と北方交易』
- 菊池 俊彦 1995 「北東アジアからみた古代の余市」『北からの日本史～地域・民族・国家』余市シンポジウムの記録
- 瀬戸市埋蔵文化財センター 1995 『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』
- 田島 佳也 1995 「場所請負制後期のアイヌの漁業とその特質」『前近代の日本と東アジア』
- 中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器・陶磁器』
- 中川 裕 1995 『アイヌ語辞典』
- 長谷部素爾他 1995 『日本出土の中国磁器』
- 本間 元樹 1995 「縄文文化の鉄器」『北海道考古学の諸問題－北海道考古学』31
- 工藤 清幸他 1996 『大走須恵器窯跡発掘調査報告書』
- 瀬川 拓郎 1996 「縄文文化の終焉－日本海沿岸集団の形成と日本海交易の展開」『物質文化』61
- 鈴木 靖民編 1996 『古代蝦夷の世界と交流～古代王権と交流』1
- 高瀬 克範 1996 「恵山文化における魚形石器の機能・用途」『物質文化』60
- 宮 宏明 1996 「余市大川道跡出土の古代の文字資料をめぐって」『北奥古代文化』25
- 宮 宏明・小川 康和 1996 「渡来銭とガラス玉」『出土銭貨』6
- 学習研究社 1997 『古伊万里の見分けかた』暮らしの本6
- 森島 栄紀・宮 宏明 1997 「内外面黒色土器と大陸系土器について」『日本考古学協会1997年度秋田大会～蝦夷・律令国家・日本海』シンポジウムⅡ資料
- 宮 宏明 1997 「いかさま博奕と考古学」『動物考古学』8
- 阿部 朝衛 1998 「副葬品としての石鏃」『時の絆～道を辿る』
- 石井 淳 1998 「後北期における生業の転換」『考古学ジャーナル』439
- 乾 芳宏他 1998 「大谷地貝塚」余市町教育委員会
- 乾 芳宏 1998 「登川右岸道跡」余市町教育委員会
1998 「恵山文化の北方伝播について」『列島の考古学』
- 菊池 俊彦 1998 「サハリンの鈴谷式土器」『時の絆～道を辿る』
- 国立歴史民俗博物館 1998 『陶磁器の文化史』
- 越田賢一郎 1998 「北国の鉄鍋」『白い国の詩』11
- 小柳リラコ 1998 「近世墓～カプト・ソーランラインの巻」『時の絆～道を辿る』
- 佐藤 和雄他 1998 『茂別道跡』北海道埋蔵文化財センター
- 佐藤 剛 1998 「北海道出土のいわゆる赤穴式土器について」『北方の考古学』

- 中田 裕香 1998 「北海道美沢川流域における縄文時代晩期中葉から後葉の土器について」『北方の考古学』
- 宮 宏明 1998 「中・近世と古墳時代の特殊な刀子」『人類学研究』10
- 渡辺 俊一 1998 「縄文時代の焼人骨・火葬墓について」『北方の考古学』
- 青野 友哉 1999 「碧玉製管玉と琥珀製玉類からみた統縄文文化の特質」『北海道考古学』35
1999 「大洞～恵山式土器の墓と副葬品」『海峡と北の考古学』日本考古学協会網路大会実行委員会
- 石川 直章 1999 「和人集落と骨角器」『考古学に学ぶ～遺構と遺物』同志社大学考古学シリーズⅧ
- 乾 芳宏 1999 「旧東中学校校庭遺跡の遺物－内耳土鍋と骨角器」『余市水産博物館研究報告』2
- 大江戸探検隊 1999 『大江戸暮らし』
- 岡田 淳子他 1999 『入舟遺跡における考古学的調査』余市町教育委員会
- 加藤 秀幸 1999 『家紋大図鑑』
- 工藤 竹久他 1999 『東通村史』
- 高瀬 克範 1999 「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』34
- 高橋 明雄 1999 『鯨～失われた群衆の記録』
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 松崎 水徳 1999 「勝山館～変貌するアイヌ社会と抬頭する和人社会の接点」『別冊歴史読本』24-16
- 石川 直章 2000 「ヌッチ川遺跡出土の焼先」『余市水産博物館研究報告』3
- 乾 芳宏他 2000 『大川遺跡における考古学的調査』Ⅱ 余市町教育委員会
2000 『1998年度大川遺跡』 余市町教育委員会
2000 『1998・1999年度入舟遺跡』 余市町教育委員会
2000 『大川遺跡における考古学的調査』Ⅲ 余市町教育委員会
- 宇田川 洋 2000 『増補アイヌ考古学』
- 江戸遺跡研究会 2000 『江戸文化の考古学』
- 岡田 淳子他 2000 『大川遺跡における考古学的調査』Ⅰ 余市町教育委員会
- 佐藤 利雄 2000 「大川・入舟遺跡の歴史的概要について」『余市水産博物館研究報告』3
- 長沼 孝 2000 「統縄文文化」『季刊考古学』70
- 安西 雅希他 2001 『1999年度大川遺跡発掘調査報告』 余市町教育委員会

大川遺跡周辺地域の地質

松田 義章 (日本地質学会会員)

1. はじめに

本遺跡は、西南北海道積丹半島基部東岸、余市川河口付近に位置している。なお、西南北海道積丹半島～余市にかけての地域は、Geologic Provinceとしては、いわゆるGreen Tuff Regionに属し、さらに東北本州區北方延長部に相当する。

この地域一体には、特に海岸部を中心として新第三紀中新世～鮮新世の紫蘇輝石・普通輝石安山岩を主体とする火山岩類およびディサイト質～安山岩質のhyaloclastiteやepiclastic rocksを主体とするVolcaniclastic Rocksが広く分布している。また、その中には、流紋岩質のhyaloclastiteの存在も報告されている。(Yamagishi and Dimroth 1985)

2. 余市地域の第三系を中心とした地質概説

本地域を含む積丹半島基部の地質は、主に新第三系中新統および鮮新統よりなり、その上部に、平野部を中心として第四系更新統の古期崖堆積物、軽石流堆積物、降下軽石堆積物、および段

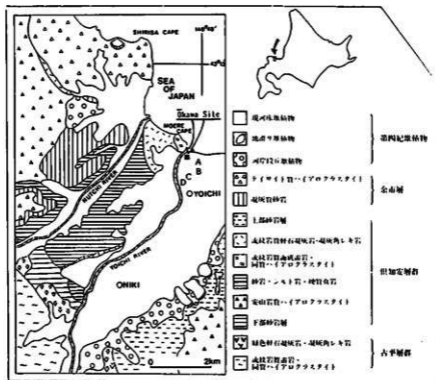


図1 余市町周辺地域の地質図 (山岸 1990を一部修正)

丘堆積物、完新統の崖堆積物、地すべり堆積物、および現河床堆積物等が広くこれを覆っている。(図1)。なお、余市町周辺地域における基本層序とその西南北海道標準層序との対比について(表1)に示す。すなわち、本遺跡の地質の基盤とも言うべき新第三系の層序について、下位よりその概要を記すと次のようになる。

先第三系のbasement rocksであるホルンフェルスを主体とする寒期変成岩類、粘板岩を主体とするリャムナイ層、および花崗岩類等を不整合に覆って、長尾・佐々(1934)による、西南北海道標準層序の福山統に対比される茅沼層群、訓徒～八雲統に対比される古平層群、八雲～黒松内統に対比される俱知安群層、および瀬棚統に対比される余市層に区分されている。(齊藤他(1970)、Yamagishi(1981))特に、余市地域においては、上部中新統のものとされる俱知安群層および鮮新統のものとされる余市層が広く分布しており、本遺跡の西側に隣接するモイレ岬の流紋岩体は俱知安群層に、また、さらにその西側に位置するシリバ岬のデイサイトは余市層にそれぞれ対比されていた。しかし、その層序学的位置づけは必ずしも明確ではなく、目下、筆者らによって、それらの岩体の放射年代測定(K-Ar dating)を含めて検討中である。(Yamagishi and Matsuda, (1990))なお、モイレ岬の流紋岩はLava Podとしての産状を呈し、中心部においてはFlow Layerを呈するlavaであるが、周辺部ではhyaloclastite ないしObsidianに移行している。一方、シリバ岬はデイサイト質のLava Domeであり、淡大なdyke swarmが認められる。

3. 本遺跡発掘区周辺における第四系の地質

本遺跡の分布している余市地域には、上記モイレ岬において認められる新第三系中新統の流紋岩および流紋岩質のhyaloclastiteとは、やや岩質を異にする、第四系更新統の軽石堆積物が分布する。この堆積物は、流紋岩、安山岩等の類質ないし異質岩片を多量に含み、主に余市川東側、黒川町付近に局部的に認められ、その層厚は20メートル前後である。さらに、余市町における丘陵地には、崖堆積物および地すべり堆積物が広く認められる。なお、空中写真判読によると、余市川流域には2～3段の段丘面が認められ、これらの段丘面には層厚、数メートル～10メートル前後の砂礫を主体とし、軽石や粘土等を混える段丘堆積物が認められる。さらに余市川

地質系統		西南北海道標準層序 主として中部帯 五尾・佐々(1934)	積川下島尾層群地域 (本地域周辺) 主として齊藤他(1970)に基づく
新 第三 系	完新統	長尾層 沖積統 上段段丘形 高位沖積層	沖積層 崖堆積物・段丘堆積物 段丘堆積物 Asakura層群 Asakura層 Matsubara層 黒川高文山統 沖積石炭層 余市川安山岩 上江石炭山岩
		俱知安群層 石炭堆積物層	新第三系岩層
	鮮新統	瀬棚統	余市層
		黒松内統 八雲統 訓徒統 茅沼統 古平統	俱知安群層 余市層 シリバ層 小沢層 大島層 河原層 段丘層 ヤチナイ層 飯沼層群 ペーペナイ層
第四系	加山統	更新統	

表1 余市町周辺地域模式柱状図

は氾濫原が大規模なこともあって、その河床、特に河口から数キロメートル奥に入る地域に至るまでの河床付近には、層厚50メートル～60メートルの主として砂・礫・粘土からなる完新世堆積物（現河床堆積物）が広く分布している。因みに、これは海水面が現在より低い時期に形成された河口氾濫原堆積物ないし三角洲堆積物としての様相を呈している。一方、広田ほか（1985）によれば、この堆積物中の砂礫層は良好な帯水層となっているものの泥炭ないし泥炭質粘土を挟在するため、水質は不良であるとされている。なお、余市川流域周辺地域において、主に深井戸地下水調査の目的で、深度50メートル～80メートルのボーリング調査が実施されている（図2）。これによれば、地表から、10メートル～20メートルにおいては、主に貝殻化石を含む未固結の砂層からなり、それ以降は、未固結のシルト～粘土からなっている。一方、各地域毎に若干の差異は認められるものの、深度30メートル～40メートルないし45メートル～60メートルの層厚には、層厚約10メートルに及ぶ未固結の礫層を挟んでいる等の特徴がうかがえる。さらに、今まで余市地域において調査された知見を総合した概括的な地質断面図が既に公表されている。（広田ほか（1985））。これらは、過去の海水準変動や余市川の河道変遷を伴うような大規模な氾濫など、この周辺地域において展開された地史・環境変遷をかなり具体的に示している。今まで述べてきたことから明らかなように、本遺跡発掘区の地質は、総て第四紀完新世の現河床堆積物および海浜性堆積物、すなわち未固結の砂層よりなる。なお、その層序は、肉眼的に4層に区分される。このうち、表層の盛土（攪乱層）とその下部のdark brownを呈する漸移層を除くと、全体的にやや淘汰の良いcoarse sandからなっている。この部分はさらに大まかに2層に区分することができる。

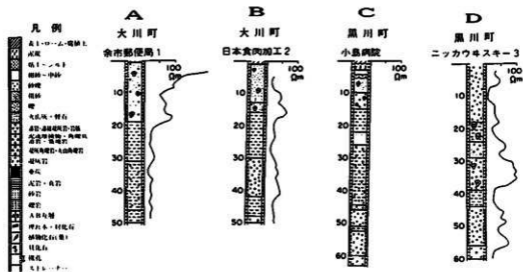


図2 余市川河口付近、本遺跡発掘区周辺地域における深井戸地質柱状図（ボーリング調査地点A～Dは、図1の地質図上にそれぞれ示している。）

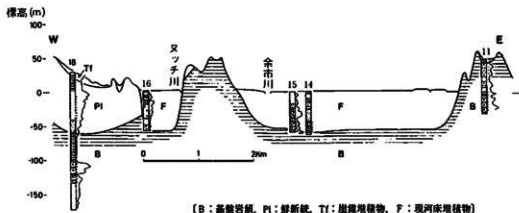


図3 余市地域における東西地質断面 広田ほか (1985) による

すなわち、上部層は、dark brownのmassiveなcoarse sandからなり、下部層はbrownの砂層中にpyroxene, hornblende, magnetite等のcoloured mineral (heavy mineral) がparallelに濃集したlaminaの認められるcoarse sandからなっている。さらに詳しく観察すると、下部層内部において、normal gradingを示す部分の他、reverse gradingを呈する部分も認められる。これは、海浜環境下における大規模な波浪によって、あるいは余市川の氾濫による河床変動の際に再堆積したことを示しているものと思われる。一方、1989年度発掘区の北部(海岸付近)においては、局部的に、非常に不淘汰なcoarse sandを挟む部分が認められたり、cross laminaを呈する部分が認められる。これらの層相(Sedimentary Facies)を解析し、その堆積環境を明らかにするために、今後、特に本発掘区における砂層のVerticalな変異については、より微視的なアプローチによって検討を加える必要がある。このため目下、粒度分析、組成鉱物分析を行っているが、そのデータについては後日公表の予定である。

参 考 文 献

- 長谷川彦・小山内照 (1978) 「国富-定山渓地域の地質と鉱床」地下資源調査所研究報告 第5号 北海道立地下資源調査所
 長谷川彦・八幡正弘 (1986) 「新生代東北本州陸地質資料集・第1巻 その2」島根横断ルートNo2 宝文館
 広田知保・和田信彦・横山英二・菅和哉(1985)北海道水理地質図幅・同説明書 第7号「釧路」55P 北海道立地下資源調査所
 津本幸男・相見俊弘 (1954) : 五万分の1地質図幅・同説明書「小樽西部」23P 北海道開発庁
 松田義章・藤田修男 (1987) 「北海道余市モイレ碑の地質」日本地質学会第94年学術大会講演要旨 P214 日本地質学会
 松田義章 (1988) 「蘭島遺跡B地点およびチブクシナイ遺跡の地質」蘭島遺跡・チブクシナイ遺跡調査概報 P79-91 小樽市教育委員会
 松田義章・岡村聡 (1989) 「余市町沢町遺跡周辺地域の地形・地質および堆積構造」沢町遺跡 P13-20 北海道余市町青年会
 斎藤昌之 他 (1970) 昭和44年度広域調査報告書「国富地域」44P 道南産業局
 Yamagishi, H. (1981) Geology of the Shakotan Peninsula Hokkaido, Japan, Rep. of the Geol. Surv. of Hokkaido No.52, P1-29, Geological Survey of Hokkaido.
 Yamagishi, H. and Dinroth, E. (1985): A Comparison of Miocene and Archean rhyolite hyaloclastite. Jour. Volcanol. Geotherm. Res. vol. 23 p337-356, Elsevier, Amsterdam.
 Yamagishi, H. and Matsuda, Y. (1990): The Neogene submarine felsic rocks at Toichi Beach, Shakotan Peninsula, Hokkaido. Annual Meeting of Volcanological Society of Japan 1990, abstract (in press).
 山岸宏光 (1990) 表層地質調査報告書「余市地域」
 長尾 巧・佐々保雄 (1934) 「北海道内陸部の新生代層と最近の地史」『地質学雑誌』40・41 日本地質学会

大川遺跡における縄文晩期火葬墓の覆土について

松田 義章 (日本地質学会会員)

1. はじめに

余市大川遺跡の火葬墓覆土は、その産状から見ると土壌掘削時に掘り出したものを、遺物埋積後、そのままの状態再び利用したものとは思われない。そこで、本遺跡における遺物埋積土について、その粒度組成並びに鉱物組成等について分析を行い、検討を加えた。以下、その結果得られた知見の概要について報告する。

2. 検討試料の概要

今回、検討に供した試料は、本遺跡発掘区内の縄文晩期のものとされる墓壙の覆土(GP-355・445・462・463)及び土壙底に特徴的に認められた砂質物質(GP-470)である。因みに本試料のうち墓壙の覆土は、橙色～明黄褐色(7.5YR6/6～10YR6/6)のやや赤味を帯びた色調を呈し、その中に灰白色～淡褐色を呈する多量の軽石質の岩片を含む砂粒から構成されており、著しく不淘汰な産状を示している。一方、土壙底に認められる砂質物質は全体的に明黄褐色を呈し、分級良好なものである。なお、覆土を構成する各試料の色調は次の通りである。

GP-355…橙色(7.5YR6/6)、 GP-445…明黄褐色(10YR6/6)、

GP-462…明黄褐色(10YR6/6)、 GP-463…橙色(7.5YR6/6)、

GP-470…明黄褐色(10YR6/6)ただし、局部的に灰白色(10YR7/1)の部分が認められる。

3. 粒度組成

粒度分析のために、上記試料を予めNaOH(1N)及びH₂O₂(30%)で処理した後、水洗した。さらに電気恒温乾燥器で約110℃の温度で約24時間乾燥させた後、デシケータに入れて室温まで冷却してから検討を加えた。分析は篩分け法で行い、さらに細粒の部分についてはピベット法を併用してデータを補った。その分析データを、表1及び図1に示す。(なお、本試料の粒径区分には、MacManus(1963)によるPhi(ϕ)値(= -log₁₀d, d: 粒径の大きさ)を採用した。すなわち、 $\phi = 1$ 間隔でクラス分けし、それぞれの間隔毎の重量%をヒストグラム及び粒径加積曲線で表した。これによれば、GP-355・445・462・463のものは、いずれも著しく不淘汰であり、様々な粒径のものが混在している。しかし、いずれの試料においても、 $\phi = -2$ 以下の粗粒のもの占める割合が比較的高い傾向がうかがえる。なお、この傾向は、特にGP-445のものに著しい。一方、GP-462及び463のものは、 $\phi = 1 \sim 2$ の、中粒砂(Medium sand)サイズの含有率がやや高くなっていることが特徴的である。なお、上記各試料の粒径分布の傾向は、例えば流水等の営力によって運搬・堆積した、いわば自然条件下の砕屑性堆積物の粒度分布の傾向パターンとはやや異なっている。このことは採取地の異なる砕屑物の混合、粗粒岩片の意図的混入等、

表1 覆土の粒度分析データ

サンプルNo.	粒 径	$\phi = -2$ 以下	$\phi = -2 \sim -1$	$\phi = -1 \sim 0$	$\phi = 0 \sim 1$	$\phi = 1 \sim 2$	$\phi = 2$ 以上	計
GP-355	重量 (%)	25.22	15.60	13.56	13.85	17.20	14.58	100.01
	重量加積							
	透過率 (%)	25.22	40.82	54.38	68.23	85.43	100.01	100.01
GP-445	重量 (%)	39.85	11.98	9.87	9.34	14.58	14.39	100.01
	重量加積							
	透過率 (%)	39.85	51.83	61.70	71.04	85.62	100.01	100.01
GP-462	重量 (%)	17.05	14.51	13.69	15.16	38.66	8.93	100.00
	重量加積							
	透過率 (%)	17.05	31.56	45.25	60.41	91.07	100.00	100.00
GP-463	重量 (%)	22.43	13.52	11.65	11.94	32.46	8.00	100.00
	重量加積							
	透過率 (%)	22.43	35.95	47.60	59.54	92.00	100.00	100.00
GP-470	重量 (%)	0	0.12	0.36	3.16	81.29	15.07	100.00
	重量加積							
	透過率 (%)	0	0.12	0.48	3.64	84.93	100.00	100.00

図1 覆土の粒度分布ヒストグラム及び粒径加積曲線

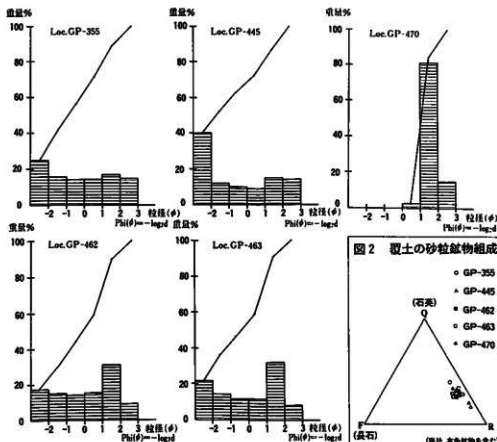
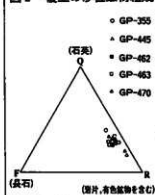


図2 覆土の砂粒鉱物組成



遺物の埋積に伴う人為的関わりを示している可能性がある。これに対して、GP-470の土壌底の砂は、自然状態の砂としての粒度分布傾向に近い。すなわち、この砂は、粗粒な岩片等を混入させることなく、自然状態のものを、そのままの状態をできるだけ保持したまま採取、散布したものである。因みに、GP-470の砂について、INMAN(1952)の方法に依って求めた諸データは次の通りである。

- ・中央粒径(中央値) $Md \phi = \phi_{50} = 0.60$
- ・平均値 $M\phi = \frac{1}{2} (\phi_{80} + \phi_{20}) = 0.70$
- ・淘汰度 $\sigma = \frac{1}{2} (\phi_{80} - \phi_{20}) = 0.30$
- ・歪度 $\alpha\phi = (M\phi - Md\phi) \times \frac{1}{\sigma} \phi = 0.33$

なお、中央値 $Md\phi$ -淘汰度 $\sigma\phi$ 相関データからすると、この砂は、海浜砂としての傾向を有しており、海浜より採取したものと思われる。

4. 鉱物組成

上記試料を未処理のままの状態で鏡検観察すると軽石等の岩片及び炭化物が認められるものの、ほとんどの粒子の表面は汚染されている。粒度分析のために処理した試料についても、酸化鉄等によって鉱染されている状態は依然として変化しておらず、鏡下における鉱物同定は困難である。そこで、粒度分析のために処理した各試料、約1gに対して、クエン酸ナトリウム水溶液(10%)を50mlとハイドロサルファイトナトリウムを1gずつ加え、約80℃に加熱して脱鉄処理した後、さらに水洗・乾燥して鏡検に供し、その鉱物組成について検討を加えた。なお、検討の方法は、各試料のうち、 $\phi = 2 \sim 1$ のものについて、鏡下で200個毎に3回、すなわち、600個の鉱物粒(岩片を含める)について同定した。次に、これを、石英(Q)-長石(F)-岩片(R)、(有色鉱物は、便宜的に岩片に含めてカウントする)の三成分に区分し、それぞれの個数比を求めた。

その分析データを、表2及び図2(Q-F-R三角ダイアグラム)に示す。これによれば、今回検討した全試料、すなわち、GP-355・445・462・463及び470の試料は、いずれも岩片に富み、次いで石英が多いという類似した傾向を示す。その中でもGP-445のものは、特に岩片の含有率が高い。一方、GP-462及び463の試料中のものは比較的有色鉱物に富んでいる。因みに有色鉱物としては、輝石類が最も多く、次いで磁鉄鉱・角閃石・黒雲母の順となっている。なお、岩片については、GP-355・445・462及び463のものは軽石状の白色岩片がほとんどなのに対して、GP-470のものは、赤色岩片の含有率が高く、白色の岩片は相対的に少ない。特に軽石状の岩片は、材木状ないし繊維状の形態を示すものが多く認められ、さらにこの岩片中には黒雲母ないし磁鉄鉱の鉱物粒を含んでいるものが認められる。

5. まとめと考察

以上、土壌埋積土の粒度組成と鉱物組成について検討を加えてきたが、埋積土としてのGP-

355・445・462・463の試料は著しく不淘汰であり、その産状や粒度分布の傾向から、これらは自然状態の土をそのまま運搬して土壌を埋積したのではなく、何等かの理由で、流紋岩片や、やや発泡した軽石片を人為的に混入させたものである可能性がある。なお、この発泡した軽石片は、モイレ岬南部～南西部に分布している流紋岩質軽石凝灰岩中に含まれているものと類似した組織を有しており、おそらく、ここから調達したものであろう。また、土壌底に敷いたと思われるGP-470の砂は、淘汰良好であり、これは砂粒中央値-淘汰度相関のデータ等により、海浜砂である可能性が高い。いずれも、それらの土や砂を構成する鉱物は、周辺の後背地の地質を構成する岩石に含まれているものと調和的であることから、周辺のモイレ岬付近に分布している流紋岩や流紋岩質ハイアロクラスタイトないし流紋岩質軽石凝灰岩の風化物質起源のものであろう。一方、GP-470の砂については、産状としては黄褐色を示しているものの、加熱処理をすると赤褐色に変色するという性質を有する。このことは本試料中に褐鉄鉱(Limonite, $\text{FeO}(\text{OH})\cdot n\text{H}_2\text{O}$)ないし赤鉄鉱(Hematite, Fe_2O_3)を含んでいる可能性を示唆している。そこでGP-470の砂粒に含まれている「黄褐色部」を抽出して、これを塩酸(HCl)に溶かし、さらに、フェロシアン化カリウム($\text{K}_4\text{Fe}(\text{CN})_6$)を滴下したところ、その溶液は藍色に変化した。この反応は、第二鉄化合物特有の反応であり、GP-470の砂は、赤鉄鉱を含んでいるものと思われる。すなわち、このことからすれば、GP-470の砂は、赤鉄鉱を多量に混入したベンガラとして散布したものであろう。なお、この砂はベンガラとして、散布時には鮮やかな赤褐色を呈していたものと推定されるが、その後の埋積土の被覆と時間的経過の中で、還元的な環境条件下のもとに変質し、発掘時には退色して黄褐色となっていたものと思われる。

表2 覆土の鉱物分析データ

(数値は割合%を表す)

サンプル No.	1 s t				2 n d				3 r d				顕下における 特徴
	石英	長石	岩片	計	石英	長石	岩片	計	石英	長石	岩片	計	
GP-355	29.58	9.86	60.56	100.00	38.64	10.23	51.14	100.01	32.56	6.98	60.47	100.01	白色の岩片(針本状・繭状 長石)が多い。灰いで石英多 い。赤色岩片・黒色岩片・有 色鉱物は少ない。
GP-445	15.94	5.94	78.22	100.00	21.71	4.85	73.64	100.00	27.35	9.49	63.25	100.00	白色の岩片(繭状岩片)が ほとんどを占める。 有色鉱物(ほとんど輝石類) もよく認められる。
GP-462	25.71	9.82	64.76	99.99	29.18	9.43	61.48	100.01	30.82	8.99	60.27	99.99	岩片は白色のものが多いが、 灰色のものもよく認められる。 有色鉱物としては輝石が多い。 角閃石は非常に少ない。
GP-463	26.92	7.79	65.38	100.00	30.43	9.94	59.63	100.00	28.93	9.92	61.16	100.01	白色の岩片(針本状長石)が 多い。有色鉱物もやや多い。 このうち、輝石、微鉄鉱が多 い中角閃石もよく認められる。
GP-470	22.61	10.87	54.52	100.00	28.11	8.65	63.24	100.00	26.22	6.71	67.07	100.00	赤色の岩片が多く、白色の ものは少ない。有色鉱物として 輝石の他、角閃石も多い。 特に黒雲母も認められる。

参 考 文 献

- CARVER, E., (1971): *Procedures in Sedimentary Petrology*. John Wiley & Sons, New York.
- CONYBEARE, C. E. B. & CROOK, K. A. W., (1982) *Manual of Sedimentary Structures* (2nd ed.). Australian Government Pub. Service, Canberra.
- 藤田郁男・松田義章(1990):札幌市伏魔川における後期更新世の氾濫原堆積物について、
春日井昭教授退官記念論文集、P 61-68。春日井昭教授退官記念事業会
- 広田知保・和田信彦・横山英二・菅和俊(1985):北海道水理地質図幅・同説明書 第7号「俱知安」55 P
北海道立地下資源調査所
- 猪木幸男・堀見俊弘(1954):5万分の1 地質図幅「小樽西部」・同説明書、北海道開発庁
- INMAN(1952): Measures for describing the size distribution of sediments *Jour. Sed. Petrol.*, Vol. 22, P125-146
- LEEDER, M. R. (1982): *Sedimentology - process and product*. G. Allen & Unwin, Ltd., London.
- 松田義章・積丹団研グループ(1979):古平川上流付近の含花崗質岩礫岩
日本地質学会第86年学術大会講演要旨 P 96、日本地質学会
- 松田義章・藤田郁男(1987a):北海道余市モイレ碑の地質 日本地質学会第94年学術大会講演要旨
P214、日本地質学会
- 松田義章(1987b):チブタシナイ遺跡の堆積環境-主に堆積物の検討。「チブタシナイ遺跡調査概報」
P 38-42、小樽市教育委員会
- 松田義章(1987c):「小樽周辺地域の地形・地質」北海道立理科教育センター
- 松田義章(1989a):「チブタシナイ遺跡出土石器の石質について-主に記載岩石学的検討-」
「蘭島・チブタシナイ遺跡調査概報」P 79-90、小樽市教育委員会
- 松田義章・岡村聡(1989b):余市沢町遺跡周辺地域の地形・地質および堆積構造「沢町遺跡」P 13-20
北海道余市町教育委員会
- 松田義章(1990):大川遺跡周辺地域の地質「1989年度大川遺跡発掘調査概報」P 28-31
北海道余市町教育委員会
- 松田義章(1991a):小樽市西部、蘭島遺跡群周辺地域の地形・地質及び砂丘発達史「蘭島群壘沢遺跡」
P 9-53、小樽市教育委員会
- 松田義章(1991b):塩谷3遺跡周辺地域の地形・地質、「塩谷3遺跡」P 6-16、小樽市教育委員会
- 松田義章(1991c):国指定史跡「手宮洞窟」周辺地域の地形・地質、「史跡・手宮洞窟」P 40-49、
小樽市教育委員会
- 松田義章(1992a):余市大川遺跡における氾濫原堆積物-その堆積学的検討-
「1991年度大川遺跡発掘調査概報」P 34-48、北海道余市町教育委員会
- 松田義章(1992b):小樽市西部、蘭島遺跡群出土石器の胎土分析「蘭島遺跡D地点」P 116-130、
小樽市教育委員会
- 松田義章(1992c):チブタシナイ遺跡の地質と氾濫原堆積物-特に氾濫原堆積物についての検討
「チブタシナイ遺跡」P 521-549、小樽市教育委員会
- McMANUS, D. A., (1963): A criticism of certain usage of the Phi notation. *Jour. Sed. Petrol.*, Vol. 33, P670-674
- 日本第四紀学会(1987):日本の第四紀地図及び解説 東京大学出版会
- 岡田博有(1968a):砂岩の分類と命名 地質学雑誌 74巻、P 371-374
- 岡田博有(1968b):砂岩の分類と命名-補遺-地質学雑誌 74巻、P 617-622
- PETTJOHN, F. J. & POTTER, P. E., (1964): *Atlas and Glossary of Primary Sedimentary Structures*. Springer-Verlag, Berlin.
- PETTJOHN, F. J. & POTTER, P. E. and SIEVER, R. (1987): *Sand and Sandstone*. (2nd ed.)
Springer-Verlag, New York.
- TUCKER, M. E., (1982): *The Field Description of Sedimentary Rocks*. Geological Society of London.
Handbook, Open University Press.
- TUCKER, M., ed(1988): *Techniques in Sedimentology*. Blackwell, Oxford.
- WALKER, R. G., (1984): *Facies Models*. (2nd ed.). Geological Association of Canada.
- 山岸宏光・松田義章・坂本 泉(1988):下北半島の新第三紀水中火山岩類-とくにpillow lobe
とlava lobe について
-日本火山学会1988年度春季大会講演予稿集 P 23、日本火山学会
- 山岸宏光・松田義章(1990):積丹半島余市海岸の新第三紀海底珪質火山岩類
地球惑星科学関連学会合同大会・日本火山学会園遊セッション講演予稿集 P 68
- YAMAGISHI, H., and MATSUDA, Y., (1991): The Neogene submarine felsic rocks at Yoichi Beach,
Shakotan Peninsula, Hokkaido. *Jour. Geol. Soc. of Japan*. Vol. 97 P269-277

縄文晩期墓墳伴出の糸の鑑別結果報告

菊地 美知子・小原 奈津子 (昭和女子大学)

1. 試料

1992年、北海道余市町大川遺跡第367号墓墳 (GP-367) において玉と共に出土した糸。
本鑑別には、長さ約2.7mm、太さ約250 μ mの糸を用いた。

2. 方法

試料が少量であるため、鑑別手段として、まず電子顕微鏡観察を行い、その後、同試料の回収可能な部分を用いて赤外線吸収スペクトルを測定した。

顕微鏡観察: JFC-1100型イオンスパックリング装置 (JEOL製) を用いてあらかじめ金を表面に蒸着させた試料をJSMT-300型走査型電子顕微鏡 (JEOL製) により形態観察を行った。

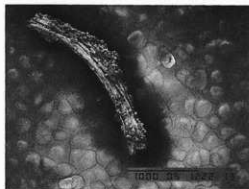
赤外線スペクトル: 約0.1mgの試料を120mgのKBrと共に粉末にし、錠剤に成形したものをIR-810型赤外分光光度計 (日本分光工業製) を用いて測定した。

3. 結果

試料は黄褐色で糸状であるが、撚りは認められない。表面には、縦に沿って多数の溝が観察されるが、これらの一部ないし大部分は繊維の乾燥による収縮に伴って形成された可能性が高い (写真1-a・bおよびc)。断面には、かなり大きな中空と、その周囲に皮質様の層の重なり (写真1-dおよびe) が観察されることから、これは植物であることが推測される。

一方、顕微鏡観察のために試料に蒸着した金は赤外領域に吸収を持たないため、試料本来が示す赤外吸収スペクトルには影響を及ぼさないと考えられる。そこで、先の顕微鏡観察に使用した同試料を回収し、金蒸着したままの状態で、赤外線吸収スペクトルを測定した。この結果、セルロースの特性吸収帯である、2,940-3,300 cm^{-1} (O-H伸縮およびC-H伸縮振動に由来)、1,630 cm^{-1} (吸着水に由来)、1,400-1,420 cm^{-1} (O-H変角およびCH₂変角振動に由来)、1,040-1,100 cm^{-1} (C-O伸縮およびC-C伸縮振動、およびCH₂変角振動に由来) の各領域にやや幅広いピークが観測された。このことから、同試料はセルロースからできており、植物繊維あるいは草の茎や樹皮等の植物由来のものであることが推測される。

さらに、写真2に見られるように、試料の断面形態とイネあるいはムギ科などの植物から製造された葉の断面との間に類似点が認められることから植物の茎が用いられた可能性も考えられる。中国大陸では、イネはB.C. 5,000年ごろすでに栽培されていたが、日本には弥生時代に中国から直接に、あるいは朝鮮を経て入ってきたとされている¹⁾。この試料の植物の種を明らかにするには、出土地域における当時の植生や、どの植物がどういう用途に利用されていたかについても今後検討する必要があると思われる。



a) 表面 (×35)



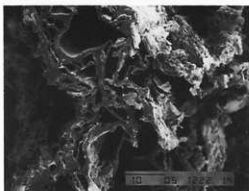
b) 表面 (×150)



c) 表面 (×150)



d) 断面 (×1000)



e) 断面 (×2000)

写真2 藁(現代)の断面の
走査型電子顕微鏡写真 (×500)

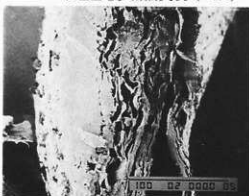


写真1 出土試料の走査型電子顕微鏡写真

付 編 4

恵山式期墓塚からの糸状出土物の鑑別結果報告

菊地 美知子・小原 奈津子 (昭和女子大学)

1 試料

北海道余市町大川遺跡第847号墓塚 (GP-847) において、1992年度の発掘で出土したものと同様に、玉に通されていた数本の紐もしくは糸状の物の一部。本鑑別には、長さ約4mm、太さ約300 μ mの糸状試料を用いた。

2 方法

本試料の形態観察にはCUP-M3型カラービデオプリンター (ソニー製) を接続させたVII-6110型ハイパーマイクロSCOPE (キーエンス製) およびJSMT-300型走査型電子顕微鏡 (JEOL製) を用いた。電子顕微鏡観察の前処理としてJFC-1100型イオンスパックリング装置 (JEOL製) で試料表面を金蒸着した。

3 結果

本試料をマイクロSCOPEで観察したところ、写真3に見られるように、枝分かれした植物の形態が観察された。なお、写真では、おそらく発掘後に付着したと考えられる「かび」も糸表面に認められた。また、写真4aは、試料の表面、写真4bは断面形態であるが、断面に空隙があることなどから、おそらく草の茎など、植物を糸として用いたものと考えられる。前回出土した糸 (GP-367)¹⁾ の顕微鏡写真と比較すると、両者の表面および断面形態が非常に類似していることから、糸として使用されたこれらの材料は同一種の植物である可能性が高いものと推測される。

引用文献

- 1) 菊地美知子・小原奈津子 1993 『1992年度大川遺跡発掘調査概報』26-27頁

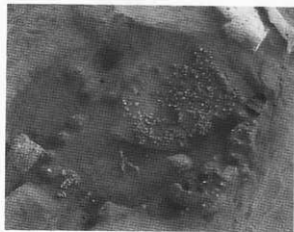


写真1 GP-847 コハク玉出土状況



写真2 GP-367糸出土状況

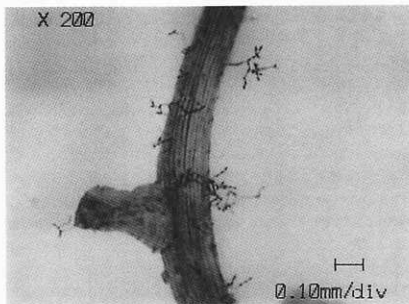


写真3 ミクロスコープによる観察 ($\times 200$)



写真4 a 電子顕微鏡による糸の表面形態 ($\times 150$)

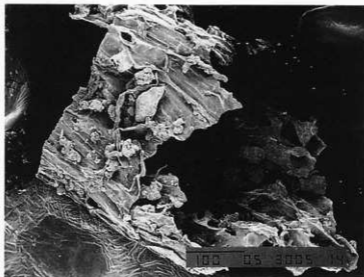


写真 4 a 電子顕微鏡による糸の表面形態 (×200)

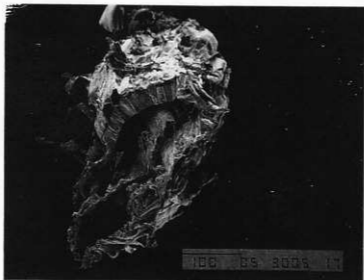


写真 4 b 電子顕微鏡による糸の断面形態 (×200)

大川遺跡における発掘物金糸の鑑別結果報告

小原 奈津子・菊地 美知子(昭和女子大学)

1 目的

北海道余市町大川遺跡第1号墓墳(GP-1)において発掘された金糸の由来を知ることを目的として、同糸の鑑別および構造を明らかにする。

2 実験

2.1 試料

1989年7月に、北海道余市町大川遺跡第1号墓墳(GP-1)において発掘、検出された金糸。

2.2 調査方法

1) 繊維の鑑別

本試料は、細長い金箔がらせん状に巻かれ、形を維持しているが、糸の芯部はすでに炭化し、形態をほとんど残していない(写真1-(1)・(2))。炭化した部分は、必ずしも箔のなかに残留しておらず、また金糸を切断するなど外部からのわずかな力で容易に散逸する状態にあった。

繊維の一般的な鑑別法を分類すると、①顕微鏡による方法②燃焼による方法③溶解による方法④染色、呈色による方法があげられる。

他に、試料の窒素の含有の有無を調べる方法もある。綿・麻などの植物繊維は、セルロースを主成分とするため、その構成元素は炭素・酸素および水素である。一方、絹・羊毛などの動物繊維は、蛋白質を主成分とするため、その構成元素は上記の三元素のほかに窒素(羊毛の場合はさらにイオウも含む)も含有している。この違いを利用して、糸の芯部が植物繊維あるいは動物繊維のいずれに由来しているかを明らかにする手段の一つである。しかし、金箔の周辺あるいは内部には、人体・体液・着衣物・棺・その他の副葬品や微生物・虫など、糸以外の外的環境に由来する物質も混入している可能性もある。この様な混入物には窒素を含有しているものもあり、



(1)



(2)

写真1 金糸の顕微鏡写真(1)及び電子顕微鏡写真(2)

従ってこの方法で繊維自体の窒素の有無を分析することは難しい。

以上のような試料状態であることに加え、試料量も少量であることから、本試料の鑑別は主に顕微鏡による方法で行った。顕微鏡観察には、生物顕微鏡（ニコンBIOPHOT）および走査型電子顕微鏡（JEOL JSMT300）を用いた。

2) 金糸の構造

本試料について、肉眼および顕微鏡により、金糸の種類、太さ、金箔の巻き方向、巻き数、幅、厚さに関する調査を行った。

これから本試料の金糸の構造上の特徴を知ることができる。

3) アイヌ衣服における金糸との比較

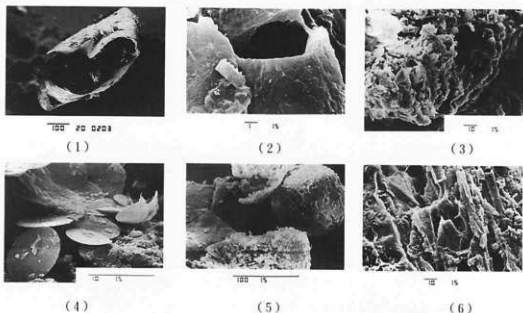
本試料と、出所の異なる二種のアイヌ衣服に使用された金糸について、それらの構造上の特徴を比較することにより、その由来を検討する。

金糸を採取した二種のアイヌ衣服は、共に早稲田大学所蔵の土佐林コレクションに属するものであり、以下の二種のグループに属する衣服の中から金糸を採取した。これらの試料をAおよびBとする。

A. 本州から入った主として古着の和服地（中には、袋地や手ぬぐいのような材料も含んでいた）を用いて制作された衣服。この和服地には、綿織物・絹織物および毛織物がある。

B. 黒龍江流域、その他北方地域を經由して渡来した衣服であり、いわゆる山丹服（一般に蝦夷錦ともいわれる）である。

写真2 金糸の電子顕微鏡写真



Bの金糸では、芯糸が染色されており、異なる色の芯糸を用いた二種の金糸を試料として採取した。すなわち、青く染色された芯糸（略名をB-①とする）と褐色に染色された芯糸（略名B-②とする）とを採取して用いた。

3 調査結果および考察

3.1 金糸の種類

一般に、古い織物あるいは飾り布に用いられた金糸は、次の二種に大別される。¹⁾

- a. モール式金糸：極薄く延ばした金を細かく切り芯糸に巻き付けたもの。
- b. 箔糸：金箔を和紙に貼り、それを細く切った金糸（ひらきん）あるいは、さらにその箔糸をよって作った金糸（よりきん）。

ところで、a型で最古と考えられている金糸は、奈良時代以前の墓と考えられている阿武山古墳から発掘されている。

b型の金糸については、正倉院宝物に金箔を貼った紙が残っていることから、この時代（奈良時代）にはすでに金糸も製造可能であったものと考えられている。また中国では、唐時代の書にこの金糸の製造について述べられていることから、この時代には製造されていたものと考えられている。¹⁾

本試料を、肉眼および生物顕微鏡、走査型電子顕微鏡で観察した結果、前述のように、細く切られた金箔が炭化した物質に巻きついたものであることがわかった（写真1）。したがって、本試料は、おそらくaの型に属するものと推測される。

3.2 金糸の形態

試料は、前述のとおり写真1(1)のような金箔を巻いた金糸であるが、内部は、写真2のようにすでに炭化しており、繊維状の形態をとどめていない。

また、写真2(4)および(5)に見られるように、明らかに外的環境に由来する円板状の物（カビの可能性もあるが、何であるかは不明）やトビムシに類似した虫の卵と推測される物質がかなり多量に混入している。糸芯部は、炭化していることから、セルロース系の植物繊維である可能性は強いが、一方、動物繊維を構成する蛋白繊維がこの様な状態にならないと完全に断定することも難しい。

さらに、電子顕微鏡ではごく一部、中空の繊維とも見なされる柱状の部分が認められた（写真2(2)）が、このものの径は7~11 μm 、空孔の径は約5 μm であった。この部分が繊維の形状を残した一部分であると仮定すると、空孔の存在から麻、綿などの植物繊維の可能性が考えられる。しかし、各種天然繊維の平均幅は、表1に示すとおり、綿ではインド綿が24~25 μm 、エジプト綿で16~17 μm であり、麻でも16 μm 以上の幅を有する。²⁾ これらの値と比較すると、本試料は若干細く、また、空孔も通常のものより大きく開いている。このことから、この部分が芯部の繊維に由来する物質ではない可能性も考えられるが、同時に、植物繊維が劣化、分解のためにぜい化しつつある状態である可能性も考えられる。

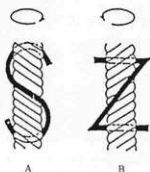


図1 糸のより方向

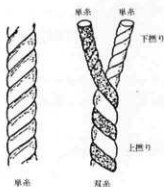


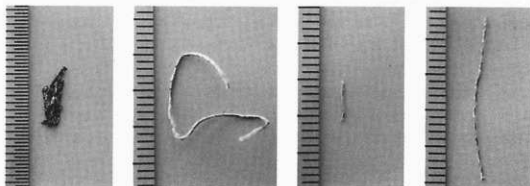
図2 単糸と双糸

表1 現代の各種天然繊維の長さとかさ^{*)}

繊維の種類		長さ (mm)	幅 (μ)
綿	シーアイランド綿	45~55	16~17
	エジプト綿	30~45	16~18
	アメリカ綿	25~35	18~20
	インド綿	20~30	25~24
麻	亜麻	20~30	20~30
	大麻	5~55	16~50
	ラミー	20~200	20~80
	ジュート	15~50	20~25
	マニラ麻	3~20	16~32
毛	羊毛(メリノ)	70~110	18~27
	カシミヤ	30~125	15
	モヘヤ	100~300	23~43
絹	家蚕絹	800~1,000 (m)	16
その他	カボック	7~32	15~30

表2 糸のよりの強弱

撚りの種類	撚り数T/M
甘撚り糸	約 300T/M以下
並撚り糸	約1,000T/M以下
強ねん糸	約3,000T/M以下
極強ねん糸	約3,000T/M以上



発掘試料

A

B-①

B-②

写真3 発掘試料およびアイヌ衣服の金糸の形態

3. 3 金糸の構造

一般に、糸の大部分はよりがかけられている。糸によりをかける主な目的は、織物を製織しやすいうちに毛羽を伏せ、糸の強度を増し、被服として用いる場合、摩擦抗力を増し、織物の外観に変化を持たせるなどのためである。糸のより方—よりの方向やよりの強弱—は、その用途に深く関連するものであるため、これについても明らかにし、記録しておく必要がある。また、この他、糸の太さや糸の構造などに関する知見も、その糸の特徴を知るために重要であると思われる。調査した糸はすでに何らかの外力に押し付けられて扁平になり、また金箔の巻き加減が緩んでおり、その形状も一定していない状態であるため、金箔の見掛けの巻き数、巻き方向、幅、厚さおよび金糸の直径を、顕微鏡を適宜用いて測定した。

糸のより方向には、図1に示すように、Zより（左より、Z-twist）とSより（右より、S-twist）がある。金箔の巻き方向は、すべてZより（図1B）である。その巻き数は最小30.5回/inch、最大40.6回/inchであったが、複数箇所で見れば明らかによりに緩みが観察されたため、実際の値は最大値40.6回/inch（1598T/M）に近いと考えたほうが妥当である。一般に、よりの強弱から、表2のように糸が分類されている²⁾。表の分類に則ると、試料のよりの程度は比較的強く、強撚糸に分類される。

金糸の見掛けの直径は、0.45～0.50mmの範囲にある。先に述べたように、金糸が緩んでいたり、押しつぶされた部分も多いことから、この場合小さい値のほうが真の糸の直径に近い値であると考えられる。

また、巻き付けられた金箔の幅は0.48～0.49mm、厚さは6.9～10.4 μ mであった。

3. 4 アイヌ衣服における金糸との比較

今回発掘された金糸の製造が、本州と中国のいずれに由来しているかを明らかにする目的で、この点についての由来が明らかでない二種のアイヌ衣服に用いられた金糸と本試料とを、形態および構造について比較した。ここで用いたアイヌ衣服は、本州から入った古着の和服地で制作された衣服と、中国の黒龍江流域、あるいはその他の北方地域を経由して渡来したいわゆる山丹服の二種であり、前述のように、前者から採取した金糸をA、後者からの金糸をB（この場合、B-①およびB-②の二種採取した）と、便宜上略する。Aの芯糸は染色されていないが、Bの芯糸は①が青色に、②が褐色に染色されている。

AおよびBは共に前述のモール式の金糸に分類される構造であり、芯糸に金箔を巻き付けている。またその金箔は、おそらく紙の一種と思われるシートに貼り付けられているものであった。糸断面の顕微鏡観察から、芯糸は、Aは綿から、Bは絹からなる単糸であることが鑑別できた。単糸とは、図2のように、ZまたはSのいずれかのよりをかけた糸をいい、これに対して、単糸を二本以上引き揃えて元の糸のより（下よりという）と逆方向の上よりをかけて、一本の糸により合わせたものを諸撚糸、または諸糸といい、下糸の数によって二本諸、三本諸と呼ぶ。紡績糸の場合も諸糸というが、この場合下糸の数によって双子糸（双糸ともいう）、三子糸などという。

表3 発掘試料およびアイヌ衣服に用いられた金糸の構造上の比較

測定項目	発掘試料	アイヌ衣服から採取した金糸**		
		A	B-①	B-②
金糸の直径 (mm)	0.45	0.33	0.38	0.50
芯糸				
より方法	-	単糸 (Z)	単糸 (Z)	単糸 (Z)
繊維の種類	-	絹	絹	絹
金箔				
巻き方向	Z	Z	Z	Z
巻き数 (回/inch)	30.5~40.6	25.4~27.9	13.0	13.8
幅 (mm)	0.48	0.71	0.40	0.51
厚さ (μm) *	6.9~10.4	-	-	-

* $1 \mu\text{m} = 1 \times 10^{-3} \text{cm}$

**A: 本州から入った主として古着の和服地で制作された衣服

B: 山丹服: ①青く染色された芯糸を使用していた金糸 ②褐色に染色された芯糸を使用していた金糸

金糸の直径、金箔の巻き方向、巻き数、幅を表3に、糸の形態を写真3に示す。表3では、Bの金箔の巻き数が他と比べて非常に少ないことが分かる。

Bの金糸は染色された芯糸に細長い金箔が緩く巻き付いている形で、染色された芯糸が金箔と交互に表面に現れるため、芯糸の染色が十分に生かされるようになっている。一方、Aはその様な趣向は認められず、金箔は隙間なくしっかりと巻き付けられている。発掘した金糸における金箔は、部分的に緩んだ箇所も認められたが、総じて隙間なく巻かれており、その形態は明らかにAと同じタイプのものであるといえる。

4. 総括

発掘された金糸は、細長い金箔が炭化した芯に巻き付けられた形状を残しているが、その芯部は繊維の形状をとどめず、虫の卵や外的環境からの混入物もかなり含まれていることが、顕微鏡観察によって明らかになった。金糸の内部は炭化していることから植物繊維に由来している可能性が指摘できる。

二種の現存しているアイヌ衣服（本州の古着を使ったもの、および黒龍江流域その他の北方流域を經由して渡来した山丹服）に用いられていた金糸と、本試料とを比較した結果、金糸の形態は、本州の古着から採取した金糸によく類似しており、山丹服から採取した金糸とはまったく異なっていた。また、この金糸の芯糸には、植物繊維である絹を用いており、先の鑑別実験の結果

から指摘した、試料の糸芯部が植物繊維であるという可能性とも一致する。このことから、この金糸は本州から渡ったものである可能性が高い。

従って、発掘された金糸は、極薄く延ばした金（金箔）を細く切って糸糸の綿糸に巻き付けた構造（a. モール式金糸に分類される）であったものと推測される。また、金箔を細く切り巻き付ける際に、技法上おそらく紙などに金箔を貼りつけてから糸を製造することが必要であったものと考えられる。しかし、当然ながら、この紙も糸糸と共に炭化するため、糸糸あるいは紙との識別は不可能であった。

引 用 文 献

- 1) 上村 六郎：染色と生活社、12、76-80（1976）
- 2) 渡辺 綱夫：被服材料学 第2版、高陵社、P21（1984）

大川遺跡出土土器の蛍光X線分析

三辻 利一 (奈良教育大学)

1) はじめに

北海道の遺跡から出土する須恵器片の試料数も最近ではかなりの数に上がる。筆者が分析したものだけでも、既に、数十点に達する。この中に、本邦最北端の須恵器窯群である青森県の五所川原窯群の製品が含まれることは確実である。ところが不思議なことに、至近距離にある五所川原窯群の製品は半数程度で、残りは別産地のものであることがわかっている。その産地は胎土からみて複数あるようである。秋田県から福井県にかけての日本海沿岸地域の窯の製品であると推定されているが、なかなか産地の特定ができない。佐渡小泊群も有力な産地候補の一つである。筆者はNaなどの別の因子も使って、産地を追跡中である。

五所川原窯群の製品と、それ以外の産地の製品の搬入は同時期なのか、それとも、五所川原窯群が操業に入る10世紀以前に北海道へ搬入されたものなのかは未解明である。この問題の解明を目指して、目下、胎土分析のデータを集積している段階である。

もう一つは據文土器の胎土についての問題である。道内全域の遺跡から出土する全時代の據文土器の分析データが十分に集積されていないので、現時点では分析データから直ちにその産地を推定する訳にはいかない。しかし、底面に回転糸切り痕跡をもつ環頸の胎土は北海道のものではなく、本州からの搬入品であるらしいことが最近わかって来た。

以上のことが、北海道の遺跡から出土した土器の胎土分析のあらましである。

このような背景をもって、余市町の大川遺跡から出土した須恵器、土師器、粘土の蛍光X線分析の結果について報告する。

2) 分析方法

例によって土器表面を研磨してのち、タングステンカーバイド製乳鉢の中で100メッシュ以下に粉砕された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして約10トンの圧力を加えてプレスし、内径2cm、厚さ3~5mmの錠剤試料を作成した。錠剤試料はそのまま、蛍光X線分析に供された。

蛍光X線分析は理学電機製の波長分散型、3270型機が使用された。本装置は完全自動分析ができる。

標準試料には岩石標準試料JG-1が使用された。分析値はJG-1による標準化値で表示された。

3) 分析結果

分析データは表4にまとめられている。はじめに、須恵器の分析結果から説明する。

10点の須恵器のクラスター分析の結果が図2に表示されている。数字はコンピュータへの入力番号であるとともに、試料番号でもある。縦軸は最短距離法で計算した類似度であるが、1メモ

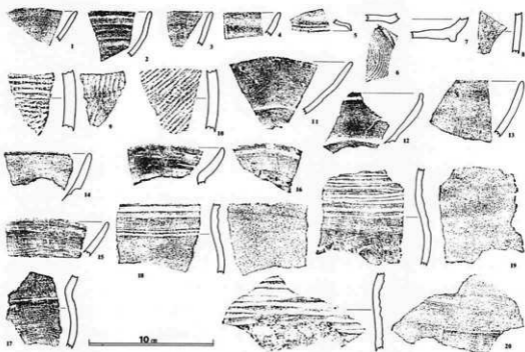


図1 大川遺跡出土の胎土分析に供した土器、1~10(遺構外出土須恵器)・11~15(SH-9土師器坏)・16~20(SH-9出土壺)

りが0.5とかなり大きい。したがって、類似度の間隔がせまいようにみえても、すぐに類似しているとは速断できない。ただ、確実に言えることはNo.4の須恵器の胎土は他の9点の須恵器胎土とは全く異なるということである。

次に、図3にはRb-Sr分布図を示してある。この図にはまた、五所川原窯群の須恵器、85点をほとんど包含するようにして描いた五所川原領域を示してある。この領域は定性的なものであり、定量的に帰属を決めるためには判別分析を行わなければならない。図3をみる限り、No.1・2・8・9・10の5点が五所川原群に属する可能性をもつ。逆に、五所川原領域を大きくずれるNo.3・4・5・6・7の5点は五所川原群に属する可能性をほとんどたない。このうち、No.4は図2のクラスター分析の結果からもわかるように、他の須恵器からは大きくずれる。Rb-Sr分布図におけるこの分布位置は日本海沿岸地域では福井県の越南窯群、また、太平洋側では名古屋の猿投窯群の須恵器が分布する領域である。しかも、両群ともFe量が少なく、この点でもNo.4は両群に対応する。このような胎土をもつ須恵器が検出されたのは今回がはじめてである。

次に、いくつかの母集団への帰属を調べた結果について説明する。判別分析の一例として、五所川原窯群と小泊窯群の相互識別を示す図4の説明をする。両軸にとったD₁₁、D₂₂はそれぞれ、五所川原群・小泊群の重心からのマハラノビスの汎距離である。マハラノビスの汎距離とは母集

表1 大川遺跡出土土器の分析値

試料番号	種別	分析番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	須恵器環	1	0.518	0.117	3.70	0.574	0.343	0.171
2	"	2	0.314	0.292	4.07	0.419	0.354	0.218
3	"	3	0.488	0.250	1.75	0.604	0.599	0.425
4	"	4	0.618	0.055	0.594	0.794	0.211	0.034
5	" 蓋	5	0.508	0.330	2.02	0.541	0.764	0.487
6	" 坏	6	0.433	0.591	2.56	0.597	0.896	0.335
7	" 甕	7	0.541	0.177	1.88	0.730	0.551	0.323
8	"	8	0.435	0.213	3.40	0.553	0.389	0.234
9	"	9	0.326	0.166	2.25	0.355	0.424	0.137
10	"	10	0.415	0.339	2.87	0.486	0.540	0.324
11	土師器環	1	0.524	0.619	2.55	0.452	0.946	0.387
12	"	2	0.320	0.325	1.55	0.443	0.723	0.264
13	"	3	0.248	0.360	2.58	0.323	0.837	0.199
14	"	4	0.323	0.815	3.02	0.306	1.03	0.295
15	"	5	0.551	0.206	2.21	0.452	0.713	0.417
16	"	6	0.272	0.349	2.04	0.479	0.903	0.213
17	" 甕	7	0.346	0.468	1.76	0.461	0.814	0.296
18	"	8	0.288	0.753	3.54	0.315	0.656	0.296
19	"	9	0.300	0.522	2.77	0.397	0.877	0.270
20	"	10	0.327	0.622	2.15	0.474	0.943	0.193
21	粘土A	11	0.223	0.614	5.49	0.205	0.476	0.189
22	" B	12	0.244	0.056	5.98	0.333	0.156	0.032
23	" C	13	0.310	0.219	3.61	0.331	0.372	0.155
24	" D	14	0.233	0.692	3.84	0.216	0.587	0.237

表2 各集団群からのマハラノビスの汎距離の二乗値

	五所川原群	小泊群	水沢群	日の出群	山海群	湖西群	能美群	群林群	推定産地
No. 1	35	16	33	280	7.5	3.5	9.2	9	湖西、山海、能美
2	3.4	24	74	35	31	21	26	69	五所川原
3	30	6.2	68	130	27	15	21	8.7	小泊、押水高松
4	160	46	240	750	55	40	18	15	不明
5	45	13	260	110	65	53	70	9.7	押水高松
6	82	40	310	87	77	80	140	110	不明
7	46	23	100	270	41	20	12	8.4	押水高松
8	13	10	29	140	12	5	2.5	22	能美、湖西、小泊→不明
9	47	10	15	22	10	4.8	20	37	小泊、山海、湖西
10	6	7.7	18	48	10	0.5	21	37	五所川原、小泊、湖西

Ca、K、Rb、Sr、因子を使用して計算した。五所川原群、小泊群についてのみ、Ca、Fe、Rb、Sr因子を使用した。

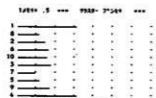


図2 須恵器のクラスター分析
(K・Ca・Fe・Rb・Sr・Na四因子使用)

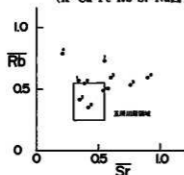


図3 須恵器のRb-Sr分布図

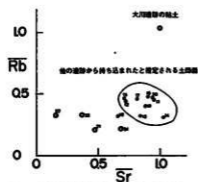


図6 土師器と粘土のRb-Sr分布図

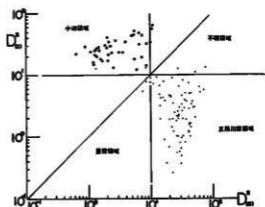


図4 五所川原群と小泊群の相互識別 (Ca・Fe・Rb・Sr四因子使用)

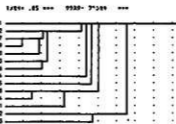


図5 土師器のクラスター分析
(K・Ca・Rb・Sr・Na四因子の使用)

団の重心から、その母集団のサンプルの標準偏差を尺度として、その何倍分、離れているかを示す統計学上の距離である。勿論、この値が大きいほど、その母集団の重心からの距離は遠く離れてしまい、その母集団に帰属する可能性は少なくなる。図4をみると、五所川原群のサンプルはすべて、五所川原群から近く $D_{11}^2 \leq 10$ の領域にほとんどのサンプルが分布していることがわかる。同様に、小泊群のサンプルも小泊群の重心から近く、ほとんどのサンプルが $D_{12}^2 \leq 10$ 領域に分布していることがわかる。このように、両母集団のサンプルはそれぞれ、自群の重心から十分近くに分布することがわかった。

次に、相手母集団の重心からの距離をみてみよう。五所川原群のほとんどのサンプルは $D_{12}^2 > 10$ の領域に、また、小泊群のサンプルのほとんども $D_{11}^2 > 10$ の領域に分布することがわかる。つ

まり、両母集団のサンプルは互いに、相手母集団の重心から十分遠くに分布することを示している。

この結果、 $D_{11}^2 \leq 10$ 、 $D_{22}^2 > 10$ を五所川原領域、 $D_{22}^2 \leq 10$ 、 $D_{11}^2 > 10$ を小泊領域と呼ぶことにしよう。そうすると、五所川原領域に分布する小泊群のサンプルは1点もなく、小泊群のサンプルで五所川原群のものと誤判別されるものは全くないことを示している。しかし、五所川原群のサンプルのうち、2点は小泊領域に分布しており、五所川原群のサンプルの中に、小泊群と誤判別されるものがほんのわずかではあるがあることを示している。なお、 $D_{11}^2 \leq 10$ 、 $D_{22}^2 \leq 10$ の領域は両群の化学特性が類似したときに両群のサンプルが混在する領域であり、図4では重複領域としてある。また、両群の重心から遠く離れるサンプルは $D_{11}^2 > 10$ 、 $D_{22}^2 > 10$ の領域に分布するので、この領域を不明領域としてある。また、判別分析の結果、 $D^2 = 10$ が両群の境界であることを示した。

この結果、五所川原群と小泊群はほぼ、相互識別できることがわかった。このようにして、両母集団の相互識別の可否が決められる。

さて、10点の須恵器の産地を探るため、いくつかの母集団からのマハラノビスの汎距離の二乗値を計算してみた。その結果を表2に示してある。また、各母集団の境界を $D^2 = 1$ とし、 $D^2 \leq 10$ の条件を満足する母集団を一応、産地の候補として上げてみた。この結果、五所川原群産と推定できるのはNa2のみであることがわかる。Na2は図3のRb-Sr分布図でも明らかに五所川原領域に分布している。Na10は五所川原産と小泊産の可能性をもつが、図4より、このような場合、五所川原群に帰属する可能性が大きいことを示している。Na10も五所川原群産の可能性もある。

Na9は図3では五所川原領域に分布するが、数値計算の結果では対応しない。Fe量が少ない点で五所川原群に対応しないのである。静岡県の湖西群産の可能性をもつが、Fe量が少なく、Rb-Sr分布図でこの領域に対応するものは秋田県内の窯があり、今回、計算の対象としてとり上げなかったので、表1どおり、湖西群産と推定することをひかえたい。秋田県産の可能性もある。

Na5・7は能登半島の押水・高松窯群の製品である可能性をもつ。Na3も押水・高松群産の可能性が大きい。Na8は3つの産地を上げてあるが、これら以外に産地を求めた方がよく、ここでは、Na6とともに不明としておく。

このように、大川遺跡出土須恵器の胎土は単純ではなく、いくつもの産地から持ち込まれたものと推定される。このような須恵器供給のあり方は普通にみられるものではない。果して、北海道内の各地の遺跡から出土する須恵器の供給のあり方はこのように異様であるのだろうか。

最後に、土師器の分析結果を説明する。図5にクラスター分析の結果を示す。下に並べた数字はコンピューター入力番号であり、試料番号ではない。一本の枝に結び付けられているものを抜き出すと、Na12・13（試料番号22・23）、Na8・14・11（試料番号18・24・21）である。試料番

号22・23は大川遺跡で採取した粘土であり、類似して当然である。これらの粘土とNo18が類似しているということは、試料番号18は大川遺跡で作られた土器である可能性をもつ。

No1・2・7・9・10・3・6（試料番号11・12・17・19・20・13・16）は類似した胎土をもっており、同じところで作られた可能性のある土師器である。ただし、大川遺跡の粘土とは対応しない。この点で他の遺跡から大川遺跡へもち込まれた土師器と考えられよう。試料番号14・15も同様である。

念のため、これらの土師器のRb-Sr分布図を図6に示しておく。クラスター分析の結果がよくわかると思う。

付 編 7

大川遺跡出土の首飾り (Okawa1990, GP-102) の材質について

小笠原 正明 (北海道大学)

1 はじめに

遺跡出土の首飾りには、ふつうはヒスイや頁岩などの石が、時代が下るとガラスや金属などが原材料として使われている。しかし、本試料は目のあらい黒褐色の粒子からできていて、一見練りものように見えた。この外見から、原材料としては天然アルファルトか石炭が考えられる。そこでまず元素分析によって有機物であるかどうかを確かめ、ついで有機溶媒によってその成分を分割した。得られた結果を北海道南茅部町と秋田県昭和町で出土した天然アスファルトの結果と比較して検討した (口絵写真2)。

2 元素分析

飾り玉の破片の一部を採取して、北海道大学機器分析センターに依頼して炭素 (C)・水素 (H)・窒素 (N)・イオウ (S) の4元素について元素分析を行った。得られた結果を南茅部町 (豊崎N遺跡) 出土と昭和町 (羽白目遺跡) 出土の天然アスファルトの結果とともに表1に示した。CとHで全体の約68パーセントを占めていることから、この飾り玉は岩石や土などの無機物ではなく主として有機物からできていることが明らかとなった。

3 有機溶媒への溶解

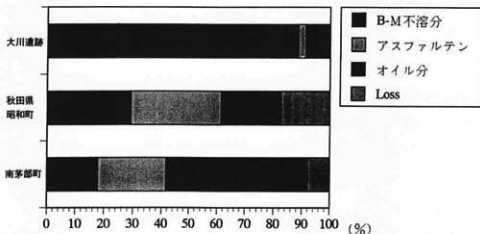
試料0.681gを採取してベンゼン-メタノール (1:1) 混合溶媒で抽出したところ、約90パーセントが不溶分として残った。溶液をろ過してエバポレーターで蒸発乾固したあとn-ヘキサンによる抽出を試みたがほとんど溶解しなかった。そこで、n-ヘキサンのかわりにクロロフォルムを

表1 出土試料の元素組成 (重量%)

元素	本試料	南茅部出土	昭和出土
C	61.3	81.7	73.6
H	6.5	9.2	7.6
N	0.9	1.0	1.5
S	0.2	0.8	0.8
残り	31.1	7.3	16.5

図1 溶媒による出土試料の分割

大川遺跡の本試料でアスファルテン、オイル分とあるのはB-M可溶分中でそれぞれクロロフォルムに溶ける部分と溶けない部分を示している。他の試料ではそれぞれn-ヘキサンに溶ける部分と溶けない部分を示している。



用いたところ、試料全体の約9パーセントが溶解した。

アスファルトや石炭液化油などの重質油の場合、ベンゼン-メタノール (B-M) 混合溶媒に溶ける成分のうちn-ヘキサンに溶けない部分は高分子化合物の混合物で、一括してアスファルテンと呼ばれている。また、n-ヘキサンに溶ける部分は低分子化合物の混合物でオイル分と呼ばれている (文献1参照)。従って、以上のような操作によって試料を①B-M不溶分、②アスファルテン、③オイル分の3成分に分割できる。図1にこのようにして分割した結果を南茅部町と昭和町出土の天然アスファルトの結果とともに示した。なお、大川遺跡の試料で、アスファルテンおよびオイル分と表現しているものは、B-M可溶分のうちクロロフォルムに溶ける部分と溶けない部分を示している。クロロフォルムに溶けるか溶けないかは高分子の架橋 (主鎖のあいだの橋かけ構造の形成) の程度によってきまるもので、正確にアスファルテンとオイル分を区分したのではない。図1の結果は、本試料のB-M混合溶媒に溶ける部分は、平均的な分子構造において橋かけの程度が著しくないということを示している。

4 考察

元素分析の結果で目につくのはC・H・N・S以外の元素の割合が高いことで、全体の30パーセント以上もある。本試料の主成分は有機物であるが、それ以外に土などの無機物が多く含まれていることを示している。炭素原子数に対する水素原子数の比H/Cは1.26で、昭和町出土試料の1.24、南茅部町出土試料の1.34に近い。H/Cは重質油の芳香属性を示すものでこの値が高い

ほどパラフィン化合物の割合が高い。1つの基準としてこの値が1以上であれば石油系、1以下であれば石炭系といわれている。(文献2・3参照)。

しかし、図1の溶媒抽出による成分分析の結果は、本試料が南茅渚町出土や昭和町出土の天然アスファルトとはまったく別の材料から出来ていることを示している。この試料にはアスファレンやオイル分はごくわずかしが含まれておらず、大部分はB-M不溶分である。原油が蒸発乾燥してできた天然アスファルトが、ベンゼンなどの強い有機溶媒で溶解しないということはありません。

以上の分析結果から、本試料は草炭あるいは泥炭からできていると推定される。草炭は植物遺体がバクテリアによって生化学的に分解され、水・炭酸ガス・メタンガスなどが遊離して次第に炭素分が濃縮されてきたものである。石炭の一種ではあるが、いわゆる石炭とはことなり軟弱な泥状の物質として得られる。この首飾りは、草炭または泥炭を成形加工して作られたものであろう。

謝辞 本報告を作成する際にご意見をいただいた北海道大学工学部の横山晋先生に感謝します。また、分析実験に協力していただいた北海道教育大学の前川靖明さんと川原祐二郎さんに感謝します。

参考文献

- 1 小笠原正明・阿部千春・前川靖明・横山晋「豊崎N遺跡出土の天然アスファルト塊」考古学ジャーナル 373号 25頁(1994)
- 2 小口勝也・若林孟茂・中山悦郎「各種原油の常圧残油および減圧残油の性状」石油学会誌 24巻 4号 260頁(1981)
- 3 C. E. Snape, K. D. Bartle「Definition of fossil fuel-derived asphaltene in terms of average structural properties」, Fuel, 63巻, 883 (1984)

大川遺跡第50号墓墳出土の青銅製鈴の分析について

小笠原 正明 (北海道大学)

1. 緒 言

大川遺跡から出土した青銅製の鈴とみられる金属器の由来が広く注目されている。青銅製品には主成分である銅のほかに錫・鉛などが含まれているのがふつうで、これらの成分分析を行うことにより産地などを推定した例がある。正確な測定のためには試料から断片を採取しなければならぬが、出土品の性格上、試料の破損は許されない。そこで試料に手を加えず、そのままの状態で蛍光X線スペクトルを測定した。

2. 試料の外見

測定した試料は2個の出土品のうちの1個である(図1)。他とくらべて全体に錆が少なく、一部に生地と思われる灰色あるいは褐色の表面が露出している。錆の浮いた部分には明らかに泥が付着していたが、この灰色あるいは褐色の部分には見掛け上泥がついていなかった。この部分は他の部分とくらべて滑らかであったが、肉眼でもわかる微細な凹凸が観察された。

3. エネルギー分散型蛍光X線の測定

スペクトルの測定には、北海道大学理学部に設置されているフィリップス社製のエネルギー分散型蛍光X線装置(EDAX 9100型)を用いた。前述の生地と思われる表面を上にして、試料の下の部分をアルミ箔でぐるんで、円盤状のホルダーに両面テープで固定した。EDAX装置中にセットして 10^{-4} Torr程度の真空中に引いた。この真空中に到達するまでに、試料中に包接されていたと思われる気体の断続的な放出がみられた。試料に径 $10\mu\text{m}$ 以下の電子ビームを照射し、発生した蛍光X線のスペクトルを測定した。22~40秒間のビーム照射で蓄積されたデータより、最大エネルギー18KeVまでのスペクトルを得た。

4. スペクトルの解析

図2に得られたスペクトルの例を示した。とくに目につくのは1.7KeV付近と8KeV付近のバンドで、それぞれアルミニウムおよび銅によるものと同定された。そのほかに、ケイ素・リン・塩

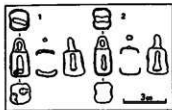


図1 第50号墓出土の青銅製鈴

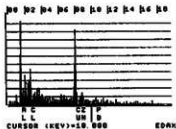


図2 試料表面から得られたエネルギー分散型蛍光X線スペクトル。図の上の数字はKeV単位で示したエネルギー、図の下の赤色のラインはコンピュータ画面上のカーソルの位置(その下にカーソルの位置のエネルギーが示してある)

表1 蛍光X線スペクトルから求めた試料表面の成分

成分名	組成率%	原子比%
Al	9.96	0.23
Si	0.55	0.01
P	1.59	0.04
Cl	1.78	0.04
Se	2.79	0.07
Cu	40.57	1
Zn	0.27	0.01
Pb	23.77	0.59
O	18.86	—

備考: 銅系(O)の値は、それぞれ1の金属の原子量を定めて計算により求めたもの。

素・錫・亜鉛・鉛などのバンドが含まれていると推定される。表1にそれぞれの酸化物を仮定し、さらにそれらの酸化物のみからなると仮定して計算した各元素の比を重量パーセントで示した。また、銅の含有量を1とした場合の各金属元素の重量比もこの表に示した。

生地が露出していると思われる表面の範囲内で、場所を変えてスペクトルを測定した。アルミニウムと銅のバンドはどこでもはっきりと観測されたが、スペクトルの形は測定場所によって異なっていた。

5. 考 察

この試料には多量の銅が含まれていることが確かめられた。しかし測定した場所によりスペクトルが変化することから、観測された蛍光X線には生地に由来するものに加えて、表面に付着した土やほこりに由来するものが含まれていると考えざるを得ない。表面をおおっている微細な孔の中に土が詰まっていて、分析ビームの一部あるいは大部分が、この土に吸収されている可能性がある。出土した付近の土壌については測定をしていないが、ふつうの粘土・黒ボクなどであれば、主成分はケイ素・アルミニウムなどであり、そのほかに鉄が含まれている程度であろう。この測定で見いだされた銅・鉛・錫の大部分は、試料の地金から由来したものと考えてよい。

試料表面がでこぼこで均一性に欠けることから、定量的な分析はむずかしい。表1に示した成分金属および酸素の重量パーセントには目安以上の意味はない。しかし、主成分の銅に対する鉛と鉛の比はある程度の意味をもつ。この比で目につくのは、鉛の量が多いことである。青銅はふつう銅に対して3～12パーセントの錫を含み、用途によってさらに2～5パーセントの亜鉛を含む。しかし、古墳時代以降の国産の仿製鏡には3～10パーセント程度の鉛が含まれていることが知られている。これは、鋳造の際に湯流れをよくするために加えられたといわれている(馬淵1985年)。この試料の表面分析の結果によると、銅よりも鉛の量のはるかに多い。金属表面の腐食や変質の際に鉛が選択的に析出したこともありえるので、この結果からただちに鉛の量を推定できないが、鉛はこれからさらにくわしく調べる際の鍵となる元素であろう。

多量に見いだされたアルミニウムがどこから来たかは不明である。火山灰などからできた黒ボクや粘土には大量のアルミニウムが含まれているから、土に由来するものと考えてもよいが、それにしては同じく土中に多量に存在するケイ素の量が少なすぎる。銅とアルミニウムは優れた合金を作り、現在さまざまな用途に使われているが、古代においてそのような合金が存在したとは考えにくい。試料を保持したアルミ箔からの乱反射の可能性も含めて、さらに検討が必要であろう。

大川遺跡出土の硬玉製勾玉の産地分析

轟科 哲男・東村 武信（京都大学原子炉実験所）

はじめに

遺跡から出土する大珠・勾玉・管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということ調査するのではなくて、何ヶ所かあるヒスイの原産地のうち、どこの原産地の原石を使用しているかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国・雲南・ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法¹⁾および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法^{2)・3)}が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析を系統的に行った研究では蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し産地分析をより正確に行った例⁴⁾が報告されている。石鏃など石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1) 石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。(2) 玉類は古代人が生きるために必ずしも必要なものではない。勾玉・管玉は権力の象徴、お祭・御守り・占いの道具・アクセサリとして、精神的な面に重要な作用を与えられられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるとヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を表しているかもしれない、お祭・御守り・占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原材産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。今回分析を行った玉は大川遺跡の縄文時代の墓塚から出土したGP-105の勾玉1個および縄文時代晩期の墓塚から出土した9個の勾玉で、これら合計10個の勾玉の分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイ・碧玉製勾玉・大珠・玉などは、国宝・重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発掘しない。石器の原材産地分析で成功している⁵⁾非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠・勾玉・管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非

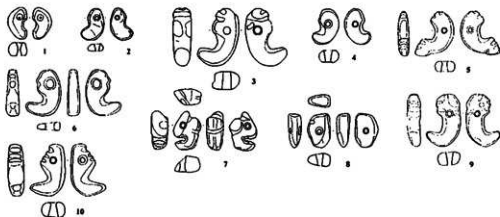


図1 大川遺跡墓出土のヒスイ玉

試料番号	遺構名	遺物番号	時期	備考
1	GP-105	-	縄文前期前葉 (恵山式)	埋土出土のため伴出不明
2	GP-229	1	縄文中期中葉	ホオジロザメの上顎とみられる歯100点伴出
3	GP-355	133	縄文晩期前半	配石・火葬墓
4	GP-355	141	縄文晩期前半	配石・火葬墓
5	GP-421	5	縄文晩期前半 (上ノ国式)	配石
6	GP-432	2	縄文晩期前半	配石・火葬墓
7	GP-433	14	縄文晩期前半	配石・火葬墓
8	GP-449	-	縄文晩期前半	配石・火葬墓、埋土出土
9	GP-462	11	縄文晩期前半	配石・火葬墓
10	GP-493	3	縄文晩期前半	配石・火葬墓

大川遺跡墓出土ヒスイ玉分析試料一覽



図2 ヒスイとヒスイ類似岩の原産地

破壊で産地分析を行った。ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するか試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。

ヒスイの原産地

分析したヒスイ原石は、日本国内産では(1)新潟県糸魚川市と、それに隣接する同県西頸城郡青海町から産出する糸魚川産、(2)軟玉ヒスイと言われる北海道沙流郡日高町千栄の「日高産」、(3)鳥取県八頭郡若桜町角谷の若桜産、(4)岡山県阿哲郡大佐町の大佐産、(5)長崎県長崎市三重町の長崎産であり、さらに(6)西黒田ヒスイと呼ばれている静岡県引佐郡引佐産の原石、(7)兵庫県養父郡大屋町からの原石、(8)北海道旭川市神居町の神居コタン産、(9)岐阜県大野郡丹生川村の飛騨産原石、また、肉眼的にヒスイに類似した原石で玉類等の原材になったのではないかと考えられる。(10)長崎県西彼杵郡大瀬戸町雪浦からの原石である。国内産のヒスイ原産地は、これではぼつくとされていると思われる。これら原石の原産地を図2に示す。これに加えて外国産として、ミャンマー産の硬玉と台湾産軟玉および韓国春川産軟玉などのヒスイの分析も行われている。

ヒスイ試料の蛍光X線分析

ヒスイの主成分元素はナトリウム(Na)・アルミニウム(Al)・珪素(Si)などの軽元素¹⁾で、次いで比較的含有量の多いカルシウム(Ca)・鉄(Fe)・ストロンチウム(Sr)である。また、ヒスイに微量含有されている、カリウム(K)・チタニウム(Ti)・クロム(Cr)・マンガン(Mn)・ルビジウム(Rb)・イットリウム(Y)・ジルコニウム(Zr)・ニオブ(Nb)・バリウム(Ba)・ランタニウム(La)・セリウム(Ce)の各元素を分析した。主成分の珪素など軽元素の分析を行わないときには、励起線源のX線が試料によって散乱されたピークを観測し、そのピーク大きさが主に試料の分析面積に比例することに注目し、そのピークを含有元素と同じく産地分析の指標として利用できる。ナトリウム元素はヒスイ岩を構成するヒスイ輝石に含有される重要な元素で、出土した遺物が硬玉か否かを判定するには直接ヒスイ輝石を観測すればよい。しかし、ヒスイ輝石を非破壊で検出できる方法が確立されるまでは、蛍光X線分析でNa元素を分析し、間接的にヒスイ輝石の存在を推測する方法にたよる他はないのではなからうか。各原産地の原石のなかで、確実にNa元素の含有が確認されるヒスイ産地は糸魚川・大屋・若桜・大佐・神居コタン・長崎の各原産地の原石でこれらは硬玉に属すると思われる。Na元素の含有量が分析誤差範囲の産地は日高・引佐・飛騨の各産地の原石である。糸魚川産原石のうち緑色系の硬玉に、肉眼的に最も似た原石を産出する産地は、他の硬玉産地よりも後述した日高・飛騨・引佐の原石に見られる。各原産地の原石の他の特徴を以下に記述する。若桜産のヒスイ原石はSrのピークがFeのピークに比べて相当大きく、またZrの隣に非常に小さなNbのピークが見られ、

Baのピークも大きく、糸魚川産では見られないLa・Ceのピークが観測されている。このCeのピークは大佐産と長崎産ヒスイ原石のスペクトルにも見られ、これらCeを含有する原石の産地は、糸魚川の産地と区別するときには有効な判定基準になる。長崎産ヒスイは、Tiの含有量が多く、Yのピークが見られるのが特徴的である。日高産・引佐産・飛騨産ヒスイ原石は、Caピークに比べてTiとかK、またはFeピークに比べてSrなどのピークが小さいのが特徴で糸魚川産のものとは区別するときの判断基準になる。春川軟玉原石は、優白色の工芸加工性に優れた原石で、軟玉であるが、古代では勾玉などの原材料となった可能性も考えられることから分析を行った。この原石には、Sr・Zrのピークが全く見られないため、糸魚川産などのSi・Zrを含有する原石と容易に区別できる。また、長崎県雷浦のヒスイ類似岩をヒスイの代替品として勾玉・大珠などの原材料に使用している可能性が考えられ、分析を行った。この岩石は比重が2.91と小さく、比重でもって他の産地のものと区別できる。また砒素(As)のピークが見られる固体が多いのも特徴である。これら各原産地の原石は同じ産地の原石であっても、原石ごとに元素の含有量には異同がある。したがって、一つの原産地について多数の原石を分析し、各元素の含有量の変動の範囲を求めて、その産地の原石の特徴としなければならない。

糸魚川産のヒスイは、白色系が多いが、緑色系の半透明の良質のもの、青色系・コバルト系、およびこれらの色が白地に縞となって入っているものなど様々である。分析した糸魚川産原石の比重を調べると、硬玉の3.2~3.4の範囲のもの、3.2に達しない軟玉に分類される原石もある。若松産、大佐産の分析した原石には、半透明の緑色のものはないが、全体が淡青緑がかった乳白色のような原石、また大屋産は乳白色が多い。このうち大佐産・大屋産の原石では比重3.20に達したものはなく、これらの原石は比重からは軟玉に分類される。しかし、ヒスイ輝石の含有量が少ない硬玉とも考えられる。長崎産のヒスイ原石は3個しか分析できなかったが良質である。このうち1個は濃い緑色で、他の2個は淡い緑色で、少しガラス質である。日高産ヒスイの原石は肉眼観察では比較的糸魚川産のヒスイに似ている。ミャンマー産のヒスイ原石は、質・種類とも糸魚川産のヒスイ原石と同じものが見られ、肉眼で両産地の原石を区別することは不可能と考えられる。分析した台湾産のヒスイは軟玉に属するもので、暗緑色のガラス質の原石である。これら各原産地の原石の分析結果から各産地を区別する判断基準を引き出し産地分析の指標とする。

ヒスイ原産地の判別基準

原石産地の判定を行うときの判断基準を原石の分析データから引き出すが、分析個数が少ないため、必ずしもその原産地の特徴を十分に反映したと言えない産地もある。表1に各原産地ごとの原石の比重と元素比量をまとめた。元素比量の数値は、その原産地の分析した原石の中での最少値と最大値の範囲を示し、判定基準(I)とした。ヒスイで比重が3.19未満の軽い原石は、硬玉ヒスイではない可能性があるが、糸魚川産の原石で比重3.19未満のものも分析を行った。大佐産のヒスイは比重が3.17未満であった。したがって、遺物の比重が3.3以上を示す場合は判定基準(I)により大佐産のヒスイでないと言える。日高産・引佐産の両ヒスイではSr/Feの比の値が小

表1 ヒスイ製造物の原石産地の判定基準(1)

産地地名	分析 項目	測定値の範囲			
		Si/Ca	Fe/Ca	Zr/Fe	Ca/Si
糸魚川産	41	3.00~3.25	0.01~0.17	0.01~0.28	0.15~0.30
石川県産	12	3.12~3.29	0.01~0.01	0.03~0.20	0.45~0.47
大佐産	29	2.95~3.17	0.01~0.01	0.09~0.11	0.09~0.12
長崎産	3	2.95~3.29	0.01~0.14	0.17~0.23	0.29~0.40
大屋産	22	2.90~3.29	0.05~0.01	0.05~0.27	0.09~0.09
若桜産	8	3.15~3.26	0.04~0.04	0.03~0.23	0.09~0.10
大屋産	18	2.95~3.19	0.03~0.01	0.04~0.18	0.09~0.10
大佐産	9	2.95~3.19	0.02~0.01	0.04~0.22	0.12~0.15
大屋産	24	2.95~3.15	0.01~0.04	0.09~0.01	0.02~0.10
ミャンマー産	26	3.15~3.26	0.02~0.14	0.01~0.25	0.01~0.21
台湾産	1	3.00	0.003	ND	ND

ND:検出限界以下の値

表2 ヒスイ製造物の原石産地の判定基準(2)

産地地名	測定値の範囲による分析値							
	Cr	Mn	Rb	Y	Nb	Ba	La	Ce
糸魚川産	20%	8%	20%	ND	12%	20%	ND	ND
石川県産	ND	ND	ND	ND	100%	100%	67%	67%
大佐産	ND	ND	40%	ND	20%	100%	67%	67%
長崎産	ND	ND	100%	100%	100%	100%	100%	100%
大屋産	1r	1r	ND	ND	1r	ND	ND	ND
若桜産	100%	75%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大屋産	1r	1r	ND	ND	ND	ND	ND	ND
大佐産	ND	100%	22%	100%	ND	22%	ND	ND
大屋産	100%	100%	ND	ND	ND	ND	ND	ND
ミャンマー産	13%	4%	ND	ND	ND	30%	ND	ND
台湾産	1r	1r	ND	ND	ND	ND	ND	ND

ND:検出限界以下の値 1r:検出確認

表3 大川遺跡出土の勾玉の元素分析値の比値と比量

分析 番号	産地	元素分析値の比値				元素分析値の比量			
		Si/Ca	Fe/Ca	Zr/Fe	Ca/Si	Si	Fe	Zr	Ca
20074	SP 104	0.013	0.010	0.015	0.290	0.170	0.094	0.290	0.170
20075	SP 109	0.013	0.011	0.015	0.290	0.170	0.094	0.290	0.170
20076	SP 105	0.013	0.012	0.015	0.290	0.170	0.094	0.290	0.170
20077	SP 103	0.013	0.010	0.015	0.290	0.170	0.094	0.290	0.170
20078	SP 102	0.013	0.010	0.015	0.290	0.170	0.094	0.290	0.170
20079	SP 102	0.013	0.010	0.015	0.290	0.170	0.094	0.290	0.170
20080	SP 102	0.013	0.010	0.015	0.290	0.170	0.094	0.290	0.170
20081	SP 109	0.013	0.010	0.015	0.290	0.170	0.094	0.290	0.170
20082	SP 102	0.013	0.010	0.015	0.290	0.170	0.094	0.290	0.170
20083	SP 102	0.013	0.010	0.015	0.290	0.170	0.094	0.290	0.170

J.C. 1¹ 0.132 0.071 0.246 0.753 0.394 0.606 0.394

さくて、糸魚川産と区別する判定基準(1)になる。表2判定基準(2)にはCr・Mn・Rb・Y・Nb・Ba・La・Ceの各元素の蛍光X線ピークが観測できた個体数を%で示した表である。例えば遺物を分析してBaのピークが観測されなかったとき、その遺物は、若桜・大佐・長崎産のヒスイでないといえる。図3はヒスイ原石のSr/Feの比の値とSr/Zrの比の値の分布を各原産地ごとにまとめて分布範囲を示したものである。●は糸魚川産のヒスイで、分布の範囲を実線で囲み、この枠内に遺物の測定点が入れば糸魚川産の原石である可能性が高いと判断する。□はミャンマー産のヒスイの分布で、その範囲を短い破線で囲む。糸魚川の実線の範囲とミャンマーの破線の範囲の大部分は重なり両者は区別できないが、ミャンマーと糸魚川が区別される部分がSr/Feの値(横軸)2.5以上の範囲で見られる。この範囲の中に、遺物の測定点が入ればミャンマー産と考えるより、糸魚川産である可能性の方が高いと考えられる。▲は大佐産の、△は若桜産の、▽は大屋産のヒスイの分布を示している。糸魚川と大佐・若桜・大屋のヒスイが重なる部分に遺物の測定点が入った場合、これら複数の原産地を考えなければならない。しかし、この遺物にBaの蛍光X線スペクトルのピークがみられなかった場合、表2の判定基準(2)に従えば糸魚川産または大屋産のヒスイであると判定でき、その遺物の比重が3.2以上あれば大屋産でなくて、糸魚川産と推定される。■は長崎産ヒスイの分布で、独立した分布の範囲を持っていて他の産地のヒスイと容易に区別できる。台湾産の軟玉はグラフの左下に外れる。★印の日高産および*印の引佐産ヒスイの分布の一部分が、糸魚川産と重なり区別されない範囲がみられる。しかし、Ca/Si比とSr/Feを指標とすることにより(図4)、糸魚川ヒスイは日高産および引佐産の両ヒスイと区別することができる。Na/Si比とMg/Si比を各原産地の原石について分布を示すことによ

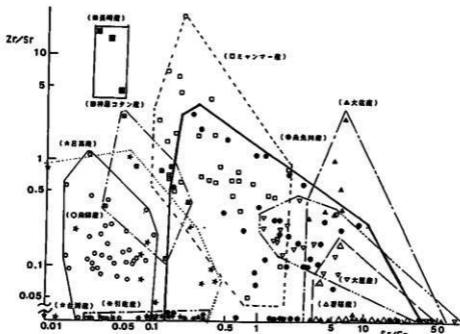


図3 ヒスイ原石の元素比値Zr/Sr対Sr/Feの分布および分布範囲

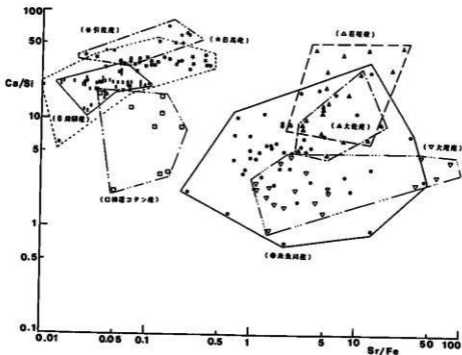


図4 ヒスイ原石の元素比値Ca/Si対Sr/Feの分布および分布範囲

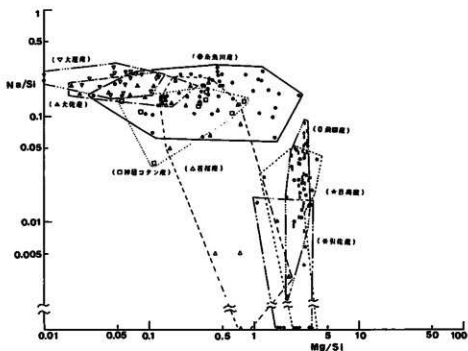


図5 ヒスイ原石の元素比値Na/Si対Mg/Siの分布および分布範囲

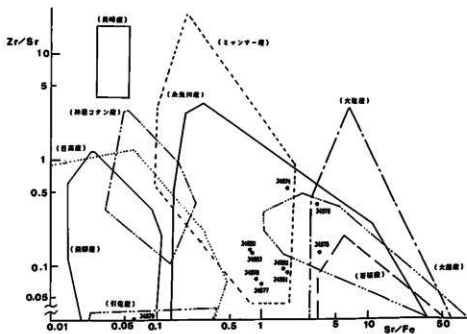


図6 大川遺跡出土の硬玉製勾玉のZr/Sr対Sr/Feの分布

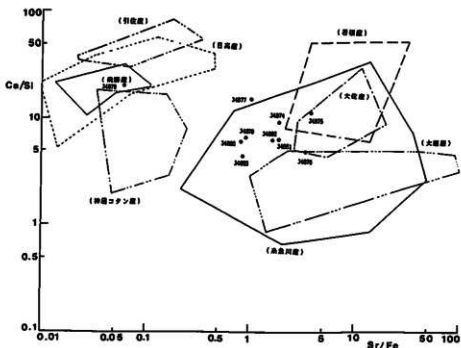


図7 大川遺跡出土の硬玉製勾玉のCa/Si対Sr/Feの分布

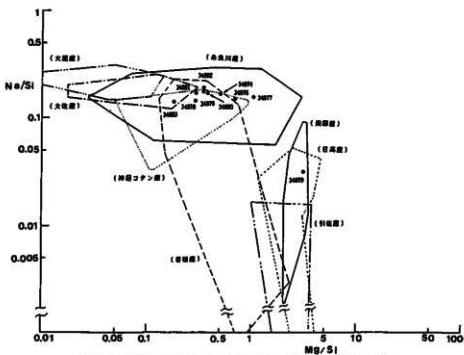


図8 大川遺跡出土の硬玉製勾玉のNa/Si対Mg/Siの分布

り(図5)、遺物がどこの原産地の分布内に帰属するかにより、硬玉か軟玉かの判別の手段の一つになると考えられる。

ヒスイ製勾玉の分析結果と考察

分析した勾玉の中で分析番号34879の勾玉は比重が2.985(アルキメデス法)で、他の勾玉では3.2以上を示し、蛍光X線分析で主成分組成のNa元素が観測されたヒスイ製勾玉は、比重も硬玉の範囲に入り硬玉製勾玉と考察した。これら勾玉の蛍光X線スペクトルと比重を図9~18および表3に示した。これら勾玉の原産地を明らかにするために、 $K/Ca \cdot Ti/Ca \cdot Sr/Fe \cdot Zr/Sr \cdot Ca/Si \cdot Na/Si \cdot Mg/Si$ などの各比値を求め表3に示し、また各原産地の原石の元素比量の分布範囲と比較し図6・7・8に示した。図6では糸魚川産の範囲のみに入る勾玉は34874・34877・34878・34880・34881・34883で、糸魚川・大佐・大屋産の重なる範囲に入る勾玉は34876・34875で、また、34879は日高・飛騨・引佐産の重なる分布範囲に入る。これら原石の分布範囲が重なる範囲に入る勾玉は複数の原産地を考慮しなければならない。図7では、糸魚川産は34874・34878・34880・34881・34883で、34877の分析点が糸魚川から外れるが、その差は

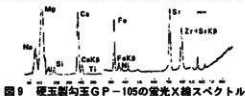


図9 硬玉製勾玉GP-105の蛍光X線スペクトル

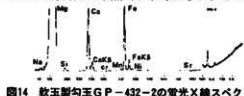


図14 軟玉製勾玉GP-432-2の蛍光X線スペクトル

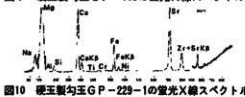


図10 硬玉製勾玉GP-229-1の蛍光X線スペクトル

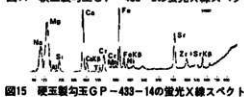


図15 硬玉製勾玉GP-433-14の蛍光X線スペクトル

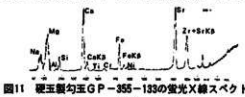


図11 硬玉製勾玉GP-355-133の蛍光X線スペクトル

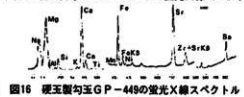


図16 硬玉製勾玉GP-449の蛍光X線スペクトル

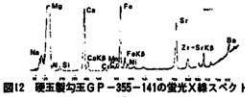


図12 硬玉製勾玉GP-355-141の蛍光X線スペクトル

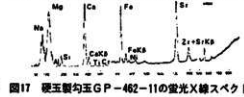


図17 硬玉製勾玉GP-462-11の蛍光X線スペクトル

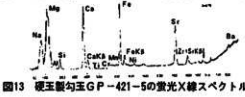


図13 硬玉製勾玉GP-421-5の蛍光X線スペクトル

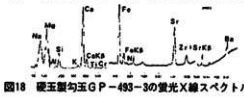


図18 硬玉製勾玉GP-493-3の蛍光X線スペクトル

僅かで糸魚川産でないとは言えない。34875は若桜に、34876は大屋の範囲に入り、それぞれは糸魚川・大佐の重なる範囲にも入る。また、34879は日高・飛騨の重なる範囲に入る。図8では、糸魚川のみは34877で、若桜にも重なる2重範囲に34882である。糸魚川・神居コタンの2重の範囲には34875で、若桜にも重なる3重の範囲に34874・34876・34878・34880・34881で、34883は大佐にも重なる4重の範囲に入る。日高・飛騨の2重の範囲に34879が入る。この他に比重と判定基準(2)の含有元素の有無などの判定を総合して、硬玉・軟玉製の勾玉の原産地を推測した。その結果を表4に示した。前述の判定では、34879の軟玉製勾玉が日高産および飛騨産か区別できないため、新たにニッケル(Ni)元素を両軟玉原石の弁別の指標として用いた。Niは相対的に日高産に少なく、飛騨産原石に多く含有されていて、34879勾玉には $Ni/Fe=0.030$ の少量の値を示す原石は飛騨産原石42個の中には見られなかった。したがって、この軟玉製勾玉の原材が飛騨産原石である可能性は非常に低いと思われる。一方、日高産原石の中には Ni/Fe の値が0.030以下の原石が14%の割合で見られるため、軟玉製勾玉(GP432-2)の原材を日高産原石でないと言えない。出土した硬玉製勾玉には糸魚川産硬玉原石が使用され、軟玉製勾玉(GP432-2)のヒスイは日高産原石が使用されているのではないかと推測される。日高産と推測された勾玉は、頭部に山形模様などの刻みが入るが、糸魚川産硬玉製勾玉にも見られることから、各産地から原石を得て同じ場所で同じ手法で勾玉が作られたと考察しても、また、糸魚川産硬玉製勾玉が多く使用されていることから、本道跡の縄文時代晩期は原産地地方との交易が活発であったと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。今回、日高産原石が使用された可能性が推測されたことで、古代人は日高産地に玉材が存在し、この原石で勾玉が制作できることを認識していたと推測できる。では、何故、距離的に遠い糸魚川産地の原石が多量に使用されたのかを推測すると、海岸に近い産地では沿岸航海術にすぐれ、多量に物資を運搬できる船による遠距離交易が活発で、日高地域など山間部産地との交流は少なかったと考察しても産地分析の結果と矛盾しないであろう。

参考文献

- 1) 茅渟一也(1964)、長青が峯遺跡産のヒスイ(翡翠)について(概観)。長青が峯、新潟県糸魚川市教育委員会:63-73
- 2) 藤科哲男・東村武信(1987)、ヒスイの産地分析、富山市考古資料館紀要6:1-18
- 3) 藤科哲男・東村武信(1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。権原考古学研究所紀要『考古学論叢』、14:95-109
- 4) Tetsuo Warashina(1992)、Allocation of Jasper Archaeological Implements by Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19:357-373
- 5) 藤科哲男・東村武信(1983)、石器原材の産地分析、考古学と自然科学、16:59-89
- 6) 香嶋猛夫(1967)、北海道日高産軟玉ヒスイ、調査研究報告会講演要旨録No18:11-15
- 7) 河野義礼(1930)、本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質。岩石礦物鉱床学雑誌22:195-201
- 8) 東村武信(1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学、9:77-90

大川遺跡出土の管玉の産地分析

藤科 智男・東村 武信（京都大学原子炉実験所）

はじめに

遺跡から出土する大珠・勾玉・管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉通遺跡で加工されたかということ調査するのではなくて、何ヶ所かある碧玉の原産地のうち、どこの原産地の原石を利用しているかを明らかにするのが玉類の原産地推定である。玉類の原石の産地を明らかにすることは考古学上重要な意味をもっている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国雲南・ビルマ説、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析を系統的に行った研究では、蛍光X線分析法と電子スピン共鳴法を併用し、産地分析をより正確に行った例が報告されている。石鏃などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。

(1) 石器の原材産地推定で明らかになる、遺跡から石材原産地までの移動、活動範囲は、石器は生活必需品であるため、生活上必要な生活圏と考えられる。

(2) 玉類は古代人が生きるために必ずしも必要なものではない。勾玉・管玉は権力の象徴・お祭

表1 大川遺跡出土管玉（碧玉・鉄石英）分析一覧

分析No.	試料No.	遺物No.	遺物No.	材質	時期	長(m)×高(m)	重量(g)
36803	1	GP-48	1	碧玉	7c	24.0 9.5	3.9
36804	2	"	2	"	"	23.0 10.0	4.3
36805	3	"	3	"	"	28.0 10.0	4.6
36806	4	"	4	"	"	25.5 8.5	3.3
36807	5	GP-123	47	碧玉	恵山式期	18.0 2.5	0.2
36808	6	"	48	"	"	31.0 4.0	0.8
36809	7	"	50	"	"	27.5 4.5	0.9
36810	8	"	54	"	"	16.5 3.0	0.2
36811	9	"	55	"	"	18.5 3.0	0.3
36812	10	"	57	"	"	15.5 3.0	0.2
36813	11	"	—	"	"	17.5 2.5	0.2
36814	12	"	—	"	"	17.0 3.0	0.2
36819	13	"	46	鉄石英	"	18.0 4.5	0.7
36820	14	"	49	"	"	20.0 4.5	0.8
36821	15	"	53	"	"	22.5 4.5	0.8
36822	16	"	56	"	"	14.5 4.5	0.6
36815	17	GP-020	17	碧玉	恵山式期	16.0 4.5	0.6
36816	18	"	18	"	"	13.5 4.7	0.5
36823	19	"	19	"	"	22.0 5.0	0.8
36824	20	"	192	"	"	20.0 5.0	0.8
36825	21	"	357	"	"	15.5 4.5	0.6
36826	22	"	16	鉄石英	"	17.0 4.0	0.5
36827	23	"	355	"	"	16.0 5.0	0.7
36828	24	"	356	"	"	14.5 4.3	0.5

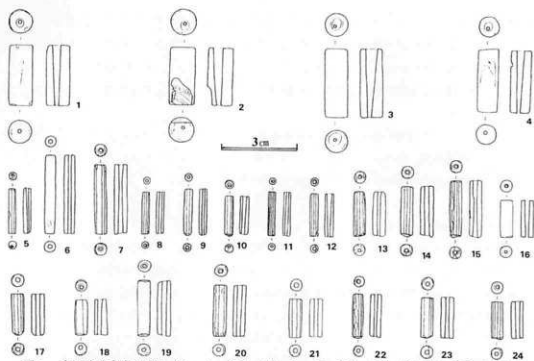


図1 大川遺跡出土の管玉 (1~4 GP-48、5~16 GP-123、17~24 GP-620)

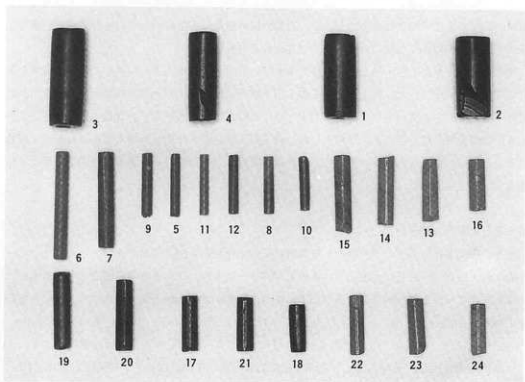


写真1 大川遺跡出土の管玉 (1~4 GP-48、5~16 GP-123、17~24 GP-620)

・御守り・占いの道具・アクセサリーとして、精神的な面に重要な作用を与えられられる。従って、玉類の産地分析で明らかになる碧玉製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれない。お祭り・御守り・占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏が考えられる。石器の原産地分析でしか得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

今回分析を行った遺物は北海道余市町に位置する大川遺跡出土の碧玉24個で、分析した碧玉（写真1）の実測図（図1）、試料番号・出土遺構番号・遺物番号・肉眼的石質・時期等を表1に示す。これら遺物の分析結果が得られたので報告する。

非破壊での産地分析の方法と手段

原産地推定の第一歩は、原産地間を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋で区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して、一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

ヒスイや碧玉製の勾玉・大珠・玉などは、国宝・重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行える方法でなければ発展しない。石器の原材産地分析で成功している非破壊で分析を行う蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠・勾玉・碧玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。碧玉・ヒスイ製玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて産地分析に利用した。

碧玉原石の蛍光X線分析

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として島根県花山産原石を図2に示す。

猿八産・玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの図2で示されるピークは観測される。土岐・興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba・La・Ceのピークの高さとともに、定性的に原材産地を判定する指標として用いる。

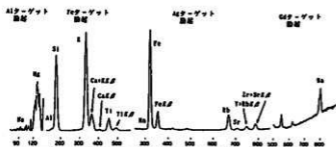


図2 花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル



図3 碧玉および碧玉様緑色石の原産地

碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を図3に示す。佐渡猿八原産地は、(1)新潟県佐渡郡畑野町猿八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものには割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であつたらしく採石跡が何ヶ所も見られ、分析した原石は猿八の各地点から表採したものおよび地元で提供された原石などで、提供されたものの中には露頭から得られたものがあり、グリーンタフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6~2.5の間のは31個、2.5~2.4の間は5個の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6~2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色・緑色、また、茶色系と緑色系の縞があるなど、多少色の違いがあつても組成上には反映されていない。出窯の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は(2)鳥根県八東郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は濃緑色から緑色の緻密で、割れ面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがつて比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619~2.600の間のは10個、2.599~2.500は18個、2.499~2.400は7個、2.399~2.300は11個、2.299~2.200は11個、2.199~2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉から

グリーンタフまでの領域が分析されている。花仙山産原石は色の違い、比重の違いによる組成の差はみられなかった。玉谷原産地は、(3)兵庫県豊岡市辻、日高町玉谷地域で、産出する碧玉の色、石質などは肉眼では花仙山産の原石と全く区別がつかない。また、原石の中には緑系色に茶系色が混じるものもみられ、これは佐渡嶺八産原石の同質のものに非常によく似ている。比重も2.6以上あり、質は花仙山産、佐渡嶺八産原石より優れた感じのものもみられる。このような良質の碧玉の採取は、産出量も少ないことから長時間をかけて注意深く行う必要がある。分析した原石は、比重が2.644~2.600は23個、2.599~2.589は4個の合計27個で、玉谷産原石は色の違いによる分析組成の差はみられなかった。また、玉谷原石と一致する組成の原石は日高町八代谷・石井・アンラクなどで採取できる。二俣原産地は、(4)石川県金沢市二俣町地域で、原石は二俣川の河原で採取できる。二俣川の源流は医王山であることから、露頭は医王山に存在する可能性がある。河原で見られる碧玉原石は、大部分がグリーンタフ中に層状、レンズ状に非常に緻密な部分として見られる。分析した4個の原石の中で、3個は同一塊から3分割したもので、1個は別の塊からのもので、前者の3個の比重は2.42で後者は2.34である。元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、(5)富山県婦負郡細入村割山定産岩山地区のグリーンタフの岩脈に包塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が非常に軽く、分析した8個は2.25~2.12で、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、(6)愛知県土岐市地域で、赤色・黄色・緑色などが混じり合った原石が産出し、このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62~2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。この原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地、(7)北海道西興部村の碧玉原石には鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地、(8)兵庫県水上郡山南町地区の安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。

これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り表2に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒にして行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている碧玉製の玉の原材料で、原産地は不明の遺物が出土している。同質の材料で作られた可能性がある玉類は北陸・近畿・中国地方に分布しているらしい。この分布範囲を明らかにし、原石産地を探索すると言う目的で女代南遺物群として原石群と同じように使用する。

この他、鳥取県の福部村多鯉池・鳥取市防己尾岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。

比重は2.6以上あり元素比相成は、興部・玉谷・土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。

大川遺跡出土の管玉と国内産碧玉素材との比較

遺跡から出土した玉類は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析を行っている。

遺物の原産地の同定をするために、(1)蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製造物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2)また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の素材であると推測する方法も応用した。

蛍光X線法による産地分析

これら遺物の蛍光X線分析の結果(図4~27)および比重(表3)から原材料の岩石を碧玉および考古学者間で俗に呼ばれている鉄石英の2個に分類した。(1)碧玉と分類した遺物は、緻密で比重が2.5以上あること、蛍光X線分析でRb・Sr・Y・Zrの各元素が容易に観測できるなどを条件に分類した。(2)赤色の緻密で、比重も碧玉より若干重く、蛍光X線分析で碧玉に比べてK・Ti・Feの各元素が容易に観測できて、Al・Rb・Sr・Y・Zrの含有量が少ない管玉を鉄石英として分類した。これら遺物の元素組成比および比重の結果を碧玉原石群(表2)の結果と比較してみる。遺物の比重が2.3以上ある遺物は細入原産地の原石でないことが分かる。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT'検定により同定を行い結果を表7に示した。信頼限界としている0.1%以上で原石群に帰属された遺物は興部群には管玉13で、花仙山群に管玉1・2・3・4で、佐渡猿八群には管玉10・11・17・18・19・20・21で、女代南(B)遺物群では管玉19・20で、この2個は猿八群にも帰属されている。また、土岐、二俣・細入・石戸原産地は統計処理ができるだけの原石の分析数が用意されていないが元素組成の比較から、これら産地の原石と一致する組成の遺物は見られなかった。蛍光X線分析の結果から原石産地が特定された遺物を、その原産地の原石であると結論するには、以下に述べる電子スピン共鳴(ESR)法による結果も花仙山・猿八・女代南(B)遺物群に一致すればより確実な結果となる。

ESR法による産地分析

ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてきた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、Varian社のE-1型Xバンドスペクトロメーターで行う。試料は完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析が

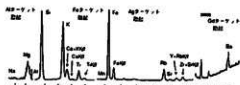


図4 碧玉1 (36803)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

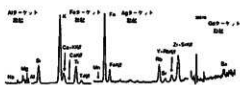


図11 碧玉8 (36810)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

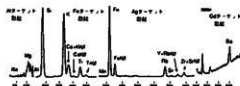


図5 碧玉2 (36804)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

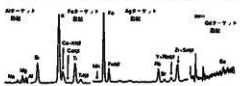


図12 碧玉9 (36811)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

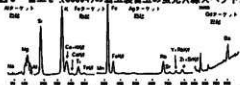


図6 碧玉3 (36805)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

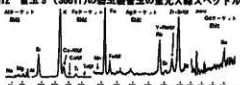


図13 碧玉10 (36812)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

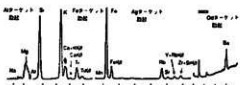


図7 碧玉4 (36806)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

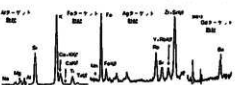


図14 碧玉11 (36813)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

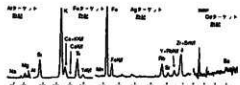


図8 碧玉5 (36807)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

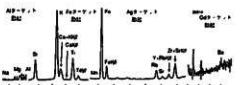


図15 碧玉12 (36814)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

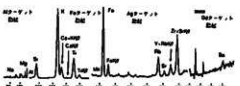


図9 碧玉6 (36808)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

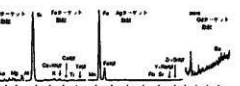


図16 碧玉13 (36819)の鉄石英製碧玉の蛍光X線スペクトル

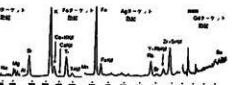


図10 碧玉7 (36809)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

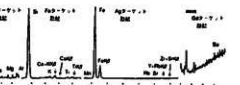


図17 碧玉14 (36820)の鉄石英製碧玉の蛍光X線スペクトル

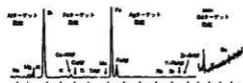


図18 碧玉15 (36821)の鉄石英製碧玉の蛍光X線スペクトル

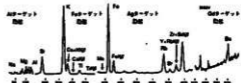


図23 碧玉20 (36824)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

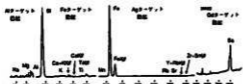


図19 碧玉16 (36822)の鉄石英製碧玉の蛍光X線スペクトル

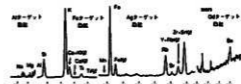


図24 碧玉21 (36825)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

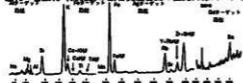


図20 碧玉17 (36815)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

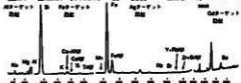


図25 碧玉22 (36826)の鉄石英製碧玉の蛍光X線スペクトル

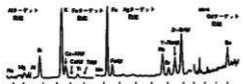


図21 碧玉18 (36816)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

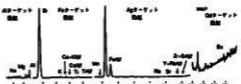


図26 碧玉23 (36827)の鉄石英製碧玉の蛍光X線スペクトル

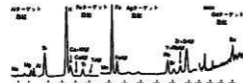


図22 碧玉19 (36823)の碧玉製碧玉の蛍光X線スペクトル

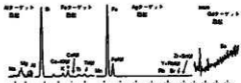


図27 碧玉24 (36828)の鉄石英製碧玉の蛍光X線スペクトル

できる場合がある。図28-(1)のESRのスペクトルは、幅広く磁場掃引したときに得られた信号スペクトルで、 g 値が4.3の小さな信号(I)は鉄イオンによる信号で、 g 値が2付近の幅の広い信号(II)と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号(III)で構成されている。図28-(1)では、信号(II)より信号(III)の信号の高さが高く、図28-(2)・(3)の二俣・細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。

今回分析した玉類の中で信号(II)が信号(III)より小さい場合は、二俣・細入産でないといえる。各原産地の原石の信号(III)の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。図29-(1)に花仙山・猿八・玉谷・土岐を図29-(2)に興部・石戸・八代谷・4・女代(B)遺物群・八代谷、および図29-(3)に富良野市空知川の空知(A)・(B)および北海

図28 碧玉原石のESRスペクトル
(花知山・玉谷・楳八・玉成)

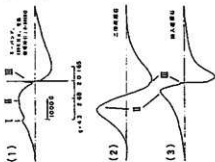


図29-(2) 碧玉原石の信号印のESRスペクトル

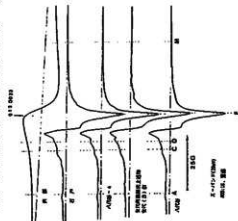


図30 大川産跡出土碧玉の信号印のESRスペクトル

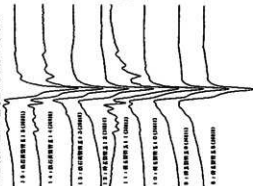


図32 大川産跡出土碧玉の信号印のESRスペクトル



図31 大川産跡出土碧玉の信号印のESRスペクトル

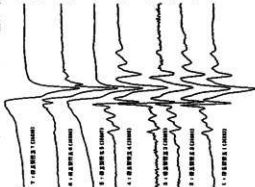


図33 大川産跡出土碧玉の信号印のESRスペクトル

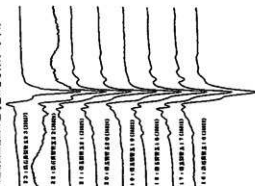


図29(1) 碧玉原石の信号印のESRスペクトル

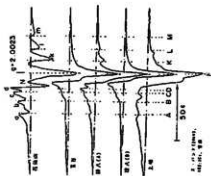


図29-(3) 碧玉原石の信号印のESRスペクトル

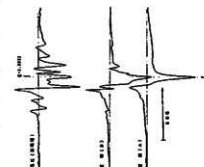


表4 大川遺跡出土の碧玉原石産地分析結果

遺物 番号	分析 番号	碧玉製玉類蛍光X線分析法による帰属確率						ESR 信号形	総合判定 原石産地
		興郡群	玉谷群	花仙山群	猿八群	女代B群	女代A群		
管玉1	36803	2X10 ⁻⁶ %	1X10 ⁻¹³ %	61%	1X10 ⁻¹⁶ %	<10 ⁻²⁵ %	花仙山形	花仙山産原石	
"2	36804	3X10 ⁻⁴ %	1X10 ⁻⁸ %	90%	1X10 ⁻¹² %	<10 ⁻²⁵ %	"	"	
"3	36805	1X10 ⁻⁷ %	1X10 ⁻¹³ %	34%	1X10 ⁻¹⁶ %	<10 ⁻²⁵ %	"	"	
"4	36806	1X10 ⁻³ %	1X10 ⁻¹³ %	89%	1X10 ⁻¹¹ %	<10 ⁻²⁵ %	"	"	
"5	36807	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹¹ %	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁸ %	1X10 ⁻¹³ %	猿八形類似		
"6	36808	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻²¹ %	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻²⁰ %	1X10 ⁻²¹ %	不明		
"7	36809	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁶ %	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁸ %	1X10 ⁻¹³ %	猿八形類似		
"8	36810	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁷ %	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁷ %	1X10 ⁻¹⁸ %	"		
"9	36811	1X10 ⁻²⁴ %	1X10 ⁻¹⁰ %	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁸ %	1X10 ⁻¹¹ %	"		
"10	36812	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	22%	1X10 ⁻¹⁴ %	猿八(A)形	猿八産原石	
"11	36813	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻²¹ %	<10 ⁻²⁵ %	0.12%	1X10 ⁻⁴ %	不明		
"12	36814	1X10 ⁻²¹ %	1X10 ⁻⁷ %	1X10 ⁻²³ %	1X10 ⁻¹⁸ %	1X10 ⁻⁹ %	猿八形類似		
"13	36819	0.4%	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	玉谷形		
"14	36820	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	不明形		
"15	36821	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	猿八(A)形		
"16	36822	1X10 ⁻³ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	"		
"17	36815	1X10 ⁻²³ %	1X10 ⁻¹⁵ %	1X10 ⁻²¹ %	95%	0.01%	猿八(A)形	猿八産原石	
"18	36816	<10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁸ %	<10 ⁻²⁵ %	38%	1X10 ⁻⁶ %	"		
"19	36823	1X10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹¹ %	<10 ⁻²⁵ %	0.64%	53%	女代(B)形	女代(B)遺物群	
"20	36824	1X10 ⁻²² %	1X10 ⁻¹⁵ %	1X10 ⁻²² %	50%	0.15%	猿八(A)形	猿八産原石	
"21	36825	1X10 ⁻²⁵ %	1X10 ⁻¹⁸ %	<10 ⁻²⁵ %	98%	0.03%	"	"	
"22	36826	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	不明		
"23	36827	1X10 ⁻² %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	石戸形		
"24	36828	1X10 ⁻⁹ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	<10 ⁻²⁵ %	不明		

道今金町花石の各原石の代表的な信号(Ⅲ)のスペクトルを示す。今回分析した遺物のESR信号(Ⅲ)の結果を図30~33に示す。これら遺物の中で花仙山形に一致する信号は管玉1~4で猿八形の類似する信号は管玉5・7・8・9・10・12・15・16・17・18・20・21で、女代(B)形に一致する信号を示す遺物は管玉19、玉谷形(八代谷形・空知(A)形)では14であった。ESR分析から見ると分析した遺物の原石産地がそれぞれ似た信号を示す原石の産地の可能性が大きいことを示唆しているが、さらに正確な原石産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法でともに同じ原産地特定された場合のみ、その原産地の原石で作られた玉であると決定する(表4)。

結論

蛍光X線分析の結果で、花仙山群に高い確率で帰属された遺物は管玉1~4で、またESR分析においても花仙山形の信号を示していることから、これら7cとみられる碧玉性管玉には鳥根姫花仙山産原石が使用されていると推測した。恵山式期の碧玉性管玉のうち、蛍光X線・ESR

の両分析での総合判定で佐渡嶽八産碧玉と同定されたものは、管玉10・17・18・20・21であった。管玉19は総合判定で女代南（B）群に同定された。産地が特定できなかった碧玉製管玉5・6・7・8・9・11・12の蛍光X線分析結果は相互に似ていて、またESR信号も一致し、同じ産地の原石の可能性を示唆したのは管玉5・7・8・9・12の5個である。鉄石英製管玉については、蛍光X線分析で管玉13～16のTi/Kの比の値が管玉22～24に比較して小さい傾向にありこの両者はTi/Kの比で分類できるが、ESR信号は個々に異なっているように見えるため、これら総てが同じ産地からの原石とは言えない可能性がある。一部の考古学者の間で、色と管玉の様式で佐渡の管玉が伝播したと信じられている。しかし、佐渡の様式と同じ文化圏と考えるべきで、佐渡の管玉が伝播したと推測するには産地分析の結果によらなければならない。碧玉製の玉類については定量的に同定が可能になってきたが、鉄石英についてはまだ緒についたところで産地の議論ができる段階に達していない。今回分析した7cとみられる碧玉製管玉には島根県花山山産原石が使用され西日本との交流が示された。恵山式期の碧玉製管玉では佐渡嶽八産碧玉が使用され佐渡との交流が推測され、管玉19は女代南（B）群に同定されたことから、女代南（B）群の組成の管玉は畿内を中心とした西日本一帯で、弥生時代前・中期に広く使用された原石で、この石材が大川遺跡に伝播していたならば、本遺跡の古代人は西日本の文化などの情報を受けていた可能性を推測しても産地分析の結果と矛盾しない。また本遺跡で使用された碧玉製管玉の原石は複数の産地または複数の玉造遺跡から得た可能性が考えられ、広い地域との交流が推測される。

参考文献

- 1) 茅原一也 (1964) 長者が原遺跡産のヒスイ (翡翠) について (概報) 長者ヶ原 新潟県糸魚川市教育委員会 63-73
- 2) 齋科哲男・東村武信 (1987) ヒスイの産地分析 富山市考古資料館紀要 61-18
- 3) 齋科哲男・東村武信 (1990) 奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析 権原考古学研究所紀要『考古学論叢』14 95-109
- 4) Tetsuo Warashina (1992) Allocation of Jasper Archaeological Implements by Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological Science 19 357-373
- 5) 齋科哲男・東村武信 (1983) 石器原材の産地分析 考古学と自然科学 16 59-89
- 6) 香場猛夫 (1967) 北海道日高産軟玉ヒスイ 調査研究報告会講演要旨録 No18 11-15
- 7) 河野義礼 (1939) 本邦における翡翠の新産出及び其化学的性質 岩石礦物鉱床学雑誌 22 195-201
- 8) 東村武信 (1976) 産地推定における統計的手法 考古学と自然科学 9 77-90

大川遺跡の炭化米粒特性と稲作起源

和佐野 喜久生・大塚 豊揚（佐賀大学）

本遺跡は北海道余市町大川町に所在し、余市川改修事業に伴う発掘調査として1989年から1994年に余市町教育委員会によって行われた。

余市町は北海道西部・積丹半島の北東岸、石狩湾に臨む農・漁業の町で余市川の河口に広がる小平野に位置する。余市川は南東にそびえる余市岳（1488m）に源流をもち、左手に積丹半島の天狗岳（872m）を仰ぎながら石狩湾に北流する。町は北緯43.2度の高緯度に位置するが、日本海を北に向かう暖流・対馬海流が流入し、およそ5ヶ月間の無霜期間をもつ。

以下の序文は、本遺跡から発掘された炭化米あるいは北海道の古代稲作の起源についての考察を加えるための試料として、日本列島の北の古代文化・縄文文化の紹介文（文献18）から、関連する部分を抜粋して記述したものである。

北海道の古代文化が起こったころは、気温変化に温暖期と寒冷期の繰り返しがあったが、温暖期には約3000年前の縄文後期、紀元前後の弥生海進、及び7-12世紀の平安海進（オホーツク海進ともよばれ、7-8世紀と10-11世紀に2つの温暖ピークがある）がある。この温暖期の存在が、食料などの資源確保のための移動と定住の繰り返しや異文化との接触・交流などを刺激し、これによって北海道特有の古代文化が形成されたと考えられる。

北海道には弥生文化と古墳文化の時代はなく、縄文文化の後は続縄文文化、縄文文化、アイヌ文化と続く。続縄文文化は紀元前3-2世紀に始まるが、後半の紀元3-4世紀ころから東北地方やサハリンとの交流が認められ、7世紀頃には本州の強い影響を受けながら縄文文化ができる。縄文文化を代表する土器は本州の土師器の影響を受けたが、文様は刻線による幾何学的な文様や木のへらでつけた捺痕文様「捺文」が描かれた。縄文文化の特徴は、この時代に鉄製品が全道的に広がったことであるが、他には、アワ、キビ、オオムギなどの雑穀農耕、方形のかまど付きの住居形態、機織り技術、土器の文様（縄文がなくなる）などである。縄文文化は、東北の強い影響がみられる7-9世紀の前中期と、北海道の独自性がみられ、道北・道東に広がりを見せる10世紀以降の後半期に分けられる。遺跡から出土した栽培植物種子のうち、コメについては、本州から持ち込まれた可能性が強いと考えられる。鉄製農具には、鋤、U字型鋤先、斧などが出土しているが、各遺跡から普遍的に出土している鉄製小刀があれば、木製農具（所在は確認されていない）の作製も可能であったはずである。

日本海航路による本州中央部・東北地方・北海道南部間の物資交流の盛んな様子を示すものには、7世紀中頃に、北陸の豪族・阿部氏との交易で北海道の人々・「渡嶋蝦夷」が有間浜でもてなしを受けたこと、秋田城や羽田国府へ交易に行った際は大がかりな宴会が行われたことなどが

ある。

捺文文化を特徴づける鉄製品の鉄は東北地方から供給されていたと考えられ、東北地方との物と物の交換、つまり、交易が存在していたことを物語る。また、すでに紀元前後には東北地方の弥生系の土器が道中央部まで広がったが、紀元3-6世紀(統縄文化後半期)になると、北海道系の土器や黒曜石が東北地方やサハリンまで広がる。

捺文文化とは別に、宗谷海峡の北・サハリンから渡来したオホーツク文化があり、5-9世紀に道東のオホーツク海沿岸域に多くの遺跡を残した。これらの遺跡からは、本州から流入した土師器、藏手刀、鉄器が出土するとともに、大陸の帯飾り、小鐸などの青銅器や鉄器、璧玉などが出土し、他にオオムギ、キビなどの穀物種子がみついている。代表的遺跡として、9世紀末の網走市ニツ岩遺跡(2号住居址内骨塚)がある。

次に、本遺跡の報告書(文献17)から、調査データに関連する部分を下記に抜粋して記述する。

本遺跡は捺文文化期の71軒の竪穴状建物跡(遺構SH)を検出し、形態は隅丸方形を基本とし、その1辺は4-5m、竈と地床炉を併用し、竈は袖石・煙道・置石をもつ完成品で、集落は河口に近いところから川の上流に向かって広がる。遺跡は余市川河口部の右岸にあり、炭化米は16軒の竪穴状建物跡(遺構SH)から出土している。炭化米粒を計測した遺構は次の2遺構である。

遺構SH-6は焼失竪穴住居跡で、竈跡はなく、多数の遺物が出土し、床面伴出土器はIX群a1期(北大Ⅲ式土器)で、床面・ビット・覆土・焼土から多量の炭化米・ヒエ・アワ・キビ・ソバの遺体を検出した。遺構SH-13は焼失竪穴住居跡で、竈はないが地床炉があり、床面・地床炉・ビット・覆土から大量のコメ・ヒエ・アワ・キビ・ソバの遺体を検出した。コメ・ヒエ・アワ・キビ・ソバの大量遺体を検出した遺構には、上記の2遺構の他に、SH-1、SH-3、SH-8などがある。

材料及び方法

本炭化米資料は余市町教育委員会によって焼失竪穴住居跡(捺文時代)から発掘されたものである。計測調査した炭化米粒は、余市町教育委員会から本大学に送付された2遺構の資料(SH-6及びSH-13)である。これらの遺構の所属時代は、捺文文化期と確信すると記述されているが、¹⁴Cによる年代測定ではSH-13が紀元850年、他の遺構のSH-3は紀元1100年、SH-7は紀元1300年と報告されている。(文献17)

炭化米粒の計測標本は、遺構SH-6の88粒及び遺構SH-13の21粒をスケール付きの板上(約2mm深の4×8mm間隔の条溝の交点に10粒を並べる)で、粒の表面(長、幅)及び側面(厚さ)を接写撮影し、約4.5倍大到プリントしたものからデジタル表示式ノギスを用いて計測した。米粒の形態的特性は、粒長、粒幅及び粒厚の測定値及び計算によって求めた長/幅比の4項目とし、北部九州及び韓国の16遺跡(縄文晩期から弥生中期の18資料)のものを基準として比較した。

イネ粒(米・粳)の形態的特性の粒形・粒大及び粒型の分類・表現法は、既報(文献13)の方

法によって示した。なお、日本の古代イネを対象とした長粒系及び短粒系の分類は、粒長で中長粒（粒長指数・5）と短粒（粒長指数・3）の境界によって行い、およそ4.4mm以上（4.6mm前後）を長粒系、それ以下（4.1mm前後）を短粒系とし、長粒系の中で粒長が4.6mm以上で粒幅が2.8mm以上のものを長・大粒種、粒長が3.8mm以下のものを極短粒種とした。

表2に示した粒型分布は、既報（文献13）の方法（図1）によって、粒長は粒長平均の最小階級値3.5mmを粒長指数1（極短粒）として、階級幅0.6mmで順次3（短粒）、5（中長粒）、7（長粒）、9（極長粒）及び10（極長大粒、6.5mm以上）とし、粒幅は同様に最小階級値1.3mmを粒幅指数1（極狭粒）とし、階級幅0.6mmで順次3（狭粒）、5（中幅粒）、7（広粒）及び9（極広粒）とした。粒型は、上述の指数値（粒幅指数・粒長指数）を組み合わせたもので、例えば、3・5型のもの、粒幅指数が3（階級値1.9mm）、粒長指数5（階級値4.7mm）のものを示し、狭粒の中長粒種と表現する。なお、インディカ及びジャポニカの分類は、加藤ら（文献16）及び松尾（文献15）の考え方・分類法を参考にしながら、粒型指数表から長／幅比がおおよそ2以上に相当する粒型（1・1型、3・3型及び粒長指数が粒幅指数を1ランク以上越えるもの）をインディカとし、それ以外のはジャンポニカとした。炭化米の接写写真（図5）は、上段から下段に向かって長粒のものから順次に短粒方向に、それぞれの集団全体を反映するように、できるだけ正形に近いものを選んで配列した。

結果及び考察

本遺跡の炭化米資料（調査データは現地で栽培されたイネ品種のものとして考察する）の粒4形質の平均値、標準偏差及び調査粒数は、北部九州及び韓国の基準遺跡（縄文晩期～弥生中期）のものを比較の対照として表1に示した。また、炭化米粒の大小・形などの形態的特徴の比較は、粒長・幅平均値の分布図（図3）によって基準遺跡（図2、遺跡名は図中に記した）と比較した。基準遺跡の縄文時代晩期の菜畑遺跡の炭化米資料については、粒長分布から極短粒の縄文晩期Aと短粒系の中では比較的長粒になる縄文晩期Bの2群（2品種）に分割している。

図3に示した本遺跡及び基準遺跡（図中の白抜の丸印）の粒長・幅平均値（95%信頼区間付）の分布図は、粒の大小・形の変異分布から本遺跡のイネ品種の系譜的位置づけを示したものである。図から分かるように、本遺跡の2つの資料はいずれも全体的には長粒系に属する。資料SH-6が長粒系の中では最も短粒系に近いところに位置するが、これは短粒系品種の混合したことによる。九州の古代イネ品種にこれらの祖系に求めると、資料SH-6は短粒系の板付遺跡（福岡市）と川の上遺跡（豊津町）が相当するが、資料SH-13は長粒系品種群からかなり離れたところに位置し、この図に示した九州の長粒系品種とは異なる別のイネ品種に祖系を求める必要がある。

図4の粒長の度数分布図は、本遺跡の炭化米資料の遺伝的純粋性を判断するために示したものである。図に示されるように、資料のSH-6の粒長変異は3.7mmから5.1mmの間に広く分布し、

4.1mm、4.4mm及び4.6mmにピークをもつ3頂分布的傾向を示す。このことから、遺構SH-6の古代イネは長粒系を主とした長・短粒系の数品種が混合した混合品種であったと考えられる。資料SH-13は調査粒数が多くはないが、粒長4.9mmにモードをもつ長粒系の長・大粒種であったとみなされる。

表1に示した粒特性4項目のなかで、本遺跡の炭化米粒の粒厚については、その平均値が資料SH-6では2.00mm、資料SH-13では2.13mmであったことは、北部九州の平均値(1.88mm)に比べるとかなり優れたものである。このことは(あくまでも、この米が本遺跡周辺での生産物であることを前提としてではあるが)、本遺跡が当時の水田稲作の最北端地であったにも拘らず、気象環境や水田・土壌環境などは水田稲作にはよく適し、このような寒冷地にも十分に適應できる優れたイネ品種が選ばれていたと考えられる。ただ、イネ品種が混種であったことは、イネに関する知識はまだ十分ではなかったとも考えられる。なお、表1に示した粒の長/幅比の1.67及び1.78からは、本イネ品種は典型的なジャポニカ品種であったようである。

表2には、本遺跡の炭化米資料の個々の粒の粒型分布を対照遺跡と比較した。粒型分布からは、資料SH-6は全体的には空前遺跡(前期、小郡市)と川の上遺跡(中期、豊津町)のものに類似するが、両遺跡に比べて中幅・短粒の5・3型(33%)をより多く含み、その他に7・5型及び5・5型の粒型(25%)を含む多様な粒型の混合種である。混合した短粒種としては、7・3型をやや含む板付遺跡のものに類似する。粒幅は中幅粒(61%)が最も多いが、広粒(36%)もかなり含まれる。粒長は中長粒(53%)と短粒(42%)をほぼ同様に含む。資料SH-13については、同じような粒型分布を示すものは他にはみられないが、広・長粒の7・7型(33%)を比較的多く含むものには、須川遺跡(前期、朝倉郡)がある。粒幅は中幅粒(52%)と広粒(43%)をほぼ同様に含み、粒長は長粒(52%)と中長粒(48%)をほぼ同様に含む。図5には本遺跡の炭化米粒の接写写真を示した。

以上の調査結果に基づいて本遺跡のイネ品種の由来について検討を加えるが、その前に、日本への稲作伝播に関する著者(和佐野)の仮説(平成12年3月1日付、朝日・毎日・読売・佐賀新聞などに報道、文献1)を紹介しておくことにする。

最新の日本国内の全国的調査結果を加えての考察であるが、対象とした古代イネ遺跡の数は、中国20カ所、韓国3カ所及び日本120カ所に及ぶ。日本への稲作の伝播については、総論的ではあるが、図6にも示したような2つの伝播ルートによる3波(3期)にわたる伝播時期を提唱した。

第1波は縄文晩期(紀元前8-7世紀)に、朝鮮半島から畑作農耕文化の1つとして陸稲系(陸稲及び半陸稲)のイネが、朝鮮半島を南下して老岐を経て日本に渡来した。この第1波の稲作伝播をもたらした半島での民族移動は、中国大陸の春秋列国による戦乱の激化と地球の気温低下(2~3℃)によって引き起こされたと考えられる。このような異常な気温低下は、華北・朝鮮半島に収穫が皆無なるような不作と大飢饉を引き起こし、さらには繰り返される戦禍を逃れる

王侯一族や農民・民衆が、縄文晩期の海道を利用して大挙日本へ南下・渡来してきたのであろう。日本では、縄文晩期の遺跡から発掘される畑作物の種子とそれと伴出する極短粒の炭化米粒は韓国の欣岩里遺跡（文献5）のものに類似し、さらには柄の圧痕が付いた同時期の土器が多く出土していることなどがある。

第2波は、縄文晩期末から弥生前期初頭（紀元前5-3世紀）に中国大陸の江南地方から直接、北部九州北岸域と韓国の南西岸に水田稲作農耕文化が渡来し、水田稲作は本州を徐々に東進していった時期に相当する。当時の中国大陸での民族移動の動機は、「呉越の戦い」で知られる呉王夫差と越王句踐の戦いがあり、激しく覇権を競いあった江南の戦乱は紀元前496年に始まり何年も繰り返された。戦禍に疲れた江南の人々がやむなく海を渡る決死の冒険を強いられたのである。このときに伝来した呉越文化（断髪文身など）と江南の水田稲作文化は、水稻の種子やその栽培技術の他に、北部九州の当時の遺跡にみられる木製農具や区画水田をつくるための工作・土木技術があり、その代表的遺跡が菜畑遺跡や板付遺跡である。イネ品種は短粒系を主とする。

第3波は、九州の有明海に面する筑後川下流域の筑紫平野及び島根・鳥取・福井・石川県などの山陰・北陸の日本海沿岸域に、弥生前期から中期（紀元前3-1世紀）に主に長粒系品種を主とした多種多様なイネ品種が、中国大陸の江南地方から直接に渡来したものである。弥生時代の前～中期に長粒系を主とした多種多様な長・短粒系の炭化米が集中的に出土するのはこの2地域以外にはみられない。この時の中国大陸での民族移動（異国への脱出）は、秦の始皇帝が紀元前221年に中国統一を完了し、皇帝が方士・徐福に不老不死の妙薬を求めさせて、童男女数千人と五穀の種子を持たせ大海を東（日本の方角）に向かわせたことである。徐福渡来の伝承をもつ地方に長粒系の炭化米が多く出土するのは偶然の一致とは言えない。

以上のような稲作伝播の考えに基づいて、本遺跡から出土した炭化米の由来について考えてみよう。本遺跡の時代が8世紀以降の中世になることから、どのようなイネ品種があっても不思議ではないが、問題は現地での生産物か交易品かということであろう。結論から言えば、生産物であった可能性の方が高いと考えられる。その理由は、（1）本遺跡の時代（紀元前1000年前後）は、弥生中期の高温期に近い中世の温暖期であった、（2）炭化米粒の形態的特徴が、弥生中期の青森県弘前市の垂柳遺跡（弥生中期）や北陸地方の弥生遺跡のものに類似する、（3）炭化米がその当時に栽培されていたと考えられる畑作物の種子（ヒエ・アワ・キビ・ソバなど）と伴出している住居跡が5軒みられる、ことなどである。もし、コメが単なる交易品であったとすれば、当時、本州と盛んに交易をしていた道内のいろいろな地域の遺跡から、ランダムに炭化米が出土してもいいはずである。

以上のことから、本遺跡から出土した炭化米のイネ品種は、弘前市の垂柳遺跡周辺域か北陸地方から持ち込まれ、紀元10世紀前後の温暖期に限って余市川下流域の小平野・本遺跡周辺域で栽培されたものと考えられる。

要約

1. 本遺跡から発掘された炭化米粒特性を北部九州及び韓国の遺跡のものと比較し、本遺跡の古代イネの品種特性及びその系譜・起源について検討した。
2. 計測調査した本遺跡の炭化米粒は、2カ所の遺構（SH-6、SH-13）から発掘されたものであり、資料SH-6の粒特性は川の上遺跡（弥生中期、豊津町）のものに類似したが、粒長の度数分布の形状から短粒系を含む数品種が混合した長粒系の混合品種であると推定した。資料SH-13は須川遺跡や垂柳遺跡にみられる長粒系の長・大粒種であった。
3. 本遺跡の炭化米の粒型は、SH-6は全体的には空前遺跡と川の上遺跡のものに類似するが、両遺跡に比べ短粒系の5・3型（33%）を多く含み、他に5・5型及び7・5型（25%）を含む多様な粒型を持つ。粒幅は中幅粒が最も多く、広粒もかなり含まれる。粒長は中長粒と短粒をほぼ同様に含む。SH-13の粒型は、7・7型（33%）を多く含む長・大粒種であった。
4. 本遺跡の炭化米の粒厚は平均よりやや厚かったことから、本遺跡周辺の水田・土壌環境はイネの栽培には適していたと考えられるが、イネ品種が混種であったことから、イネに関する知識・技術はまだ十分ではなかったと推察した。
5. 本遺跡から出土した炭化米は現地産のものであり、そのイネ品種は垂柳遺跡周辺域か北陸地方から持ち込まれ、紀元10世紀前後の温暖期に限って本遺跡周辺域で栽培されたものと推察した。

参考文献

最近の日本の古代イネ関係報告書

1. 和佐野喜久生（2000）「東中根遺跡の古代イネと日本の稲作起源」
『ひたちなか市埋蔵文化財センター報告12号』p 4-6
2. 和佐野喜久生・大塚豊揚・片平雅俊（2000）「十王台南遺跡の炭化米粒特性と稲作起源」
『十王町民俗資料誌紀要9』p 1-8
3. 和佐野喜久生・東本秀雄（2000）「青谷上寺地遺跡の炭化米粒特性と稲作起源」
『鳥取県教育文化財団報告書68 青谷上寺地遺跡2』p 114-123
4. 和佐野喜久生・真鍋智子・水ノ江和同（1999）「鹿取五反田遺跡の炭化米粒特性と稲作起源」
『浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第10集 鹿取五反田遺跡Ⅱ』
福岡県教育委員会 p 233-248
5. 和佐野喜久生・真鍋智子（1999）「金場遺跡の炭化米粒特性と稲作起源」
『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告54 金場遺跡』
福岡県教育委員会 p 291-301
6. 和佐野喜久生・宮原文隆・真鍋智子（1999）「中町西安田・長野遺跡の炭化米粒特性と稲作起源」

- 『中町文化財報告19 笹屋・里の垣内遺跡』兵庫県多可郡中町教育委員会 p 1-10
7. 和佐野喜久生・真鍋智子（1999）「上唐原了清遺跡の炭化米特性と稲作起源」
『上唐原了清遺跡発掘調査報告書』福岡県教育委員会 p 107-112
 8. 和佐野喜久生・真鍋智子（1999）「貝本遺跡の炭化米特性と稲作起源」『貝本遺跡Ⅱ』
福岡県教育委員会 p 327-337
 9. 和佐野喜久生（1997）「頓田高見遺跡の土器混入古代稲」
『甘木市文化財調査報告書第40集 頓田高見遺跡Ⅰ』p 48-51
 10. 和佐野喜久生（1997）「美乃利遺跡の古代稲」『美乃利遺跡』
兵庫県教育委員会 p 349-358

稲作起源関係

11. 和佐野喜久生（1999）「古代史調査研究の最近の動向 稲の原郷と稲作文化の伝来 特集Ⅲ」
『栖-すみか-』No.34 p 22-31
12. 和佐野喜久生（1995）「稲作の江南起源説」『講座・文明と環境 第3巻 農耕と文明』
梅原猛・安田喜憲編集 p 143-167 朝倉書店
13. 和佐野喜久生（1995）「東アジアの古代稲と稲作起源」
『東アジアの稲作起源と代稲作文化-文部省科研国際学術研究 報告・論文集-』
和佐野喜久生代表編集 p 1-52
14. 和佐野喜久生（1993）「九州北部古代遺跡の炭化米の粒特性に関する考古・遺伝学的研究」
『育種』43 p 589-603
15. 松尾孝嶺（1952）「栽培稲に関する種生態学的研究」『農技研報』D 3 p 1-111
16. 加藤茂包・小坂博・原史郎（1928）「雑種植物の結実度より見たる稲品種の類縁に就いて」
『學藝雜誌』3（2） p 132-147

遺跡報告・古代史関係

17. 岡田 淳子ほか（2000）『大川遺跡における考古学的調査Ⅰ・Ⅱ』北海道余市町教育委員会
18. 北海道開拓記念館（1997）『第45回特別展 北の古代史をさぐる-樺文文化-』

7・1(大塚子) 7・3(須川) 7・5(吉野ヶ里) 7・7(津古平田) 7・9(戦国博倉) 9・7(須川)
 5・1(島城) 5・3(松菊里) 5・5(八女岩崎) 5・7(八女吉田) 5・9(河崎渡) 5・10(麗家角1)
 1・1(草鞋山) 3・1(草鞋山) 3・3(大嶺子) 3・5(草鞋山) 3・7(麗家角2)


















9(3.7) <極広粒>	7-1 	7-3 	7-5 	7-7 	7-9 	9-7 		
7(3.1) <広粒>	5-1 	5-3 	5-5 	5-7 	5-9 	5-10 		
5(2.5) <中幅粒>	3-1 	3-3 	3-5 	3-7 				
3(1.9) <狭粒>	1-1 							
1(1.3) <極狭粒>								
	1(3.5) <極短粒>	3(4.1) <短粒>	5(4.7) <中長粒>	7(5.3) <長粒>	9(5.9) <極長粒>	10(6.5) <極大長粒>		

図1 炭化米粒の粒系分類

粒長指數<階級値, mm>

(原図:和佐野)

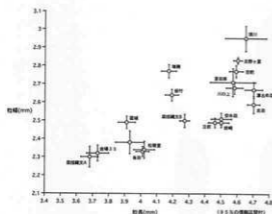


図2 基準遺跡の炭化米粒長・幅平均値の分布図

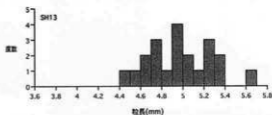
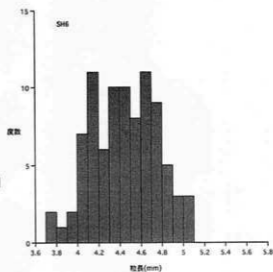


図4 大川遺跡の炭化米粒長の度数分布図

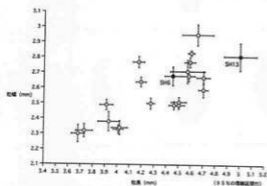


図3 基準遺跡及び大川遺跡の炭化米粒長・幅平均値の分布図

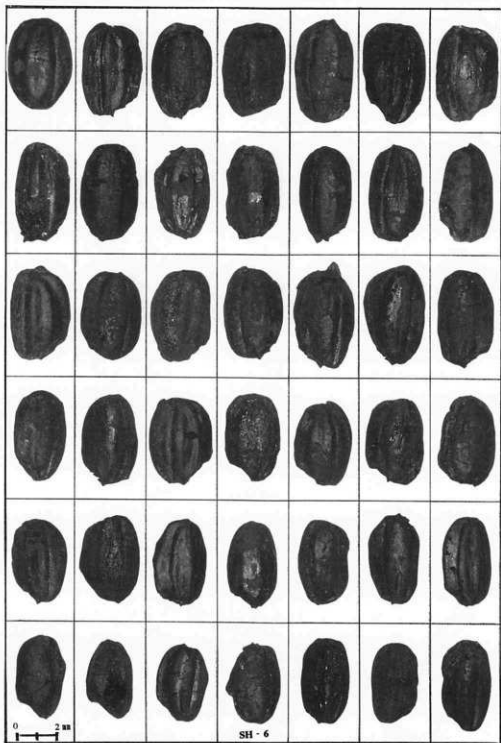


図 5 - 1 大川遺跡の炭化米

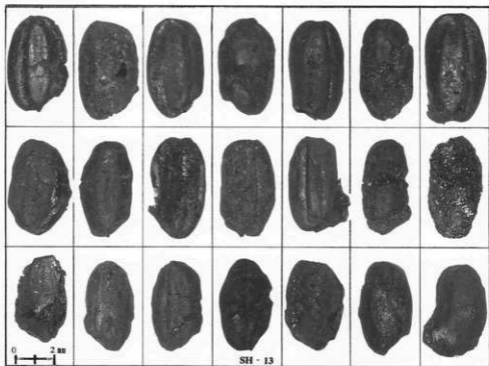


図5-2 大川遺跡の炭化米



図6 日本への古代稲作の伝播ルート (和佐野・原図)

表1 基準遺跡及び大川遺跡の炭化米粒特性表

遺跡名	菜畑	菜畑	菜畑	宍田	飯付	瑞穂	里田原
時代	縄文晩期(A)	縄文晩期(B)	弥生前期	弥生前期	弥生前期	弥生前期	弥生前期
所在地	唐津市	唐津市	唐津市	前原市	福岡市	福岡市	田平町
長 (mm)	3.68	4.27	3.93	4.01	4.19	4.17	4.57
S. D.	0.19	0.17	0.28	0.22	0.24	0.24	0.24
幅 (mm)	2.30	2.50	2.38	2.33	2.64	2.77	2.71
S. D.	0.20	0.19	0.20	0.15	0.18	0.19	0.13
厚 (mm)	1.87	1.87	1.95	1.58	1.80	1.86	1.75
S. D.	0.22	0.15	0.24	0.11	0.13	0.15	0.20
長/幅比	1.61	1.71	1.66	1.72	1.59	1.51	1.69
S. D.	0.15	0.15	0.12	0.11	0.11	0.11	0.10
調査粒数	49	106	38	107	120	100	11

遺跡名	金堀35	空前	須川	津古牟田	安永田	八女岩崎	吉野ヶ里
時代	弥生中期	弥生前期	弥生前期	弥生中期	弥生中期	弥生中期	弥生中期
所在地	朝倉郡	小郡市	朝倉郡	小郡市	鳥栖市	八女市	佐賀県
長 (mm)	3.73	4.59	4.65	4.70	4.50	4.50	4.60
S. D.	0.36	0.22	0.41	0.28	0.34	0.25	0.19
幅 (mm)	2.32	2.77	2.95	2.67	2.51	2.49	2.83
S. D.	0.23	0.17	0.22	0.22	0.18	0.13	0.13
厚 (mm)	1.56	1.95	2.16	1.92	1.86	1.76	1.98
S. D.	0.21	0.20	0.18	0.17	0.16	0.12	0.13
長/幅比	1.61	1.66	1.58	1.77	1.80	1.81	1.63
S. D.	0.14	0.11	0.17	0.16	0.15	0.12	0.10
調査粒数	104	100	39	100	110	100	180

遺跡名	立岩	川の上	松崎里	園城	大川SH6	大川SH13
時代	弥生中期	弥生中期	B. C. 5	A. B. 100		
所在地	飯塚市	豊津町	忠清南道	慶尚南道		
長 (mm)	4.46	4.58	4.02	3.91	4.45	5.00
S. D.	0.21	0.27	0.37	0.28	0.31	0.31
幅 (mm)	2.49	2.68	2.34	2.49	2.68	2.81
S. D.	0.14	0.17	0.27	0.18	0.29	0.21
厚 (mm)	1.74	2.01	1.59	1.83	2.00	2.13
S. D.	0.12	0.15	0.23	0.13	0.22	0.20
長/幅比	1.80	1.71	1.73	1.58	1.67	1.78
S. D.	0.13	0.14	0.12	0.13	0.17	0.09
調査粒数	100	100	122	103	88	21

表2 基準遺跡及び大川遺跡の炭化米粒型表

	蒸畑縄文A 49粒				計%	蒸畑縄文B 106粒				計%	蒸畑弥生 39粒				計%
	粒長指数					粒長指数					粒長指数				
	1	3	5	7 9		1	3	5	7 9		1	3	5	7 9	
1															
3	25	6			31	4	3		7	13	3				16
5	46	23			69	58	27		85	18	53	11			82
7						7	2		9		3				3
9															
計%	71	29			100	69	32		101	31	59	11			101
	青田 107粒				計	飯付 120粒				計	瑞穂 100粒				計
1															
3	6	9			15					1					1
5	10	71	3		84	5	58	15	78	4	45	8			57
7		1			1		13	8	21		35	7			42
9															
計%	16	81	3		100	5	71	23	99	5	80	15			100
	空前 100粒				計	須川 30粒				計	津古牟田 100粒				計
1															
3										1					1
5	12	44	1		57		8	8 3	19	9	50	13			72
7	4	38	1		43	3	13	49 18	83	2	23	2			27
9															
計%	16	82	2		100	3	21	57 21	102	12	73	15			100
	安永田 110粒				計	八女岩崎 100粒				計	吉野ヶ里 180粒				計
1															
3	2	3			5	2	1		3						
5	3	30	53	6	92	29	66	2	97	6	33	1			40
7		1	3		4					7	54				61
9															
計%	3	33	59	6	101	31	67	2	100	13	87	1			101
	立岩 99粒				計	川の上 100粒				計	松崎里 122粒				計
1										3					3
3	1				1					14	6				20
5	34	62			96	21	54	3	78	6	60	13			79
7	1	1			2	2	21		23						
9															
計%	36	63			99	23	75	3	101	23	66	13			102
					計	大川SM6 88粒				計	大川SM13 21粒				計
1															
3						2			2						
5						2	33	25	61		38	10			48
7						7		27	36		14	33	5		52
9															
計%						2	42	52	99		52	43	5		100

大川遺跡出土土師器の胎土分析

松本 建彦（筑波大学大学院）

はじめに

以下に、余市町大川遺跡出土土師器の胎土分析結果について報告する。方法は誘導結合プラズマ発光分光分析による。また、分析の結果と東北部各地の同時代遺跡出土の土師器・粘土の分析値との比較をおこなった。その結果、以下の点が明らかになった。(1)ロクロ土師器は青森県津軽地方周辺で製作された可能性が高い。(2)「奉」の略字体と考えられる文字が刻まれたロクロ土師器と、器表面に墨書されたロクロ土師器は、津軽地方の製品と考えられる。(3)7世紀代の製品と考えられる内黒高坏は、岩木川流域か、米代川流域のものである可能性が高い。

1. 胎土分析

(1) 方法

分析は、プラズマ発光分光分析法を用いた。本分析では、土器の形態・製作技法・大きさなどの比較もおこない、土器製作者の技術についても、あわせて考察するため、分析の対象とした土器は、できる限り完形品に近い出土品を用いた。その関係で、分析に用いる土器破片の採取は、できる限り少量であることが求められた。ゆえに、少量の試料でも分析が可能なプラズマ発光分光分析法を用いた。

用いた装置は、筑波大学共同分析センター所有の日本ジャレル・アッシュ製誘導結合プラズマ発光分光分析装置Inductively Coupled Plasma Atomic Emission Spectrometer(以下では、ICP-AESと略す)である。

(2) 試料作成

土器から1cm四方ほど試料を採取。その後、土器破片表面を電動やすりで研磨し、0.5gほどを採取する。それを瑪瑙乳鉢で粉砕・播潰す。播潰された粉末を0.05g秤量し、蓋付きのテフロン容器に入れる。それに、硝酸、過塩素酸、フッ酸を1:1:2の割合で加える。その後、蓋を閉め、容器ごと試料を130度ほどの熱で6時間以上加熱する。次に、蓋を開け、250度ほどの熱で蒸発乾固させる。乾固された試料に塩酸を加え、250度ほどの熱で、塩酸を蒸発させる。こうしてできた試料に、1規定硝酸を加え、100度ほどで緩やかに加熱する。試料が完全に溶けていることを確かめた後、1規定硝酸を加え、1000倍に希釈し、50gの溶液試料を得る。

また、内黒土師器のように、意図的に炭素を胎土内にしみ込ませた個体や、土器焼成技術・状況との関係で、胎土内に炭素がしみ込んだ個体については、乳鉢での粉砕・播潰しの後、マッフル炉を用いて500度で2時間加熱し、炭素を除いたものを試料とした。

(3) 実験

(2)のようにして得られた溶液試料を、ICP-AESで定量分析した。定量には、あらかじめ定量され、その値が公表されている標準試料を用いて、検量線を引き、定量する方法を用いた。用いた標準試料は、地質調査所配付岩石シリーズの、JA1、JB1、JG1a、JGB1、JR1、JSD1である。分析値は、重量%・ppmで示した。分析の対象とした元素は、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Ba、Cr、Cu、La、Li、Sc、Sr、V、Y、Zn、Zrの20元素である。

(4) 結果と考察方法

分析によって得られた元素濃度の値を表1に示した。そして、%オーダーで含まれる主要元素と、主要元素と相関の高い微量元素（普通含まれる量は1000ppm以下）を用いて相関図を作り、試料ごとに比較考察することとした。相関図を作る指標として、①Ca/Na+KとK/Ca+Na、②Ti/Al+Fe+MgとK/Ca+Na、の二つの関係を基本に用い、場合に応じてSr/Caを加味した図を作成した。これらの指標の値は表2に掲載した。

①の元素の組み合わせは、主に、長石の種類を反映する違いを見るための設定である。②の元素の組み合わせは、モンモリロナイト・パーミキュライト・緑泥石のようなAl・Si・Oの他にFe・Mg・Tiといった元素を含む有色鉱物由来の粘土鉱物、あるいは有色鉱物の砂などの各元素の割合の違いを見るために選んだ設定である。

2. 考察

(1) 土器の胎土分析による産地推定が可能である根拠

考察の最初に、土器の胎土の成分元素を分析することによって産地推定が可能であると考えられる根拠について明らかにしておく。

これまで筆者が分析した東北北部の試料のうち、青森県弘前市下恋塚遺跡の土器焼成遺構（弘前市教育委員会1996）や青森県五所川原市の犬走須恵器窯・砂田D須恵器窯（工藤清泰ほか1999）から採集された試料の場合、津軽地方に広く分布する第四期粘土層である前田野目層の成分に近い。また、青森県浪岡町の遺跡から出土する土師器は、浪岡町に厚く堆積する第四期粘土層の成分に近い。これらのことから一般化すると、土器製作者は製作地周辺から素地を集めていた場合が多いはずである。また、津軽地方や千歳市周辺を歩いて粘土層を観察した結果では、土器の素地として用いられる可能性のある粘土・砂は、第四期層のものであった。東北北部・北海道南部の場合、地表から近い粘土層や露頭で見られる粘土層の大部分は第四期層であると考えられる。したがって、遺跡周辺の第四期層の性質が、土器素地の性質を決めることになる。

東北北部・北海道南部の第四期層の大半は、火山噴出物に由来する。それに、13万年以降の褐色ローム層には中国からの広域風成塵も加わる（購澤ほか1994）が、火山が近くにある場合、土を構成する主要な成分は、やはり火山噴出物由来のものである。東北北部や北海道南部は、馬

海山火山帯・那須火山帯に属しており、それらに属する火山の噴火による噴出物は多量にある。したがって、土器胎土の主な成分は、その土器が作られた地域に存在する、ある火山の噴出物に由来するはずである。火山ごとに噴出物の成分特徴があるならば、その噴出物の広がる範囲ごとに、土器の成分もまとめることができるはずである。

東北部や北海道南部の第四紀層は主に火山噴出物によって形成されているので、以上には、火山噴出物のことを多く記述したが、それぞれの地域によって、その表層地質の由来は異なっているだろう。しかし、いずれにしても、土器の素地に用いられるような表層地質の由来さえ把握されていれば、表層地質の成分の違いによる地域分けは可能である。それができていれば、土器成分分析とその結果を総合することにより、土器の産地推定は、ある程度可能なのである。

このことが、土器の胎土分析による土器産地の推定が可能である根拠である。

(2) 大川遺跡出土のロクロ土師器と非ロクロの製品

図1のように、①の相関図では、大川遺跡出土のロクロ土師器とそれ以外の技術による製品とは、大きく二つの別領域に別れる。ロクロ製品は、Kが高く、Caが低い製品が多く、そして、非ロクロの技術のものは、Kが低く、Caが高い製品が多いためである。ただし、例外はある。ロクロ土師器の1・24はKが低く、Caが高い領域に入る。また、34(高坏)はロクロを用いていないが、Kが高く、Caが低い。この内黒高坏は、他の非ロクロ使用製品よりも古く、7世紀台と考えられるものである。

粘土は、余市町黒川遺跡の遺構検出面より下の層で採取されたものを1点分析した。分析値は、Kが低く、Caが高い。1点ではあるが、これは、余市町周辺の地質を反映していると考えられるので、Kが低く、Caが高いというのが余市町周辺の地質の性質と考えることができる。

また、余市町沢町遺跡から出土した8世紀代の土師器についても分析したところ、大川遺跡の非ロクロ土器と似た傾向である(図1・2)。したがって、非ロクロ土器は、余市町周辺の粘土・砂を用いて製作されたと考えられる。

一方、ロクロ土師器の大部分と、7世紀代の内黒高坏は、余市町外からの移入品である。次に、大川遺跡出土のロクロ土師器と内黒高坏の生産地について、東北部～北海道中部の土師器との比較の結果から考えてみる。

(3) 東北部・北海道南部出土土師器・須恵器の地域区分

図3は、筆者がこれまでにICP-AESによって分析した600点余りの7～12世紀代の土師器・粘土の分析値に基づく、指標①の相関図である。それによると、東北部では、秋田市や津軽地方の日本海側ほどKが高くCaが低いことがわかる。そして、太平洋側の八戸市ではCaが高くKが低い。北海道南部渡島半島では、日本海側の試料しか得ていないが、渡島半島日本海側と北海道中部石狩低地帯を比べると、日本海側はKが高く、Caが低い。それに対し、石狩低地帯は、

Ca : Kが1 : 1に近い。日本海側と比べると、相対的にはKが低く、Caが高い傾向がある。

このように、土器胎土の場合、日本海側ほどKが多く含まれ、太平洋側ほどCaが多く含まれる傾向がある。同じ技法による器種であることを考慮すると、この値の変化は、文化的差ではなく、自然環境の差を忠実に反映していると考えらるべきである。生出(1988)によると、東北日本では、Kの量は西高東低である。また、巽(1995)によれば、海溝側から日本列島背弧に向かって、K量が高くなる傾向があるが、それは、それぞれの地域のマグマの性質を反映していると考えられている。このように、土器の胎土の成分は、土器が出土した遺跡周辺の地質を反映しているのである。

図4は、東北北部・北海道南部全試料の指標②の相関図である。これを用いれば、指標①の図では細分できなかった東北北部地域を、秋田市・大館市・津軽・八戸市のように分けることが可能である。指標①の相関図では、かなり近い位置にあった北海道央部と津軽地方も、きれいに分けられる。津軽地方はTiが高いが、北海道央部はTiはあまり高くはないのである。

図3・4のように、東北北部と北海道南部の土器の胎土成分は、地域ごとにまとまりを持つ。図3の傾向が、マグマ成分の傾向と同じであることから、土器胎土成分の地域ごとのまとまりは、それぞれの遺跡周辺の地質を反映したまとまりと考えられる。したがって、まとまりを飛び越えた例外として存在する個体については、移入品と考えることができるのである。例えば、大川遺跡のロクロ土師器は大川遺跡の土師器・北大式土器とは異なるまとまりに属している。また、内黒高坏も単独で、別のまとまりの中に入っている。これらは、主要な複数の元素による分類であるため、偶然の結果とは考えられない。

(4) 大川遺跡出土のロクロ土師器と内黒高坏の産地推定

図5・6は、秋田市・大館市・弘前市・八戸市の代表的な遺跡の土器と大川遺跡の土器を比較したものである。それらから、大川遺跡のロクロ土師器の大部分は、津軽地方の土師器(ロクロ・非ロクロ)のまとまりに属することがわかる。だが、24だけ少し離れた位置にあり、津軽地方の土師器であるとは簡単に断言できない。指標①②を見る限りでは、八戸市周辺の可能性も考えることができるが、指標③の図7を見ると、Sr/Caの値は津軽地方のものに属している。SrはCaに付随して存在するので、同じ産地の同じ鉱物に属している場合はSr/Caの値は近い値になると考えられる。このことから考えると、24は八戸市周辺のものでもない。24はいまのところは産地不明としておく。

「奉」の略字体が刻まれた内黒土師器(28)や、器表面に墨書された内黒土師器2点(27・30)も津軽地方のものと考えられる。

一方、7世紀代の内黒高坏は、津軽の一般的な土師器とは異なる地域のものである可能性がある。無理をして津軽の中で考えるならば、五所川原市須恵器窯に供給していた粘土層の値に最も近い。五所川原市須恵器窯の成分とほぼ同じ粘土層は、五所川原市内に存在するので、その成分

を持つ土師器が存在しても良いことにはなるが、これまでの分析結果では、津軽においては、土師器と須恵器とは明らかに異なる成分である場合がほとんどである。

時期は異なるが、12世紀後半の大館市矢立廃寺遺跡出土の手づくね・ロクロかわらけの値は、内黒高坏の値に非常に近い(図5・6参照)。ただし、矢立廃寺遺跡出土のかわらけは、使用される機会が限られた器なので、これらのかわらけが使用地である矢立廃寺遺跡近くで作られたとは簡単には言えない。成分から考えると五所川原周辺で作られた可能性もあろう。また、大館市周辺と津軽地方西部とは同じ起源の粘土が存在する可能性もある。大館市周辺の粘土を調べていない現在、以上のようなことから、内黒高坏については、津軽地方だけではなく、大館市、能代市などの米代川流域地方も考慮に入れて考える必要がある。いずれにしても、東北部日本海側で、秋田市よりも北であろうと推測できる。岩木川流域か米代川流域であろうと述べておく。

(5) その他

試料に含まれていた元素の量から気がついたことに、Pを多く含む個体が多いという点がある。これまで筆者が分析した粘土・土壌の場合だと、Pは0.2%以下しか含まれない元素である。余市町内の黒川遺跡から採集された粘土にもPは0.16%ほど含まれていただけである。だが、大川遺跡出土の土師器には1~3%ほどPを含むものがある。これは、特別高い値である。大川遺跡から直線距離にして4kmほどしか離れていない沢町遺跡出土の8世紀代の土師器にはPは0.1%以下しか含まれていない。このことと黒川遺跡採集の粘土の値から考えると、素地製作時にPを含むものを加えているのか、あるいは使用の結果Pが胎土中に染み込むのか不明だが、意識的であれ、無意識的であれ、人為的に加わったものである可能性が高い。

おわりに

北海道余市町大川遺跡出土の北大式土器・擦文土器・土師器の胎土の成分元素から考えられたことを以上に述べてきた。在地の技術で作られた土器については、おそらく地元の粘土や砂を材料として作られたものと考えられた。だが、9~10世紀代のロクロ土師器については、すべて東北部からの移入品であり、そのほとんどは津軽地方のものと考えられた。

7世紀後半代のもとの推測できる内黒高坏も、岩木川流域か米代川流域のものとの推測された。現在までのところ、そのあたりには、津軽半島北西部の市浦村十三中島遺跡以外に7世紀後半代の遺跡は知られていない。だが、『日本書紀』の記述では、7世紀後半代斉明天皇期に津軽や能代のエミシが複数回登場する。津軽・能代地方でも、今後7世紀代の遺跡が発見される可能性があろう。

【謝辞】 分析の機会を与えてくださいました余市町教育委員会に感謝いたします。また、比較の基礎資料として用いた東北部・北海道南部の土師器・須恵器は、次の機関・教育委員会が保管するものを分析させていただきました。北海道大学埋蔵文化財調査室、札幌市教育委員会、千歳市教育委員会、奥尻町教育委員会、上ノ国町教育委員会、松前町教育委員会、中里町教育委員会、青森県埋蔵文化財調査センター、漁町町教育委員会、弘前市教育委員会、八戸市教育委員会、大館市教

育委員会、秋田市教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター。貴重な資料を提供いただいたことを感謝いたします。

引用文献

- 生田慶司 1988『大山と釜蓋』 築地書館
 黒澤好博・佐井清治・八幡正弘・濱田智俊 1994『西南北海道—東北地方北部に広がる後期更新世の広域風成塵堆積物』
 『地質学雑誌』100巻12号 pp.951-965
 工藤清春ほか 1998『大走原遺跡発掘調査報告書』 五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書第21集
 栗 好幸 1995『沈み込み帯のマグマ学』 東京大学出版会
 弘前市教育委員会 1996『下巻』

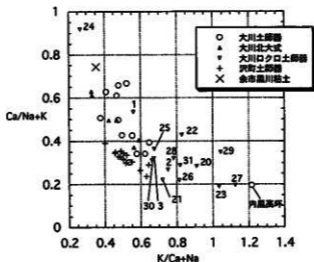


図1 指標① 大川遺跡・沢町遺跡出土土器

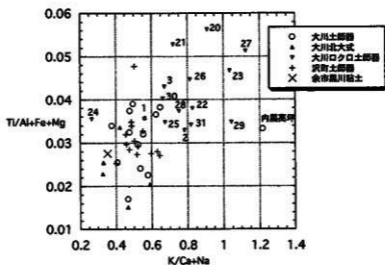


図2 指標② 大川遺跡・沢町遺跡の土器

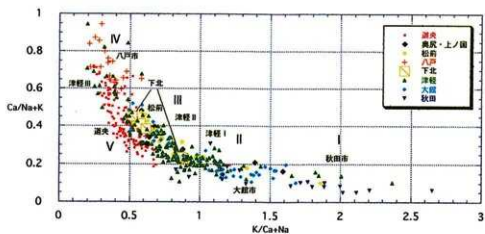


図3 指標①による東北北部・北海道南部の土師器・須恵器・粘土

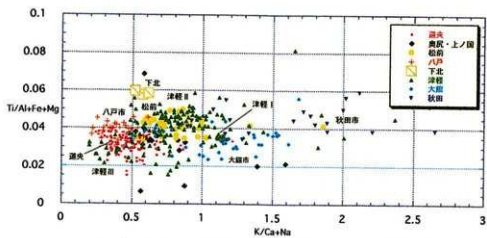


図4 指標②による東北北部・北海道南部の土師器・須恵器・粘土

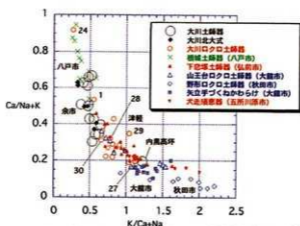


図5 指標① 大川遺跡出土土器と東北部土器の比較

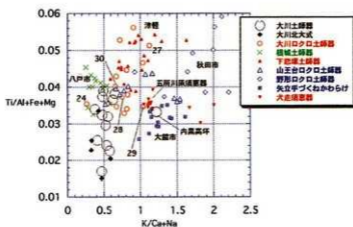


図6 指標② 大川遺跡出土土器と東北部土器との比較

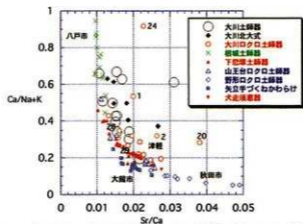


図7 指標③ 大川遺跡出土土器と東北部土器との比較

表1 大川遺跡・沢町遺跡出土土器の土質分析値

サンプル名	器種	採取位置	TI	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	In	Cr	Cu	La	Li	Sc	Y	Zn	ppm
大川1004	縄文灰	①14段-3	0.432	10.7015	3.1905	0.0284	0.0228	1.2684	1.4231	1.3254	0.4018	508	42	19	20	31	20	194	160	15
大川1005	縄文灰	①14段-3	0.434	13.8965	3.6554	0.0345	0.4901	1.0691	1.0629	0.2913	355	29	19	17	15	112	113	80	18	128
大川1006	縄文灰	①14段-10	0.4645	10.3002	3.2660	0.0412	1.1832	1.7840	1.2439	1.4372	0.5073	478	82	24	25	17	26	188	28	103
大川1007	縄文灰	①14段-10	0.4625	9.3027	3.0290	0.0258	0.4666	1.1233	1.4778	1.2217	0.3081	466	81	33	15	17	21	123	134	57
大川1008	縄文灰	①14段-1	0.3734	11.4808	3.3770	0.0291	0.8205	1.0363	0.9397	1.1646	0.5613	392	59	26	18	22	24	120	106	107
大川1009	縄文灰	①14段-1	0.3739	11.6481	3.1991	0.0507	0.8398	1.0068	1.1449	1.1969	0.6933	462	41	36	21	20	20	151	152	19
大川1010	縄文灰	①14段-6	0.4920	10.7806	3.1719	0.0426	0.4841	1.2038	1.0787	1.7197	0.475	447	47	17	24	21	22	150	116	23
大川1011	縄文小皿	①14段-6	0.4951	10.2062	3.0475	0.0475	0.9171	1.4501	1.6827	1.1795	0.8566	447	47	17	21	22	168	126	17	
大川1012	縄文小皿	①14段-3	0.4984	11.4251	4.7991	0.0563	0.6148	1.4753	1.2432	1.0607	0.6007	565	30	23	20	23	17	247	100	22
大川1013	縄文土器	①14段-1	0.5187	10.0509	4.7000	0.0697	0.7191	1.2925	1.4077	1.1299	0.8752	491	31	18	21	21	187	131	21	
大川1014	縄文土器	①14段-10	0.5177	9.9978	3.8827	0.0547	0.9542	1.2608	1.2582	1.2582	1.2582	730	25	16	11	22	246	119	21	
大川1015	縄文土器	①14段-10	0.4488	10.9175	3.7821	0.0599	0.5512	1.7890	1.6960	1.3222	1.4867	774	28	12	31	18	225	50	30	
大川1016	縄文土器	①14段-18	0.4284	11.4439	4.9666	0.0829	0.7122	1.7279	1.6052	1.3718	1.8295	643	30	17	31	20	251	103	39	
大川1017	縄文土器	①14段-8	0.2612	14.0834	2.7863	0.0425	0.3791	1.8708	1.6241	1.1126	1.3077	487	17	13	12	13	161	62	12	
大川1018	縄文土器	①14段-7	0.3707	12.3644	2.7166	0.0266	0.3051	1.8106	1.6241	1.1291	1.8097	484	22	14	12	17	15	480	49	
大川1019	縄文土器	①14段-4	0.4609	8.9059	3.6623	0.0174	0.3205	1.1869	0.9811	1.2316	1.3058	438	48	16	19	28	16	203	88	
大川1020	縄文土器	①14段-4	0.4604	10.8513	3.4991	0.0225	0.3496	1.0778	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1021	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1022	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1023	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1024	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1025	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1026	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1027	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1028	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1029	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1030	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1031	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1032	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1033	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1034	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1035	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1036	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1037	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1038	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1039	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1040	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1041	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1042	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1043	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1044	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1045	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1046	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1047	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1048	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1049	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1050	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1051	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1052	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1053	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1054	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1055	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1056	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25
大川1057	縄文土器	①14段-4	0.4913	12.1923	2.9430	0.0177	0.3549	1.0692	0.9233	1.1525	0.7958	354	44	14	23	47	23	136	153	25

表2 大川遺跡・沢町遺跡出土土器の胎土成分元素比率

サンプル名	器種	掲載図No	Ti/Al+Fe+Mg	K/Ca+Na	Ca/Na+K	Sr/Ca	備考
大川No.04	椀文環	④194図-3	0.0324	0.4741	0.4982	0.0142	
大川No.05	椀文長胴壺		0.0241	0.5360	0.3025	0.0187	
大川No.06	椀文長胴壺	④189図-10	0.0374	0.4777	0.6583	0.0106	
大川No.07	椀文長胴壺		0.0366	0.8233	0.3428	0.0154	
大川No.08	椀文長胴壺	④193図-1	0.0382	0.6477	0.3946	0.0150	
大川No.09	椀文長胴壺	④192図-7	0.0320	0.5523	0.4261	0.0150	
大川No.10	椀文長胴壺	④192図-6	0.0390	0.4943	0.4274	0.0154	
大川No.11	椀文小型壺		0.0340	0.3765	0.5066	0.0115	
大川No.12	椀文中型壺	④193図-3	0.0255	0.4075	0.6268	0.0168	
大川No.13	北大Ⅲ長胴壺	④188図-1	0.0335	0.4221	0.4949	0.0146	
大川No.14	北大Ⅲ長胴壺	④188図-10	0.0359	0.5612	0.3716	0.0266	
大川No.15	北大Ⅲ長胴壺	④188図-16	0.0228	0.3252	0.6285	0.0128	
大川No.16	北大Ⅲ長胴壺		0.0254	0.3295	0.6121	0.0145	
大川No.17	北大Ⅲ長胴壺	④186図-8	0.0151	0.4648	0.4959	0.0181	
大川No.18	北大Ⅲ長胴壺	④186図-7	0.0205	0.5880	0.4042	0.0185	
大川No.19	土師器中型長胴壺?	④190図-5	0.0170	0.4657	0.6113	0.0310	
大川No.01	ロクロ赤焼き坏	④194図-6	0.0356	0.5591	0.5347	0.0199	
大川No.02	ロクロ赤焼き坏	④194図-5	0.0329	0.7818	0.3215	0.0264	
大川No.03	ロクロ内黒坏	④194図-4	0.0430	0.6705	0.3210	0.0195	
大川No.20	ロクロ内黒坏	③253図-4	0.0562	0.9096	0.2836	0.0380	
大川No.21	ロクロ内黒坏	③253図-12	0.0528	0.7205	0.2210	0.0213	
大川No.22	ロクロ内黒坏	③253図-14	0.0380	0.8272	0.4285	0.0131	
大川No.23	ロクロ内黒坏	③254図-1	0.0466	1.0342	0.1897	0.0246	
大川No.24	ロクロ内黒坏	③254図-2	0.0355	0.2652	0.9181	0.0227	
大川No.25	ロクロ内黒坏	③254図-5	0.0347	0.6747	0.3637	0.0137	
大川No.26	ロクロ内黒坏	③254図-6	0.0466	0.8139	0.2183	0.0227	
大川No.27	ロクロ内黒坏		0.0513	1.1227	0.1958	0.0274	遺品資料「x」
大川No.28	ロクロ内黒坏		0.0373	0.7518	0.2681	0.0185	新字資料「事」
大川No.29	ロクロ内黒坏		0.0348	1.0428	0.3482	0.0161	新字資料「事」
大川No.30	ロクロ内黒坏	②244図-20	0.0402	0.6607	0.3108	0.0158	遺品資料「x」
大川No.31	ロクロ内黒坏		0.0341	0.8179	0.2892	0.0217	
大川No.32	椀文内黒坏	③253図-1	0.0296	0.5219	0.6667	0.0153	
大川No.33	椀文内黒坏	③252図-10	0.0226	0.5770	0.3416	0.0188	
大川No.34	土師器高坏	③253図-10	0.0333	1.2161	0.1961	0.0216	
沢町No.01	土師器内黒坏	①15図-1	0.0276	0.5945	0.2647	0.0195	
沢町No.02	土師器内黒坏	①15図-2	0.0327	0.5495	0.3043	0.0180	
沢町No.03	土師器壺	①16図-8	0.0319	0.4550	0.3432	0.0185	
沢町No.04	土師器内黒坏	①19図-2	0.0280	0.6302	0.2369	0.0214	
沢町No.05	土師器内黒坏	①19図-3	0.0285	0.4757	0.3277	0.0183	
沢町No.06	土師器内黒坏	①19図-4	0.0292	0.5210	0.3368	0.0160	
沢町No.07	土師器内黒坏	①22図-1	0.0348	0.4861	0.3266	0.0181	
沢町No.08	土師器内黒坏	①22図-2	0.0253	0.4017	0.3915	0.0164	
沢町No.09	土師器壺	①22図-3	0.0296	0.4579	0.3496	0.0170	
沢町No.10	土師器長胴壺	①25図-2	0.0273	0.5163	0.2989	0.0185	
沢町No.11	土師器長胴壺	①27図-9	0.0271	0.6424	0.2901	0.0171	
沢町No.12	土師器長胴壺	①27図-10	0.0339	0.4870	0.3541	0.0172	
沢町No.13	土師器中型壺	①26図-7	0.0305	0.5017	0.3159	0.0178	
沢町No.14	土師器中型壺	①26図-8	0.0477	0.5030	0.3447	0.0171	

(註1) 余市町青木延広氏所有の大川遺跡周辺での採集品

- ※ 掲載図No.中、①は「沢町遺跡」、
 ②は「大川遺跡における考古学的調査Ⅰ」、
 ③は「大川遺跡における考古学的調査Ⅱ」、
 ④は「大川遺跡における考古学的調査Ⅳ」である。

黒色土器の再検討

小嶋 芳孝 (石川県埋蔵文化財センター)

はじめに

本稿は、1993年度の概報原稿¹⁾に最近の研究状況を加筆して、大川遺跡の黒色壺について再検討を試みるものである。

図1は、大川遺跡の1991年度調査で10世紀前後の縄文文化期の竪穴住居跡附近から出土した黒色壺である。この資料は、短く直立する頸部がやや外反して口縁になる短頸壺で、器高12cm・口径11.5cm・胴部径15cm・底径7.2cmをはかる。外面は体部上半を右上がり斜方向に磨き、器表が光沢を持った黒色を呈している。内面は下半をクテ磨きし、上半を横磨きしている。

北海道余市町の大川遺跡で、渤海の可能性がある黒色土器が出土しているというニュースを知ったのは1991年の秋だった。さっそく宮宏明氏に電話をかけて問い合わせたところ、

実測図のコピーを送っていただいた。1992年の2月には、余市町を尋ねて黒色土器を手にすることができた。その時に宮氏から伺った話では、縄文文化にこのような形状の土器がないとのことだったので、渤海とは断定できないが、大陸の臭いがする資料という印象を持った。その後、1993年度の概報に黒色土器について見解をまとめるよう宮氏から依頼を受け、「中国東北地方の渤海土器について—大川遺跡出土の黒色壺を考える—」と題した小文をまとめた。この時は、大川遺跡出土の黒色土器と比較するために中国で出土している渤海土器の様相について整理を行った。結局、断定することはできなかったが、形状が類似していることから、大川遺跡出土の黒色壺が渤海末ないし女真の土器に比定できる可能性を指摘してこの時の検討は終わっている。

その後、青山学院大学の田村晃一教授が主催する調査に参加する機会に恵まれて、1994年からロシア沿岸地方へ出かけるようになり、女真の土器にも多く触れることができた。当初は大川遺跡の黒色壺と形状が類似していることに気を取られていたが、次第に沿岸地方の黒色土器の胎土が粗いことなど、大川遺跡の黒色壺との相違点に気がついてきた。本稿は、これまでの見聞を元に大川遺跡出土の黒色壺形土器を再検討するものである。

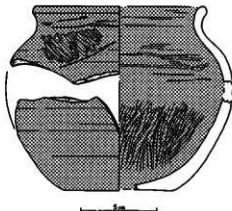


図1 大川遺跡出土黒色壺

1 中国における渤海土器研究の現状

渤海の民族的起源について、唐を構成する諸民族とりわけ北方の靺鞨諸族が主体となっていたという中国と、高句麗人が主体となっていたとする朝鮮民主主義人民共和国や大韓民国の研究者との間に見解の対立がある。渤海土器の評価にもこの対立は反映されている。

中国では渤海遺跡や出土資料に関する研究が精力的に進められており、その成果を李陳奇氏が「靺鞨—渤海考古学的新進展」（『北方文物』1999年第1期）で紹介している。図2は、『黒龍江区域考古学』¹²⁾に掲載されている中国の研究者が作成した渤海の土器編年である。この編年は、渤海墓から出土した土器を整理したものである。この表では渤海を早・中・晩に分期し、その前段階に靺鞨時期において渤海土器の基本組成が靺鞨時期に成立しているとの理解が示されている。その後、金太順氏が「渤海墓葬研究的几个問題」（『考古』1997年第2期）のなかで渤海の墓制研究の前提として渤海土器の編年案を提示している。金太順氏の編年は、渤海の墳墓を考察するための前提として墓地から出土した土器を検討したものである。

韓国・北朝鮮の研究者による編年表には未だ接していないが、朱榮憲氏は高句麗の土器組成や形状が渤海に引き継がれていると主張している¹³⁾。日本では足立拓朗氏が「渤海前期の「靺鞨系土器」について」（『青山考古』第17号2000年）で、靺鞨をを中心に詳細な編年を行っている。

渤海を構成する民族の帰属論争に係わる能力を筆者は持たないが、大川遺跡の黒色壺が渤海土器とどのような関係を持つかを考えるために、本稿では、公表されている資料の中から基準資料となり得るものを掲げて、渤海土器の概要を整理してみたい。






















靺 鞨 期	水引扁屯						
	早 期						敦化六頂山
海 期	中 期			遼寧大城子			
	晩 期					和龍北大	

図2 渤海陶器分期図

2 渤海土器の検討

中国東北地方の渤海土器を検討するに当たって、中国東北地方を南部・中部・北部に区分した。検討に当たっては、高句麗晩期の年代指標となる遺跡も対象に含めた。

南部地域：遼河下流域と鴨綠江流域を含む遼寧省東部・吉林省西南部を対象。

中部地域：図們江流域と牡丹江上流域を含む吉林省延辺朝鮮族自治州・黒竜江省牡丹江市を対象。

北部地域：第二松花江中流域を含む吉林省北東部を対象。

(1) 南部地域

① 高爾山山城（遼寧省撫順市）⁽¹⁾ [図5 上段]

撫順市の北部丘陵にある高句麗時代の山城で、遼金時代の遺構や遺物も検出されている。高句麗以降の土器が混入している可能性は否定できないが、おおむね高句麗晩期の土器様相を知ることができる。1が挾砂陶で、他は全て泥質灰陶である。3・6・7は黒色土器。壺2・3・6や鉢5の横把手が、前代からの高句麗土器の特徴を伝えている。壺にはロクロ調整が見られるが、坏や鉢には非ロクロ調整のものが多い。壺7には開元通宝（初鑄621年）七枚が入っており、この土器群の上限年代を知ることができる。土器組成は貯蔵具・食膳具で構成され、煮沸具は見られない。

② 六隊遺跡（吉林省集安市民主村）⁽²⁾ [図5 中段]

高句麗前期の宮都として知られる吉林省集安市の北郊、鴨綠江右岸の河岸段丘に立地する。住居跡と思われる落込みから、土器が一括して出土している。泥質灰陶が多く、黒色陶は見られない。横把手がつく壺、長頸壺、碗などが出土している。高爾山山城の横把手壺に較べると肩がやや丸くなり、器高が低くなっており、鉄華・林至徳らによって高句麗晩期ないし渤海と位置付けられている⁽³⁾。高爾山山城の出土資料と土器組成は共通しており、貯蔵具・食膳具が主体で煮沸具は見られない。高句麗と渤海をつなぐ重要な資料である。

(2) 中部地域

① 北大墓群（吉林省延辺朝鮮族自治州和竜県）⁽⁴⁾ [図5 中段]

図們江に注ぐ海蘭河が開析した頭道盆地の西部にあり、付近に渤海最初の都城である中京顕徳府に比定される西古城がある。土器は甕・壺・碗がある。甕は二重口縁の上端部が発達し、下端部は形骸化して、上京龍泉府に類似した甕が出土している。1990年に延辺博物館を訪問した時には、出土した土器が展示されていて観察することができた。報告でははっきりしないが、5・6・8は黒色土器の可能性が高い。また、9は褐釉の掛かる双耳瓶である。このほか、三彩碗が出土している。南部地域と異なり、土器組成に煮沸具が加わっている。

② 六頂山墓群（吉林省延辺朝鮮族自治州敦化市）⁽⁵⁾ [図4 4・5]

牡丹江上流の、敦化市南部の六頂山にある墓群。宝曆七（780）年銘の墓誌をもつ貞恵公主墓

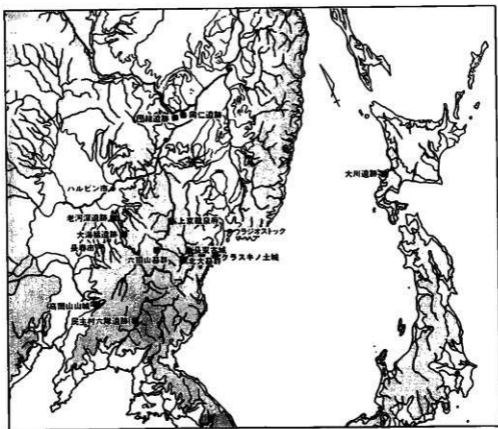


図3 渤海関係の基準遺跡の位置

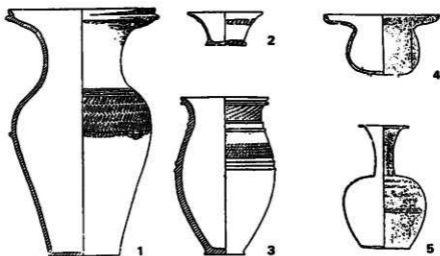


図4 同仁遺跡(1~3)と六頂山墓群(4・5)の土器

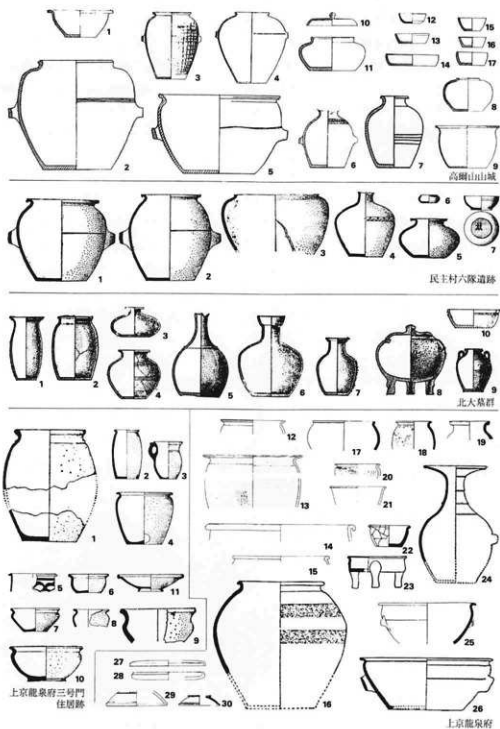


図5 高句麗・渤海の土器 (縮尺 約1/12)

があるが、この古墳から土器の出土は報告されていない。図4の鉢4と長頸壺5を出土した墓は貞直公主墓と同一群にあり、8世紀後半から9世紀代に造営されたものと思われる。

1963年10月に行われた中朝合同調査の報告は、1966年に平壤の社会科学院出版社から『中国東北地方の遺跡発掘報告 1963-1965』が刊行され、1997年に北京の中国社会科学院考古研究所から『六頂山与渤海鎮』が刊行され、それぞれの報告には出土した土器が掲載されている。土器を概観すると、煮沸具のいわゆる鉢罏甕が多く、盤・鉢・壺なども見られるが灰陶系の土器である。

なお、朱采憲の『渤海文化』⁽⁹⁾にもこの時の調査成果が紹介されており、六頂山墓群出土の甕や壺が図示されている。これらの土器は、第二墓区から出土したものを中心としており、『黒龍江区域考古学』では六頂山第二墓区出土の土器が渤海早期に編年されている。

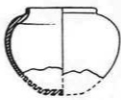
③上京龍泉府（黒龍江省牡丹江市）⁽¹⁰⁾ [図5 下段]

牡丹江中流の東京城盆地中央に位置する。第三代渤海王の大欽茂が、8世紀中葉に中京顕徳府から遷都して宮都として整備した。785年に東京龍原府に遷都し、大欽茂が亡くなった793年に再び上京龍泉府が宮都とされ、926年に契丹に滅ぼされるまで渤海の都城として使用された。

図下段の1~11は三号門内側の住居跡から出土した資料で、他は東亜考古学会（12~15・17~22・25・27~30）と中朝合同調査団（16・23・24・26）が調査した資料である。三号門住居跡の資料は、大型の甕1や小型の甕2・把手付深鉢などにみるように、甕特有の二重口縁は形骸化している。

東亜考古学会の調査資料は、東京大学に出土した土器の一部が所蔵されており、図中の12~15・20・21は、筆者が東大で実測したものである。12・13は、口縁端部を横方向へ引出した甕である。12の内面は灰色がかった黒で、内面の黒色処理は不明瞭である。13は内外面を黒色処理し、胴部外面には横方向の磨きの上に縦方向の強い磨きが行われ、器面は光沢をもっている。14は、直立する胴部から口縁が下方に折れのびた灰陶の大型深鉢。15は、口縁端部が短く丸みを持っておわる灰陶。27~30は、合子状容器の身と蓋である。いずれも、軟質の胎土と焼成で、29の外表面は黒色に処理されている。

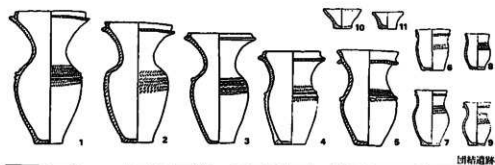
1963年と1964年に行われた中朝合同調査の報告は、前に紹介したように平壤と



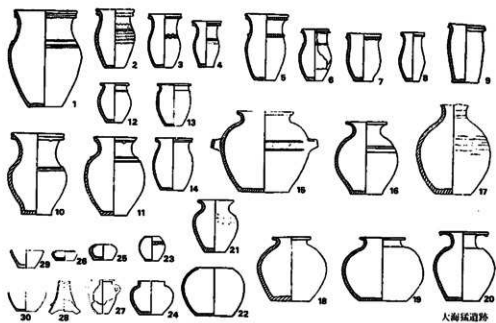
0 5 cm
(『六頂山与渤海鎮』から転載)



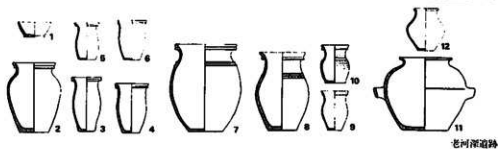
図6 上京龍泉府出土の黒色壺



仰光遺跡



大海盆遺跡



老河深遺跡

図7 蘇軾・渤海?の土器 (縮尺 約1/12)

北京でそれぞれ刊行され、出土した土器が掲載されている。掬とされている食膳具は灰陶系の土器が多く、磨きは施されていないようである。煮沸器に相当する罐は、報告書に掲載された数が少ない。器形は二重口縁の甕形で、酸化焼成された挟砂土器である。この二種以外の鉢・壺・甕・甗などは灰色か黒灰色を呈し、器表が丁寧に磨かれている。黒色処理をされた土器の比率が高いようである。この現象が土器組成を反映しているのか、または完形品だけを運んで掲載したことによるのか、報告書から読み取ることはできない。

大川遺跡の黒色壺との比較で注目したいのは、図6に掲載した短頸壺である。口径5.2cm・胴径8.6cm・底径2.2cm・器高6.5cmで、体部から短く立ち上がる口縁と、球形の体部を持ち、器表は黒色処理されて丁寧に磨かれている。

(3)北部地域

①大海猛遺跡（吉林省永吉県）¹¹¹ [図7 中段]

第二松花江にのぞむ微高地にある遺跡。1979年と1980年に調査され、墓坑や住居跡が検出されている。C14年代測定で、AD.415±85年のデータがでている。土器は挟砂陶の甕形土器と灰陶の甕形土器、挟砂陶の碗がある。甕の二重口縁の下端に刻みが入り、体部上半には平行沈線・刻文・突帯などがある。大型品と小型品の二種がある。壺型土器は灰陶が多く、ロクロ調整が見られる。横把手を持つ壺15がある。26の小壺は非ロクロで作られ、部分的にロクロ調整をしている。泥質の黒色土器で、器表は磨きで光沢を持っている。29と30の碗は、非ロクロの挟砂陶器である。

②榆樹老河深遺跡（吉林省榆樹県）¹¹² [図7 下段]

大海猛遺跡の下流の、第二松花江に沿った微高地にある墓地遺跡。土器組成は基本的には、大海猛遺跡と同じである。横把手壺は、泥質で黒褐色陶である。33号墓（図7下段・婁10副葬）から「五行大布」が一枚出土しており、この墓坑の上限年代を知ることができる。この貨幣は、574年（北周武帝の建徳3年）に初鋳されている。

2 渤海土器の様相と年代観

表1は、渤海の年代論を考えるに当って基準となる遺跡と、その年代観を示したものである。全体を南部・中部・北部の三地区にわけ、年代順に遺跡を配置した。

南部地域 遼寧省東部から吉林省南部を南部地域とした。この地区では、高句麗晩期の7世紀中葉に高爾山山城があり、民主村六隊遺跡の土器は形式的にはその後継に続き、7世紀後半に比定できると思われる。高爾山山城と民主村六隊遺跡の資料には、挟砂陶の靺鞨甕が含まれておらず、横把手のついた壺などが多いなど高句麗系の土器組成がかなり明確に現れている。また、黒色土器も高句麗土器には一般的に見られるものであり、高爾山山城の資料にも含まれている。この地域では、高句麗が滅亡した668年以降の土器の様相はあまり分からなくなるが、集安市博物館には市内出土の靺鞨甕が展示しており、8世紀に入るとこの地域にまで靺鞨甕の使用が及んでいた

ものと思われる。

中部地域 吉林省延辺朝鮮族自治州と黒龍江省寧安県を含む中部地域は、渤海の中核部でもある。7世紀に遡る良好な資料は知られておらず、公開されている資料は7世紀後半の六頂山墓群、9世紀の北大墓群、8世紀後半と9～10世紀の上京龍泉府などがある。この内、上京龍泉府の出土資料は最も豊富な内容をもっている。北大墓群や上京龍泉

世紀	南部地域		中部地域		北部地域	
	遺跡名	年代	遺跡名	年代	遺跡名	年代
6世紀					同仁遺跡 団結遺跡	540～670
7世紀	高爾山山城 民主村六隊遺跡	621+			大海猛遺跡 老河深遺跡	(415±85) (574+)
8世紀						
			西京城	742～750?		
			上京龍泉府	757～785		
			貞惠公主墓	780		
			八道城	785～793		
			貞孝公主墓	792		
			北大墓群			
9～10世紀			上京龍泉府	793～926		

表1 中国北東部の6～10世紀の基準遺跡

府の土器には靺鞨甕が含まれ、横把手の跡が見られる。また、黒色土器もかなりの高率で含まれている。上京龍泉府の土器組成は豊富な様相を持っているが、この状況が9世紀前後の渤海遺跡全般の傾向を示すのか宮都の特徴なのか検討を要する。

北部地域 吉林省北東部と黒龍江省北部を含む北部地域は渤海の北側辺境に位置し、6～7世紀の良好な資料が出土している。黒龍江流域の同仁遺跡・団結遺跡は、6世紀代の靺鞨系土器の標識資料である。団結遺跡の土器は大小の二重口縁壺と小型甕・坏があり、高爾山山城で見られるように多様な器種構成や黒色土器は見られない。大海猛遺跡上層ではC14年代測定では5世紀代の結果が出ているが、7世紀前半に比定する高爾山山城や民主村六隊遺跡と形態が類似する横把手の壺や広口壺などが見られ、あきらかに団結遺跡よりは新しい様相を呈している。同仁遺跡や団結遺跡の段階では明瞭に器種分化していた壺と甕は、大海猛遺跡上層の段階では器種分化が崩壊して両者の識別が困難になり、いわゆる靺鞨甕が成立している。大海猛遺跡の壺口縁下端に見られる垂下裝飾は見られないが、土器の形状や組成は574年のデータを持つ老河深遺跡上層ともほぼ共通している。これらの状況から、大海猛遺跡上層と老河深遺跡上層の実年代はC14年代測定結果よりも新しい7世紀代におくのが妥当と思われる。

大海猛遺跡や老河深遺跡は高句麗と靺鞨世界の交錯する所にあり、7世紀代に靺鞨系の人達が高句麗文化を受容した結果が両種の要素を併合したような土器組成になったものと思われる。渤海後期の北大墓群や上京龍泉府の土器組成は靺鞨甕と横把手土器や黒色土器を含んでおり、渤海土器の源流を大海猛遺跡に代表される第二松花江流域の7世紀代の遺跡に見ることができる。

3 クラスキノ土城出土の黒色土器

ロシア沿岸地方南部のハサン区クラスキノ村にある土城は、渤海の港湾関係遺跡と考えられており、1990年代に入ってロシア科学アカデミー極東支部の歴史学考古学民族学研究所が調査を進めている。筆者は田村晃一青山学院大学教授を代表とする日ロ共同調査隊に参加する幸運を得て、1995年から調査に加わることができた。

クラスキノ土城は北朝鮮と中国に近く、ボシエツト湾の最奥部に広がる低湿地に造営されている。周囲には長辺約350mの城壁をいびつな四辺形にめぐらし、城内には寺院や瓦窯、鍛冶炉、井戸、区画石墓などが検出されている。寺院区画の南部で検出された井戸から、渤海末期ないし女真初期の土器が一括で出土している。

この資料は、E. И. Гельман (ゲルマン)、В. И. Болдин (ボルディン)、А. Л. Ивлиев (イブリエフ) による『クラスキノ土城の井戸発掘』で報告されている⁽¹⁾。井戸底に横材二段の木組みを置き、その上に石組を構築している。土器は、井戸から完形で出土している。黒色処理された壺を主体とし、片面を扁平にした扁壺や表面に櫛歯文状の暗文を残した長頸壺、底径を大きくとって体部が甕鐘状となる壺などがある。このうち、18の短頸壺は器高9.3cm・口径9.6cm・胴部最大径が約15.1cm・底径8.7cmで、大川遺跡の黒色壺に類似した器形を持っている。21の土器は、図では台付皿として表現されているが、輪状鈕をもつ蓋の可能性もある。内外面を黒色処理されており、胎土は混和剤が少なく精良である。三上次男によれば、櫛歯文状の暗文は遠代の土器に特徴的にみられるものであり、扁壺や甕鐘状の体部などとともに、渤海滅亡直後(10世紀前半)の土器群に比定できる可能性が高い。一方、8の小型直口壺や21の輪状鈕をもつ蓋などは渤海的な様相を持っており、井戸の使用期間が渤海後期から女真初期に相当する9世紀後半から10世紀前半と推定できる。ちなみに、22は木椀である。

4 北日本出土の黒色土器

『1993年度大川遺跡調査概報』で大川遺跡出土の黒色壺を検討したときには、北東北や北海道で黒色壺はほとんど使用されておらず、また生産もされていないという前提で考察を行った。一時は、北東北で出土している黒色壺がすべて大陸系とされる風潮もあったが、秋田県の雀館遺跡⁽²⁾と秋田城跡、青森県の長谷遺跡⁽³⁾と山王台遺跡⁽⁴⁾、北海道の美々8遺跡⁽⁵⁾、ウバトマナイ沢⁽⁶⁾で出土した黒色土器を検討してきたところ、いずれも渤海や女真系土器とは無縁と判断している。

雀館遺跡では、球形の胴部に細頸を伴う黒色壺が10世紀の土器と共に井戸から出土している。長谷遺跡では、土坑から9世紀後半に比定される三個の項患器壺と共に黒色壺が出土しており、北日本における黒色土器の年代を考える上で重要な資料である。肩が張った体部と、削りだし高台を持つ底部、頸部から短く立ち上がる口縁などが特徴で、渤海や女真系土器には類例が見られない。美々8遺跡の黒色壺は包含層から出土しており、年代を特定することができない。胴部の

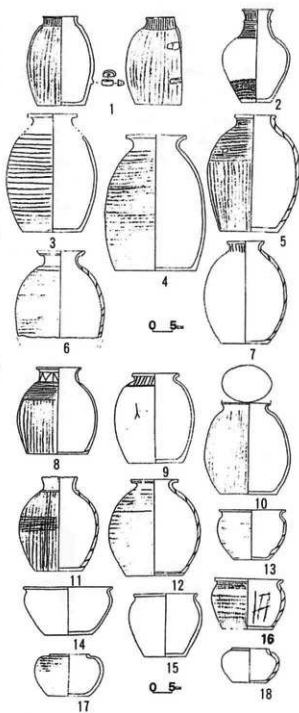
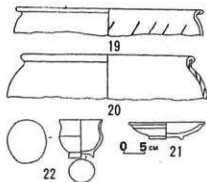
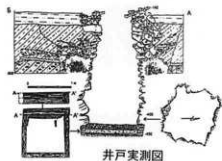
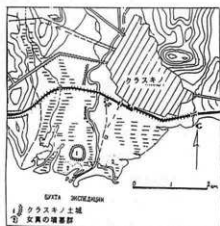


図8 クラスキノ土城の井戸と出土資料

最大径は体部中央からやや下であり、肩が張らず頸部が大きく開き、口縁は斜めに外反している。ウバトマナイ沢の黒色壺は、高台を持つ底部と、粘土紐巻き上げ痕の凹凸が顕著な器表が特徴である。この土器については、オホーツク文化や樺文の土器には類例がなく、またロシア沿海地方の女真土器からも類例を見いだすことはできず、帰属がまったく不明である。

山王台遺跡は、米代川中流の大館盆地にある9世紀後半～10世紀初頭の集落跡である。この遺跡の竪穴式住居跡から、両面黒色の壺と椀が出土している。図10の土器1は8号住居跡から出土し、肩が広がる体部から頸部が外反して長くのびる黒色壺である。頸部外面は、粘土紐の痕跡が残る上を縦方向に磨き、頸部と体部との付け根部分は磨きの「上」を横方向にナデている。内面は、頸部を右上がり方向に磨き、体部と頸部との接点是指ナデし、体部は横方向のハケ調整をおこなっている。外面の全体と内面の頸部を黒色処理し、内面の体部は暗灰褐色を呈している。胎土はざらついた質感があり、最大で 3×2 mmの砂礫を多く含んでいる。土器2は4号住居跡から出土し、底径7.1cmの壺底部である。体部と底部の外面を黒色処理している。体部外面は右斜め上がりに磨き、底部外面は粗面となっている。底部内面は指押さえとナデ調整し、暗灰褐色を呈している。胎土はねっとりとした質感があり、最大で1mmの砂礫を少量含んでいる。土器3は1号住居跡から出土した、口径16.6cmの椀である。内外面を黒色処理して丁寧に磨いている。胎土は

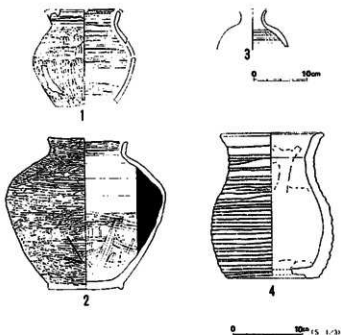


図9 東北、北海道出土の黒色土器

1. 美々8遺跡 2. 長谷遺跡 3. 雀館遺跡 4. ウバトマナイ沢

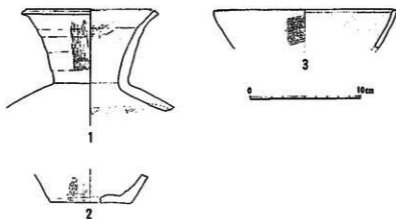


図10 山王台遺跡出土の黒色土器

ややざらついているが、砂礫が少なく精良である。山王台遺跡では、黒色壺2点のほか内外面黒色の椀が多数出土しており、土器3はその中の代表的な事例である。山王台遺跡出土の椀には、土師椀系の土器と赤焼土器の二種があり、土師椀系土器のほとんどが両面黒色処理を施されている。山王台遺跡から出土した土器にみられる黒色土器のありかたは、今のところ大館盆地以外では確認できていない。米代川流域の古代土器組成における黒色土器について、今後研究を進める必要がある。いずれにしても、大館盆地では黒色壺や両面黒色椀の使用頻度が高く、秋田城をはじめ雀館遺跡や長谷遺跡など、北東北で出土した黒色壺の産地同定については、米代川流域の土器と比較分析を進める必要がある。山王台遺跡や長谷遺跡、秋田城、雀館遺跡などで出土した黒色壺は、9～10世紀頃の北東北では、土師器の一組成として黒色土器が少量生産されていた可能性が高いことを示している。

5 大川遺跡出土黒色壺の再検討

大川遺跡の黒色壺の帰属を考えるに当たって、最初に検討する必要があるのは日本産の可能性である。これまでに検討したように、青森県や秋田県で出土している黒色壺は北東北で作られた可能性が高い。北海道では大川遺跡のほかには、千歳市美々8遺跡とウバトマナイ沢の二例を検討した。ウバトマナイ沢の事例は、先にも述べたように帰属が不明な土器であり、大川遺跡の黒色壺とは系譜が異なっている。美々8遺跡の土器はやや胴長の丸をもった体部で、大川遺跡の黒色壺と系譜的には近い可能性がある。北東北の黒色土器は、大館盆地の様子が示すように北東北で生産された可能性が高いが、大川遺跡と美々8遺跡の黒色壺については、産地を考える材料が現状では不足している。今後、北東北の黒色土器と胎土の比較分析を進める必要がある。大川遺跡の黒色壺のような器種は樺文土器の組成には含まれていないので、少なくとも現状では北海道産とは考えられない。

大川遺跡の黒色壺は、器表の調整はともかくとして、プロポーシオンが渤海末から女真早期の土器に似ていることから、概報でその所属を推定した。しかし、その後の検討で概報で比較資料として提示した長東古城の土器は女真初期ではなく、おそらく11世紀から13世紀のいずれかの時点で使用された典型的な女真土器で、10世紀初頭と推定されている大川遺跡の黒色壺より新しい時期の土器であることがわかってきた。大川遺跡の黒色壺は、胴部から上の形状だけを見ると典型的な女真の壺型土器に類似点はあるが、球状の体部は女真土器に見ることがない器形である。女真の壺型土器は口径より底径が大きく、胴下半を切って底部にした梵鐘形の体部が特徴であり、底径が口径より小さく球形の胴部をもつ大川遺跡の黒色壺と比較すると、形状が異なっている。また、大川遺跡の黒色壺は胎土が精良・軟質で、混和剤が余り見られないが、女真系土器はもう少し粗い胎土をもっている。大川遺跡の黒色壺は典型女真土器に較べて作りが丁寧で、時期的にも同時代資料とは考えられないことから、11世紀以降の女真土器との関係は考えられない。

先に紹介したように、球形の体部を持つ黒色壺は渤海の上京龍泉府跡とクラスキノ土城で出土している。ウラジオストクのロシア科学アカデミー極東支部歴史学考古学民族学研究所で、クラスキノ土城の井戸から出土した黒色土器を観察することができた。混和剤が少なく精良な胎土で、器表は細かく磨いており、暗文のみられる土器もあるなど、典型的な女真土器に比べて丁寧な作りである。先にも述べたように、この土器群は中国の遼代に比定できる土器も含んでおり、10世紀前半の初期女真に比定できるものと思われる。口径が底径より小さく球形の胴部を持つという点では、上京龍泉府跡やクラスキノ土城出土の黒色壺と大川遺跡の黒色壺は共通する器形を持っている。混和剤の少ない精良な胎土という点でも共通しており、大川遺跡の黒色壺の帰属を考える上で重要な資料と考えている。しかし、この種の球形胴部を持つ黒色壺の報告例が少なく、渤海の壺型土器にしめる量がよくわからないのが現状で、器形の類似性だけで大川遺跡の黒色壺の帰属を決めるのは早計と考えている。

これまで述べてきたように現在の視点で大川遺跡の黒色壺を再検討すると、渤海末期ないし女真早期の黒色壺と器形が類似していることが明らかになった。しかし、器形の類似性だけで産地同定をすることは危険である。大川遺跡の黒色壺の帰属を判断するには、胎土分析が有効な手段であるが、比較資料をロシア沿岸地方で求めるとともに、北東北の黒色土器にも求めてさらに検討を進める必要があると考えている。

おわりに 本稿では、中国領内の渤海土器を理解するために年代の基準となる資料を検討し、高句麗系と棘鞆系の二種の土器文化が複合して渤海土器が成立したことを明らかにした。大川遺跡の黒色壺は、現状の資料からは渤海末ないし女真早期の土器の可能性を否定することはできず、最終的な判断は今後の資料の蓄積や胎土分析の進展に待ちたい。

渤海関係の資料収集に当っては、平井尚志先生をはじめ上野佳世先生や藤本強先生のご配慮で東京大学に所蔵されている東亜考古学会の上京龍泉府調査資料を実見することができ、また、中

国吉林省文物考古研究所や黒龍江省文物考古研究所をはじめとする中国の諸先生や、ロシア科学アカデミー極東支那や極東大学の諸先生には、資料や遺跡の見学の際に親身なお世話をいただくなど、多くの方々のご指導やご協力を得た。また、1994年から青山学院大学の田村晃一教授の研究チームに参加することができ、ロシア沿岸地方の渤海や女真の遺跡や出土資料を実見することができた。国内の黒色土器の検討に当たっては、北海道埋蔵文化財センター、大館市立博物館、秋田県立博物館、青森県立埋蔵文化財センターのご協力を得ることができた。記して感謝の意を表します。

多くの諸先生や機関のご協力のご指導を得て黒色土器の検討を進めてきたが、依然として曖昧な結論しか出せない筆者の不勉強をお許しいただきたい。

(1)「中国東北地方の渤海土器について－大川遺跡出土の黒色壺を考える－」『1993年度大川遺跡発掘調査報告』北海道余市町教育委員会1994年

(2)譚英傑・孫秀仁・趙虹光・干志秋『黒龍江区域考古学』中国社会科学出版社1991年

(3)朱榮憲『渤海文化』雄山閣出版1979年

(4)徐家國・孫力「遼寧撫順高爾山山城発掘簡報」『遼海文物学刊』1987年2期

(5)集安県文物保管所・董長富「吉林集安発見一処渤海時期遺址」『北方文物』1985年4期

(6)耿鉄華・林至徳「集安高句麗陶器の初步研究」『文物』1984年1期

(7)延辺朝鮮族自治州博物館・和竜県文化館「和竜北大渤海墓群清理簡報」『東北考古与歴史』1982年1期

(8)王承礼・曹正捨「吉林敦化六頂山渤海古墓」『考古』1961年3期

王承礼「敦化六頂山渤海墓群清理発掘記」『社会科学戦線』1979年3期

(9)註3文献

00原田淑人 他『東京城』東亜考古学会1939年

黒龍江省文物考古研究所・趙虹光「渤海上京宮城内房址発掘簡報」『北方文物』1987年1期

01吉林市博物館・陳家槐「吉林市永吉楊屯大海窪遺址」『考古学集刊』第5集1987年

吉林市文物工作隊・吉林市博物館・永吉県文化局「吉林市永吉楊屯遺址第三次発掘」『考古学集刊』第7集1991年

02『檢樹老河深』吉林省文物考古研究所編1987年

03『ロシア沿海州渤海遺跡』大陸研究所(ソウル)1994年

04Е. И. Гельман, В. И. Болдин, А. Л. Ивланов「РАСКОПКИ КОЛОДЦА КРАСКИНСКОГО ГОРОДИЩА」『ИСТОРИЯ И АРХЕОЛОГИЯ ДАЛЬНЕГО ВОСТОКА』(ウラジオストク)2000年

05船木義勝「秋田県五城目町の菅館古代井戸から出土した黒色土器」『秋田県立博物館研究報告』第21号1996年

06『長谷遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告第241集1998年

07『大館市山王台遺跡発掘調査報告書』大館市教育委員会1990年

08『美沢川流域の遺跡群Ⅲ』(財)北海道埋蔵文化財センター1996年

09小嶋芳孝「北海道における女真系遺物の検討」『渤海との交流を示す考古資料の材質分析的研究』田村晃 一編 平成10・11年度科学研究費補助金研究成果報告書2000年

文房・刃物・飲食の石製品

堀内 光次郎（石川県埋蔵文化財センター）

この大川遺跡からは、硯、温石、砥石、石皿、石臼、石灯籠など多様な製品が出土しているが、なかでも硯、砥石、石臼の3種類は、中・近世の生活遺跡では、一般的に出土する石製品である。またこれらの製品は、その石質と色合いなどの特徴から、産地と品質が知られると同時に、硯が遺跡に暮らした住人の文房具、砥石は住人の保持した刃物類に関する道具、石臼は住人の飲食に関する家財道具として整理できる考古学資料でもある。

1 硯

中世から近代の遺跡から出土する硯は、列島の各地に所在する硯産地の硯職人が製造したもので、和硯と総称されてきた文房具である。このため石質や形状を整理すると、産地の同定が比較的可能性な製品であると共に、硯の法量から知られる製品規格、硯の石質に連動した品質や硯面の形状に基づくところの形態的な品質も判明し、消費者である住人の文化的な性格や階層をも反映した資料である。

本遺跡出土の硯を石質や刻銘などに基づき整理すると、滋賀県の高嶋硯、山口県の赤間関硯、山梨県の雨畑硯などの硯産地の製品群と、産地が不明の硯の4群に分類同定することができる。このため産地別に遺物の特徴と生産地の概要を報告するものである。

(1) 高嶋硯（第1図1～3）

高嶋硯は黒色系の和硯を代表する長方形態の硯で、本遺跡では約20面が出土している。

1は裏面中央に「本高嶋虎斑石」の線刻銘をもつ製品で、長さ15.2cm（五寸）、幅7.6cm（二寸五分）を測ることから、「五寸平」の規格に該当する硯である。硯面や銘文の形状から判断すると18世紀後半から19世紀前半頃の製品とみられる。銘文の虎斑石は、高嶋の硯石にある呼称名で、青灰色の岩石中に黄色の斑紋が入る特徴から生まれた呼称と言われている。千枚岩や粘板岩に分類される岩石で、硯石としては高嶋第一の石材で、高嶋硯の代名詞として知られていた。

2は裏面を長方形に挟るタイプの硯で、「高嶋玄口」の線刻銘が見られる。1の虎斑石に比べ、黒色の色合いが濃く、硬質で虎斑も認められない。高嶋には虎斑石に次ぐ硯石として、玄生石と呼ばれてきた硯石があり、銘文はこの玄生石に該当する可能性が高い。

3は長さ13.6cm（四寸五分）、幅7.5cm（二寸五分）を測り、「四五平」の規格に該当する硯で、19世紀後半期の製品と見られる。石質は暗灰色に近い粘板岩で、斑文も少なく、軟質な石材である。その質感と色合いからして、高嶋でも安価な硯石とされてきた中石である可能性が高い。

この高嶋硯の生産地は、琵琶湖の西岸に位置する高島郡安曇川町周辺の村里で、江戸時代に地元硯問屋を中核とする産地体制を整え、大きく発展した硯産地として知られている。その製品は、安曇川町西方の阿弥陀山で採掘した虎斑石などを使い、文人が重用した工芸品的な硯から、学童の学習硯まで幅広い製品群を産出していたが、それらは縦横とも五分刻みの法量規格に基づく規格品であった。このため江戸遺跡をはじめとして、北海道から北部九州に所在する近世遺跡から出土している高嶋硯は、法量規格と石質に拠る品質に整理することが可能である。

(2) 赤間関硯 (第1図4～6)

赤間関硯は赤色系の和硯の中でも生産規模が大きい産地で、本遺跡でも6面が出土している。

4・5は、暗赤褐色を呈する赤色頁岩を研削した硯で、赤間関硯を代表する紫雲石しうんせきに同定することができる。4は手前の縁を欠損するが、長さ15.6cm(五寸強)、幅7.4cm(二寸五分弱)を測り、「五五平」の規格に該当するものと考えられる。5は長さ14.7cm(五寸弱)、幅7.2cm(二寸五分弱)を測り、「五寸平」規格の製品と判断できる。

また2面とも「赤間関」の刻銘を裏面に備えているが、この刻銘は赤間関硯の職人が、硯の仕上げをした後に、産地銘だけを片切彫りに彫り込んだものである。強い右上がり呈する字形は、赤間関硯特有のもので、18世紀後半から19世紀前半代の製品に見受けられるものである。

6は緑灰色を呈する硯石で、赤間関硯で殿様石の異名をもつ紫金石しうんせきに同定することができる。幅8cm(二寸五分強)を測り、「平」の規格品である可能性が高く、裏面に産地・職人名・印影などを彫り込むタイプの硯と考えられる。

刻銘にある赤間関とは、山口県下関市の旧称名で、その一角に位置する赤間神宮周辺の岩山から採掘した用材を研削してきた西日本最大の硯産地である。赤色系の和硯を生産してきた産地の中でも、その生産規模が大きく、輝緑凝灰岩や赤色頁岩しうせきに分類される岩石を硯石に使用してきた。使用する硯石は、色合いと質感から紫石しうせき、紫雲石しうんせき、紫青石しうせいせき、紫玉石しういせき、紫金石しうんせきの五種類に分けられているが、生産の中心は紫石や紫雲石である。

この赤間関硯の硯面形状、特に陸から海の境目となる「ムネ」(赤間関硯の呼称)の造りは、「鳩ムネを最良とする」と言われるが、この部分形状は唐硯が常備のもので、赤間関硯が唐硯の影響下で生産を開始したことを意味する技術形態と理解されている。赤間関硯が、和硯の産地の中でも生産の歴史が古いと言われている要因である。またその背後には、赤間関が九州や中国大陸との交通で要衝として機能した歴史に拠るところが大きいとも推測できる。

今日、赤間関硯の生産は、下関市内に於いても存続しているが、江戸中期に生じた硯石の枯渇を契機として、硯石の採掘地として開発された厚狹郡楠町西万倉周辺へも移動している。また製品の出土は、西日本に偏在し、東日本では少ない。江戸遺跡を含め点的な出土であり、本遺跡の6面は出土数としては多い方である。やはり、その成因は西回り海運と総称される物流に拠るもので、松前町の福山城跡でも定量の赤間関硯が出土している事も同一の様相と理解している。

(3) 雨燗硯 (第1図8)

雨燗硯とは、山梨県に生産地がある硯で、本遺跡では6面が出土している。

8は長さ13.6cm(四寸五分)、幅7.9cm(二寸五分)を測ることから、「四五平」規格の硯と見定めることができる。裏面の隅に産地を示す「雨燗」が線刻されている。また表面は黒色を呈するが、これは仕上げ塗装に因るもので、石質は暗灰色の泥岩質、もしくは頁岩質である。形態面では、四隅が丸い「角丸」形状で、縁の内側が角張り、海の彫り込みも浅く、硯面の仕上げなどは、高嶋硯に比べ粗く簡略化されている。その特徴から他の5点とあわせて19世紀後半期の製品と考えられる。

この雨燗硯は、富士山の西方山麓を流れる富士川沿いにある身延山近く位置する山梨県南巨摩郡早川町雨燗地区で生産が開始された硯である。当初は雨燗地区の岩山で採掘した硯石を研削していたが、生産の拡大と共に良質石材の枯渇が起り、その後は宮城県産の玄昌石を加工し、雨燗硯として販売している。また生産の中心も雨燗地区から同郡織沢町鬼島地区へ移行し、一部は甲府市まで広がりを見せている。生産品の主力は学童硯などの安価な硯が多い。

(4) その他の硯 (第1図7・9~12)

遺跡から出土する硯は、列島の各地で活躍した硯職人の研削に拠る硯と、消費地の住人が欠損した硯や硯石に近い砥石などを加工した硯に分けることもできる。7・9~11は前者で、12は後者に属する硯である。

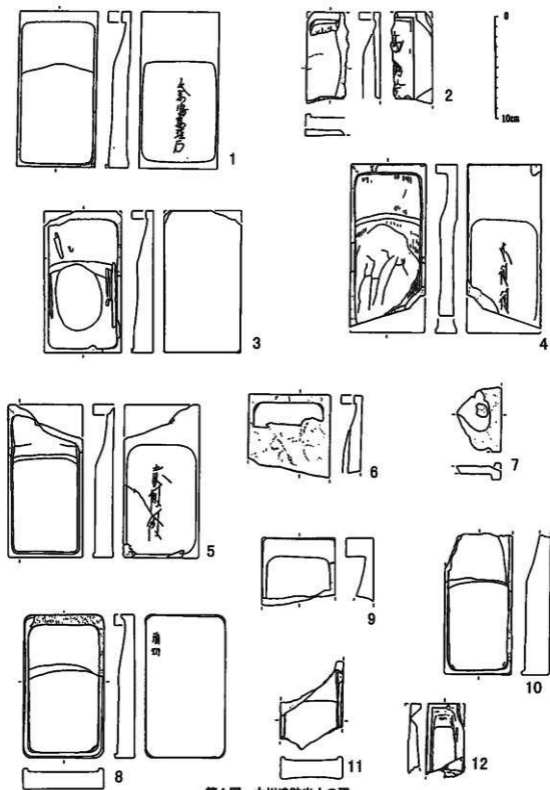
7は裏面の両側に台を削り出した硯で、16世紀代の京都鳴滝硯と認められる。本遺跡で出土した硯の中では、最古の製品である。

9・10は中砥石で知られる熊本県の天草砥を用材として、硯職人が研削した硯で、江戸後期頃の遺跡から時おり出土するものである。この天草砥とは、熊本県天草郡大矢野町江樋戸の明治山で採掘が続く流紋岩質凝灰岩の砥石で、西日本を代表する中砥石として広く使用されているが、硯の研磨にも使用された砥石である。そのため9・10の細部形状と各地での出土様相を考え併せると、おそらく高嶋硯の職人が手持ちの天草砥を研削し、大量に産出した高嶋硯の付録として配布した硯製品とみられる。

11はいわゆる人造硯である。外面は黒色塗料で仕上げられているが、内部は明灰色の凝灰岩質を呈し、人造砥石と同質のものである。また表裏には研削の痕跡は無く、型作りであることも明らかである。20世紀前半期の一時期に和硯の代用品として生産された文具品である。

12は硯面を加工したノミ跡が確認できる程に削りが粗い硯である。用材は刃物の仕上げ砥石として知られている京都の鳴滝砥石の中でも暗赤褐色を呈する鳴滝岩である。おそらくは手先が器用な住人が、欠損していた鳴滝砥を硯へと改変したものである。

本遺跡出土の硯を生産地別に整理したが、その歴史的な推移は、次のように考えられる。まずは遺跡に於ける硯の使用は、16世紀の鳴滝硯からと見定めると、陶磁器の消費よりも大きく遅れ、



第1図 大川遺跡出土の鏡

18世紀までの期間その消費点数も少ない。商人などの識字者の活動も限定的であったことを窺わせている。そして18世紀中頃から高嶋硯の継続的な使用が広まり、19世紀前半頃には高嶋硯に加えて赤間硯が、文化的な嗜好品として西回り海運を介して新たに持ち込まれる。19世紀後半になると関東との物流を介して、雨畑硯が搬入されている。また雨畑硯の消費者は、学童である可能性が高く、当地での学制施行に連動する文房具として位置づけることも可能である。

2 砥石

砥石は刃物の生産と使用のためには不可欠な道具で、素材は石材であるが、刀や鎌、鑿や包丁などの刃物文化を支えると共に、硯や漆器生産の場でも必ず使用されてきた石の消費遺物である。さらに道内では砥石の産地は知られていない事からすると、遺跡出土の砥石の大部分は、列島の各地にある砥石山で採掘され、当地へ搬入し消費された石の道具である。石質から荒砥石、中砥石、仕上げ砥石の三者に基本分類すると共に、色合いや質感から産出地の同定もほぼ可能と考えている。出土品は使用による変形と欠損を受けているが、その形状を刃物の特徴と対比してみると、相方の刃物などを復元することにつながる。

(1) 荒砥石 (第2図1・2)

1・2は小口に整形痕が残る荒砥石である。1は大村砥で、石英砂粒が均一な淡黄色の砂岩である。かつて長崎県大村市松島町地内で採掘された砥石が全国に流通していた。本遺跡の出土砥石からすると使用以前の法量は、長さ七寸、幅三寸五分であったと判断できる。なお現在流通している大村砥の生産地は和歌山県田辺市で、明灰色の石英砂岩が大村砥の名前で販売されている。

2は赤褐色を呈する粗粒の砂岩で、被熱による変色の可能性がある。大村砥の近くで、採掘地名の小字から「笹口」と別称される大荒砥とみられる。しかし石質粒子の質感からすると肥前の唐津砥である可能性もある。

荒砥石は刃物を主体とする金属製品をはじめ、石製品や骨角製品などを整形するような荒研ぎに使用する砥石で、古くから粒子が整い異物の混入が少ない砂岩が使用されている。本遺跡では大村3・4に対し、笹口1の比率で出土しているが、その使用の際は、刃物生産を目的とした小鍛冶であった可能性が高い。また時代は不確定な点が多いが江戸中期以降とみられる。

(2) 中砥石 (第2図3～8)

凝灰岩質の石材を中心とする中砥石は、多様な刃物の研ぎと調整に使用できる砥石であることから、本遺跡をはじめ消費地では最も多く出土する砥石である。

3は黄白色に弱い流紋と白色粒が認められ、表裏が鎌砥の様に深く研ぎ込まれている。熊本県の備水砥とみられ19世紀以降である可能性が高い砥石である。

4・5は灰白色に赤褐色の弱い石紋が入る凝灰岩で、本来は角棒形態の中砥石である。研ぎ面

の湾曲や歪みは少なく、細身で扁平な刃物類の研ぎに使用された可能性が高く、18世紀頃の砥石とみられる。その質感と石紋からすると、群馬県沼田市周辺で採掘されていた上野砥が、仕上砥石の代用品として出荷した上質の中砥石ともみられる。また5の砥石は、東北の出羽周辺部で採掘された可能性を残している。

6は赤褐色を呈しているが、これは被熱による変色とみられる。四面とも深く湾曲する状況にまで使い込まれ、鎌砥の形状を呈する。その質感からして、熊本県産の天草砥である可能性があり、中世的な形状を呈する。おそらく16～17世紀の鎌用砥石であろう。

7・8は薄い灰緑色を呈する流紋岩質の凝灰岩で、黒褐色のシミ状の石紋が入る。群馬県産の上野砥とみられる。7は両側よりも表裏の方が深めに研ぎ込まれているが、その形状は角棒に近く、4に近似した使用形態が窺える。また8は両側面に整形時の小割痕を留めている砥石で、砥石の切出し時の幅が、二寸五分であったことが知られる。19世紀以降の中砥石と理解している。

なお本遺跡から出土する砥石の中に、明灰白色の川原石を砥石に使用した遺物が多く認められるが、これは既成の砥石製品などでは無く、時代は不詳ながらも遺跡の前を流れる余市川流域で採取した川原石を中砥石の代用品とし転用した遺物であろう。

一般に中砥石の研ぎ面形状は、相方である刃物の幅や刃部の反り具合を反映する場合が多い。6のように研ぎ面の使い込みが深く、四面とも軽く捻れたような中砥石は、「鎌砥」と呼ばれ、鎌の専用砥石として使用した砥石に生じる形状である。これは鎌の刃部が片刃で、全体に反りを持つ特徴に起因するものである。したがって農村的な遺跡ほど、この形状の中砥石の占有率が高いことが判明している。しかし本遺跡の中砥石は、研ぎ面が平たく、細長い形状の遺物が多い。

この研ぎ面に対応する刃物としては、片刃で腰刀よりも扁平で幅が広いものを想定しているが、製品を特定するまでには至っていない。

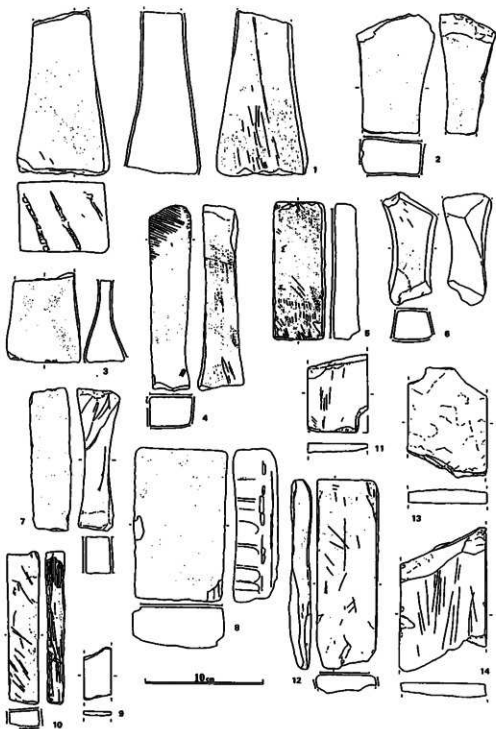
(3) 仕上砥石 (第2図9～14)

仕上砥石は泥岩や細粒の凝灰岩に分類されている岩石で、いずれも京都の鳴滝産とみられる砥石である。その質感から鳴滝砥の中山砥や奥殿砥などに細別することもできる。

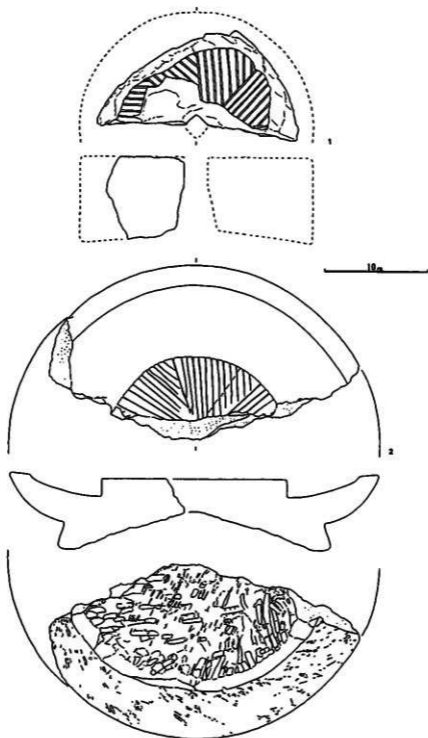
9・10は両側に鋸目を残す鳴滝砥で、幅一寸未満であるところから、16世紀頃の製品である可能性が高い。9は幅2.3cm(七分)、10は幅2.8cm(九分)を測り、共に本来は角棒形態であったことが知られる。また色合いは異なるが、共に鳴滝砥の一群である中山砥とみられる。

11は幅5.1cm(一寸七分)を測り、赤橙色に近い石色を呈する。薄く自然剝離を生じているが、これは被熱による可能性がある。12は幅5.3cm(一寸七分)を測り、小口が残る中山砥とみられる。石色はオリーブ灰色を呈し、両側と小口の鋸目は水平で細かく、二人挽きの弦路による切断と考えられる。

13は奥殿砥とみられる砥石で、幅6.3cm(二寸一分)を測り、14は幅7.4cm(二寸四分)を測る。またこれらは、横幅の拡大化を知ることができる資料で、幅が二寸五分の規格品と見定められる



第2図 大川遺跡出土の砥石



第3図 大川遺跡出土の石臼

仕上砥石が多く出土している。

本遺跡でみられるような仕上砥石の横幅の拡大は、ほぼ中世末まで、長さ六寸幅一寸前後の規格品であったものが、近世の前半期に拡大化を呼び起こし、幅二寸五分にまで拡大したと理解している。またその成因は、太刀の生産減少と刀の直刀化、台鉋など木工具の普及と発展と言われている。それはこの鳴滝砥を主体とする仕上砥石が、中世以降の刀、剃刀、鉋など、刃先の繊細な研ぎが求められた刃物の生産と保持に不可欠な砥石であった事に他ならない。

このように砥石は、その石質と形状に注意を向けると、砥石を消費した人々の刃物文化の概要が知られると共に、生産地の同定を介して、広域流通した商品として捉えることも可能となる。たとえば明治10年（1899）の第1回内国勲業博覧会に砥石を出品した産地を確認すると、北の青森県から南の熊本県まで、149箇所を数える事が知られている。今後は、各地方ごとに中世から近世の消費遺跡から出土した砥石類の整理と研究を深めると、砥石の消費状況が判明し、遺跡に暮らした住人の刃物揃えや刃物文化の概要が、より明らかになるものと考えている。

3 石臼（第3図1・2）

石臼は中世後期に普及した石の製粉用具で、主に屋内で使用され、家財の一つにも数えられた石製品である。穀類の製粉を目的とした粉挽臼と、葉茶の粉末化の専用品である茶臼に大別できるが、本遺跡からは、粉挽臼5点、茶臼4点が出土している。各臼とも形態と石質からすると、各々二組の個体を想定することができる。

1は粉挽臼の下臼で、石材は暗赤褐色を呈する角閃石安山岩とみられるが、側面は被熱により剝離を生じている。臼目は八分画で、摩滅の度合いは弱く、使用の痕跡は少ない。輪木穴は角張り、石質と形態の特徴からして、16世紀中頃から17世紀初め頃に搬入された製品と考えられる。

2は茶臼の下臼で、石材はにぶい赤褐色を呈する輝石安山岩である。石目は緻密で、花崗岩質に近いものである。臼面で径17.9cm（六寸弱）、受皿径36.4cm（一尺二寸）である。臼目は八分画であるが、数度の目立てにより、目の間隔と分画に捻れを生じている。石質と形状からすると、16世紀代に西日本で生産され広域に流通した茶臼で、粉挽臼と共に中世末から近世初期の一時期に使用されたもので、それ以降は定着が認められない石製品である。

参考文献

- 名倉親山『日本の硯』日貿出版社 1986。
益宮寿之助『原色岩石図鑑』保育社 1987。
堀尾昇平『赤間関硯1 赤間関硯の歴史』『山口短期大学紀要第5号』1983。
垣内光次郎『江州高嶋硯の生産』『江戸時代の生産遺跡』江戸遺跡研究会 1994。
汐見 夫『砥石について』『中世北陸の石文化1』北陸中世考古学研究会 1999。

北方中世史と大川遺跡

吉岡 康暢(国立歴史民俗博物館名誉教授)

I 大川中世遺跡の構造

1 中世遺跡の概要(図1)

大川遺跡の中世遺構は、余市川東岸に掘開した最大幅約100m、長さ約200mにおよぶ舌状の調査区のうち、川沿いの低地を除く大川砂丘北西端のほぼ全面で検出されている。遺構の種類には、溝・柵列・柱穴および墳墓・捨場があり、竪穴・井戸・土坑などは確認されていない。このうち溝は2種類あり、MO1・2・6・10は、幅2~3m、現存最深0.8~2mでいて、断面は左右対称の逆台形、場所によってV字に近い急勾配をもつ大規模なしっかりした造作の大溝である。ほかの8条は、幅は大体同じであるが、長さ5~12m、深さ0.2~1mと浅く、断面もU状ないし皿状をなすタイプである。柵列は、長さ7~15m、幅20数cm、深さ20~40cm前後の小溝中に、径数cmの杭列が40~110cm間隔で不規則に並ぶ布張りで3基ある。上部構造は詳らかでないが、設置箇所から簡粗な板壁に近いものかと思われる。柱穴はすべてが中世と即断できないが、掘方径20~30cmと10cm以下の大小が認められる。柱筋上に2穴以上並ぶものは少なく建物を復原できないが、柱穴群のまとまりは小掘立柱建物が複数回建替えられたブロックとみられる。捨場は縄文期竪穴の窪みに主として自然遺物が投棄された遺構で、南西辺に2か所確認された。

上記遺構の配置は、余市川河口から約65~80m、標高5m前後の砂丘末端の微高地上に、略逆台形の大溝MO10が165m以上なだらかに蛇曲して北東-南西走し、これと直交に略大同工で長さ約18mの大溝MO1・2・6と40m以上伸びる11、長さ未群の13がT字に連結・併設され、MO13以西のF区とあわせ遺跡の枠組みが構成されている。MO1・2・3・6(B区)、MO6・8・11(C区)、MO11・13・14(D区)の間隔は、各々約22m、80m、57m(溝間中心距離)を測る。大区画のうちB区は、長さ約7mの柵列3、C、D区はU状溝でMO8、14に2分割され、CⅠ区、CⅡ区とDⅠ区、DⅡ区間は、各々約42m、38m、35m、22mあって大区画を略等分しているが、MO14だけはやや西へ振り、MO13との間隔も狭い。

このように大川中世遺跡は、河口寄りの約20×33m(660㎡)の小区画に、1,300~1500㎡の区画4樹と約800㎡の区画1樹が連結する構成をとっている。基幹溝MO10の南西限がおさえられていないものの、河口から遠ざかるにつれて砂丘の下り斜面から低地にかかる地形条件と、大溝が伏まっていることを考慮すると、遺構はF区以西へそれほど広がらないと考えてよく、臨川ゾーンについては、ほぼ遺構をトータルに把握できたとしてよい。また、MO10大溝以南に遺構が拡大することは、E区の柱穴小群の存在で明らかであるが、隣接地は宅地のため南限の確認は

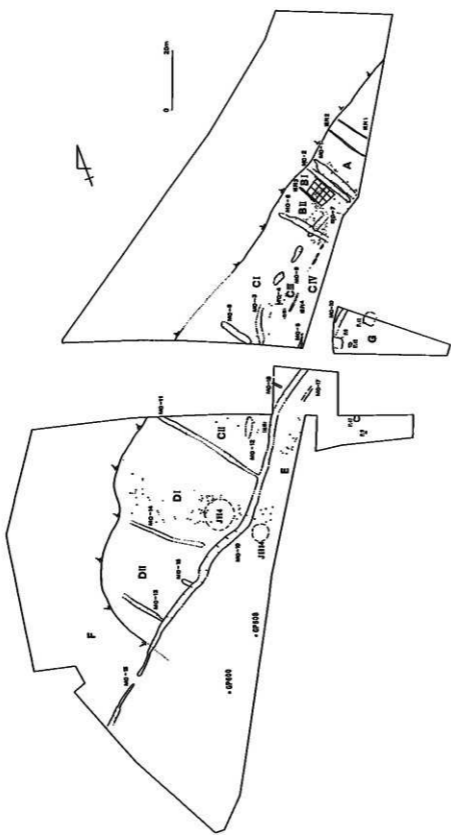


图1 大川中世遗址调查全图

難しい。ただ、1924（大正13）年にMO10より南で南北朝期の和鏡（花唐草双鳥鏡）が1面採取されており、1999・2000年度の調査ではCⅢ区の南方で5基の墳墓が検出され、居住域に接し大溝で画された墓域の存在が明らかになった¹¹⁾。

遺構の全体像を一応上記のように把握し、地区ごとの検討に移る。まずA区とした臨海地の北東約18mと12mには、長さ15m以上の櫓列が2列併置され、内部で柱穴が未検出のことからすると、砂防用の櫓堀かと思われ、中樞部B区を二重に遮蔽する施設空間としてよいであろう。現在の汀線は、本道跡の起点をなす北東端の櫓列1から約250mに位置することになる。B区は櫓列で画されているが、併存したとみられる溝MO1・2の内部約20×22m（約400㎡）の空間には3×4間（約6×8m=48㎡、柱間200cm前後）の中規模の掘立柱建物が一応復原できる。道跡のもっとも河口寄りに占置し、二重の櫓列と最大幅3.5m前後の溝で防護され、陶磁器の出土密度も相対的に高いことから、管理事務的性格の建物とみられよう。柱穴はBⅡ区でも70穴ばかり検出されているが、建物の平面プランを拾うのは難しい。

つぎにCⅠ区では、MO6に接した北東隅と南寄りに柱穴小群がまとまるていどで、全体に分布密度は低い。ただ柱穴小群を囲い込み、CⅠ区を南北に等分する形でゆるい弧状のU状溝MO3・4・9・7が断続的にMO6と交差してつづき、これと4～7mの開口部において長さ26m弱の櫓列4が設置されている。前列のU状溝は、長さ5～15mのばらつきを有するが、3か所で4～5mの出入口とみられる開口部が設けられ、結果的にCⅠ区南半は約300～350㎡ほどの2列の狭隘な帯状ゾーンCⅢ・CⅣ区に分割され、2つの柱穴小群が認められる。CⅢ区の南限は、MO10によって画される。ここでも建物は復原できないが、西寄りの群には、160cm間隔で径22cmと30cmの太い柱根が遺存していたことから、倉庫域の可能性がある。CⅡ区は柱穴がまばらであるが、MO11寄りにCⅠ区のU状溝の延長にのる長さ6m以上のMO12があって、南半はCⅠ区と基本的に同一の空間機能を果たしていたことを推察させる。ここでも、MO12付近で90cm間隔をとって径20cmばかりの焦げた柱根が2本残っていた。D区は東端を画するMO11大溝が、B・C区の2倍の長さをもち、柱穴もそれに相即して北西方向へさみだれ状に広がっている。空間は砂丘平坦面にも規定されて略方形を呈し、B・C区より広い利用スペースが確保されている。DⅠ区の柱穴密度はC区より高く、一応居住性の高い空間とできるが、類似の柱穴小群はMO10大溝で画された南のE区にも2群検出されており、いずれも規格的な建物は認知しにくく、小規模な建物が複数回建て替えられた様子がかがえる。

なお、余市川を挟み対岸のモイレ山麓をとりまく入舟遺跡では、帯状の約170m（4,500㎡弱）にわたる地区が調査され、中世遺跡の存在が確認された。そして、中央やや東河口寄り、余市川と直交する幅1m弱、長さ3.5m以上の溝MO1のほか、時期未詳ながら複数の略併行の溝が掘削され、ここでも河岸の帯状ゾーンがいくつかの区画に分割・使用されていた状況がかがえた。確認された中世遺構はMO1のほか、室町後期の和鏡を副葬した土壌墓1基と南接する貝塚覆土や包含層から、青磁碗1点と珠洲片口鉢約20片の出土にとどまるが、大川遺跡と一体的に設



図2 大川遺跡と周辺の中世遺跡 (1 : 50,000)



図3 明治29年の余市川流域図

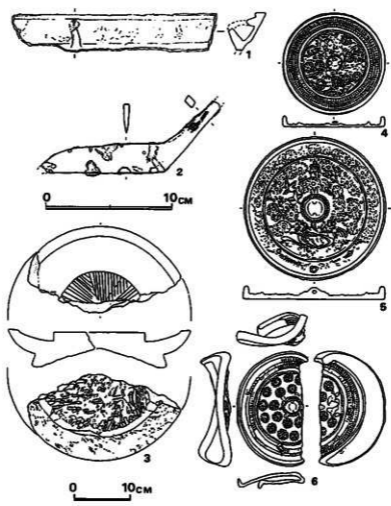
営された15世紀前半代を中心とする港湾付帯施設と考えられる¹³⁾。

2 ヨイチ港湾をめぐる和人とアイヌ

上記の発掘調査の整理結果をふまえ、以下大川中世遺跡が提起する2、3の問題点を素描する。まず遺跡の構造・性格については、余市川南岸の砂丘上に大溝を幹線とし、U状溝、欄列で画された6区画、約7,000㎡(2,000坪)以上の帯状空間を、河口港に設営された港湾付帯施設とする点で異論を生じまい。現在の余市川港湾(船溜り)は河口より約400m上流に設置されているが、中世の和船や板綴り船(イタオマチブ)のようなアイヌ船の着岸施設は、整備されたものは考えにくいとしても、延長200m以上におよぶ遺跡前面に所在したとしてよいであろう。往時の余市川河口部は、1896(明治29)年の地図(図3)でも明らかなごとく、余市川が中洲と周縁に沼渚地を形成し湾入しており、比較的安定した船入りを確保できたのではないと思われる。前記のごとく、本遺跡は現河口から150mほどから始まっているが、日本海域では、たとえば加賀北部の中核港湾臨川寺領大野庄(石川県善正寺遺跡)が犀川河口より約600mから西岸上流へ約450mの帯状街区を形成している¹⁴⁾ことが想起される。大川遺跡の基軸となる方形区画や大溝、欄列と柱筋・柱間が不揃いな掘立柱建物は、本州の中世遺跡で防禦・灌排水・敷地区画の一般的設備であり、方形区画の規模も、函館市志苔館跡¹⁵⁾の郭内70~80×50~65m(4,100㎡)はC・D区に近似し、規模こそ異なるものの、志苔館跡の西に二重の堀と三重の土塁を築成する発想は、BⅠ区にみる二重の大溝と欄列に通ずるごとくである。布掘りの小溝に小杭を不規則に打込む遮蔽施設の造作も共通しており、遺跡の造営主体が東北部から道南に展開する和人数団の一党であることは間違いない。

つぎに、方形区画内部の利用形態については明確な映像がえられないが、河口に占地するBⅠ区に館をイメージした現場の管理事務所建物が復原でき、おそらく船舶の出入りの臨検、揚陸物資の検収、それに伴う作業員や区画内の住民を含む人事管理などの統括機能が想定できよう。瀬戸天日塚など宴宴器と青磁・白磁が当エリアを中心に拡散している(後述)ことも、有力な傍証となる。CⅢ区はMO10大溝とU状溝、欄列で画された狭隘な帯状ゾーンに何種か小建物が配されるようで、倉庫域が考えられるが、総柱建物など積極的な裏づけに乏しい。しかし一方で、1世紀半余の長期にわたり、貯蔵器欠落(後述)の問題があるとしても、B・CⅡ両区を中心に出土する陶磁器量は、上ノ国町勝山館跡を別にすれば道内では突出しており、BⅡ区からC区にかかる空間が、BⅠ区の管理事務所に勤仕する武士・商人・職人など和人の恒常的な居住域を想定させる状況がある。

またDⅠ・E区についても、5群ほどの柱穴群が確認できるが、ここで注視されるのが統縄文期の壑穴の覆土上層に魚骨を投棄した、JH4・14捨場遺構の存在である。両遺構は伴出した珠洲片貝跡と瀬戸灰釉陶から14世紀後葉の所産とでき、ともに北西方から投棄された堆積状況を示すとされている。詳細は別稿¹⁶⁾を参照いただきたいが、魚骨はほとんどニシン頭骨で、少量の近海魚(エイ類・ホッケ・ヒラメ・カレイ類)、回遊魚(サケ・カサゴ)、川魚(ウグイ)と貝類



- | | |
|---------------------|------------------|
| 1 内耳鉄編 (F29グリッド) | 2 弓削刀子 (F29グリッド) |
| 3 石 臼 (R20グリッド) | 4 和 鏡 (入舟遺跡GP1) |
| 5 和 鏡 (入舟遺跡X26グリッド) | 6 和 鏡 (H50グリッド) |

図4 大川・入舟遺跡出土の中世遺物

(イガイ・コタマ類・アワビ)、および若干の骨角製漁撈具(龍頭蛸先・中柄・箔・網針)、加工痕のある鹿角・海獣骨片が確認されている。ここにみられる捕獲魚種と刺突・漁網用具のとりあわせから、大規模な協業組織による遠海漁業は考えられず、湾岸域での少人数の漁撈と当遺跡への捕給と考えられよう。多量のニシン(耳骨数JH4で6,546点、JH14で9,728点)も、3・4月の回遊・産卵期における岸辺での捕獲を考えるのが自然であり、堆積層の広がりや伴出陶器数から1シーズンの限られた時間内での残滓と推定される。二つの捨場と近接する小掘立柱建物との相互関係は確定できないが、建物の住人ないし利用者が、顕著な使用痕を残す片口鉢を用いたニシンの播り身調理や保存加工を行う状況が浮かび上がってくる。遺跡の日常的な食料の採捕とそれに要する道具類の製作などのほかに、あるいはBⅠ区の領主に従属して港湾業務などに従事する小集団の居住域かと推測される。該区の陶磁器の出土密度はB区より希薄で、とくに中国磁器・瀬戸陶器はほとんど出土せず、BⅠ区を核とする分布と別の点的な広がりか住穴小群の周辺を中心に認められることも、私見を支持しよう。DⅡ区・F区には住穴はほとんど認められなかったという。

このようにみえてくると、余市川と併走する大溝を軸線とし直交する溝区画によって、1,200～1,400㎡(DⅡ区を除き、一辺30～40m)の略方形地割を施行する事例は類例がないが、河川沿いに帯状に設置された空間構成は、中世後期の街区プランの原型を想定して大過ないであろう。ただ、本遺跡に即してみると港湾都市や城館との共通性のみを強調できず、B区建物に城館の出先機関の性格を認めるとしても、日本海域の諸港湾都市のごとく、幹道に面する両側に短冊型地割を屋地の単位とする町屋が街区を形成し、魚屋・酒屋・鍛冶屋・物屋などの諸職、商人が棟を接して集住する景観⁽⁴⁾とは異質である。本遺跡の総体的な評価には建物跡の遺存が十分でないが、C・D区のように10～20m以上の空隙を以て小建物がせいぜい7～8棟散在するにすぎず、中核港湾都市に通用の各宗の寺院や「津屋寺」的寺院関係建物などが現状では確認されておらず、大規模な整備された町場が形成された傍証に乏しい。もっとも、撰文・中世・近世の帰属時期未詳ながら、調査区の広い範囲に百数十点の鉄滓が散布し、F29グリッドから弓削刀子(15世紀前半、全長14.5cm)⁽⁵⁾が出土しており(図4-2)、小鍛冶生産の可能性と弓作り職人の実在が確認でき、家産的規模にせよ職人とおそらく商人が方形区画の一角に塊状の町場を形成していたと考えねばならない。制約された情報と比較検討事例に恵まれない現状で、これ以上立入った議論は躊躇されるが、C・D・F区の前面に開けた広場スペースは、小規模な町場と船荷の揚げ下ろしや仮置の空間にしては広すぎるように思われる。

そのさい示唆的なのは、JH4捨場出土の骨角製漁撈具および加工痕をもつ鹿角・海獣骨であろう。城館跡内における該種漁撈具の出土例としては、勝山館揚手船に営まれた小貝塚の一群が周知されており、これを「非和人社会的な物」⁽⁶⁾とすれば、大川中世遺跡にも当然アイヌ集団が何らかの形で参画していたとせねばならない。そのことは、DⅡ区の南東に設けられたアイヌの墓域(後述)や、大溝の掘削に示される大規模な造作工事と交易物資の搬出入、施設維持のため

の労働力編成が、B区ないしB・C区の住人規模の和人のみで遂行できたとは考えにくい状況からもいよう。C・D・F区前面の広場は、JH4・14捨場の魚類骨にみられる海産食料の確保にとどまらず、蝦夷地の特産物資としてのコンブ類の干場、あるいは魚類の貯蔵・加工処理場などの作業空間、およびアイヌとの交易空間として機能したとも考えられる。民家用とは思えない径50cm弱の鉄鍋や遺構内住人の消費のみでは説明しにくい大量のニシン頭骨の投棄も、遺構内で一定の組織的な労働が行われた状況をうかがわせる。本遺跡は少数の和人数団が、江戸後期に上ヨイチの「川向」⁽⁹⁾と呼ばれた河口部に村落を営んでいたシュムクル（西の人）集団の一部をとりこみ、利尻のコンブに代表される樺太方面と道西部および石狩のサケ・マス交易ルートの結節を扼する交易基地として設営されたことは確かである。そして、施設の造営ならびに維持にあたり、アイヌ集団が鉄器・漆器・衣服や米・酒などの支給と引き替えに労働力を提供し、複数世帯が基地内に居住して遺跡前面に設置された接岸施設からの船荷の揚げ下ろしや海産食料の採捕に従事したとみられるのである。

さらに、余市アイヌ集団と和人の関係を考定する上で重要なのは、大川遺跡の東方4km圏内で顕現された大浜中、栄町1両遺跡の存在である（図2）。大浜中遺跡は、大川遺跡の東約2.2kmにあり、深度数十cmからの不時発見にかかり、完形の青磁碗4・皿5、瀬戸天目焼1（後述）、漆器数個、内耳鉄鍋1、丸玉9、罎2、宋銭1（淳化元寶）が一括出土したとされる⁽¹⁰⁾。遺構自体は貯蔵遺構depotと推定される。出土物のうち宋銭などは他の事例から、砂丘地の包含層遺物とも考えられるから、付近に本遺跡B1区の港湾・交易管掌者の上級領主の屋敷地が存在したことは十分予測してよい。また栄町1遺跡は、ここからさらに東1.8kmの砂丘地にあり、1958（昭和33）年の発掘調査によって、墳墓から貝等の供物を入れた木製容器とともに、鎌倉後期の兵庫鎖付帯鉄、大浜中遺跡と同タイプの罎などの刀装具、室町中期の銅丸残欠（杏葉・大袖・背板・小札他）が出土して衆目を集めた⁽¹¹⁾。

栄町1遺跡の年代はなお検討を要するが、大浜中遺跡の中国磁器には大川遺跡の盛期のものを含んでおり、これによって15世紀前半代を中心とするモイレ岬からフゴッペ岬にいたる砂丘部の臨海ゾーンと港湾が、和人の武装集団によって占拠されていたことを推知させる。さきの大川遺跡の調査所見とあわせ大胆に推察するならば、大川遺跡は交易基地として設営されただけでなく、余市川河口に推定されているアイヌ・コタンの居住・交易域の占拠からすすんで、コンブ・海獣採捕等の臨海生産域をも制圧し、アイヌ人を統制下におく交易物資の直営的な生産支配施設の形態を保持していたように思われてくる。私見は十分論証されたとはいえないが、少くともさきの勝山館跡の漁撈具を、北日本＝「夷王」の「國」の共同意識にもとづくアイヌと和人の「共存」の物証とする網野善彦の見解⁽¹²⁾には、にわかには賛意を表すことができない。

ところで、本遺跡の中世遺構の成立が14世紀初葉を下らないことは前述の通りであるが、あわせて注目されるのは、その終焉事情である。すなわち、各区の大溝で数十cmの擬地山崩落土の堆積層上に、ほとんど例外なく数cm～25cmほどの焼灰層が認知され、近世の廃棄層へ移行する層序

が確認されている。そして、これに相応して遺跡の各区のグリッドから被火痕を有する中国陶磁、瀬戸陶器を各14片抽出しており、陶磁器総量の約10%にあたる。このことは、建物の局部的な焼失では説明できず、中世遺構が一挙に廃絶し、火災の後始末がなされないままに焼灰層が大溝内へ流入した現象と理解できよう。本遺跡の瀬戸陶器は後Ⅲ期までであるが、珠洲陶器にⅤ期でもⅥ期に近い特徴を具備するグループが若干見出される。珠洲Ⅴ期が1470年代に下らないことは、文明5(1473)年と伝える勝山館の館神八幡宮勧請が、周辺調査時の陶磁器で傍証され⁽¹³⁾、かつ館内出土の珠洲片口鉢がすべてⅥ期であることから裏づけうる。このような陶磁器年代と遺構の廃絶状況からすると、大川中世遺跡の突然の終焉を1457(長祿元)年のコシマインの蜂起に連動した、余市アイヌ集団の襲撃に求めることが可能視されよう。コシマインの蜂起によって、東は鶴川、西は余市の和人が殺害され、松前・上ノ国地域に追いこまれたとの伝聞は現実とみてよく、大川遺跡では以後17世紀中葉までの2世紀余にわたる和人居住の空白時代に入るようである。

ここで、大川遺跡の和人数団の性格とかかわらせ、大溝MO10の南方に設けられた墳墓群をみておこう。中世墓は、CⅢ区南辺の播列から幅約15mの帯状空間をおいたMO10に接する径約50mの範囲で、5基検出されている(図1)⁽¹⁴⁾。1924年の不時発見による和焼もこのエリアから出土しているので、墳墓とすれば6基となる。中世墓の形態は2タイプあって、うち2基は一辺3.4~4.8mほどの隅丸方形を呈する火葬の木棺(配石)土墳墓で(A類、迂回路区P9・P41)、和焼3面が副葬されていたP9墓は3~4体の合葬墓である。ほかの3基は、長軸1.5~2.5mほどの長楕円形の土墳墓で、木棺の存否は明らかでないが、火葬墓と土葬墓がある(B類、迂回路区P42、道進区P47、服部区P9)。これら土墳墓群の副葬遺物は、大刀・刀子・和焼(窟入あり)・鉄鏃・骨鏃・漆器碗がほぼ共通し、青磁碗は1基にすぎない(迂回路区P41)。なお、小楕円形(87×55cm)の土墳墓(C類)が対岸の入舟地区で1基発掘されているが、和焼1面のみの副葬であった。A・B・C類ともマウンドの有無は未詳である。迂回路区の墓墳P9がMO10に先行するという調査所見に従うと、副葬和焼が示す南北朝期に墳墓が営まれたのち大溝が開掘されたことになる。本遺跡の中核を占めるB・CⅠ区の南方が当初から墓域として設営され、結果的に大溝によって生活域(俗界)と墓域(聖界)が画されたことになろう。今後墓制の多面的な検討が必要であるが、A-B-C類に和人数団のおそらく上層内部での階層差が反映しているようにみえる。

墓域の存続時期については、副葬和焼の年代を上限とすると、入舟遺跡包含層出土の菊花双雀焼が13世紀末~14世紀初とされ(図4-5)⁽¹⁵⁾、もっとも古い。大川遺跡では、上記迂回路区P9の3面や、1924年に採取された唐花双雀焼が南北朝期のほかは、大体室町中期に帰属するようである。迂回路区P41出土の青磁碗は15世紀前半代である。したがって、墓域の広がりや墓数は把握できていないものの、大川中世遺跡と一体的に推移したと考えて大過ない。

つぎに、副葬遺物の組成についてみると、本州の中世後期で例数の乏しい和焼を共有する墓制

は、B I 区の小居館の領主に率いられた党的結合の信仰表徴として機能しているごとくである。しかし反面、発光する金属製飾板類を辟邪の護符とする北方狩猟民の精神世界¹¹⁾に同化しているともみられることは、上述した余市和人集団の生業、ひいてはアイヌ集団との関係を暗示する点で注目される。余市和人墓で普遍的な、大刀・刀子・鍬・漆器の組みあわせに、ニンカリ・ガラス玉・キセルなどを加えると近世アイヌの男性墓¹²⁾に近似し、木棺存否の問題があるものの墓壇プランも長楕円形、伸履葬が一般的である。ただし、中世和人墓に大刀とともに骨鍬の副葬例が目立つのは、儀器と生活財主体のアイヌ墓と異なる武人的被葬者像を看取できよう。そのばあい、たとえば據文後期以来の長楕円形プランの墓壇・副葬遺物の組成の流れのなかで、蝦夷地固有の中世和人墓が成立したのか、逆に近世アイヌ墓の原型のある部分の中世和人墓に求められるのかといった議論は、今後中世末期の和人上層の墳墓とアイヌ墓制の変遷の実態をふまえて考察を深めなければならない。

この点にかかわって注視されるのは、D 区・MO10大溝から南へ30m前後、和人墓域の北西約80mを隔てて営まれた、2基のアイヌ有力者（コクロル?）とみられる墳墓である¹³⁾。G P 600墓（O52グリッド）はプラン未詳、G P 608墓（Q48・49、R48グリッド）は長軸1.8mの隅丸長方形プランを呈し、ニンカリと各種のガラス玉約250～420点、サメ歯、宋・明銭30～40枚ほどで構成される垂飾具などにマキリ・漆器を共有し、それぞれ宣徳通寶（1433年）と洪武通寶（1368年）以降の中世墓とされる。アイヌ墓と和人墓の副葬品の組成は、垂飾具に組みこまれた銭貨と和鏡に前記のごとき共通の心意が認められるとすれば、和人主導とはいえ、さきの和人とアイヌの居住・作業空間に対応する墓域が、ともに大溝で画された南ゾーンに設けられ、両者の住み分けと共存の状況が続くとれることになろう。なお、大川遺跡E区（H50グリッド）、D I 区（H37グリッド）包含層から、振じれて変形著しく加熱痕があり双孔を穿った菊花散双雀鏡（室町末期）（図4-6）と菊花?双雀鏡（室町後期）の破鏡が包含層から出土しており、居住域から遊離した臨川ゾーンで鉄器類が共存する出土状況を考慮すると、港湾を含む館の境界儀礼や物送り儀礼などが考えられなくもないが、後述するように大川遺跡の終焉がコシマインの戦乱にかかわるとすれば、館ないし近傍に奉獻されていた御正鉢がもち出され、人為的に変遷のうえ廃棄された可能性も捨てきれない。

上記略述してきたところによって、大川遺跡の調査が、北方中世史の再評価に連なる重要な意義を有することが了解されたと思う。北方中世史の諸画期で占める大川遺跡の位置については、稿をあらためねばならないが、蝦夷地と本州、アイヌと和人の10世紀以降の交渉は、おおづかみに3段階5期に整理できよう。

第1段階は、東北北部と蝦夷地の安定的「共存」の時代であって、津軽・五所川原・須恵器の全道的流布に具象される據文文化後半と、12、13世紀代を中心とする中世前期に2分される。この間の余市地域の役割りは不明なもの、大川遺跡の須恵器の出土量などからみて、石狩と利尻・樺太方面との海上交易ルートの結節に位置し、西蝦夷で一定の生産・交易機能を果たして

いたはずである。據文・蝦夷集団が交易活動に主体的に関与した段階といえる。

第2段階は、和人が蝦夷の交易拠点＝港湾の掌握から余市地域のごとく生業支配に着手した14世紀初葉と、いわゆる道南十二館にみられる軍事・交易基地を構築し、蝦夷地の拠点的支配権の確立を意図した14世紀後半～15世紀前半にいたる時期よりなる。この段階の前半に、首都（畿内）市場圏に直結した、陸奥・十三湊と越前・敦賀津、若狭・小浜津を基点とする北東日本海域の港湾都市、遠隔地海運の発達⁽¹⁾に伴う終着基地として大川中世遺跡が成立する。遺跡の構造は未詳であるが、本州の事例でも船着場、領主と家臣・商人・職人を中心とする小規模な施設にとどまっていたと推定される。やがて、14世紀後半～末には、十三遺跡をはじめとする港湾都市がローカル・センターとして発展し、大川遺跡でも大規模な区画造成工事が実施される。ただ、街区地割を伴う町場が形成された形跡はなく、小規模な館を核とする港湾付帯施設として推移する。この間、石狩のサケ・マス、利尻のコンブに象徴される、山丹ルートにのる蝦夷特産物の交易基地としての機能が飛躍的に高まったことは、千歳市美々8遺跡、末広遺跡等の珠洲片口跡の点的出土に端的に示されており、余市川河口から石狩平野の内陸河川沿いの流通路、いわゆる“ユウフツ越”⁽²⁾を介して、西蝦夷から東蝦夷の海岸へ出るルートに沿う交易活動の活況を伝える物証である。

ところで、第2段階の和人武装集団の蝦夷地入植は、永く永享4（1432）年ないし嘉吉3（1443）年の津輕安東氏の滅亡と一党の島渡り、あるいは1450年代の安東政季、蠣崎信純の渡道に求めてきた。そうした所論が城館の築造とコシャマインの蜂起のほぼ同時勃発という年代的矛盾を生ずることについては旧稿で指摘したが⁽³⁾、大川遺跡の知見により通説はあらためて止揚されることになり、一連の安東一党の島渡り記事は、第2段階後半の状況を反映していると解されよう。コシャマインの蜂起の現実的契機は、強権的な交易に加えて拠点港湾の掌握と生業管理という直営的収奪にあり、そうした状況を前提にしてはじめて広域的な武力蜂起を説明できるのではなかろうか。西蝦夷で14世紀代の陶磁器を出土した上ノ国・瀬棚・寿都・岩内などの臨海地域（表2、図11）には、大川遺跡で検出された構造と同様の港湾付帯施設が構築されたものと思われる。「民族」問題レベルの議論は慎重を期すべきであるが、コシャマインの蜂起は、基本的に「和夷戦争」とする海保碩夫の論旨⁽⁴⁾に替意を表したい。したがって、天文20（1551）年のアイヌと蠣崎氏との「和平協定」は、かかる直営的収奪方式の撤回を前提とする合意と解することになり、「共存」から「対立」という単純な図式は成立しないと考える。なお第3段階は、前掲北東日本海域の中核港湾の衰退と、大川中世遺跡の廃絶につづく15世紀後半～16世紀代となり、勝山館と出先施設として存続した洲崎館に、道内の交易機能の一元化が急速にすすめられた時期となる。

器種	口縁				計	時期
	口縁	底部	小計	計		
中 國 磁 器	青磁 碗A	4	} 10	85	93	II群
	B	1				III群
	C	64				III・IV群
	D	5				IV群
	E	1<嗣2>				III群
	碗A	4	} IV群	8	12	III群
	B	1				
	C	3				
	白磁 碗A	1	} 11	11	12	III群
	B	7				III群
C	1	III群				
皿	1	1	1	1	III群	
染付磁 碗	1		1	1	V群	
合計	94	12	106(37)	175		
國 産 陶 器	越前 平 埴	7	1	8	19	III・IV群
	天目埴	7	3	10	15	II・III・IV群
	浅 埴	1		1		IV群
	椀輪皿	4	1	5	6	III・IV群
	埴 皿	1		1	1	II群
	折縁平鉢	4		4	6	IV群
	直縁平鉢	2		2	2	IV群
	西耳壺		<嗣2>		2	III・IV群
	花瓶	1		1	1	IV群
	合子	1		1	1	II群
合計	28	5	33(12)	49		
器	信楽 壺		1	1	1	IV群
	珠洲 壺	1			2	I群
	小 壺	1		2		II群
	片口鉢 I	15	} 約40	約146	約146	II群
	II	28				III群
III	60	IV群				
IV	3	IV群				
合計	108	約41	約148(51)	約249		
風 計	230	58	約288	約473		

表1 A 大川遺跡の中世陶磁器組成集計

分類	数	%	灰色胎土		
			胎土	%	
外反	a 尖 縁	6	8	5	83
	b 平 縁	15	20	10	67
	c 丸 縁	23	31	14	61
	d 玉 縁	18	24	5	28
	e 厚 縁	4	5	0	0
計	66	88	34		
直口	a 尖 縁	6	8	0	0
	b 平 縁	3	4	0	0
計	9	12	0		
合計	75	100	34		

表1 B 青磁口縁類別集計

*灰色胎土の%は、a～e各群の比率

器種	中世・IV	後I・II	後II・III
平埴	1	1	3
天目埴	1	6	3
浅埴			1
椀輪皿		4	1
皿皿		1	
折縁平鉢		1	
直縁平鉢		1	1
西耳壺		<嗣2>	
花瓶		1	
合子	1		
計	3	21	9
合計		33	

表1 C 瀬戸口縁・底部時期別集計

*後II期は後I・II期に算定

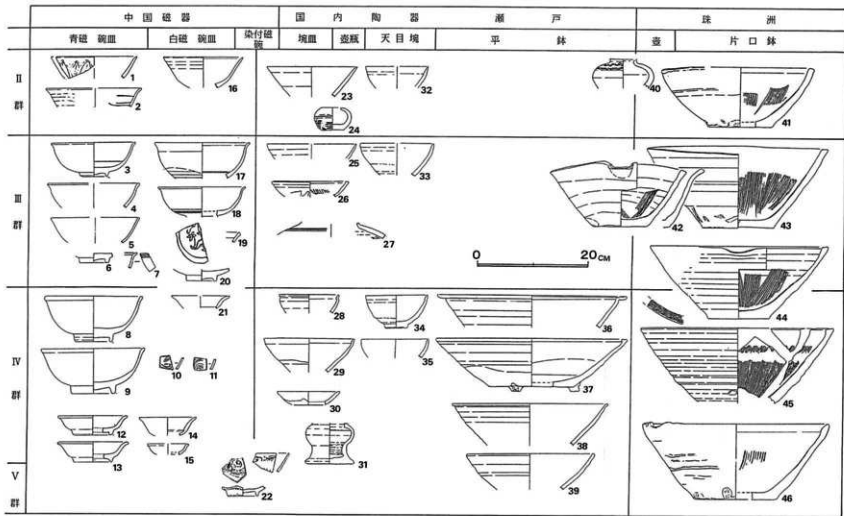


図5 大川遺跡の中世陶磁器編年図 (44=1/5)

II 大川遺跡出土の中世陶磁器

1 中世陶磁器の概要

大川遺跡出土の中世陶磁器は、中国磁器（青磁・白磁・染付磁）と国産陶器（瀬戸・珠洲・信楽陶器）より構成され、量比は中国磁器37%、瀬戸陶器12%、珠洲陶器51%（表1A）である。これらは、時期別に5群、器種別に供膳・調理・貯蔵および饗宴など日常ならびに儀礼・宗教用器を含む。以下松下亘の紹介⁽¹²⁾をうけ、概括と検討を試みるが、予定した最終的な総点検が実施できなかったので、集計・観察に不備が予想され、後考をまちたい。

(1) 中国磁器

青磁 船載磁器の80%（表1A、口縁数の量比、以下同じ）を占め、碗・皿があるが、皿は青磁総数の約10%と少量である。口縁・体部・高台形態と加飾に施軸手法、胎土を加味し、碗A～E類、皿A～C類に大別し概述する⁽¹³⁾（図5、図6A・B）。

〔碗A類〕直口尖縁口縁（図5-1、図6A-1、a類）の鎮蓮弁文碗。複弁文碗（横田・森田15b類・山本II類）が3片、細単弁文碗（III類）が1片存し、前者が青緑灰色ないし黄褐緑色なのに対し、後者は透明度の高い青緑の軸色を示す。複弁蓮弁のレリーフはやや平面的である。

〔碗B類〕外反口縁の有文碗。器体が低平で、器厚が均一の体内外面に浅いくずれた弦文を施し、なだらかに外反する丸縁口縁がつく。軸唇が薄い独特の淡黄緑色軸が掛かる（図5-2、図6A-8・c類）。韓国新安沈船陶磁に類品が求められ⁽¹⁴⁾、1点のみ存する。

〔碗C類〕外反口縁の無文碗。口縁形態によって①尖縁（a類）、②平縁（b類）、③丸縁（c類）、④玉縁（d類）、⑤厚縁（e類）に細別されるが、②と③、④と⑤の区分は便宜的で、碗類の67%がa・b・c類である。また高台形態（図6B）は、①角高台（a類）、②外端でしっかり面をとった節高台（b類）、③接地面が丸味をおび、外側を高く内側を浅く削出した厚底の輪高台（c類）に分かれ、低い稜角的に仕上げたa・b類（1～3）が先行し、外底面中央を山形に削り残すものが多い。ただ、口縁の大多数が小片なため諸属性を総合した厳密な型式分類は難しい。

当類でまず型式設定が可能なのは、④玉縁口縁のタイプで、口径17.2～18.5cmの大ぶりな個体を含むグループがあり、体部丸腰、半球形の口端がかかるく外反する。口端に明瞭な玉縁を作るもの（図5-8、d類）と丸く肥厚した口縁（図5-9、e類）があり、前者が大半である。高台内側が内傾する浅い削り出しで高台の内外に段差がみられ、端部の作工があまり（図6B-6～8、c類）。外底～高台接地面は暗茶色を呈し露胎で、内底軸刺ぎが2点ある（図6B-5・6）。軸唇が厚く不安定で器面にいわゆる“虫食い”がみられ、朽葉色か黄緑色を呈する粗製である。玉縁口縁片にはこれに類するものと並裂があるようだが、小片のため詳らかでない。

②平縁b類と③丸縁c類は、前記のように区分が不明瞭であるが大半はc類で、直口縁に近く先端がわずかに外反するもの（図5-5、図6A-5・9）と強く外反するもの（図5-3・4、

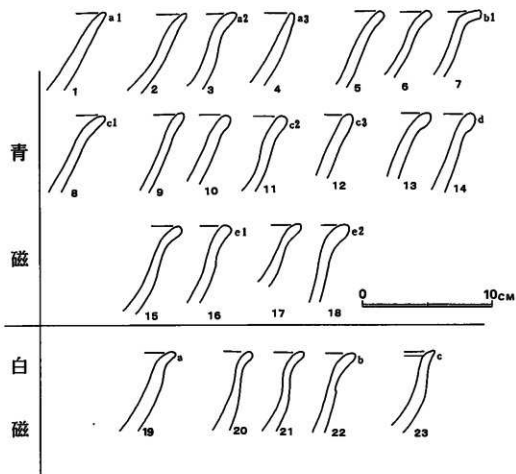


图 6 A 青磁·白磁口緣型式分類圖

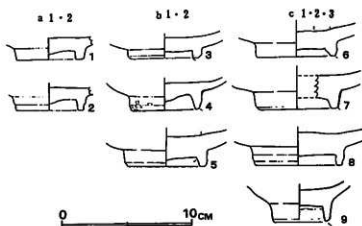


图 6 B 青磁高台型式分類圖

図6 A-6・7・10・11)があり、平縁はほぼ後グループに限られ、b・c類とも外屈するタイプがもっとも多い。ともに薄作りで口縁と体部がほぼ同厚か、底部寄りに漸増しても底厚が1cmでいどの個体が確認できる(図5-3など)。丸腰で幾分低平な器体に高台a₁類、b₁類がつくとみられる。器面にピンホールが目立つもの、酸化ぎみのいわゆる“批肥青磁”に仕上がったものも少数あるが、全体に灰緑色を基調とし、淡緑色がこれにつく。並製で④玉縁の完好品グループのような粗作は認められず、釉層も薄めである。①尖縁としたものには、鶴蓮弁で加飾した先行する直口縁a₁類と、②・③に共存するa₂類に分れる。⑤厚縁としたe類にも、口縁基部でくびれ口縁を丸縁ないし平縁ぎみに仕上げたe₁類(図5-4)と、明瞭な玉縁とせず、口縁直下を押さえて円頭ないし長三角頭状にこしらえた後出的なe₂類(図5-9)がみられる。

〔碗D類〕直口縁の無文碗。尖縁(a₁類)と丸縁(c₁類)があるが、並製で少量である。小片のみだが、B類④と同じ器壁・底部厚作りで、高い高台c類の一部がつくとみてよい。

〔碗E類〕B類以外の文様を有する青磁碗を便宜的にまとめる。細片が3片あるにすぎない。1点は鋭く外屈する平縁口縁b₁類の内面に、狭い擬雷文帯がめぐるもの(図5-7)。暗緑色を呈し高級感がある。ほかに内面に草花状文様を彫出した胴部細片が2点ある(図5-10・11)。ともに黄緑色を呈する。一応IV群としたが、草花の輪郭をとった10はIII群の可能性が残る。

なお、青磁には通常の純白の磁胎のほかに、ざらついた灰色ないし灰黒色の磁胎があり、碗類口縁の45%を占める。先行的な平縁・丸縁を中心とする外反口縁のタイプに灰色の胎磁が目立つ(表1B)。

〔皿A類〕皿に一般的な外端で面とった内傾する高台(図5-12、d類)、あるいは三角高台(図5-13、e類)から張り出した器体の口縁を外反丸縁とした厚作りの皿。器高5.8~6.8cm、口径12.0~12.4cmある。13は本道跡の中国磁器唯一の総軸、12は内底釉割ぎで草花の印文を施す。朽葉色と黄緑色を呈する。

〔皿B類〕形態はA類と大差ないが、尖縁で内底と体部の境に段がつく皿(図5-14)。稜花皿の先行タイプともみられ、淡黄褐色で、口径10cmとA類よりひとまわり小さく類例に乏しい。

〔皿C類〕玉縁口縁で口径9cm前後の外反小皿(図5-15)。皿B類と同じく胎土は灰色。

白磁 青磁同様、皿は少ない。碗A~C類と皿に分類して概説する⁽⁴⁾。

〔碗A類〕尖縁がわずかに外反し、内底に圓線を1条めぐらせたいわゆる“口禿げ碗”(D類、図5-16)。ピンホールが目立ち、乳白色釉が外底近くまで掛かる。

〔碗B類〕口縁がくびれて強く外反する半球形の体部に、幅広の角高台を削出した碗。圓線で画した内底に草花の印文を入れる(図5-20)。施釉は高台輪まで掛けたものと体部下半までのものがみられる。胎土は砂気が多い灰白色で統一されている。口縁形態によって、先端が外屈したa類(図6 A-19)、口縁基部からなだらかに外反する青磁碗e₁類と共通のb類(図5-17・18、図6 A-20~22)、嘴頭状に仕上げたc類(図6 A-23)に細別される。c類は1点のみである。b類には、口縁内面、あるいはための沈線2条で画した下胴外面を掻き目帯で飾り(図5-18)、

体内面にくずれた草花風刻文を入れた個体もありバラエティがある。口径16cm代が多く、灰白色釉を施す。内底に印文を有する青白磁風を呈する下駒片が1点ある。

〔碗C類〕外端をシャープな平縁とした、灰灰色釉の細片が1点みられる(図5-19)。釉調が変るのは被火のせいであろう。

〔皿〕先細りの口縁がなだらかに外展する皿(図5-21)。小片1点のみのため詳細不明。

染付磁⁽²⁷⁾ 直口丸縁でやや内傾する三角高台(e類)の碗。外面口縁帯にアラベスク風文様、体部にモチーフ不明の図文を描き、内底に抽象化した花文風装飾を入れる(図5-22)。高台接地面以外にくすんだ白濁釉を施す。

上記の中国磁器は、4群に大別でき、I青磁碗A・B類、白磁碗A類、II青磁碗C類(口縁a₁・b₁・c₁類の過半?、e₁類)、E類の一部、白磁碗B類・皿、III青磁碗C類(a₂・b₁・c₂類の過半?、d・e₂類)、D類(a₃・c₃類)、E類の一部、IV染付磁、として整理できる。

(2) 瀬戸陶器⁽²⁸⁾

中期様式は平碗・天目碗・合子各1点にとどまり、後期様式は平碗・天目碗・浅碗・縁釉皿・卸皿・折縁平鉢(深皿、卸目付平鉢含む)・直縁平鉢(大皿)・瓶子・花瓶の10種が確認でき、かなりの器種を網羅している。供膳器は平碗を主体に46%を占めるが、饗宴器の天目碗が拮抗するのが注目される。調理器は、大形の平鉢3種と小形の卸皿があり、儀礼・宗教用の瓶壺類とともに定数存する。後期様式は、薄作りの(紐)轆轤成形のため、底部外面に静止糸切り痕をとどめる。通有の淡黄緑・淡緑色の灰釉を漬け掛けしたものが大半で、平鉢類は刷毛塗りとし、天目碗のみ鉄釉を施す。

〔碗類〕小さな削り出し高台からわずかに脹らむ体部が立ち上がる平碗、喫茶用の固有のプローションをもつ天目碗、消費遺跡で類例の少ない小ぶりの浅碗がある。

平碗は、口径16cm前後、口縁形態によって、尖縁の中IV期(図5-23)、後I・II期(25)タイプから内屈ぎみの口縁に仕上げた後III期(29)まであり、細片で帰属がやや不明な個体も、後I・II期ないし後II・III期として幅をもたせた分別が可能である。角台を浅く削出した高台片が1点あり、後II・III期とみられる。

天目碗は、口径12~13cm程度の規格品で、口縁形態によって、①尖縁(a類)、②括くびれ縁(b類)、③内屈縁(c類)に分かれる。①には口端がシャープに尖る中IV期(32)と鈍化した後I期の製品(33)を含む。②③はそれぞれ後II・後III期(34・35)に帰属する。後I・II・III期の高台が各1点あり、浅い内反り高台とし脇にわずかに段をもつ後II期の34が唯一の復原個体である。釉種は鉄化銕掛けをした上に通有の暗茶褐色釉を施すが、口縁が柿茶色の斑らになり、32のみ細かいわゆる禾目を呈する。駒下部に茶栓ずれ状の擦痕をもつ個体がある。

浅碗(28)は口縁が強くくびれ、口径12cmを測る後II期の製品である。

〔皿類〕縁釉皿は、丸縁小皿のみで折縁皿は存しない。底部が平高台状の痕跡を残す後I期から、口縁が外反ぎみの後II期の製品(30)で占められる。多くは口縁外面に灰釉溜りが認められ

る。

卸皿(26)は、口端を凹ませしっかりこしらえ、口内面から外全面に淡緑の灰釉を刷毛塗りした後Ⅰ期の製品が1点ある。片口部は亡失。

(平鉢類)大きく開く低平な器体に、多面体状のくずれた三足がつく瀬戸後期様式独自の型式で、折縁と直口丸縁の2タイプがある。折縁平鉢は、屈曲した丸縁が水平に大きく拡張した後Ⅱ期(36)と、内外に小さく雁首状とした後Ⅲ期(37)の個体があり、卸目付平鉢の胴部片を含む。直縁平鉢は、口端を嘴状に仕上げたタイプ(38)と素縁(39)があり、ともに後Ⅲ期の製品である。36の口端内面は磨滅し、調理器として使用されたとと思われる。

(壺瓶類)四耳壺の胴部片のほか花瓶が1点ある。四耳壺の灰釉は暗緑色を呈し、肩に複数の沈線文帯がめぐる後Ⅰ・Ⅱ期のもの(27)が2個体分ある。灰釉花瓶は口縁を欠くが受口状に開き、扁球形の体部から中空の台部へつづくタイプで、後Ⅱ期(31)の所産である。ほかに径6.4cmの底部から体部が直に立ち上がる、小形長胴の瓶類片が1点あるが器種未詳。

(合子)器高4.1cm、口径3.3cm、胴径6.5cm、底径3.8cmを測り、浅い落とし蓋受けを作出した身(24)が1点ある。本道跡唯一の完形品で、釉が剝離した体下半に細い櫛目状調整痕が残る中Ⅲ期の製品。

瀬戸陶器の時期別分類は、小片のため細別困難な個体があるため、藤沢良祐のご教示をえ、中Ⅲ・Ⅳ期、後Ⅰ・Ⅱ期、後Ⅱ・Ⅲ期として集計した(表1C)。それぞれ9%、61%、30%の量比をえたが、後Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの細別可能な個体のカウントを考慮し、本道跡の編年区分としたⅢ群とⅣ群を後Ⅰ期と後Ⅱ・Ⅲ期を中心とする時期としてあわせると、それぞれ1対2ほどの量比となるようである。

(3) 珠洲陶器⁽¹¹⁾

叩き壺と小壺片が各1点存するほかはすべて片口鉢(播鉢)で占められ、Ⅳ_{2,3}期からⅤ期へかけて生産地での片口鉢の増産、専焼志向が強まるとはいえ、壺は皆無で器種組成の偏向が著しい。中壺は、紐轆轆・叩打3段成形(壺丁種)、小壺と片口鉢は紐轆轆成形(壺丁種)、底側に轆轆台からとりあげたさいの指頭痕、外底には糸切り痕、一部に2次調整痕を残す。胎土は全般に細かい砂気をおび、長石など白色微粒ないし粗礫粒をかなり混和した個体があり、灰色・暗灰色を基調とし、酸化ぎみのものも少数ある。

(壺類)上胴の過半を遺存する叩き壺(N58グリッド)は、口径20cm、胴径33.3cmを測り、3cmあたり9条の粗めの叩き目が右下がりに深く施され、上胴は2重叩き成形されている。球胴の体部から頸が直立ぎみに立ち上がり長い嘴頭口縁に仕上げており、珠洲編年Ⅰ₁期に帰属する(図12)。また小壺(F47グリッド、図5-40)は底部を亡失するが、口径4.7cm、胴径11.3cmを測り、上胴に鋭利な櫛齒具による2条の櫛目波状文帯がめぐる。上胴に銀灰色の灰降をかぶるⅣ₁期の製品である。

(片口鉢)時期別にⅣ₁期(13世紀末～14世紀前半)、Ⅳ_{2,3}期(14世紀中～後半)、Ⅴ期(14世紀

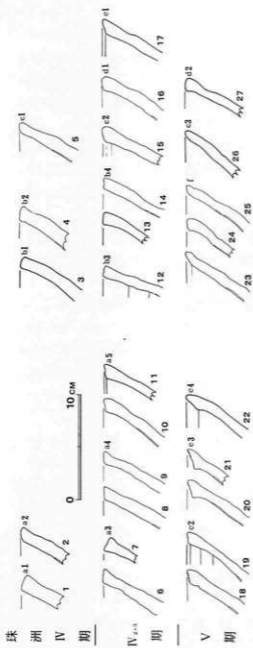


図 7 A 珠洲片口鉢口縁型式分類図

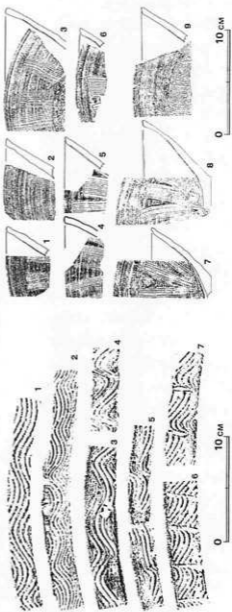
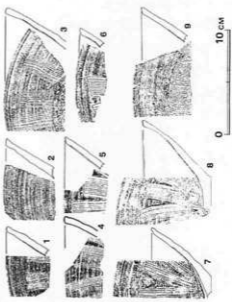


図 7 B 珠洲片口鉢口縁の描目波状文帯

図 7 C 珠洲片口鉢の卸し目



末～15世紀前半)とVI期への過渡期の1世紀半余にわたり、口縁形態、即し目手法、加飾を総合した小型式の推移をたどることができる。口縁形態は、端面の向きによって①外傾、②水平、③内傾口縁、断面形で(a)嘴(舌)頭、(b)方頭、(c)円頭、(d)冠(環)頭、(e)尖(三角)頭、(f)その他に類別できる(図7A)。以下その組みあわせによって設定した小型式を時期別に摘記する。

IV₂期 外傾する方頭口縁b類(図5-41)が主体を占め、少数の嘴頭口縁a類、例外的なc類より構成される。b類は体部上半と略同厚で方頭とするb₁類が大半を占め、b₂類は少ない。体部上半に轆轤のひだ目を残さず、平直な口端をしっかりとこしらえたものと、作工のあまいグループがあり、後者はIV₂期に下るものがある。a類は外端に丸味をもたせ、わずかにつまみ出した外傾するa₁類と、上端を甲盛り風に仕上げるa₂類があり、IV₂期a₁・a₂類の初現タイプとみられる。

該期の即し目(図7C)は、櫛歯具で一辺から他辺への施入を入り組ませ繰り返し、16・20・24条が普通である。原体は1単位10目ほどで、3cmあたり12～13目ほどの中太目が多いが(3・4)、3cmあたり9～10目ほどの太目(5)や22～23目の極細目(1)もみられる。口径25cm以下の中・小形品は、V期まで中太目の即し目8条～16条を原則とする。

IV₂期 b₁類は、IV₁期に下降する口縁小片を個別に判定しにくい個体があるので、厳密な組成比の算定は難しいが、端正な方頭口縁b₁類に代わって、外端を嘴状ないし方頭、水平に挽き出すa₁類(図5-43)を主体に、少数のa₂(42)・a₃類と口端が肥厚したb₁・b₂類に一部c₁・d₁・e₁類を加え構成される。a類は口縁基部をつまんで嘴状とするが、b類とともに口縁上端をなでて凹みぎみに仕上げる(図7A-10～12・14)のも、水平口縁の急増、内傾口縁の出現とあわせ当期の特徴的な手法といえる。

該期の即し目は基本的にIV₂期と変わらないが、細目の原体はほとんどみあたらず、太目の原体も減少傾向にある。即し目の施入痕は乱れた跳ね上げ状の粗雑なものが目立つようになる。

V期 嘴頭口縁a₁類、三角口縁e₁類でみられた口端の内傾化と肥大化がすすみ、新形式e₂・e₃類を中心に、少量の変異型f₁・d₂類、退化型式e₄類、円頭口縁系のc₂類がある。e₂類は、体部上半と略同厚の口縁内外端が丸味をもつ。e₃類は、口縁を雁首状にこしらえた本期の典型的なタイプで、嘴状に肥厚させたもの(図5-45、図7A-20)、口端を内外に拡張し広く面をとり、外傾の三か月状口縁としたもの(21)から冠頭状の仕上げまで小異がある。e₂類とともに端面に櫛目波状文帯がめぐる個体が多い。e₃類には、端面が凹む方頭ないし円頭ぎみの縁帯部が肥厚、屈曲するタイプ(図5-44)が定数存する。櫛目波状文帯は認められず、小鉢が含まれ、即し目も中太目で間隔をおいた8～16条でいととする(図7C-7・8)。

e₁類は、e₂類の定型がくずれ口端面が拡張され、作工があまくなったものでVI期に近く、即し目原体と施入手法も中太目で間隔をとって施入している(図5-46)。

該期の片口鉢は大形化し、口径40cmを超えるものも珍しくない(図5-45)。IV期でごく少数

であった口端に典型的な櫛目波状文帯を施す加飾法が普及し（図7B）、V期の片口鉢の約65%を占める。櫛目波状文は1・2が一般的であるが、波長が長い3、原体を立てて用い小波状とした6・7など変化をもたせており、スタンプで施した口縁片（6・7）が10点検知できた。体内上半を細密な波状文帯で飾ったのは図5-45のみである。口端面を櫛目波状文帯で飾る片口鉢の節目は、細目の原体で1単位の幅が狭く、2.5~3cmでいどにほぼ均一化され、全面を32~40条ほどで充填したもの（図7C-9）が大半であるが、間隔をとって施した個体も定置みられる。IV期と異なり内底から放射状に施入する。

（4）信楽陶器

中壺底部、胴部片が8点1個体分ある。長石粒を挟にし茶褐色を呈する。口縁を欠き時期未詳であるが、北日本での出土状況から15世紀代と推察される。

2 陶磁器組成と編年

大川遺跡の陶磁器は時期別に5群に大別でき、中国磁器と瀬戸、珠洲および信楽産の国産陶器より構成される。産地別では、中国37%、瀬戸12%、珠洲51%となる。第I~V群のうち、I期=珠洲I期（12世紀末葉）の叩き壺、V期=染付磁（16世紀前半）の各1例はしばらくおき、II~IV群についてみると、陶磁器の生産年代（中国磁器は日本列島での消費年代を考慮）は、II群=青磁・白磁I群、瀬戸中III・IV期（1330~1360年ころ）、珠洲IV期（13世紀末~14世紀前半）、III群=青磁・白磁II群、瀬戸後I期（1360~1380年ころ）、珠洲IV_後期（14世紀中・後葉）、IV群=青磁III群、瀬戸後II・III期（1380~1440年ころ）、珠洲V期（14世紀末葉~前半）となり、中国磁器、瀬戸、珠洲陶器の編年軸はかならずしも整合しないが、おおづかみにII群=14世紀前半、III群=14世紀後半、IV群=15世紀前半に中心をおくオーダーとして概括できよう。

II群の上限年代を14世紀初めころとしたのは、青磁鎮蓮弁文碗（I₁類・III類）と白磁口髷げ碗（IX類）は13世紀後半まで廻りうる型式であるが、I₁類、IX類に後出的様相がうかがえ、数少ない瀬戸天目埴・合子、珠洲小壺の年代観とも齟齬を生じないと考えたためである。また下限年代を15世紀半ばとしたのも、珠洲片口鉢に一部VI期への移行型式を含む点が留意されるものの、存続層年代に不明さを残す現状では若干幅をもたせることで処置できると判断した。

つぎに、II~IV群の組成量の算定で問題なのは、全体に小片が多いため複数型式にわたる年代観を考慮せざるをえないことがある。そのばあい、青磁碗の主体を占める丸・平縁碗には、器厚が均一でゆるく外反し（図6A-2・5・9）、新安沈船陶磁群を指標とする山本信夫案IV類⁽¹⁰⁾に後続する14世紀後半代のグループと、口端がわずかに肥厚、外屈し玉縁口縁に近いタイプ（3・10）があり、後タイプは15世紀前半代まで消費されており、本遺跡では玉縁口縁系のd・e₁類とともに主流を占める。a・b・c類で先行的な個体は、淡緑色の釉種と灰色の胎土であるといど識別できるものの、底部片も少なく正確な量比の把握は難しい。いずれにしても、和歌山県友ヶ島沖沈船陶磁⁽¹¹⁾などを基準とする剣先蓮弁文を含む直口縁、展高、高い高台の青磁碗グループより1段階古く、15世紀前半代としては、玉縁口縁および直口縁の比率が低すぎる。そ

ここで珠洲片口鉢のⅡ・Ⅲ・Ⅳ群の口縁量比をみると、およそ1:2:4となり、青磁碗の集計値と齟齬を生じる。この点は14世紀後半代の青磁碗の実態が不明な研究現状を反映しており、瀬戸陶器の時期別量比も珠洲陶器に近いとみられるので、遺跡の消長は珠洲片口鉢を目安として大過ないであろう。

ところで、中世の陶磁器組成を分析する基本的な視点として、日常的な食器類とともに、茶花香器・酒器をはじめとする饗宴・宗教器類のあり方が問題となる。また、陶磁器以外の材質の食器として、日常的に漆器碗の使用が一般的だったことは、大川遺跡で検出された和人とアイヌの中世墓から明らかである。煮炊器は鉄鍋の使用がみこまれる。大川遺跡出土の鉄鍋片は鉤形内耳鍋（内耳鉄鍋AⅡ型⁽²³⁾）（図4-1）であって、遺構に伴うものでなく、本遺跡出土の近世陶磁の上限とされる17世紀中葉まで使用されていたとされるので、帰属時期は微妙であるが、径20cm代、30cm代、50cm弱を測り、民需用の規格を超えた大形品の存在が注視されよう。なお、威信財としての三つ物など各種の金属製品の搬入も考えられるが、確認できない。

上記を念頭においてⅡ群をみると、供膳＝青磁鎗蓮弁文・弦文碗（A・B類）・白磁口禿げ碗（A類）、調理＝瀬戸卸皿・珠洲片口鉢、用途不明の珠洲小壺のほかに、奢侈品として瀬戸天目壺と合子があり、貯蔵器（甕・壺）の欠落を除けば、不完全ながら本州と同質の組成といえる。

Ⅲ群は陶磁器総量が急増するとともに、供膳＝青磁無文碗（C類の一部）、白磁無文碗（B・C類）＋白磁皿、瀬戸平埴・小皿、調理＝瀬戸卸皿、折縁・直縁平鉢・珠洲片口鉢、奢侈＝瀬戸天目壺より構成される。なお、内底ときに体外面を沈線で画し、内底に草花印文を入れた粗高台、外反口縁の白磁碗は、沖縄県石垣島ピロースク遺跡でいわゆる“ピロースクタイプの碗”とされた内湾口縁の白磁碗との手法の類似から、『概報（1990年度）』で広義のピロースク碗として紹介したが、いわゆるピロースクタイプの碗が1段階先行するという金武正紀の主張⁽²⁴⁾を尊重し、同系列ながら別型式の碗としてあつかうこととした。

Ⅳ群は本遺跡の盛期であって、器種がもっとも豊富で、質・量ともに充実した組成を示す。供膳器＝青磁無文碗（C類の一部、D類）＋青磁皿（A・B・C類）、瀬戸平埴・浅埴・小皿、調理＝瀬戸折縁・直縁平鉢・珠洲片口鉢、奢侈＝瀬戸天目壺・瓶子・花瓶、信楽壺が確認できる。喫茶具として瀬戸天目壺とともに宇治茶を収めた茶壺とみられる信楽壺に茶臼⁽²⁵⁾（図4-3）が加わって、領主を核とする大川遺跡の性格が保持されたことが知られる。

上記によって、本遺跡の陶磁器組成にみる3段階の消長を整理した結果、Ⅱ群とⅢ・Ⅳ群の間隙に質量ともに大きな飛躍が認められ、大川遺跡が本格的な港湾付帯施設として整備されたのが、14世紀半ばないし後半代のある時期であったことを傍証する。また3段階の陶磁器組成を通して、供膳器にみる中国陶磁の卓越と瀬戸陶器の劣勢、調理器における珠洲陶器の圧倒的優勢、Ⅲ・Ⅳ群段階で高級食器として多様かつ定量の瀬戸陶器の流布、とくに平埴に拮抗する天目壺の出土などは、小浜・敦賀を起点とする北東日本海陶磁流通圏に連類し、その北辺に本遺跡が位置することを明示する。そして、大川遺跡の発展期と盛期にあたる14世紀後半代と15世紀前半代が、半国

単位ほどの中地域経済圏形成の核として、13世紀末～14世紀前半代の初現的な町場から拡張・整備され港湾都市への成熟と一体的な展開にも確実に進動している。その点で、本遺跡の陶磁器組成の枠組みが、石川県普正寺遺跡（北加賀・大野庄漢）、秋田県後城遺跡（羽後・土崎漢）、青森県十三道跡（陸奥・十三漢）などの拠点的な港湾都市¹³⁾のそれと一致するのは、当然といえよう。

ただ、そうした北東日本海圏と共通的な側面をもちながら、本遺跡の構造が十三道跡に代表される港湾都市と異質で、陶磁器組成の変異性も看過できない。すなわち、さきに指摘した青磁碗の生産年代（移入年代？）のピークが瀬戸・珠洲陶器とずれる問題のほか、（1）珠洲、越前、中国いずれも貯蔵器＝壺・壺が皆無に近い。（2）14世紀後半代に青森県境関遺跡¹⁴⁾、同十三道跡などを除けば検知できない白磁碗B類が定数出土しながら、15世紀前半代の遺跡で例外なく大量に出土する、高台をアーチに割った皿と少量の壺・多角杯・壺を含む粗製の白磁（X類）セットがみあたらない。したがって、当該階の皿類は少数の青磁皿に限られる。（3）15世紀前半代の青磁碗がほとんどすべて無文の並製ないし粗製で占められ、雷文帯の粗彫り蓮弁文で加飾した型式を含まない。（4）志苔館跡でみられる土師器皿、瓦器火舎・風炉類の不在、などがあげられる。つまり、本遺跡の陶磁器組成は、15世紀前半代の陶磁器に限って言えば、伊懸＝青磁碗・白磁皿＋瀬戸平埴・小皿、調理＝珠洲片口鉢＋（越前片口鉢）＋瀬戸平鉢・卸皿、貯蔵＝越前（＋珠洲）という器種・産地別補充関係が不十分な点で、かなり特異なオーダーといえる。こうした陶磁器組成の偏在傾向が、蝦夷地でのどのほど普遍性をもつのかは今後のデータの集積をまたねばならないが、たとえば大川遺跡とほぼ併存し、かなり網羅的な器種組成を示す志苔館跡でも青磁碗は粗彫り蓮弁文直口碗と無文外反口縁碗で、瀬戸陶器は、大半が一括搬入－保管－廃棄を思わせる復原された折縁（卸目付）平鉢6点のみで、遺存状況の偶然性だけでは片づけられないと考える。この点については、中国磁器の非日常的な使用も考えてみたが、とくに白磁碗などの内底に明瞭な疵が認められる。やはり、北日本の流通システムとかわかると思われるので後述することとし、ここでは事実関係の指摘にとどめたい。

最後に、陶磁器の出土状況を瞥見しておく（図8A・B）。大部分は砂丘上部の包含層（I層）からの出土で、青磁は館（BⅠ区）の東を画する2基の櫛列の外約30mあたりまで、西はCⅠ区まで拡散している（P～X9～26グリッド）。鎮蓮弁文碗は、とくにまともには認められない。白磁は、出土数が少ないこともあって青磁より範囲が狭く、館の北西辺からC区南半におよぶが（Q～T17～25グリッド）、それだけ館の求心性が強いようにみうけられる。

瀬戸陶器も基本的な分布傾向は変わらず、館の北西辺からCⅡ区東半にわたっている（P～T18～25グリッド）。とくに天目埴は、櫛列の外（V～X13～15グリッド）と館の西辺（R・U・V20グリッド）からまとまって出土しており、中国磁器とともに館主をはじめとする和人上層に独占的に保有・使用されていた状況がうかがえ、館主層が本州の守護・国人領主と同質の儀礼示向を保持していたと評価できる。中国磁器・瀬戸陶器がこのように館中心に拡散するのに対し、珠

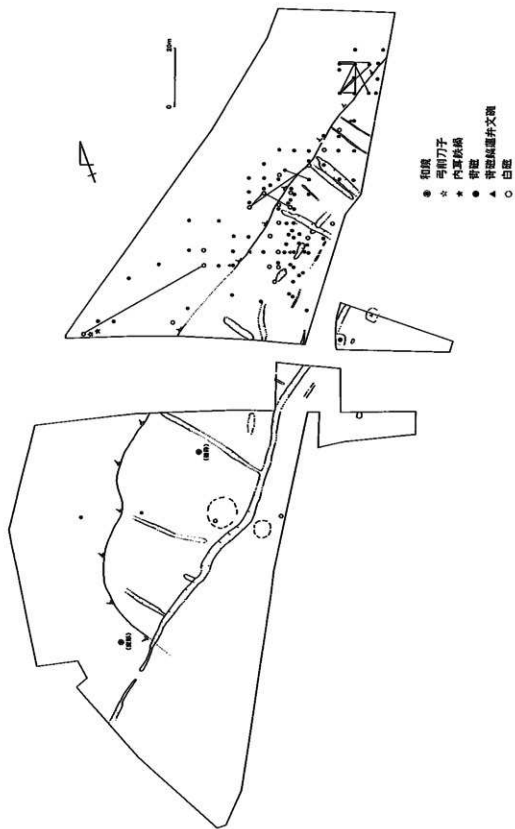


圖 8 A 大川遺跡中世陶磁器・主要遺物出土分布圖(1)

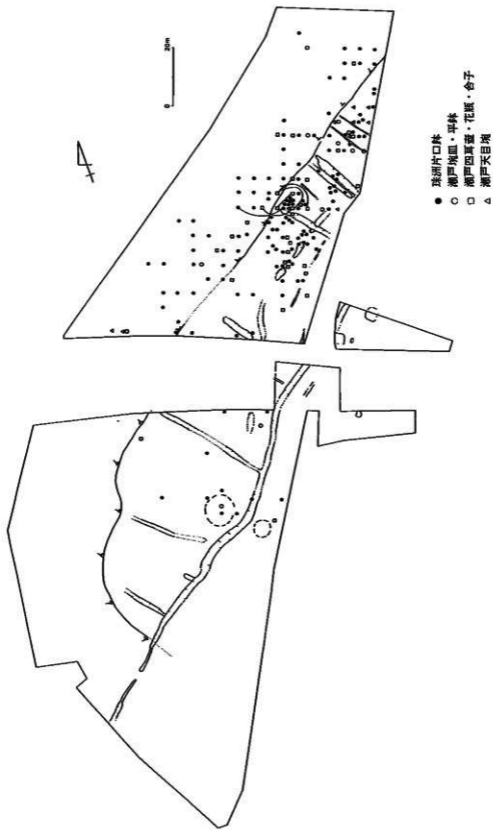


图 8 B 大川中游段中流部遗址出土土器平面图(2)

洲片口鉢の出土は遺跡の東半で青磁とほぼ重なりながら、密度が希薄とはいえD I区を中心に別の広がりを見せるようで、同区の柱穴群や珠洲片口鉢片とともに瀬戸平焼の小平を1点出土した、魚骨を多量に含む貝層の捨場（JH4・14）を含むゾーンでの使用をうかがわせるのは重要である。上述のように、アイヌ漁撈小集団が居住する状況が認められるなら、和人の調理人のほかにアイヌも拙鉢でニシンの揚り身食などを調理した可能性をもつことになろう。

このようにみえてくると、大川遺跡の陶磁器の出土状態はグリッド当たり（25㎡）普通1、2点ながら、住人の性格と消費形態に有力な情報を提供したことになる。陶磁器の接合関係がまれに約60m、150mの事例があるが、おおむね20～30mでいどにおさまるのも、出土状態検証の有効性を裏づけている。

Ⅲ 北方流通史と大川遺跡

1 道内中世陶磁器出土遺跡の検討

道内の中国陶磁については松下豆が16遺跡を集成し（付表文献1）、筆者も珠洲・越前陶器を出土した11遺跡について考察を加えたことがある（付表文献2）。以後20年余を経過し、上ノ国町勝山館跡、函館市志苔館跡、大川遺跡の調査によって良好な資料が蓄積されたものの、その他の中世遺跡からの出土資料は断片的で、中世陶磁器の分布域と所有・消費層の性格に変更をもたらすような知見は報告されていない。かえて上記3遺跡の調査の結果、中世陶磁器の所有・消費層が和人にほぼ限定されること、したがってそれを出土する遺跡の分布域と陶磁器組成の諸段階を整理することによって、道内への和人の侵植過程と交易形態の諸段階を推知しうることが再認識されたといえよう。とくに、大川遺跡の調査によってえられた港湾付帯の交易場の新知見を、城館の成立時期・性格とかかわらせて北方流通史にいかにも位置づけるかを検証するため、あらためて道内の中世陶磁器出土遺跡のについて検討してみたい。

さて、遺漏が多いと思われるが管見に入った12～16世紀の中世陶磁器出土の39遺跡（表2）を管見していることは、第1に◎苫小牧市静川22遺跡（瀬戸・美濃灰軸焼、15世紀末）、沙流川流域の◎平取町オイチャシ、ポロモイチャシ、二風谷遺跡、イルエカシ遺跡（染付碗・壺、瀬戸・美濃天目焼、唐津大皿、備前系片口鉢、16世紀末～17世紀初葉）、◎釧路市遠矢第2チャシ（白磁皿、16世紀前半）など、戦国～江戸初期に道東沿岸部に点在するアイヌのチャシ・村落出土事例はあるものの、大部分が余市と千歳周辺を結ぶ道南部に限られることである。しかもその分布域は、12～16世紀代を通して変動がなく、松前藩史料に和人居住地として現れる余市と鶴川を結ぶ圏内（『新羅之記録』）と一致をみる。現状では余市から渡島半島西部を経て函館付近までは小河川の河口部を中心に均一的に分布するのに対し、内浦湾岸沿いでは◎森町森川遺跡から苫小牧市あたりが希薄なのが、どのていど事実関係を反映しているかは調査の進展をまたねばならないが、従来やや漠然ととらえられていた14～15世紀代の和人の居住地は、（1）半島西海岸

の港湾、(2) 一部松前町におよぶ天の川河口部(上ノ国町)、(3) 函館海岸から恵山岬の周域、(4) 内浦湾岸の四ゾーンにおいて、14世紀初頭と14世紀後半～末、15世紀前半の三段階を画期として、予想以上に高密度に展開していたことになる。

第2は、遺内の中世陶磁器の組成が、供膳=中国陶器(青磁・白磁、碗・皿・鉢)+国産陶器(瀬戸・美濃各種壺・皿)、調理=国産陶器(珠洲・越前片口鉢+瀬戸折縁平鉢・卸皿)、貯蔵=珠洲・越前甕・各種壺、喫茶=瀬戸・美濃天目壺、信楽蓋、瓦質・土師質風炉、暖房=瓦質・土師質火鉢、宗教ほか=中国、瀬戸・美濃香炉・花板・合子を基本とする点で本州と均質な反面、前項で指摘した大川遺跡にみる組成量比の著しい偏向性が、蝦夷地でどのていど普通化できるかを個々の遺跡について検証してゆく必要がある。

第3は、上記の陶磁器組成は、(I) 12世紀後半～13世紀中葉(中世Ⅱ〈前〉期)、(Ⅱ) 13世紀後半～14世紀前半(中世Ⅲ〈中〉期)、(Ⅲ) 14世紀後半～15世紀中葉(中世Ⅳ〈後〉期)、(Ⅳ) 15世紀後半～16世紀末(中世Ⅴ〈末〉期)の4段階に区分でき¹⁹⁾、生産・流通の諸段階とも相即するが、Ⅱ期前半は3遺跡3点、後半の陶磁器を出土する遺跡は皆無で、Ⅲ期以降との間に大きなヒアタスがある。この点は後述する。

ところで、出土遺跡の性格は、(1) 城館が4分の1を占め、ついで(2) 臨海河口低地、(3) アイヌ村落を含む点的な出土遺跡、および(4) 墳墓その他に大別できる。まず(1)は、かつて「道南十二館」として包括的にとらえられ、1432(永享4)年(『満濟准后日記』)ないし1443(嘉吉3)年(『漢文書』『新羅之記録』)の津軽(下図)安東氏の滅亡と一党の「鳥渡り」、あるいは1450年代の安東政季・蠣崎信純の渡道(同上)²⁰⁾を契機として、「小河川の河口などの港をかかえた地域が、15世紀にはいとしいに商業都市化し、(中略)小規模の城郭=館を築いてそれに拠る館主という階層が形成された」、その性格は「豪商であり、港湾部分を排他的に支配(具体的には、館に付属する港と上方方面との商品流通経路、およびそでの対アイヌ人交易を独占)することによって一定の領主的成長を遂げた」²¹⁾とする海保嶺夫に代表される見解は、中世北海道史を総体的に規定するものであった。

ただ、館の成立時期を15世紀代に求める所論が大勢を占めるなかで、①函館市戸井館跡を調査した千代 肇は、当館がコシヤミンの戦乱に姿をみせず、14世紀代の珠洲片口鉢が出土したことから、蠣崎氏との関係が希薄なそれ以前の築造ではないかとし、館跡北側の海洋神社に遺存する2基の板碑を榜題として14世紀後半の築造年次を示唆した。筆者も、志苔館跡跡下の海浜で発見された②番銭遺構が洪武通寶(1368年初鑄)を下限とし、包蔵していた越前大甕の14世紀中葉～後半の編年観と一致すること、米2,000石に匹敵する銭貨約40万枚の備蓄に要する時間を考慮して、館の成立が14世紀前半に遡る可能性を考えた(付表文献2)。③志苔館跡は、その後の精査によって、4,100㎡ほどの略方形をなし、館主と近侍衆の居宅および儀礼用の殿舎よりなる北西郭と、井戸と厨房などの建物群とみられる北東郭、軸線が異なる書院造り風の東南郭より構成されることが判明した。北西郭を中心に出土した陶磁器には、一部14世紀前半代の口禿び白磁碗、

珠洲片口鉢を含むものの、中国陶磁52個体、中世陶器約14個体は15世紀前半代を中心とする良好な一括であり、下限は珠洲片口鉢の一部がV新期（15世紀中葉）の編年観を示すことから、主要建物の廃絶は1450年代として大過ない。したがって、館跡調査の所見ではコシャミンの襲撃によって落城した形跡は認められないとするが、陶磁器の編年観は『新羅之記録』の年代と矛盾しない⁴⁴。本館跡の中国陶磁の存続年次は、一部14世紀後半、大半は15世紀前半代に帰属するが、珠洲片口鉢にも14世紀末葉（IV₂期）の製品が見出され、番銭遺構を館の構営と一体的に把握するのは留保するとしても、その成立はおそくとも14世紀第4四半期のうちに求めるべきであろう。

道南館跡群のうち④戸井館・⑤上磯町茂別館・⑥同町矢不來館・⑦福島町種内館・⑧上ノ国町洲崎館・⑨同町花沢館は、採集陶磁器に即してみると、成立は志苔館と同じか15世紀前半のある時期と判断される。このうち洲崎館は、長祿元（1457）年、蠣崎信純（武田信広）の築城とされるが（『新羅之記録』・『福山秘府』）、陶磁器組成は型押双鱼文を施した青磁皿と大川遺跡に類する白磁碗以外は志苔館と同じ15世紀前半を中心とする組成であり、染付皿・稜花皿など少量ながら16世紀代の遺物を含んでおり、松前藩史料にはわかにか信し難い。勝山館に先行し花沢館と併存して天の川河口部に構築された第I期の城館と考えねばならない⁴⁵。⑩上ノ国漁港の陶磁器は、西岸河口一帯の町場で廃棄された遺物の流入・堆積物とされ、コシャミンの蜂起を誘発したとされる和人の鍛冶屋とアイヌのトラブルも、志苔館膝下の臨海地に想定される商人・職人の居住区での出来事とも考えられるから、城館が構築された半島南部の成立基盤は、同じ道南部でも城館に発展しなかった大川タイプの交易基地のゾーンと異なり、より直営的にフロンティア化する条件があったと予測される。このように推定すると、「道南十二館」として模式化されてきた松前藩史料にみえる城館は、考古学的調査に即していったん解消し、とりあえず上記の14世紀第3四半期ころを上限とし15世紀前半代を中心に存続したI期のグループと、15世紀後半ないし16世紀前半に構築された⑬松前町大館・⑭上ノ国勝山館・⑮同町比石館のII期のグループに大別して段階的・構造的特質の解明に努めねばならない。

つぎに（2）は、古宇川河口の⑯神恵内観音洞窟、朱太川河口の⑰寿部（樽岸）遺跡、後志利別川河口の⑱利別川口遺跡、乙部川河口の⑲元和8遺跡など渡島半島西岸の小河川河口部に営まれた一連の遺跡のほか、⑳松前町茂草B遺跡、㉑森町森川遺跡も包括しておく。寿部・利別川口・元和8の諸遺跡は、青磁碗皿、珠洲片口鉢および宋銭が少量出土しているだけで遺跡の性格は不分明である。しかし、寿部・利別川口西遺跡は渡島半島西岸の中級河川河口の砂丘地で據文期以来村落が所在し、漁撈活動の基地であるとともに交易の拠点であったと考えられる。

この点を瀬棚地区についてみると、1529（享祿2）年セタナイのタナサカシの勝山城攻撃にみるごとく西岸地域を代表するアイヌ集団が所在し、太櫓以北はアイヌの居住域で「口蝦夷」と呼ばれていた。また、1618（元和4）年に渡道した宣教師J. アンジェリスの報告書には、大きな川をアイヌが船に乗りメナシ（道東北端）から瀬田内へ商いに行くことと記され、1669（寛文9）年ジャクシャインの蜂起時にはアイヌ人家が33軒ほどあり、大将彦次郎の居城がおかれていたとい

う(付表文献6ほか)。

この間の考古学的物証としては、後志利別川北岸に和人が被葬者と考えられる火葬墓群(利別川口遺跡)⁽¹³⁾があり、前記の珠洲片口鉢片は一部の整地時に出土した。また、南東約1.1kmを隔て旧太極街道に接して16世紀末～18世紀中ごろに営まれた瀬田内チャシがあって、大量の鉄製工・漁具類と骨角製漁具、鉄鍋・武器具・煙管・ガラス玉・砥石および唐津・有田を中心とする陶磁器が出土しており、北東約250mにアイヌの土葬墓群(南川2遺跡)⁽¹⁴⁾が所在する。利別川口・南川2両墳墓遺跡の存続年次については、15～17世紀前半代の幅でとらえられており、確定できないが、本州中世の墳墓構造から勘案すると、前遺跡で一般的な小土壇に有機質の火葬蔵骨器を埋納する事例は14世紀後半を遡るとは考え難い⁽¹⁵⁾。しかりとすれば、中世IV・V期には和人とアイヌの近接地での住み分け、葬り分けが確認できることになる。

このように当地区でも15世紀以前の状況は明確ではないが、砂丘地から採集された珠洲片口鉢片がIV₁・IV₂・V期(14世紀初～15世紀前半)にわたるのが注目される。このように陶磁器が複数型式におよぶのは、同一の占地を示す寿都遺跡でも認められ、珠洲片口鉢はIV₁・V期の陶片を含む。これらのうちには、㊸知内町湧元遺跡、㊹上ノ国町北村遺跡の珠洲片口鉢(VI古期)や、㊺函館市弥生町遺跡の越前片口鉢(15世紀後半)のごとく鉢破り人骨に伴う特異な埋葬事例もあるかもしれないが、河口部の砂丘地の広がりからみて、大川中世遺跡と同じ類型の港灣に付帯する対アイヌ交易場の実在が想定され、14世紀初めには季節的・恒常的な往来から、和人の小集団が小規模な交易施設を足場に、直営的・広域的な活動を行うようになったとしなければならぬ。渡島半島西岸で中世陶磁を出土する一連の遺跡は、とうぜん一定の交易ネットワークによって結ばれていたであろう。

そう考えて大過なければ、積丹半島基部の古字川南岸に占地し、恵山式一後北C₁式一北大III式一樺文各期一中世IV期一江戸末期にわたり、季節的な漁撈を主体にし、ときに土器の製作や鍛冶も行ったベースキャンプの居住・作業場として断続的に利用され、一時埋葬場ともなった神恵内観音洞窟出土の珠洲片口鉢(IV₂期)は、大川遺跡や尻別川河口など近傍の拠点から交易物資の調達に訪れたさいの足跡と解されよう。また松前町茂草B遺跡は、茂草川の南約850m、吉岡漁港東方の海岸段丘上に樺文村落を踏襲して営まれた中世IV期の遺跡であって、20穴弱の柱穴を検出しているだけで詳細は不明である。占地から大川タイプの拠点的な交易基地とは考えられないが、段丘下の小河口を足場とし、福島町穂内館などに先行してアイヌ村落付近に営まれた、小規模な和人人村落の交易基地と考えておきたい。また、森町森川遺跡は、茂草B遺跡同様やや内陸の丘陵上に占地する樺文期の拠点的な漁撈村落遺跡であって、14～15世紀前半代の陶磁器が出土している。遺物量からみても、内浦湾岸の一角に館群跡に先行して設営された、小沼越えルートで志吾館に通ずる内浦湾岸の拠点的な交易場としてよいであろう。

また(3)は、㊻千歳市美々8遺跡、㊼末広遺跡など、石狩低地の内陸河川域、および内浦湾岸から沙流川・網路川におよぶ、㊽、㊾、㊿～㊿の諸遺跡での点的な出土例である。このうち後

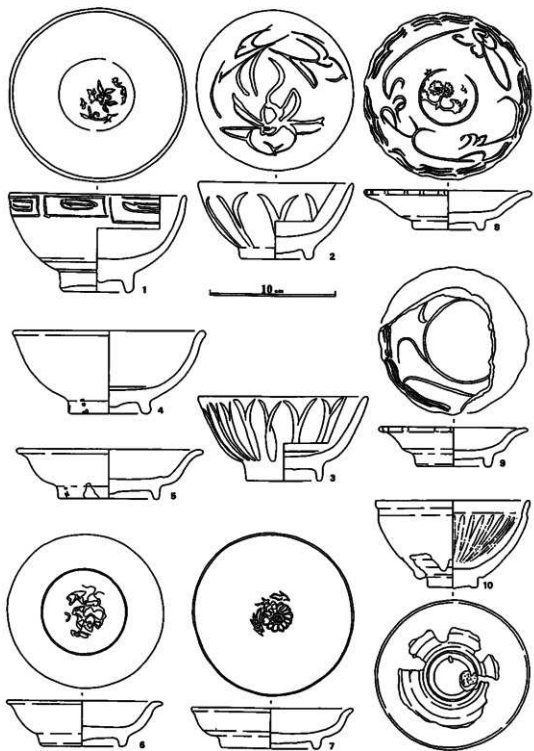


图9A 大浜中道跡出土中世陶磁器 (縮尺1/3)

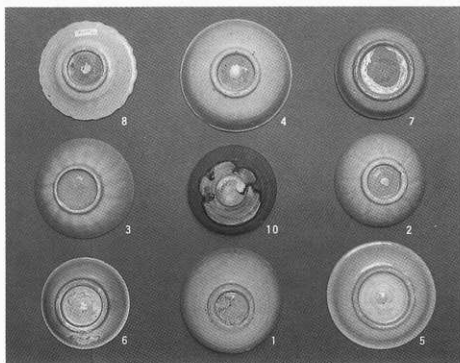
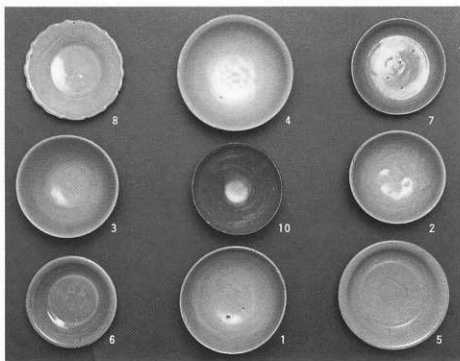


図9B 大浜中遺跡出土 中世陶磁器

	器種	法量 (cm)		
		器高	口径	底径
1	青磁・碗	7.8	14.0	5.2
2	“ “	6.2	12.3	5.4
3	“ “	6.7	13.3	5.9
4	“ “	6.7	14.8	6.2
5	“ 皿	4.0	14.3	7.8
6	“ “	3.6	12.1	6.3
7	“ “	3.2	12.8	7.6
8	“ “	3.1	13.0	5.4
9	“ “	3.1	11.5	5.7
10	瀬戸美濃・天目埴	7.1	12.1	3.6

表3 大浜中遺跡陶磁器法量



図10A 伝栄町1遺跡出土兵庫鎖付帯執(縮尺1/2)

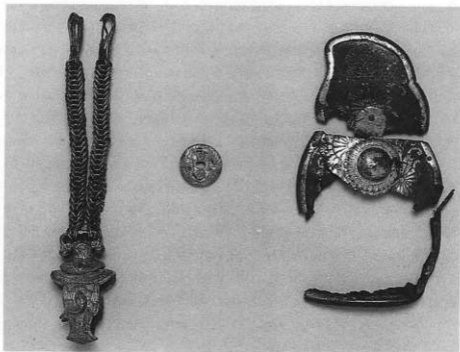


写真10B 伝栄町1遺跡出土の兵庫鎖付帯執と杏葉

者のグループは、16～17世紀前半の「ウイマム」の落とし子とも思われるアイヌの遺跡からの出土品で、恒常的な交易品とは考えにくい。前者のうち、美々8遺跡は、松浦武四郎の『再航蝦夷日誌』（1846年）にみえる「ピビ小休所」にあたる建物の至近地において、T a - b 層（1667年降下）直下より宋銭、龍頭蛸壳、マレク、斧などの鉄器、貝殻・獣骨と珠洲片口鉢（V期）1個体、青磁碗若干が出土した。崖頂部には2×2～2×3間の小掘立柱建物群が検出され、斜面方向に美沢川北岸の船着場？へ下りる小径も確認でき、近世初頭まで年代幅をもつものの、アイヌ集団が媒介し内陸水運一陸路を通して道東（勇払平野）から道西（石狩低地）へ抜ける交易の中継地とできる（付表文献23）。これを和人の移動の足跡と即断しないとしても、8～9世紀代に東北北部と道南部の交易媒体者を被葬者とする、いわゆる北海道式古墳以来の内陸の交易幹線路「ユウフツ（シコツ）越」上に所在することは重視すべきであろう。

（4）に包括した遺跡は、前述の鉢被りの特異な埋葬に供されたばかりのほか、②函館市七重浜出土と伝える完形の珠洲壺（IV₂期）が火葬蔵骨器の可能性を残すものの、道内では陶製の火葬蔵骨器の確実な事例は報ぜられていない。③が火葬蔵骨器とすると、大川遺跡で検出された和人の中世墓とは異相で、蝦夷地での地域性の問題が提起されることになる。

このほか中世陶磁器の重要な一括として、①余市町大浜中遺跡出土資料がある（図9 A・B）。本遺跡の陶磁器は松下巨の詳細な報文⁽¹¹⁾によって周知されているが、遺物の年代観と遺跡の性格には検討の余地を残している所以要説しよう。本遺跡は、大川遺跡の東約2.2kmに所在した登川放水路工事中、海岸部の深度数十cmから発見されたといい、完好の青磁碗4・皿5、瀬戸美濃天目壇1、漆器数点、内耳鉄鍋3、丸玉9、鉢2、宋銭（淳化元寶ほか）がまとまって出土したとされる。現在これらの正確な共存関係は確認できず、ここからさらに東1.8km隔てた砂丘地の栄町1遺跡からは、かつて鎌倉後期の兵庫鎖付帯巻（図10 A・B）や鉢などの刀装具、室町中期の駒丸残欠（杏葉・大袖・背板・小札ほか）を出土したとされ、1958（昭和33）年には発掘調査が行われ、貝等の供物を入れた木製容器が出土したといわれるが、詳細は不明である⁽¹²⁾。

ただ、大川遺跡の陶磁器と融着した数個の漆および鉄鍋は、中世後期に各地でみられる蓄物遺構depotの存在を示すと思われる。陶磁器は2時期を含み、青磁雷文直口縁碗（図9-1）、粗彫蓮弁文直口縁碗（2・3）、無文外反口縁碗（4）、および青磁無文外反口縁皿（5・6）は、14世紀末～15世紀中葉、内面に図案化のすずんだ草花文を施した複花皿（7・8）と美濃天目壇（9）は、15世紀第4四半期（1470～80年代、後IV期新）の所産である。雷文帯で加飾した青磁碗は、道内では④矢不來遺跡の採集資料と、高台外側に施文した陶片が④隠内館跡から出土しているにすぎない。このうち青磁無文外反口縁碗・皿は、大川遺跡IV期の主体的な中国製仏器でも後出的な様相を示す一群であるが、大浜中遺跡の埋納時期は15世紀末としてよいから、大川遺跡が大浜中へ拠点を移して営まれたとも考えられるが、陶磁器に伝世品とみられるものを含み、宋銭のように蓄物遺構への一括埋納とは考えにくい遺物の散布からすると、大川遺跡と併存して大浜中より上級の居館的遺跡が存在した可能性がある。

2 北方流通史と大川遺跡

上記略述してきたところによって、14世紀初めころを上限として大川中世遺跡に代表される和人数団が、港湾を核とするアイヌ集団との交易場ないし特産物を直営的に調達する基地を、余市と鶴川を結ぶ道南の河口部に一斉に設置し、本格的な侵植を開始した実相の一端が明らかになったと思う。このことは、「安東氏が蝦夷嶋に竄入すると間もなく蝦夷の大乱が起った。」⁽¹⁾という『新撰北海道史』以来の松前藩史料に依拠して説かれてきた、道南十二館の築造とコシャマインの蜂起の同時的発生という年代的矛盾を修正し、従来ほとんど具体的に論述されなかった館主層以下の和人数団の直接的侵植を、大川タイプの交易基地と道南館跡群の2段階の展開として把握することによって、コシャマインの蜂起以後1世紀におよぶ和夷戦争の顛末が説明できるようになったといえよう。

しかし課題はすくぶる多いのであって、大川タイプの交易基地の後半が、汐首岬と江差湾岸間に1段階遅れて14世紀末～15世紀前半ころ成立する1期の館群と併存する以上、両者の相互関係

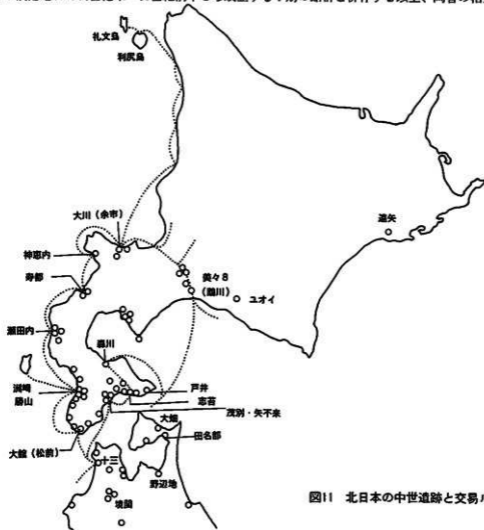


図11 北日本の中世遺跡と交易ルート

ならびに館群構築以後との交易形態の段階差が、大川タイプの交易基地と館群の分布差の意味を含めてまず検討されねばならない。また、鎌倉末～南北朝期の列島社会における東北北部の政治・経済変動と日本海流通圏の推移とのかかわりもあらためて問われよう。個別発掘事例に限られた現状で考古資料による状況判断はかなり大胆にならざるをえないが、14世紀初頭の和人数団の侵襲が、おおづかみに首都市場圏に直結する北東日本海交易圏の北進・膨張に連動することは確かである。宇治茶を収納した信楽壺が、大川遺跡を含め道内の3遺跡から出土しているのは、瀬戸後期様式の多様な高級食器とともに、奈良火鉢の日本海域での流布に示されるごとく、首都市場圏との物流網が飛躍的に拡充される14世紀後半以降の動きのなかで理解できよう。

ただ一方で、さきに指摘した大川遺跡の陶磁器組成の偏在性に目をむけると、東北以南の流通システムと異質な側面も看過できない。すなわち、(1)貯蔵器の欠落、(2)希少な白磁碗B類の存在と普遍的なX類の不在、(3)15世紀前半代の青磁碗は無文外反碗主体で玉縁碗は少数、などの事象の理解が問題となる。これを蝦夷地での特異な使用形態—生活様式の違いとは考えにくいので、鎌倉末～南北朝期にみられる都市・港湾・宿市の発達を梃子とする急激な需要増によって、国産貯蔵陶器の生産量および中国陶磁器の輸入量の不足から生じた不安定な流通が、列島周辺の蝦夷地に惹起されたとみるべきであろう。具体的には東北の港湾から蝦夷地の交易基地への断続的な補給、それゆえに生ずる長期使用の状況が想定され、各種の陶磁器が均質的なセットとして移入・消費されなかったと推察される。

こうした変動的な陶磁器流通が、大川遺跡タイプの交易基地へ来航する商船の頻度⁴⁴⁾を反映するのか、あるいは小浜・敦賀船など日本海航路の港湾を巡って北上する廻船が蝦夷まで直行したのか、基本的に十三湊を中継したのかといった論点とかかわらせて評価するのは難しいが、渡島半島の西海岸沿いの河口部にまず侵襲を開始した和人数団の小集団が、固定的な交易ネットワークを構築するにいたらず、東北北部の各地から渡島した集団、ないし蠣崎(武田)氏に代表される若狭方面から進出した武士・商人が競存する状況も現実味をもっている。蝦夷地へ侵襲した和人数団は、考古学的知見から総合的に判断すると、14世紀前半代の競立状態から、後半～末には複数の館の構営を指標とし、道南館主層の主導権の確立を前提に渡島西海岸の小集団の従属化を促進した、和人数団の重層的編成の第1段階を迎え、15世紀半ば前後の安東氏一党の「島渡り」を契機に、館主層間の序列化は第2段階へすすみ、勝山館が築成される15世紀末ころ、道南の覇権が蠣崎氏に収斂する第3段階で完結したとみられる。

今後、こうした推論の精度を高めるためには、琉球で一般的な白磁碗B類の挙動、若狭方面との連係を示唆する越前陶器の動態、あるいは東北産の和火鉢類をコピーした瓦質火鉢・風炉の出土状態を注意深く点検することで、蝦夷地の交易基地と東北北部の政治勢力や港湾との関係を特定してゆかねばならない。東北産の瓦質火鉢・風炉は、志苔館・矢不來館・勝山館・洲崎館跡で出土し、土師器皿、信楽壺と茶臼など茶花香具を含む、本州の武家権門儀礼示向の強い饗宴器ないし奢侈器である。道内では、中国製天目碗・茶入が出土しているのは志苔館跡・勝山館跡の

館名	所在地	形態	時期	館	主	渡島年〔出発地〕	関係文献年
1 ●戸井	亀田郡戸井町中島		I				
2 ●志苔(志濃里)	函館市志海苔	平山城	I	小林良景・良(景)定・季景 (小林)			康正2(1459)、長祿元(1457) 永正9(1512)
3 ●与倉前	函館市志海苔						
4 ●箱(字須峰)	函館市志海苔			河野政通、季通	[大畑]	享徳3(1454)	康正2(1459)、長祿元(1457) 永正9(1512)
5 ●矢不来	上磯郡上磯町矢不来			安藤師季			
6 ●茂別	上磯郡上磯町矢不来	山城	I	安藤盛季?・政季・家政、師季	[大畑]	享徳3(1454)	長祿元(1457)、永禄5(1562)
7 ●中野	松前郡木古内町中野			佐藤季行(船本抄疑?)・季則	[若狭]	享徳2(1450)	長祿元(1457)
8 ●鮎本	渡島郡知内町湧元	山城	II?	南条季繼(木古内移転?)			長祿元(1457)
9 ●藤内	渡島郡福島町吉岡	平山城		岡土(船)季直			長祿元(1457)
10 ●翠都	松前郡松前町朝日	平山城		今泉季友			長祿元(1457)
11 ●大館(松箱)	松前郡松前町西館	山城	II?	安藤盛季?・定季、藤崎光広(永正11以降)		嘉吉3(1443)	長祿元(1457)、永正10(1513)
12 ●福保田(近藤)	松前郡松前町船浜	平山城		近藤季常	[若狭]	嘉吉元(1441)	長祿元(1457)
13 ●原口	松前郡松前町原口	平山城		岡崎季直			長祿元(1457)
14 ●比石	梅山郡上ノ園町石崎		II?	厚谷重政(龜山末孫?)	[田名郡]	嘉吉元(1441)	長祿元(1457)
15 ●花沢(上ノ園?)	梅山郡上ノ園町勝山	山城	I	藤崎季繁、武田信広	[若狭?]	嘉吉3(1443)	長祿元(1457)
16 ●花見岱(男女内)	梅山郡上ノ園町			小山隆政	[野辺地]	嘉吉3(1443)	
17 ●勝山(和成)	梅山郡上ノ園町北村	山城	II	武田信広			
18 ●洲崎	梅山郡上ノ園町北村		I	(武田)			享徳3(1454) 藤
19 ●館	梅山郡犀沢町前			館頼重			文安4(1447) 藤
20 ●泊	梅山郡江春町			藤崎高広			永正元(1504)

●考古学的に検証された城跡

表4 道南中世城跡一覽表

みのようであるが、青磁碗類についても、加飾されたグループと無文碗、とくに大川遺跡でみられた内底軸割ぎ痕をもつ粗製品では価格差、ひいては大川遺跡と大浜中遺跡で推定される使用主体の階層差を念頭においた、きめ細かい資料操作が要請されよう。

東北部における政治・経済変動と蝦夷地の対応関係も具体的な検討はこれからであるが、志苔館に代表されるⅠ期の道南館群の成立と、十三澳が北区の館・寺？を核とし船着場をもった段階から、南区の中軸街路を軸線とする短冊形街区として整備される膨張期は連動すると思われる。この段階に道南館群が下国安東氏一党主導で、北日本の港湾・交易機能を一元的に管掌する方向が格段に加速され、対アイヌ交易が組織化されたのであろう。

これを文献と照合するため、『福山秘府』など松前藩の編纂誌にみえる道南館群に関する記述をまとめたのが表4⁽¹¹⁾である。それによれば、1457(長祿元)年のコシャマインの戦乱に現れる段階で、館主の大半が「季」の偏諱をうけ安東氏の同族ないし一党であることを明示している。これが安東氏の家臣団編成の実像とできるかは吟味の余地を残しているが、道南館群成立の上限を14世紀後半～末とする私見によると、1432(永享4)年、下国安東氏が南部氏に敗れ「エソカ島へ没落」した(『満濟准后日記』同年10月21日条)ことを転機とする島渡りは、下国安東氏の宗家をはじめ同族・一党が本質地を放棄し、拠点を道南に移した画期となる。

そのばあい志苔館などが完備された年代を確定できないものの、当館跡から14世紀前半代の越前壺などが出土していることに着目すると、大川遺跡と前後する時期に館に先行して交易基地が営まれたとするのが自然であろう。37万枚に上る蓄銭遺構⁽¹²⁾に具象される志苔館跡下に設営された港湾町の実態が不透明な現状で、これ以上立入った議論は難しいが、安東氏一党の島渡りに1世紀以上遡って道南部にも交易基地が出現していた事実は、文献に現れない道南館群を評価する際重要である。道南館群でも矢不來館のように下国守護職安東家政居館と伝える茂別館や志苔館を凌駕するものがあり、今後、蝦夷地の城館の規模・構造にみる重層性と東北の城館との関係の解明がもたれるが、波島西海岸の城館へ発展しなかったタイプの交易基地が松前藩関係史料にみえないのは、あるいは安東氏一党と出自の異なる領主・商人の交易基地として推移したからかもしれない。

このように想定をすすめるならば、大川遺跡を終着とする道内各地の河口部に占地する小規模な交易基地は、すべてが十三道跡から進出した廻船の寄港地としてネットワークで結ばれ、安藤氏一党によって一元的に統轄される状況は考えにくく、各自が独自の交易場として機能し経済的自立性を保持していたかと思われる。ただ、日本海域の港湾町が地域相互間の交易機能にとどまらず、多数の商・職人が集るし半国でいどの地域経済圏に各種の民需物資を供給する在地の流通核としての役割りを、ここでは米・酒・鉄器・漆器などの生活財を介して対アイヌ集団との間で果たした点で、異民族＝エゾとして認識されるようになった中世の北海道に設営されたフロンティアの本質が示されていたといえよう。

このような独自性と統合関係は、道南館群についてもつとに考定されており、大川タイプの

交易基地を武装集団が占拠し、軍事・経済基地として再編された城館と港湾町もあったと思われる。港湾から隔離した臨海丘陵地に館主と家臣が城館を構えるあり方は、居館を核に設置された北日本の港湾都市の第2段階と基本的に同調する面がある。ただし、町場と港湾を望視する館主層の軍事・防衛空間は、対アイヌ交易を意識した威圧的な儀礼空間として丘陵に整備された点で、蝦夷地独自の城館構造であり、強権的な交易形態に規定されたと考えてよい。なお、佐藤季行（中野館）・近藤季常（福保田館）・蠣崎季繁（花沢館）のごとき若狭出身と記された館主層の信憑性が議論されてきたが、1435（永享7）年に炎上した若狭羽賀寺が「奥州十三湊日之本将軍」安藤康（泰）季によって再興された記事（『羽賀寺由来記』）とあわせ、北日本と安藤氏が経済権益を保持したとみられる若狭（小浜）が直接的ないし頻度の高い廻船交易の中継地であったことの反映と考えられる⁽¹¹⁾。そうした流通形態が成立する背景には、若狭方面から直接渡島した武士・商人たちが実在した可能性を想起させ、小浜が14世紀代に、敦賀に代り畿内とエゾの交易の中継港湾として、コンブなど北海の産物を扱う問屋が集住するようになる動機があったはずである。

上記によって、大川タイプの交易基地は、設営当初より河口部の港湾機能の掌握と直営的な特産物資の調達を通して強権的・収奪的な側面を具備しており、14世紀前半代には互恵的な「和夷共存」とはいえない状況が急速に作り出されつつあったといえよう。そうした状況を作り出した列島の経済的背後事情として、『庭訓往来』（1334年?）の「宇賀昆布・夷鮭」に象徴される、公武権門・町衆をはじめとする都市民の北海産物に対する需要の急増があったと思われる。そして城館がいったん構営されると、たとえば後志利別川以南の小港湾基地は道南十二館に姿をみせな

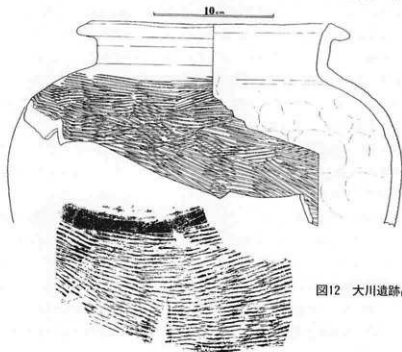


図12 大川遺跡出土珠洲陶器
(縮尺1/3)

い洲崎館、内浦湾岸沿いのそれは茂別館、志苔館などとの間に館主＝国人－武装商人といった形で個別的な重層関係を生じつつ組織化されていったのであろう。かくて14世紀後半以降、若狭から十三湊にいたる北東日本海地域経済圏に連鎖し、十三湊を核とし道南の拠点館跡を基地とするエゾ地域経済圏が形成される。大川遺跡は、そうした首都市場圏とエゾを結ぶ交易ネットワークの北辺を占め、利尻コンブ、石狩サケなどを集荷・移出した港湾として、重要な役割りを担ったとみられるのである。やがて15世紀末に、勝山館と一体的な出先機関としての洲崎館が存続する段階で、松前・上ノ国地区に往来する商船・商人に年俵を課す形で（『新羅之記録』）、交易業務を独占するようになるのであろう。

ところで、中世Ⅲ・Ⅳ期の交易形態を一応前記のように理解したばあい、先行する中世Ⅱ期のそれはどのように考えるべきであろうか。この点の手がかりとなる中世陶磁器の出土地はきわめて乏しいが、⑩洲崎館跡の採集資料中に珠洲四耳壺（Ⅰ期）、勝山館跡下の天の川南岸河口部の⑨竹内屋敷より珠洲壺（Ⅰ期）が出土し、12世紀後半～末ころすでに当地が和人の交易拠点であったことを暗示し、洲崎・花沢・勝山館へ発展する基礎がおかれていたと考えられる。そして、該期のいまひとつの出土が大川遺跡出土の珠洲壺であって、同じくⅠ期に帰属する（図12）。これらは、両地域への和人の一時的来往の痕跡とも、「オムシャ」に伴う酒類を入れた贈答品とも考えられるが、大川遺跡で確認されたことは、その存在理由を奥州合戦で敗れた平泉藤原氏の残党や流刑者との関係でとらえることに否定的である。この段階がアイヌ社会における擦文土器の終焉に伴う本州産漆器椀皿類と鉄鍋普及の最終段階と考えられているだけに、点的とはいえ、これら陶磁器の存在が示す意味は小さくない。

擦文土器の終焉については、近年東北部の在出土器の編年観と対応させば11世紀代のうちに求める見解が提示されている⁽¹³⁾。一方、道内の研究でもかつてのごとく13世紀後半以降とする見解のなりたち難いことは明白であるが、銅路市材木町5遺跡15号壺穴における湖州鏡⁽¹⁴⁾や泊村茶津4号洞窟、別海町浜別海遺跡1号壺穴⁽¹⁵⁾などでの宋銭の共伴例などから、12世紀後半まで下げて考える意見が一般的なようである。材木町5遺跡出土湖州鏡について報告者は、「東北地方から北海道への北上を肯定する材料は引き出せない」⁽¹⁶⁾とするが、「湖州良石家」銘方鏡が東北に偏する出土傾向⁽¹⁷⁾はその流入経路を示唆するとみるのが自然であり、流入時期も宋銭同様12世紀後半ころが妥当視される。しかりとすれば、前記12世紀後半～末の陶磁器の挙動とかかわらせて理解できることとなるが、そのばあいも三浦圭介が説くごとく、擦文土器の終焉が、10世紀中葉を画期とする津軽地域を中心とした水田開発と製陶・製鉄・製塩業の発達に緊密に連動しつつ、本州産生活財への依存度を飛躍的に高める消費形態への転換が、以後段階的に進化したことは間違いない⁽¹⁸⁾。

そのことは、該期の東北部の土師器組成における供器器絶対量の低下に端的に現れており、11世紀前半から中葉にかけての粗製漆器への置換と、11世紀後半から12世紀初葉にかけての鉄鍋の普及という2段階の展開が、道内でも進化したと考えられ、12世紀後半は一応その最終段階と

なろう⁽⁴⁴⁾。青森県古館遺跡⁽⁴⁵⁾に代表される多量の鉄鍋の所有・消費と同期に特徴的な差し鍋を転写した把手付土器⁽⁴⁶⁾および内耳土器の存在は、その間の推移を示す事象といえる。ただし、煮炊具の鉄鍋への置換には銚子遺跡の存在が前提となるが、岩木山麓の製鉄遺跡群では未確認で、より広域的に東北全域ないし北陸・畿内周辺を含めた生産地の横断が必要であろう。

また、本期の東北北部における殖産興業の担い手については、據文土器の分布に加えて近年道南でも発見があいついでいる壺塞村落の存在⁽⁴⁷⁾をも考慮し、東北北部と道南部の一体性を強調し、據文集団を開発主体とみる見解がある。これに対し東北北部の據文土器の時期・地域性を分析した天野哲也は、下北半島には一部貝層を伴う岩窟遺跡や據文主体の村落があり、南下した據文集団が日常生活を営む基盤が残されていたのに対し、青森湾岸から津軽半島にかけては製鉄・製塩遺跡からの出土例が多いものの散発的なことから、「特殊な生産物を求めて道内各地から據文人がやってきた痕跡」⁽⁴⁸⁾とみなし、據文終末期の土器を出土する遺跡が減少しながら一遺跡の住居群での出土頻度が高いのは、津軽地域の特定集団に交易権の集中が生じつつあったことの現れとした。天野の據文土器の地域区分に従えば、道西北部の據文集団(Ⅱ・Ⅲ)とかかわる遺跡が目立ち、利尻・樺太方面から西海岸ないし石狩低地を経て、千歳水系を介しユーフツ越えのルートで南下する據文集団が交易に深くかわかり、おそらく余市集団も一翼を担ったことになろう。

道内における須恵器の分布が道東に希薄でかつ供膳器の出土がみられない⁽⁴⁹⁾ことは、調査の進捗状況に左右されるとはいえ道南部とともに石狩低地で出土量が多く、大川遺跡の據文期村落では大体別個体とみられる壺・長頸瓶・杯の出土数が150~180点に上ることも、樺太方面からの南下ルート、西海岸沿いの北上ルートおよび石狩低地を結ぶ結節に位置する物資集散地として機能したことを如実に物語っている。大川遺跡で米を大量に備蓄した據文前期の建物(SH8・13)は、米・酒もまた重要な交易物資であったことを物語る。道内出土須恵器は、10世紀後半代の製品の大半が津軽五所川原窯であることは問題なく、8~9世紀代の製品については日本海域の複数の窯跡とする胎土分析の所見のまま留保されているが、陶片の砥石への再利用⁽⁵⁰⁾を含め特定の壜穴における醸造酒など日常の生活財として普及した点で、據文集団の積極的な交易活動を裏づける。

大川遺跡を含め小鍛冶遺跡が全道に流布するものこの時期であり⁽⁵¹⁾、鉄製工具の広汎な普及は多様な木製品の産産をもたらしたと推定される。この段階はまた、古代律令制下で「辺民」として編成され、貢進する獣皮・羽毛類が身分表徴として機能する段階から、異民族=エソとして自立する前提条件が整えられた時期でもあった⁽⁵²⁾。9世紀以降、東北北部の生活様式は政治的版図とは別に基本的に列島中央に同化したのに対し、北海道では作り付け壜を有する壜穴住居構造は受容されたが、都市の不在、貨幣経済の未発達、水稲栽培をはじめとする木髓、鉄製錬などの生産技術や乗馬の習俗、文字文化、仏教イデオロギー(火葬)は受容されず、津軽海峡を挟む東北北部社会との異質性が表面化し、アイヌ固有の民族文化の形成がすすんだことも看過でき

ない⁽¹¹⁾。

北方流通史における捺文後半期の占める意義にふれてきたが、ここで先行する統縄文期との対比によって中世流通史の位置を巨視的に俯瞰してみたい。統縄文土器の本州への南下については佐藤信行らがつとに集成的考察を行い、以後もこの問題に關説した論者は多い⁽¹²⁾。その成果によれば、100遺跡を越える統縄文期の遺跡群の時期別推移は後北C₁・D式期に集中し、北大式は3分の1ほどで、分布域は後北C₁・D式期には米代川・馬淵川以北に集中するほか、牡鹿半島、北上川流域、仙台湾岸の東北6県にわたり、南限は日本海側では新潟県中部、太平洋側では福島県南部におよぶ。これは山田秀三によるアイヌ語地名の広がり⁽¹³⁾と正確に一致する。近年はこれを異質の文化の一過性の南下とする理解からすすんで、縄文期以来の東北と北海道の生活レベルでの親密な交流による「文化領域」の形成とする認識が広まりつつあり、移入の多経路も予測されている⁽¹⁴⁾。ただ、捺文文化との交渉と対比すると分布域が広大だけでなく、後北期の土壙墓にみる両端の柱穴、北大期のそれにみる土器埋納用袋状ピット、あるいは後北C₁期特有の二等辺三角形石鏃、後北C₁・D～北大期の黒曜石製ラウンドスクレイパーなど統縄文期に特徴的な墓制や生産用具を伴うことから、捺文期をはるかに上回る北海道側からの広域的な人的移動と生産活動が展開されたと考えられ、交易形態も量的には捺文後半段階に比肩すべくもないが、より多集団間の直接的なものであったと推定される。

以上、大川中世遺跡の構造的把握から出発し、北方流通史における段階的位置と背後事情について考定をめぐらしてきた。近年の北方史研究は、人類学・民族学および文献学主導から、ようやく考古学も加えた古代・中世史像構築の方向性が模索されるようになったとはいえ、いぜん文献史学が照射した律令一王朝一中世国家の北方政策の展開に規定された北方民族観や収取体制の変容が論じられている。したがって交易については、北方諸民族との交流が広く認識され北海道先住民の広域的・積極的な交易活動の実態が明らかにされながら、鉄器・木器類が遺存しにくいという資料的制約があって、主として威信財レベルで議論されることが多いのが現状である。今後、問題を具体的に深化させるためには、捺文、アイヌ社会の交易組織と変容の段階的な解析が不可欠の作業であるが、小稿ではほとんど言及できず、主として陶磁器のあり方を手がかりに、従来不明であった14～15世紀代の館主層以下の和人数団の動向を素描し、この段階から互恵的な交易を基本とする「和夷共存」の状況は急激に変化し、アイヌの自立的な北日本への渡来を伴う交易活動は制約をうけるとの推察を提示するにとどまった。なお、北方諸民族とのかかわりのなかで北方史を論ずる視点自体は正しいが、民需品レベルの交易問題では、あくまでも小稿の骨子となった本州と蝦夷地の交渉を基軸に展開すべきであると考えていることを付言して欄筆する。

小文の作成にあたり、乾 芳宏・小野正敏・久保 泰・越田賢一郎・佐藤一夫・鈴木 信・高橋 右衛門・藤沢良祐・西本豊弘・馬瀬和雄・長沼 孝・松崎水穂・(故) 松下 亘・宮 宏明の諸氏から懇切なご教示いただいた。図1・4・8～10を作成・提供いただいた余市町教育委員会とともに深甚なる謝意を表す。

註

- (1) 余市教育研究所編『余市文教発達史』(1982) 43~46頁、余市町教育委員会(安西雅希・岡崎次郎)『1990年度大川遺跡発掘調査概報』(2000)。
- (2) 余市町教育委員会(宮宏明ほか)『入舟遺跡における考古学的調査』(1999)。
- (3) 吉岡康暢・板井基一・浅香年本ほか『普正寺』金沢市教育委員会(1970)。
- (4) 函館市教育委員会(田原良信・鈴木正彦)『史跡志古館跡』(1986)ほか。
- (5) 余市町教育委員会『大川遺跡における考古学的調査』I(2000) 49~67頁、122~131頁、熊崎農夫博・前田貞子・宮宏明「住居址覆土出土の中世の一括動物遺体と骨角器」『1992年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会(1993)。鹿角などの切断に木の葉形? 鋸縁の挽き痕があり、和製工具も使用されていたとみられている。
- (6) 青森県教育委員会『中世国際港湾都市 十三瀬と安藤氏』(1998)ほか。
- (7) 大川遺跡遺物整理記者発表資料(1995, 11, 20)。
- (8) 松崎水穂『史跡上之國勝山館跡』IV(1983) 39~40頁。
- (9) 佐藤利雄「余市のアイヌコタンと大川遺跡」『1993年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会(1994)。
- (10) 松下亘「北海道出土の中国陶磁」『北海道の研究』2(1984)。
- (11) 佐藤矩康「埋もれていた余市の宝物」北海道文化財保護協会(1990)。
- (12) 網野善彦「北国の社会と日本海」『日本海と北国文化』海と列島文化I(1990) 18頁。
- (13) 吉岡康暢『中世須恵器の研究』(1996) 390・391頁。
- (14) 註1余市町教育委員会文庫。報文では4基とするが、中世~近世初期とし留保されている服部区P9墓は、火葬墓で他の中世墓と同型式の骨壺を副葬しているので加算した。
- (15) 青木豊「入舟遺跡・大川遺跡出土和鏡」『1995年度余市入舟遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会(1996)。1995年以前の和鏡の年代は本文献による。
- (16) 菊池俊彦「北東アジア古代文化の研究」(1995)ほか。ルイス・フロイス書翰(1565・永禄8年)に、アイヌは「鏡を胸に懸け、頭に剣を挿し」とある(『中世蝦夷資料』506、160頁)。
- (17) 平川善洋「近世アイヌ墳墓の考古学的研究」『北海道の研究』2(1984)、田村俊之「北海道における近世の葬制」『北海道考古学』19(1983)、秋山洋司・宮宏明「大川遺跡検出のアイヌ墓について」『1993年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会(1994)。
- (18) 青木誠・宮宏明「大川遺跡検出中世アイヌ墓と出土ガラス玉・波来銭等について」『1993年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会(1994)。GP613も中世墓の可能性がある。
- (19) 浅香年本「北陸中世の社会と信仰」第1編1~3章(1988)、宇野隆夫「中世陶器の生産と流通について」『研究紀要』5 瀬戸市埋蔵文化財センター(1997)、吉岡康暢「北東日本海域における中世陶磁の流通」『中世須恵器の研究』(1996) 543頁以下。
- (20) 越田賢一郎ほか「美沢川流域の遺跡群」V 北海道埋蔵文化財センター(1982)。
- (21) 吉岡康暢「北海道の中世陶器」『日本海文化』6(1979)(『日本海域の土器・陶磁(中世編)』1989再録)。
- (22) 海保嶺夫「幕藩制国家と北海道」(1978)ほか。
- (23) 松下亘「大川遺跡出土の陶磁器について」『1989年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会(1990)。

- (24) 青磁碗・皿の分類と編年については、横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国磁器について—型式分類と編年を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』4 (1978)、上田秀夫「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』2 (1982)、森本朝子ほか「博多出土の貿易陶磁分類表」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告』IV (1984)、山本信夫「大宰府条坊跡」XV (陶磁器分類編) 太宰府市教育委員会 (2000) 参照。
- (25) 文化財公報部 文化財管理局編『新安海底遺物』(資料編Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ) (1983~85) ほか。韓国国立中央博物館などで資料実見。
- (26) 白磁碗・皿の分類と編年については、註24横田・森田文献、森田勉「14~16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』2 (1982)、註24山本文献参照。
- (27) 染付碗・皿の分類については、小野正敏「出土陶磁よりみた15、16世紀における画期の素描」『MUSEUM』416 (1985)。
- (28) 瀬戸陶器中・後期様式の分類と編年については、藤沢良祐「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』18 (1982)、同「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『研究紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館 (1991) 参照。
- (29) 珠洲陶器の分類と編年については、吉岡康輔「珠洲陶器の編年的研究」『中世須恵器の研究』(1996) 271頁以下参照。
- (30) 横田賢次郎・森本朝子・山本信夫「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究』9 (1989)。
- (31) 西山要一「紀淡海峽海底採集の中国陶磁器」『古代研究』5 (1974)、和歌山市教育委員会 (北野隆亮・大野左千夫・前田敬彦) 和歌山市加太友々島沖出土の陶磁器 (1997)。
- (32) 越田賢一郎「北海道の鉄鍋について」『物質文化』42 (1984)。
- (33) 金武正紀「ピロースクタイプの白磁碗について」『貿易陶磁研究』8 (1988)。
- (34) 堀内光次郎「大川遺跡出土の石製品について」『1994年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会 (1995)。
- (35) 註19文献、秋田市教育委員会 (小松正夫・日野久ほか)「秋田市下野遺跡」(1979)、堀内光次郎「陶磁器の組成と機能分型」『善正寺遺跡』石川県立埋蔵文化財センター (1984)、鈴木和子「青森県十三湊と出土陶磁器」『貿易陶磁研究』18 (1998)。
- (36) 青森県教育委員会 (三浦圭介・赤平智尚ほか)「境関館遺跡」(1986)。北日本の陶磁器全般については、佐々木達夫「遺跡出土陶磁器の研究—北日本中世城館跡を中心に—」『金沢大学文学部論集史学科編』2 (1982) など参照。
- (37) 前掲『中世須恵器の研究』第一部序論三、第二部第四章第3節。
- (38) 以下、文献資料との照合は、主に海保嶺夫編『中世須恵資料』(1983)、『岡上補遺』(1990) による。
- (39) 註22文献、197頁。
- (40) 付表文献18では、瀬戸折経平鉢を15世紀末として14世紀後半からおよそ1世紀間に4期の遺構変遷図を示し、廃絶に永正のアイヌ鉢起 (1512) を想定するため、館の存続年次で私見と約半世紀の齟齬を生ずる。松崎水穂も指摘するように (『中世道南の縁組』『列島の文化史』7、1990、103~104頁)、北東・北西郭と南西郭が併存した可能性があるのではなかろうか。
- (41) 前掲『中世須恵器の研究』393頁註27。なお洲崎館跡出土陶磁器の集計数 (付表12) は松崎水穂のご意見をえて筆者算定。

- (42) 加藤邦雄「北海道の中世墓について」『北海道の研究』2 (1984)。
- (43) 田部淳・田村リラ子ほか「南川2遺跡」瀬川町教育委員会 (1985)。
- (44) 前掲『中世須恵器の研究』785～788頁。
- (45) 註10文献。
- (46) 註11文献。
- (47) 高倉新一郎『新撰北海道史』2 (通説2) (1937) 52頁。
- (48) 16世紀初、箱館と若狭間で年3回の定期航路が開かれていたという(『新羅之記録』)。
- (49) 永田富智「道南十二館の史的考察」『新しい道史』18 (1986)、小沼健太郎「道南の館について」『史流』18 (1977)を参考に作成。なお、安藤氏の動態については、大石直正「北の海の武士団・安藤氏」『日本海と北国文化』海と列島文化1 (1990)など参照。
- (50) 市立函館博物館(吉崎昌一・森田知忠・森田洋子)『函館志海苔古銭』(1973)、白山友正「志海苔古銭の流通史的考察」『日本歴史』283 (1971)。
- (51) 前掲『中世須恵器の研究』827・828頁。
- (52) 三浦圭介「本州の糠文化」『考古学ジャーナル』341 (1991)ほか。
- (53) 網路市埋蔵文化財調査センター(西幸隆・松田猛・鮎原真奈美・菅谷崇子)『網路市材木町5遺跡調査報告書』(1989)。
- (54) 竹田輝雄ほか「茶津洞窟遺跡」『小樽博物館紀要』1 (1962)、岩崎卓也・前田潮・大沼忠春ほか『浜別海遺跡』別海町教育委員会 (1972)。
- (55) 註53文献、341頁。
- (56) 久保智暎「平安後期出土鏡の研究序説」『東アジアの考古と歴史』下 (1987)。
- (57) 三浦圭介「古代東北地方北部の生業にみる地域差」『北日本の考古学』日本考古学協会 (1994)、宇野隆夫「考古学からみた日本生産流通史」『日本史研究』380 (1994)。
- (58) 推文土器の終焉年代については、旧稿(付表文献2)で上ノ国竹内屋敷における所見を参考に、12世紀後半ないし以前と推察し、現在は基本的に三浦説を支持する。宋銭との関係については、筆者の調査体験でも遺構のかなり深部まで混入している事例があるので留保すると、材木町5遺跡の湖州鏡共伴が道内のほとんど唯一の問題例かと思われる。推文土器編年について論評能力をもちあわせないが、この湖州鏡が北方ルートの紛れこみとでもしない限り(北方ルートの交易物が服飾品主体の威信財であることからその可能性は薄い)、その流入時期を状況的に12世紀前半以前に遡らせるのは躊躇される。後考を明したい。
- (59) 青森県教育委員会(北林八洲晴・福田友之・長谷川潤一ほか)『暖々関村古館遺跡』(1980)。
- (60) 飯村均「平安時代の鉄製炊炊具」『しのぶ考古』10 (1994)。
- (61) 松前町伝原口館跡、上ノ国町吹吹ワシリチャン遺跡、乙部町小茂内遺跡。
- (62) 天野哲也「本州北端部は推文文化圏にふくまれるか」『考古学と地域社会』同志社大学考古学シリーズⅢ (1987) 538頁。
- (63) 山本哲也「推文文化に於ける須恵器について」『国学院大学考古学資料館紀要』4 (1988)。
- (64) 三辻利一「大川遺跡出土土器の蛍光X線分析」、山本哲也「大川遺跡出土の須恵器」『1992年度大川遺跡発掘調査概報』余市町教育委員会 (1993)。
- (65) 越田賢一郎「鉄をとおして北の文化を考える」『北の鉄文化シンポジウム』岩手県立博物館 (1990)、三浦正人「北海道金属製品出土遺跡地名表」『北海道考古学』28 (1992)。

- (66) 関口明『北海道式古墳と渡嶋蝦夷』『古代文化』37-7 (1985)、遼羅巖「中世国家の東夷成取権について」『松前藩と松前』9 (1976) ほか。
- (67) 藤本強『捺文文化』(1982)、石附喜三男『アイヌ文化の源流』(1986)、宇田川洋『アイヌ文化成立史』(1988)、横山英介『捺文文化』(1990) ほか。
- (68) 佐藤信行「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』(1976)、阿部義平編『蝦夷の墓』国立歴史民俗博物館 (1994) ほか。
- (69) 山田秀三『アイヌ語地名の研究』1 (1982)。
- (70) 小林克「農耕社会に南下した狩猟採集民」『考古学ジャーナル』341 (1991) ほか。

補註(1) 小文は、1990・92・94年度概報に、以後の調査所見をふまえ、補筆・修正を加え成稿したが、論の構成が前後し、重複箇所を残したままの見苦しいものとなった。

(2) 図5~7の中世陶磁器の過半は、吉岡原図をトレース、作成した。

(3) 成稿後、藤久良祐氏より大川遺跡の瀬戸陶器集計表を提供いただき、ご好意で掲載することになった。個体数を算定した表1よりかなり多いのは、破片数のためと1994年度分を加算していないためである。大川遺跡の中世陶磁器における瀬戸陶器の比率は高くなるが、器種組成の大勢は変わらない。

天目茶碗	4(3)	古瀬戸中IV期	
天目茶碗	7(5)	古瀬戸後I期	
天目茶碗	5(1)	古瀬戸後II期	
天目茶碗	3(3)	古瀬戸後III期	19(12)
灰軸平碗	2(2)	古瀬戸中IV期	
灰軸平碗	1(1)	古瀬戸後I期	
灰軸平碗	6(6)	古瀬戸後I-II期	
灰軸平碗	1(1)	古瀬戸後II期	
灰軸平碗	3(3)	古瀬戸後III期	
灰軸浅碗	2(2)	古瀬戸後II期	15(15)
灰軸卸皿	2(1)	古瀬戸後I期	2(1)
灰軸縁軸小皿	7(6)	古瀬戸後II期	
灰軸縁軸小皿	1(1)	古瀬戸後I-II期	8(7)
灰軸折縁深皿	4(1)	古瀬戸後II期	
灰軸直縁大皿	13(10)	古瀬戸後III期	
灰軸卸目付大皿	11(5)	古瀬戸後III期	
灰軸盤類	6(6)	古瀬戸後I-II期	
灰軸盤類	3(3)	古瀬戸後III期	
灰軸碗形鉢か	2(2)	古瀬戸後I-II期	39(30)
灰軸尊式花瓶	5(1)	古瀬戸後II期	
灰軸合子	1(1)	古瀬戸中III期	
灰軸四耳壺	8(7)	古瀬戸後I-II期	14(9)
		古瀬戸総計	97(74)

1996・2・26、2000・11・27調査 接合前(接合後)破片数

大川遺跡出土漆器資料の材質と製作技法

北野 信彦（くらしき作陽大学 食文化学部）

1. はじめに

余市大川遺跡からは中世～近世のアイヌ墓をはじめとする貴重な遺構・遺物が多数検出され、漆器資料も多く含まれている。今回、余市町教育委員会の御厚意によりこれら漆器資料の材質と製作技法について自然科学的手法を用いた調査を行う機会を得た。本報ではその調査結果を報告する。

2. 調査方法

漆器資料は、陶磁器資料と比較して、木胎・塗り・加飾等、材質や製作技法に関する属性が多く、これらの品質は自然科学的手法による調査を行うことによって、より客観的にとらえやすい。そのためこのような漆器資料の材質と製作技法を調査することは、個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり、これらが出土した遺構・遺跡の性格自体を考える上でも意味があるものと考えている。本報では、これら漆器資料の形態、塗り面の状況を表面観察した後、(1)用材選択、(2)木取り方法、(3)漆膜面の塗り構造、(4)色漆の使用顔料、(5)蒔絵材料、等の項目別に自然科学的手法を用いた分析を行なった。ここではまず、その調査方法を記す。

(1) 用材選択（樹種同定）

樹種の同定作業は、出土木材の細胞組織の特徴を生物顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。資料は、カミソリの刃を用いて遺物本体をできるだけ損傷しないように、破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片を作成した。切片はキシレン・サフランニンにより脱水および染色して検鏡プレパラートに仕上げた。

(2) 木取り方法

挽き物類である漆器資料の木取り方法の調査は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行なった。

(3) 漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の塗り表面の状態を観察した後、実体顕微鏡を用いた細部の観察を行なった。次に1mm×3mm程度の漆膜片を漆器資料から採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アルダイトGY1251JP、ハードナHY837）に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ・塗り重ね構造・顔料粒子の大きさ・下地の状態等について金属顕微鏡による観察を行なった。

(4)(5) 色漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析

色漆に用いられた顔料および蒔絵材料である金属粉の無機物に関する定性分析には、先の漆膜片をカーボン台に取り付け、日立製作所S-415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所EMAX-2000

エネルギー分散型電子線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー）を連動させて用いた。分析設定時間は500秒である。

3 調査結果

今回、調査を行った漆器資料は、中・近世アイヌ墓関連資料（副葬品）8点をはじめとする中・近世の挽き物類および板物類を中心とした合計182点である。なお大川遺跡は縄文時代～近代にかけての複合遺跡でもあるので、この中には縄文時代晩期前葉資料（1点）および近代資料も一部含まれている。以下、各項目の調査結果を示す（表1）。

（用材選択）

本漆器資料の場合、木質部の残存状況は良好でない資料が多く、樹種同定が可能であった資料は合計11点と少ない。そのため用材選択の全体的な傾向を把握することはできなかったが、挽き物類である椀・蓋等の樹種には、ニレ科ケヤキ、モクセイ科シオジ、ブナ科ブナ、トチノキ科トチノキ等の広葉樹4種類が確認された。これらの木材の組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗りを考慮に入れて分類すると（表2）に示すようになる（注1）。

その上で本漆器資料の用材選択の傾向をみると、優材であるケヤキ・シオジ材などと、加工や入手の容易さという大量生産の点からみて極めて一般性が高いと考えられる適材のトチノキ・ブナ材の2つのグループに分かれた。

（木取り方法）

樹種同定が可能であった本資料の木取り方法は、いずれも板目取りもしくは柁目取りの横木地であった。挽き物類である近世出土漆器の木取り方法は、堅木地に比較して横木地を用いる例が大半であり、堅木地の場合も木芯を外した材を利用する例が一般的である（図1）。これは木材の割れ狂い、収縮等を考慮に入れて漆器自体の品質を重視したため、不都合な木取り方法が自然淘汰された結果と考えている（注2）。この点からも、本資料の木胎製作の工程は、一貫してそれぞれの材の性質を考慮に入れた可能性が指摘されよう。

（漆膜面の塗り構造）

漆器表面の漆塗り技法は、大きく分けて無文様で地塗りのみの資料と、家紋等の漆絵文様を地外面に描く資料、さらには蒔絵等きわめて高度な漆工技法をもつ資料に分かれた。これらの漆膜面の塗り構造、特に、各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、ピークがほとんど見出だされない資料と、粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料の2種類に分けられた。これらをさらに金属顕微鏡で観察することにより、前者を炭粉を掃洗などに混ぜて用いる炭粉下地、後者を細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）であると認識した（注3）。

次に、地の漆塗り層は、いずれも1層塗りから6層塗りまで見出だされ、簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料から布着せ補強を施すなどの堅牢性を重視した優品資料、さらには塗

り直し資料に至るまで、幾つかのランクに分類された(図2)(注4)。そして加飾は、いずれも地上塗り層の上に描かれていた。

(赤色系漆の性質)

赤色系漆の使用顔料の定性分析と顕微鏡観察を行なった結果、これらはそれぞれベンガラ(酸化第二鉄 Fe_2O_3)、朱(水銀朱 HgS)の二種類の異なる顔料を用いた赤色系漆であると理解した(図3)。ベンガラ・朱ともに赤色系顔料としての歴史は古い。しかし近世漆器の色漆顔料としては、幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して、江戸時代中期以降、人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となるようである(注5)。

本漆器資料の場合、簡素で一般的な塗り構造を持つ資料にはベンガラを、堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ資料には朱を、また地内面にはベンガラを地外面の家紋等の加飾部分のみに朱を使用する等、明らかな朱・ベンガラの使い分け事例も見出されたが、基本的には朱を使用した資料が多く、これらも多層塗り構造を示すなど、他の近世出土漆器資料の傾向とは異なっていた(写真1)。

(蒔絵粉の材質)

表面観察において金粉(金箔)もしくは金泥(金彩)によるとみられる家紋や絵柄等の蒔絵加飾部分の定性分析を行なった結果、Au(金)が認められる資料の他、Ag(銀)、Sn(スズ)、As+S(石黄・硫化砒素 As_2S_3)のそれぞれ異なる材質が見出された。また、金(Au)+銀(Ag)等の混合粉を使用する例も見出された(図3)。

江戸期の各種文献史料には、漆器に蒔絵や梨子地等の加飾を施すこと自体が、寛文年間以降しばしば発せられる奢侈禁止令によって各社会階層毎に厳しく制限されていたこと(注6)や、これら金・銀・錫等の材質別の蒔絵漆器に明確な価格差が存在したこと(注7)等が、知られる。そのためか、金(Au)自体を使用した近世蒔絵漆器は、通常の近世遺跡出土漆器資料には少なく、大半は代用蒔絵粉材料を用いた銀・錫・石黄蒔絵資料が中心である。本資料の場合、梨子地や色漆や生漆の上に蒔絵粉を蒔くいわゆる高蒔絵や平蒔絵などの高度な技術を用いた金蒔絵資料が比較的多く、この点も他の近世遺跡出土漆器資料とは異なる傾向であろう(写真2)。

4. 考 察

以上、前項では項目別に各出土漆器資料の材質および製作技法の在り方をみた。その結果、本資料は、木胎・漆塗り技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる極めて一般的で廉価な日常什器類から、吟味された素材からなる堅牢で複雑な漆工技法を有する優品資料に至るまで、幾つかのランク別のグループに分類された。このような漆器資料のグループ毎の違いは、文化的背景を含むそれぞれの漆器資料の製作年代、これら什器を使用してさらには投棄した使用階層の社会的・経済的背景(生活様式)、地域性、什器類の使用目的や方法、さらには個々の漆器生産地の製作技術、等さまざまな条件が反映されたものであろう。本資料の場合、蒔絵漆器には高度な技術を

用いた優品資料が比較的多く、かつ地塗り漆にも塗り直し補修や布着せ補強を施すなどの多層塗り資料が比較的多く見出された。この点は、余市入舟遺跡のそれとは共通するものの、調査者がこれまで調査を行ってきた他の地域の近世遺跡出土漆器資料群とは若干傾向が異なっていた(注8)。

この結果の背景には、やはり中世～近世にかけて海運センターとしての機能も果たした「余市」の地域性が、何らかの形である程度反映しているものと考えている。

今後の課題は、陶磁器類をはじめとする他の共存遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討していくことである。この検討作業を行なうことが、本出土漆器資料の性格をさらに的確に理解する上で大切なことであろう。

本調査は1999-2000年度文部省科学研究費 基礎研究(C) 細目:文化財科学「出土漆器漆器における劣化現象の把握とその保存に関する基礎的研究(研究代表者:北野信彦)」の成果を一部を含む。

(注)

- (1) ろくろ挽き物である近世出土漆器の用材には、早晚材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが韌性がある材が適材として用いられており、ケヤキ(近世初期段階ではシオジ)・トチノキ・ブナ材はその代表的な樹種である。

北野信彦(2000)「近世出土漆器の用材選択に関する一考察」『考古学と自然科学 第38号』p47-66、日本文化財科学会

- (2) 北野信彦(1993)「日常生活什器としての近世漆器桶の生産と消費」『食生活と民具』p81-101、日本民具学会編 雄山閣出版、等を参照されたい。

- (3) なお一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地(堅下地・本下地より堅牢性に欠ける)の可能性もある。しかし出土資料のにかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビ下地とした。

北野信彦(1993)「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・1-文献史料からみた量産型漆に使用する混和剤を中心として」『古文化財科学 第38号』p65-79、古文化財科学研究会

- (4) このような近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗事例の1つに、新潟県糸魚川市大所の小椋文助氏による実用に即した近世木地師、漆器桶の製作技法に関する口承資料がある。それによると【上品】布着せ補強(桶の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く)～サビ下地(砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布)～下塗り(生漆)～上塗り(生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆)の工程をふみ、一世代は持つ堅牢なもの。【下品】炭粉下地(柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地)～上塗り(生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入して用いる粗悪な漆)。【中品】下品とほぼ同様の工程をふむが、上塗りの漆を濃く塗布したりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。

などとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。

文化庁文化財保護部編（1974）『木地師の習俗 民俗資料選集2』 国土地理協会

- (5) 江戸時代における朱とベンガラの価格表を検討してみると、江戸時代前期段階には両者海外輸入品が多いためか、相対価格差はほとんど見られない。しかし江戸時代後期頃の段階では、両者に約30倍ほどの相対価格差が見られ、とりわけ朱の高価さと入手困難さが指摘される。

北野信彦（2000）「ベンガラ・朱項目」『日本民俗大辞典（下）』吉川弘文館

- (6) 江戸時代前期から徐々に定着化しつつあった權道具類について、享保20年（1735）の尾張名古屋城下町の町衆に対する禁令には「一、同諸道具、梨子地ハ勿論、蒔絵無用ニ可仕候、上之道具たりとも、黒塗ニ可仕候。（名古屋 叢書第三巻）」という記述がみられる。又、武家社会内部でも、万治3年（1660）の紀州徳川家（御家中祝言道具達）では、藩士のランクを1万石から200石までの8段階に分け、道具揃や仕様を細かく規定している。その上で漆器である貝桶は2400石以下の者には調達が認められておらず、諸道具の蒔絵仕上げも同様に許されていない。（南紀徳川史 法令制度第四）

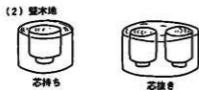
- (7) 寛延四年（1751）の『名古屋諸色直段集、寛延四年小買物諸色直段帳』には、漆器の髹漆技法別の価格が記載されている。この史料では、布着せ蠟色塗（上品）：常溜塗（中品）：常拭塗塗（下品）の相対価格差は、約51：3.4：1と算定される。

また、伊勢菟野藩土方家菩提寺である見性寺の見性寺文書には、伊勢桑名の塗物商ぬし興に提出させた見積書がある。それによると家紋加飾に使用された金・銀・錫粉蒔絵の相対価格比率は、約18：6：1と算定され、いずれの事例からも材質や製作技法の違いにより、漆器資料には明確な価格差が存在したことが理解される。

北野信彦・肥塚隆保（2000）「近世蒔絵漆器の材質・技法に関する調査」『考古学と自然科学 第38号』p 67-92、日本文化財科学会

- (8) 北野信彦（1999）「入舟遺跡出土漆器資料の材質と製作技法について」『入舟遺跡における考古学的調査—余市川改修事業に伴う1995・1997年度入舟遺跡発掘調査報告書—』分析編P 89-99、余市町教育委員会

北野信彦（2000）「生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費」『日本考古学 第9号』p 71-96、日本考古学協会、吉川弘文館、等を参照されたい。

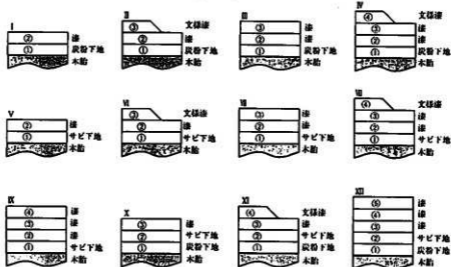


1 横木地と壁木地の要領
(横木抜男『ろくろ ものと人間の文化史31』-1979-より原図引用)



2 近世会津木地師の木取りの方法
(横木抜男『日本人の生活と文化(本)
暮らしの中の木器』-1982-より原図引用)

(図1) 近世以降の漆器(挽き物類)の木取り方法

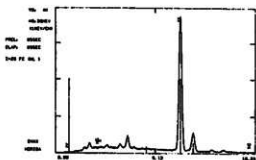


(図2) 漆塗り構造の分類

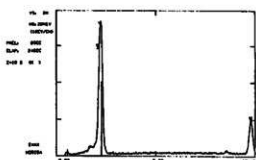
A 散 孔 材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリ ギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが韌性もあり、木肌など得手の物に適する。
	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ 類、ヤマザクラ、ウワミズザク ラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なく、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c. ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カ ツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d. エゴノキ系 エゴノキ、アオハグなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

(表2) ろくろ挽き物の用材分類一覧表

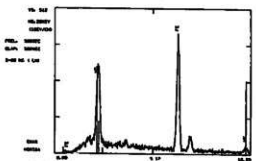
横木抜男『ろくろ ものと人間の文化史31』1979-などを参考にして作成



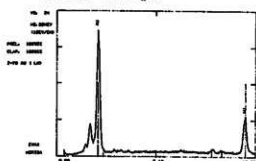
赤色系漆 ベン石(Fe_2O_3)



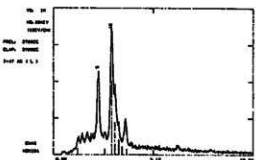
赤色系漆 朱(HgS)



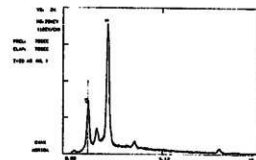
赤色系漆 朱+ベン石($\text{HgS}+\text{Fe}$)



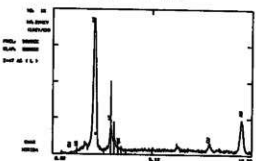
蒔絵加飾(金彩) 金(Au)



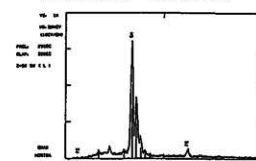
蒔絵加飾(銀彩) 銀(Ag)



蒔絵加飾(金彩) 石黄(As_2S_2)



蒔絵加飾(金彩) 金+銀($\text{Au}+\text{Ag}$)



蒔絵加飾(金彩) 錫(Sn)

(図3) 色漆および蒔絵材料のEPMA分析結果

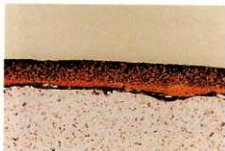
(表1) 出土漆器資料観察表

№	器型	裏面裏方技法		裏方器裏		裏方器裏		裏方器裏		支様	使用原料	割備	採取方法	出土地点	備考
		内	外	内	外	内	外	内	外						
1	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	ベンガラ					
2	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	ベンガラ					
3	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
4	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
5	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
6	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
7	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
8	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
9	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
10	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
11	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
12	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
13	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
14	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
15	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
16	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
17	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
18	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
19	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
20	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
21	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
22	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
23	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
24	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
25	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
26	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
27	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
28	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
29	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
30	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
31	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
32	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
33	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
34	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
35	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
36	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
37	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
38	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
39	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
40	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
41	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
42	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
43	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
44	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
45	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
46	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
47	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
48	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
49	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					
50	一	文様二赤(茶)	文様	一	一	一	一	一	一	AS/AI					

(1)



①炭粉下地 ②ベンガラ漆 (落射)
(Ⅲ)



①炭粉下地 ②赤褐色系漆 ③朱漆 (透過)



①布着せ補強 ②サビ下地 ③赤褐色系漆
④朱漆 (落射)



①サビ下地 ②赤褐色系漆 ③朱漆
④朱漆 (落射)

(1)



①炭粉下地 ②朱漆 (落射偏光)
(Ⅲ)



①炭粉下地 ②朱+ベンガラ漆 ③朱漆 (透過)



(同左拡大) 布着せ補強部分 (透過)

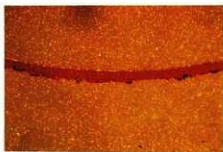


①布着せ補強 ②サビ下地 ③朱漆
④朱漆 ⑤朱漆 ⑥朱漆 (落射)

(写真1) 赤色系漆の漆塗り構造 (塗膜断面観察)



①炭粉下地 ②赤褐色系漆 ③石黄加飾
(落射)



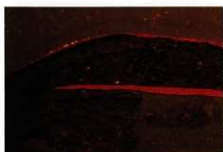
①炭粉下地 ②ベンガラ漆 ③赤褐色系漆
④金蒔絵加飾 (落射)



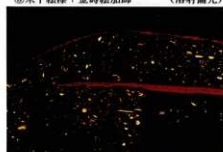
①サビ下地 ②黒漆 ③赤褐色系漆
④金蒔絵加飾 (落射偏光)



①サビ下地 ②黒漆 ③赤褐色系漆
④朱下絵漆+金梨子地加飾
⑤朱下絵漆+金蒔絵加飾 (落射偏光)



①サビ下地 ②朱漆 ③朱漆 ④サビ下地
⑤朱漆 ⑥金蒔絵加飾 (落射)



同左の落射偏光写真



①炭粉下地 ②朱うるみ漆
③緑色系(石黄+アイ)加飾 (落射偏光)



①炭粉下地 ②ベンガラ漆 ③朱漆
④石黄加飾 (落射)

(写真2) 蒔絵加飾の漆塗り構造(塗膜断面観察)

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほほくわい たいにけつていけい							
書 名	大川遺跡における考古学的調査Ⅳ							
副 書 名	余市川改修事業に伴う1989～1994年度大川遺跡発掘調査報告書							
巻 次								
シリーズ名	大川遺跡における考古学的調査							
シリーズ番号	Ⅳ							
編 著 者 名	乾 芳宏・小川康和・岡崎次郎							
編 集 機 関	北海道余市郡余市町教育委員会							
所 在 地	〒046-0015 北海道余市郡余市町朝日町2番地 TEL 0135-21-2111							
発 行 年 月 日	西暦2001年 3月31日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調 査 面 積	調 査 原 因
所収遺跡名	所在地	市 町 村	遺跡番号					
大川遺跡	北海道 余市郡 余市町 大川町	01408	0-19-6	43° 12°	110° 48°	1989 ～1994	15,420 ㎡	余市川 改修事 業
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
大川遺跡	包蔵地	縄文晩期 縄文 中世 近世	墓墳	土器 石器 陶磁器 鉄器		縄文時代晩期と縄文時代の墓墳群であり、多量の副葬品が出土した。 中世・近世遺物が多量に出土した。		

大川遺跡における考古学的調査 IV (総括篇)

—余市川改修事業に伴う1989～1994年度大川遺跡発掘調査報告書—

発 行 余市町教育委員会
北海道余市郡余市町朝日町26番地
発行日 平成13年3月30日
印 刷 株式会社毛利印刷
余市郡余市町大川町1丁目26番地
T E L 0135-22-5640
F A X 0135-23-3348
